Plongez dans le "IS" monde.

まーながるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｌｏｎｇｅｚ　ｄａｎｓ　ｌｅ　”ＩＳ”　ｍｏｎｄｅ.

【Ｎコード】
Ｎ９８９９Ｒ

【作者名】
まーながるむ

【あらすじ】
合言葉は百合＆シャルロット！　な感じの異世界転生もの……風味の何か。
オリ主の原作知識は６巻まで、ですがありがちな忘れかけ状態。
たまに暴走するので自戒の意味を込めないでＲ－１５つけました。
”甘い場面では”蜂蜜で砂糖を煮詰めるくらいの甘さを目指しています。基本的にゴーヤシリアス。

いただいた感想にはできる限りの早さでお返事させていただいてい

ます

現在夏休み短編集

８／９ディープキス

0. Bienvenu ? la compagnie de la vie

なんか、始めちゃいました（笑）
息抜きにかってきた原作を読んでるうちに妄想が爆発しちゃいまして
てね。。。
タイトルの意味は「神様命融にようこそ」
人生貸します！的な意味で。

0. Bienvenu ? la compagnie de la vie

「ようこそいらっしゃいました。相談係のタサキです。本日は融資の相談ということでよろしいでしょうか？」

「え、なんのことだ？　学校に行く途中？　次の遅刻で進学がやばくなる？　問題ありません」

「お客様、もう亡くなってらっしゃいますから」

「説明しろと言われましても……今朝、お客様は家を出た直後にトラックに轢かれたようですよ？　ほら、この映像の通りに」

「うわー、グロいですねー。こんな死に方なかなかないですよー。少なくとも早起きは三文の得なんてのは嘘ですね」

「好きで轢かれた訳じゃない？　そうでしょう、そうでしょう。そこで私たちの出番ですよ」

「そうです。最初の融資のことです。いやー頭の回転が速い人だと助かりますね。ここにいらっしゃるほとんどの方はまずこの時点で大泣きするんですよ。それをなだめるのがまためんどくさくて……ということで、お客様が望むのでしたら、新たな人生を提供させていただこうかと考えています」

「担保になるものはない、ですか？　問題ありません。後々お客様に払える範囲で負担していただきますから。ニコニコ借命、ニコニコ返済です」

「え？　新しい人生の中で一番大事になった人の命を奪うつもりだろう？　そんなあこぎなことしませんよー。悪魔だってそんなひどいことしませんよ？　私たちが望んでいるのは戦闘力です。あと娯楽……いえ、何も言っていません」

「お客様がここに招かれたのも一定の戦闘力が認められたからです。古武術の次期継承者とかすごいですねー」

「この技術だと……此方でその武術を多少強化した上で、この世界でさらに鍛えるのがいいのではないかと思います」

「え？　ライトノベルの世界じゃないか？　えーとですね。なんと言えば解りやすいのかわかりませんが、お客様の世界でのフィクションは必ずしも架空の話というわけではありません」

「マンガや小説はお釈迦様の覗く池と同じ、別世界を覗くための道具です」

「というより作者さん目線での別世界が描かれた物語ですねー。作者さん本人も別世界のことを書いているとは夢にも思ってはいないでしょうがね。え？　私達が関わっているんじゃないのか？　確かに別部署の方々がそういうことをしていらっしゃいますが……私たち彼らのこと苦手なんですよねー」

「捻くれてますし演出過剰ですし、なにより私たちの真似して死んだ人を別世界に飛ばしますし……というか、商談でも何でも直接顔

を合わせて遣り取りしないのは失礼だと思うんですよ。なのに彼らときたら認識阻害プログラムなんてもの使ってるんですよ？　あげく無駄に分岐点増やしますし。収拾つける私やお客様達のことも考えてほしいですよね」

「なんで俺達も関係するんだ？　ええ、簡単に言うとですねー。融資を受けて頂いたお客様にはその代わりに転生先とはさらに別の世界での英雄になって頂きます。何から人を守るのか？　いえ、何も守るのは人だけではありませんよ。例えば人が増えすぎたために破壊されそうな生態系を守ったり……えぇ、方法はお任せしていますが大抵は間引きですね」

「まぁ存続させなければならない世界がそんなことになることはあまりないのですが……問題は分岐点の基、樹木で言う幹に当たる世界にイレギュラーが潜り込んだ場合ですね。昔、お客様の中の一人がラスボス的なのを次元の狭間に閉じ込めたことがあったのですが、その空間が幹に限りなく近い世界に繋がってしまいまして……あわや系列世界全てが壊れる大惨事になるところだったのですよ。そういう可能性を排するためにお客様に戦って頂くのです」

「別世界に転生する理由ですが、お客様の世界に存在する戦闘能力のほとんどは近代平気を下回っていますからお客様の戦闘能力を上げることが難しいんですよね。……まぁ超能力や魔法はあるようですがやはり限定的な能力ですし……え、魔法も超能力もない？　ですがお客様のご友人の中には……まぁ関係ないことですね」

「そういうわけで、別世界に転生していただくほうが我々としても助かるということです」

「理解していただけましたか。あぁ融資も頼みたい、ですか。では

こちらの書類を……え、オプションを追加したい？　もちろん転生先の世界で実現可能な物なら出来ますよ」

「えーと、はい。候補生は元からですね。専用機は……あー確かにこちらの世界の物は転用できそうですね。装備は……うわー男の子ですねー。え、この国なんですか？　まぁ良いですけど」

「こっちの漫画の流派も使えるように？　問題ないですけどこの世界で意味あるのかなー？　とりあえず名字は固定ですね。あと奥義も使えません。というか千年不敗の四文字は重たいですよー……じゃあこっち？　うわ、ずる賢いですねー」

「あと、この能力はちょっとどうなんでしょうかね……ちょっと聞いてみますね。……神様命融日本支店、店員コードＥ６６６のタサキですー。実はお客様の要望で……」

「はい……はい……了解しましたー、ありがとうございますー。……えーオリジナルの一部、３分割までなら可能とのことですー」

「それで、融資の代価ですがオプションなどが多くなりましたので、転生先で死ぬまでにざっと５２０日間分の出張戦闘を求めることになります。あ、１日分出張すると元世界でも１時間経過するのでお気を付け下さい。身体の成長ももちろん元世界の時間で進むので周りより老けるなんてことも有りません。」

「出張戦闘に関しましては、こちらのゲームの世界の守護者のような物と思って頂いて結構です。まぁ彼らの雇用主は私たちとは業種が違うんですけどね」

「ちなみに出張戦闘の例もありますが……はいご説明いたします」

「例えば、こちらのインドの叙事詩、ラーマーヤナに登場する飛行船ヴィマナですが、過去に我々から融資を受けたお客様が超改造を施したビ○ザムです。そして、モヘンジョ・ダロの放射能反応ですがこれも……え、もう結構？　そうですか」

「それでは、第二の人生をお楽しみ下さい」

「あ、出張先に忘れ物しないで下さいね？　最近オーパーツとか増えすぎて困ってるんですよ」

◇

「さて、報告書造らないとー……ん？　って、あー！　この二つ言い忘れてた！　……まぁ、十年遅れての人格復帰はまだしも、こっちは小さなことですよねー……やっぱ怒るかなぁ？」

「まぁいいや。朝峰　巡くん、インフィニット・ストラトスの世界に転生ですよー。えーっと、苗字はこれできまってて……名前はランダム決定でいいかな」

1. Je suis Arisa Fuwa, 10 ans. (前書き)

原作開始の5年前からスタート
次で5年間を消費することになるのかな?
タイトルの意味は「私、不破アリサ！10歳！」
ガールズラブついてるけどこってりしたものにはならないですよ。
多分

1. Je suis Arisa Fuwa, 10 ans.

「１０歳のお誕生日おめでとう、アリサ」
「パパ、ありがとう！　あけてもいい？」
「もちろん」
「わ、お花の髪留め！　可愛い！　気に入っちゃった」

誕生日パーティーを兼ねた夕食で親父（パパ）が嬉しそうに笑う。
なんで、こんなことに。
いや、パーティーに戸惑っているわけじゃないんだ。どうして、俺／私がこんな状況になったのか、だ。
昨日まで私は普通に女の子として遊んでいた。それが朝起きたら俺が転生してきた人間だということを理解していた。正直、転生なのか憑依なのかは判別付かないけど記憶もしっかり思い出せることからして転生なんじゃないかと思う。
でもタサキさんはこんなこと説明してくれてない。……まぁ性転換は世界で唯一ＩＳを操縦できるっていう一夏のアイデンティティを奪わないための処置だったんだろうな。１０年たってから記憶が戻るようにしてくれたのも、女としての感性を持たせることで生きやすくするためだろう。実際、プレゼントの髪留めは気に入ったし、着替えるときに女性物の下着やスカートを身に付けることも気にならなかった。もちろん転生前の俺に女装趣味があったわけじゃない。
名前は不破アリサ。ハーフで不破は母方の姓だ。タサキさんに頼んだ古武術はしっかり限定的に使えるようになっている。新しい武術を覚えることで元々俺が修めていた古武術が上書きされないかと心配したが杞憂だったみたいだ。
でも、もう一つの能力も使えるはずなんだけどそんな気配はない。まぁダメ元で頼んだだけだから残念だけど諦めよう。
そして親父（パパ）はどうも科学者らしい。どの企業や国にも所属してい

ないのに研究をしては他人に成果を売りつけて生計をたてている。
多分、私の専用機の入手には親父（パパ）が関わるんだろう。
というより、タサキさんが俺の話をしっかり聞いていれば、多分そろそろ……

ピンポーン

呼び鈴が鳴った。

「パパ！　お客さん！」
「誕生日パーティーを邪魔するなんて無粋ねぇ……追い払いましょうか」
「そうでなくても夕食時に……ママ、頼めるかな？」

あれ、なんだか追い払う方向に落ち着いてきてる？　確かに夕食時に来る人って常識のない人って思われるよね。私も誰かの家に行く時は気を付けようっと、……って困るよ！

「えっと、お客さん待たせるのは悪いから私出るね！」
「あ、アリサ！？　もう、久し振りにストレス発散出来ると思ったのに」
「優しい子に育ってよかったじゃないか」

ごめんなさい。完全に自分のためです。あなた達の喜びに心が痛……まないなぁ。２人ともっと常識をもって下さい。というか母（ママ）様は何にそんなストレス溜まってるのかな。うちは完全にカカア天下だし、近所の皆さんも優しいよね？

「はーい、どちら様でしょうか？」
「私はデュノア社のヴァネッサ・ヴェルネールです。ドクター・フ

ワのお宅で宜しいですか？」

やっぱり来た……タサキさんありがとう！　タイミングはちょっと悪いかもしれないけど。

「えっと、とりあえずあがって下さい。散らかっていますが」

「では失礼します」

デュノア社は親父（パパ）の大事な取引相手だし、無碍には追い返せないはず。

「パパ！　デュノア社の人が「アリサ、しっかりお見送りしなさいよ」ってママ！？　今来たところだよ！？　まだ帰るわけじゃないよ！」

ラスボスはそっちか！　ここはなんとしてでも……

「奥様、夜分に失礼いたします。今日はドクター・フワに大切な話があってこうして訪ねさせていただきました。これは、」

「あらこれはご丁寧に。なら菓子折りだけ頂くわね。それではおやすみなさい」

っく、母様（ママ）はやっぱり手強いな！　とても日本人とは思えない押しの強さだ。デュノア社の人、ヴァネッサさんだっけ？　彼女はどう出るつもりなのかな。

「いえ、これは今日はアリサさんが誕生日だと聞いたものですからミュールを一組、」

「わ！　私、ミュールなんて履いたことないや！　ママから貰ったお洋服にも合いそう！　ママ、さっきの持ってきてよ！」

「え、さっきアリサが部屋に、」
「ベッドの上に広げてあると思うから！」
「……もう、仕方ない子ね」

そう言いながらもどこか微笑みながら母様（ママ）は階段を上って私の部屋に向かった。本当はタンスにしまってあるから少しは時間が稼げるはず！　一発で見つけたりされなければ！

「お姉さん、今のうちに！」
「ありがとうございます！」

グッとサムズアップを交わしてヴァネッサさんはリビングの方へ。よし、ミッションコンプリート！　じゃなくて部屋で母様（ママ）と話して時間を稼がないと！

◇

「おや、君は」
「ご無沙汰してます。博士」
「博士は止めてくれないかな。どうにもくすぐったい。にしてもよくママが通したねぇ」

普段より時間がかかっているとは思ったけど、まさか通しちゃうとは思わなかったな……今回ばかりは通してくれてよかったけど。フランスで一番大きなデュノア社にそっぽ向かれたら干からびちゃうからね。

「ええ、アリサさんが気を利かせて下さって」
「あー、今回はアリサが敵に回ったのか。それなら納得かな」

僕ら夫婦はアリサが可愛くて仕方ないからね。

「それで、何のようなのかな？」

「ええ、博士をＩＳの研究チームに迎えたいと思いまして」

ＩＳ……数年前、白騎士事件を切欠に抑止力として名乗りを上げた日本の兵器だったっけ。あまり興味が無かったからまともに調べてないんだけど。

「どうして僕なのかな？」

「もちろん博士が優れた頭脳を持った研究者だからです。それに最近の発明の裏には貴方が必ず関わっているとか」

うーん、僕は研究成果の殆どを人に売っているから、それを知っているということは本気で調べたのかな。こういうことがないように今まで名前が売れないようにしていたんだけどね。家族を巻き込むことになるし。

「そうだなぁ、家族と相談して、」

「パパ！　やりなよ！　パパの造ったＩＳには私が乗るから！」

「アリサ！？」

◇

「アリサ！？」

うまくいくかなぁ……これで親父（パパ）がやる気になってくれればいいんだけど。漫画とかだと娘を溺愛してる親はこんな感じの発破で乗り気になるはずだけど。

「アリサ、ＩＳを扱うには適正があってね、」
「私ならＡ判定出せる」

これでダメだったらもう切り札無い……いや、専用機を手に入れるためだったらシャルロットが男子としてＩＳ学園に転入してすぐに女であることをバラすとか。あー、でもそれだとシャルロットが一夏に引き留められないでフランスに帰ってきちゃうか。それだと俺／私の目的――シャルロットと仲良くなる、あわよくば……――が達成できない。

「なぜまだ公になっていない判定テストのことを……いえ、それよりフランス国内でＡ判定を取得した者は未だ誰一人としていないのですよ？」
「一人も？」

まだシャルロットのことは知らないのかな？　あぁ、彼女がデュノアの社長に引き取られるのは１３歳だっけ……ってことは今から大体３年後か。でも、そのおかげでもう一押しだ。今ので興味を持ったはず。

「アリサ、僕は君には危ないことして欲しくないんだけどね」
「あら、良いじゃない。私も最近アリサは大人しすぎると思っていたのよ。なによりさっきの啖呵切りは我が子ながら痺れたわ」

なぜか、その一押しは母様（ママ）が担当した。予想外だったけどラッキー。とても母親とは思えないセリフだったけど気にしないことにしておこうと思う。

「じゃあ、アリサは明日から私と特訓よ！」
「ママと特訓……？　いやー死んじゃうよ」

私が不破圓明流の一部を使えるのだから、母様（ママ）はもっと強い。この平和な時代に無空波なんて、何の役に立つんだ。

「では博士は研究チームに参加していただくということでよろしいですか？」

「あーうん。ただ代わりに、アリサの専用機を造らせてくれないかな？　もちろんアリサが本当にA判定を出せたらだけどね」

「そのように社長に伝えましょう」

よし、とりあえずISは手に入りそうかな。いずれIS学園に入るための予習も始めないと。

PICとかAICとか意味分からなかったし。あ、でもシャルロットは13歳からの2年間であれだけ強くなったんだからもう少し遊んでても平気かも。私の専用機もそんなすぐにできないだろうしね。

◇

「じゃあ、どっからでもかかってきなさいな」

まさか、本当に特訓することになるなんて……えっと一昨日まで普通の女の子だったわけだから、素人っぽい動きしないといけないよね。とりあえず、真正面から突っ込んでパンチでもしてみればいいかな！

「やぁぁぁぁぁぁ！！」

「突進……走るスピードも遅くはないけど、直線移動じゃだめよ……破っ」

蹴り……って普通の女の子だから避けられないんだ。えっと、女の子的には怯えて足止めるのが正解かな？

「あら？」

ゴッ！

「……いったぁぁぁぁぁぁあ！？　ん、んーー！　みゃぁぁぁぁぁぁ！　んーーーー！」

ちょっと！　これ、洒落になってないよ！　というか母様はなんで蹴ったの！？　普通、怖がって足止めた相手蹴るかな！？　しかも真剣勝負じゃなくて娘との特訓なのに！　変な叫び声も出るってもんだよ！

「アリサ、才能あるわよ」

「ママ、痛くてそれどころじゃない～～～！

「だって私、足が竦んで止まれるほど遅い蹴り放ってないもの。ほんとよく止まれたわぁ」

何で貴女は最初からそんなにスパルタなんですか？　普通は寸止めで目を瞑らないように、とかそういうのがいいです！　転生前の修行でもそんなことはしてなかったけど、少なくとも最初から打弟子もなかったです！

「でも、私の蹴りに慣れれば同年代、というか並大抵の人間の攻撃は痛くなくなるわよ？」

母様は娘を真生のドエムにでもする気なの！？　というか慣れるほど蹴られるには身体一つじゃ足りないって！

「大丈夫よ。アリサ、才能あるわ」
「見事に安心できる根拠じゃないね！」
「まぁ、文句があるならかかってきなさい、ってのが常套句だしね」

勝てば考えてやるということ！？　そりゃ死亡宣告と同じ意味合いです！　……本気だしても勝てない相手に普通の女の子の振りして立ち向かうってなんて無理ゲー？

「顔とお腹は攻撃しないから、安心して良いわよ」
「うん。歩くのと、お箸持つのは諦めておくね……」

スプーンですら持てるか怪しいかも。いっそのこと泣いてみようかな……半分男だけどこの状況なら許されると思う。だって元は人殺しの格闘術がさらに暗殺術に変わった武術だよ！？　こんな能力付けた奴一体誰……って俺だよ！

あー、やっぱり私より俺の方がしっくりきちゃうな……一応、女だし慣れなくちゃ。

私、不破アリサ！　フランスから来たハーフです！　最近の悩みは両親、特に母親に常識が無いことかな！　……女の子のふりは完璧だけど、逃げられないのが確定してる現実逃避って虚しいね……

「さーどんどん行くわよー！」
「いーーーーやーーーーー！」

きれいな川が見えるよ。私、泳げないから絶対に近づかないけど。どう考えても三途の川だし。あ、でも三途の川でさらに溺れるとどうなるんだろう。誰か挑戦してくれないかな。というかどうやって帰るんだろう……待ってれば帰れるのかな？

「っは！？」
「あ、やっと起きたのね。それじゃ続きを、」
「これからＩＳの適性試験受けてきます！」

続きってますます殺す気ですか！　こうなったらもう脇目も振らず走る……と、体中が痛い！　母様（ママ）どういう訓練したの！？　覚えてない私も私だけどさ！

「おー速い……さすが私の子ね。じゃあ私もお風呂はいってこよ。明日はどんな特訓内容にしようかしら」

あーあー！　聞こえなーい！　明日とかこないで良いです！　むしろ帰って下さい！　帰れ！

アポも何もないけどデュノア社まで逃げ切ろう。ヴァネッサさんなら貸しがあるから助けてくれるはず！

「えっと、お嬢ちゃん……警察呼ぼうか？」

なんてことをデュノア社の受付の人にいきなり言われた。
なんでっ！？
とは思いません。白いワンピースから覗く肌が赤から紫のグラデーションになってるし。母様（ママ）、ほんと、やりすぎなんだってば。

「警察じゃなくてヴァネッサ・ヴェルネールさんをお願いします。えっと、アポ、ですか？　取ってないですが、ヴァネッサさんにアリサ・フワが来たと伝えてくれるだけでいいです。それで伝わると思うので……えと、あと上着買えるお店無いですか？」

やっぱりこの格好……というより肌の色は周りの人の精神衛生上よろしくない。俺、じゃなくて私自身は転生前の修行のおかげで慣れているけど、一般人にはそれこそ不気味に移るに違いない。長髪、足すことの、白ワンピ、足すことの、痣だらけの手足。完全に幽霊のステレオタイプを踏襲してますよね。あ、お店はそっちですか？

ありがとうございます。

「アリサさん！」

おっと、良いタイミングでヴァネッサさん登場。昨日はジタバタしてて気づかなかったけどヴァネッサさんのショートの金髪は純金みたいにキレイです。外人にもなかなかプラチナブロンドっていないのですよ。自分のところどころ栗毛が混じった金髪が恥ずかしくなります。ゼブラブロンドって言うんですかね？　まぁ、うまーく脱色するとストロベリーブロンドに見せることが出来るんですけどね。ちなみに今は弄ってません。

「あら、ありがとうございます。それよりその腕、脚もですけど大丈夫ですか？」

「ええ、まぁ。少し痛みますけど、それより人目から隠したいですね。虐待されてるのか？　って目で見られて逆に気を遣っちゃいます」

家から1キロも離れていないデュノア社に辿り着くまでに不審げに見られること数十回、声をかけられること8回、警察官を呼ばれること4回。もうお腹いっぱいです。というか、みなさん痛がっていない私を若干引いた感じで見ているのですが、我慢しているわけじゃなくて母様（ママ）が動いた時に余り痛まない場所に……というより痛む場所以外に打撃を加えていたからなんですよ。押すと当然痛いです。

「そ、そう……なら、お買い物しながら話しましょうか。上着くらいならプレゼントするわ」
「いえ、昨日ミュールを買っていただいたばかりですし、流石に……お小遣いもあるので」
「平気ですよ。これでも高給取りなんですよ？　それにしてもアリサさんは慎み深い、というより大人っぽいですね。まるで少し年下の子と話しているような気になります」

……しまった！　家族には今まで通り子供っぽく話してたけど、他人の大人相手だと地が出てる！　無理矢理敬語で話そうとしちゃう日本人の悪い癖だね！　店員さん、なんで過去形にするんですか、ってやつ。でも１０歳だし、育ちがいいんだろうなってことで納得してもらえないかな？

「えっと、子供らしい方がいいですか？」
「それを決めるのは私ではないですね」

微笑みながらそう言うヴァネッサさんは楽しそうだ。大人な出来る女！　みたいな風貌とは裏腹に案外子供の相手とか好きなのかもしれない。

「ですが、子供が服代を自分で出すのを大人が横で見ているのは変に思われるかもしれませんね」
「あー……なら、お言葉に甘えちゃってもいいですか？」
「知ってますか？　子供は無条件で大人に甘えていいんですよ？」

今度はニコッと笑いかけられてしまった。うーん、これが外人補正か？　素敵すぎる。日本人じゃこんなこと言っても格好つかないんじゃないかなぁ。というか顔赤くなってないかな俺……じゃなく

て私！　このままじゃＩＳ学園で生活するのは無理かもしれない。一夏よりも無防備な女の子を見ることになるわけだし……お風呂とか夜とかどうしよう！

「ってそうだ、ＩＳだ！」
「はい？」
「えっと、今日来たのはヴァネッサさんに甘えに来たわけではなくてＩＳの適性試験を受けさせてもらえないかなーと思ってなんですよ」
「そういうことですか……でも準備もあるのでお洋服を買いに行ってから、ね？　アリサさんはもう少し女の子らしい服装をしてもいいと思いますよ。当然そのワンピースも可愛いですけどね」

お、おぉ……これが大人か。好意を押し付けるわけでもないのに相手が受け取らざるを得ないような状況を作り上げる……勉強になるなぁ。買ってもらうものが上着だけじゃなくなってる気がするけど何を言っても無駄だろうし、ちょっと楽しみだから甘えよう。だからとりあえず赤面鎮まれ！

1. Je suis Arisa Fuwa, 10 ans.（後書き）

不破圓明流についてはマガジンの「修羅の門」「修羅の刻」をご覧ください。
陸奥でもよかったんですけど。。。負けられなくなりますし（ぁ

2. Comment jolie la fille qui touche

シャルロット登場。
つ、次の話で原作前は終了します・・・！　きっと！

ＩＳ設定はＢＡＲＤＲ　ＳＫＹから、
分割思考はメルブラからですね

2. Comment jolie la fille qui touche

「弧月！」

母様（ママ）が仰向けに倒れ込むようにした後片手で逆立ちになり、真下からまっすぐ私の顎を突き上げるように蹴りを放ってくる。何度か見たこともあるので私は落ち着いて半歩下がって避けた。

いきなりですが不破圓明流の修行中です。この特訓が始まってから既に3年も経つのですが未だに母様（ママ）に対して有効打が出ません。というか不破圓明流が出てくる原作を読んで、まだ見せてもらったことのない技を知っているだけに慎重になっちゃうんですよ。『投げる』『極める』『折る』を一連の動作として行う投げや関節技に加え、古武術に少ない蹴りや様々な状況に対応できる打撃技など、元々『人体を破壊すること』に秀でた古武術の中でも圓明流は特にその傾向が強い……というか不破圓明流は古武術というより暗殺術なんですけどね。下手にパンチを繰り出してもクロスカウンター気味に肘を叩き折られるし、逆関節を極めたまま一本背負いして折ったり……いえ、流石に私はそこまでされていませんけど。

「私と戦いながら考え事なんてダメよ」

私の目の前を通り過ぎた母様（ママ）の踵がそのまま振り下ろされた。蹴りを避けられたときに対応できるように編み出された弧月の裏。その踵を右手で払い、母様が支えにしている右腕に脚払い……あれ、逆立ちしてるから脚払いでいいんですよね？

「あら、止められるとは思わなかったわ」

「いつまでも3年前の私とは思わないで！」

言いながら片手の腕力だけで後ろに跳んだ母様が起きあがるのに合わせて斧鉞を放つ。斧鉞は前方宙返りしながら両足で一回ずつ相手の頭に踵落としをする感じの蹴り技ですね。当たって痛い方が鉞らしいです。

「うーん、不思議ねぇ。集中はしてるのに他のこと考えてるなんて……アリサったらいつの間にそんなに器用になったのかしら？」

本当に不思議そうにしながら母様は私の踵を両方とも掴み、ぽいっと投げ捨てた。私には貴女の方が不思議です。

私のは不思議でもないんですよ。どっかの錬金術師の思考方法を真似ているだけですから。最近やっと2分割出来るようになったばかりですけどね。だから今の私からしてみれば今晩の夕食を決めるために冷蔵庫の中身を思い出しながら受け身をとることも可能です。

素早く起き上がって体勢を低くしたまま突進、そして拳打。

「ん、残念」

油断したつもりは無かったけど、また母様に一撃も入れないままに負けたらしい。残念ってのは母様の価値が決まったときに必ず言われる言葉なんですよ。

私の伸ばした右腕が母様に絡め取られ、逆関節を極められたまま一本背負い。腕を折られてしまわないように自分から跳ぶ。……この技が怖いのはここからなんですよね。投げられる、というよりは叩きつけられるという表現がしっくりくるんですが……しかも頭から床に。それでいよいよ墜落するというところで頭を刈られ、その勢いで身体が回転して背中から落ちる。名前は雷でしたっけ。ジェットコースターの最前列で両手離しをするような感覚でしょうか。

多分、殺すために使われていた頃は頭を刈らずにそこまま地面に叩きつけていたんでしょう。ほんと、古武術って野蛮。私が言える

ことじゃないですけどね。

「いったぁ……」

「集中は出来てたから、投げを失念してたわね？」

「うん、投げられるとは思ってなかった……」

分割思考使っても負けるんだからどうしようもない気がします。

一応、朝峰家に伝わっていた嵐才流という古武術も使えるけど……あれは武器を使う相手を想定して作られたから、相手を選ばない圓明流とは相性が悪いんです。というかボクシングにも勝てちゃう圓明流ってどうすれば勝てるんでしょうね。

「さて、アリサ、どうすればよかったと思う？」

「……どうやってもママには勝てない」

「そんな当たり前のことでむくれないの。可愛い顔が台無しよ」

組み手のあとは反省会。とはいっても反省することはたいてい決まっていますが。

「前にも言ったけどアリサは間合いを詰めようとしすぎなのよ。構えたいる方からみたら格好の的よ？」

「でも詰めないと攻撃出来ないし」

「……はぁ。どうしてこんな男らしい考え方する子に育っちゃったのかしら。１０歳くらいまでは普通だったのに」

「母様（ママ）との組み手を始めたからだよ！」

ほんとは転生前の記憶が戻ったからだろうけど。あと突っ込むのは嵐才流の基本だから仕方ないんです。武器持った相手に間合いを離されたらジリ貧ですし。でも、母様（ママ）との組み手では使ったこと無いけど使ってみた方がいいのかな？　何より２つの流派を覚えてて

も混ぜて使えないんじゃ意味ないし……

「ママ、圓明流の弱点ってないかな？」

「人間対人間だったら圓明流は無敗だからねぇ……やっぱり弱点も圓明流ね」

ですよねー。無空波（むくうは）とか龍破（りゅうは）みたいな奥義が使えない私じゃ母様（ママ）に勝つのは無理かなぁ。正式後継者は一昨年生まれた弟に任せよう。そもそも女じゃ圓明流の本気を出せないし。うーん、残念。不破圓明流オリジナルの神威（かむい）とかも使ってみたかったんだけど。

「アリサ、きっと生身のＩＳ操縦者の中では最強だから、そう落ち込むこともないわよ」

「いや、最強になりたいってわけじゃなんだけどね」

そんなことを言われても女の子としては微妙だ。朝峰　巡っていう男の部分も母様（ママ）に負けてるから素直に喜べないし。

「ママ、アリサ、入るよ？」

その後も稽古を付けてもらっていたら親父（パパ）が入ってきた。

ちなみに今私たちがいるのは家の隣に新築した道場。ヨーロピアンな住宅街の景観を気にして外見からは普通の家にしか見えないようになっています。まぁ、一度それが災いして組み手の音が子供を虐待している音だと思われ、警察を呼ばれましたがね。今では防音設備もついてます。

「アリサ、そろそろデュノア社に行く時間じゃないかな？」

「え！？　もうそんな時間！？　えっと、シャワー浴びて着替えて……あぁ今日なに着ていこう！　……ママ、一番可愛い服お願い！」

選んでる時間がないから洋服選びは母様（ママ）に任せる。慌てていた私は両親の目がキラリと光ったのにも気づかなかった。

◇

「それで、そんな可愛らしい格好なのね。ふふ、ほんと可愛いわ」

私の服装の理由を聞くなりヴァネッサさんは含み笑いをしながらそう言った。笑うなら笑えばいい！　そりゃ笑うよ！　確かに私は一番可愛い服お願いって言ったけどさ……

なんでゴスロリなんですか！？

「でも、１０歳の誕生日に博士があげたっていう髪飾りとよく合っているわ」

青い花の飾りは壊れることなく、未だに現役で髪留めの任についている。大事にしていますからね。それが服装にぴったりすぎて、もう恥ずかしいやら嬉しいやらでどうすればいいのか分からない。

「最初は誰かと思ったけど……こうして見ると自然で似合ってるわよ」

「あ、ありがとうございます……」

周りにいるＩＳの研究者の人達も不思議そうに私を見て、それから私の特徴的な髪の毛を見て誰か気付いたというようなリアクションをとる……やっぱり髪、染めようかなぁ。窓を挟んだ隣の部屋では親父（パパ）が私を同僚に自慢しているのが分かった。恥ずかしい。

「そうね、せっかくそんな格好なのだし……」
「ヴァネッサさん？　ＩＳスーツに着替えてきますよ？」
「え！？　あ、ええ。でも今日はちょっと早めに終わるわよ」
「？　分かりました」

早めに終わるときもわざわざ前もって言ったりしないのに、何で今日に限って言うんだろう？　……まぁ考えて分かる問題でもないし、早めに着替えちゃおうかな。少しでも長くＩＳ使いたいし。
若干、肌面積が広すぎるような気がするＩＳスーツを着て私の専用機、オンブル・ループの待機形態であるアンクレットを装着する。専用機だけど機密だからデュノア社に保管されてる。普段はあまり使えないこともあって、ＩＳの訓練は好きだ。

「では、ＩＳを展開して下さい。目標タイムは１秒未満です」
「いくよ、カゲロウ！」

カゲロウはオンブル・ループの和名。影の狼って意味だからそのままだね。オンブル・ループ！　って言うより速いし、なにより雰囲気が出る気がして展開する時はこっちの名前を採用してる。
この機体には偶然の産物によって生まれたある機能が搭載されている。もともとＩＳは経験を蓄積することで操縦者に合わせて最適化するようになっているけど、カゲロウはなぜかそれに加えて自立進化をする。操縦者に合わせて使いやすくなることで結果的に強くなるのではなく、機体自身が強くなっている。形状こそ変化していないものの、内部は始めた展開したときから随分と変わっていた。たとえば、エネルギー総量が増えていたり、スラスターやエネルギーシールドの出力が上がっていたりだ。私の予想だけど原作で言われていたコアの自立進化が表層化したんじゃないかと思ってる。

「１．０２秒、目標までだいぶ近づいてきましたね。まだ実稼働時

間が５０時間も経っていないとはた思えません。次はスラスターと右手武装のみの展開です。目標タイムは……」

　カゲロウの開発が遅れて最近までなかなか乗れませんでしたが、まぁ腐ってもＡ判定持ちですからね……原作で一夏がどれだけ白式に乗っていたかは分かりませんから、場合によっては遅い方かもしれません。彼、２０時間くらいで１秒未満達成してませんか？

　あ、Ａ判定といえば、シャルロットもそろそろＩＳに乗るんじゃないでしょうか。ＩＳ学園に転校してくるまでに３００から４００時間稼働させてたって考えると、そろそろ乗り始めてないと相当ハードだと思います。機体のエネルギーの問題で１日に３時間以上乗るのは無理ですからね。毎日乗るならもっと短くなるし、体調悪いときにＩＳを使うと変な風にＩＳが最適化されちゃいますし。

「えー、では次は３０メートル向こうの的全てを打ち落として下さい」

　考え事をしながらも訓練は続く。

「オペレーターさん、そういえばさっき小耳に挟んだんですけど……」

「はい、なんでしょうか？」

「新しくＩＳの適正高い子見つかったって」

「あー、らしいですねー。今ラファール・リヴァイヴの改良が急ピッチで進められていますよ。家に帰れてるのはアリサさんの武装をラファール・リヴァイヴで転用できるようにするだけのドクター・フワくらいじゃないでしょうか」

「あー、なんかゴメンナサイ……今度、お菓子でよかったら作ってきますね」

「わ！　ほんとですか？　ならヘルシーだけどオイシーの期待して

ますね！」

親が非常識だと娘が苦労するんです！　まぁ、半分は女の子なのでお菓子作りも嫌いじゃないですが。それに、デュノア社の胃袋も掴んでいるみたいだし。

「えっと、今日の訓練はここまでですね……やけに早いですけど何か用事でもあるんですか？」

ここのところは時間が許す限りＩＳに乗っていた私にオペレーターさんが不思議そうに言いますが、私自身、今日の予定はＩＳの訓練をするだけだったのでピンときません。

「え？　私はてっきり会社の事情だと思っていたんですけど……ママが電話したのかなぁ」

「今日はそういうのなさそうでしたけど……まぁ、彼女なら仕方ないですね」

デュノア社でも母様（ママ）の名前は有名です。夫と娘の帰りが遅いと迎えに来て、受付の前で素人離れしたプレッシャーをかけてくる妻として。多分、ママのせいでここら辺に住むフランス人の多くは貞淑な日本人女性というのは幻想だと思ってると思います。なんかもう誰に謝ればいいのか分からない。

「あぁ、アリサさんこっちです」

若干の躊躇いを覚えながらＩＳスーツからゴスロリに着替えた私にヴァネッサさんが声をかけてきた。彼女が示す先には……なにやら高級感が漂う外車が。なんだろう、嫌な予感がします。

「いい機会なので社長が本邸で会おう、と」
「本邸で？　というかこの服でですか！？」
「もう着替える時間もないですし、似合ってるから大丈夫よ」

そういう問題じゃないと思うのですが！　というかヴァネッサさんが黒幕だというのは分かってますよ！　会ったときに「せっかくそんな格好なのだし」とか言ってたの覚えてるんですから！

「まぁ、アリサさんがそこまで嫌がるなら、社長に断りの電話を入れますが……減給は免れないでしょうね。最悪の場合ドクター・フワも、」
「分かりました！　いきます！　行くからその携帯電話をしまって下さい！」

そういうの脅迫って言うんですよ！？

「そうですか。それと、今日はずっと晴れているみたいです」
「天気確認してただけですか！？　というかそんなの空見れば分かるじゃないですか！」

ヴァネッサさん、会った当初は良い人だと思っていましたが計算高い人でした。私にいろんな服を買ってくれたのも買収だったのかもしれません。そんなこんなで長い溜め息をつく私でした。

◇

「お初にお目にかかります、社長」
「君がドクター・フワの娘でオンブル・ループ操縦者のアリサか。可愛らしい格好をしているじゃないか」

はっはっは、と豪快に笑うデュノア社の社長さん。あれ？　なんだかシャルロットに男装を強制して送り出した人とは思えませんよ？

「それにしても13歳にしてはなかなか立派なものだ！　やはりドクター・フワの教育がよかったのか。彼にはなにかアドバイスを貰いたいものだな」

「アドバイス、ですか？」

社長にシャルロット以外の子供がいるっていうのは聞かないし、どういうことだろう。まさか初対面で、しかも話していいことと悪いことの判断もつかない年頃の子供にシャルロットのことを話すとも思えないし……。あ、もちろん私は判断付きますよ？　さっきのは一般論です。

「ちょうど君と同い年の娘がいてな。どうコミュニケーションをとっていいのかが分からないんだ。君たち親子は3人揃って仲がいいと社内でも評判だから、その秘訣を教えてもらえないか？」

話しちゃうんだ！

まぁ、つまり……シャルロットを含めて円満な家庭を築きたい？　じゃあシャルロットが父親の人形ってのは誤解！？　あ、でも男装してた理由が分からないな。というか一応は隠し子のシャルロットの存在を私に言っちゃっていいのかなぁ？

「えっと、秘訣は良く分かりませんけど……娘さん、ですか？　あ、いえ、やっぱり社長さんにもいろいろ有りますよね」

こういう風に言っておけば、不味いことを言ってしまったって気付くんじゃないかな。

そう思って社長さんを見ると、目を真ん丸にして私を見ていまし

た。あれ？

「いやー、君には驚かされてばかりだな。まさか、私の気を悪くしないようにしながらも。しっかり注意をするとは。やはりＩＳの操縦には知性が必要なんだろうな。私のシャルロットも、あぁ、君は気づいているようだが隠し子だよ。あの子もあれでなかなか深慮で……」

うわ……地雷、じゃないけど似たようなもの踏んじゃったかも。顔全部で娘ＬＯＶＥを表現している。というか本当にどういうことですか？　誰か説明して下さい。

「あなた、さっきから何の話をしているの？」

そう言いながら妙齢の女性、多分本妻さんが現れた。

彼女から放たれるプレッシャーに社長さんはすごい汗かいてるけど……やっぱり本妻さん的にはシャルロットの話はされたくないんだろうな。だから社長さんも怯えてるんだろうし、仕方ない。

「そうですよ。あんまり私のことを褒められても照れてしまいますよ。私はただ2人に甘やかされて育ってきただけなのですから」

「そ、そうか。すまないな。君みたいな少女が見事にＩＳを操るものだから、ついな」

「いえ、そんな」

というか社長さん、私のこと見たことあったんですか……変な失敗見られてないよね。減速に失敗して転んだところとか。

「あら、アリサ・フワね。貴女のことは私も耳にしていますわ」

「そ、そうですか。変な話を聞いていなければいいのですが」

「貴女の作るケーキは大変美味とか……今度持ってきて下さらない？」
「そ、そうですね、機会があれば……」
ふぅーーーーー。
心の中で安堵の溜め息をつく。多分、社長さんも同じだと思います。
「そ、それでは時間も遅いのでそろそろ失礼しますね」
「そ、そうか。今度は君の家族も一緒に招待させて貰うとしよう。玄関まで送ってくるよ」
最後の言葉は本妻さんに向けてのもの。本妻さんの方もうまく誤魔化されたみたいで普通の反応なんじゃないかな？
「君の機転で助かったよ。なにか私に出来ることはないかね」
「いえ、ああいった雰囲気が苦手なだけなので、それに図々しく自分が褒められたことにしてしまいましたし……もし心苦しいというなら貸しにしておいて下さい」
マンガで読んだようなことを言ってみたら社長さんはまた豪快に笑い始めた。あれ、なんか変なこと言ったかな？　漫画では格好良い人を見るような視線を向けられるはずなんだけど。
「ははは、私は本気になれば君の父親を辞めさせることも出来る立場の人間だぞ？　その相手に貸しとは、なかなか強気じゃないか」
「あ！　えっと、」
「いや、何も気にしなくていい。借りにしておこう。心苦しいことだしな」

あー、もう。何で私ってこうかなぁ……大事なところで変なこと言っちゃうっていうか……今度から気をつけようっていつも思ってるけど、ついやっちゃうんですよねー。頭で判断するより先に口が動いているというか、口が考えて喋っているというか。

玄関からでるとヴァネッサさんがいた。もしかしてずっと待っていたのかな。

「いえ、さっきまでオフィスに。それにしても大成功だったようですね。社長の笑い声、外まで聞こえましたよ」

「た、たまたまだよ？　そんな大成功とか狙ったわけじゃないですし……」

言い合いながら2人して車に乗り込む。社長さんは良い人だったし、嫌な予感どころかむしろ良い日だったみたい。あとは本妻さんをどうにかすればシャルロットも受け入れられるんじゃないかな…女尊男卑になりつつある今じゃ難しいかもしれないけど。

なんとなく、そんなことを考えていたら、偶然1人で道を歩く小さな影を見つけたしまった。

「どうかしましたか？」

「いえ！　何でもないです」

さっきの……まさか、シャルロットじゃないよね。

でも、この先には本邸しかないし。じゃあ、今日がシャルロットが唯一本邸に呼ばれた日？　てことは本妻さんを説得するのはもう間に合わない！？

「やっぱり忘れ物でもしてきたんじゃないですか？」

「……うん、そうかもしれない」

これはきっとただの自己満足だと思う。無理をしないと手が届かないものを手に入れようとしているのは分かっている。でも、どうしても気になる。シャルロットと社長さんの間に何があるのか。今日、何が起こったのか。

「降りるね」
「えぇ、では次の信号で、」
「じゃあパパとママには適当に言っておいて」
「えっ！？」

そう言い残して走る車から飛び降りた。うん、着地に失敗して転んだけど母様（ママ）の蹴りに慣れ始めた私には大した痛みじゃない。幸いゴスロリも破れていないし走りにくいけど問題ないだろう。シャルロットに追いつかないと。本邸の中にはさすがに入れない。

◇

「間に合った……？」

道と敷地を分ける鉄門の隣に座り込んでいる子供を見つけた。つい追いかけて来ちゃったけど、なんて話しかければいいんだろう。シャルロットと一緒に本邸の中に入ることができえば本妻さんも対面を気にして殴らないと思うけど。

「お姉さん、この家の人？」

先手を取られてしまった。最悪なことに2つの意味で。しかもどうやら社長さんと本妻さんの娘だと思われてしまったようです。

「あ、私のことは気にしないで。ちょっと疲れちゃって休憩してる

だけだから」

シャルロットが立ち尽くしている私にそう言った。こんな時でもこの子は人に優しさを向けるんですか。頬を腫らし、今にも泣きそうに潤んだ目をしながら、それでも他人に気を遣うんですか？　一体なんのために……

「違うでしょう……」

「え……？」

「そんな顔で、そんなボロボロで、気にしないで下さい？　あなたにはもっと別の言葉が許されているでしょう？」

私が彼らの娘だと思っているのなら、なおさら私を罵るべきです。ある意味、勝手に産み落とされた彼女にはその権利がある。だって、今までそれさえも我慢してきたのだから……！　というか、この辺りの住人は何をやっているんですか！　私の時は鬱陶しいくらいに虐待の心配をしてくる癖に！

「貴女がいなければ……」

「……」

シャルロットが立ち上がって私の腕を力一杯握り締めた。力一杯といっても結局は女の子の力です。振りほどこうと思えば簡単ですし、そもそも痛くありません。

でも、ここまでで自制してしまう彼女の姿が心に痛い。

「この服、買って貰ったのよ」

「……！」

「この靴も髪留めも全部そう。私の髪の毛はあなたみたいに綺麗なブロンドではないけれど、彼らは綺麗だとも言ってくれるわ」

嘘じゃないです。全部私と親父（パパ）と母様（ママ）の間での話。でも、状況的には嘘を吐いているのかもしれません。そのおかげで、シャルロットも私を睨みつけてくれました。

「そう、あなたはそういう目で私を見ていいのよ」

「貴女に……貴女に何が分かるんですか！　そんな幸せな生活をして、母親もいて、何不自由なく生きている貴女に！　一体、何が分かるんですか！？」

「……」

「どうして私はこんなに苦しまないといけないんですか？　私は悪いことなんてしていないのに！　ただ人と同じような生活を夢見ることも罪なんですか！？　幸せを夢見ながら、綺麗な洋服を我慢する虚しさなんて貴女は知らないでしょう！？　何で、そんな苦労も知らない貴女が幸せなんですかぁ……」

開いている左手で私の胸を叩くシャルロット。鳩尾に入ったりしないか不安だけど、泣き叫びながら本心をぶちまける、飾らない彼女の姿を見て嬉しかったので我慢です。

「ぇ……？」

そんな姿を見てしまったから、恐らくは多分きっとそうだと思います。だって、それ以外に私がシャルロットを抱きしめてドキドキしている理由がありませんから。

「あの、離してくだ、」

「却下です。あんまり暴れるとペナルティーも発生しますよ？」

ギューッと抱き締めてます。朝峰巡だった頃も確かにシャルロッ

ト可愛いヤベェハァハァとは思っていましたが、こういう感情ではありませんでした。一時的な気の迷い？　そうかもしれません。

「あの、ちょっと苦し」
「動きましたね？　ペナルティーです」
「え！？　動いてませ、」

チュ……

でも、この気持ちは、
朝峰巡（俺）からライトノベル（シャルロット）のキャラへの憧れではなく、
不破アリサ（私）から優しい女の子（シャルロット）へ向けた初恋なのでしょう。

2. Comment jolie la fille qui touche

タイトルの意味はどこかの言葉で「おでこを押さえる彼女のなんと可愛いことでしょう！」

タイトルがだんだん使ったことのない表現になってきているので文法不安（

ミス発見したら教えて下さい。

取り敢えずタイトル通りファーストキスは奪ってないですよ？

というか進めるごとにシャルからオリ主への好感度が下がるんですが（

3. La r?solution utiliser l' arme mo

凶器をふるうための覚悟。

というか主人公のＩＳのイメージはＢＡＲＤＲ　ＳＫＹのカゲロウからとったけど
自分でイメージ像を描いてみたらかけ離れ過ぎてました（

3. La résolution utiliser l'arme mo

ど、どどど、どうしよう！？

な、なんで昨日あんなことしちゃったんですか私は！？　初対面の相手にキスだなんて……いや、デコチューだから挨拶みたいなものだよね！　っていっても判断するのは私じゃないし……痴女とか思われたらどうしましょう。

「というかどんな顔して会えばいいんですか！」

分割思考で脳内会議をしているけど結論は出そうにないです。両方ともパニックに陥っているんだから当たり前ですけど。

そもそも、こんな風に悩むのはやっぱりヴァネッサさんのせいなんです。私とシャルロットの訓練場がすぐ近くなことを教えてくるから！

公に出せない出自だからかもしれませんが、シャルロットは私がいつも出入りしているデュノア社の正門ではなく職員用の通用門を使っているみたいです。なので今まで一度も遭ったことはないですけど……可能性はゼロじゃないですからね。

それに、私が恥ずかしいだけなのならいいんですけど、シャルロットは私を社長さんの娘だと思って叩いちゃってますから……余計に気にしそうですよね？　しかも私のしたこと常識に照らし合わせてみるとやっぱり痴女ですし。というか両親に常識がないとか言えませんね。

「相手に見つかりたくないっていう前提を逆転させたらどうかな？」

「どういうこと？」

親父（パパ）の言っていることがよく分からなかったので聞き返してみる

と、

「だから、その子にアリサがアリサだと分からせなければいいんだよ」

例えば服装だったり、髪型だったり。

親父（パパ）の言う通り、服は金輪際ゴスロリなんか着ないから平気として、髪は問題かも。この町で栗毛と金髪が混じって生えている、いわゆるゼブラブロンドは少ないし……

「染めればいいじゃない。栗毛だけを脱色すれば多分綺麗なストロベリーブロンドみたいに見えるわよ」

「あとは髪を切っちゃうとか」

両親2人の意見を聞いていると平気に思えてきます。そもそもあの日以来シャルロットとは会っていないし、あの時も暗かったから顔を覚えられていないでしょうし。

「これは、今まで以上に周りに気を配らないといけなさそう」

シャルロットと仲良くなるのも避けた方がいいでしょうし……ほんとは今すぐにでも会いたいんですけどＩＳ学園までは我慢です。多分その頃には本邸の前で遭った人のことなんて忘れているでしょう。

「よし！　美容院行ってくる！」

「標的と行動圏が被らないようにしなさいよ。あと髪型はアップにして、ママの伊達メガネかけていきなさい」

「標的て……」

「あら、誰かに闇討ちするんじゃないの？」

「しないよ！」

いくら不破圓明流が暗殺を生業にしてきたからって、すぐにそっちに思考を傾けないで欲しいです。今の世の中、常識以上に大事な物なんて数えるほどしかないんですから。

ということで、新生アリサです。髪の毛は肩より少し短いくらいまで切って、色はなんちゃってストロベリーブロンド。この髪の色を見ているとバービィ人形を思い出しますね。服もパンツスタイルに変えて……うん、見事に別人です。少なくとも一昨日の痴女（ゴスロリ）と同一人物とは思えません。

「よし、じゃあ、デュノア社行ってくる」

「頑張ってね」

「僕たちはアリサの帰りを待っているから」

親父（パパ）、あなたも出社するんですよ！

「あらドクター・フワと……アリサさん？　またイメージ変えたんですね。似合っていますよ」

うん、ヴァネッサさんのこの反応なら平気そうだ。なぜか私の髪の毛を手で梳いてうっとりしてるけど気にしません。というか立て続けにイメチェンしてて、方向性に迷ってるように思われないかな。

「じゃあ訓練に行ってくるから、パパはしっかり仕事するように」

更衣室でいつも通りＩＳスーツに着替えてアンクレットを装着す

る。今日は模擬戦闘での格闘訓練だっけ？
訓練場に出てみると今日はまだ訓練相手が来ていません。最初は基礎訓練ってことかな。

「それではアリサさん、まずは展開をお願いします。目標はやっぱり1秒以内で」
「はーい。カゲロウ、来て」

アンクレットを装備した足先から純白の金属塊が広がっていく。太もも、下腹部、背中に肩とアーマーの露出度がむしろISスーツより高いことに若干の不安を覚えつつ自身をアーマーで覆っていく。二本の尻尾みたいなスラスターを現出させて展開は終わり。
ちなみに私の展開の仕方には完全展開と簡易展開の2通りがあって今は訓練なので完全展開です。
簡易展開っていっても二重構造で衝撃を和らげる構造になっているカゲロウの内側部分だけを展開しているだけなんですけどね。そうするとゴツいパーツが無くなって少しおしゃれになります。
足元はニーハイブーツにソックス、腰はフレアスカートで胴体はチューブトップ、そして手袋。もちろん全部金属ですが光沢を消しているので、遠くから見れば露出度が高い服にしか見えないんじゃないでしょうか？　まぁ防御力は格段に落ちるので高機動のみを求める時くらいにしか使えないですけどね。ちなみにその時のフレアスカートは前面がスリット……というか完全に無いのですが、ぱんつじゃないから恥ずかしくないんです。

「……あ、オペさん。ケーキ持ってきましたよ」
「わー！　ほんとですか！？　……なんて誤魔化されませんよ？　タイムが一昨日よりコンマ2秒遅くなってるじゃないですか！」

うーん、やっぱり気付きますか。いつもより遅いなー、と思った

んですよ。

「悩み事は早いところ解決しちゃって下さいね。それでは5秒毎に各兵装を展開して下さい。その後は複数の兵装を同時展開です」

「早いところ解決できたら悩みませんよ……」

カゲロウの兵装は趣味でピーキーきわまりない物ばかり。例えば基本のパイルバンカーから始まって、短射程低初速だけど高威力の榴弾砲。さらに発射に莫大なエネルギーを必要とするガウスガン。後付装備（イコライザ）にはラファール・リヴァイヴ・カスタム？に付けられる予定の兵装が試験目的でいくつか。シャルロットはよくこれだけの量の兵装を使い分けられますね。

「後付装備（イコライザ）の兵装はやはり展開が遅れますね。まぁアリサさん用じゃないんで仕方ないかな」

「というか、試験運用は本人にやってもらわないと意味ないんじゃ……」

「……いえ？　どちらかといえば兵装の試験運用目的ではなくてオンブル・ループに経験を蓄積させるのが目的ですから？　せっかくの自立進化機能を利用しない手はないですし？」

確かにいろいろな兵装を使っておけばその分だけカゲロウは進化していくけど……最近、多数の兵装を使った方が進化が速いってことも分かったし。でも、目、泳いでませんか？

というかカゲロウの扱い酷いですよね！？　そもそもコア自体が既に何千時間って利用されているものの使い回しらしいじゃないですか！　新品を用意するのは難しいでしょうがこんな、最古品を使わなくても……

「……では白狼の咆号（ウルフズロアー）お願いします」

「……はい。白狼の咆号（ウルフズロアー）展開」

影狼と同じ純白の砲身が右腕を飲み込むようにして現れる。７メートルの砲身に加えラジエーターや後部の狼の爪のような意匠を含め９メートルにも及ぶ全体。砲の直径は７０センチもある。当然、片腕で支えるのは不可能なので両腕と片足、更にスタンドを使わないと発射どころか照準を合わせることもできません。構造的に反動は殆どないのが唯一の救いでしょうか。

「どこに向けて撃てばいいんです？」
「地面に向けてお願いしますね？」
「了解です」

兵装の種別としては電気によって強めた膨大なガウスをエネルギーとして成形炸薬弾を撃ち出す電磁投射砲（コイルガン）。あー、もちろんＩＳ学園では合金製の金属弾を撃ち出すつもりです。そうじゃないと威力が高すぎて一発で絶対防御を発動させかねせんし。

まぁ次弾装填にもエネルギー充填にも時間がかかるから一度限りの超必殺技みたいなものですね。威力は……戦車数台を落とせる落とし穴が楽に作れるくらい、です。

地面に開いた洞窟に冷や汗がでる。

「えーと、次は後部ＢＴ兵器、妖精の加護（フェアリーダンス）の性能をテストするので展開しておいて下さい」
「りょーかいです」

両肩から１対、腰から２対、太腿から１対の有線式ＢＴ兵器が射出され、その砲身が意志を持っているかのようにカゲロウの周囲に浮かぶ。この兵装の効果は、

「ではミサイル５０発を5秒間で。いきますよー」
「どうぞ」

毎秒１０発のミサイルの雨を切り抜けるための迎撃兵装。ハイパーセンサーで感知した熱を持つ物体の情報を、一度私の判断というフィルターを通してから撃ち落とす。私の判断を通さない場合、周囲に存在する一定以上の熱を持つ物体全てを手当たり次第に撃ち抜こうとするじゃじゃ馬です。

しかも、エネルギーを送るための送電線はナノフィラメント。何が言いたいのかというと8機から放たれるレーザーでは迎撃が間に合わない場合の緊急手段です。いわゆる暗器の一種である鋼線として、物体の切断も可能な便利スライサー。

兵器に付随する国籍コード認識によるフルオート迎撃でも良かったのですが、それだと多国籍なＩＳ学園では誤射しそうで利用できなさいですし、オンブル・ループは周囲のいかなるＩＳとも協力できる、というコンセプトで設計されているので、それに反してしまいますから。

ちなみに妖精の加護（フェアリーダンス）は火薬を避けてミサイルの推進機能と信管のみを撃ち抜くので爆発も起きない安心設計です。飛んできたミサイルを殴っても信管が作動しないので爆発もしません。

「全弾迎撃確認。それにしてもなんで妖精の加護（フェアリーダンス）を使ってる間に他の行動も出来てるんですか？　もう集中力以前の問題ですよ」

撃ち落とすかどうかの判断は私がしているため、全方位からのミサイル群なんて全神経を集中させないと迎撃が間に合いません。私の場合は分割思考の片方をその作業に割り当てているため、他の行動も可能というだけです。一応、妖精の加護（フェアリーダンス）はラファール・リヴァイヴ・カスタム?にも装備できますが、分割思考が出来る私以外には扱えないでしょう。いくら性能の良い迎撃兵装でも足が止まって、

反撃もできないなら意味ないですからね。
　まぁ、イギリスの少し前の研究成果を改変しただけの、実験的な側面の強い“なんちゃって”ＢＴ兵器ですから火力自体はそう高くもないので無理に積む必要もないんですけどね。
この兵装の魅力は高い精密性ですし……個人的にはブルー・ティアーズに積ませてみたいですね。
　第３世代兵器なのにカゲロウが詰める理由は妖精の加護（フェアリーダンス）が“なんちゃって”ＢＴ兵器な理由と同じですが……まぁ長くなるので今度にしましょう。痛い思い出ですし。

「それでは、お待ちかねの格闘訓練です！　今日はなんともう一人の専用機持ちが相手ですよ」
「……えっと、誰だって言いました？」
「ですから、一昨日話したＩＳ適性が高かった子ですよ。いやー、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？、部分的に完成していて２ヶ月ほど前から訓練していたそうですよ」

　え、ドッキリ？　それって完全にシャルロットのことですよね？
私何も聞いてないですって！　一昨日あんなことがあって気まずい思いしてる少女になんてＫＹな仕打ちですか！？　……ま、まぁ、そういえば気付かれないように変装もしたし、平気ですよね。

「あ、あとバイザー付けて顔隠して下さいって指示がヴァネッサさんから」
「ＧＪ！」

　というか冗談ではなくグッジョブですよ！　多分、私のことを考えてじゃなくてシャルロットの正体を隠すためでしょうが、なんにせよヴァネッサさん最高！

「準備できたらフィールドDに向かって下さいねー」
「りょーかいです」

こうなったら残っているのは愉しみな気持ちだけです。死合の予感に血が沸騰しそう。ゾクゾクするね。

「はーい、アリサさん顔が怖いので深呼吸して下さい。いくら適性が高い子といってもまだ訓練始めたばかりの女の子なので本気出さないで下さいねー」
「わ、わかってますよ？」
「またまたー。アリサさんが怪我したときのお母様そっくりですよ」

否定できない……これが修羅の血ですか。自重しよう。我慢はできないけど。

「おまたせ、自己紹介はしない方がいいのでしょうか？」
「そうみたいですね……よろしくお願いします」
「こちらこそ」

目の前に立つオレンジ色のＩＳ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？。どこまで原作通りの性能に近づいているかは分からないけど、少なくとも訓練機を相手にするよりは愉しめ……楽しめるでしょう。

「では、開始です」

合図とともに瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰め、それと同時に妖精の加護（フェアリーダンス）を展開する。

シャルロットは反応が多少遅れたものの、右手のゴツい銃――多

分、サタデイ・オブ・レインを私に向けて放ちます。
その狙いは完璧ですが……実弾はどこまでいっても光速に至ることはできません。散弾が私に突き刺さるよりも速く、妖精の加護（フェアリーダンス）のレーザーが弾を溶かす。その結末が予測できている私は動きを止めない。
新たに展開したブレードでシャルロットに斬りかかりましたが……むぅ、予定調和のようにブレッド・スライサーで受け止められちゃいました。これがシャルロットの高速切替（ラピッド・スイッチ）ですか。というかこの子、地味に乗り慣れてませんか？
近接戦闘になったため、ただのお荷物にしかならない妖精の加護（フェアリーダンス）を量子化、また別の近接戦闘用兵装を呼び出す。
それにしても、

「たかがパン切り、されどパン切り……」
「変な名前ですよね」

プライベートチャンネルごしの会話にシャルロットが困ったように笑ったのが分かった。
雨降る土曜日にパン切りナイフ……我が家の親父（パパ）が気に入りそうなネーミングだけど……まさかね？　ちなみに私の兵装の名前は自分で決めています。この世界ではああいう名前も許されているので問題ありません。それに私は１３歳、現役中学２年生ですから。
うーん……でもこういう立場になっては初めて母様（ママ）の忠告の意味がわかりますね。確かに戦闘中に話すのは危険でした。私にとってではなくシャルロットにとって。

「えっと、先に謝ります。ごめんなさい」
「え？」

いきなりの意味不明な私の謝罪に面喰ったシャルロットの声。可

愛いなぁ、チクショウ！

彼女の注意がそれた瞬間に鍔迫り合いになっていたブレードを手放し、勢い余って斬り上げてくる形になったブレッド・スライサーを握る腕を絡め取る。それと同時に逆関節も極めます。

「話しかけられても試合中に会話しちゃダメですよ？　特に私とは」

「あ……」

分割思考の影響で故意かどうかに関わらず、相手の隙を見つけたら瞬時に行動しちゃいますからね。割と嫌な女です。

しかもさっきの会話は隙を作り出すためにわざと始めたものですし。例えシャルロットが１パーセントしか会話のために脳を使っていなくても、１００パーセント以上を戦闘に傾けている私にとってみれば大きな隙です。やっぱりここら辺は戦闘に慣れているかどうかの違いでしょうか。

「跳んで！」

ただ単純に私の言葉に従っただけなのか、それともそのままでは自分の腕が折れることを本能的に悟ったのか。とにかく大した負荷もなくシャルロットの身体は浮き上がった。当然腕も折っていませんよ？　折ろうと思えば折れますけどね。

ＩＳはビームや爆風、衝撃からは完全に操縦者を守ってくれますが、装甲ごと操縦者の間接を逆方向に曲げられると絶対防御でも守れないんですよね。余談ですがジャイアントスイングで目を回したりと、ＩＳの保護能力には孔が多いんです。

「ひっ！」

不破圓明流、雷（いかずち）ｖｅｒ．　ＩＳ

頭から地面に叩きつけられるという未知の恐怖に身体が硬直したシャルロット。その身体を彼女のＩＳの左肩のシールドを蹴ることで回転させて背中から落とす。ＩＳを展開してるからって女の子の頭を足蹴にするのは抵抗がありますからね。

「むむむ……」

ＩＳに守られているから落下での呼吸困難はないにしても、人間ジェットコースターの怖さは半端ないと思うんですけどね……まだ立ち上がろうとするシャルロットを見るとそう思わずにいられません。

私が初めて受けたときは生身だったから本当に死ぬかと思ったんですけど……やっぱり優しくて可愛いだけじゃなくて強いんですねぇ。ますます惚れ直しそうです。

「でも、できればフランスでは距離を置きたいので興味を持たれる前に倒しちゃいます」

立とうとするシャルロットの肩を脚で踏みつけ地面に固定し、その顔に右手の近接兵装を向ける。このまま肩の装甲を踏み抜く方が圓明流っぽいですが、ＩＳだと痛みがないので効果的じゃないですし、無駄に破壊して整備の人たちに怒られるのもヤですからね。

それにシャルロットならこの兵装の威力が分かるはずです。これは既にラファール・リヴァイヴ・カスタム?にも付いているはずなので。

「え、灰色の鱗殻（グレー・スケール）……？　……なんで、」

「正確にはその親かな……理由は私のＩＳがあなたのＩＳに装備される兵装のテストをしているから。まぁ、灰色の鱗殻（グレー・スケール）はこれの技術の転用だけど」

私のパイルバンカー、討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）はリボルバー機構をフルに活用して２４連発式の短杭と、円形に並べられた短杭の中央にある単発式の長杭を組み合わせた奇形。灰色の鱗殻（グレー・スケール）はいわばその機能を削った軽量タイプに当たるのかな。

量子化したときの要領も５倍以上違うから性能の開きも当然です。容量を取り過ぎていて後付装備（イコライザ）を入れても６つの兵装しか装備できないんですから相当ですよね。まぁ、そのハンデを補って余りあるロマンですけど。

「テスト……？」

「そうです。使用者に負担をかけすぎないか、暴発の危険性はないか、人に扱える代物か。そういうテストです」

「それは普通私が、」

「そうですよねー。経験の問題もありますし、本人がやるべきだって私も言ったんですよ」

あ、もちろん自分可愛さじゃないですよ？　シャルロットにはできるだけ怪我してほしくないですし。でも、自分が使う武器の使い勝手を他人に知られているのは危険ですし、どういう使い方をすると壊れるのかということは知っておかないといけません。それに壊れなければ本来の使用法からは外れた使い方もできるわけですしね。

……とは言っても、ＩＳ学園の生徒はオモチャ程度にしか考えていないのでしょうが。だから軽々しくＩＳを自分のために使おうと思えるのです。誰とは言いませんが。というか、ヒロイン陣だとほぼ全員ですね。

「じゃあ、どうして……」

「適当にはぐらかされちゃいましたけど……きっと、大きな権力が絡んでますね。ひょっとしてお父さんが代議士さんだったりしませ

んか？　できるだけ娘に怪我させたくない親心、みたいな感じです」
「……そんなわけ、ないです」
「そうですか」

お父さん、という下りからシャルロットの顔が歪みました。こんな遠回りな表現じゃ社長さんの気持ちは分からないかな？
さっきのは私の勝手な想像ですけど、あながち見当違いってこともないと思うんです。適性が無ければＩＳにも乗せたくなかったんじゃないでしょうか。男装させてＩＳ学園に送った理由も今では想像出来ます。別邸を用意したのも本妻さんからの嫌がらせから守るためでしょうね。
……でも、この子はＩＳが兵器だってことを理解してるのでしょうか。言われるままに乗っているだけ、なんてことはないですよね？　なんか、さっきから感情の揺らぎが感じられないんですよね。例えば、相手に傷つけられる恐怖とか。

「えっと、私のママがいつも言う言葉なんですけどね」
「……」
「人殺しの兵器を使うときは殺される覚悟より殺す覚悟の方が必要よって」

右手から細かな駆動音。杭を撃ち出すまでのタイムラグも要改良点ですかね。

「ま、まって……ぃゃ」
「待ちません。あと、目は開いていて下さい。私達はＩＳが人殺し（兵器）の道具であることを自覚しなければいけないんです」

あ、もともとは宇宙で活動するためって建前でしたっけ。結局、早々に兵器転用されましたけどね。白騎士事件（デモンストレーション）の仕方が間違えてい

た気がします。

ガシュン！

短い音を発して長杭が射出される。もちろん当てる気は全くないのでシャルロットの頭から１０センチ以上離れた地面に向かってです。

「もちろん、私にだってどっちの覚悟もないですけどね。せいぜい傷付け傷付けられる程度ですよ。全く、１３歳の女の子にそんなこと言ったってしょうがないと思いませんか？」

「……」

「あれ、もしもーし？　気絶？」

見ればオレンジ色のＩＳも光の粒子に変わり始めています。精神的ショックからの気絶だとＩＳは解除されるんですねぇ。

「……また、やりすぎちゃったかもしれません」

「かもしれませんじゃないです！　もう、手加減して下さいって言ったじゃないですか！」

「手加減したら負けちゃうじゃないですか」

「殺し合いじゃないんですから勝ちに拘らなくても……」

不破圓明流の業を使った時点で負けられないんです。これ以上負け星を増やしたくないですから。

それに兵器を使っている以上、絶対の安全なんて保証されてません。生命第一で設計されているとはいえ、いつそれがなくなるかも分からないんですよ？

……あぁ、絶対の安全なんて保障があるからみんな能天気なんですね。兵器の操縦者が最も安全だなんてナンセンスです。さっきみ

たいに絶対防御すらも無視する方法はありますし、蹂躙する者は相応のリスクが必要なのに……ＩＳを使っている私に言えたことじゃないですけどね。

「はぁ……じゃあアリサさんは休憩して下さい。その子は誰かに運んで……ってなに抱き上げてるんですか！？　あ、あぁ、えーと、とりあえず絶対にバイザーを取らないで下さいよ！？」

「シャルロット・デュノア。私は彼女のこと知ってるから平気ですよ。あぁ……でも私のこと、彼女に言わないで下さいな。あと昨日以前の私の写真とか資料、全部破棄して下さい。重要なものはまた用意し直しますから、残らず全部ですよ」

「は、はい……」

一気にまくしたてたから追求もされませんでしたね。運がいいです。まぁ社長さんに迷惑かけることになりそうですけど……ケーキでも持って行って本妻さんの機嫌を取ればいいかな。でも、なんでシャルロットと戦うことになったんでしょう。今日戦った感じでは本当にまだまだなのに……社長さんの画策だとしたら、私とシャルロットを近付けたかったんでしょうかね……私は距離を置きたいのに。

「あ、オペさん。さっきのこと言ったらヤですよ？　約束破ったらもうケーキも何も作ってあげませんから」

「分かりました！　誰にも言いません！」

正直、そこまで私のケーキに価値はないと思うけど……まぁ、言われても私以外の人が困ることはないからいいかな。

「なら今度オペさん用に美味しいもの作ってきますね。あと、出来ればこの子との訓練は避けたいです」

「……えっと、その子、そんなにダメダメでした？　訓練機の方がましなくらい？」
「ううん、そうじゃないんです」

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の稼働時間が長くなれば一方的な展開にはならないでしょうし、試合が長引くということはそれだけリスクが高まります。訓練の回数が増えれば仲良くならざるを得ませんし、不必要に近付いて本邸（ゴスロリ）の痴女と同一人物だって気付かれたくはありません。それに、やっぱりシャルロットには攻撃したくないですし……

「とりあえず、この子運んじゃいます」
「う、うん。えっと、落としちゃダメですよ？」
「軽いから平気ですよ」

ほんと、軽いです。筋肉ばかりの私としては羨ましい。バイザーの下の寝顔を見てみたい欲求に駆られますが……がまんがまん。
ちょっとならいいかな？　だめですよね。

3. La résolution utiliser l'arme mo

そして1年と少しの月日が流れた→次からＩＳ学園編に入ります

Les attentions avant l'histoire dans

本編に入る前にいくつかの前提条件を明記しておこうかと思います。

その1、一夏以外にＩＳを扱える男はいない（原作で新たに出てこない限り

その2、ヒロイン陣の一夏ラヴは変更なし（無効になりましｔ

その3、本編改編はあるが、イベントの抹消はしない

その4、オリ主のワンオフアビリティ発動は他ヒロイン陣が本編で発動するまでない

その5、オリ主の人格は転生前人格“朝峰巡”の影響を受けた“不破アリサ”。どちらとも同一ではない

その6、オリ主の恋愛対象は両方

その7、オンブル・ループは当然、第2世代ＩＳ

その8、機体性能はラファール・リヴァイヴ＜オンブル・ループ≦ラファール・リヴァイヴ・カスタム？（ただし純粋な機体性能のみを見た場合

その9、身体能力は（生徒会長を除いた場合）ヒロイン陣トップクラス。ラウラ、箒は勝負になるレベル。

その10、主人公機とシャルロット機の装備（パッケージ）のいくつかは互換性あり

その11、主人公機の自立進化は第3世代機の性能を上回ることはない

その12、ラウラはいろんな意味で強敵（ライバル）

その13、鈴音も捨てがたいけどシャルロットがヒロイン

その14、オリ主がシャルフラグを立てたのではなく、シャルがオリ主フラグを立てただけです

その15、フランスのセシリアとちがってイギリスのセシリアさんはいい人（フランスのセシリアさんはヴァネッサさんの元の名前）

その１６、　空気ちゃんマジ箒

順次増えるかもしれませんが今のところ、考えているのはこれくらいです。

以上はあってないようなものになりました（４月２６日

続いてオリ主・不破アリサとそのＩＳ情報。そして元ネタ

名前：不破アリサ

特技：“朝峰嵐才流”（オリジナル

転生前に習得した古武術。

相手の攻撃を封じることにを特化した高速移動・戦闘法が特徴。

“不破圓明流”

コミック『修羅の門』『修羅の刻』出典。

相手の身体を破壊することに特化した技が特徴。暗殺術。

“分割思考”

ゲーム『メルティブラッド』より、

シオン・エルトナム・アトラシア（だっけ？）の思考方法。

オリジナルの性能はＷｉｎｄｏｗｓＸＰと同等。オリ主の場合、関数電卓。

“並列処理（マルチ・サーキット）”

分割思考を利用しての複数兵装の同時使用。

歌を歌いつつ本を読み、さらに夕食の献立も考えるのと似ている。

外見：身長１４６ｃｍ

Ｂ７６（Ａ－Ｂ）　Ｗ５６　Ｈ　６８

長髪ストレートのロリ（１２歳から身長は伸びていない＆１９話からツインテールに（

地毛は栗毛まじりのゼブラブロンド
ＩＳ学園ではなんちゃってストロベリーブロンド
顔は可愛い系＋しかめっ面
普段着はパンツスタイル

性格：人見知り
マザコン&ファザコン
割と短気
怒っている間は視線も平気、落ち着いてから激しく後悔する
先のことを考えて勝手に落ち込む・不安になる
周囲からは厳しいと言われるが優しさが防腐剤くらい添加されている
“れずびあん”というより“ばいせくしゅる”
身体的な特徴を言われるのも嫌う

←汚いけどラフ……あ、汚いからラフなのか（ｈｔｔｐ：／／３０２１．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ２２５５１／

好き：友達（ごく少数）
シャルロット
両親
ケーキ（作ることも含まれる）

嫌い：人を傷つける力を考えずに使う人
美味しくないもの
ピータン

フランス科学者の父と日本人の母を持つハーフ。それなりに目立つ目鼻立ちだが童顔であり、フランスでは周囲からは永遠の１２歳

ともてはやされていた。もといペットにされていた。
シャルロットＬＯＶＥだが“本邸（ゴスロリ）の夜の痴女”バレを恐れてフランスでの接触は2回しかない。
デュノア父子の誤解を解こうと頑張ると共に本妻さんにも根回ししていたが……効果は不明。
料理の腕前はそれなりでお菓子作りに至ってはプロ級、というのもデュノア社に何度かケーキを持っていくうちにプロのパティシエを紹介されたとか何とか。三大女の子の夢が一つ“ケーキ屋さん”を地で行く。
人見知りのため友人を作るのが苦手だが、セシリア・オルコットのようにガンガン攻められると気を許しやすくなる傾向がある。
セシリア・オルコットとはＩＳ学園編以前にＩＳ関係で知り合い友人関係を結んでいる。役どころは暴走機関車（セシリア）の運転手。止めるも加速させるもお手の物。でもいざというときはセシリアに甘える。セシリアさんマジいい人で私びっくり。
ＩＳ操縦者としては優秀。しかしＩＳの兵装自体が短所の多いもののため周囲と比べると突出していない。
ＩＳ設計には第1にロマン、第2に外見、最後に戦闘能力という兵器としては欠陥品レベル。しかも量子化容量の半分をそれら初期（プリ）装備（セット）のロマン兵装に使っているため拡張性も高いとは言えず第2世代と言っていいのかすら怪しいレベル。
ＩＳコアの自立進化が表出したと考えられる自己進化プログラムによって周囲の専用気持ちとの差が無くなっている現状である。進化を促すために１０００時間以上の操縦をしていたため一体感は抜群。生身で使っていた古武術も体バランス以外の違和感を感じることなく使用できる。

ＩＳ専用機

機体名：オンブル・ループ（通称：影狼（カゲロウ））

カラーリング：原作開始前は純白→ＩＳ学園では無光沢の黒で統一
初期装備（暫定）：白狼の咆号（ウルフズロアー）
　討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）
　狼鋲（ヴリコネイル）
　自己進化プログラム
後付装備（暫定）：妖精の加護（フェアリーダンス）
　塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）
　近接用ブレード・裂震（フレクエンシー）
高機動用追加パッケージ：ヴェンギルガルムハント（翼狼狩り）

　性能自体が進化する２．５世代機。
　手足に爪を連想させる格闘用装備、狼鋲（ヴリコネイル）を常時展開し、腰部に又別れした尾のようなスラスターが２機。装甲は多重構造となっているため物理衝撃の耐性が高い。しかし、あくまでも装甲が存在している部分は、だが。
　後付装備を含めて６つの兵装が積める。
　高機動用追加パッケージでは背部に抽象化された翼が３対追加される。この状態での白狼（ウルフズロアー）の咆号の使用は瞬間的に発することが出来るエネルギーキャパシティを超過するため使用不可。妖精（フェアリーダンス）の加護は半分の２対のみ使用可能。討鬼の鋼杭、塩の都の大火、近接用ブレード・裂震（フレクエンシー）には制限なし。
　下腹部、太腿、肩と露出は他ＩＳと比べても多く、腰部は前に大きくスリットが入ったフレアスカート状のアーマー。頬に金属片のような飾りが付くなど、設計者の趣味が外見にも反映されている。装備・デザイン原案は不破アリサ。ゴツい脚部は展開すらしないことも多い。完全展開をしても身体のラインがでる装甲は。重厚で機械的なデザインの多いＩＳの中では異質。
　多重構造の装甲の内膜だけを展開する簡易展開時はチューブトップに足首まである前スリットのフレアスカート、肘上からの手袋にニーハイソックス＆ブーツ。全てＩＳの装甲と同じ材質を使われて

いるが薄いため防御力は当然落ち、被弾した場合のシールドエネルギーへの影響は大きい。高機動用追加パッケージ・ヴェンギルガル（翼狼）ムハント（狩り）との併用での高機動専用形態と言っても差し支えない。

原作知識を持つアリサの発案（おもいつき）によって革新的な技術がいくつか使用されている。

これに伴い並行開発されていたラファール・リヴァイヴ・カスタム？にも影響あり（？）

初期装備（プリセット）

白狼の咆号（ウルフズロアー）

カラーリングは白色

砲身７メートル、排熱部と狼の爪の意匠を合わせ全長９メートル、直径約７０センチのスタンド一体型コイル方式電磁投射咆。右肩から先を飲み込むように展開される。照準を合わせるにはさらに左腕と右足での支えが必要。

重量のため展開中は移動不可であり、技術的な問題から他の武器との併用は難しい（砲身から強力な電磁力が発せられているため実弾兵器、ＢＴ兵器に強い影響をあたえ安定した使用ができない）

上記の特色から超長距離狙撃用となる。

弾頭は本来は成形炸薬弾だが、威力が高すぎることと、炸薬を仕込むことによる相対的な磁性体含有量の低下から大量のエネルギーが必要となるため、ＩＳ学園ではより省エネな純金属塊を撃ち出す。成形炸薬弾は一発のみ所持。

また咆号（ロアー）とは言うものの火薬を使っていない磁力の反発のみによる射出なので発射音は静か。アリサいわく咆号は着弾時の音をさして。

試合中に使うことはないが使った場合、直撃すれば瞬時に絶対防御を発動させ、かすっただけでもシールドエネルギーを削り取る。

展開、照準、エネルギー供給、発射の四段階を最速で行ったとし

て2分弱必要。

討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）
灰色の鱗殻の兄弟兵器（グレー・スケール）

連射性と量子化時の必要領域縮小を両立させたグレー・スケールとは異なり必要領域を無視し、連射性と威力のみを追求した近接格闘用パイルバンカー。右手装備。

右手装備。単発式の長杭を囲むように24連発式の短杭が並んでいる。長杭は発射に際してのタイムラグ、短杭はただでさえ短い射程がさらに短くなったことでピーキー性能を増している。

長杭の射程はせいぜい50センチ、タイムラグは2秒。短杭の射程は25センチ、タイムラグはほぼ皆無。当然ゼロ距離射出が理想。

使用方法として主なのが短杭の連射でシールドエネルギーを削り取り、長杭で止めを刺す。シールドエネルギーを抜けて操縦者自身を傷つけないようにリミッターがかかっている。

短杭を『棺壊』、長杭を『心抜』と呼ぶ。

狼鋲（ヴリコネイル）

IS展開時から両手足に装着されている意匠であり武装。分類はナックルダスター。任意による疑似BT刃の形成が可能。普段は四角推状の棘。装甲の一部という扱いのため量子化領域を必要としない。恐らく最も使う装備。

後付装備（イコライザ）

妖精の加護（フェアリーダンス）

上背部1対、腰部2対、大腿部1対からなる有線式疑似BT兵器。第3世代兵装のBT兵器を第2世代機に搭載できるように機能を制限し構造を改変したもの。分類は沃素化学レーザー。

出力は安定しているが、BT兵器より遥かに低いためISの装甲

を破る程の威力はない。主な使用法は銃弾やミサイルの迎撃。
ＩＳ機体とレーザーユニットの連結にはナノフィラメントを束ねたものが使用されており、材質によってはそのワイヤーによる切断も可能。
レーザー射程は１０メートル。ワイヤーの伸長可能範囲は２０メートル。
国籍コード認証によるフルオート迎撃ではなく操縦者が迎撃、非迎撃の選別作業をしなければならない。これはいかなる状況においても周囲に存在するＩＳとの迅速な連携を可能とするため。

塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）
展開すると左右の下腕部に1対の砲が現れる。内容は右が着弾と同時に金属片を撒き散らす榴弾砲、左が発射後すぐに液体火薬が燃え上がる炎弾砲。
左肩から背部にかけて展開されるタンク内の液体火薬を全て撒き散らすことも可能。その際は着火していない。液体火薬散布から着火のコンボはＩＳに対しての効力は高くないが、シールドエネルギーを持続的に削ることができる。対ＩＳ戦では目くらましが主。

近接用ブレード・裂震（フレクエンシー）
なんの変哲もない何でも切れる超振動ナイフ。切れ味はいい。出典はコミック『ＡＲＭＳ』登場の高速機動隊の基本装備。高機動用追加パッケージと同時にインストールされる予定。
見て下さい、つぶれやすいトマトがスパスパ切れます！　……ジャパネットたの〇たでは売っていません。

高機動用追加パッケージ
ヴェンギルガルムハント（翼狼狩り）
キャノンボール・ファストにて登場予定。

背部に追加される3対の抽象化された翼型スラスター。
容量は討鬼の鋼杭、白狼の咆号とほぼ同じ。スラスターであると同時に後方に小型爆弾を振りまく兵装。その爆風も利用してさらに加速する。
爆弾の量は秒間2つの頻度で約5分間放出し続けることが出来る。
上段1対の翼が大出力スラスターであり下段2対はサブ。爆風を推進力に転換するのもこの翼。
下段2対の翼は非固定浮遊部位のため自由自在に動き機動性に優れる。爆弾を保管しているのもこのユニット。
基本的に、これを展開する時は装甲を軽くするため簡易展開状態になる。

総量子化可能領域を１００とした場合の各兵総の使用領域（降順

白狼の咆号（ウルフズロアー）　２５
討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）　２５
ヴェンギルガルムハント（翼狼狩り）　２０
妖精の加護（フェアリーダンス）　１５
塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）　１０
近接用ブレード・裂震（フレクエンシー）　５

※　ヴェンギルガルムハント（翼狼狩り）と近接用ブレード・裂震（フレクエンシー）は初期には装備されていないため２５％の空き容量がある。それまではガーデン・カーテンなどが装備されている。

容量が足りるのならばラファール・リヴァイヴ・カスタム?と一部装備（ガーデンカーテン、サタデイ・オブ・レインなど）の共有が可能。貸与とは別。　オンブル・ループの装備をラファール・リヴァイヴ・カスタム?が使う場合も同様。

4. Le long et d?sire ardemment en p

「長い長い初日」

というか、前話が1日でユニーク900とかでした。
さすが二次創作、爆発力が違うぜ

これで本編はいってからは微妙だったりしたら悲しいね！（何

4. Le long et d?sire ardemment en p

「あー、寒っ」

2月中旬、日本の土地で肩を抱きながら歩く私は目立ちまくりです。いえ、常軌を逸した奇態を曝してるとかではなく容姿の問題からです。金髪なんて珍しくないのに……日本人のこういうところは直すべきですよね。

というかカンニング防止策で試験二日前まで受験会場を通知しないとか、日本人真面目すぎません？　私が日本人だった頃はカンニングした人もニュースとネットで叩かれてお終いでしたよ。

それに、この多目的ホールですか？　どこの勘違いさんが設計したのか知らないですけど構造が不親切すぎます。

「うん、受験会場間違えるとか一夏どんだけだよ！　って思ってましたけど、これは仕方ないですね」

インカの古代都市は迷路状に家を建てていくことで敵対勢力からの侵略に備えていたらしいですが……この建物はだれに襲われる気なんでしょうか。

まぁ、私が迷うことはもうないのでいいですけど。

え、その根拠ですか？

「えーと……あれ？　これ、どうやって2階に行くんだ？」

なんて呟いている織斑一夏を発見したからですよ。ついて行けば問題無くＩＳ学園の受験会場に到着することは間違いないです。

あ、暇つぶしにいいこと思いつきました。確か携帯の録音モードが……ありました。これで、

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

録音完了！　そして残念不正解！　そしてそして道案内ありがとうございました。頃合いを見てこれを本人に聞かせてみよう。

織斑一夏に数歩遅れて部屋に入ると、それはもうぞんざいな扱いで通されました。これでもフランスの代表候補生の１人なんですけど……

というか、この女、どう見ても男の織斑一夏を通した時点で怪しすぎます。篠ノ之束の手がこんなところまで。

そして、男がＩＳを動かす世紀の瞬間を目撃しました。

いや、本当に動いてますね。って、なんで大したリアクションも無しに実技試験会場に行っちゃうのんですか！？　頭の構造が理解できません……だって藍越学園の試験じゃないのはもう分かってますよね？

「……で、山田先生の突進を避けて合格……と」

というか動かせれば合格なんでしたっけ？　合格が分かってる試験とか、やる気でないですね。しかも山田先生は乗り慣れているとはいえラファール・リヴァイヴ……まぁあれもいじってあるみたいだけど、カゲロウと比べたら役不足感が拭えません。というか専用機持ちは試験パスでいいじゃないですか。意味分かりません。

「えーと、じゃあ次の、不破アリサさん？」

「はい」

じゃあ……あぁ、これ倒しちゃうと主席になっちゃうんでしたっ

け？　確かセシリアだけが試験官を倒したから主席だった、とか言ってましたね。

後々の面倒は避けたいですし……無駄弾も撃ちたくないので格闘だけで適当に負けようかな。不破圓明流を使わなければ負けることにも抵抗ないですし。確かエネルギー切れで負けでしたっけ？　織斑一夏が避けただけで勝利扱いされたことを見ると……先生に膝を付けさせなければ勝利しないで済むみたいです。

「よろしくお願いします」

「こ、ここ、こちらこそよろしくお願いしましゅ！」

「「……」」

あちゃー、な空気が流れました。というか山田先生を試験官にしたの誰でしょう？　逆立ちしても向いてないと思います。

まぁ……嵐才流がＩＳでも有効なのか試したいですし、軽く動きますか。今まで母様（ママ）の手前、不破圓明流以外使えませんでしたから。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）……確かに遠距離からの接近には有効ですが、格好の的になっちゃいますよ」

知ってます。ＩＳじゃなくて母様（ママ）との組み手での経験からですが。

「でも、先生？　我慢すれば何とかなるんですよ。それと、」

飛来する銃弾をノーガードで受け止めながら先生に接近。残り数メートルまで近付いてからの再加速です。上手く負けるにはこれしかないです。

「早いところ、撃つのやめた方がいいですよ？」

「え？　って近い……！？」

体勢を低くして肩口からタックル。うん、もう9割のシールドエネルギーを削ってくれてます。反撃1、2回で私の負けでしょう。

「ただじゃ負けませんけど、ね！」

さらに一歩踏み込んで腹部に跳び膝蹴り、そのまま膝を使って空中に浮き上がらせてからのソバット。PIC（パッシヴ・イナーシャル・キャンセラー）が乱れて落ちてきた山田先生の機体にさらに右ストレート。そして肘を曲げて接近してのショートエルボー……が当たる前に試合終了のブザーが響きました。見れば胸部の装甲に山田先生のブレードが突き立ってます。

最初から負ける気ではありましたが、いつ展開したのか気づきませんでした。試験官に選ばれるだけはあったんですね。

「最初の射撃がなければ負けていました……うーん、セシリア・オルコットさんの時よりエネルギー削られちゃってますね」

「いけるかな、思ったんですけどね」

当然、本当はそんなこと考えてないですよ？　あんな特攻で勝てるほど、元候補生は甘くないですから。

嵐才流の特徴の1つの高速戦闘法・嵐打がISでも有効だってことが分かったので良しとしましょう。……ただ足が不格好に長いので調子が狂います。

「んー、どちらを主席にするか迷いますねー」

「主席にならないために負けたのに！？」

あ……

山田先生のメガネがキラリと光りました。

「やっぱりおかしいと思ったんですよー。専用機なのに兵装さえ使わないで近接戦闘に持ち込むなんて。でも、合格基準は満たしてますし……不破さんは主席になりたくないようなので次席ということにしておきましょう」

「ありがとうございます」

話が通じる人でよかったです。セシリアが主席じゃなかったら一夏との試合フラグが折れるかもしれませんし。

「それにしても、不破さんのＩＳはそれで全展開ですか？」

「はい。どこかおかしいですか？」

「いえ……露出が多くて可愛いなって思っただけです」

……可愛い、ですか。ＩＳ学園にくる前に、とある事情からカラーリングを白から黒一色にしたので大人っぽいって言われたかったのですが……背、ちっちゃいですし無理ですよね。

というか実はこの時点での格付けなんて全く意味ないですよねー。ちょっとすれば鳳鈴音が、そのあとシャルロットとラウラ・ボーデヴィッヒと専用機組が転校してきますし……あ、セシリアの主席自慢も録音しようっと。

「不破さん。次は本気で戦いましょうね」

山田先生って戦闘狂（バトルマニア）だったんですか！？

◇

と、そんなこんなで初日のホームルームです。自己紹介とか恥ずかしいから苦手なんですよね。趣味とかもないので面白くできないですし。というのは全部建前で……酷い人見知りなんですよ、私。

「えーっと。不破アリサです。えっと、その、あの……あんまり見ないで下さい……」

もう、なに言ってるんでしょうかね、私は？　まるで自過剰女じゃないですか……でも３０人くらいに注視されるなんて慣れてないんですよ。フランスでは少人数制とかでクラスメイトが１０人だけでしたし。

「不破さんってハーフなの？」
「そうですけど、なにか？」
「ううん……それだけ」

なので、席に着いてから話しかけてくれた女の子にも不愛想な返事しかできませんでした。人見知り、直さないとまずいですね。

なんちゃってでもピンクがかった金髪は珍しいのでかなり視線を感じますね。しかめっ面になっちゃうのは仕方ないんです。

「さぁ、ホームルームはお終いだ。ＩＳ基礎理論始めるぞ。オルコットと不破は退屈だろうが寝たら許さん」
「あら、そんなことしませんわ。しかめっ面をしている不破さんは文句がありそうですけど」
「この顔は生まれつきです」

セシリアが私をちらりと見て笑いました。まだ、英仏での共同ＩＳ訓練の時のことを根に持ってるんですかね？

あぁ、セシリアと会うのも久しぶりですね。フランスにはＢＴ兵器の資料が少なかったので、親父（パパ）が個人的なつき合いのあったイギリスのＩＳ研究所にたまに遊びに行っていたんですよね。それでセシリアと知り合って、彼女は上下をはっきりさせたい性格ですから

？　何度か模擬戦闘をしたんです。戦績はだいたい互角だったと思います。

　多分セシリアが怒ってるのは私が1回多く勝ってる状況で模擬戦闘をするのを止めたからでしょう。機体的にBT兵器は苦手なんで遠慮したいんですよね。もちろん勝ち越したのでやめました。勝ち逃げ万歳です。

　セシリア自体はISの兵器としての一面を認めてくれたので嫌いじゃないんですけどね。やっぱりスポーツカー扱いの現状ではISを兵器として見ないのも仕方ないのかもしれませんが。

　それでも軍に配備されていたりするんですから、やっぱり兵器だと思うんですけどね。

「これで、授業は終わりだ。今日一日頑張るように」

　織斑先生の一言に女子生徒の方々が、はぁーい♪　と元気に答えます。うーん、どこがいいんでしょうか？　シャルロットの方がよっぽど魅力的だと思うのですが……最初の訓練以来一度も会えていませんけど。自分から距離を置いたとはいえ辛かったです。

　というか、その弟の織斑一夏も廊下いっぱいに見物客が押し寄せていますし。ご苦労様です。あ、ポニーテールの女の子が果敢にも話しかけましたね。

「アリサさん、久しぶりですわね」
「あー、そーですね」

　私には早速セシリアが絡んできました。

「なんでそんなに投げやりな反応なんですの!?　……まぁいいです。主席はわたくしですのでこれで戦績は同点ですわよ」

やっぱり気にしてたんだ。今8戦4奨4敗くらいですか？

「26戦13勝13敗ですわ！　どれだけわたくしとの試合に興味がなかったんですの！？」

そんなに戦ってたっけ？　……というかセシリアの声に反応して、いなくなった織斑一夏に代わる標的を探してたクラスメイトがこっち見てるじゃないですか。しかも13敗って言うけど、その半分くらいはギャラリーが大勢いて私がまともに戦えなかったからじゃないですか。

「アリサさん、そんな顔をしていると眉間が凝りますわよ」

「誰のせいですか……」

「未だに人見知りは直っていないのですわね……涙目になっていてよ？」

「なってないもん」

こっち見るな！　という風に周りを見たら目を逸らされました。そんなに怖い顔してるのでしょうか？

「しています」

「だからセシィのせいです！」

「ふふ、そのあだ名も懐かしいですわ」

つい言っちゃっただけですよ！　もう……目立ちたくないのに。周りからヒソヒソ話されてるじゃないですか！

キーンコーンカーンコーン。……パァンッ！

ありがとうございます織斑一夏。今は叩かれているあなただけが

私の癒しです。

◇

「――であるからして、ＩＳな基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せら――」

隣で唸っている織斑一夏……もう織斑君でいいですね。彼を見て癒される。いやーこんな当たり前のことがなんで分からないんですかねー。

まぁ、私には彼以外のノートに必死に書いている女子生徒たちの方が心配ですが。

男性であるが故にＩＳに興味を向ける意義がなかった織斑君と違って、彼女達はＩＳがどれだけの力を持ったものか分かっているはずなのに。どうして今更この程度のことでノートをとるんでしょう？　彼女達は罰しなければなにが起きるのか理解していないに違いありません。

『また、険しい顔になっていますわよ』

『だって……』

プライベート・チャンネルを使用してセシリアが話しかけてくる。これも校則違反のはずなんだけど……

『彼女たちもＩＳに乗るようになれば実感するでしょう。今はまだ仕方ないですわ』

『そうでしょうかね……』

『それに、アリサさん？　少しは柔らかい態度をとらないと疎まれてしまいますわよ？』

人と同調できないものは爪弾きにされる。そんなことは分かっていますけど、だからって伝えなければいけないことを伝えないことが許されるわけじゃないと思うんです。というか私は疎外されている、というより私から中に入っていけないだけです。自分の責任です。

でも孤立してしまえば私の意見に耳を傾けてくれる人もいなくなってしまいますし……今は様子見の段階なんですかね。

「――はなにかわかりますか、不破さん……えーと、不破さん？退屈だとは思いますが授業に集中してくれないと先生困っちゃいます」

どうやら考えに没頭しすぎていたようですね。というかセシリア？　しっかりなさい、みたいな反応してますけどね、これあなたのせいでもありますよ？

……とりあえず、答えなきゃ。

「こほん……えっと、特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする、ですか？」

「え！？　あ、はい。正解です……よく覚えてますねー」

もらってよかった分割思考。普段は使ってないんですけど、それでも無意識の間に聞き取った情報とかを処理できてるみたいなんですよね。平然と答えた私にセシリアがビックリしていたのでフフンと笑いかけておきました。

というか、これくらいならみんな覚えてるんじゃないですか？読んでおけって渡された冊子に書いてありましたし。それに、自分

たちに一番関係する項目なんですから基礎理論とかなんかよりよほど重要じゃないですか。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

シーン……

いや、だから聞くまでもなくいるわけないじゃないですか。というか、必読って書いてありましたよね。

「あ、そーだ……」

織斑先生にどつかれている織斑君を見て妙案を思い付きました。うん、私天才かもしれません。

「織斑先生」

「なんだ、不破？　まさかお前が織斑の面倒を見るとでも言うのか？」

うわー、自分の弟の不甲斐なさに若干キレてらっしゃいます。おぉ怖い。ですがうちの母様（ママ）はもっと怖いので平気です。

「その、まさかです」

ニヤリと笑いながらの宣言。思えば、今日学園に来てから初めて笑ったかもしれません。

『アリサさんっ！？　今、その男に手を出せばこの学園の全員を敵に回しますわよ！？』

あ、そっか。なら……うん、こうしよう。

「でも、1人じゃ限界があるので有志の人にも協力してもらいますけど」

セシリアの忠告を踏まえ、周りの女生徒たちも巻き込めるようにする。私に向けられていた裏切り者を見るような視線が、救世主を見るようなものに変わりましたがどうでもいいです。というか、また目立っちゃいました……

まぁ、私が織斑君に教えたいのはＩＳは兵器であるっていう一点ですから、教える人数が増えるのはさほど問題ではありません。多分、彼がその意見に共感してくれれば、他の生徒もひきずられるのではないでしょうか。

「……別にクラス内での交友について口出しする気はない」

織斑先生のその言葉を聞いた瞬間、クラスのほぼ全員が黄色い歓声を上げました。盛り上がっていないのは当の本人である織斑君と私、あとセシリアくらいです。

なんていうか、皆さん自分の欲望に素直ですね。

二時間目が終わって休み時間。

セシリアが織斑君に絡んでいましたが無視……しようと思っていたのに、

「極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら」

……なんて言葉が聞こえちゃったら無視できません。

「ねぇ、セシぃ？　どの方角の島国が未開の土地だって言いました？　フランスの北の島国ですか？　ちょっと聞き逃しちゃいました」
「極東の、この日本という……アリサ、さん？」

ギギギ、とセシリアが青い顔で振り返ります。

「えぇ、アリサさんです」
「……怒って、いませんよね？」
「さすが、下味もつけないで肉を焼く大雑把な国の人は違いますねー。適当なもの食べ過ぎて、相手が怒っているのかどうかの判断も自分ではできませんか？」

イギリス人は料理をバカにするに限ります。いえ、当然おいしい料理はありますよ？　ハズレのレストランが多いだけなんです。

「なんですって……アリサさん、あなた言っては、」
「セシリアー？　私の特技、知ってるよね？　あと、この学校、ＩＳ以外の校則は割と緩くてね。喧嘩くらいなら怒られるだけなんだよ？」
「ひぃっ！　……あ、アリサさん、落ち着いてください。日本人の美点である敬語が崩れていてよ？」

震えながら後ずさりをするセシリア。一度、セシリアがＩＳじゃなくて生身での格闘で挑んできたときに返り討ちにしたんですよね……トラウマ確実の業で。えぇ、最恐の不破圓明流の人間ジェットコースターで。

「ふーん……日本人はよく謝りすぎだって言われますけど……むしろ西洋人は、」
「ごめんなさい！」

おぉ、９０度謝罪……

「まぁ、いいですけど。相手をバカにするときに国のことを言うのは危険ですよ」

特に日本で日本のことをバカにするとか、リスクばかり高まるだけです。

「ご忠告傷み入りますわ……皆さんもごめんなさい」

私だけじゃなくて周りにいた日本人の女生徒にも謝るセシリア。偉いじゃないですか。

……それでも織斑君には謝らない辺り、らしいですけど。

「あぁ、あと私は英国式のステーキもフィッシュアンドチップスも好きですよ？」

大雑把ではありますが、食材の味が活きますからね。

じゃ、席に戻ろうかな。セシリアもぼーっとしてないで行きますよ。

「えっと、次の授業は……」

ザザザッ！

振り返った瞬間、人混みが割れて私の席までの道が出来ました。

皆さん少し顔が青いですよ？　大丈夫ですか？　というか見ないでくださいよ。私が転んだらどうするんですか。

「よし、では実践で使用する各種装備の特性を説明する……前に、

再来週のクラス対抗戦にでる代表者を決めないとな」

クラス代表者……あーあれですか。生徒会の会議とかにも出なきゃいけないっていう。目立ちそうな役割ですからさっさと織斑君にしちゃってください。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「お、俺!?」

お前ですよ。抵抗せずにちゃっちゃと……あ、私も織斑君が良いと思いますー。

「待って下さい！　納得がいきませんわ！　そのような選出は認められません！　大体――」

ですよねー。まぁ私に被害がなければ……

「実力から行けばわたくし、もしくはアリサさんが代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由でそこの冴えない猿にされては困ります！」

うん、なんで私の名前を出したんですか……別に誰が代表でもいいから私を目立たせるようなことだけはやめて下さい！

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

カチン。

「イギリスだって、」

「織斑君は黙って下さい。セシぃ、日本が文化として後進的な国ならイギリス人は脳の発達という意味で後進的みたいですね」

キレた織斑君に被せるようにして一気に言い放ちました。言い放っちゃいました……目立ちたくないのに。その途端、セシリアが可哀想なくらいに慌て始めましたが、今回はさっきより熱いお灸を据えないといけませんよね。

「アリサさん、いまのは」

「文句ですか？　ほんの数分前の忠告も省みることができないって、自分で証明したんですから文句なんてあるわけ無いですよね？」

「その……」

「さっきの謝罪もただのポーズですか？　それだとセシぃとの付き合い方も考え直す必要が、」

「アリちゃんのばか！　きちく！　大嫌いですわ！」

「……あれ？」

教室から出ていっちゃいました。

……アリちゃんとか久しぶりに言われちゃいました。じゃなくて、もしかしなくても、また、やりすぎました？

周りを見渡すと、目を逸らされます。いえ、見ないで下さいとは言いましたがこれはこれで辛いです。というか日本人のために怒ったのに非難されるなんて……いえ、見るからにプライドが高いセシリアを泣かせたわけですから当然かもしれません。

「とりあえずちびっこいの、座れ」

「ちびじゃ……なんでもないです」

国だけじゃなくて人の身体的な特徴も馬鹿にしたらいけないんですよ？　好きで端数切り上げ１５０センチな訳じゃないんですから

……

「とりあえず、候補者は他薦で織斑一夏、自薦でセシリア・オルコット、他薦で不破アリサ、だな。どうやって決めようか……」

あぁ！　しっかり数に入れられてるし！　というか織斑君にセシリアフラグを立てさせなきゃいけませんから方法は決まってます。

「試合で勝ち残った人というのが順当だと思います」

「一番強いのがクラス代表者、か。いいだろう。試合は一週間後の月曜日と火曜日の放課後だ。組み合わせは、」

「先にセシリアと私が戦います。互いに万全でないと勝負が決まってしまうので」

「そうだな。とりあえず関係ない奴らもこの専用機持ち2人の試合を見て技術を盗め」

だから、私が注目されるようなこと言わないで下さいよ！　というか専用機持ちの代表候補生ってこと隠してたのにセシリアのせいでめちゃくちゃだよ……放課後だから他のクラスの人も来るんだろうな。私、戦えないかもしれません。

「ところで俺はどれくらいハンデをつければいいんだ？」

空気が、死にました。

原作では爆笑の場面でしたが……セシリアとの掛け合いがなかったから売り言葉に買い言葉じゃなくて、ただの勘違い君みたいになってます。

……え、フォローも私なの？　なんで言ってやってくれみたいな目で私を見るの？　こういうのは普通教師である織斑先生が、ってなんで先生まで私を見るんですかぁ！？

「……お、織斑君、本気ですか？　あの、こう言ってはなんですけど織斑君はただ唯一男でＩＳが使えるだけなんですよ？」

切なすぎて私が泣きそうです。というかなんかもうごめんなさい。恨んでくれてもいいです。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「……ごめんなさい。というか私達がハンデ付けましょうか？」

うん、トドメをさしてるのはわかるけど今ならまだなにも知らなかったで済みますからね。

「いや、いい」

「なら、せいぜい足掻いて下さい。あぁ、セシリアが勝つように祈っておいた方がいいですよ。あれで、しっかり手加減してあげられる子ですからね。私と違って。」

◇

「もう、なんで私がこんなに苦労しないといけないんですか！」

他の住人のいない寮の部屋でつい叫んでしまいます。というか、２人部屋に１人で暮らすってのも寂しいですね……まぁ、知らない人といるのも厳しいんですけど。初日からクラスの皆さんに怖がられてしまいましたし……はぁ。

コンコン。

ため息をついていると扉からノックの音。誰でしょう？

「アリサさん、開けて下さらない？」
「セシリア？　ちょっと待ってね」

考えてみれば私の部屋を訪ねる人なんてセシリアくらいしかいませんね。
扉をあけると紅茶のいい匂いが漂ってきました。

「実家の方から持ってきましたの。味は信用していいですわよ？」
「セシぃ……」
「な、なんで泣きいますの？」
「だって、学校では泣かせちゃったのに……ありがとう」

実は、セシリアを泣かせてからは本当に不安だったんです。知っている人が誰もいない中で唯一の友人は泣かせてしまうし、一年間付き合うことになるクラスメイトに怖がられますし……

「誰かが今のアリサさんをみたら驚くでしょうね」
「ヤですよ。みえっぱりってバカにされます」
「プライドばかり高いと疲れてしまいますわ」

そうかもしれない。
でも、

「セシぃには言われたくないです」
「……この子は全く……」

4. Le long et d?sire ardemment en p

オルコットさんマジいい人すぎる予感しかしない。

一夏が箒が同居しているなのにオリ主が1人で部屋を使っているのはおかしいという指摘があったので、

「部屋は空いているけど一夏と箒をくっつけたい束さんの策略」

ということにしました（

5. Est-ce que le charme du hérros a

「主人公の魅力は不破アリサにフラグを立てるのか？」

さぁ、どうする織斑一夏！？

※　タイトルとはあんまり関係ありません（

5. Est-ce que le charme du hasard

「はぁ……学校、行きたくないな」

入学式の翌日。1日目で既にあんなハードだったのに2日目があるなんて……身体になにかしらの悪影響があると思います。大体、ISの操縦が出来ないんじゃ意味ないです。フィールド開放して授業中に自主訓練させて下さいよー。

大抵、私は目が覚めてから1時間くらいはそんな意味のないことを考えながらベッドでぬくぬくしています。んー、そろそろシャワー浴びないと遅刻しちゃいますね。

廊下から食堂へ向かう生徒たちの声も聞こえてますし、朝食は普段から抜いていますけど、流石にそろそろ起きた方がいいでしょう。

……はぁ、学校行きたくないなぁ。

◇

「お、おはよう、ございます」

シン……

朝の挨拶を口にしつつ教室に入りましたが皆さん無言です。昨日あんなに悪目立ちしちゃいましたからね。一瞬、私を見てからはひたすらに目を逸らされます。やっぱ帰ろうかな。

「お、おはよ……？」

そんなことを思いつつも席に着くと、昨日私の自己紹介の後で話しかけてきた女の子が挨拶してくれました。やっぱり真面目に授業

を受けましょう。2日目でサボるとこうして話かけてくれる子もいなくなるでしょうから。

女の子は一松さんという苗字らしいです。挨拶してくれた、ということは嫌われてはいないのでしょう。

「昨日、オルコットさんと話してたけど仲いいの？」

「まぁ、そうですね」

「そっかー、やっぱりＩＳ関係で仲良くなったのかな？」

「はい、何度かイギリスに行ったときに」

「へぇー……オルコットさんが認めてるんだし不破さんもやっぱり強いの？」

「えぇ、まぁ、それなりです」

なんていうか、私、ダメダメですね。せっかく話しかけてもらっているのに話が広げられるような返しができません。一松さんもちょっと困り顔です。

と、恐縮している間に一松さんの背後に2人の女生徒が。

「イッチー！　おはよ！　うーん、今日もましゅまろ幸せー。あ、不破さんもおはよ！」

「きゃぁ！？　ってふたちゃん！　……もう、せっかく不破さんと話してたのに」

おぉ、一松さん、意外と巨乳さんみたいです。ふたちゃんこと二木さんに揉まれてふよふよと変幻自在です。ご両人はそういう関係だったんですね。

うーん、私もいつかシャルロットと……

「二木ぃ、一松ぅ、不破さんに勘違いされてるよ？」

「ひゃん！　ふぁ、ふたちゃ、そこ先っぽ、直接だめ……って不破

さん誤解だよ！　私そんな同性愛者とかじゃ」

2人に注意した子は三好さんでしたっけ。一松、二木、三好で一二三ですね。

一松さんは頬を染めながら喘いでいたのに否定はしっかりしました。大丈夫ですよ？　私にそういった偏見はないですから。

でもイッチーさん、えっちぃのはダメだと思います。というか学校で下着の内側まで攻められるとか……イロイロすごい。見てるだけで顔が火照ります。

「だから、好きで揉まれてるんじゃないよー！」

「あー！　イッチーひどい！　私がここまで育て上げたのに！」

「えーと……一松さんがネコで二木さんがタチって言うんでしたっけ？」

確か、百合業界では受け攻めのことをそう言うんでしたよね？

「あれぇ、不破ちゃんも興味あるのかなぁ？」

ない……いえ、シャルロットのことを考えると後学のために、という考え方もありますが。なんでしょう。私は冗談だったのに二木さんは今にも舌なめずりしそうでって……

「さ、触ったら、怒りますよ？」

「きゃー、怖い顔しないでー。それに私はイッチー以外に興味ないから」

「私は百合に興味ないのにー！」

本気で後ずさりすると二木と一松さんがノロケ始めました。朝からお熱いですねー。

「おっと、織斑君だ」

気の強そうな女の子を伴って現れた織斑君。それに気付いた二木さんがパッと一松さんから離れる。私の目の前ではオープンいちゃラブだったのに転校生の織斑君だと……やはり男性の目の前では抵抗があるのでしょうか？

「男なんかにイッチーの胸は見せらんないからっ」
「まだ誰にも見せてないよっ！？」

あはっと明るく笑う二木さん。いい独占欲です。
この百合カップル、外見がいいので外野の男が見たら勿体無いって思うんでしょうね。

「だからカップルじゃないのにー！」
「一松ぅ、落ち着いたら？　それにしても不破さんは手強いわぁ」

へ？　一体何を指して手強いのでしょう？　特に彼女達と何かを競っているわけではないのですが。

「うーん、昨日は不破さん1日中怖い顔してたから、笑ってるところみたいなーって思って……あぁ、これはクラスの総意だよ？」

二木さんが一松さんの言葉に付け足しましたが、じゃあさっきのいちゃラブも演技なのでしょうか。そうなると将来シャルロットとあぁなった時の理解者はいないことに……
え？　というか私の笑顔がみたいってなんですか？　しかもクラスの総意って！？　まだ目立つの！？

「あ、演技に決まってるよ！」
「ううん、マジだよ」

よかった、マジなんですね。目立つのは困りますけどこの二人に免じて少しは我慢しましょう。
あと一松さんはそんなに恥ずかしがらないでもいいですよ？　さっきも言ったとおり偏見はないですから。

「よーし、お前ら席に着け」

◇

授業が始まる直前、

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

なんて織斑先生の発言で教室中が沸きました。
あぁ、あのポニーテールが篠ノ之箒だったんですねー。
授業中なのに女生徒が何人も彼女のもとに集まっていきます。こいつら授業をなんだと思ってやがるんでしょうか。ＩＳのことをしっかり知っておかないと怪我しますよ？
まぁ、昨日からなんとなく私に集まっていた視線のほとんどが彼女に移ったのは僥倖ですが。
というか彼女にＩＳの操縦を聞こうとしてる人もいますけど、だったら授業を聞きましょうよ。
というか博士の妹ってだけでＩＳに詳しい理由にはならないじゃないですか！　……そう考えてみると篠ノ之さんと私は境遇が似ていますね。身内が常識はずれな研究者ってあたり。

「あの人は関係ない！」

我慢の限界が訪れた篠ノ之さんが声を張り上げる。

えぇ、その気持ち私もわかりますよー？　自分は関係ないのに中心人物みたいに扱われるのはヤですよね……ちょうどクラスメイトの皆さんが恐る恐る私を見ているみたいに。

別に大声だしただけじゃ昨日みたいに怒りませんよ！　昨日はたまたま緊張してつい怒っちゃっただけなんですから……だから見ないで下さいよぉ。

ここまで見つめらると恥ずかしいじゃないですか。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って篠ノ之さんはそっぽを向いてしまいました。

何人かが彼女の態度を不快に感じたようですが……他人の事情に土足で踏み込んだことを反省もせずに、勝手に怒るなんて何様なんでしょうかね？　頭にきます。

「さて、授業を始めるぞ。織斑、分からないことがあったら隣に聞け。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

織斑先生、織斑君が私を見てきます！　……昨日の発言の責任をとれと言うことですか。女子の皆さん、好きでやらされているんじゃないんですから、そう怖い目で見ないで下さいな。分割思考のおかげで冷静ですけど、内心は震えてるんですからね？　がくがくぷるぷるなんですからね！？

「わ、分からないことがあったら、聞いて下さい。分からないことがあったら」
「お、おう」

大事なことなので2回言っておきました。
できれば聞かないで下さいね？　いちいち注目されるのは居心地が悪いですから。

「あ……」
「どうかしました？」
「いや……悪いけど消しゴム貸してくれない？」

まぁいいですけど……次は私じゃなくて逆隣の子に借りて下さいよ。
なんで周りの皆さんは約得だ抜け駆けだみたいな顔で見るんですか！

授業が終わったすぐセシリアが織斑君に絡みに来ました。
こうやって注目を集めてくれるのは私としてはありがたいんですけど……織斑君の席、私の隣なんですよね。あんまり意味がないです。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

胸を張って相手を威圧するセシリアお得意のポーズです。対する織斑君はなんていうか、どうでもいいけど復習の邪魔しないでくれ、って感じです。
あ、それ、私からもお願いします。自主的に勉強してくれれば私

の負担も減りますから。

「この私、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

さーて、私はお弁当を出しますか……今日のはけっこう自信作なんですよねー。

というかセシリアもよく私の隣で専用機持ちだってこと自慢できますね。ここで私も持ってるよ、とか言われたら恥かくんじゃないですか？

まぁそれはおいといてー、まずは里芋の煮っ転がしを……

「それを一般的に馬鹿にしているというのでしょう！」

ババン！

「ひゃあ！？　……あ、続けて下さい」

セシリアが両手を机に叩きつけて怒鳴った拍子に私のお箸がつるりと滑って里芋が落下しました。まぁ、運良くお弁当箱の中に戻っただけなのでいいでしょう。

気を取り直して……

「そこは重要ではないでしょう！？」

ババン！

「わぁ！？　……ぁ」

再び机を叩いて怒鳴るセシリア。私の里芋も落ちていきます。お弁当箱のふたで受け止めようと試みましたが……

ベチャッ！　という音とともに不時着しました。はい、この間０．８秒。

不時着先も問題でした。私の里芋は先に落ちていたらしいノートにのっかっています。ノートが開かれた状態で落ちていたので誰の物かは分かりませんが、位置関係的に織斑君のでしょう。

しかも、ちょうど私が昨日の放課後に説明したところのノートでした。うん、ノートに書いた意味なくなりましたね。

なんとか解読してみると、私を納得させるためかＩＳの兵器以外での利用法の羅列と、その真ん中に［ＩＳ≠兵器］と色付きで書かれていますから間違いないでしょう。

まぁ、その利用法は里芋の煮汁で読めなくなっていますが。

うーん、落ちた里芋、どうしよう。

「不破さん、里芋食べるぞ？」

「え？　あ、どうぞ。まだあるので」

「うん、美味い……腹減ってきたな。箒……篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」

落ちた里芋を本当に食べました。きゃー織斑君ワイルドー……もちろん悪い意味で。でもうまいと言ってくれたのは、まぁ、ありがとうございました？

織斑君は里芋を飲み込んだらパッとノートを拾い上げて、汚れてしまったのも気にもせずに歩き去って行きました。

こ、こーやってヒロインをおとしたんですね。なるほどなるほど。

「あの、アリサさん……？」

「セシぃ……お昼時は静かに！　ちょっと用事でしたから行くね。お弁当、ふたしといて」

「あ、ちょっと!?」

ノートに気になることが書いてあったので、織斑君を問い正してきます。

さっきの口振りだと食堂に向かったはずなので……

「見つけた!　……って、えぇ!?」

追いついて声をかけようとした瞬間、織斑君の身体が飛びました。しかも、ほぼ真後ろまで来ていた私を巻き込むように。

私に気付いた織斑君は私との衝突を避けようと体を無理に捻って……て、ちょっと!

「それじゃ、背骨が……もぉ!」

目立ちたくないですけど人命には代えられません。織斑君の身体を受け止めようと手を伸ばし、

ドサッ!

……ええ、やっぱり、男の子は重いですね。しかもそこに投げられた勢いが加わったら鍛えてる私でも受け止められませんよ!

織斑君の下敷きになっているので、彼が立ちやすいように支えて立たせてから私も立ちます。

「あ、不破さん、大丈夫か!?　というかなんで、」

立ち上がったら織斑君が自分が悪いと本気で思っている態度で謝ってきました。学園唯一の男子を謝らせる私。すごく……目立ってます。

「慌てすぎですよ。私はどこも痛めてません。あと追いかけてきたのは織斑君に聞きたいことがあったからです」
「聞きたいこと？」
「さっきのノートに書いてあった［ＩＳ≠兵器、ＩＳ＝力］のことです……まぁ、それよりも大事な用件が今できましたけど」

目の前に立つ篠ノ之さんを睨みつける。睨み返されましたが、それがなんだと言うんでしょう。

「篠ノ之さん、でいいですよね？　一体何を考えているんですか？」
「……私に文句があるようだが、何のことだ？」
「もちろん過失致死未遂のことです」

苛々したような声で返事をしてきますが……まぁ、本当は分かっているけど認めたくないって感じでしょう。本当に分かっていないなら素人もいいところです。

「あなたが使った業は人を殺せる技術です。どうしてそれを織斑君に使ったんですか？」

あの業は相手を背中から叩きつけて背骨を折る業だ。相手の肘を固めて受け身をとれなくするのがその証拠。

「手加減はしていた……お前が庇わなくても怪我は、」
「しなかった、とでも言いたいんですか？　確かにあなたが思ったとおりに投げればせいぜい背中が痛む程度でしょうねー」
「だからそうだと、」
「でも、彼が空中で不自然に体勢を変えたら？　例えば、背後にいた私を避けるためにとか。あのままでしたら死にはしなくても一生

残る後遺症を背負っていたかもしれませんよ？」

「……」

「それに、あなたたちの後ろにいたのが私ではない、普通の女の子でしたら、その子も怪我していたでしょうね。そんなつもりはなかったことは分かっています。でも、力を振るうときはそういうことを考えるべきだと思いますよ？」

「あー不破さん、箒も悪気はなかったんだし、」

「無かったのが問題なんです。抜き身の刀を片手に繁華街を全力疾走したら通りすがりの人に刺さってしまいました。悪気はなかったんです……こんな言い訳が通りますか？」

実際、あの勢いで落ちていたら背骨にひびが入っていた可能性は十分ありました。しかも背骨は人体の中でも頸骨とならんでもっとも重要な神経が集まっている箇所。ひび程度、と思う人もいますが、それだけで体の一部が不随になったりもするんです。

しかも、背後にいた私がなんの対処もできなければ2人とも巻き込まれて、今以上の惨事になっていたことは想像に難くありません。

「おまえに武術の何が分かる！」

自分で目を逸らそうとしていた事実を突きつけられた篠ノ之さんが激昂します。武術の何がわかるって……

圓明流という業は、千年もの間、効率的な人体の破壊を研究してきた流派です。

嵐才流は破壊されることを前提に、攻撃するのに必要な部分だけを守る流派です。

「それを使う私が、分からないわけないじゃないですか」

そうでなければ、自分のリスクを回避するために彼を助けずに避けています。

「手加減しようがしまいが、武術は武道と違って相手を破壊する技術です。あなたにはその理解が足りない」

ＩＳにも通じることですがね。

力を手に入れた人には相応の義務が発生すると思うんです。

「黙っていればずけずけと……そこまで言うなら、」

「力比べでもしますか？　それなら文字通り死ぬ覚悟でかかってきて下さいね。馬鹿は死ねば治るらしいので」

幼なじみとのじゃれ合いに過分な力を振るっておいて、それを反省するどころかさらなる力で自らを正当化しようとする。

えぇ……気に入らなすぎて手加減もできそうにないです。

「ま、待てよ！　２人とも落ち着けって。不破さんだって俺を助けてくれたんだし、箒だって偶然ああなっただけなんだろ？　わざわざ喧嘩するほどのことでもないだろ」

気付かない内にいつでも掴みかかることができる距離にいた私たちの間に、体を滑り込ませるようにして織斑君が止めに入りました。私の方を向いて許してやってくれ、みたいな顔をしています。

なんというか……お人好しというか、お節介というか。気が抜けちゃいます。

「はぁ、私も大人げなかったですね。織斑君、さっきの話、今度でいいですから聞かせて下さい」

「あぁ、分かった。ありがとう」

何がありがとうですか。あなたからしてみれば、私が勝手に怒っていただけじゃないですか。

本当に調子が狂います。

しかも、また目立っちゃいましたし……しかも今回は廊下ですから全学年全クラスに危ないチビ新入生の話が伝わるでしょう。憂鬱です。

「お腹も減りましたし、私は教室に戻ります」

「……」

「あぁ、あとでな」

ふぅ……やっぱり、人付き合いは苦手ですね。

6. La voie navigable qui a ?t? forg?e

「偽造水路」

まぁ、象徴的な意味で。

タイトルが無理矢理？　そういうものです（

6. La voie navigable qui a ?t? forg?

そんなこんなで新しい友人一歩手前の女の子が少しだけ増え、私を恐れる人はもっと増えた第1週が終わり――

月曜日の放課後。セシリアとの決戦の日がやってきた。

（まぁ、勝てるわけ、無いんですけどね）

面白そうだと集まった観客は既に百人以上。その全ての視線が私とセシリアに向けられる。

それは私にとって恥ずかしい、というより恐ろしいに近いものです。

たかだか30人程度の教室でも縮こまってしまうのですから当たり前ですよね。

……この大一番で失敗したら私に向けられる周囲の目が大きく変わるでしょう。

怖い新入生からただの生意気な新入生に。そしてそんな烙印が捺されてしまえば、その先の下り坂は楽に想像できます。

現に私がフランスにいたときも……

「アリサさん？　震えていますわよ？」

「大丈夫、武者震い」

なんて言っても大丈夫じゃないのは誰から見ても明らかでしょう。

それが分かるくらい、自分が大勢の人間に見られることに恐怖しているのは分かっています。

そもそもの原因は小さいものだったんですが……なんでこうなっちゃったんでしょうねぇ。

近くでは織斑君が白式のフォーマットとフィッティング始めていました……この時点で私が勝とうと負けようとセシリアフラグの立ち方は変わってしまったわけですね。

「では、わたくしは向こう側のゲートへ行っていますわ」

「うん」

「……無理、しなくてもいいんですのよ？　私が巻き込んでしまったのですし」

気遣わしそうに私の顔を覗き込むセシリア。彼女らしくない申し訳なさそうな表情です。

「多分、平気」

根拠も自信もないですが、ここにきて退けるわけもないのでこう言うしかありません。

セシリアも仕方なく向こうのゲートへと行ってくれましたし……あとは私がどうにかしなければいけない問題です。

「不破、時間だ。準備しろ」

「はい。カゲロウ、きて」

お願い。

狼を模した漆黒の装甲。決して攻撃的なフォルムではないのに、どこか獰猛さを感じさせるＩＳを想像し……

◇

セシリアは珍しく自分の行動に後悔していた。

今まで自分が辿ってきた道筋に間違っていたことなどないと、自

信を持って言える行動を選んでながら今まできたが、震える友人を見れば結果的に間違っていたことを認めざるを得ない。

自分か彼女、どちらかがクラス代表に相応しいと本気で考えていた。それは今でも変わらない。

しかし、その主張がアリサを衆人環視の中で戦わせることになるとは夢にも思わなかった。

聞けば、この催しは半分彼女が決めたようなものだという。しかし、それは戦いで決める、という部分のみ。彼女自身、観客がいるとは思わなかったのだろう。

軽く見積もっても観客は数百人。

自分との関係性が確としていない群衆から見られることに酷く恐怖を覚えるアリサ。

その理由を聞いたことはないが、たかだか３０人程度のクラスメイトの中にいるだけで縮こまってしまう彼女のことだ。誰が見ているか分からない現状では、足が竦んで動かなくなるかもしれない。

それに、過去にアリサがイギリスを訪ねてきた際、イギリスの研究者たちの視線に狂乱した彼女の姿をセシリアはよく覚えている。

だから、歩いてきたアリサの異様な状態にも驚くことはなかった。

◇

「その格好は、なんのつもりですの？」

予想通り、セシリアは優しく、厳しい。

『ごめん、セシリア……やっぱダメでした』

あはは……ってここは笑うところです。

百、二百、三百、沢山。その視線の予感に恐怖した私にはＩＳをしっかりと展開することができませんでした。今、私の身体を覆っ

ているのはカゲロウの装甲の内側のみ。観客席からは服にしか見えない戦闘に相応しくないもの。

「まぁいいですわ。せっかくの可憐な装いなのですから……わたくしとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲（ワルツ）で踊るといいですわ」

決して優しい言葉をくれないのがセシリアの厳しさ、派手な演出で観客の視線をブルー・ティアーズに釘付けにしようとするのが優しさです。

『頑張って、できるだけ避けます』

今の私にはそうしてセシリアの引き立て役になることしかできませんから。

もはや、浮き上がることもできない私に、ブルー・ティアーズがスターライトｍｋ?を向け、放った。

「くぅっ……！」

発射から命中までの０．４秒。ハイパーセンサーとＩＳの性能だけに頼った――お世辞にも綺麗とは言えない機動でレーザーを避ける。

余波が私の髪を煽りますがそんなことは気にしていられない。今の装甲では保って２発。最悪、１発でもシールドエネルギーが尽きるかもしれない。

「そこっ！」

「っ！」

そんな有り様を見られてしまえば私を代表候補生として送り出し

たフランスの威信に関わる。
織斑一夏を観察するだけの役目。そして第3世代機を開発できないだけでなく、代表候補生も送り出せない弱小国家と思われないためのパフォーマンス。
シャルロットが転入し次第、代替わりになる予定だったとは言え外野はそんな事情を気にしないでしょう。フランスは人目が気になるという致命的な欠陥を持つ操縦者が候補生になってしまうような国と見なされてしまいます。

「これならどうです！？」
「はぁっ！」

そうなれば後から転入してくるシャルロットも居辛くなるでしょうし、そんな操縦者を送ったデュノア社のＩＳ開発許可が剥奪される可能性もあります。
だから私の有用性と、そして候補生としての腕を見せつけなければいけません。
見られるのではなく見せる。

（それを今できないんじゃ意味ないのに……！）

避ければ避けるほどセシリアの射撃は激しくなっていきますが、それでもまだ逃げ場は残されています。

「ねぇ、さっきから黒い方避けてるだけじゃない？」
「フランスの代表候補生とか聞いたけど……大したこと無いね」
「フランスのって、あぁ調子のってる新入生のことじゃない？」

ハイパーセンサーを通して聞こえてくる観客の無情な声。
見られている。

私の弱さが圧倒的な数の人間に。

「……他人の声を聞いてる余裕なんて無いはずですわよ」

「あっ！」

先のことを考えないままに必死で避け続けた結果、ブルー・ティアーズの目の前に転がり込んでいました。

「チェックメイト、ですわ」

◇

「うーん、変ですねぇ」

「どうした、山田先生」

「いえ、不破さんですよ。彼女、試験の時はセシリアさんに負けず劣らずの機動を見せたんですよ？」

「にも拘わらず、大した反撃もせずに逃げるだけ……」

「しかも、不破さんはＩＳをしっかりと展開できてはいないんですよ。あと、」

「あと？」

「彼女からは私と同じ戦闘狂（バトルマニア）の匂いがするんですよねー」

「そ……そうか」

一度（ひとたび）、戦いになればそれ以外のことを考えられなくなるような、ね。

◇

私の顔に突きつけられるレーザーライフル。この距離ならば確実に勝負が決まるでしょう。もう避けることも叶いませんから。

黒光りする銃口の奥には暗闇が広がるだけ。その中から何も見つけることはできません。いつでも撃てとばかりに目を閉じました。
案外、死というのも同じようなものかもしれないですね。

――何を遊んでる――

聞き覚えがあるようなないような、自分とは全く違うはずなのに、自分のものだと分かる声。
どうして、どうやって、いつから。
そんな疑問を覚えつつ、語りかけてくる人物の名前を想う。

――朝峰、巡……？――

思考の出所は分割されたもう一つの思考でしょうか。確かに彼の人格はそのまま復帰されたのですから不思議ではないのかもしれません。

――なんだ、負けるのか――
――アドバイスにしても遅いですよ。もう避けられ無いじゃないですか――
――違うだろ？　お前が持ってきた俺の名残、使いこなせよ――

俺（かれ）の名残……朝峰嵐才流。その教えの中で一番重要なのは、

『アリサさん、ごめんなさい。こうなってしまったのも全て私のせいですわね』

目を開ければ未だそこにある銃口。例え今私が突然に動き出してもセシリアが撃つ方が早いでしょう。

「私の、勝ちですわ」

生き汚くあれ。

それが朝峰嵐才流の教えであり、同時に目指すもの。

……なんで私はこんな大事なことを忘れていたんでしょうかね。

ＩＳは兵器だと自分でも言っているじゃないですか。これは試合ではなく死合。

「ううん、試合はこれからです！」

妖精の加護（フェアリーダンス）を半分、４対の内の左側だけを展開し、そのワイヤーをスターライトｍｋ？に巻き付け引っ張る。そして同時にその銃口の動きとは反対方向に向けての回避行動。

一か八かの賭け。

それは果たして私を生かしました。

シールドエネルギーが半分も削り取られたけどＩＳは止まらず、私の意志に応えてくれています。

これなら展開できる……！

今までより速く。

それだけを考えながら再びカゲロウを呼ぶ。

「アリサさん、乗り越えましたの？　……ふふ、そうでなければ面白くありませんわ」

攻撃的なフォルムではないのに獰猛、そんな黒狼がフィールドに現れます。

殴る蹴るに特化した意匠でもある武装、狼鋲（ヴリコネイル）。その四角錘を覆うようにしてＢＴ刃を展開させる。

「ふふふ、その展開速度……どうやら本当に乗り越えることができたようですわね」
「ううん、まだ視線は怖いけど……死合中は気にしてられませんから」
死ぬことはないとはいえＩＳ（兵器）を使っている以上、形式上は殺し合いです。
そのことを自覚すれば、あとは死なないための動きをするだけ。
私が本調子になったと感じたセシリアが至近距離から一気に離脱、同時にレーザーが放たれ追撃もできません。もう少し逃げるのが遅ければ勝てたんですけどね。
「そう甘くはないですかっ！」
両腕に塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）を展開して私とセシリアの間の地面に乱射。
左腕の砲から着火した液体火薬を、右腕の砲からは榴弾を放ちます。
液体火薬から噴出する炎で気体の温度を不均等にし、その温度差による屈折現象でセシリアのＢＴ兵器の照準を狂わせる。さらに榴弾からまき散らされる金属片と、着弾の勢いでうまれた土煙をチャフ代わりにして威力を削る。
これがセイシアを相手にする時の定石（セットプレイ）。
「相変わらず、せこい戦い方ですわね！」
対するセシリアは無理にＢＴ兵器（ＢＴ兵器）を使用しないで、ブルー・ティアーズを囲むように漂うビットから誘導性を持たされたミサイルを放ってくる。
辺りに撒き散らした炎に反応しないということは単純な熱感知ではなくＩＳだけに反応するような構造なんでしょう。
熱と煙は既に私も呑み込んでいるため妖精の加護（フェアリーダンス）は使えません。

「まぁ、こうすればいい話なんですけど、ね！」

ハイパーセンサーで捉えたミサイルを榴弾砲で迎撃しつつ、瞬時加速（イグニッション・ブースト）でセシリアに接近する。

ＢＴ兵器が使えない状況から逃れるために煙から抜け出そうとするセシリアの行動を予測し。私とほぼ同じタイミングで煙から抜け出してきたセシリアを背後に――私を未だ追いかけるミサイルに向けて投げ飛ばす。

そしてさらに追い掛けて渾身の力で殴りました。

「……セシリアもなかなかしぶといですねー」

「アリサさんが視線を克服したのです。ならば私が簡単に負けるわけにはいかないですわ」

殴られた勢いをも利用して私から距離を取るセシリア。逃がさないように私も追いかけますが、足元に数条のレーザーが放たれる。

別に構いません。

装甲が展開できた今、最大量の半分しか残っていないとはいえシールドエネルギーがすぐになくなるということはないですから。

とうとうセシリアに追い付き、向けられているレーザーライフルの銃口を下に押しやる。

「そう簡単に動かされたりは……！」

セシリアはそれに抗おうと銃身を持ちあげる。私の目論んだ通りに。

彼女の生み出した力を殺さないように、むしろその勢いにのるようにして跳びます。そのまま空中で半回転し踵落とし――斧鉞（ふえつ）。

「な……ぐぅ！」

1発目の踵落としは肩に、2発目はあえて当てることをしないでセシリアの右腕を膝の裏で挟み込むようにして地面に倒します。

すかさず馬乗りになってマウントポジションを奪う……ここでスラスターを上空に向けて、地面に向けての圧力を生むことが重要です。

多彩な装備を用いるISでの戦闘においては珍しい肉弾戦、それは肉弾戦への対抗法があまり考えられていないということです。

私のように殴る蹴るに特化した狼鋲（ヴリコネイル）なんていうものが存在しているISの方が異質なんです。

セシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーがどんどんと減っているのがハイパーセンサーを通して伝わってきます。

「まだ、負けませんわ！」

しかし、勝利を確信して油断したその隙をつかれたのでしょうか。

知覚するよりも早く視界の外からの衝撃に吹き飛ばされました。

吹き飛びながらも衝撃を受けた方向を見やると2機のブルー・ティアーズが浮いていました。見事に忘れていました。

「あれ？　前戦った時はブルー・ティアーズ4機だけじゃなかったですか？」

「増やしたんですのよ」

「ふーん、まぁお互いそろそろ限界みたいだね」

セシリアはブルー・ティアーズ――兵装の方を6機従え、私は討鬼（ラクル・ペイン）の鋼杭を展開する。

セシリアは待ち伏せ、私は特攻作戦というところでしょうか。

「結局、いつも最後はこうなりますのね」
「セシリアのブルー・ティアーズは毎回変わってますけど……前はミサイルなんて付いてなかったじゃないですか」
「あなたが毎回煙を起こして私のＢＴ兵器をポンコツ（役立たず）にするからですわ」

あー、つまり私に勝つためだけに付けた、と自惚れてもいいんでしょうか？　そこまでライバル視されているとは思いませんでしたよ。

「むしろわたくしはアリサさんが使い勝手の悪いそれをいつまでも使っているのが疑問ですわ」
「なんで？　これは決戦兵器という枠組みの中では完璧なものですよ？」

なんでため息つくんですか。失礼ですね。
まぁ……そろそろ決着をつけましょう」
私が構えるのと同時に、ブルー・ティアーズの砲口が私に向きます。
嵐才流高速移動法・縮地。本来は体を落下させるように膝の力を抜き、相対的な体重を限りなくゼロに近づけた上で地面を蹴って移動距離を伸ばす業。
ＩＳを使う場合ＰＩＣで体重を消せるため、膝を曲げることによる力の分散がなくなりさらに効率はよくなります。
そこからさらに瞬時加速（イグニッション・ブースト）。慣性を利用したＩＳの最速直線運動。風になるというのはこういうことでしょう。
セシリアの放ったレーザーは相対速度ではすでに光速を超えているので目にも映らず、ただ衝撃だけが身体に伝わる……あと何発受けられますかね。

「セシリア、覚悟して下さい！」
「わたくしに触れる前に撃ち落として差し上げますわ！」

私がセシリアに杭の一撃を与えるのと、セシリアが私のシールドエネルギーを削りきるのと、どちらがより速いかで勝負が決まるということですね。

そして訪れる衝突音、

◇

「いやー……まさかでしたよ」
「わたくしも信じられませんでしたわ。まさか、」
「「相打ちだなんて……」」

ビーーーーッ！！

という若干ウザいとも感じる試合終了のサイレンが鳴ったとき、私とセシリアのＩＳは共にシールドエネルギーが切れていました。そのため精密な判定作業がされたんですが……

小数点第四位まで計算しても全く同じタイミングで、それ以下を求めるのも馬鹿らしいと相打ちということにしました。

当然、私はクラス代表に興味はないので翌日の織斑君との対決は……

「わたくし、戦えませんわよ？」
「って、えー！？　どういうことですか！？」
「どうもこうもアリサさんが最後にブルー・ティアーズを壊したからですわ！」
「私のだって……」

「あなたのは装甲だけでしょう？」

まぁ、確かにセシリアが防御目的で私の目の前に飛び出させてきたブルー・ティアーズを3機破壊しましたが……セシリア、目が据わってますよ？

ということで私が織斑君と戦うようです……ごめんなさい織斑君。セシリアフラグ立たないかもしれません。

6. La voie navigable qui a ?t? forg?

ほんと、まさかですよ
一夏ＶＳオリ主とか書く気なかったのに。
どうやってセシリアフラグ立てさせればいいんだ（

7. Qu'est-ce que nous pouvons utilis

「ＩＳとは何か？」

今回も少し過激な内容を含んでいます。

原作から外れかけた流れを方向修正。

原作との相違点＋１

7. Qu'est-ce que nous pouvons utilis

「ごきげんよう、アリサさん」
「ん？　あぁ、セシぃ。何か用？」

お昼休み、セシぃが私に話しかけてきました。いえ、それ自体は特別珍しいことでもないんですけど……私を心配しているような顔の理由が分かりません。

はて、織斑君との死合のことでしたら心配無用なのですが。昨日のセシリアとの対決のおかげで人の目を気にせずに昂ることもできるようになりましたし……というより勝手に昂るようになってしまったのですが。

「確かに織斑一夏は素人ではありますが……仮にも専用機持ちなのですから多少の準備は必要なのではなくて？」
「あー、平気平気。負けるわけないよ」

私が軽い調子で言うとセシぃにあからさまなため息をつかれました。

「んー？　気がかりなことでもあるんですか？」
「えぇ、まぁ……」

苦々しい、という表現がぴったりな顔でセシぃが少し俯きます。セシぃ、あなたの座右の銘は傲岸不遜とか先見の“不”明とかだと思っていたんですが。

「アリサさん、それはどういう意味ですの？」
「そりゃ、根拠のない自信にあふれた油断してるうっかりさんって

ことですよ」
「……呼び方が昔に戻ってもあの頃のような純真無垢なアリサさんには戻らないのですわね」
セシィは今も変わらず失礼です。
大体、呼び方を戻したのだっていい加減呼びにくかっただけですよ！
「で、話戻すけど。何が気になってるんですか？」
「えぇ、織斑一夏ですが、才能はあるようです。短い訓練時間の間にＩＳを思うように動かすことができるようになっていましたわ」
「そんなの適性がＢ以上出る人なら当たり前じゃないですか」
しかもＩＳには操縦者をサポートするシステムまであるんですから。
でも、まだセシィは不安が残ってるみたいですね……正直、原作を思い返してみても、現時点では大した驚異になり得ないと思っているのですが。
「そうですが……あの機体、最初からワンオフ・アビリティを発生させていましたわ。特殊能力を部分的に扱える第３世機相手でしたらそこまでの驚異にはなりませんが、あなたのオンブル・ループは第２世代機でしょう？」
「まぁねぇ。それでも白式の唯一仕様（ワンオフ）に遅れはとらないよ。織斑千冬が使わないなら零落白夜もただのナマクラですよ」
「貴女、彼のワンオフ・アビリティのこと知っていましたの？」
私は織斑君の訓練は見ませんでしたが、原作の知識は多少覚えていますから。
近接戦闘特化型ＩＳ同士の戦闘で大事なのは操縦者がどれだけＩ手足

Ｓを巧みに扱えるかです。要するにＩＳの総操縦時間ですね。

「伊達に４桁時間も乗っていないってこと、見せてあげますよ」

「アリサさん、そんなに乗っていましたの？」

「うん。やることない時とかボーッとしたい時とか、取りあえずＩＳ展開して棒立ちしたりしない？」

その状態のまま訓練場に付いていたスクリーンで映画見たりもしましたね。

ハイパーセンサーのおかげでちょっとしたＮＧシーンとかも見つけられて面白いんですよ。

「やたらと知覚系とのリンクが強いと思ったらそういう理由ですのね……」

「ハイパーセンサーも使うだけ最適化されていきますからねー……ってセシぃはなんで呆れてるんですか？」

「……はぁ」

む、人を見てため息だなんて少し失礼ですよ。

まぁ、セシぃも心配してくれてたみたいですし少しは多目に見ますけど。

……少しなのに多目とか織斑君が好きそうですよね。

「ま、装備に頼らない戦いってものを見せてあげますよ。というか私のカゲロウはシールドエネルギーとその変換効率は多分随一ですから、時間を稼ぐだけで勝てます」

「そんな消極的な勝ち方はみっともなさすぎですわ。勝つなら派手に、誰から見ても勝敗がはっきりするように勝たなければ意味がありません」

勝てばいいと思うんだけどなぁ。
自己進化プログラムの影響でエネルギー量、装甲硬度、あと移動速度なんかも上がっていますから、そこら辺の適当な操縦者が使うＩＳには手を抜いても勝てるはずです。
……まぁ、ここまで進化させるのに時間かかりましたからね。
最初の数十時間は充電池で動くアルミ製のラジコンカーと比べても遜色ない性能でしたから。

「ま、取りあえず心配無用ですよ」

◇

さて、時間は過ぎて放課後。つまり、織斑君との対決時間なのですが……

「うわぁ……」

フィールドには昨日の数倍の人が観戦しに来ています。代表候補生同士の戦いよりも織斑君に興味がありますか……さすが女子校、なににとは言いませんが飢えてますね。
でも、これだけの人がいても私の体が震えていないのは私の闘争心の源ともいえる俺（かれ）のお陰なのでしょう。ＩＳの影響なのか分かりませんが、ＩＳを展開したときだけ意識が表出するらしく、その間は分割思考の片方を貸している形になっています。
まぁ、それでも複数動作の並行を可能とする並列処理（マルチ・サーキット）は使えるので気にしません。俺（かれ）はもともと口数の少ない人でしたから考え事の邪魔にもなりませんし、そもそも私の元になった人格の片方なんですから戦闘中に考えることは同じなんですけどね。

「さて、織斑君」

「不破さん……えっと、よろしくな？」

甘い、甘いですよ織斑君。この対決に対してのあなたの認識はトレハロースの万倍甘いです！

「覚悟はいいですか？　お祈りは？　遺書の準備は？　あと、姉孝行はしっかりしましたか？」

「……え？」

「これから始まるのは試合ではなく死合です。あんまり楽観にすぎると痛い目見ますよ？」

うん、こんな感じのセリフを言ってみたかったんですよねー。ええぇ、気分が高揚しているのも否定しません。

不破の血というのもなかなか厄介ですね。自分の業が思う存分に振るえる舞台と分かったら身体が勝手に血が沸騰しているかのように熱くなる。修羅の血、というのもあながち間違ってないかもしれませんね。

「覚悟ができたらどこからでもかかってくるといいです。私は逃げも隠れも動きもしません」

「確かに不破さんは強いんだろうけど……それは俺を甘く見過ぎだぞ」

「唯一仕様（ワンオフ）程度で調子乗らないで下さいよ。私にだって相手のシールドエネルギーを大きく削り取る手段は持っています。２種類ほど」

ここで白狼の咆号（ウルフズロアー）でも放ってみたいですね。時間はかかりますけど、きっと戦意喪失しますよ。

というか私の発言を受けて織斑君の動きが止まっちゃいました。本当に唯一仕様（ワンオフ）だけで自分の優位性を信じていたんですかね？　いえ、彼の攻撃も当たればとても痛いんですけどね。当たれば。

「……いくぞ！」

白い刀を上段に構え、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰めてきました。ええ、速いしいい作戦ではありますが……

「動きが正直すぎですよ」

振り下ろされる雪片を無手で取り、白式の腹を思い切り蹴り飛ばす。

無刀金的破――ええ、本来は蹴る場所はまた別ですけど、乙女の口からは説明できないので各自で補完してください。

業名を叫ばないのは恥ずかしいからという理由からですが、本来の業ではどうなるかを想像させないための優しさでもあるんですよ？　織斑君だって将来子供は持ちたいでしょうし。

「まだまだぁ！」

今度は横振りでの逆胴狙いですか。

確かにこれだと無刀取りは難しいですが、

「な……！」

落ち着いて、一歩踏み込むだけで良いんですよ？

刀は振る速度が一番重要な武器です。振り切る前に刃の根元まで入り込まれてしまったら、切れるものも切れないですからね。なにより圓明流は対刀戦を研究し尽くしていますから、この程度のことならちょちょいのちょいです。

やはり拳よりも殺傷能力が高い分、間合いが限定されてしまうのが武器の難点ですよね。近すぎても遠すぎてもダメ、というのは扱

いにくいです。
流れるように白式の腕を取って今度は投げ飛ばす。
「織斑君。短期決戦のつもりかもしれませんが、そのままだと私に有効打を与えることもできませんよ？　虚実織り交ぜるのが実戦でのコツです」
例えば唯一仕様（ワンオフ）を見せ技にして蹴ってみるとか、素早い乱打を心掛けて合間に唯一仕様（ワンオフ）を混ぜるとか。
「これで、どうだ！？」
「遅いです！　あと突きは刃を寝かせた方が防ぎにくいんですよ」
低い体勢から突き上げるように放たれた突き、その剣筋を刀の腹を横から殴ることで逸らす。さらに返す肘で白式の頭を揺らし、その腰を両手で掴んで上下を半回転。頭から地面に叩きつける。
「パワーボム！　うん、一度やってみたかっただけです……って！危ない危ない」
少しふざけすぎましたか。
地面に叩きつけられた織斑君が繰り出した反撃はバックジャンプでかろうじて避けました。
やっぱり慣れていない技は使うべきでないですね。本当にギリギリでした。
「へっ、動いたな」
「え？　……あー」
ノリで動きませんとか言いましたね。そんなところに拘るなんて、

織斑君も案外男の子ですね。

「動いちゃったんで、私からも攻めますね」

まぁ、それにのってしまう私もですけど。

「速……っ！」

――嵐才流・疾歩嵐打（しっぽらんだ）。

連続攻撃を至高とする嵐才流の奥義。重心移動による連続縮地と不断の乱打。

拳、掌、肘、敵、額、膝、踵、攻撃に使えそうな部分は残さずに使いながら最速で打撃を重ねていく、相手に反撃の機会を与えない戦闘法です。

しかも嵐才流の特徴はその速さもですけど、特異点はまた別のところにあるんですよ。

「弧月（こげつ）！」

それが他流派の吸収。

連続攻撃の内容には正拳突きだったり、ネリチャギだったり寸勁だったりと、ありとあらゆる武術の技が混ぜられるようになっているんです。

そういう特徴があるから嵐才流特有の業というのは少ないんですけどね。

それでも圓明流の業も当たり前のように使えるのは有り難い――無手だからこその高速戦闘でありつつ、武器への対策がしっかり立てられた業を使えるというのは大きなアドバンテージになります。

「旋（つむじ）！」

連続攻撃の最後を跳び後ろ回し蹴りから空中回転蹴りへと繋ぐ業で締めくくる。
多分、2分ほど攻撃してましたが、狼鋲（ヴリコネイル）の疑似ＢＴ刃も使っていないのでダメージはそれほどでもないはずです。
まだ、尋ねなければならないこともあるので倒しちゃうわけにもいかないんですよ。

「織斑君。あなたはＩＳを兵器ではなく力だと言いましたよね？その違いはなんですか？」

彼のノートに書いてあった文字を見てからずっと考えていましたが、未だにその違いがよくわかりません。「ＩＳ≠兵器、ＩＳ＝力」だなんて、結局力と兵器は切り離せないものじゃないんですか？
全く同一のものとは言いませんがＩＳの力は結局兵器としての暴力性（それ）だと思います。

「違う」

お互いに戦闘態勢を解いて向かい合うと織斑君が短く答えました。私、割と彼の答えに期待しているのでつまらなくなければいいですね。

「確かにＩＳは兵器としての性能ばかり注目されている。でも、それだけじゃない。そもそもＩＳは宇宙開発のために作られたんだ。ミサイルとかじゃなくて、そのための物を装備すれば破壊するだけの存在じゃなくなる」
「んー……なるほど。でも４６７機しかＩＳが存在しないという現状で抑止力、つまり兵器として活用しない国はないですし、これから現れることもないでしょう。それほどまでにＩＳは兵器として高

い性能を持っています。それは、あなたもＩＳに乗った時に感じたはずです自分への危険を探し出すハイパーセンサー、操縦者の命を守る絶対防御……なにより攻撃的なワンオフ・アビリティ。それらは戦争でこそ最も役に立つと思いませんか？」

ハイパーセンサーを使うことで災害時の人命救助を、とも考えられますがＩＳはその用途のためには大きすぎます。そうするならばハイパーセンサーと同様の装置を他の機会に積んだ方がいいんです。

「それに、戦闘能力以外のワンオフ・アビリティが発生したという事例は今まで一度も聞いたことがありません。こうなるとＩＳの登場が本当に宇宙開発のためだったのかさえ怪しくなってきませんか？」

「それは、操縦者が兵器として乗っているから、」

「なるほど……操縦者の闘争心にＩＳが同調して攻撃的な唯一仕様（ワンオフ）を生み出すと……確かにそれはあり得るかもしれませんね」

唯一仕様（ワンオフ）にも攻撃用や防御用などがあるようですし、操縦者の意思が能力に関係するというのも可能性としては十分ありますね。でもそれだと、

「織斑君、結局あなたもＩＳを兵器として見ていることになるんじゃないですか？　まぁ第一形態から発生しているのでそうとも言い切れないかもしれませんが」

「っ！　……でも、俺はＩＳに命を救われたし、束さんが兵器なんかを作るわけないんだ！」

「うーん……」

結局、第２回モンド・グロッソで彼が誘拐された時に織斑先生が助けた、その時の印象が強く残り過ぎているんでしょうね。それに

篠ノ乃博士は彼から見れば幼馴染の姉なんでしょうけれど、実際は最強の自己中ですし。

ＩＳの影響力を強くするために起こした白騎士事件。あれもハッキングから何から何まで彼女が行ったことですから。そういうところを見るとＩＳの軍事的な価値を見せつけ、さらにそのコアの数を制限することで世界を自分の手中に収めたとも考えられますよね。

しかも彼女は、織斑君がＩＳ学園に通っていることすら彼女の思惑だという見方すらあるほどの天才です。そこまで先のことを予想できる彼女が宇宙開発のためのＩＳが軍事転用されるという彼女にとって不本意なはずの結果を招くでしょうか？

きっと、彼女にとって世界が彼女を尊重するようになればＩＳがなんであっても良かったんです。

それに、

「兵器も、人を救いますよ？」

「……」

「自衛手段としての兵器――例えば核の傘という言葉もあるように、兵器は常に国民を他国からの侵略から守っているとは言えませんか？　織斑君がＩＳに助けられた時も、言い方はアレですが力尽くだったんじゃないですか？」

「……じゃあ、なんで不破さんはＩＳに乗っているんだ」

「当然、守るための力としてですよ」

少なくともカゲロウはデュノア社を経営危機、ひいてはＩＳ開発資格剥奪から救える可能性はあります。意図的ではないバグだとしてもカゲロウに搭載されている自己進化プログラムは研究する価値が十分にあるはずですから。場合によっては第3世代機よりも価値があるかもしれません。そしてそれは最終的に……

ですが、織斑君は納得していないようですね。

まぁ、自分の姉が操縦の第一人者で幼馴染の姉が開発者なのです

から兵器だと言われるのが嫌なのでしょう。

「でも別に兵器でもいいじゃないですか。兵器は悪いものじゃありません。当然いいものでもないですけど、それを決めるのは使う人たちの行動理念だけです。逆に言えば私もＩＳが兵器だということにこだわる気はないんです。ただ人を簡単に傷つけることが出来るものだと、そういう意味で分かりやすく兵器だと言っているだけなんですから」

だから、そうですね。

確かに織斑君が言うとおりＩＳは兵器というより力というのは間違ってないかもしれません。

何でもできる可能性があるＩＳを他の言葉で表現することもできないのでしょう。人間を人間という言葉以外で説明できないのと同じことで、きっとＩＳもＩＳ以外の何物でもないんです。

「確かに、ＩＳは兵器としての側面を持っているだけかもしれませんね。それは認めましょう」

「え？」

自分の中では兵器じゃなくてもいいという結論に至ったものの、織斑君には急に私が態度を翻したように見えたのでしょう。ちょっと拍子抜け、という感じの声が彼から漏れました。

「さっきも言いましたが別にＩＳを無理にカテゴライズする必要はないんです。私が織斑君に、というより皆さんに知っていてほしいのはＩＳが人を傷つけ、殺すこともできる兵器だということを理解してほしいだけです。恐らくまだ試験の時にしかＩＳに触れていない新入生の人たちには分からないかもしれませんが、もう一度乗ればＩＳがそういうものだと理解できるはずです」

少しでもそのことを意識してもらえれば、私は満足なんですよ。
ＩＳは個人のために使うには大きすぎる力だと理解する必要があるんです。そうじゃないと、きっと後悔する。

「話が長すぎましたね。そろそろ決着をつけましょう」
「あぁ……」

開始から有効打を貰っていない私と零落白夜を何度か使用している織斑君。既に勝敗は見えていますが最後まで戦い抜くのが礼儀でしょう。
織斑君は雪片を居合抜きのようにもち低く構える。
……私から来いということでしょうか？　そんな待ち伏せされているのが分かっているのに突っ込む程漢じゃな、

「いくぞ！」
「投げちゃうんですか！？」

というかその戦法は他の試合の時でしたよね！？
と、予想外の動きに慌てましたがなんとか避け、丸腰になったはずの織斑君を探しますが、既に姿はありませんでした。刀を目くらましに移動するとしたら……

「後ろっ！？」
「う、え、だぁぁぁぁああ！」
「なっ……！」

長年続けていた古武術の勘に頼って肝心のＩＳのハイパーセンサーを確認していなかったため完全に予想外の一からの攻撃。せっかく知覚系は特に発達させたのに、これじゃ宝の持ち腐れですね。

読みが外れて硬直した私に空中から降ってきた織斑君がその勢いのまま刀を振り抜く。

なるほど、投げた刀を空中でキャッチして、ってことですか。まるでゲームの世界じゃないですか。あれなんて言いましたっけ、たしか極死・な、

ビーーーーーーーーーーー！

試合終了の合図。

この試合、

「私の勝ちです」

「あぁ、惜しかったのに！」

織斑君の零落白夜は私のシールドエネルギーの４割ほどを削ぎ落とすに留まり、その代償として自らのシールドエネルギーを尽きさせてしまったようです。

……もし全力の零落白夜で切られていたら負けていたかもしれませんね。最後の動きだけ見れば、確かにあの織斑千冬の弟であることも納得できます。

「次に戦うときはもう少し愉しませて下さいね？」

織斑君に笑いかけましたが……はて？　どうして彼は引き攣ったような笑いを浮かべているのでしょうか？

7. Qu'est-ce que nous pouvons utilis

アリサさんの戦闘中の“わらい”は“笑い”というより“嗤い”に近いらしい。
そもそも学園編中に笑っているような描写が少なさすぎます（
まぁ、人見知りゆえよほどのことがないと可愛く笑わないのですが。

元ネタ

『まるでゲームの世界じゃないですか。あれ、なんて言いましたっけ、たしか極死・な、』
極死・七夜――出典『ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮより、歌月十夜＆ＭｅｌｔｙＢｌｏｏｄ』
本来はナイフを投げると同時に相手の頭上に移動、頸骨を折ることで息の根を止める業。
……だったはずです、確か（

8. Ne contrefaites pas mais dissimulez

「造るのではなく隠す」

8. Ne contrefaites pas mais dissimulez

「えーと……ということでクラス代表になってしまった不破アリサです」

ぱちぱちぱちぱちぱちぱち！

あれ？　おかしいですよ。

クラスの皆さんの拍手が私の想像よりも激しいですよ！？

私の予想では、なんで織斑君じゃないんだー！　ってなるはずだったんですが。

大体、私は皆さんにとってあんまり近づきたくないとんがった子だと思われているはずですし。

「えっと、その、目立ちたくな……じゃなくて、織斑君はもっとＩＳに乗って慣れるべきだと思うのでクラス対抗戦は彼に出てもらおうと思っています」

「お、俺！？」

「もともと代表候補生である私やセシィが戦ってはクラスの成長度の指針にならないという建前からです。もう織斑先生から学園側に話を通してもらうことになっています。ということで挨拶終わります」

ぱちぱちぱちぱちぱち！

だからなんで皆さん嬉しそうなんですか！？

というかこっち見ないでくださいよ！　恥ずかしいんですってば。

しかも自分で見ておきながら、私がしかめっ面してるから目を逸らすって失礼ですよ！　だからって、こっち見ないでください！

しかもどうして皆、こう、ニヤけているんでしょうか？

「それは不破ちゃんが可愛いからに決まってるじゃん！」

「二木さんは基本的に信用ならないので静かにして下さい」

私が着席して考え込んでいると……無意識に独り言でも呟いちゃったんでしょうかね。二木さんが右後ろから身を乗り出して話しかけてきました。

うん、織斑先生がすっげぇ睨んでますから自重して下さいね。

「でも、私はふたちゃんの言ってること間違ってないと思うけどな」

さらに追い討ちのように隣からは一松さん。

そのさらに向こうにいる三好さんもニヤニヤしながら私を見てます。というか私と目があった瞬間にウィンクしないでください。ドキドキします。

「一松さんまで……それはあなた達が女の子を性の対象として見てるからで」

今日も朝からいちゃラブってましたからね。公衆の面前であんな、昨日にもまして人に言えないようなことするなんてなかなか肝が据わっています。

「失礼な。私は女の子じゃなくてイッチー一筋だよ……でも不破ちゃんのその慎ましやかな胸も大きくしてあげたいなぁ」

「というか私は男の子の方がいいんだってばっ！　ふたちゃんのことも嫌いじゃないけど」

ですから信用できないって言ってるじゃないですかっ！

まったく、私が可愛いだなんて……いえ、まぁ、ほら、外人の血もいい感じに混ざっているみたいですし、上中下で分けたら上クラスに入る自信はありますけよ？　それでもこのクラスにはセシィとかいますし、他にも上の上クラスの子もいるのになんで私かな、っていう疑問ですよ。

というか慎ましやかな胸とか大きなお世話です！

「でもさ、不破ぁ。実際昨日と一昨日の戦い見て惚れたって女子も多いと思うよー？　それに不破って遠くから見てる分には仔犬みたいだしぃ」

おそらくクラスの日本人の中でダントツに可愛い上、垢ぬけているサバサバ系女子代表の三好さん。

いえ、それより見惚れたの間違いですよね？　私、シャルロット以外の女の子には多分興味わきませんからね？

大体セシィと戦ってた時なんてほとんどいい動きできなかったじゃないですか……勝てたのも私が突然動けるようになってセシィが勝負のテンポを掴み損ねたからですし。

それに織斑君は専用機持ってるとは言えまだまだ素人ですから勝てて当然ですしね。私としては最後に一撃貰ったことも予想外だったんです。

「不破、そういうことでお前がクラス代表になることに文句のある奴はいない。織斑を対抗戦に出させるという条件も呑んでやるんだ。しっかり励めよ？」

「はい……」

最後に織斑先生がやっぱりニヤニヤしながら言ってきました。

もともと誰か一人でも不服そうな人がいたら織斑君をクラス代表にするという条件だったんですよ。まさか拍手喝采を貰うとは思っ

ていませんでしたし……対抗戦に出ないでいいだけマシですかね。

「それではＳＨＲは終了だ。山田先生」

「は、はいっ！　それでは一時間目始めますね！」

ふぁ……眠い。

昨日はクラスからの反応が不安であんまり眠れなかったんですよね……ですがクラス代表になった以上居眠りするわけにはいきませんし。

……あ、そうだ。

「一松さん……あなた達って確か演劇部だったんですよね？」

「え？　うん、私もふたちゃんもみぃちゃんもそうだよ。どうして？」

「いえ、後で、ごにょごにょごにょ……できますか？」

「え、うん。出来るけど……」

「理由は聞かないでください」

私にとって、とても大事なことなんです。

私の真剣な空気を察したのか一松さんはコクリと静かに頷いてくれました。

この３人とはまだ知り合って間もないですが……他に手もないですし、信用できそうなので大丈夫でしょう。

◇

「あ、あの、山田先生っ！」

「不破さん？　どうかしましたか？」

授業が終わって昼休み。すぐに山田先生へと駆け寄って話しかけ

ます。
　一応は悪だくみなので織斑先生に見つからないように祈るのも忘れていません……効果は不明ですが。

「その、先生に頼みがあるんです」
「えっ……分かりました！　何でも言って下さい！」

　流石、のせやすいことに定評がある山田先生。見事にやる気を出してくれました。
　先生以外には言えないことなんです、な感じの空気に弱いところがあり、頼りになる先生に憧れているのも分かっていましたから当然の結果ではありますが。

「ここじゃ、少し……トイレまで来てもらっていいですか？」
「はい！　人目が気になるのでしたら教員用のトイレを使いましょう！」

　それにしてもこの教師ノリノリです。いえ、有り難いんですけどね。
　早速二人してこそこそ教員用トイレに向かいます。この間にさまざまなドラマがありましたが……言う程のことでもないので割愛します。あえて言うならば、私と先生の新密度が多少上がったという程度でしょうか。

「それで、話というのは？」
「その、これを見て下さい」
「えっ、ちょっと不破さんなにしてるんですか！？」

　先生に背中を向け、おもむろに制服を脱ぎ出した私に山田先生が慌てふためきます。

私だって恥ずかしいんですからあんまり騒がないでくださいよぉ……

腰から肩甲骨までを露出させると先生が軽く息をのみました。私の右肩辺りから腰の中ほどにかけて大きな刀傷があるのを見たからでしょう。

「それ、は？」

「昔、ちょっと事故で……あの、先生にはお願いする手前見せたのですが他の人には……」

「もちろん言いませんよ！　その、それで頼みというのは……？」

先生にも私が言いたいことの半分くらいは伝わっているのでしょう。いろいろと考えているのが見て分かります。

「その、私だけ大浴場を使える日をずらしてもらえませんか……？」

ゆっくりと制服を正し、少し潤み震える瞳で山田先生の目を見つめる。

それでも先生は何も言いません。まぁ、先生が独断で出来るようなことじゃないのでここまでは予想済みです。私が先生にしてほしいことは山田先生経由で他の先生に私のことを伝えてもらうこと。

山田先生は嘘をつかない先生だというのが他の先生も分かっているので、先生が訴えてくれれば他の先生達も私個人での大浴場の使用を認めてくれるでしょう。

えぇ、当然、私の背中にある刀傷は一松さん達に頼んだ特殊メイクによって造り上げたものです。お人よしの山田先生を騙すことは心苦しいですが……背に腹は代えられません。人に見られての入浴が無理だというのは事実ですから。

「そう、ですよね。ごめんなさい。無茶なことを頼んでしまって…

…先生なら、と思ったんですけど迷惑な話ですよね」

さらに、先生を追い込むために両手を胸の前で握りしめ一度俯き、その上で無理をして作ったような笑顔を先生に見せる。私、女優になれるかもしれません。

「……分かりました」

「先生？」

「私だけの力ではどうにもできませんが、他の先生方にも話をしてみます。安心して下さい。これでも他の先生方からの信頼は厚いんですよ？」

「お願いします……私はもう一度制服に乱れがないか確認してから行くので、先生は先に行って下さい」

ふぅ……うまくいったかな。

先生の真剣な目を見た限り本気で取り組んでくれると思いますが……

「見ーちゃった」

「っ！？」

教員用トイレから出た私を待っていたのは悪戯が成功した子供のような声と共に笑う、学年が１つ上の生徒――更識楯無（さらしきたてなし）生徒会長。ＩＳ学園生徒の頂点に立つ女生徒でした。

なにを考えているのか判断がつかない笑みは、本心を隠す暗部特有のもの。母様（ママ）が他人に見せる顔と良く似ている。親近感はわくけど信用はできない。

「……何の用でしょうか、学園最強さん？」

「まぁ、積もる話は生徒会室でしましょうよ、学年最強さん？」

「……私より強い人はたくさんいます」
「ＩＳではね。でも生身だったらどうかしら？」
「……ここはＩＳ学園です」

さすが更識家の当主……海外に移り住んだ不破もしっかり監視しているということですか。まぁ、暗殺を生業にする不破圓明流は更識家と相対するものではありますからね。

「そんな警戒しなくてもいいのよ？　私は今の話に興味があるだけなんだから」
「何のことですか？」
「んふ。大浴場を一人占めできたら気持ちいいでしょうねー。私も混ぜて？」

えーっと？
先生を騙したことを怒られるわけでもなく、日本に戻ってきた不破に忠告をするわけでもなく、私も広いお風呂に入りたいってことですか？　本気？
原作通り、本当にハチャメチャな人ですね……

「とりあえず、ようこそ生徒会室へ」
「……失礼します」
「あぁーん、他人行儀ね……私と不破さんの仲じゃない」
「私と先輩の仲ってなんですか！？　少なくとも実家はどちらかといえば敵対関係のはずですよね！？」
「い・け・ずぅ」

だめだ。この人には勝てません。というか勝負にならない。
直接どうしたいのか言えばいいのにわざわざ遠回りに絡め手を重ねてくる人の対処法なんて知りませんよ！？

というか、なんでしょう。えーっと、取り敢えず大浴場の話でしたよね。

「えっと。先輩には悪いですけど、私は誰かと一緒にお風呂は入れないんです……大浴場は入りたいんですけど」

「それは、さっきの刀傷が見られたくないから？」

やっぱり盗み見ていたんですね。

しかも私の刀傷が作り物だということに気付いているのでしょう。

ニヤニヤ笑って私が本当のことを言うのを待っているようです。

扉を見るも布仏虚先輩が私を逃がさない、というように立ちはだかっています……いいでしょう。話してあげましょう。

「えっと、あの、布仏……本音さん、濡れタオルとかありませんか？」

「あー私の名前知ってくれてるんだー。嬉しいなー。えーっと、濡れタオルというかウェットティッシュなら……はい、ふわわー全部使っちゃっていいからねー」

ふわわー……なんというか、さすがのほほんさん。不破という苗字の固いイメージを見事に崩されました。

取り敢えずのほほんさんからウェットティッシュを受け取って、そのまま更識先輩に手渡します。

「私？」

「えぇ、背中は自分では拭きにくいので頼めませんか？　あと、すいませんが布仏さん達は少し席を外してもらってもいいですか？……そう怖い顔しないでください、なにもしませんよ」

「虚、この子は大丈夫よ」

ニコリとして更識先輩に笑いかけるとニヤリとチェシャ猫のような笑みが返ってきました。多分、今この部屋の中で一番分かり合えているのは私と先輩でしょう。

更識先輩はある意味で暗部の最も深いところにいる人ですからこれから私が見せる事実にも慣れているでしょう。むしろ何バカなことで悩んでるんだってレベルかもしれません。

恐らく、更識家に仕えているわけですから暗部と関わりのある布仏姉妹に出て行ってもらったのは単純に恥ずかしいからです。2人が同席されていたとしても余り困ったことにはならなかったでしょう。

「あの、更識先輩」
「楯無」
「え？」
「楯無って呼んで？」

ん……このタイミングで来ましたか。

若干、楯無先輩からの視線に怯えている私に優しく微笑むなんて卑怯です。

ただ、今回怯えているのは人見知りのせいではなく……身の危険？　生徒会室という密室で2人きりになるのは早まったかもしれません。

それにしても本当にこの人は他人の心の隙間を突くのが上手いですね……しかもその隙間に自分の存在を入れてくるんですからタチが悪いです。人たらし、というのもこの辺りが関係しているんでしょう。羨ましい。

「……その、楯無先輩。あんまり、乱暴にしないでくださいね？」
「……不破さんもなかなかやるわね」
「ま、何がですか？　それと私のこともアリサでいいです」

「本当……かーわいー」

ゾクリ、と背中に冷たいものが流れた感触がしました。

目の前には猫、というより女豹のような目つきで紅い唇をぺろりと舐める楯無先輩。

蠱惑的というか妖艶というか……あれ、例えとして食べられちゃう感じですか！？

「ちょ！……まって、おちついてくださっ！　……ヤーーーー！」

「よいではないか、よいではない……か？」

先輩がガバッと私の飛びかかり一気に制服をはぎ取って……って乱暴にしないでくださいって言ったじゃないですかぁ！　ところが私の背中を思いのほか優しい力で拭いた瞬間に先輩の動きが止まった。

……気付きましたね。

「……先輩のばか」

こんなお茶らけた雰囲気で見せられるようなものじゃないんですよ？

◇

「アリサさんは、どこにいるんでしょう？」

前日の試合について本人（アリサ）に聞きたいことがあったセシリアは学園中を歩き回って探していた。

聞きたいことは一つ、織斑一夏とはどういう人物だったのか。

（昨日の試合……アリサさんが勝ったのに気になることが多すぎですわ）

傷一つ付けることが出来ずに投げ飛ばされ続けたにも拘らず最後まであがいた男子生徒。

実力差は明白なのだから早々に諦めればいいのにと冷めた目で見ていたが、結局、彼は最後まで戦い抜いた。

しかも、最後に自分より格上の相手に一太刀入れるという結果を残して。

あれは紛れもなく諦めなかったために生まれた結果だろう。

何度もアリサに向かっていく彼は、女性――母に対していつも遠慮した態度を取っていた自分の父とはまるで違った。

男だから女より下、そういった現在での世界的な共通理念をまるで無視して突撃する彼は自分の中での男性像――女性に媚びへつらう情けない人――を根底から覆した。

（ですから、アリサさんにあの男と戦ってどうだったのかを聞かなければ）

自分との試合の中で何かが変わった旧知の友人。

一昨日は素早く動き結局引き分けにされてしまったもののどこか動きにぎこちなさが残っていた。

しかし、昨日の試合ではそのぎこちなさも消え、何度かの訓練試合で目にした万全のアリサと同じように見えた。

その上で、格闘戦では随一である彼女が手加減も何もせずに最後の人たちを受けたのだとしたら……

（織斑一夏……気になりますわ）

彼のことをよく知るのに代表候補生という肩書は非常に便利だ。

戦闘に慣れていない彼に特訓を付けることでその距離を縮められる。そうすることによってさらに見えてくるものはあるだろう。
恋愛感情とはまた違う、ただ知りたいという純粋な好奇心が彼女の中に渦巻いていた。

◇

「なるほどね、そういうことだったの」

事実を見た先輩はあの後丁寧に背中を拭いてくれました。これで一松さんたちが施してくれた特殊メイクは落ちているはずです。
今は布仏さん達を交えた４人で一服……タバコじゃなくて紅茶を飲んでいるだけですよ？

「アリサちゃん」
「はい……なんでしょう」

本当のことを軽く説明をして静かになってしまった生徒会室に楯無先輩の声が零れる。
その瞳からは、やはり何の感情も見て取れません。

「さっきはごめんね。それと、大浴場の件、私も協力してあげるわ」

まったくですよ。もうお嫁にいけません。だからシャルロットのお婿さんにしてもらいます……えへ。
なんてことは口にも表情にも出さず、かといって裏がありそうなので感謝の言葉でもないことを先輩に言うことにしました。

「……お詫びに、ということではないですよね」
「あは」

私の指摘が図星だったからでしょうか。楯無先輩の申し訳なさそうな顔がだんだんとニンマリとした笑顔に変わりました。その顔もすぐに扇子で隠されてしまいましたが……あれ扇子なんてどこから出しました？

まぁ、お詫びじゃないなら私にも何かしらの条件が要求されるのであって、その条件というのも分かりきっているのですが。

「お風呂は……誰かと入る時は必ずママと2人きりだったので、2人で入る分には我慢出来ると思います」

「つまり、私と2人っきりでの入浴がアリサちゃんの希望なのね」

「えー。私もふわわーと入りたいー」

「順番を決めればいいのではないですか？」

私の一言に残る3人がそれぞれ反応を示します。

というか楯無先輩、私はできるだけ1人でお風呂に入りたいですし誰かと入る時の相手が先輩だとも言ってません！

あぁ、でもさっきのを知っているのはこの中では楯無先輩だけなので結局そういう意味になりますか。

「というか、そもそも先輩に協力してもらわなくても……」

「んーそれはどうかな？　やまちゃんに頼んだのは確かに効果的だけど、アリサちゃんみたいな立場の子は他にもいるし、結局個室のシャワーを使ってもらうってことになりそうよ？　……私ならそれなりの実力があるから協力してあげられると思うなー」

チラッと私を見て微笑む先輩。

そもそも最初から先輩の協力は必要だったということですか……なら先輩に見つかったのは幸運だったと考えるべきかもしれませんね。

ここは意地を張らずに協力を頼みましょう。
2人でのお風呂も……訓練だと思えば……多分、大丈夫です。
普段ならいいんですけど裸って言うのが落ち着かないんですよね。
誰かと入ったことが無いので案外平気だったりするのかもしれませんけど。

「じゃあ、よろしくお願いします」
「まっかせて」

再び楯無先輩が開いた扇子には『一件落着』の文字……不思議な扇子です。

「それでは、そろそろ教室に戻ります」
「ん、またねー」

ニコニコしながらヒラヒラと手を振る楯無先輩とのほほんさん。
虚先輩は、やっぱり家的に対立しているから友好的な態度を取ることはできないんでしょうが目礼だけはしてくれました。

「失礼しました」

さて、早いところ教室に戻ってお弁当を食べちゃわないと間に合いませんね……きょうはハンバーグー♪
洋風の――と言っていいのかは分かりませんが――料理を作るのは久しぶりなので美味しければいいですね。
味見もしましたが出来たての時と冷めた時では味も変わってしまいますし。
あ、美味しければ一松さん達に特殊メイクのお礼として分けるのもいいですねー。

「あっ不破さん！」

教室に入るなり一松さん達三人娘が寄ってきました。

だんだんと彼女達に話しかけられるのに抵抗を覚えなくなっていることを感じながら私の席まで一緒に歩きます。

セシぃにも言われたことがあるのですが、私は一度仲が良くなった相手にはすぐ心を開くらしいです。確かにまだ話すようになってから1週間ほどしか経っていないのに信用し始めちゃってますし、間違ってはいませんね。

「それで、不破ちゃん大丈夫だった？」

「まぁ、うまくいったと思います。思わぬ協力も得られましたし」

得られた、というより押し付けられたに近いですが、わざわざ彼女達に話すことでもないでしょう。それに楯無先輩も人気がある人のようですから、下手に口に出してしまえばまた周囲から嫉妬の視線が向けられるかもしれませんし。

「ふぅん、じゃあ1人風呂計画は成功しそうなんだ」

「そうですね、これも三好さん達のおかげです」

「いやいや、私達は好きなことやっただけだしぃ……それより不破ぁ、なんで私達には見せたのかな？　ん？」

当然、特殊メイクを施した彼女達は楯無先輩と同じことを知っています。

今から考えてみれば、隠したいことを彼女達に教えてしまっている時点で意味がないですね……まぁ多分、

「私が皆と仲良くなりたかったから、じゃダメですかね？」

「いやいや、全然オッケー」

隙を見ていちゃラブっていた一松さんと二木さんもこっちを見て親指を立てていました。

……二木×一松、三好×私なんてことにはなりませんよね？　三好さんはノーマルですよね？

「ふふん、それはどうかな」

私に関わる人はみんなそっちもいけちゃう人ですか！？　楯無先輩もそこらへん無頓着そうでしたし。

……セシリアがいるから大丈夫ですよね。もう大丈夫の意味も分かりませんけど。

8. Ne contrefaites pas mais dissimulez

セシリアのフラグは色々と考えましたが形を変えて立てることにしました。
友人フラグ、とでもいいますか。

そして生徒会長の口調が分からない・・・！
あんまり違和感があったらそのうち修正することになるかもしれません。

9／EX1．Comment est－ce qu'Arisa ont f

「外伝１　アリサとセシリアの絆はいかにして生まれたのか」

舞台は本編から約１年後
完全に過去編にするつもりでしたが、
アリサにデレているシャルロットが書きたかったので未来での回想、
という形に。

9／EX1．Comment est－ce qu' Arisa ont f

「セシぃ、フィールドが使えるようなので放課後に模擬戦でもしませんか？」

「望むところですわ！　今日こそアリサさんからアドバンテージを奪わせて頂きます」

アドバンテージ？　あぁ、テニスですか。

そういえば戦いすぎていて分かりにくくなっていたので連続で2勝した方が連続で2敗するまで強者を名乗れるとか、そんな感じのルールにしましたね。

「それでいま何戦何勝何敗？」

「77戦38勝38敗1引き分けですわ！」

引き分け……IS学園に入学してすぐセシぃと戦った時のですね。

あの後、興味を持った人が試合データを解析したところ完全にシールドエネルギーが切れた時間は同時だったようです。

今でも私達の模擬戦の結果は一進一退の状況が続いているので周囲からは完全にライバル認定されています。去年の引き分けは伝説にすらなっているとか何とか。

「うわぁ……私達、そんなに戦ってたんだ……」

大体、去年入学してからの1年間で50戦、夏休みとかのこととか考えると大体月に5回は闘ってる計算になりますね。シャルとも最近は一緒に訓練したり整備したりしてるし、鈴ちゃんとかラウラとも月に2回くらいは模擬戦してるし……当然他の子たちとも同じようなことをしてますし。

「わたくしも色々な人と戦っていますがアリサさんの年間模擬戦闘記録には到底及びませんわ」
「年間１１６回とか新聞部に書かれましたね」

概算で3日に1回のペースです。
しかも、あれって単純にフィールドの使用申請を出す時の利用目的に模擬戦って書いた回数を数えただけって言ってたから……もう少し増えるんじゃないでしょうか。

「そんなだからバトルマスターだなんて言われてるんですわよ」
「あー。なんか、生徒会長に次いで強いんじゃないか!?　とか書かれてましたねー。最近は負け続けなのに」
「代表候補生を相手取って勝率５０%付近をキープしているのもアリサさんくらいですわ……そろそろまた代表候補生に戻ってもいいのではないですか？」
「そりゃ、私は候補生落ちですし専用機も持ってるんですから条件は候補生とあんまり変わりませんよ……代表候補生になるのは、考えておきます」

……場合によってはＩＳ学園を卒業した後もシャルと長い時間いられるようになるかもしれないし。
まぁ、今だと私がまともに戦って勝ち目があるのは近接戦闘が苦手なセシィと実弾装備主体のシャル、後ギリギリ相性の問題で鈴ちゃんだけなんですけどね……ラウラのＡＩＣは近接格闘が主な私にとっては鬼門ですし、織斑君と篠ノ乃さんの第４世代機に至っては至って普通のチートですので戦うことすらあんまりないです。
タイマンなら絶対に勝てないってことはないですけど……勝率はお察しという注意書きも付きます。楯無先輩には未だに勝てていませんが、彼女が卒業してしまうまでに勝ちたいですね、弱点も最近

になって分かってきましたし。
ただ……その妹の簪さんは無理かもしれません。どう頑張っても山嵐の一斉射が堪えられません。複合装甲に効果的な夢現も含めて私を倒すために開発されたとしか思えません。私も荷電粒子砲撃ちたいなぁ……

「でもやっぱり、セシィは近接も慣れてきたよね。最近は私が踏み込んでも逃げられるし」
「悔しいですがこの1年で射撃戦は逃げの戦法だと認めざるを得なくなりましたから」

セシィは本当に危機回避能力が上がったと思います。私が踏み込もうとした瞬間にビームで足止めしたりと戦い方が上手になりました。
なにやら最近は私以外にも接近戦を好む生徒が増えたみたいで、彼女達と模擬戦をしたりとセシィも精力的に技術を磨いています。

「接近戦が人気になったのはアリサさんが誰かれ構わず接近戦闘の訓練を個別で付けているからだと思いますわ……半年先まで予約があるなんて噂も聞きますし」
「ん？　予約制じゃなくて気が向いた時に頼まれたら、ですよ……それにしても私達が初めて会った時からもう随分経つんですねー」

私が親父と一緒にイギリスに行ったのが12歳の半年間だからもう4年近く昔のことですか。

◇

「アリサ、パパ、来週からイギリスに行くんだけど来るかい？」

そんなパパの気を遣っているような言葉がきっかけだったはずです。

あの頃はちょうど私が他人からの視線を恐れるようになった頃でしたから、長い間家から離れることが心配だったのでしょう。

私は私で現状から逃げ出したい一心でついて行く！　と言っていたような気がします。

そうと決まれば準備はすぐでした。

次の日にはヴァネッサさんたちデュノア社の方がたに一時フランスを離れることを告げ、必要なものを買い揃えて、フランスに戻らなくてもいいようにと引越すのかという程、荷物を作りました。

事実、この時、私にはフランスに変える予定などありませんでしたから。

そしてタクシーで空港まで行き、そこからイギリスで住む家に着くまでの記憶がないんですよね。

パパの話ではフランスの空港で私は気絶したらしいのですが……大方空港にいる全ての人が自分を見ているというような錯覚にでも囚われたのでしょう。あの頃は私の視線への恐れが一番強かった時ですから。

そして2週間ほどをイギリスでの生活に慣れるために費やし、そしてパパがお世話になっている研究所に行ったんですよね。

本来ならば他国のＩＳ研究機関にパパが入れたわけがないのですが……どうやらそこの研究にも元からパパが噛んでいた研究の成果が使われていたらしく、快く受け入れられたように記憶しています。

確かにデュノア社にスカウトされるまでは世界各国に技術を売っていましたからね。未だに私はパパが何の研究をしていたのかは知らないのですが。

「あら、あなたどなた?」

研究所に訪れた初日、特別に用意された部屋でパパを待っていた私に話しかけてきたのがセシぃでした。あの時なぜセシぃが部屋に入ってきたのかは知りませんが、当時の私のとっては知らない人が自分を見ている、というそれだけでパニックに陥っていたのを覚えています。

「大丈夫ですわ。わたくしはあなたに何もしません」

震えながら後ずさりしていた私にセシぃは優しく笑ってそう言ったんです。しかもハグのおまけつきで。私にとっては暴れてもおかしくない状況だったのですが何故かセシぃだけは平気でした。

もしかしたら、彼女が両親を失っているという影を背負っていることに気付いていたのかもしれません。

無意識の内に、そんなセシぃに近いものを覚えていたのでしょう。毎日のように私たちは話すようになり、それに伴い私も段々と視線に恐怖しないようになっていきました。とはいえ、数人に見られていても普通に受け答えが出来る、という程度ではありましたが。

セシぃは持ち前の面倒見の良さで時には私を外に連れ出し、時には私を引き連れて無理矢理研究所を案内したりしてくれていました。無理矢理とはいっても私が我慢できなくなるラインを弁えていたようで、私にとっても楽しかった記憶の1つです。多分、知らない人から見れば奔放な姉（セシぃ）に連れ回される妹のように見えていたんじゃないでしょうか。何をするにしてもセシぃの背中に隠れていましたし。

初めのころはイギリスの料理も味気ないものだと思いましたが2人で出掛けている間に美味しいお店を見つけたりして、だんだんとイギリス自体に愛着を持つようになっていきました。

ただ、イギリス料理を食べながらセシぃにフランス料理の美味しさを語っていた私は、やはりフランスに帰りたかったのかもしれません。いつかフランスを案内するなんてことを毎日のように言って

いましたしね。

そんな折、私とセシィが互いにＩＳ操縦者の卵であることを知り、話は自然と二人で戦ってみないか、という話になったんです。それがちょうどイギリスに行ってから2カ月が経つころですね。

そういった経緯があって互いに面識のある、少しヴァネッサさんに似ていた女性の研究員を立会人とした模擬戦を週に2、3回するようになりました。まだ私達は専用機なんてものも持っていなかったので互いに訓練機を使っての試合でしたけどね。

それでも互いに向き不向きがあることは分かっていたので私はいつも接近戦闘を得意とする訓練機を、セシィは射撃装備が豊富な訓練機を選んでましたね。

そして、その頃から互いに適性が高かった私達の実力は伯仲していたようで、私のとってもセシィにとっても模擬戦は楽しい遊びでした。殴っても、殴られても痛くないですし。

それで、私達の様子を見ていた研究員の方が私達の戦闘データを取りたいと言い出したんです。セシィは私のことを思いやって断ろうとしたのですが、その当人である私はＩＳで戦っている時なら大丈夫という根拠のない自信からオーケーを出してしまったのです。

……その結果がセシィの昏睡。

セシィはあの時のことを私に語りませんが、私は何となく覚えています。

意気揚々とＩＳに乗りこみ訓練場に足を踏み入れた私を待っていたのは２０人程の視線。

大丈夫、大丈夫、と言い聞かせていたはずがいつの間にか早く終わらせないと、早くセシィを倒さないと、という思考に変わっていき、私を案じたセシィが一歩歩み寄ってきた瞬間、開始の合図も待たずに彼女を押し倒し一心不乱に殴りつけていたのです。

その後セシィが昏睡状態に陥ったということは恐らく彼女のシールドエネルギーが切れてからも、他のＩＳによって取り押さえられるまで殴り続けていたのでしょう。

それから、私は大事な人を傷付けることが怖くなって、視線を浴びると何もできないようになりました。ＩＳを兵器と認識したのもこれが原因ですね。

それからセシィが目を覚ますまでは毎日、面会時間の許す限りセシィの病室に行き、それ以外の時間はずっと自分の部屋に閉じこもっていました。本当にお腹が空くまでごはんも食べずにただ座り込んで後悔していました。

なんで、私はデータを取ることをオーケーしちゃったんだろう。

どうして、私は自分を止めることが出来なかったんだろう。

セシィが目覚めなかったら私はどうなっちゃうんだろう。

同じことばかりを考えて、しかも最後はいつも自分のことばかり。

そんな自分が嫌で泣き続けて。

結局、セシィが起きた日も嫌われてしまうんじゃないかと思っていけませんでした。

その次の日も見舞いに行こうとしない私にパパが怒鳴り、無理矢理、本当に引きずられるようにしてセシィの病室まで行きました。

後にも先にもパパが本気で怒鳴ったのはこの時だけですよ。

それで、セシィの病室に入ったら入ったでセシィが泣いて謝りながら私に抱きついてきました。何が起きたのか、セシィがなんで怒っていないのか、全く状況が分からずただひたすらオロオロしていた私です。

セシィが落ち着いてから聞いてみれば、アリサを止めてあげられなくてごめんなさい、ということだったらしいです。昨日、目が覚

めてから病室に来ない私のことを考えて、嫌われてしまったのではないか、私がセシィを傷つけたことで辛い思いをしているのではないか、と心配していた、と。

私は自分のことしか考えていなかったのに、セシィはずっと私のことを考えていてくれて、本当に優しい友人を持ったことと自分の情けなさで今度は私が泣きました。

２０分ほど私の事を慰めてくれたセシィのぬくもりは今でも覚えていますし、感謝しています。

◇

「きぃぃぃー！　また負けましたわ！　あれほど皆さんと研究を重ねて、授業時間中にもイメージ・トレーニングまでしましたのに！」

「でもほら、何度か私も危なかったし……というか授業は真面目に受けてください」

「その余裕が余計に頭にきますわ！」

うーん、１年経ってもセシィは負けず嫌いなままだなぁ。

それにしても本当に皆強くなってるんですよね。特にここ２、３カ月で急に戦いにくくなってきました。

セシィが良く使うわたしの踏み込みを妨害するのもそうですし、シャルもなんだか銃弾狂（トリガーハッピー）もかくやと思わせるほどの連射で妖精（フェアリーダンス）の加護を確実に封じてきますし。ラウラに至っては奇襲以外はほぼ全ての攻撃がＡＩＣで止められるようになっちゃいましたしね……私も越界の瞳欲（ヴォーダン・オージェ）しいなぁ。

「でもほら、セシィもいつの間にかインターセプターって叫ばなくても展開できるようになってましたし、」

「それはずいぶん前から出来ました！　今までは、貴方が展開させ

てくれるような時間をくれなかったからお披露目出来ていませんでしたが……」
「皆さん……伸びしろが合っていいですよねぇ」

最近完全にカゲロウの自己進化プログラムも沈黙しちゃいまして……そろそろ稼働時間が５０００時間を上回りそうだったんですけどねぇ。あとは私自身のＩＳ適性がどれくらい伸びるか、という程度でしょう。いずれ皆さんとも差をつけられちゃいますね。

「アリサさん、何を勘違いしていますの？」
「え？」
「わたくしも他の皆さんも、あなたのことを研究し尽くしているからアリサさんに勝てるようになってきたのです。それと同じことをすればいいだけですわ」
「……そっか、じゃあ皆の研究を始めないといけませんね。あぁ、織斑先生にたまには検査室に行けって言われたんでした。あの部屋久しぶりだから緊張します」

検査室なんて入学して一回行ったきりでしたからね。というか未だに何を検査する部屋なのかも分かっていません。

「……まだ、アリサさんに完全勝利することは難しそうですわね」
「そんなことないと思いますけど」
「いいから早く検査室へお行きなさい……はぁ、それだけの間検査室を使っていなければ伸び悩むのも当たり前ですわ」
「？」

◇

「それにしてもアリサさんには呆れますわね……はぁ」

「セシリア。ため息なんてついちゃってどうしたの？」
「あら、シャルロットさん。あなたも訓練をしていたんですの？」
「ちょっとアリサ対策を、ね。やっぱりフランス代表候補生の座を譲ってもらった形だから、バカにされないためにももうちょっと勝率を伸ばしたくて……」
なるほど。珍しくアリサさんの近くにいないと思ったら秘密特訓をしていましたのね。
アリサさんの話では最近はシャルロットさんの勝率が6割強ということでしたが……その勝率も明日からは下がっていくでしょう。
検査室に行っていなかったということは今まで殆どＩＳの調節などはしなかったのでしょうし……ＩＳ自体には割と無頓着なアリサさんですから十分あり得ますわ。戦う相手に怪我をさせる可能性を減らすことにしか気にしていませんから。
それでも私とは勝率５０％を保っていたのだとすると……まだまだ私の接近戦闘を見直す必要あるようですわ。
「セシリア、本当に大丈夫？　さっきから唸ったり黙りこんだり……熱あるの？」
「あなたも明日には同じことをする羽目になりますわ」
「そんな伝染（うつ）すことを前提で話さなくても」
「最近、ますますアリサさんに似てきましたわね……」
「え、えぇ！？　ど、どこら辺がかな？」
驚いた後に頬を少し染めるシャルロットさん……お二人の関係がどうなってるかも気になりますわ。ここのところアリサさんが私達に彼女のことを相談することも減りましたし。そういえば昔はそれこそ毎日のように皆さんと相談に乗っていましたわね……鈴さんはともかく箒さんやラウラさんは他に下心があったように思えますが。
まぁ、仲良くやっているのでしょう……あと、どこが似てきてい

るのかと言えば微妙に話が通じないあたりですわ。この辺りは一夏さんにも通じるところがありますわね。

「あ、そうだ！　セシリアってアリサのこと昔から知ってたんだよね？」

「ええ、とは言っても１２歳のころのことですわよ？」

「僕がアリサに初めて会ったのは１３歳の時だし、その頃は避けられてたから……だから、教えてくれないかな？」

避けられていた、というのは初耳ですわね。

シャルロットさんが転入してきてからすぐに――アリサさんにしては非常に珍しく――自分から話しかけて、仲良くしようとなさっていましたのに。むしろあの頃避けていたのはシャルロットさんでしたね。

「そのことは思い出さなくていいのに」

「まぁ、いいですけど……というよりアリサさん本人に尋ねた方が喜ぶと思いますよ？」

「……それは、ちょっと心の準備がつかないというか、先に少しでも知っておきたいというか」

また、指先を合わせてもじもじするシャルロットさん。お二人の関係は――どういう関係かは深く聞かないようにしていますが――良好のようですわね。安心しました。

「私が初めてアリサさんを見て思ったのは陰気な子という感じでしたわ」

◇

両親が死んでしまったわたくしは身元を引き受けて頂いた方ともギクシャクしていまして、研究所に出入りすることが多かったのですが、アリサさんを見たのはそんな時でしたわね。

特別に用意された広い部屋の角で小さくなって座り込んでいた彼女の姿は、両親が死んでどうすればいいか分からなくなっていた頃のわたくしの姿と重なったのです。

研究所の中では初めて見る自分と同年代の少女に興味を抱き彼女のことを研究員の方達に尋ねて行くうちに、彼女がフランスから客員研究員として一時的に出向してきた方の娘だということを知ったのですわ。

それで、その方――つまりアリサさんのお父様ですが――に彼女のことを聞いてみると、アリサさんの心の傷を話し出し、最後に優しい表情で仲良くしてあげて下さいと言われたのを覚えています。とはいえ、当時のわたくしは捻くれていたので自分の半分にも満たない年の少女にも敬語を使う情けない男だと思っていましたが。

わざわざ断る理由もありませんでしたし、わたくしも暇だったので早速アリサさんのいる部屋に行ったのです。その時は驚きましたわ。アリサさんは本当に怯えた表情で、腰も抜けていたのでしょう、足と手だけの力で何とかわたくしから離れようとしていたのですよ。彼女は最初から壁に背を付けていたことにも気付かないでですわ。

その姿があまりにも不憫で、気付いたら駆け寄って抱きしめていました。何かを言った気もしますが必死だったので私も覚えていませんわ。

それからは毎日話したり、彼女がある程度他人からの視線に慣れることが出来るように連れ出したり、妹が出来た気分で楽しかったですわ。事あるごとにわたくしの後ろに隠れるアリサさんは本当に可愛らしかったです。あれでいて未だに寂しがりやで甘えん坊なところもありますからね。

そんなある日、偶然、わたくし達2人が共にＩＳに乗ることが出

来ると知り、研究員の方を巻き込んで模擬戦を繰り返していました。今となってはバカなことですが、当時のわたくし達にとってのＩＳはどこまでいってもオモチャでしたので、本当に楽しく戦っていたように思いますわ。

そんなある日、わたくしとアリサさんの戦闘データを取りたいという話が持ち上がったのです。

最初、わたくしはやめるべきだと言ったのですが、視線が怖いはずのアリサさん自身がやりたいと言ったので大丈夫なのでしょうと思い承諾してしまったのですわ。結局、その楽観のツケを自分で払うことになってしまいましたがね。

ここら辺は私が勝手に話していいことではないので、知りたければ直接アリサさんに尋ねて下さい。

その事件のせいで一時は仲違いしてしまうかとも思ったのですが、幸いなことに私が気にし過ぎていただけのようで、むしろさらに仲良くなりましたわ。たった半年間の思い出ですが、一番楽しかった記憶ですわ。

◇

「長々と話しましたけど、考えてみればあなたの知りたかったことではなかったかもしれませんね」

おそらく、シャルロットさんは昔のアリサさんの可愛かったところなどが聞きたかったはずですわ。そこら辺のことはアリサさんも恥ずかしがってなかなか言わないでしょうし……肝心なところで外してしまう自分の頭が少し嫌になります。

「ううん、なんであの時アリサが僕に話しかけたのかが分かったか

ら。それに初めて模擬戦をした時の言葉の理由もね」
「あの時？」
「……えっと、だから、本邸でのこれ」
これ、と言ってシャルロットさんが指をさしたのは彼女自身の額。
……あぁ、あの話の女性とはアリサさんのことだったのですね。
思い返してみれば確かに彼女が言いそうなことですわ。
「間接的に僕はセシリアのおかげでアリサと知り合えたことになるのかな？」
照れながらそう言って彼女は自分の部屋に入っていきました。中からは、きっとラウラさんが頬が紅いのを指摘したのでしょう、にぎやかな声が聞こえてきます。
「あぁ、アリサさんが明日から強くなること、言い忘れてましたわ」
きっと言えば落ち込みながらも喜ぶのでしょう。私も含めてアリサさんの周りにいる全員が彼女の強さを目に焼き付けているのですから。
「ふふふ……一夏さんとアリサさんのどちらかが次期生徒会長、なんて言う新聞部の憶測も間違いではないかもしれませんね」
検査室に1年間行っていないということはアリサさんがＩＳ適正Ａだったのも1年前の話で……流石に適正ＳはないでしょうがＡ＋になっていたりするかもしれませんわね。
「……皆さんを招いて今日の戦いの反省点を見つけ出しましょう」

9／EX1．Comment est-ce qu'Arisa ont f

原作から一年後、オリ主は何故かヒロイン陣に強さを期待されています。
調子が出なかったのはずっとＩＳの調整をしてなかったからだよ。
という話でした。
連続更新は次で止まりそうです

10. La nouvelle venue est beaut? chi

「転校生は中華美人」

なんかこの時点で内容読まなくていいくらい中身の予想が立ちますね（汗

１０万ＰＶとユニークアクセス１万達成しました！
呼んでくれている方々に感謝を

10. La nouvelle venue est beaut? chi

ザザーン

「はぁ～～……やっぱりお風呂は最高ですね」
「日本人の心よね～」
「……楯無先輩って国籍上は日本人じゃないですよね」

4月も終わりが見えた頃、ようやく大浴場使用の許可がおりました。
というか先輩がいなければもっとのんびりできるんですけど……
まぁ、私も本気で嫌なわけではないので、2人での入浴はいいとしましょう。
でも……

「先輩……なんでわざわざ後ろに回るんですか？」
「うん？　アリサちゃんの背中は綺麗だから、触りたくなるのも仕方ないじゃない」
「嫌味ですか？　嫌味ですよね？」

先輩の背中の方が白くて、綺麗じゃないですか。って返事に困ったからって抱きしめないでください！
……うーん、それにしても楯無先輩の体つきってエロいですね。出るとこ出てて、腰もキュッとしてますし。だから胸を当てないでくださいって言ってるじゃないですか！　イラッとします！

「でも残念だったわね」
「なにがですか？」
「お風呂。結局、ボイラー点検がある日だけになっちゃったじゃな

い」

結局、1人の生徒のためだけにお風呂を開放する訳にもいかないという結論が出たのですが、その後の更なる山田先生の奮闘と、楯無先輩の謎の権力で本来誰も使えないことになっているボイラー点検の日だけは使っていいよ、ということになりました。

学園の責任者はなかなか柔軟な思考をしているようで……私としては有り難いものの、少し不安になります。

「使えるだけで嬉しいですよ。時間をずらすだけじゃ不安だったから日を分けることになったんですし。何はともあれ先輩のおかげです。ありがとうございました……先輩？」

素直な気持ちでお礼を言うと楯無先輩が目を丸くして私を見ました。

……確かに私はあまり素直ではないという自覚はありますが、お礼を言うべきときはちゃんと言いますよ？　というかあんまり見つめられても困ります。一対一なら怖くはないとは言えお互い全裸なんですし、恥ずかしさはあるんですから。

反応がない先輩を心配しましたが、やがてニマーという感じの笑みを浮かべて、私の手を取りました。

彼女にとって楽しいことを思いついたのは分かりましたが……悲しいかな、それが私にとっても楽しいこととは限らないのをこの数日間で思い知りました。

「アリサちゃん、髪洗ったげる」

「え、あ、はい」

有無を言わせない様子の先輩に連れられて鏡の前に座ります。こうやって俯瞰的に見てみると戦力の差は歴然ですね……バスト的に。

楯無先輩は、湯船につかるために纏めていた私の髪を解いて、手際良くシャンプーで泡立てていきます。

「アリサちゃんの髪の毛って綺麗だよねー。こういうのストロベリーブロンドっていうんだっけ？」

「染めてるだけですよ？　生え際も目立たないようにしてるだけなので茶色い場所とかないですか？」

「あ、ホントだ。でもなんでわざわざ？」

「秘密です」

転校してくるシャルロットに正体が気付かれないためなので、言えることではないですよね。

まぁ、半分習慣化しているというのもありますが、基本的には写真に残されても大丈夫なようにでしょうか。

「そういう意地悪する子にはお仕置きが必要よね★」

「えっ！？　ってひゃぁっ！？　先輩！？」

先輩のいわゆる白魚のような指による背中つーっ攻撃。というか背中は敏感なんですけど！　初めて会った時の一件でも十分わかってますよね！？

怒ってみせてもニヤニヤ笑うだけなので諦めてますけどね。最近、先輩はスルーするのが一番いいと気付きました。

……まぁ、スルーすらさせてもらえないのが常ですけど。

「それにしても先輩手慣れてますね。昔、髪の毛長かったんですか？」

長い髪を洗うのは慣れていないと難しいと思うのですが、先輩は苦労している様子もなしに手際良く洗ってくれています。

フランスでシャルロットに気付かれないようにとバッサリ切った髪の毛ですが、それから一度も切っていないので今は腰ほどまで伸びています。ここまで長いと確かに人に洗ってもらった方が楽なのですが、慣れていない人に洗ってもらうと髪が引っ張られたりして痛かったりするんですよ。

「うん？　ずっと今ぐらいのままよ。気持ちいい？」

「えぇ、まぁ」

んー、それなら才能なんですかね。いえ、人の髪を上手に洗う才能なんてものがあるのか疑問ではありますが。

「……昔はよく妹の髪をこうやって洗ってたのよ。それでじゃないかしら」

「妹さんですか」

「そ、４組の更識簪（さらしきかんざし）。機会があれば仲良くしてあげて」

他の組なら織斑君が拾わない限り関わることもないでしょう。先輩のお願いとは言え関わりたいとも思いませんし。

それよりも若干寂しそうな顔をしている楯無先輩の方が心配です。暗部のこともあるので簡単に自分の感情を見せる人でもないはずなんですけどね。

「先輩？　妹さんとはうまくいってないんですか？」

「……流すから、目瞑ってね」

先輩はそう言うなりシャワーヘッドを掴んでお湯を出した……んですけど先輩！？　まだお湯にもなってない、というかそれ完全に水なんですけど！？　もしかして私地雷踏みましたか！？

「先輩、待ってくだヒャンっ！」
「え？　あ、ごめーん。ぼーっとしてた★」
「……まさか、わ、わざと？」
「あら、ばれた」

じゃあもしかしてさっきの寂しそうな顔も演技ですか！？　いえ、分かってましたよ？　先輩があんな顔する訳ないですもんね。えぇ、分かって当然です。

「じゃ、流すね」
「はい……って水！　先輩これ水のままぁぁぁああ！！」
「あはっ♪」

……このあとも背中をつーっとされたり、くすぐられたりと入学して最初の大浴場をゆっくり満喫することはできませんでした。というか本当に背中は敏感なので勘弁して下さい……

「はぁ～、いいお湯だった」
「私は冷たかった記憶しか残りそうにないです……」
「ごめんごめん」

反省していない謝罪はタチが悪いだけですよ……
その後もなんやかんやと話して、寮の階段の前で先輩と別れました。なんだかお風呂に入る前よりも疲れた気がします。
これは早く寝るに限りますね。暖かい布団で寝ることを考えると少しウキウキします。
食事・入浴・睡眠は私のモチベーションを保つ重要な習慣です。

「重要な、習慣なのに……」

意気揚々と寮での私の部屋まで歩けば、その扉の前に立つ1人の少女。その傍らにはボストンバッグ。見た目は家出少女そのものですが……楯無先輩との絡みで一時的に鋭敏になった感覚がひっきりなしに警戒音（アラート）を鳴らしています。

つまり、面倒ごとだと。

そうと分かれば、まずは状況把握のための情報収集です。

まずは本当にあの部屋が私の部屋かどうかですが、階段の2階という表示を信じれば間違い無さそうです。むしろあの表示が間違っていたら何を信用して生きていけばいいのか分かりません。すこし言い過ぎましたね。

なら、実はあの女生徒は私の部屋に用があるのではなく寄りかかっているだけなのではないでしょうか？　あ、扉をノックしているので、その可能性も消えました。

では、私に用事があるならば誰なのか、です。もちろん私の知っている人ではないです。アジア圏、特に日本人にも見える相貌。肩ほどまで伸びた髪の毛を高い位置で結っているツインテール。その金色の留め金がよく映える黒髪。背は私より大きいですが、どちらかと言えば小柄。そして、貧乳。

知らない人ですが、心当たりはありすぎて困ります。しかも一方的に知っているだけですし、当然初対面です。

「はぁ……気が重いですね」

あんまり待たせるのも悪いので覚悟を決めましょう。いつから待っていたのかは分かりませんが、あまり苛立っていないようなので長時間待たせたということもないでしょうし、申し訳なさより疑問に思っていることを前面に出していきましょう。

「えっと、あの、何か用ですか？」

私が声を掛けたのに反応して女生徒――鳳鈴音（ファンザンイン）がこちらを向きました。立っているのが彼女という時点でどうなるかの予想は付いています。

最近、学校でも私の周りが騒がしくなってきましたし……自分の部屋くらい、ゆっくりさせてほしかったです。

「あ、ここの部屋の人？　よかった、寝ちゃってるのかと思った。私、鳳鈴音（ファンザンイン）、ルームメイトになるんだから鈴でいいわ。もー待ってたのよ。寮の部屋聞いたはいいんだけど鍵受け取り忘れちゃってさ。あぁ、名前で分かると思うけど中国人、とは言っても日本も第二の故郷みたいなものだけどね。これでも代表候補生なんだから。それで、えっと、あなた何組？」

おぉ……なんか矢継ぎ早に話されて何がなんだか分かりません。とりあえず何とか聞き取った最後の質問だけでも答えておきましょう。

「えっと、1組、です」

「あ、ホントに？　残念、私は2組だから別々のクラスね……って1組！？　じゃあ一夏、織斑一夏って知ってる？」

「えぇ、まぁ……クラス対抗戦にも彼が出るみたいですよ？」

さっきからすごい早口ですけど……もしかして緊張してたんでしょうか？　それで、待っている間に考えていたことをとりあえず言っている、とか。

「じゃあ、やっぱり1組のクラス代表は一夏なんだ……うん、やっぱり明日変わってもらおう。でもどうやって、」

「あの、とりあえず部屋入りませんか？」
「そ、そうね」

あれ、考え事の邪魔しちゃいましたかね？　でもルームメイトになる以上は決めていかなきゃいけないかともありますし、仕方ないです。

というのは建前で、私の部屋の前を通る生徒達が物珍しそうに見ていくのが気になるだけです。未だに学校以外での個人的な時間で私と話すのは一松さん達三人娘とセシぃ、楯無先輩にたまに織斑君という程度ですからね。それ以外の誰か、しかも美少女が私と話していたら注目されるのも当然です。

扉を開けて、彼女を招きますが……部屋もまだ汚くしていませんし中に入れても大丈夫なはずです。

というかルームメイトが来るなら山田先生や織斑先生を通すなりして知らせてほしいです。教えてもらっていたなら待たせないようにもう少し早くお風呂を済ませるよう努力したでしょう。先輩がいたので実際に早くすむかは甚だ謎ですが。

「へぇ、綺麗にしてあるのね……もう住み始めてから1カ月は経ってるのよね？」
「え？　あぁ、3月の終わりから使わせてもらっているので、ちょうどそのくらいですね」
「その割には生活感ないというか……あ、誉めてるのよ？」

言ってから気付いたのでしょう。受け取り方によって失礼な感想を謝られました。

私自身、面白味のない部屋だと思っているので気にしませんけどね。

「えっと、鈴音さん、ベッドはどっちがいいとかありますか？　私

は普段寝た方で寝ているので、希望があれば言ってください」
「んー、私もどっちでもいいんだけど……今日、先に寝る方が決めればいいんじゃない？」
「それもそうですね。あ、クローゼットの中の服は適当に押しやっちゃって結構ですよ」
「そ？　悪いわね」
「いえ、これから一緒に生活するんですし気を遣いすぎて困ることはないですよ」

まぁ、逆に言えば私にも気を遣うことを暗に求めているのですが。できれば織斑君を連れ込むときは事前に言ってほしいですし。
そうなったら三人娘の誰かの部屋に……一松さんと二木さんの邪魔になりますし、三好さんの部屋に泊まりましょうかね。

「不破さんって男の子みたいな服ばっか着てるのね。正直、もっと女の子っぽい方が似合うと思うわよ？」
「あー、まぁスカートみたいなフリフリしたのが落ち着かない……ということにしておいてください」
「なにそれ」

鈴音さんは私の言い回しに深く突っ込むこともなく可笑しそうに薄く笑いながら服をクローゼットの中にかけていきます。
というかあのボストンバッグの中にどうやってあれだけの量のものを詰め込んでいたんでしょうか。四次元ポケットの亜種に違いありません。
なんて、下らないことを考えていると、いつの間にか鈴音さんは手を止めて私を見ていました、聞きたいことがあるというような表情です。どうせ織斑君のことでしょう。

「ねぇ、一夏……じゃなくて織斑君ってどういう人？」

「呼びやすい呼び方でいいですよ。変に勘ぐったりはしないので」

つい、呼び慣れている名前で言ってしまったというように照れる鈴音さんは私的にもアリですけど……最近、二木さんの性癖に引っ張られてシャルのことを考えなくても女性に惹かれているような気がしないでもないです。

……勘違いということにしておきましょう。

「そう？　なら一夏って学園でモテてるの？」

いきなりストレートになりましたね。まぁ、そういう性格なんでしょうけど。

それにしても織斑君がモテているか、ですか……微妙に難しい問いかけですね。彼と付き合ってもいいという女子は確かにたくさんいるでしょうが、彼とじゃないと付き合う気がしないという程、彼のことを好きな人はそう多くもないんじゃないでしょうか。彼、人の名前と顔を覚えるのが苦手らしいですし、それの影響か彼が仲良くしゃべる相手というのも限られていますし。

今現在、鈴音さんのライバルになりそうな人と言えば……篠ノ乃さんくらいでしょうかね。彼女、暴力的ですから接し方を間違えなければ鈴音さんの圧勝でしょう。

まぁ、とは言えそういうことを言って篠ノ乃さんに睨まれるのも怖いので適当に答えておきましょう。

「モテてるか、といえばそうですね。微妙に珍獣扱いなような気もしますが……一応は自分の考えを持っているので私としても高評価ではありますよ」

「ふ、ふーん。アイツの考えとか聞いちゃうくらいには仲いいんだ？」

幼なじみを誉められていい気分になるかと思えば、むしろ鈴音さんは不満顔……というよりは心配顔ですね。

……あ、私も織斑君を狙っているんじゃないかって思ってるんですね。

「心配しなくても織斑君に惚れたりはしていませんよ。私は鈴音さんのライバルではないです」

今のところ私はいずれ転入してくるシャルロット以外に興味はありませんから……でもそれまでの間に鈴音さんと仲良くなっておくのもいいかもしれませんね。胸とか身長とか見てみても気が合う同志という仲になれる気がします。

「ら、らら、ライバルって誰が!?　私は一夏が変な女に付きまとわれてたりしないかが……そう！　幼なじみとして心配なだけで、」

「鈴音さんって朝強い方ですか？　もしそうなら私のこと起こしてくれると嬉しいです」

「え!?　う、うん。分かった」

照れ隠しはスルーするに限りますよね。そうした方がお互い被害が抑えられますし、さっきのに突っ込むと私も変な女に含まれることになりそうですし……いえ、あながち間違っていないとは思いますけど、さすがに初対面の人にまでいわれるほど一般的ではないつもりです。

もし一般常識に欠けるというなら……私の両親の影響でしょう。諦めるほかありません。

そしてありがたいことに私の目覚まし時計もお役御免になりました。実は機械音声で起きるのって苦手なんですよ。やっぱり人の声で起こされたいと思うのはわがままなんでしょうかね？

「それじゃ、明日も学校あるので寝ませんか？　個人的に今日はいろいろあって……」

今日は学校でも楯無先輩に絡まれていたので、お風呂をあがった時点でライフは尽きかけていたんですよ。

うぅ、思い出したら余計に眠たくなってきました。

「それじゃ、鈴音さん……おやすみなさい……」

「私はもう少し荷物解いちゃうから先に寝てて。あと鈴でいいってば」

「そですか……なら、鈴ちゃん……おやすみ……」

「鈴ちゃん!?　……ってもう寝てるし。あぁもう、ちゃんと布団かぶらないと風邪引くわよ」

10. La nouvelle venue est beaut? chi

私にとっては快挙である1週間連続更新でした。
しばらく冬眠するか記録が伸びるかは私の根気次第（

11. Une femme bizarre（前書き）

「変わり者」

前半は完全に酔った勢いで書いてました（汗
別にノクターン送りになるレベルじゃないですよね！

11. Une femme bizarre

「不破さん！　起きて、時間ヤバいのよ！　あぁもう！　起こしてあげるとか言わなきゃよかった……どれだけ寝起き悪いのよこの子」
「あと、5分……」
「最初にそれ言ってからもう30分経ってるのよ！」
「じゃあ……30秒」
「そこまで寝たいの！？」

コンコン

ノックの音に鈴ちゃんが離れていく気配がしました。これでまだ寝ていられそうですね。せっかくのシャルロットの夢なんですから、もう少し余韻に……

「えっと、誰？　って、ちょっと勝手に、」
「いーからいーから……あーやっぱり。アリサちゃんって本当に起きないのよね。あなたも苦労するだろうから、とっておきの方法を教えてあげる★」

んー？　なんか、いつも私で遊ぶ小悪魔の声がしますよー？　あ、小悪魔ってことはシャルロットですね。

「え？　そ、そんなことするの？　ていうか、毎朝そうしないと起きないの！？」
「うん。あ、でも怪我しないように気を付けてね」
「はぁ」
「じゃ、バイバイ♪」

んー、バイバイ小悪魔しゃるたん……私ももう一度夢の国へ、アリサ、いっきまーす……

「えっと……不破さん？　起きないか……お、起こすためだから仕方ないのよ？　もう時間もギリギリだしね？」

何をしたって起きませんよーだ……んぅ？　耳に息が……あぁ、フゥーするんですね。そんなことしたって私には、

ペロリ

「わひゃあ！？　り、りり、鈴ちゃん！？　耳舐めプレイなんてアブノーマル過ぎますよ！？」

「プレイじゃない！　な、なかなか起きなかったんだから仕方ないでしょ！　な、舐められたくなかったらちゃんと起きてよ」

「知り合って1日の相手に対する遠慮って物はないんですか！？　というか顔を真っ赤にするほど恥ずかしいならやらないでくださいよ！」

「だってさっきの人がこうしないと起きないって！」

「やっぱり先輩ですか！」

心臓の音が聞こえるほどドキドキしちゃうじゃないですか！　というかあれですね。これは仕返しが必要です。

ええ、私は何も悪魔じゃないのでハムラビ法典にならって仕返しをしましょう。目には目を歯には歯を。舐めには舐めを、です。

「え！？　ちょ、不破さん！？　なんで私をってまさか！？」

ばっと飛びかかって鈴ちゃんをベッドに押し倒します。体勢的にもいい感じです。

「あ、不破さんじゃなくて、アリサがいいです」

ペロ

「ひゃん！」

ペロペロ

「だ、だめ……力抜けちゃ」

ペロペロペロ

「ダメダメダメ！　奥に、と、届いてるってばぁ！」

……っは！？

目の前には私に押し倒されて服が乱れている鈴ちゃん。そしてヌラリと光を妖しく反射する小さな穴――もちろん耳のですよ？

えーと、ひょっとしなくても寝ぼけている間にとんでもないことしちゃいました？

というか、このあり得ない状況はまさしく楯無先輩の姦計によるものですね。私のせいじゃないです……とはいかないですよね。

「あー、鈴ちゃん？　大丈夫ですか？」

「アリサのばかぁ……遅れそうなのに、こんなんじゃ走れないじゃない」

お互い暴れ回っていたため息も荒いですし……確かに今走ったら酸欠起こしそうです。

「お、お詫びに、私が、送ります」
「え？　な、なに？」
なにって……女の子を運ぶための伝統的作法、お姫様抱っこですよ。
「喋ると、舌、噛みますよ」
「あ、不破ぁ、遅かったじゃん。てか転校生くるんだってさ」
もう走るだけでは間に合いそうになかったので、鈴ちゃんは嵐才流の縮地法を使って2組の担任の先生の下に届けました。ＩＳを使えない以上あれが最も速いはずです。格闘と併用することが前提の歩法のため、疲労もはしるのとあまり変わりませんしね。
それでも鈴ちゃんが早々に暴れるのを諦めてくれなければ共倒れだったかもしれませんが。
私の方も何とか間に合ったようです……
「おはよう、ございます……三好さん。その転校生なら2組に組み込まれるようですよ」
初日から遅刻ギリギリらしいですよ、と言おうか悩みましたが、隣の織斑君に聞かれて鈴ちゃんの評価が下がっても可哀想ですしやめておきました。
なにより、どうもほぼ完璧に私の寝起きの悪さが原因みたいですし。
「流石ぁ、クラス代表特権って奴？」
「えぇ、まぁ」

私の部屋に越してきたなんて、しかも今朝はお姫様だっこで届けたなんて言ったら野次馬わきそうですし、適当に誤魔化すのが良さそうです。

「でもさぁ、この時期に転入とか変じゃない？」

「それは織斑君に興味を持ったどこかの国が代表候補生を送り込んできたってことでしょう」

「あ、無理矢理ねじ込んだってことか。なるほどねー」

このＩＳ学園、転入するには余程高いＩＳ適正もしくはＩＳの知識があるか国の推薦がないと、転入試験すら受けられません。結局、転入生イコール代表候補生という図式ができあがるわけです。

ま、訓練機自体が十分に用意できないから入学の際の倍率も高くなっているわけですし、専用機を持っているくらいしないと学園としても受け入れたくないですもんね。

「あ、代表。転入生の話？　なんでも中国から来たらしいよ」

「そ、そうですか」

クラス代表になってからはや数週間、代表だいひょーと呼ばれるようになり、クラスメイトの方との距離が若干縮まりました。それでも大多数の方は遠巻きに私を見るだけですけどね。まぁ、クラスの人たちにも慣れましたが、やっぱり人付き合いは苦手なのでちょうどいいんですが。

「今日も遠くから愛でられてるねぇ、不破ぁ」

「ものは言いようですね……私的には愛でている、というより近付きがたいって雰囲気ですけど？」

「不破は怒らせなきゃ可愛いのに」

だから、暫定クラストップの三好さんに言われても困ります。あ、暫定っていうのはもちろんシャルロットが来たら変動するからですよ？

早く来ないかなぁ。

確か6月くらいに来るんだっけ？　今度社長さんに電話で聞いてみようかな。

「SHR始めるぞ」

あれ、いつの間にか織斑先生が来ていました。

朝から慌ててたせいで注意力が散漫になっていますね、

……というか、昨夜も今朝も時間がなくて、お弁当の準備ができませんでしたね。今日は食堂ですか。使ったこと無いので少し緊張しますね。

さて、1時間目が終わって、やはりクラスでの話題は中国から来た代表候補生。

鈴ちゃんがどれくらい強いのか、なんて話に花が咲いています。

「ま、中国の代表候補生だからって専用機持ちかは分からないし、そもそもクラス代表はもう決まってるんだから1組のクラス対抗戦優勝は可能性あるよね」

「――その情報、古いよ。2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

あれ？　これ鈴ちゃんの声ですよね？　なんか朝と様子が違う気がするんですが。

「鈴……？　お前、鈴か？」
「何恰好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」
「というか、鈴ちゃん、やっぱり朝の余韻が残ってぼーっとしてるんじゃないですか？」

私は記憶が曖昧なのでダメージ少なかったですけど、素面だった鈴ちゃんには刺激が強かったのでしょう。
だから変に意識してあんな堅い口調に。

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタたちは！　というかアリサ！？　せっかく忘れかけてたのに、思い出させないで！」

ショック療法が効きましたかね。元に戻りました。その代わりに顔が紅くなりましたが。
……多分、私の顔も同じことになっていますね。

「アリサさん？　知り合いですの？」
「セシぃ？　あぁ、昨日からのルームメイト。部屋に野次馬が集まったらヤなので内緒ですよ？」

ささささ、と寄ってきたセシぃに軽く説明します。それにしても女の子達ってなんでこんなに噂好きなんでしょうかね。

「だいたい、朝もアリサがあんな運び方するから周りから痛ぁ！？」

バシンッ！　という音に振り返ると鈴ちゃんが織斑先生に撃退されたところでした。

その後も授業中になにやらウキウキと楽しそうにしていた篠ノ之さんと、新たな専用機持ちを相手取るために織斑君の特訓内容を考

えていたセシィが出席簿の餌食に……
だから授業は真面目にって言ってるじゃないですか。

◇

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」

おー、やってるやってる。なんていうか、見事な言いがかりにお金が払いたくなりますね。
まぁ、出席簿で3回も叩かれれば八つ当たりしたくなる気持ちも分からないではないですが……っと、どうやら食堂に行くようですね。

「織斑君、私も一緒していいですか？」
「不破さん？　あれ、弁当は？」
「作り忘れちゃったんですよ。察してください」
「しっかり者の不破さんにしては意外だな」
「ヤですね。誉めないでくださいよ」

篠ノ之さんが怖い目で睨んでくるじゃないですか。ここまで堂々と喧嘩を売られると買うのも馬鹿らしいというか。勝てない相手に喧嘩を売るのを馬鹿にしたくなるというか。

「ふ、2人とも仲良く、な？」

別に殴り合いを始めるわけではないんですからいいじゃないですか。というか、私は篠ノ之さんに何もしてないので織斑君が彼女をどうにかしてください。敵意が向けられたら敵意を返すのは育った環境上仕方ないんです！

……とはいえ、今回は私がお邪魔させてもらっている立場なので我慢しますけど。

というか、篠ノ之さんが私を敵視する理由が分からないのですが、やっぱり単純に馬が合わないだけでしょう。

何を食べましょうかね。

「んー……悩みますね。カスレにコック・オー・ヴァン、ブイヤベース……鳥も野菜も食べたい気分ですしポトフにしましょう」

しかし、フランス料理だけでも随分揃ってるんですね。材料的に自炊でフランス料理を作るのも難しいですし、懐かしくなったらここで食べるのもいいかもしれません。

まぁ、ポトフは洋風おでんとも言われるくらいですから作るのは簡単ですけど、スープですから1人分だけ作るのも難しい……あ、鈴ちゃんがきたから今度からは多少量が多くなっても平気ですね。

「おまたせしました。というより私のことなんか気にしないで食べ始めていただいても構わなかったのですが……」

「まあ、せっかくだから。食べ始めのタイミングを合わせるくらい大したことじゃないしな」

「そうですか」

皆さんの料理が冷めてしまうことも考えた方がいいと思いますけどね。

篠ノ之さんのきつねうどんとか、鈴ちゃんのラーメンとかなんか伸びちゃうじゃないですか。

「2人ともごめんなさい。今度からは私のことを気にせずに食べちゃってください。料理は出来立てが美味しいので」

「ん、気にしなくてもいいわよ。食べたくなったら食べてたし」

「……そういうことだ」

今度は敵意も有りませんでしたが……やっぱり篠ノ之さんとは壁があるように感じますね。私としては誰とも敵対したくないのですけど。

まぁ、たまに私から煽ったりもしているので言えた義理でもないですか。

「あぁ、そういえば鈴ちゃんは放課後どうするんですか？　出かけようと思っているので案内くらいならできますよ？」

「あー、それだけどさ。一夏、久しぶりだし、どこか行こうよ。積もる話もあるでしょ」

デートですか。そういう理由なら私は1人で行きましょう。恋路を邪魔して馬に蹴られたくないですしね。

「なら必要な物があれば言ってくださいね。ついでに買ってきますよ」

「ん？　うーん、思いついたら連絡するわ。ありがと」

「――というか、一夏は私とＩＳの特訓をするから放課後は埋まっている」

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。あいにくわたくしは遠距離射撃専門なので大した力にはなれませんが……」

「そっか……ならやっぱりアリサに案内してもらおっかな」

あー、篠ノ之さんはいいとして、セシィは空気読みましょうよ。鈴ちゃんが頑張って織斑君を誘おうとしてたのに……蹴られますよ？

一歩引いた立場にいるセシィが訓練なんて言っちゃったら、鈴ちゃん的には篠ノ之さんの意地じゃなくて、最初からそういう予定だ

ったと思っちゃうじゃないですか。

「特訓ですか。私も急ぎ必要な物があるというわけではないので……そうですね。鈴ちゃん、私たちも織斑君の特訓に付き合いませんか？」

「そうですわね。アリサさんは一夏さんの白式と同じで接近戦のみの戦い方をしますし、一夏さんの特訓相手としては最適ですわね」

いやー、だからセシぃ、２回目ですけど空気読みましょうよ？ここは私をお勧めする場面じゃなかったでしょ？　篠ノ之さんは睨んでくるし、鈴ちゃんも裏切られたみたいな顔してるでしょ？

「いえ、私はあまり武器を使いませんし、そこらへんを篠ノ之さんと鈴ちゃんに任せればいいじゃないですか……私はそうですね。セシぃと模擬戦をして、その様子から学び取ってもらいましょう」

私たちは３人に直接干渉しないで、織斑君争奪戦は勝手にやっていてもらいましょう。

なにより、私が接近戦の手解きをするということになると篠ノ之さんの役目がなくなって、ますます敵視されそうですし、

「ううん、今日はやっぱりやめておくわ。それよりアリサ、寮内とか学校とか案内してくれない？」

「え？　あ、はい。じゃあ放課後迎えにいきます」

「気ぃ遣いすぎ。私から行くわよ」

んー……私にはそんなつもりないんですけど。人付き合いには慣れてないのでやっぱり鈴ちゃんの言うとおりなのかもですね。

セシぃにも、私はある程度の仲になった人に甘える傾向があるって言われたこともありますし、鈴ちゃんの世話を焼こうとするのも

そのせいなのでしょうか。
でも、なんで鈴ちゃんは織斑君の近くにいようと思わないんでしょう。私だったら好きな人の傍にはずっといたいですけど。

「あ、そろそろお昼休みもお終いですね。お先に失礼します。皆さんも遅れないように気を付けてくださいね」

まぁ、とりあえずは出席簿で叩かれないように早めに教室行きましょう。

◇

「今日の授業はこれで終わりだ。各自、復習を忘れないように。おい、織斑、お前もだぞ」

ふー、やっと終わりましたね。最近はようやく実用的な授業になってきたのでつまらなくもないですが、やっぱり授業というだけで疲れます。
何で俺だけ名指しなんだよ、と言って織斑先生に叩かれている織斑君は方っておいて、鈴ちゃんを待ちましょう。
でも案内する、なんて言っちゃいましたけど、学園内に案内する所なんて思い当たらないですね……2人っきりになりやすい隠れスポットとか紹介すれば喜んでもらえますかね。

「アリサ、待たせた？」

セシィと篠ノ之さんに引きずられていく織斑君に合掌をしてから数分、そーっと教室の扉が開かれました。
そこから現れたのはなぜだかキョロキョロと挙動不審な鈴ちゃん。

「まぁ、それなりに……織斑君ならもう特訓に行きましたよ？」
「そ、そう……あのアリサ」
「なんですか？」
「悪いんだけど、案内の前に寮に寄らせてくれない？」
別に構わないんですが、何をするつもりなんでしょう。私服に着替えてしまったら学園内を歩けませんし……
「ほら、慌ただしかったからメイクとかしっかりできてないし……」
あーなるほど、だから織斑君と一緒に特訓するのも断ったんですね。すっぴんでも十分に可愛いとは思いますが、乙女のマナーという奴でしょう。
ただ、織斑君がメイクに気付くか、そして気付いたところでその意味が伝わるか、という辺りは絶望的だと思います。
女の子って身嗜みに気を付けてるんだなー、程度にしか考えないでしょう。
「それでもいいのよ。どちらかと言えば一夏を誘惑する為じゃなくて、私が本気になるためなんだし」
「化粧で本気になるって……どこの戦闘部族ですか」
あ、でも化粧で相手に見られても恥ずかしくないようにするっていうのも、ある意味では自己暗示なのかもしれませんね。
手慣れた様子で自分の顔にメイクしていく鈴ちゃん。どうすれば自分が可愛く見えるかを知り尽くした化粧の仕方ですね。これも、全て織斑君を誘惑するために覚えたのだとすると……
やっぱり学園案内は織斑君関係で進めるのが良さそうですね。
「お待たせ」

「それじゃ行きましょうか。あ、メモ持った方がいいかもですよ？」
「？」
鈴ちゃんにとっては有意義な情報が満載でしょうから。
「まず、この部屋が織斑君の部屋です。ただ、織斑君はアクティブなので基本的に夜しかいないでしょう」
「2時間目と3時間目の間の休み時間にここにいると織斑君に会えます。でも織斑君はトイレに行く途中なので戻ってくるところを待ち伏せた方がいいですね」
「フィールドを使用しているとき、織斑君はこちら側のピットで着替えることが多いようです。織斑君と2人きりになりたいときは、勇気があるのなら入ってみてもいいかもしれませんね」
「あ、後これあげます。1組の時間割と利用教室が書いてあるので参考にしてください」
「あぁ、2人で内緒の話をするときはこの廊下の突き当たりを曲がって左手の教室を使うといいですよ。鍵が付いていないのでいつでも使えますし、特別な物がおいてある部屋が近くにもないので先生方もあまり来ません。ただ、私が教室にいないときはそこにいるので、使うときは予め言っていただければ控えます」
「他に知りたいことありますか？」
「……えっと、アリサって本当にアイツに興味ないの？」
「えぇ、恋愛対象としての興味はあまり。あぁ、詳しすぎるってことですか？　それは単純に織斑君の周りに起こる厄介事を避けるためですよ」

それに、今のＩＳ学園では彼の情報が最も価値が有りますからね。しかも皆さん独占しようとして情報を広めないので割と長く使えますし。

「じゃあ、さっきのこと知ってる生徒も多いってこと？」

「いえ、普段皆さんに教えるのはもっと小さいことですね。例えば織斑君が理解できていない授業範囲とか」

「なんでそんなことまで知ってるのよ……」

「席が隣だからですよ？　授業も退屈なので暇つぶしに織斑君を観察しているだけです」

彼、いろいろと顔に出やすいので判断も楽なんですよね。たまに直接、私に聞いてきますし。

「あ、そういえば、１組の皆で彼にＩＳについて教えているのですが、私の番のとき鈴ちゃん来ませんか？」

「いいのっ！？」

良いも悪いも、私としては織斑君のＩＳへの認識を聞いた時点で満足、というか今の状況は面倒なだけですから。

鈴ちゃんが変わってくれるなら私も楽できて万々歳なんですよ。

「そろそろ、織斑君たちの特訓が終わる頃ですね。タオルと飲み物でも持って行ってあげたらどうですか？」

「う、うん。ありがと……でも、なんでアリサは私にアドバイスするの？　この様子だと篠ノ之箒には何も言ってないんでしょ？」

照れたような顔つきから一転、鋭い目で私を観察する鈴ちゃん。

んん？　確かになんででしょうね。ここまで教えてあげるほどの

仲ではないのですが……やっぱ、セシィの言う私の性格のせいじゃないでしょうか。
　1日2日の関係でこうなってしまうのは普通ではないと分かっていますが……自分でどうこうできるものでもないんですよ。

「まぁ、ルームメイトのよしみということで」
「そ。じゃあ一夏に差し入れしてくるわ」

　また夜ね、と挨拶を交わして鈴ちゃんは走っていきました。
　あ、そうだ……

「先に飲み物に口を付けておけば間接チュウですよー！　彼なら間違いなく気付かないと思います！」
「な、なな、わぁ！」

　あ、転びました。
　私も部屋に帰りましょうかね。

11. Une femme bizarre（後書き）

次回、オリ主が鬱になります
いや、本当に（

12. La cicatrice（前書き）

「傷痕」

なんだか話がシリアスですが……
途中バラエティーをみて笑いながら書いていたので中だるみしています（汗

長くなりそうだったので更に2編に分けます。

あ、あと11話の時点でお気に入りが200件超えました。ありがとうございます。

12. La cicatrice

さて、鈴ちゃんはまだ戻ってきそうにないですし、何をして時間を潰しましょうか。

夕食の準備にはまだ早すぎますし、課題を終わらすのも大して時間かかりませんし……あ、そうだ、社長さんに電話しましょう。

プルルルルル、プルルルルル

「はい、もしもし」

「あ、社長さんですか？　私です。不破アリサです」

「おー！　アリサ君か。学園の方はどうだね？　あまり連絡がないから心配していたのだよ」

そういえば入学してからは社長さんと連絡を取っていませんでしたね。

「いろいろありましたが、今は普通に過ごせています。それで、娘さんとはどうですか？」

「ん……あぁ……進展はないな。まだ別邸の方に暮らしてもらっているよ」

「奥様はまだ認めてないんですね」

「あぁ、むしろ意地になっている節があってな」

本妻である彼女が認めてくれない限り、社長さんがシャルロットと暮らしたいと考えていても無理なんですよね。

強引に本邸に招いても、いつかのように本妻さんが逆上してかえって溝が深まりそうですし……シャルロットが別邸にいるということは未だに嫌がらせも続いているかもしれませんね。

「あの……社長さんも娘さんから敵視されているんですか？」
「そう、だろうな。なにせ葬式に行かなかったどころか墓参りすらろくにできていないからな……」
「その様子だと、２人だけで話すこともできていないみたいですね」
「シャルロット自身が私のことを恨んでいるからな。まぁ、私の身から出た錆だ。甘んじて受け入れるしかあるまい」

もとはといえば社長さんの不義理が原因なので、これに関して私は何も言えません。言えたとしても子供が言うべきことでもないのですし。

「奥様が受け入れられないのは、やはりシャルロットのお母様のことがあるからでしょうか……」
「それもだろうが、彼女が子供を産めない身体だからということもあるだろう」

自分がこんな身体だから社長さんが他の女に走ってしまった、ということでしょうかね？　そして、社長さんともシャルロットとも完全に血縁関係がない自分が孤立してしまうのではないかという恐れですね。

「社長さんが、奥様もシャルロットも愛していることを伝えられれば良いんですけどね」
「私は彼女たち両方を裏切ってしまっているから、簡単にはいかないだろう」

奥様にとっては不倫、シャルロットにとっては捨てられたわけですからね。

「それでも、」
「やらないと何も変わらない、だろ？　分かっているさ。何度も君のその言葉に背中を押されたのだから」

昔、何も考えずにいった言葉ですが、今になってみればその通りに行動することの難しさを痛感しますね。
何もしないで何も変わらない方が、何かして大事な何かが変わってしまうよりマシ。そう思ってしまうんですよね。

「もし、私がシャルロットとの関係を改善出来なかったら……君に任せても良いかな？」
「もちろんです」
「すまないな。君がシャルロットから距離を起きたがっているのは知っているが……やはり君のような同性の友人がいた方がいいと思う」
「気にしなくていいですよ」

シリアスな雰囲気なので口には出せませんが、距離を起きたいのもキスしちゃったことが恥ずかしかったからですし……
あの夜から2年。流石にシャルロットも私の顔なんて覚えていないでしょうから、これからはガンガン関わっていきますよ。
今思えば、私が照れたりしないでシャルロットの友達になっていれば、事態はもっと簡単だったのかもしれません。
その責任をとる意味でも、シャルロットと社長さん、それに奥様のこんがらがっている関係を清算するお手伝いはしないといけませんよね。

「それで娘さんはいつごろ転校してくるんですか？」
「早くて来月末だな……アリサ君、場合によっては男子として、という君の案を使うかもしれない」

「でもそれは……」

シャルロットに男装をさせ、２人目の男性操縦者として世界の注目を集めさせる最終手段。表向きは後がなくなったデュノア社の広告塔として、真相は奥様がシャルロットに嫌がらせをできないようにするためです。

仮に男装が発覚しても、世界を混乱させた張本人としてシャルロットは悪目立ちする。そうなれば、やはり簡単に手は出せないでしょう。

……ただ、その後のシャルロットの人生が辛いものになってしまうのは火を見るより明らかです。だからこその最終手段。

「そうなる前に、一度、私がフランスに飛びますよ」

「ありがとう。その気持ちだけ受け取っておくことにするよ。男装させて、仮にその事実が露見したとして我々が誠意を込めて頭を下げればそれで済むのだからね。それに何よりうちの問題だ」

「でもそうすると、ＩＳ開発許可の剥奪も有り得ますが……そこは私とカゲロウの出番ですか。手始めにイグニッション・プランに配属される予定のティアーズ型（モデル）、レーゲン型、テンペスタ？型を打ち負かしますよ」

トライアルに参加している第３世代型ＩＳ全ての問題点を露見させることが出来れば……しかもその問題点を第２世代型ＩＳのカゲロウで突くことが出来れば全ての機体の実用化予定は後退するでしょう。

そうなれば、汎用性も拡張性も高く、既に高いシェアを誇っているラファール・リヴァイヴの需要が多少の期間ですが伸び、フランスもデュノア社を簡単には切れなくなるはずです。

その期間の間に第３世代型を開発できればイグニッション・プランへの参入も可能かもしれません。

「無理はしなくていいと、」
「私は、私が守りたいもののためにＩＳに乗っているんです。そこは譲れません」

デュノア社を守ることはシャルロットを守ることに繋がるはずですから。
それにデュノア社に倒れられたら親父（パパ）が干からびちゃいますし、ヴァネッサさんにもお世話になりましたし。

「本当に、ありがとう」
「お礼は全てがうまくいってからにしましょう」
「そうだな……そろそろ仕事に戻るとするよ」
「また連絡します」

ふぅ……
しかしあんなこと言っちゃいましたが、第３世代型を相手取って、しかも操縦者ではなく機体の性能だけで勝つなんてことできるんでしょうか。はい、できませんね。
セシィとは何度か戦っているのでティアーズ型は大丈夫だと思いますが、他の２種は全くの未知ですし……他に良い手を考えないといけませんね。
それにデュノア社が第３世代型を開発できなければ意味がありません。でも、これは研究所の皆さん任せにするしかありませんし……なかなかうまくいきませんねー。
結局、シャルロットがシャルロットとして入学してくれるのが一番です。

「あ、そろそろ夕食の準備始めないと……どうせなので鈴ちゃんの分も作っちゃいましょう」

慎ましいですが歓迎会代わりということでいいですよね。
でも何作りましょう。
カレーは作り置きできますが、そうすると部屋に臭いがついちゃいますし……フレンチは材料的に無理。中華はむしろ鈴ちゃんに作ってもらいたいので、安易ですがハンバーグにしましょう。
タネだけ作っておいて鈴ちゃんが帰ってきたら焼きましょう。

「えーと、合い挽き、卵、タマネギ、人参、牛乳……よかった、足りそうですね」

ずっと私だけだったので2人分用意できるか不安でしたが十分足りそうです。
先にタマネギだけ火を通しといて……あ、鈴ちゃんってハンバーグのときはパン派ですかね？　でも日本も長いって言ってましたし普通に白いご飯でいいんでしょうか？

「とりあえず両方準備しておきましょう」

付け合わせの野菜は……無難に嫌いな人が少ないコーンとブロッコリー辺りにしておくのがいいですね。
ソースは……ケチャップに醤油、おろしポン酢から梅しそまで好みが分かれるので、これも全部すぐに準備できるようにしておきますか。
タマネギも飴色になってきたからいったん火から離して……材料混ぜちゃいましょう。余ることも考えて腐りやすくなるものはギリギリまで入れない方がいいですね。

バタンッ！

あ、鈴ちゃん帰ってきましたね。
それならやっぱり材料も全部混ぜちゃって、と。あぁ、パンかご飯かも聞かないと。

「鈴ちゃん、ハンバーグのときはパンとご飯、」
「ごめん、出てく！」
「え〝……？」

なんで？

◇

「戻って、きませんねぇ……」

鈴ちゃんが飛び出してから2時間強。もう9時も回って夕食には少し遅いくらいです。
かといって自分の分だけ作って食べている間に鈴ちゃんが戻ってきても申し訳ないですし……鈴ちゃんが自分で作るならハンバーグじゃないもの食べたいかもしれませんし。
帰ってくるのを待ってはいますが、ボストンバッグと共に大部分の服と毎日必要な類の日用雑貨が無くなっているので鈴ちゃんとしては帰ってくる気はないのでしょう。
誰の部屋に移ったのか分かったら届けてあげないといけませんね……
でもどうして出ていっちゃったんでしょうか。

「なにか、気に障ることしちゃいましたかね……」

思い当たる節は、あります。
私から鈴ちゃんへの異常なまでに過剰な干渉。

行きすぎたそれは人によっては……いえ、大多数の人にとって不気味に映るでしょう。セシぃや一松さん達のように受け入れてくれる人の方が稀なのは分かっています。

相手が勝手に疑心暗鬼に陥っていると言ってしまえれば楽なのですが、私のお節介が度を越しているというのは分かっていますから。

だから、人によっては私に大きな見返りを要求されるのではと考えるんでしょうね。

私のこれは、誰かと仲良くなり始めるたびに起こる一種の興奮状態みたいなもので時間が経てば普通に接することが出来るようになるんでしょうけど……それまでに私から距離を置く人が多いんですよね。

セシぃに言わせると私の行動の根っこには人に見捨てられてしまうのではないかという不安があるのだそうです。

私は人付き合いが苦手なのに人との関わり合いを求めているのですからその通りなのかもしれませんね……だから視線が怖いのに目立つことを本気で避けようとはせず、クラス代表なんてものにまでなっているのでしょうし。

きっと、その矛盾が余計に私のことを理解してもらう時の障害になっているのでしょうが。

人間は理解できないものを気味悪がり忌避する、というのは聞いたことがあります。

そう……キモチワルい。

鈴ちゃんも私のことをそう思ったのでしょうか。あの人たちみたいに……

――アンタ干渉してきすぎ。ホントにキモチワルいなぁ――

――ソレ、ウツるから近付かないでよ――

――■ねばいいのに――

「違い、ます……違う！　考えちゃダメ！」

今までで一番辛かった時の記憶（トラウマ）。普段は忘れている本能的な嫌悪に涙が出る。

考えてはいけない、と思うほど記憶の坩堝（るつぼ）にはまって抜け出せず、頭の中がソレ一色になってしまう。

普通の人とは違う醜い身体。見ただけで分かる異常。

自分は、周りで笑っている人と一緒になって笑う資格はない。私が周りから嗤われ、蔑まれる立場だから。

「違うって、セシィは言ってくれました……」

セシィはそんな子じゃないんです／それだってただの同情かもしれない。

ずっと私を支えてくれました／陰では私を軽蔑してたかも。

本当は私と関わることも嫌だった／いつも私に笑いかけてくれてました。

微笑みじゃなくて嘲笑だ／そんなこと……ないはずです

私（おまえ）は孤独だ／私（わたし）は、孤独？

違う。違う違う違う違う！

「カット！　……はぁはぁはぁ。今のは、危険でしたね」

分割思考は、自分がネガティブになっている時はヤバいですね。

思考の逃げ道を作るために悪い方悪い方へと考えちゃいます。

「そうです、セシィが私を軽蔑なんてするはずが……」

果たして、無いと言い切れるんでしょうか。

そもそも今までずっと迷惑をかけて、私から何かをしてあげられたこともなくて……そんな私がセシィの友達でいていいんでしょう

か。

それにセシぃだって、私のことなんてただの知人の1人で特別なことなんて何もないのかもしれません。私がセシぃを大切に思っていても、同じ感情を返してくれるとは限らないのですから。

「それに……セシぃは赤の他人でも困っていたら手を差し伸べずにいられない性格ですもんね」

たまたま私が手のかかる人間で、だからセシぃに助けられることもたまたま多くて……それを私が勘違いしてしまっているということはないでしょうか？

……いえ、むしろその方が自然ですね。

だって私は醜い身体をしていて理解不能なキモチワルい性格をしているんですから、セシぃみたいないい子が仲良くなろうと思ってくれるわけがないんです。

鈴ちゃんが出て行ってしまったのも当然のことで、仕方のないことなんです。

だから、私なんて……

「ただいま……ってなんだ、アリサ起きてるじゃない。なんで電気つけてないのよ」

「鈴、ちゃん？」

「ちゃん付けされるとくすぐったいから呼び捨てで……って、もしかして夕食食べずに待ってたの！？」

夕食……あぁ、そういえば鈴ちゃんと食べようと思ってハンバーグ用意してましたね。そういうのもキモチワルいって言われたことの一因だって分かってるのに。

……私はなにを浮かれてたんでしょうね。

あ、でもまだ鈴ちゃんの分もあるとは言ってないので挽回出来るかもしれません。

「あの、鈴ちゃん」
「だからちゃん付けやめてって言ってるのに……それで、なに？」

よし、言え私。
そのハンバーグは全部私の物ですから食べちゃだめですよって、いつもみたいな態度で。
そうすれば、今より鈴ちゃんに嫌われることもなくて……もしかしたら、意地汚いって笑ってくれるかもしれなくて。
だから、言った方が賢い選択なんです。

「そのハンバーグ……」
「うん？」
「一緒に、食べませんか？」

それなのに……言えませんでした。
なんで、鈴ちゃんが笑っているというだけで希望があると思ってしまうんでしょう。
いえ、理由なんて分かっています……
だって、まだ、嫌いとは言われていませんから……今まで、そうやってきたんですから。
今までは散々でしたが、それでもやっぱり人の優しさというものは信じたいのです。

「何言ってんのよ」

ホント、何言ってるんでしょうね。
私が触っただけで病気にもなるとまで言われたこともあるのに…

…そんな私が作った料理なんて食べられるわけ、

「いいに決まってるじゃない……ってアリサ？　どうしたの？」

「ぇ……？」

「えって……アンタ泣きそうな顔よ？」

そんなわけ……あれ？　そんなわけ無いんですけど……

だって、食べてくれるって言っただけで何も解決してないんですし。

でも、鈴ちゃんが帰って来てくれたってことは出ていった原因は私じゃないってことかもしれませんし……確認、しましょうか。

そうしないと、私は鈴ちゃんと一緒にいられない。

「あの、鈴ちゃん。ご飯の後で話したいことがあります」

「ん？　真面目な顔しちゃってどうしたのよ」

今は笑っていてくれている鈴ちゃんですけど、私のことを話した後も同じように笑ってくれるのでしょうか。

◇

「それで、話したいことあったんでしょ」

「はい。でもセシぃ……セシリアを呼んだので少し待ってて下さいね」

「セシリア……あぁ、イギリスの代表候補生だっけ？」

これから話すことはセシぃにも隠していたことなので一緒に話してしまいましょう。

もう落ち着いてきたので流石にセシぃが私のことを見下していたなんて思っていませんが、やっぱり話しておくべきだと思うんです

よね。それでセシィがどういう判断をするかは分かりませんが……私がセシィを信じるために必要です。

……セシィの性格ですから私の事情を気にするより、私がセシィを信頼できていなかったことに怒るかもしれませんが。

「アリサさん、入りますよ？　大事なお話と言っていましたが……本当に大事なことですのね」

部屋に入ってきたセシィは私の顔色を見てすぐに察してくれます。鈴ちゃんはそんな私達を見て首を捻りますがやっぱり茶化したりしないで真面目な顔をしてくれていました。

「まずは、これを見てください」

パジャマ代わりにしているTシャツを脱いで背中を見せる。そこにあるのは山田先生に見せた刀傷とは違う傷。右肩から背中の上側に広がる火で炙られた痕。キモチワルいそれを見た2人が息をのんだ気配がしました。

12．　La　cicatrice（後書き）

今回の話で8，9話でのあからさまだったり細かすぎたりする伏線を回収しようと思いましたが長くなりすぎでした（

そしてようやくコード・シャルロット発令

というか……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー（以下ネタ

ヤバイ。シャルロットヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ。

シャルヤバイ。

まず可愛い。もう可愛いなんてもんじゃない。超可愛い。

可愛いとかっても

「ありがとウサギ２０匹ぶんくらい？」

とか、もう、そういうレベルじゃない。

何しろ可愛さ無限。スゲェ！なんかボクとか言うの。ツンデレとか素直クールとかを超越してる。ボクッ子だし超可愛い。

しかもまだ可愛くなってるらしい。ヤバイよ、可愛くだよ。

だって普通は二次キャラとか可愛くならないじゃん。だってアニメのキャラがだんだん変わってったら分かんないじゃん。キャラとか超違うと分かんないっしょ。

キャラが急に可愛くなって、一話のときはまどか押しだったのに、三話のときは即答でマミさん押しとか泣くっしょ。

だから普通はキャラとか可愛くならない。話のわかるヤツだ。

けどシャルはヤバイ。そんなの気にしない。成長しまくり。最も古くから存在する二次オタとかに聞いてもよくわかんないくらい可愛い。ヤバすぎ。

無限っていたけど、もしかしたら有限かもしんない。でも有限って事にすると

「じゃあ、シャルの可愛さの限界ってナニよ？」
って事になるし、それは誰もわからない。ヤバイ。誰にも分からないなんて凄すぎる。
あと超強い。高速切替。横文字で言うとラピッド・チェンジ。ヤバイ。強すぎ。雪片で切りつける暇もなく死ぬ。怖い。
それに超頭が良い。超インテリ。それに超のんびり。半年とか平気で待てる。半年て。小学生でも進展するよ、最近。
なんつってもシャルはロマンが凄い。装備とかパイルバンカーだし。

うちらなんてロマンとかたかだかネタで出てきただけで上手く扱えないから見せ武器にしたり、代替装備とか作ってみたり、無かったことにしするのに、
シャルは全然平気。パイルバンカーをパイルバンカーのまま扱ってる。凄い。可愛い。
とにかく貴様ら、シャルの可愛さをもっと知るべきだと思います。
そんな可愛いシャルと同室のラウラとか超裏山。もっとがんばれ。
超がんばれ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

自分でロマンの下り書いておいて思ったこと
あれ、これどう考えてもここのオリ主のことじゃ（ｒｙ

13. Le contresens mental（前書き）

「歪な心」

シリアスダーク始まるよ！（
もう当分書かない！

13. Le contresens mental

「これを知っているのはクラスの一松さんたち3人と更識生徒会長だけです」

楯無先輩に知られたのは事故でしたが、一松さん達にはこの傷痕を刀傷に見えるようにしてもらうために見せました。

彼女たちになら嫌われても大丈夫と考えたからです。それに、言いふらすような人ではないと思いましたから。受け入れてくれたのは嬉しい誤算です。

「こんなの、キモチワルいですよね？」

山田先生に見せるとき、わざわざ刀傷にしたのも、本当の傷痕を見せてキモチワルがられたくなかったからです。刀傷ならキモチワルがられても私の傷ではないので。

「その傷は、いつからありましたの？」

「9歳のときに学校で起きた火事で……セシィにはずっと隠していました」

「そんな、なんで……」

「この傷を見せて、セシィに嫌われたくなかったからです……！」

「アリサさんはそんな傷痕だけで、わたくしとの友情がなくなると、そう思っていたのですか？」

「だって、あの人たちは皆……避けたから」

だからこんなキモチワルい傷痕、見せられるわけがないじゃないですか。この傷のせいで辛い目にあったのに……

「……ねぇアリサ、もしアンタと同じ傷痕を持ってて、それを気にしてる子がいたとして、その子をキモチワルいって思う？」
「鈴ちゃん……そんなの当たり前じゃないですか。だって、この傷痕もキモチワルいものなんですから」
「アリサはキモチワルがられたくないのに？　自分が嫌なら他の人もそう考えるって分かるのに？」

本人が言われたくないと思っているのですから言うことはしません。でも、キモチワルい傷痕をキモチワルいって思うのはしょうがないじゃないですか。

「だって……これはキモチワルいんですよ？　醜いんですよ？　それは……その事実は変わらないじゃないですか！」
「じゃあなんで私たちにそれを見せたのよ！」
「受け入れて欲しかったからです！　キモチワルくたって、優しくしてほしいから……」

それなら、私は皆さんの傍にいていいんだって……そう思えるじゃないですか。

「アリサ、アンタ最低よ。傷痕とか、そんなの関係ない。考え方が腐ってるわ……！」
「あ、鈴さん！？」

鈴ちゃんは、怒っちゃいましたね。
もう私のことなんて見たくないとでも言うように出て行ってしまいました。
腐ってる、なんて言われたのは初めてかもしれません。自分が滑稽で、自分を嗤いたくなってきます。

「……アリサさん。どうして彼女が怒ったか分かりますか？　わたくしも今回ばかりは頭に来ていますが、わたくしまで出ていってしまってはアリサさんを正すことができないので、今だけは我慢してあげますわ」

鈴ちゃんとセシィが怒ってる理由、ですか？　私が傷痕を隠していたから……違いますね。それならもっと早いタイミングで怒るはずで……

怒って出ていってしまった時に話していたことは、どうして私が傷痕を見せたか……あぁ、

「見たくもない不快なものを我欲のために2人に見せたから、ですね。そうですよね。あんなもの見せられて喜ぶ人なんていませんよね」

「アリサさん、あなたという人は……怒りを通り越して呆れてしまいますわ」

「でも、それ以外に怒る理由なんて、」

「見くびらないでください！　確かにわたくしはアリサさんの傷痕を見て息をのみました！　酷い傷痕だとも思いました！」

あぁ、とうとうセシィまで本気で怒らせてしまいました……

私の目の前が絶望で暗くなっていくのが分かります。もう、セシィとも話すことができなくなるかもしれませんね。

でも、全部、私のせいですから甘んじて受け入れるしかありませんよね。

「ですが、あなたの傷痕をキモチワルいとは、一瞬たりとも思いませんでした！　わたくしをアリサさんの思いこみで最低な女にしないでくださいませ！」

「え……？　でも、それはおかしいですよ。だって、この傷痕はキ

モチワルいんですよ？　あの人たちは、ずっと、そう言ってたんですよ？」

だから、私はずっとそう思っていたんです。
私の傷痕はキモチワルいものだと理解した上で生きていかなきゃいけないって……この傷痕があるから、私はもう普通じゃない見下される人間だって……！

「誰なんですの……その、あの人たちというのは」
「それは……」
「無理強いはしませんわ。アリサさんにとって良い思い出ではないのは分かりますから。でも、もう私に隠し事はしないでくださいませ」

確かに思い出したくありません。
でも、真摯な態度でいるセシぃ、彼女に話せば何かが変わるかもしれません。今までもそうやって私を支えてきてくれましたし。

「私が中学校に入ってすぐのとき……」

何が変わるかはわかりませんが、やっぱり、人の優しさに賭けてみたいと思います。
少しずつ、でも全てを話しましょう。

「そんなことが……」

私の話の悲惨さにでしょうか、セシぃは閉口してしまっています。
でも、あの出来事があったからセシぃに会えたとも言えますし、そういう意味ではラッキーだったのかもしれませんね……

「私はセシィに会えてよかったと思います」
「それは、わたくしもですわ。ですが……ごめんなさい。なんと声を掛ければいいのか分かりません」

バタン！

「あぁもう！　アンタ達は頭ばっかで考えてるから暗くなるの！」
「鈴、ちゃん？」

◇

「考え方が腐ってるわ……！」

言ってしまった。
しかもアリサの反応を見たくなくて逃げ出した。
あんな、背中の上半分をほとんど覆う程の火傷跡（きずあと）があったら考え方が歪むのも仕方ないのに。
親がいないどころの話じゃない……あんなの、女の子にとっては酷過ぎる。
人付き合いが苦手で距離感を巧くつかむことが出来ない子なんだとは思ってたけど、きっとあの傷痕のせいで色々あったんだと思う。

「最低なのはむしろ私ね」

言った瞬間に後悔して、部屋の扉を閉めてから一歩も動こうと思えない。
多分、人と仲良くなりたくて仕方のない子なのに……だって、そうじゃなければ自分の傷痕がキモチワルいものだと勘違（わかって）いしているのに、それが見られるリスクが伴う人付き合いなんてするはずがな

い。
距離感というものを考えないで知り合ってすぐに近付いてくるのも……相手を思いやり過ぎるのも相手に見捨てられたくないから。
自分（アリサ）と一緒にいるメリットの方がデメリットより大きいと思ってほしいから。
人と仲良くなるのにメリットなんて必要ないなんて、簡単なことも分かっていないに違いない。

「私も、なんですぐに怒っちゃうかなぁ……セシリアって子は抑えてたのに」

背後の扉から2人が言い争っている……というよりセシリアが説教をしている声が聞こえる。
人の感情を決めつけるな、と彼女は私が思っていた通りのことを言うけど、多分興奮してる状態で言っても説得力がない。
アリサは怒られる＝嫌われていると思っている。それは私が怒鳴った時の反応で伝わってきた……普通、人間は怒鳴られた程度であんな絶望したような眼はしないんだから。
多分、今まで彼女に辛く当ってきた人は傷痕のことをなじったから。ようするにイジメ。
あの人たち、アリサが言っていたのがそのイジメの犯人何だと思う。
イジメの理由なんてせいぜい3つしかない。
イジメられる人間に何かしらの問題がある場合、つまり嫌われていた場合。
ただ、遊び半分で適当に選ばれてイジメられる場合
そして、

「嫉妬……よね」

ドアの向こうで語られているアリサの話によれば、彼女は中学に入ってからイジメられるようになった。
火傷自体は9歳の頃のものだって言ってたから、小学校ではうまくやれていたんだと思う。学校での火事だからアリサのほかにも同じような傷があった子がいたのかもしれない。
でも中学校では学校が違ったのか、クラスが分かれたのかアリサの事情を知っていて、アリサを守ってくれる人はいなかった。
しかもアリサは可愛らしい見た目をしている。何かの拍子で12歳ごろからほとんど見た目が変わっていないなんて言ってたから随分目立ったと思う。
しかもイジメられた事で性格が歪んだのだとしたら、中学校に入ったばかりの頃は中身は普通の美少女。モテないわけがないし、他の女生徒から嫉妬の目を向けられないわけがない。
そんな、ある意味完璧な女の子の背中に見るも無惨な傷跡があったら？
アリサのことを快く思わない女子たちにしてみれば彼女を引きずり落とすいいネタにしかならないだろう。
男子だって、いくら美少女だからって多数の女子に立ち向かおうなんて思うやつはいない。

「一夏が……アイツがいてあげれば違ったかもしれないけどね」

でも、あんな男は滅多にいない。
中学生にもなれば女尊男卑という常識を知ってしまっているだろうし、そうでなくても男は外聞を気にして女子以上に周囲との関係を気にする生き物だ。皆がイジメてるという理由でイジメに合流する方が、1人の女の子をかばうよりも賢いと勘違いしている。
多分、断片的に聞こえてくるアリサの話を総合するとそういうことだ。
そういえば、2組の同級生に私とアリサが同室だということを言

ったら、不破さんは人に見られることを嫌がる性格みたいだから気を付けてね、と言われた。
その時は人見知りなんだろうと思ったけど、事情を知ってみればそうじゃない。
アリサは自分が見られることじゃなくて、自分の傷痕が見られてるんじゃないかと怖がってるんだ。
もし気付かれてしまったら嫌われてしまうから、裏切られてしまうから。

「アリサにしてみれば傷痕が見られたから嫌われてイジメられたんだと思ってるのね」

最初から周囲の女子が自分のことを疎ましく思っていたなんてことは思いもしなかったんだろう。
心から人を疑うことが出来ない不器用な性格の結果。
どうして嫌われたのか理解出来なかった心は、理解できるようにアリサから世界の捉え方をゆがめた。
自分の傷痕はキモチワルいもので、だから自分はキモチワルい人間で、キモチワルいから嫌われる。
アリサにとって嫌われるのは自分に原因があるからで、だから自分が人にとって有益だと判断してもらえれば嫌われないと思っているのかもしれない。
だけどそれは他人から見れば異常な執着心で不気味に映る。
実際、私もそう思った。
そうやって人との乖離(かいり)はどんどん広がり、それを防ごうとして歪みも大きくなっていく。

「バカじゃないの……全部、1人で背負っちゃって」

周囲の環境のせいなのに、そんなことにも気付かない。

むしろ気付きたく無くて目を逸らしているというほうが正しいのかも。気付いてしまったら今までの行為が全部無駄なものだったと分かってしまうから。

だからアリサからしてみれば絶対にそんなことに気付いちゃいけないって、心のどこかで思ってる。

でも、気付こうとしないから今までと同じことをして、アリサの歪みはさらに大きくなっていってしまう。

「だから、気付かせてあげないと……」

そうじゃないと、アリサは進めない。

……なんて、なんでほとんど初対面の子にここまで感情移入してんだろ。

「自分も不幸だから、他人（アリサ）の不幸も分かるって？　調子に乗りすぎよ鳳鈴音（ファンリンイン）」

私は親がいなくなっても一夏との思い出があったから我慢できた。多分、あの子にとっての一夏はまだいない。そして、それはセシリアでもなければ当然私でもない。

でも、私にだって立ち直れなくなりそうなくらい辛かった記憶はある。親の離婚とアリサの傷痕のどちらがより辛いかなんて比較に意味はないけど、辛いのは自分だけじゃないと分かってもらうことくらいはできるはず。

傷の舐め合い？　上等よ。それに昔から言うじゃない。怪我なんてものは唾でも付けときゃそのうち治るのよ。

むしろそう考えると舐め合いも悪いものじゃないわね。

若干、能天気なことを考えながら扉を開ける。

まずは考え過ぎて頑固になってるこいつらに思い知らせないとね。

こういう時、言葉なんて後回しでいいのよ。

◇

「鈴、ちゃん？」

出て行ったはずの鈴ちゃんが、なんで私の目の前に立っているんでしょう……？

「そうよ。話してると舌噛むわよ」

「わ……！」

ただでさえ近かった鈴ちゃんが更に近づいて来て……あ、叩くんですね。私が騙してたようなものですから。それに怒らせてしまいましたし。

叩かれるのを見ていたら、つい反撃してしまうかもしれないので目を瞑りましょう。

これ以上、鈴ちゃんに嫌な想いはしてほしくないです。

視界が遮られたことで気配に鋭敏になり、さらに一歩近づいてきた鈴ちゃんに身を固くする。

憎悪から叩かれるのは怖い……でもこれ以上嫌われる方がもっと怖いんです。

そうして、いつ叩かれても大丈夫なように目蓋に力を入れた私を鈴ちゃんは、

ギュッ

と、抱きしめられてます……？

「そんなに怯えなくても、私はアリサを叩いたりはしないわよ。だ

って、アリサの傷はキモチワルくなんてないんだから」
「そんなわけ……」
「なに？　疑ってる？　なんならその傷舐めてあげてもいいんだからね」
「鈴ちゃん……やっぱりアブノーマルさんなんです……？」
「そんなわけないでしょ……」

じゃあ、本当に私の傷痕はキモチワルくないんですか？　鈴ちゃんのことを信じてもいいんでしょうか……？
本当にセシぃが言っていた通り、私が決めつけてしまっていただけなんですか？
だから、２人は怒ったんですか？　私が嫌いだからじゃなくて、私が自分を卑下していたから？

「本当に……？」
「だから……大丈夫よ。私はアリサに何かしたりしないわ」
「っ……！」

鈴ちゃんもずるい人です……そんなこと言われたら、信じるしかないじゃないですか。
昔、セシぃが私に言ってくれた大事な言葉を、この傷痕を見た上で言われたら……嬉しくて泣きたくなっちゃうじゃないですか。

「泣いていいわよ。それで落ち着いたら……せっかくだし３人で大浴場でも満喫するのもいいかもね」
「もう、ぐすっ……大浴場は解放されてないですよ？　うぅ……」
「そこはほら……セシぃがどうにかしてくれるわよ」
「私に丸投げなんですの！？」
「私はアリサを宥めないとだし……」
「セシぃ、ありがと」

「本人もこう言ってるし」
「う〝……」

セシぃには悪いですが、ちょっとズルさせてもらいました……泣きながらでも分割思考は働きますから。
なにより、この3人で入るお風呂は楽しそうです。
今までは母様（ママ）か楯無先輩としか入ったことはないですが大丈夫な気がします。
そうだ……

「セシぃ……先生に頼むなら、ぐすっ、山田先生に。でも、ひっく、その前に、生徒会長を連れて行って下さい」
「わたくし生徒会長と話したことなんてありませんわ!?」
「だいじょぶ、さっきのこと軽く説明すれば、ぐすっ、分かってくれます……多分」
「多分!?」
「だって、だってぇ……」

たまたま2人がそうなだけで、他の皆はやっぱり私のことキモチワルいと思っているかもしれないじゃないですかぁ！　でも、楯無先輩が力になってくれれば多分使わせてもらえる気がするし……！

「あーセシリア、この子刺激しないでよ。アリサ？　きっと大丈夫だから、分かってくれるから落ち着いて？」
「ぐすっ、はい……みっともないところを見せました」
「みっともないといえば今朝の寝相の方がすごかったわ……ほら、セシリアも早く」
「わ、わかりましたわ」

ふぅ……セシぃも出て行きましたか。

やんわりと、私を抱きしめている鈴ちゃんの手を外して起き上がる……鈴ちゃんが形容しがたい目で私を見てますね。写真に残しておきましょう。はい、チーズ。

「って、嘘泣き!?　いつから!?　最初からじゃないわよね!?」
「最初は本気で泣いてましたよ？　ただ、鈴ちゃんがセシィにお風呂のこと投げた辺りで可笑しくなっちゃって」
「2度目の泣きは演技だったと……アリサ、将来女優になったら？」

私としては俳優よりもケーキ屋さんとかになりたいんですけどね。というか、横であんなコントされたら誰だって泣きやんじゃいますよ！　笑い出して空気をぶち壊さないように頑張ったんですから褒めてほしいくらいです！
ということで頭撫でを要求します！

「はいはい……アリサってさぁ」
「はい？」

髪を梳くように撫でてもらいながら鈴ちゃんの方を向くと微笑ましそうな顔をしています。

「クールな感じで実は甘えん坊なのね」
「残念ながらセシィに言われ慣れてるので照れたりしませんよー？」
「紅くなってるのに？」
「……見間違いです」

なんですか？　……あ、甘えん坊で悪いですか!?　誰か困るんですか!?
こ、困るなら我慢しようとは思いますけど……鈴ちゃんも笑顔ですし！

「はぁーい♪　ってあら？　アリサちゃんもう元気になっちゃってるのか。お姉さんちょっと残念だなー」
「楯無先輩……まぁ、いいです」
「あら？」

私に何かしらのリアクションを期待したのでしょうが、今は頭を撫でてもらっているところなので動きたくないんです。んー極楽。

「せ、先輩。速すぎですわ……ってあら、アリサさんもう立ち直ったのですわね」
「うん、主にセシぃのおかげで」
「？」

事情を知らないセシぃと先輩が首を捻りますが、私と鈴ちゃんは分かっているのでただニヤニヤするだけです。
というか本当のことを言ったら怒りそうなので墓まで持っていく秘密にしましょう。
あれだけシリアスな流れの中で張本人が笑うの我慢してたとか、セシぃに知られたらお仕置き確定ですし。

「あれ？　というかアリサちゃんってこんな感じだったかしら……」
「友人といるときはこんな感じです」

ニヤリと先輩に笑みを向ける。
ポカンとしてる先輩の表情はレアですね。これも写メっときましょう。はい、キムチー。

「って、アリサちゃん！？　今すぐそれ消して」
「お断りします」

「あ、というかさっきの私のも消してね？」
「お断り……します」

あれー？　和ませようと思ったのに、先輩も鈴ちゃんも怖いですよ？　顔は笑ってるのに眼だけ笑っていないというか……
せ、セシぃ、助けてください！　ってまださっきのこと考えてるんですか！？　私のピンチに気付いて下さい―！

「け、」
「「け？」」

２人がかりでプレッシャーかけてくるなんて、初対面のはずなのに息ぴったり過ぎませんか？　とりあえず、こうなったら……

「消しません！　絶対に！」
「「待ちなさい！」」

三十六計逃げるにしかず！
大浴場まで逃げ切ります！

……そういえば、大浴場まで逃げても行き止まりですね。

13. Le contresens mental（後書き）

ネガティブになると思考が支離滅裂、ポジティブになると行動が支離滅裂になるオリ主（

最後で一気にひっくり返す！　というのは逃走手段ですね（

ほんと、シリアスって難しい。。。

ネギまの二次っぽいものを昨日投下しましたがこっちが一段落するまで書かないのでご安心を（

というかオリジナルのどうしよう！

14. S?rieusement, l'homme irrite vraiment

「真面目な話、実際にいたらこの男ウザいよね」

ごめんなさい、超短い（

前回が暗めだったので今回はオリ主が若干はっちゃけます。

14. S?rieusement, l'homme irrite vraiment

「でさ、一夏のやつ、ぜんっっっぜん的外れなこと言っちゃってさ！　全く、おごるってなによ！　毎日作ってあげるってのはそういう意味じゃないでしょ！」

そーですねー。

「しかも、ちゃんと約束は覚えてる、とでも言いたげな態度！　もう、信じられない！」

大変ですねー。

返事が適当なのは仕方ないんです。だって鈴ちゃん、ずっと同じ話してますよ？　もう2週間くらい経ってるんですよ？

まぁ……家出、というか部屋出？　の原因が私じゃなくて、織斑君と同室になろうと強硬手段に出ただけだったのは安心ですが。

「ってアリサ！？　話聞いてる！？」

「へ？　あぁ、もちろん鈴ちゃんの酢豚は食べてみたいです。私、あんまり中華を作るのは得意じゃないので」

「って違、」

「あとエビチリとか……あ！　チンジャオロースとかも食べてみたいです」

「いや、だから、」

こういう時は押し切るのが一番です。1日1回くらいまでは聞いてあげようと思いましたけど、もう10回を超えて内容も覚えちゃいましたし。

それに、何より時間が……

「あと胡麻団子でしたっけ？　杏仁豆腐もいですねー」
「あの……」
「あ、そろそろ家を出ないと間に合いませんね。私は朝食いらない人なので問題ないですが、鈴ちゃんは辛いんじゃないんですか？」
最近は日本人にも朝食をとらないひとが増えてきているらしいですが。
あぁ、ヨーロッパ圏だと朝食抜きは割合普通なんです。

「えっ、もうこんな時間！？　気付いてたなら先に言ってよ！」
「ええ、鈴ちゃんが17回目のプロポーズ失敗談を始めなければすぐにでも伝えられたんですけどね」
「私のせい！？　……うん、私のせいね。というか早く着替えなきゃ！」
「鈴ちゃんの制服はそこに、鞄の中に必要なものは全部いれてあります。というか、髪の毛は私が結ぶのでぱぱぱっと着替えちゃってください」
えーと、鈴ちゃんの髪留めはこれで化粧ポーチは……これですね。流石に恋する乙女がすっぴんはまずいでしょうし。
とりあえずツインテ完成。我ながら美しすぎる出来映えです。

「ん、ありがと。でも最近ずっとこんなだけど、アリサは準備できてるの？」
「えぇ、鞄は教室においてありますし……それに最近こうなのはほとんど鈴ちゃんの責任ですよ」
「悪かったわよ……というかソツなさすぎ」

誉められてるのに呆れられてる気がします。
朝はお風呂入って薄く化粧して、手ぶらで登校。楽で良いじゃな

いですか。

「課題は？」

「やたら大きいもの以外は学校で終わらせてます」

「……はぁ」

む、私の完成された生活スタイルに何の問題があるのでしょう…

…と、化粧もこんな感じで良いですね。

「ん、ってアリサなにしたの！？」

「あれ、気に入りません？　私的には可愛いと思うんですけど」

「いや、そうじゃなくて……アリサ、人に化粧するの慣れてるんだ」

クラスの三人娘がいろいろ教えてくれますからねー。特に三好さんのテクはすごいです。

顔と化粧の化学変化です。もちろん良い意味で。

それに手先は器用な方ですし。料理とかも得意なんですよ？　特にケーキ。

「ま、食堂行きましょうか。急いだおかげで普段とほとんど同じ時間ですよ。あ、鞄もってあげますよ」

「そうね……アリサはきっと良い奥さんになるわ」

「？」

食堂で番茶を1杯。鈴ちゃんの朝食に付き合うようになってからの新しい習慣です。

なぜか周囲から物珍しそうに眺められて居心地悪いんですけどね。

「そりゃ、金髪の女の子がよりによって番茶なんて飲んでたらね…

…私まで見られてるじゃない」
「番茶、美味しいじゃないですか」
論点はそこじゃない、とツッコミを入れられました。鈴ちゃんのツッコミは地味に痛かったです。
……分かってます。
でも鈴ちゃんの朝食の方がすごいと思うのですが……
「こんなの普通よ？　結構これくらい食べる子いるみたいだし、少なくとも金髪番茶よりはね」
「でも、好きなんだから仕方ないじゃないですか！　少しくらい付き合ってくれたって……！」
「わ、バカ、声大きいわよ！　というか、微妙に端折るのやめて！？」
へー、あの子たちそういう関係なんだー。しかも同室らしいよ。
え、じゃあ夜とかキャーキャー。
……という感じの声が周囲からちらほらと。鈴ちゃんも紅くなっちゃって可愛いですねー。えぇ確信犯です。
「アリサ、性格悪いわね……というか視線が嫌なんじゃないの？」
「ヤですよ？　でも、友達と一緒にいると平気みたいです……鈴ちゃんが私を受け入れてくれましたから」
適度に感動的な雰囲気を混ぜると、鈴ちゃんも静かになるのも最近分かってきました。
基本的に人が好い鈴ちゃんに軽く微笑みかけます。
それを見た周囲が、何かいい雰囲気、キスするのかも、と囁きあいますが……全部聞こえてるんですよね。やっぱり確信犯ですけど。
というか彼女たち、内緒話する気ないでしょう。

あぁ、視線に慣れてきたというのは本当ですよ？　というより見られても、大丈夫と言ってくれる人がいることを知ったからでしょうか。

「あ、織斑君ですよ？　呼びます？」
「呼ばない。というか、もう行こう」
「そですか」

まーだ、怒ってるんですね。まぁ、分からないでもないですけど……怒ってみせても無駄だと思うんですよ。
彼、朴念仁ですし。
カロリーの無駄です。

「おはようございます」
「あ、だいひょー、はよー」

……鈴ちゃんをできるだけ宥めてきましたが、効果は薄いでしょうね。織斑君が悪びれていないのが主な理由なのですが。
というか女の子が怒っていたら気にしてあげないとダメですよ？
相手の気を引きたいポーズなんですから。
あ、当然本気で怒ってる場合もありますが、まぁ、どうなっても私の責任ではないですね。
挨拶もそこそこにして席に座り、隣の織斑君にちらりと目を向けると……普通ですね。
鈴ちゃんのことも少しは考えているみたいですがそれだけです。
なので余計にたちが悪い。
心配しているならもちろん、苛ついているのだって鈴ちゃんが彼にとって小さくない存在だという証明になるのですが……まぁ、こういう人だってのは分かってます。

「織斑君、鈴ちゃんと仲直りできましたか？」
「仲直りもなにも鈴が勝手に避けてきてるだけだぞ？」
「はぁ……でも鈴ちゃん怒ってるんですよ？」

言外に謝っちゃいなよユーと伝えてみますが柳に風。いい性格してますねこの男。

「でも心配じゃないんですか？　このまま嫌われちゃったら、とか」
「ま、少しすれば元に戻るだろうしなー」

甘いですね。
やっぱり織斑君の見通しというのはトレハロース並みに甘いです。鈴ちゃんの一世一代のプロポーズをただの酢豚をおごるだけの約束だと言ったのに、自然に仲直りできる程度なわけがないじゃないですか。
というか鈴ちゃんは優しい方だと思います。私なら即刻絞めころ……さないですけど、肉体的苦痛を与えているところです。
あ、でも私の場合、相手はシャルになるから……許しちゃうかもなぁ。

「というわけで今すぐ謝りに行ってください」
「どういうわけだよ……というか不破さんには関係ないだろ？」
「鈴ちゃんは私のルームメイトですよ？　関係ないわけがないじゃないですか」

毎朝グチられてますし。慰謝料請求したいくらいなんですよ？
というか、

「謝るべき時に謝れない男の人って……」

「なんだよ？」
「ちょっと、お灸を据えてあげましょう。放課後アリーナでフルボッコにしてあげます」
「あぁ、望むところだ！」

私の言い方が頭に来たのか織斑君はヒートアップ。見方によっては男らしい態度かもしれませんが、女の子の純情を弄んだ男の言葉と捉えると最低ですね。
まぁ、本人がプロポーズをプロポーズと思っていなかっただろうことが唯一の救いでしょうか。
というか、周りの女子から、やめときなよー、勝てっこないって、この前負けたばっかじゃん、と言われる織斑君が不憫です。
まぁ、だからといって手加減したりはしませんが。
……あちゃー。戦うと思ったら身体が火照っちゃいました。授業にでる気分でもないですね……

「一松さん。保健室に行ってくるので先生に伝えてください」
「え？　不破さん大丈夫？」
「ちょっと身体が熱いだけですから」
「えっ！？」

あれ？　一松さんが一瞬で真っ赤になっつんですけど……？

「あー、不破ちゃん気にしないで？　イッチーはエロ子だから」
「ふたちゃん！？」

あぁ、あー、なるほど……汚れてますね。
まぁともかく、

「頼みましたよ、エロ松さん」

「うん……うん？」

ツッコミが行方不明ですよ！？　私のキャラじゃない下ネタだったのに放置されたら困りますってば！

◇

午前中は全部サボっちゃいましたが、おかげで元気いっぱいです。思う存分お説教できますね。肉体言語で！

今日は……第３アリーナですか。知らない内にセシぃと篠ノ之さんも来ることになっていますが、まぁいいでしょう。

というか、今日は私が思う存分に織斑君をいたぶ……いじ……鍛えるので、何しようとかの議論は無駄ですよ？

多分終わった頃には動けないでしょうし。

対抗戦は来週なので、よほど大破させない限りは本気で攻撃しても構わないでしょう。

「じゃ、開けますよ」

バシュッとちょっとカッコいい音を出してドアが開きます。

「待ってたわよ、一夏！」

あ、いないと思ったらこんな所にいたんですか。腕組みして不適に笑っていますが……おかしいですねぇ。お昼差はまだ期限悪かったんですが。

「貴様、どうやってここに――」

「一応、ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ……まぁ、わたくしは構いませんが」

「ま、一夏関係者だから問題ないでしょ」

というか、今から私と織斑君が戦う理由を考えたらむしろ張本人ですからね。

「ほほう、どういう関係か、」

「というか、現状このメンツで一番関係ないのは篠ノ之さんなので自重してくださいい」

「なっ！？」

もともとは私と織斑君との試合なんですし。

「じゃ、じゃあセシリアはなんなのだ！」

「まぁ、私と織斑君と鈴ちゃんの共通の友人ですね」

あ、遠回しにあなたは友達じゃないですって言いたいわけじゃないですからね？　誤解しないでくださいよ？

「まぁ、静かにしていれば中に入ってくれても構わないので」

「偉そうだな……」

そりゃ、今の状況に限って言えば、篠ノ之さんよりも力がありますからね。

関係者かどうかは私の匙加減です。

「性格悪いやつだ……それと一夏、おかしなことを、」

「はーい、もういいでしょ？　満足したら退いて。今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ」

ま、鈴ちゃんの言う通りなんですが……言葉は選びましょうよ。

篠ノ之さんが隅でいじけ始めたじゃないですか。

「だ、大丈夫ですよ篠ノ之さん。あなたが主役になるときだってきっとありますから……」

「ほ、本当か？」

「はい。だから元気出してください！」

「不破、お前、良い奴だったんだな」

あれー？　意図していないところで好感度あがりましたよ？　まぁ好意なので受け取りますけど。

私が篠ノ之さんを慰めている間に、鈴ちゃんの方の事態も進展していました……喜ばしくない方向へ。

「なんだ、やめるならやめてもいいぞ？」

「誰がやめるのよ！　あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでたよ、馬鹿」

馬鹿って……子供の喧嘩ですか？

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　馬鹿はアンタよ！」

「うるさい貧乳」

貧、乳？

この男、貧乳と言いましたか？　私の目の前で？

えぇ、分かってます。私に言ったわけではないということくらい。

でもですね……

トンッ

「っ！？」
「私、この言葉はピータンと同じくらい嫌いなんですよ……？」
軽く押して転ばせた織斑君に、キスができるほど顔を近づけて囁く。
ふふ、照れてる場合じゃないですよ？
「え、ピータン美味しいじゃない……というか私が怒る場面じゃないの！？」
ダメです。あれは製造過程を先に知ってしまったので食わず嫌いになりました。
「というか私より少し大きいアリサが怒るっておかしくない？　言ってて泣きたくなってきた」
「セシぃの胸で泣いていいですよ」
「余計に悲しくなるわ！」
「ちょ、不破さん……悪かったから退いてくれ、重た、」
パァン！　……バシバシ！
重たいって言おうとしましたよね！？　筋肉ついちゃって他の女の子よりも体重を気にしてるのに！
……思わずはたいた後に追加攻撃しちゃったじゃないですかもう織斑君なんて嫌いです！　顔も見たくありません！
「あっ、アリサ！？　あぁもう！とりあえず一夏！　私も怒ったんだからね！」
「いや最初から、」

「それもアンタのせいでしょ！　あぁもう頭来た！　手加減してあげようと思ったけどもういいわ！　――全力で叩き潰してあげる」

14. S?rieusement, l'homme irrite vraiment

そろそろ1巻も終わりに近いですね。
シャルがアップを始めたようです。

15. Quel go?t ?tait le premier baiser

えーと、タイトルの意味ですがネタばれるので
今回は読者様の方で調べて下さい（
まぁ、軽度のバレですけどね。

ちなみに私の場合はビターでした。
国生さゆり、というか渡り廊下的な意味で（

15. Quel go?t ?tait le premier baiser

クラス対抗戦、１組対２組の試合まであと数十分です……が、私は２組の代表選手の準備を手伝っています。

理由は当然、織斑君が私のことをペチャで重いなんていう失礼きわまりないことを言ったからです。

私、怒ってるんですよ？　って今朝も言ったのですが困ったように笑うんですよ。まるで、今私のことを見ている２組の方たちのように……お邪魔してまーす。

全く、織斑君は失礼を通り越して、私のことを馬鹿にしているとしか思えません。

「ほらアリサ、そんなしかめっ面してると周りが怯えるわよ？」

「元からこういう顔なので諦めてください」

２組の皆さんには申し訳ありませんが、今の精神状態で笑うなんてことできません。

「部屋では結構笑うのに……」

「そんなことありません。それと、あんまり動くと失敗しちゃうじゃないですか」

「ごめんごめん」

準備といっても私はただの操縦士なのでＩＳの整備には関われません。私がやっているのは……まぁ、乙女の戦闘準備でしょうか？

有り体に言えばメイクですね。

離れた観客席にも魅せられるように少し大胆に目元や頬をいじって、リップは鈴ちゃんのＩＳ、甲龍に合わせた紅。

うん、鈴ちゃんの活発さと生意気加減をうまく表現できたと思い

ます。

「生意気加減は表現しなくていいわよ！」

どうどうどう。

あんまり暴れないでくださいよ。汗で崩れにくいメイクだとはいえ、崩れないわけではないんですから。

「はい、じゃあアリーナに出るまではこれで首筋を冷やしておいてくださいね」

「はいはい……でもさやっぱり化粧濃すぎない？」

保冷性の高い薬剤をつめて凍らせたビニールパックを鈴ちゃんに手渡す。本当は腋とか内腿も冷やして体温を下げちゃった方がいいんですけど、戦闘に支障が出ますし。

「観客席からはそれでも足りないくらいですよ」

「そうじゃなくて、一夏から見てだとってこと」

「んー、織斑君のスタイルは動きながらの接近戦なので、やっぱりそれぐらいじゃないと気づいてもらえないと思います」

「でも、ハイパーセンサーあるし……」

なるほど、確かにハイパーセンサーで見れば分かっちゃいますね……

「でも、それって試合中にハイパーセンサーを使ってまで鈴ちゃんの顔が見たいってことになりませんか？」

「な、なななな！？」

ボンッ！　と鈴ちゃんの顔が真っ赤になりました。ギラギラした

目で見つめられているところでも想像したのでしょう。

「それに……皆さーん！　この鈴ちゃん、どう思いますかー！？」

「「「超かわいい！」」」

「ということです」

「……はぁ」

それにしても2組の皆さんはとてもノリが良いですね。ま、鈴ちゃん自身が割と開放的な性格で親しみやすいからということもあるのでしょうけどね。

多分1組の中で私が今の鈴ちゃんと同じ立場になったらこうはいかないと思います。もちろん、私としてもそれでいいのですが。

「でも、今日、なんですよね」

無人ＩＳ（リモートコントロールスタンドアローン）による襲撃事件。

遠隔操作か独立稼働か、そのどちらかの新技術が利用されてる……とかなんとかでしたっけ。最後に読んでから記憶的には5年経ってるわけですし細かいところを覚えていないのも仕方ないですね。

鈴ちゃん、セシぃ、織斑君の3人で解決できるはずなので手だし無用ではあるのですが、たまには全力で攻撃してみたいんですよね。

基本的に専用機を使って本気で攻撃すると操縦している人にも怪我させてしまうことがありますし……なので本気を出せる機会ってなかなか無いんです。もちろん気分的にはいつでも本気ですけど、この場合は機体の性能をフルに使っての全力ということになるんですかね。

「あ、時間ね。じゃあ皆、行ってくるわ」

ヒラヒラと後ろ手を振ってアリーナに向かう鈴ちゃんの背中を押

す2組の人たちの声援。なんかカッコいいです。

「鈴ちゃん！」

「ん？」

「怪我しちゃだめですよ？　私はここから見てますから」

専用機持ちとはいえ生徒同士のルールのある戦い。そもそも怪我することの方が少ないので鈴ちゃんは意外そうな顔をしましたが、すぐに笑って頷いてくれました。

あの無人ＩＳの狙いは織斑君なのでしょうが鈴ちゃんに危害が加えられないとは限りませんし、鈴ちゃんのことですから自分から突っ込むでしょうし。まぁ、無駄だとは分かっていてもさっきみたいなことは言いたくなっちゃうんですよ。

◇

鈴ちゃんの甲龍の特徴は非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の棘付き装甲（スパイク・アーマー）など、尖った印象を相手に与える攻撃的なフォルム。実際、砲身射角がほぼ無制限な衝撃砲『龍咆』による中距離戦闘と二刀一対の青龍刀『双天牙月』による近距離戦闘と、殆ど死角はないですから攻撃特化機といっても間違いではないでしょう。遠距離攻撃を苦手としていますが、戦争でもない限りは龍咆の射程より遠くから攻撃されることもそうそうありませんしね。

「でも、基本的には中距離戦闘特化型の甲龍に接近戦で追い詰められるってのはどうなんでしょうかねぇ。せっかくの白式も宝の持ち腐れですよ」

相変わらず正直な戦い方しかできない織斑君です。ちょっとがっかりですね。

それに、見たところ双天牙月では白式のシールドバリアーは突破できません。なら、肉を切らせて骨を断てばいいのです。零落白夜は一撃必殺と言っても過言ではないのですから。

「あーあ、離れられちゃった。もう試合は決まりですね」

雨霰と白式に向かって放たれる龍咆。あれは単純に言ってしまえば空間への加圧作用なのでまず視認は不可能です。ハイパーセンサーを使うことで空間の歪みと大気の流動の加減から軌道を算出することはできますが、同時に2つのことを考えられない人間の脳ではどうしても算出から行動に移すまでに誤差が生まれます。

ええ、私なら完璧に避けられると思います。えっへん。

まぁ、なのであとはじわじわシールドを削られてフィニッシュでしょう。

織斑君も予想以上に頑張って避けていますが近付けないのでは彼に勝機はありませんし、鈴ちゃんも勝機を残すほど甘い戦い方はしないでしょうし。

「でも、できれば織斑君のエネルギーをあんまり気ずらないでほしいですね」

そろそろ、無人機（アレ）が来るはずです。

織斑君が倒れてしまえば遮断シールドが主導で解除されるまで待たないといけないわけで……たしか専門の人でも制御を取り戻すのに時間がかかるほど巧妙なハッキングだったんですよね。

そうなれば私が突入できるのは間違いなく鈴ちゃんも織斑君も怪我をした頃でしょう。

私も準備を始めないといけませんね。

「えっと、2組の皆さん。これから私のやることは一切見なかった

ことにして下さいね？　……行くよ、カゲロウ」

アリーナ入口でカゲロウを展開する。もちろん隔壁と遮断シールドによってアリーナへの侵入は遮られていますが隔壁はＩＳを使えばどうとでもなりますし、遮断シールドも織斑君が破壊してくれるはずです。

続けて白狼の咆号（ウルフズロアー）を展開。エネルギー充填に時間がかかるのでこういうときじゃないと使えないんですよねー。もちろん、その分威力は保証されていますけどね。

「ちょ、ちょっと不破さん!?　試合妨害する気!?」

名前も知らない2組の子が焦ったように声をかけてきました。いえ、焦っているようにというより避難ですね……大方、不利な織斑君を私が助けようとしているとでも思ったのでしょう。

全く、どちらかを撃てと言われたら私は間違いなく織斑君を撃つのに。

「心配しないでください。というか本当に見なかったことにしないと後で大変ですよ？」

織斑先生にすごい勢いで怒られるでしょうからね。危険行為だけじゃなくて隔壁も無理矢理ぶち抜く予定ですし。

「充填開始（エネルギーチャージ）」

チャージ開始、という機械音声が頭に流れ込んでくるんですが正直子の声あんまり好きじゃないんですよね。もうちょっと自然な感じに……というか生録音じゃダメなんでしょうかね？　どうせアラートの内容なんて数十パターンしかないんですし。

充填率７……１２……２１……２４……

発射準備を始めてから数十秒経った時になってアリーナから聞こえてきた轟音……周りの２組の子たちは私が撃ったんだと思ったようでこちらを見てきましたが。

「来ましたね。熱源感知がいいですかね……捉えました」

ハイパーセンサーによる敵機の索敵方法は実に多く、例えば超音波や振動、レーダーの逆探知など、複数の方式を並列使用して確実に補足します。

ただし今回の場合は隔壁に遮られているため熱源感知を主、空気の振動による探査を副としました。地面振動探査の方が確度は高いんですが……ＩＳは浮きますしね。

充填率３２……４３……５０……制限（リミット）ライン到達。

『セシぃ、聞こえる？』

『アリサさん！？　今どこにいますの！？　あれは一体、』

『説明は後、とりあえず２組の使ってるピットの対角にいる観客全員避難させて。じゃ、よろしく』

『え、ちょ、アリサさん！？』

セシぃの戸惑いは無視して意識をアリーナに戻します。

電磁投射砲は数十キロある金属塊を光の速度で打ち出すことも可能な兵器ですが、ＩＳの登場までは短時間に大量の電力を入力することが技術的に難しく、打ち出すことが出来る弾丸もさほど大きいものではなかったのです。

しかし、ＩＳの特徴である大量のエネルギーがその問題を解決しました。

電磁投射砲だけでなくＢＴ兵器や荷電粒子砲などもＩＳのおかげで実現できた兵器と言っていいでしょう。ロマンすぎます。

まぁ、そんなわけで本当に光速で物体を撃ち出しちゃうと、絶対防御とか、そういうＩＳの安全神話が紙のように破られちゃうわけですよ。なのでエネルギー充填率に制限をかけているのです。

セシィに観客の非難を頼んだのも、遮断シールドが無くなった場合、弾丸は無人機を貫通して観客席にも被害を生む可能性があるからです。避けられる可能性もありますし。

「んー、リミットを超えちゃうと後々面倒ですし、制限はこのままでいいでしょう」

この制限は私の判断で無視することが出来るのですが、一度制限を無視するとそれ以降は白狼の咆号（ウルフズロアー）が封印されちゃうんですよ。使用者がテロなどを行いにくくするためですね。私なら制限をかけられないように暴れますが。

そうなるとフランスの研究所にいる人にその封印を解除してもらわないといけなくなっちゃうわけで、しかも怒られちゃいますし。

「なにより、無人機に絶対防御なんてものはないでしょう」

人が乗っているからこその絶対防御。

ある意味、あれこそがＩＳの兵器としての欠陥なんです。

なぜなら絶対防御に回されるエネルギーをなくせば戦闘継続時間が伸びるわけですから。基本的に燃費が悪いと言われている第３世代型でも十分前線に出られるくらいにはなるでしょう。

なので守るべき操縦者が機体内部にいない無人機にそんなものがあるわけがないんです。

つまり、防御力も落ちていると考えるべきです。

「しかし、まだですか、織斑君。だいたい、私に一撃当てたんです

から無人機程度なら勝てるでしょう！」

あーもう！　いらいらします！

というか織斑君がうろちょろするから鈴ちゃんが攻撃できないじゃないですか！

もう織斑君ごと撃っちゃってくださいよ！

「って、本当に撃っちゃいました！？」

鈴ちゃんが今までで一番威力の高そうな一撃を放ったところに織斑君が飛び込んで……あ、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を外部エネルギーを取り込むことで発動させたわけですか。

そのまま無人機の腕を斬り払って……遮断シールドもしっかり破壊してくれましたね。いい子です。

でもあれって龍咆が空間加圧によって生まれるエネルギー塊だったからこそできる裏技ですね……というか、あんなのできるって言われてもやりたくないですけど。

龍砲のエネルギーは瞬時加速（イグニッション・ブースト）が取り込めるエネルギー量を上回っているんですから、どんなにタイミングを合わせても余剰エネルギーで身体に負担がかかるはずです。それこそ身体が千切れると錯覚してしまうくらいに。

あと、多分ですがあの瞬間、織斑君は絶対防御切りましたね……

そんなことできるのかは知りませんが、そうじゃなかったら鈴ちゃんの龍砲の衝撃で絶対防御が発動してしまい、零落白夜を発動するだけのエネルギーが無くなっていたはずです。

目標確認、照準誤差±０．０１、命中確立９７．２６パーセント、予想破壊度３０パーセント――敵ＩＳ操縦者死亡の可能性あり――ＩＳを通して伝わる全ての情報を確認し、問題が無いことを確認……

「では、この国では絶えて久しい狼の咆哮、聞かせてもらいましょう」

バシュン！　という火薬を使っていない電磁投射砲特有の静かな射出音。

速すぎるため摩擦熱でオレンジ色に光る金属塊は分厚い隔壁を貫き、予定通り無人機の下半身を消し飛ばしました。

……おかしいですね。有人ＩＳなら第１世代型でも装甲を大破させて、骨に影響を与える程度なんですが。この無人機、本当に脆く造られていたんですね。

「アリサ！？」

「アリサですよ？　お待たせしました。私が来たからにはもう安心ですよ……まぁ、まだ動くとは思いませんが」

下半身と右腕を失いピクリとも動かない無人機。

まぁ、こんなもんでしょう。

……なにか忘れているような気もするんですが、

――敵ＩＳの再起動を確認！――

「しまっ……！　織斑君！」

これですよ！　というか何一番大事なことを忘れてるんでしょうかね私のポンコツ頭は！

再起動を果たした無人機は一番近くに立っていた私ではなく、むしろ鈴ちゃんを含めても一番遠くに浮かんでいた白式を狙ってビームを放ち、織斑君もそれに自ら飛ぶ混むように瞬時加速を行い……

◇

「アホですね」
「アホて……そりゃあんまりだろ」
「いいえ、アホです」

あの状況、間違いなく回避するのが正解だったでしょう！　回避に全力を注げば無傷だったかもしれませんし、青無人機のほぼ隣に私は経っていたんですから織斑君が避けてなんの問題もありませんでした！

「てかなんなんですか？　バカなんですか？　死にたがりなんですか！？」
「う……まぁ、心配掛けて悪かったよ」
「心配してたんじゃなくて！　あ、一応人として死ななければいいなーとは思いましたが。まぁ、そうじゃなくて私は自分のことを省みない人がいることがヤなんです」

……あの時のシャルロットみたいに。
自分が一番可愛いとまでは言いませんが、少なくとも私と織斑君程度の間柄だったら織斑君は自分を優先するべきでした。自分より大事にするのは家族と友人と恋人、あとシャルロットくらいでいいんです。

「だいたい、自分より弱い人に守られるなんて怖いじゃないですか」
「なんで、怖いんだ？」
「私は守るために強くなったんです」

弱い人に守られてしまったら、弱い人でも守ることが出来るなら……私の人生が否定されているようなものじゃないですか。
人を守るのに自分の強さは関係ないなんてことになってしまった

ら、どうやって人を守ればいいのか分からなくなっちゃいます。自分が誰かを守れるのか地震が無くなっちゃいます。

「だから、私を守りたければ少なくとも私と同じくらい強くなって下さい。そんな大変なことでもないんですから」

「分かった。肝に銘じておく」

「っ！　……そこはヘタレていい場面です。というか一生守られるつもりもありませんけどね」

織斑君は篠ノ乃さんとセシィと鈴ちゃんを守っていればいいんです。

だいたい何なんですか、急にまじめな顔しちゃって。そんなに私のことも守りたいんですか、節操のない人ですね。最低です。

まぁ、男の子だなぁとは思いましたけど……それだけです。

「じゃあさっさと体調戻して下さい」

「おぉ、不破さん、ありがとな」

「何言ってるんですか？　体調戻してくれないと織斑君をいじめられ……鍛えられないじゃないですか」

そういえば重い貧乳女のこと謝って貰ってませんし。

「では、織斑君……Ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ」

「オルヴォ……？」

さよなら、ってことですよ。ちょっとカッコつけたかっただけです。

って、うぇ、織斑先生……

「なんだその顔は」

「いえ……」

◇

保健室に見舞いにきてみれば一夏は寝てた。
まったく、人が勇気出してやっと来れたっていうのコイツは暢気な顔で寝てるなんて。
うん、まあ、頑張ってたし疲れちゃうのは仕方ないと思うけどさ！

「生意気にも守ってやれる、なんて言っちゃってさ……でも、言ってくれて嬉しかったわ。ありがとう」

うわ、恥ずかしい！
一夏が起きてたらこんなこと絶対に言えないわよ！　うわー、顔、紅くなってるわよね？
でも、格好よかったなぁ。
昔、まだ私が中国に行く前の時の一夏もまぁ格好良かったけど、今はあの頃よりもっと、ね。筋肉もついててガッシリしてるし……なんか女の子にはだらしなくなったみたいだけど。
寝顔を見てるとドキドキしてくる。

「うわ、悔しいなぁ。一夏を惚れさせる気だったのに、私の方がもう大好きだなんて……」

ちょっとくらいならいいかなー、なんて気もしてくる。
頭の中でやっちゃえ！　なんて言っているのは甘えん坊な癖に割と淡白なルームメイト。
というかあの子も本当に分かりにくい性格してるわよね。それになんか私の世話をやたらと焼きたがるし……まぁ、嫌じゃないんだけど。

「……」

やっちゃって、いいの？
キス、という言葉が頭から離れない。
普段なら止めるはずの理性も麻痺しているのか働いていない。
うん、これは頭の中で騒いでるアリサのせいね。アリサのせいなのよ。

「一夏……」

恐る恐る、臆病な猫みたいに少しずつ顔を近づけていって、

「鈴？」
「っ！？」

あと3センチも無い。そんなタイミングで一夏が目を覚ました。
空気読みなさいよ！
あぁもうどうしよう！？　せっかく頑張ってここまで近付いたのに起きるとかアリなの！？　キスしたかったのに。しかも脳内アリサはまだ押し倒せとか言ってるし。もう押し倒してるわよ！　って違う！

「おーい、鈴？　なんか、すごく、近い気がするぞ？」
「っ……あーもう！　うるさい黙れ！　あと目も瞑りなさい！」
「は？　って、んむぅ！？」

こんな近くに顔があるのに目を逸らそうとする一夏に腹が立って、つい……ね。
なんかもう触れてる唇が熱いし顔も熱いし、キャーって感じで何

も考えらんないんじゃないの！
　ってか、あれ……キスっていつまでしてればいいの？　そろそろ息が……

「っぷはぁ！」
「り、鈴！？　お前、なんで、」

なんでってそりゃ、もちろん……

「うっさい馬鹿！　バカ！　もう知らない！　じゃあね！」

バタン！

なんでって、そんなこと言えるわけないじゃないのよ！
もう、なんで勢いでキスなんて……絶対アリサのせいだ！　そう、私に責任はないのよ！
だいたい皆ファーストキスはレモン味なんて言うけどそんなの全然分かんないじゃない！　……味とかよりも熱だけで頭がいっぱいになっちゃって……とにかく！
アリサにはあとでお礼言わないとね。
今夜は中華のフルコースにしようかしら。

15. Quel go?t ?tait le premier baiser

部屋で囁し立てるオリ主の影響で原作よりちょっと鈴音が大胆に。
ニヤニヤしながら書きました（笑）

別に一夏×鈴音、オリ主×シャルの構図が固まったわけではありません。一応。
ただ、ラウラだけキスしてるのずるくない？　と思っただけでした。

あと数話で皆さん、というかむしろ私がお待ちかねのシャルロットですよ！

16. Quel est amour? Comment est-ce

「愛とは何か、そして彼女はどうするべきか」

また、シリアス調な内容に（
明日から忙しくなるので連続投稿はそろそろ終わるかもしれません。

ユニーク2万超えました。今回の投稿でPV20万にもとどきそうです！
これからも宜しくお願いします

16. Quel est amour? Comment est_ce

五月下旬。

「そうですか……じゃあシャルロットさんは男子生徒として入学するということですね」

「いえ、私はそんな。一番大変なのは本人でしょうから」

社長さんとの連絡。

デュノア社の方から電話をかけてこられるといろいろと面倒なので普段は私から定期的に連絡を取るようにしているのですが、今回はいつもとは違い社長さんの方から電話がかかってきました。

つまり、よほど大事で緊急な連絡ということです。

「ええ、なるべく彼女の正体が気付かれないように助けるつもりです。ですが部屋は……ですよね。いえ、彼女が織斑一夏と白式のデータを手に入れられればデュノア社にとっても有益でしょうし構わないんですけど」

「もちろんです。そのために私はここに来たんですから」

残念ながらシャルロットの……シャルル・デュノアの転入が決まってしまいました。転入先は1組、日付は6月第1週の月曜日の予定です。

今日が5月20日なので再来週……ですか。

まぁ、すでに私にできることはありませんし座して待つしかないんでしょうね……とりあえず髪を染め直しましょう。シャルロットに会うときは一番可愛い私でいたいですから。

……それにしても我ながら一途ですよねー。シャルロットに惚れてからもう2年も経つんですよ？　しかもその間にあったのは2回だけ。遠くから眺めることすら避けていましたから。

ガララッ

「アリサー、タオル持ってきてくれない？　多分、下から2番目の棚に入ってるから」

いや、鈴ちゃん？　お風呂入る前に持っていきましょうよ。この前は下着を忘れるし……いくら女二人での生活とはいえ気が抜けすぎですよ？

あと、鈴ちゃんのタオルは下から3番目です。2番目のは私のですよ。何枚もあるので別に使っちゃってもいいですけどね。

「ルームメイトの方に呼ばれたので失礼します。また来週こちらから電話しますね」

携帯電話を操作しながら、タオルを取ってシャワールームで待つ鈴ちゃんの元へ。

……って、なんで更衣室まで出てきちゃってるんですか。タオルマットが無駄に濡れるじゃないですか！

「いつも風邪引いちゃうから身体を拭くまで外に出ちゃダメって言ってるのに……」

「そうは言うけどさ。私は温まった身体が一気に冷やされる感覚が好きなのよ」

「それが身体に悪いんです。まして私たちは女の子なんですから身体を冷やしちゃだめなんですよ……好きな人の子供は元気に生みたいでしょう？」

「なっ、ばっ！　べ、別に一夏の子供なんて……女の子なら1文字ずつ取って夏音（かのん）、ううん、一音（かずね）とかでも」
「……」
織斑君とは誰も言ってないんですけどねぇ、なんてからかおうと思っていたのに鈴ちゃんが思った以上に暴走しちゃいました。
えっと、これ、どうしましょう。
「娘ならやっぱりＩＳ適性も高いと思うし、将来はＩＳ操縦者の家庭なんて有名になるかも。でも織斑鈴音（おりむらリンイン）じゃイマイチだし……りんね、って読むようにしようかな。アリサー！　名前変える時って役所にわぷっ！？」
「いいから、身体を拭いて下さい！」
全く、いくら好きだからって妄想が行きすぎですよ。相手がシャルロットだとしても私じゃそこまでしません。
でも、シャルロットと……ですか。当然、同性なので夫婦にはなれませんがフランスには民事連帯契約（ＰＡＣＳ）があるので同性カップルの権利も部分的に認められてるんですよね。残念ながら2人の子供という形での養子は取れないのですが……まぁ私かシャルロットどちらかと養子縁組を結べばいいですね。もし、デュノア社のＩＳ開発許可が剥奪されなければ会社を継ぐことはできなくても私もシャルロットもそれなりの地位に就くことは確実です。まぁ、社長さんが私達の関係を認めてくれたら、ですけど……気に入られているとは思いますが娘の友達として、みたいな感じですし。いえ、諦めるのはまだ早いですよね。一度ダメと言われても2回3回と説得を続ければきっと分かってくれるはずです。でも不破の名前は私じゃなくて弟が継ぐことになっているので、私の名前はアリサ・デュノアになるわけですか。いい感じじゃないですか？　アリサ・デュノア。それで子供ですけど、どうしましょうかね。やっぱりデュ

ノア社を引っ張っていけるような優秀な子に……あーでも私ケーキ屋さんもやりたいんですよねー。じゃあ子供は私とシャルロットで1人ずつ養子にしてデュノア社と私の開くケーキ屋さんを継いでもらうのが良いですね。デュノア社の社員食堂にも私のお店のケーキを……

「アリサ！」
「ひゃい！？」
「変な声出さないでよ。急に真剣な顔して黙っちゃうんだから」

これは……私の方が相当、ですね。反省反省。鈴ちゃんのことを言えないじゃないですか。
というか鈴ちゃんも身体を拭いたなら早く下着を付けて下さい。それ以前に女の子相手でも隠しましょう。最低限の礼儀です！

「もー、アリサは固いなぁ……あ、さっき電話してたみたいだけど、なに？　恋人？」
「恋人なんていませんよ」
「とか言っちゃって、アリサって大人びてるし恋人の1人や2人くらいいたんでしょ？」
「いませんよ、というか早く下着を、」
「そんな汚いもんじゃないんだし、これでも自身はあるのよ？　……あっ！　私の裸見て照れちゃってるのね。アリサも初心（うぶ）ねー」

照れてるって、なんで女の子の裸を見て照れなきゃいけないんですか……あれ、でも多分男の裸を見ても照れないような気がします。昔は男だったわけですし。
でも逆に考えてみると両方に照れるのかもしれないですね。鈴ちゃんに向かって服を着てください、って騒ぐのだって照れてるからかもしれませんね。

訳が分からなくなってきたのでとりあえず鈴ちゃんで試してみましょう。

「え、なに？」

「ちょっと動かないでください。あ、下着も付けなくていいですよ？」

「へ？」

程良く筋肉が付いてすらっとしなやかな肢体。やっぱりお肌にも気を付けているのでしょうか？　シミなんて見当たりませんし小さい傷痕すらありません。

まぁ、ほっそりしているので胸は……絶対的な数値で見ても私より小さいのですが、全体的にスレンダーな印象ですね。遺伝的なものなのか毛もあまり目立たないですし……総じていえば鈴ちゃんの裸は綺麗ですね。

「ちょっと失礼します」

「ちょ、アリサ……ゃん！」

太腿、お腹、二の腕と触りますがやっぱり無駄な脂肪も付いていませんね。しかし、なんでしょう。こうして人の身体を触るのは楽しいかもしれません……楯無先輩とお風呂に入るたびに体中を触られる理由が分かったような気がします。

「あれ、こういう感情も興奮していることになるんでしょうか？」

「興奮って！？　ちょ、ちょっと待ってアリサ！　女の子同士よ！？」

でも思い返してみれば私に嗜虐嗜好はあるのかもしれませんね。織斑君と戦った時も楽しんでいたような気がしますし。あ、でも楯

無先輩に弄られるのもヤじゃないんですよね……やっぱり相手によって違うのかもしれませんね。

鈴ちゃんの場合は確実に弄る方が楽しいです。

「んー、私、女の子とか男の子とか、そういう細かい違いは気にしないことにしてるんですよね。それより鈴ちゃん顔真っ赤ですよ？　初心ですねー」

そうじゃなきゃシャルロットに一目惚れもしなかったでしょうし。

「バイなの！？　というか細かくないし、私は気にするわよ！？」

思いのほか強い力で私の腕を振り払って後ろに跳んで両手で身体を隠そうとする鈴ちゃん……あぁ、やっと女の子としての常識が身についてきましたか。

「安心して下さい鈴ちゃん。食べちゃおうとか考えていたわけではないですから」

「絶対、嘘よ！」

「信じてくれないなんてひどいですね……あぁ、関係無い話ですけど二木さんに女の子へのお仕置きの仕方を教えてもらったんですよ。正直あれじゃ気持ちいいだけだと思ったんですが、」

「いい！　いらないから！　というかアリサのことは信じてるからもう許して……ね？」

「ふふふ」

「待って！　私初体験は男の子相手がいいから！」

「冗談ですよ。そんな怯えなくても……」

慌てふためく鈴ちゃんが可愛くて可愛くて。ついついやり過ぎてしまうんですよね。

織斑君に対してもツンケンしてないでこういうところを魅せればすぐに落とせると思うんですけどねぇ。こう、ギャップ萌えみたいな感じで。

コンコンコンコン！

……誰ですか、こんな時間に。

いえ、騒いでいた私達が言えることでもないですけど、もう9時も回っていますよ？

部屋の中で騒ぐならまだしも人の部屋を訪ねるような時間じゃありません。

「やけに暴力的なノックですね……セシぃはもっと静かに、というかこんな時間に訪ねてくるような子じゃないですし、鈴ちゃんの友達ですか？」

「私にもあんなバカでかい音たててノックしてくる友達はいないわ」

コンコンコンコン！　バンバン！

「えっと……1人、いません？」

「思い当たる人はいるけど……友達っていう程の仲じゃないわよ。というかあの子ってアリサのクラスでしょ？　アリサこそ友達じゃないの？」

「なんか敵視されてる感じがするんですよねー。まぁ第一印象がお互いに悪かったのでしょうが無いと思いますが」

バンバンバン！　ガチャガチャ！

「必死ですねぇ。正直、面倒事だと思うので遠慮したいのですが」

「同感だけど、あの子木刀でドア壊すらしいわよ？　2組の子が見

たんだって」

「つまり、扉を人質に取っていると……いやらしい作戦です」

ガチャガチャガチャガチャ！

うーん、ホントに壊されそうな勢いですね。聞き覚えのある声で、いるのは分かっている！　出てこい！　なんて言ってますし……先生を呼ぶのも面白そうですが、後で恨まれそうなので大人しくあけましょう。

いえ、卑劣な作戦に屈したわけではないです。

「まったく、少し騒がしいですよ。何の用ですか篠ノ乃さん」

「む、不破……そうか、お前もこの部屋だったな」

私が扉を開けると意外そうな顔をしている篠ノ乃さんが立っていました。というか右手に持った木刀で何をする気だったんですか？　まぁ、私に用が無いんだとしたら鈴ちゃんに会いに来たってことですよね？　幸運にも面倒事は私に関係ないみたいです。鈴ちゃんには悪いですが避難しましょうかね。

「待て、不破にも第三者として聞いてもらいたいのだが……いいか？」

「……そうですか」

口調こそ私の答えを聞く気があるみたいにしていますが既に首を掴まれて部屋の中に引きずり込まれかけています。ええ、分かってましたよ？　どうせ面倒事からは逃げられないって。

ただ、お邪魔しますくらいは言ってもいいんじゃないでしょうかね。日本人として。あぁ、でも靴は脱がなくていいですよ。

「鳳（ファン）、といったな？　一夏の幼馴染というのは本当か？」
「そうよ？　というか前にも言ったはずだけど？」
「いや、今のはただの確認だ。しかし、そうか……」
顔を合わせた瞬間にキャットファイトが始まると思っていたのですが……むしろ二人とも冷静に話し合っていますね。嵐の前の静けさにしか見えなくて怖いです。
「じゃあ聞かせてもらうが、一夏のことを、その……愛しているのか？」
「ぶっ！」
愛て、そんな重たい言葉使わなくても好きなのか？　とかでいいじゃないですか。
私達はまだ高校生になったばかりの子供です。ＩＳに乗れたってその事実は変わりませんし、周囲と比べて精神が円熟しているわけでもないんですから。
無理に愛しているなんて言っても上滑りするだけです。愛って人生をかけることでしょう？
それなのに、
「ええ、愛してるわ」
鈴ちゃんの答えは自然で、無理に言っているという感じがしませんでした。
「そうか、なら私はお前と対等な立場でいたいと思う。だから、隠し事もしない……私が今度の学年別個人トーナメントで優勝したら付き合ってもらうと約束した」
「な……そういうこと。じゃあ、私も１つ教えるわね。私、一夏と

キスしたわ」
「鈴ちゃん!?　私そんなの聞いてないですよ!?」
「だって、恥ずかしかったから……というか、なんで当たり前のように私が話すと思ってるのよ」

鈴ちゃんと軽口を言い合っている間も脳では別のことを考えてしまいます。

……シャルロットを愛しています。

私がそんなことを言っても、どこか違和感があるのに、私と鈴ちゃんの違いは何なのでしょう。

私だって心の底からシャルロットのことは好きですし、一生を彼女の傍で過ごす、過ごしたいという覚悟もあります。それでも愛じゃないような気がするんです……独り善がりだからですかね。

でも、それなら……こう言ってしまうのもなんですが、鈴ちゃんも独り善がりなはずです。だって織斑君は鈴ちゃんに幼馴染以上であることを望んでいないんですから。だから、鈴ちゃんの気持ちに気付かないんです。

じゃあ一緒に過ごした時間の長さでしょうか。でも、これも違う気がします。例え、私がシャルロットとの接触を避けずに友好関係を結んだとしても、愛していますとは言えない気がします。

私は、どうしてシャルロットを愛せていないのでしょう。

「……サ……リ……アリサ！」
「へ？　あれ、篠ノ之さんは？」
「何言ってんのよ。さっき帰ったじゃない。アリサも見送ってたわよ？」

全然、記憶にないですね。確かに時計を見ると篠ノ之さんが来た時間から随分と経っているのですが……

「さっきも考え込んでたけど、何か心配事？　私でよければ力になるわよ？」
「……じゃあ、少し聞かせてください」
「少しといわずドンときなさい」
「どうして、織斑君を愛していると言えたのですか？」
「えぇ！？」

好き、という言葉を言い換えただけではないはずです。そして、鈴ちゃんの答えはきっと私と彼女の違いを明らかにするもののはずです。

「まぁ、どうしてって……うん、そうね。多分、私が好きになるのは一夏しかいないからじゃない？」
「？」
「親が離婚したってのは前に話したけど、一夏とはちょうどその頃知り合って、アイツのおかげで元気でいられたのよ」

ありがち、と言えばありがちな話ですよね。それが愛することに繋がるのでしょうか？
助けてもらったから、というだけで愛という強い感情を持つとは思えません。
それとも、私が愛することと好きということを難しく考え過ぎなんでしょうかねー？

「私の両親が離婚しちゃった理由は分からないけど、私は離婚なんてしないように1人だけをずっと好きでいようって考えて……」
「だから、織斑君しかいないってことですね」
「うん。アイツに私とは付き合えないって言われるまでは一途に想っていようって。だから愛」
「私には、よく分かりません。一途でも愛しているって言い切れな

いと思いますから」

鈴ちゃんの話したことも、過程が違うだけで結果の感情は私と似ています。それなのに、私のは愛じゃなくて恋……

感情の問題だから考えて分かることではないのかもしれませんが、かえって混乱してしまった気がします。

こんな、半端な気持ちでシャルロットをしっかり迎えられるのでしょうか……彼女のため、と言い訳して自分に利することをしてしまいそうです。

「でも、アリサもこういうことを気にするのね。恋愛には淡白な方だと思ってたから、ちょっと意外」

「いつも考えているわけじゃないですよ……たまたまです」

少し、シャルロットに関係することを考え過ぎてしまうだけなんです。私がシャルロットに干渉することに意義はあるのか……例えデュノア社の経営が傾くことになっても、私が手を出さないで全て織斑君に任せた方がシャルロットにとっては幸せなのかもしれません。

どこに行っても同性間での恋愛は白い目で見られますしね……

「だーかーらー、悩みがあるなら話してよ。恋愛のことでしょ？人に話すだけで楽になるし、悩んだまま放っておくと歪むわよ？」

「人に相談する程ではないですし……それに歪むほど悩んでいるわけではないですよ」

「意地っ張り……アリサは相手のことを気にしすぎよ。自分のことも考えられるようにならないと共倒れになるわ」

「大丈夫って言ってるじゃないですか！　鈴ちゃん、ちょっとしつこいですよ？　それとも、織斑君とキスできたからって先輩風吹かせたいんですか！？　なにも……なにも知らないくせに」

シャルロットの事情も、もしかしたら私の行動で、デュノア社で働く人たちの未来が決まってしまうかもしれないことも……

「なっ……！　なによそれ、なにも言ってくれないんだから分かるわけないじゃない！　いつもと様子が違うから心配してあげて、」

「心配してあげてって、私をバカにしてるんですか！？　見下してるんですよね？　私が歪んでいて、鈴ちゃんみたいに綺麗な身体じゃないから……！」

一度叫んでしまえば、あとは売り言葉に買い言葉。

お互いに言われたくないこと、言いたくないことを言ってしまいます。全然、思ってもないことまで。

「そんなこと思ってないって、前にも言ったでしょ！　アリサこそその傷があるからなんでも許されると思ってない？　アンタの性格が歪んでるのも傷痕のせいじゃないかもね。だって、同じような傷を持ってもしっかり生きている人もいるんだから」

「私が、もとから異常だったって……そう言いたいんですか？　やっぱり鈴ちゃんに話さなくて良かったです！　そういう風に考えている人に私の悩みを言ってもどうせ笑うだけですから！」

口喧嘩なんて、したことがないから引き際も分からない。分からないから、感情のままに叫んで……このままじゃ嫌われちゃうのに。

「笑わないわよ！　勝手に人のこと決めつけるなって……いい、もう寝るわ。電気消すわよ。おやすみ」

「ぁ……」

だから、鈴ちゃんに引かれちゃうとどうしていいか分からなくな

って、怖くなってしまうんです。頭では嫌われていない、怒らせてしまっただけだって解るのに、感情がその理性とは真逆のことを感じてしまいます。理性と感情、瞬間的な勢いなら感情の方が強くて……

思い返してみれば鈴ちゃんは怒りながらも私のことを心配してくれていたのに……私は変に深読みしてネガティブに捉えて、最低でした。

「あの、鈴ちゃん……ごめんなさい」

「……」

「……おやすみなさい」

もうちょっと早く謝っていれば、鈴ちゃんも眠ってなかったかもしれませんね。いつだって、こういうときは上手くいきません。

次の日の朝は、久しぶりに目覚まし時計で起きました。

セットしてくれたのは鈴ちゃんでしょう。

鈴ちゃんは既に学校に行ってしまっていて、お礼が言えないのが悔しくて悲しかったです。

「でも、やっぱりこんな私じゃ……」

後で後悔することになる日々の始まりでした。

16. Quel est amour? Comment est-ce

シャルー！
まだかー！？

次か、その次で出ます（

17. La mission pour r?conciliation.

「仲直り大作戦」

まぁ、タイトルはいつものごとく的外れ。
更新が遅れたのに文字数に変化が無いのは仕様です。

17. La mission pour r?conciliation.

「じゃあ、先にお風呂入るから」
「あ、はい」
ただ報告するように言って鈴ちゃんはシャワールームへ。
私もただうなずくだけで二人の間に会話が発生することもありません。

「はぁ……どうしましょう。いえ、どうもこうも謝らないといけないのですが」

鈴ちゃんと喧嘩してから一週間、未だに仲直りできていません。
私が完全に悪かったので謝らないといけないのはわかっているのですが……気後れしてしまうんですよね。怖いというかなんというか……

でも大分ヘコんではいますが、私の性格を把握している鈴ちゃんが“嫌ってはいないけど怒っている”という内容の書置きを私の机の上に置いてくれていたのでまだマシな方です。
直接言わなかったのは私から話しかけて謝りなさいということなんでしょう。
それに喧嘩しているとはいえルームメイト、夕食の当番なんかも守ってくれますし会話がほとんど無いだけで背共同生活自体はいつもどおりなのんです。
だから話しかける機会もいくらでもある……というより鈴ちゃんがわざわざ作ってくれているんですけど、どうしても覚悟が決められないというか。
喧嘩してから鈴ちゃんはずぼらじゃなくなってしまったので、タオルとかを渡すのに乗じて謝ろうなんて作戦も初日で諦めましたし。

セシィにも相談しましたが、相談するということは反省もしているのでしょう？　でしたら謝ればいいんですわ、なんて簡単に言ってくれますし。

自慢じゃないですが今まで喧嘩したことが無いので人に謝ったことはないんです……本当に自慢になりませんね。

早くしないと今日も終わってしまいますし、明日ももちろん授業はあります。学園で謝るには二組までいかないといけないですし、一対一でも気後れしているのに人がいるところで、なんてできるわけもなく……

「先送りにしないで初日にすぐ謝っておけばよかったです」

そんなことを言っても結局謝らなかったのは私なので言い訳にもならないのですが。

結局この日もグダグダ考え過ぎて謝ることができませんでした。

ええぇ、明日からヘタレって呼んでくれてもかまいません……

◇

「鈴さん、少しよろしくて？」

「アリサのことならよろしくなくてよ」

わたくし、セシリア・オルコットが長くもない休み時間に赴いたというのにこの人ときたら……そんなに退屈そうな顔をするのなら早くアリサさんと仲直りをすればよろしいのです。

まぁ、今回はアリサさん自身が自分が悪かったと認めているので、鈴さんから仲直りを持ちかけるというのもおかしな話ですが、せめてもう少しあの子が謝りやすいと思えるような態度をとって貰わないといけませんわ。

アリサさんは友達が少なかった分、こういう事態の対応には慣れ

ていません。昨日もわたくしに、仲直りする時ってどう謝ればいいんですか？　なんて間の抜けたことを聞きにくるくらいですから。

「そう意地を張らないでくださいな。鈴さんだって本気で怒っているわけではないのでしょう？」

アリサさんの話によればお二人の普段の生活はいつも通りとのことなので、鈴さんからしてみれば、けじめを付けてほしいということなのでしょう。

「まだ怒ってるわよ。でももう許してるの……ただ、やっぱり今回のことはアリサにとって必要なことだと思うからこうしてるだけ」

「アリサさんに必要、ですか？」

どういうことでしょう。

精神的に弱いアリサさんにこのようなことをするのは悪趣味ですわ。

いくら反省を促すためとはいえやりすぎです。

「怖い顔しないでよ。というか私がこういうことしてるのはセシリア、アンタがアリサを甘やかしすぎてたからなんだからね」

「私が？　それは一体どういうことですの？」

「今までアンタ達、喧嘩どころか言い争うこともしなかったでしょ？　ほとんど片方がもう片方に合わせてたんじゃないの？」

「確かにその通りですわ。ですが、」

それが今回のこととどう関係しているというのでしょう？

そもそも、アリサさんは人に嫌われるかもしれないという可能性があることが嫌い、というより怯えています。傷痕の件を経てわたくしと鈴さんは信じるようになったようですが、それが却って彼女

の不安を強めてしまったような気もしますわ。わたくし達との縁が切れてしまったらアリサさんは壊れてしまうんじゃないかと私に思わせるくらい。

ですから、気を使いすぎて悪いということはないはずですわ。

「セシリアはアリサに対して気を使いすぎ。子供を相手にしてるんじゃないんだから」

「そうは言いますけど、」

「アリサは精神的に不安定とでも言うの？　確かに傷のせいでそうなったのかもしれないけど、刺激しないように甘えさせてたらいつまで経っても今のままじゃない。私たちとずっと一緒にいられるわけでもないんだから、今から当たり前のことを経験させないとだめでしょ？」

……確かに、鈴さんの言う通りですわ。アリサさんと出会ったとき、わたくしはいかに彼女を元気づけるかを考えていて、今はいかに傷付けないようにしているかを考えています。

だから、アリサさんには辛いことに対する免疫ができなかったのかもしれません。

辛いこと嫌なことに適応するには結局そのことを体験しなければいけませんから。

「わたくしが、アリサさんを弱くしてしまったのですね」

「別に弱いから悪いってことでもないわよ。その弱さのおかげでアリサはフィジカルな強さを手に入れたんだし、我慢することだけは人よりも得意なのよ」

そう、ですわね。

実際に殴り合いをしてアリサさんに勝てる人はそうそういないでしょう。以前、二人で歩いていた際にいわゆるナンパに遭ったので

すが、わたくし達の対応に激昂した男数人を千切っては投げ、千切っては投げと奮戦されていましたし。

ただ、それはわたくしがいたからで、もしアリサさん一人のときに同じ目に遭っていたらどうなっていたのかは分かりません。

自分のために力を振るうことをしない子ですから。

自分だけが我慢すればいい状況では、どんなに辛くても我慢してしまうのが不破アリサという少女です。下世話な話になりますが、今まで綺麗な身体のままでいられたことが既に奇跡なのです。

「別に、セシリアのやり方が間違ってるとは思わない。でも、私達はいつでもアリサの近くにいることなんてできないの。学園の外ではあの子、独りになるのよ？　だから、そういうときのためにも今回のことは、ううん、今回のことだけじゃなくて、私達が意図的にアリサにとって辛い思いをさせることは必要だと思う」

それをアリサ自身の力で解決させていけばあの子も成長するだろうから、と鈴さんは言いました。

折れた骨が太くなるように、叩かれた鉄が鋼になるように……鈴さんの言うようにそうすることも必要なのかもしれませんわね。

「鈴さんの考えは分かりました……でも、やりすぎないでくださいね？」

「大丈夫よ。私だってアリサに嫌われたくないんだから」

……それに、アリサを見ている限りもう解決も近そうだしね。

◇

「と、いうことで考え得る限り最高の謝罪を教えてほしいのですが」

「ジャンピング土下座とか？」

「ふたちゃん、それ違うよ！」
「じゃぁ、ドスで小指を、」
「みぃちゃんもズレてるっていうかそれじゃ大惨事だよ！」
「頼んでいる立場で言うのもなんですが、この流れはもうお腹いっぱいです……」

というわけで三人娘に相談中です。三人寄れば文殊の知恵、なので四人寄ればきっと諸葛亮の知恵です。
……と思いきや一人分さらに姦しくなっただけでした。
公明の罠です。

「まぁ、真面目に答えるとさぁ、怒らせた原因を聞かないと分からないんだよねぇ」
「怒らせたのって鳳（ファン）さんでしょ？　だったら抱きついてキスでもすれば、」
「ふたちゃんは黙ろうねー。不破さん、私もみぃちゃんと同じことを言わせてもらうね。酷いことを言っちゃったとか、場合によって謝り方も違うと思うし」

……ただ怒らせちゃったから謝りたい、だけじゃあ教える方も困りますよね。それで鈴ちゃんを怒らせてしまったわけですし。
……私も学ばない人ですね。

「えっと、詳しくは話しにくいんですけど……」
「「「うんうん？」」」

私が女の子（シャルロット）のことが好きって言わないといけませんし……あれ？
三好さんはともかく一松さんと二木さんがいるなら問題ないような……いえいえ、問題はそのことだけじゃないんですって。フランスのお国事情にも関わってきますし。

「簡単に言うと、私に好きな人がいるんですが……その障害が大きすぎてどうしようかと悩んでいたのを鈴ちゃんが心配してくれて……でもナイーブになってたのと人を巻き込めるような内容でも無くてですね」

「突っぱねちゃったわけだ？」

「はい……しかも、なにも知らないくせに、と言ってしまって。話さなかったのも私なのに」

「あちゃー、それは確かに腹立つわー」

本当にあの時の私はどうにかしていました。

シャルロットが来ると分かってから……いえ、ＩＳ学園に来てから感情の浮き沈みが特に激しくなっている気がします。家族と、知っている人と離れてしまったからですね。

「……」

知らない場所は怖いです。

知らない人はそれ以上に怖いです。

何を考えているのか分からないから、相手が何を考えているかが分かるまで怖いんです。

でも、独りじゃいられないから傍に寄って来てくれる人たちを拒めない……信用はできていないのに。ただ慰めてほしいから傍にいてもらうなんて我ながら最低ですね。

「不破ぁ」

私の肩を掴み三好さんが真剣な表情で私の目を見ます。

「笑い飛ばしてあげるよ。不破の悩みなんてさ」

「へ？」
「先に言うけど怒んないでよ？　あ、先に言ってないか。まぁいいや。悩みなんてねぇ、他人の目から見たら案外大したことないの」
今は怒る程の精神力もありませんよ……でも三好さん。怒るようなこと二回言ってるじゃないですか。それも前置きの前と後に。
「そんなの分からないじゃないですか……」
「だから話してみなって。私ぃ、鳳（ファン）もそれが聞きたいんじゃないかなぁって思うのよねぇ。だいたい謝りたいって言ってたけどホンとは仲直りしたいんでしょ？　そうじゃないと手段と目的が同じになっちゃってるしぃ、うん、やっぱ鳳に相談してあげるのが一番っしょ」
「そうだねー、やっぱり話した方が良いと思うよ？」
「身体の相性以前に隠し事はだめだよね」
話せなくて喧嘩をしてしまったので仲直りをする時の私の悩みを話すのも自然、なんですか？　まぁ、私より世間慣れしている彼女達の言うことなのだからそうなんでしょう。
二木さんの発言は最初からあてにしていません。一応。
シャルロットやデュノア社の名前を伏せれば話しても大丈夫ですよね・・・・・鈴ちゃんの時も冷静になってそういう風にはなされば良かったんですが。
「私は女の子が……だと誤解が生まれますね。私の好きな人が女の子なんですが、」
「おぉ、いきなり予想外」
「えぇぇぇ！？　ふたちゃんと同じ！？」
「いやいや、イッチー、自分のこと棚に上げちゃだめだよ」

……やっぱり、こうなりますよね。でも、誤解のないように言っておきますが女の子が好きなのではなくて、好きになった人がたまたま女の子だっただけなんです。別に男の子でも好きになれるんです！　……多分。

えぇ、たまーーーーに、織斑君にドキッとさせられますし。

偶然、シャルロットが女の子なだけです。

「……果たして私はその子を愛しているのか、それともただ単に好きなだけなのかが判らなくてですね」

「重たー。ていうか愛とか大人でもどういうものか判ってない人多いと思うけどぉ？」

「えー、私はイッチーのことをちゃんと愛してるよ！」

「私はふたちゃんのこと好きなだけかなぁ……」

そこの二人、さりげなくノロケないでください。え、一松さんはなんでガッカリしてるんですか？　友達として？　あぁ、また同性愛者じゃないって言いたいんですね。いまさら私に対して隠すようなことでもないですけどねぇ。

……あれ？　そういえば私はこの二人の関係を知ったときも驚きはしたものの気持ち悪いとは思いませんでしたね。意外と受け入れられるようなものなんでしょうか？

あ、でも私にもともとその素地があったからでノーマルなりんちゃんとかほかの人にはやっぱり引かれるかも、しれませんよね？

「でも、鈴ちゃんは織斑君のことを愛してるってはっきり言ったんですよ。だから私の気持ちと鈴ちゃんの気持ちはどう違うのかなぁって。気持ち自体は同じくらい大きいと思うんですよ」

「へー。じゃあさ、そのこと不破さんは結構付き合い長いんだ。いいなぁ、そういう人いて……」

「イッチー！？　私たちも小学校のときからの付き合いだよね！？」

「そうだねー」

やっぱり、普通は時間をかけて人のことを好きになるというのが常識みたいですね。少なくとも一目惚れで私くらいの気持ちを抱くことはまず想像できないんでしょう。

なので、一松さんたちも私とシャルロットが幼馴染のような関係だと思うんですね。

「実際に顔を合わせたのは二回だけです。ちなみその女の子は私のことを知らないはずです」

一度目は本邸で素顔を突き合わせてはいますが今とは髪の毛なんかも違いますしね。服装や髪型で人の印象は大きく変わるので一度顔を見られた程度では私に気付く事はないでしょう。

二度目もお互いに顔を隠しての模擬戦でしたし。

「え？　じゃあ、不破ちゃんストーカー？」

「まぁ、そう思われても仕方ない状況かもしれませんが違います。私も彼女の顔は十回見たか見ないかです。子おばを交わしたのがさっきの二回のことですね」

「……えっと、不破ぁ。言いにくいんだけど、それで鳳と同じだけの気持ちって言うのはおこがましいと思うんだけどぉ？　いや、まぁ、不破が言うんだから何かあるんだろうけどさぁ」

当然、そう言われるとは思っていました。

普通なら、二回あっただけで抱ける気持ちなんてたかが知れていますしね。

「分かると思いますけど一目惚れだったんです。でも最初の遭遇の

ことを思い出されるとお互いに気まずくなりそうだったので、私から彼女を避けました。髪の毛を染めているのもその一環ですね。そうやって二年間避け続け、」

「二年間!?　というか初対面でそこまで気まずくなるような問題起こすって何したの!?　キス?　それ以上!?」

「……避け続けたのですが、何か彼女のために出来ることはないかと思って影ながらちょっかいを出していたんです」

「ちょっかい出したのに会ったのは二回だけ?」

興奮する二木さんは置いといて一松さんの素朴な疑問に頷きを返します。

私のちょっかいはシャルロットと社長さん本妻さん夫婦の仲を取り持とうとしたものですからシャルロット自身に会う必要はなかったんですよね。会いたかったですけど会いたくなかった、というジレンマも抱えていましたし。

「何をしていたか、というのはあまり詳しく話せないのですけど……簡単に言うなら彼女と彼女の家族を仲直りさせるのが目的でした」

さらに言うと、その結果シャルロットがＩＳ学園に来る際に男装する必要をなくし世間から悪い目で見られないように、ということなのですが。結局はシャルロットに泣いてほしくないからですね。泣くのを我慢されるのもヤですけども。

「両親との不仲を解消してポイントアップ狙い……！　不破ちゃんやるねっ」

「ありがとうございます……一言ごとに感想言うのやめません?」

話が進まないじゃないですか！

しかも、二木さんが茶化すから相談らしい雰囲気にもなりません

し……

◇

トントントントントントン

今日の料理当番は鈴ちゃんです。作るものはやはり中華……というか寮のキッチンコンロがいつの間にか中華用の大火力仕様になってたんですよね。そして五徳も四脚の物から円形の中華五徳になっていますし、壁にはもちろん中華鍋がかかっています。そこまでこだわりますか。

まぁ、鈴ちゃんの場合は形だけじゃなくて味も本格的なので文句はないんですけどね。中華鍋でもフレンス料理は作れますし。

……なんて関係ないことを考えているのは緊張を紛らわすためで。多分、鈴ちゃんもすごくやりにくいと思います。私、キッチンの入口のところでじーっと鈴ちゃんのこと見てますからね。

ときどき私の方をチラリと見ますが、それでも鈴ちゃんは声をかけて来ません。私が声をかけようとしているのを分かってくれているからだと思います。

「あ、あの……鈴ちゃん、ごめんなさい」

「……何で謝ってるの？」

「えっと……」

そ、そうでした。

何について謝っているのかを言わないとダメですよね。相手がどうして怒っているのかを理解していることを見せなければただ自分のために謝っているだけになってしまいますし。

「その、えっと、鈴ちゃんに酷いこと言っちゃって怒らせちゃった

こととと……」
「こととと？」
あとは、えっと……
「鈴ちゃんに、ちゃんと相談できなかったこと……です」
「……」
鈴ちゃんを巻き込みたくなかったから、と一松さん達には言いましたが、今考えてみればあれは建前でした。
火傷痕のことを気にしないと言ってもらって、それを信じても…次ぐから次へと不信感が募るんです。巻き込みたくないなら相談してからそう言えばいいだけですから。
「私は、まだ鈴ちゃんが信じら、」
「なんで、謝ろうと思ったの？」
「え？　あ、え、その……鈴ちゃんと喧嘩したままなのはヤだからです。その、数少ない私の友達なので」
鈴ちゃんのことを友達だと思っているけど心の底から信用できていない私はなんなんでしょう。
ふと、そんなことが頭によぎります。
それは実はすごく失礼で不誠実なことなんじゃないでしょうか。
「……はぁ、なんて顔してんのよ」
「え？」
「まぁアリサのことだから？　どうせ友達が信用できないと勝手考えてるんでしょ？　そんなこと考えてるのアンタくらい。というかバカよ、バカ」
「ば、バカ！？」

失礼とかそういうことなら分かりますけど、バカってなんですかバカって！　信用云々に頭の良さは関係ない、というかこれでも成績いい方なんですよ！

「そうじゃないって……あのね、友達イコール信用できる人なんて式は無いのよ。そりゃ、友達を信用出来れば一番いいことよ？　でも友達だから信用するってのは間違い。そんなんじゃいつか騙されるわよ」

「えっと、その、え？　友達は信用できるから友達なんじゃないんですか？」

「いや、だから……」

鈴ちゃんがすごく困った顔をして私を睨んでいます。

私、そんな困らせるようなこと言いましたか？

「あぁもう！　じゃあ聞くけど、私が信頼できる友達にも言えない秘密が無いと思う？」

「えーっと、はい……？」

「じゃあ、甲龍の機密を誰かに言うと思う？」

「いいえ」

そんなことしたら罰せられちゃうし、中国自体傾いちゃうかもしれないじゃないですか。

「なら友達が絶対に誰にも言わないから教えてって言ってきたら？」

「それでも言うわけ無いです……あ」

信用してる友達にも言えないことはあるんですね……

でも、私が女の子が好きってことを言えないのと機密が言えない

のでは随分スケールが違うと思います。

「ね？　友達同士にだって言えないことはあるのよ。さっきのはスケールが大きかったけど……そうね、スケールを小さくしてみれば……アリサ、胸が小さいことをセシリアに相談できる？」

「無理です！」

「私も無理。まぁ、友人関係なんてそんなもんよ。人によっては携帯のメールアドレスを交換しただけで友達っていうくらいだからね」

それは知人って言うんじゃないでしょうか……

「……だいたい信用できないと友達になれないなら親友になるにはどうすればいいのよ」

「え？　なんか言いましたか？」

「何でもない！　まぁそういうことだから、私もアリサの話を無理に聞こうとしたのは悪かったわ。これで仲直りもできたし。いい？　私が言ったこと、忘れるんじゃないわよ？」

少しくらい秘密があってもいいんですね……

それでも、鈴ちゃんにも話そうと思います。

「私の悩み事なんですけど……ご飯の後、聞いてください」

「分かった。テーブルのほう用意しておいて」

「りょーかいです！」

17. La mission pour r?conciliation.

遅れていた理由ですが、一つは今週から学校が始まりました。
もう一つは、えーと
妹が転生者なネギま二次の作品を読んでいたからで……超面白いですよ？（
てことで自由な時間を読むのに使っていたわけですね。
名前といいキャラといい６－７割被ってるけど気にしない。
被ってるといえばお隣がヤンキーさんなＩＳ二次ともストーリーが被ってますがやっぱり気にしない。

ほ、ホントに事故なんですよ？
書いてから存在を知りましたから。

次回、シャルル現るる……多分

18．Le malentendu（前書き）

「すれ違い」

短め。
そしてシャルロットの立ち位置はまさかの……
ここから原作二巻分ということになります。二巻は少しダークなのでご注意。

18. Le malentendu

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

シン……

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を、」

ダウトです。

残念ながらこの教室には男装している美少女はいません！

って、暴露できたらシャルロットも気が楽になるのかもしれませんね。

「「「「「キャーーーーーーーーーーーーーーーー！」」」」」

「（ギロリ）」

「ひぃっ」

って、待って下さい織斑先生！　どうして私を睨むんですか！？

私一言も口にしていません叫んでません！

え、なんですか？　あの、声に出して……お、あ、え、あ、あ、あ、あ、え、お？　……あ、お前が黙らせろですね！　って、ええ！？　先生、クラス代表の仕事を勘違いしてませんか！？

あぁ、もう分かりましたよ！　分かったので投げやすそうなチョークを選ぶのを止めて下さい！

「あ、あのー、皆さんちょっと、声が」

「外人の男！」「フランス！」「美形！」「貴公子って感じ！」「恋人は！？」

「聞いてないですね……いいでしょう。クラス代表の強権発動です」

がたんっ！　とわざとらしい音を出して立ち上がり、ばんっ！と机に手を付く。

突然の私の行動にクラス全体が静まりました。予想以上の音が出て私もびっくりしちゃいましたが……

私がシャルロットの恋人になるんです！　……じゃなくて、

「くすっ」

まったく、入学から二カ月も経ってしまったので、私が危なさそうな子として扱われていた（上級生からは未だに同じ評価ですが）のを忘れてしまったんですね……？　せっかくなので思い出させてあげましょう。

いえ私は基本的に優しいんですけど、怒ると怖い、というキャラは役に立つのでそのままにしていました。

教団まで歩いて行ってクラスをじろりと見渡す。私が苦労しているのにどうしてセシィは暢気に窓の外なんか見ているんですか！

というかやっぱり怒ってるフリとか無理ですよぉ……

「皆さん、すこし、煩いですよ？　転校生のお二人も困ってしまうじゃないですか。あんまり騒ぐと私、怒っちゃいますよ？　ねぇ、セシぃ？」

「わたくしですの！？　わたくしそこの殿方には興味無いですわ！？」

へー……シャルロットに興味がないんだ。こんなに可愛いのに。

へーそうですか。あぁそーですか！　セシぃなんてもういいです！

「アリサさん！？　どうして怒ってらっしゃるんですの！？」

「いいからセシぃも叫ばない！　はい！　クラスの皆さんも席について！　質問はしない！　かっこいーのは分かりましたから心の中で言っていて下さい！」

というかシャルロットはかっこいいんじゃ無くて可愛いんです！

……織斑先生。こんな感じで、いいですかね？

「（ッグ）」

織斑先生から送られるサムズアップ。どうやら気に入ってもらえたようです。

「っほ……では、ボーデヴィッヒさんも自己紹介をお願いします。というか、なんで私が話を振らないといけないんですか……」

まぁ、山田先生が私にはみなさんを抑えられないのでお願いします！　みたいな目で私を見てくるからなのですが。

どうしてＩＳだとあんなに強いのに教室だとこんなに弱っちいんでしょう。

もうここのところ目立ちたくないとか言ってられない生活ですよ。そのおかげで人見知りは更生されてきてますが。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「ということでした。ボーデヴィッヒさんは人付き合いが好きではないのであんまり近寄るな、とのことです。ちなみにドイツの軍人さんだそうですよ。あと織斑先生に対しては従順なので何か困ったら私じゃなくて織斑先生に言って下さいね。あ、織斑君。ボーデヴ

ィッヒさんから織斑君にい“痛い”ことがあるそうですから前に来て下さい」

「え？　あぁ分かった」

誤字じゃないですよ？

あぁ、ちなみにボーデヴィッヒさんとは昨日、織斑先生を訪ねて学園に来た時に遇いました。なので私が彼女の情報を持っていることは不思議ではないのです。

あと織斑君ごめんなさい。なるべく皆さんの注目を集めて下さいね？

バシンッ！

うわ痛そー。

というわけで、皆さんが殴られた織斑君に注目している間に私の用事を済ませちゃいましょうかね。

「デュノアさん」

「はい？」

「Ｊｅ　ｓｕｉｓ　Ａｒｉｓａ　Ｆｕｗａ．　Ｉｌ　ａ　？ｔ？　ｄｅｍａｎｄ？　ｐａｒ　ｖｏｔｒｅ　ｐ？ｒｅ　ｑｕｅ　ｊ　ａｉｄｅ　ｖｏｔｒｅ　ｖｉｅ　ｓｃｏｌａｉｒｅ．　Ｍｅｓ　ｍｅｉｌｌｅｕｒｅｓ　ａｍｉｔｉ？ｓ．　Ｍｌｌｅ．　Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ　Ｄｕｎｏｉｓ．　（私は不破アリサです。あなたのお父様からあなたの世話をするように頼まれました。よろしくお願いします。シャルロット・デュノアさん）」

「ぇ？　……あ、不破って博士の、」

ニコリ

「「「「「だ、だいひょーの、笑顔!?」」」」」
「わ!?」

い、いつの間に皆さんこっち見てたんですかっ!?
ま、まぁクラスでフランス語を理解できるのは私以外にいないことは確認済みですし、内容はばれていないでしょうから問題ないですよね?

「だいひょー! 抜け駆けはずるいと思うな!」
「というか、代表ッて笑うとあんなに可愛いんだ」
「あれってガチ狙いってことかな? くぁー! デフォ装備のしかめっ面の下にあんな兵器を隠してたなんて」
「んー、悔しいけど代表とシャルル君ってお似合いかもね。金髪同士だし」
「「「「たしかに」」」」

「い、いい、いい加減にして下さい! 五人とも怒っちゃいますよ!」

まったく……そりゃ、好きな人には最高の笑顔を見せたいじゃないですか。それを兵器だなんて失礼極まりないですね! それもお似合いだなんてからかって……
五人とも後でケーキ作ってあげちゃいますからね!
お似合いですって、ふふ。

「あー……ゴホンゴホン! それではHRを終わる。各人は――」

次はペアでの模擬戦ですか、なら私はセシィを……

「ボーデヴィッヒさん? 学園内は広いので――」

あれま、セシぃの面倒見の良さが発揮されていますね……何も起こらなければいいんですけど。
なら、私はシャルロットを、

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
「だ、だだだ、ダメですよぉ！　デュノアさんは私が、クラス代表の私が！」
「いや、あいつらは男、」
「私は同じフランス出身です！」
「わ、分かった……分かったから落ち着け不破。ということだ織斑。遅刻せず行けよ？」

おお！　織斑先生は話が分かる人ですね！
というか、シャルロットと織斑君が同じ部屋で着替えるようになるのは問題ですよね……男の子として来てしまった以上仕方ないのですが。

「ではデュノアさん、着いてきてください」
「う、うん」

キャー！　シャルロットの手、握っちゃいました！　汗とかかいてないですよね？　あれ、どうしよう、分かりません！
とりあえず、人のこない教室で着替えてもらうのがいいですよね。
そうなると、少しグラウンドから離れてしまいますが……

「もういいよね？　そろそろ放して」
「ぇ……？　デュノア、さん？」

パッと、シャルロットの手を控えめに引いていた私の手が払われ

ました。

……割と、乱暴に。

恥ずかしいから、なんて理由ではないのは明白です。シャルロットの目から覗くのは……

嫌悪感……？

「あの人の命令で僕を監視？　やめてよ。僕はあの人のオモチャでも道具でもないんだから……あの人に媚びるのは構わないけど、僕を巻き込まないで」

「ちが……私達は」

「知ってるよ。君、何度かあの人やその本妻と個人的に会って話してるでしょ？　それで、私を身代わりにデュノア社が潰れないようにしようとした……違う？」

「違う！　私はあなたの、」

「愛人の子もまとめて処理できるし、誰が考えたか知らないけど、よくできてるよね。じゃあ僕は着替え終わったから行くよ」

これ以上話すことはない、そういう空気を醸し出してシャルロットが扉を開けて……

「待ってください！　私は……私は」

「あ、不破さんは体調を崩したので保健室に行きましたって言っておくよ。授業には来なくていいからね」

バタン……

「私は、あなたの味方でいたいんです……」

なんで、こんなことになってしまったのでしょう。

◇

「あ、不破さんは体調を崩したので保健室に行きましたって言っておくよ。授業には来なくていいからね」

彼女――不破アリサが何かを言おうとしてたけど気にせずに扉を閉める。やりすぎだなんてことはない。だって、彼女はもっと酷いことをしようとしてるんだから。

十四歳の頃、不破アリサのことを知った。ＩＳ適性がＡ以上ある、まさにＩＳに乗るために生まれてきたような女の子だと研究員の人たちは言っていた。

その上大人しく、学力も高いと評判だった彼女が代表候補生になるのだと思った。だから、もうＩＳにも乗らなくてすむんだろうって。

「なのに……」

ある日デュノアのオフィスで彼女と僕の父であたる人が話してるのを聞いてしまった。

遠かったから内容を完全に把握しているわけじゃないけど……むしろ全部を聞いてしまわなくてよかったと思う。

僕が聞き取れたのは、僕を広告塔にすること、それを持ってデュノアの重要度を高めること、そして僕で時間を稼いでいる間に彼女がデュノアの技術力を認めさせるということ。

僕を広告塔にするのが今回の男子生徒としての入学だと思う。僕は織斑一夏とは違い、正式にデュノア社に所属しているため他国どころか、フランスですらおいそれと手を出せない。だから、デュノアのＩＳ開発許可も剥奪れることはない。

その上で男子でも乗れるＩＳを開発するとでも言えば他国から正式に技術を買うこともできるかもしれない。

そういう、僕だけに泥をかぶせる計画の話をしていたんだと思う。だから、それを僕は邪魔する。確かに僕一人の犠牲でデュノア社に所属する何人もの人が職を失わずに済むということは分かる。

「でも、なんで僕なの……？」

……彼女がその役目を担えば良かったのに。

◇

あー、めんどくさ。

実習なんて言ってるけど私達って結局は他の生徒のお守りでしょ？　やってられないわ。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、不破、鳳（ファン）だな。では七人グループになって……む、おいデュノア」

「はい」

「あのチビ……不破はどうした」

千冬さん……じゃなくて織斑先生わざとアリサのことチビって言ったわね。見渡すのが面倒だからチビって言葉に噛みついてくるのを期待したんだろうけど……

本当にいないみたいね。どうしたんだろ？　昨日の夜から今日の実習楽しみにしてたのにサボるわけないし。

「具合が悪くなったので保健室に行くと言っていました」

「ほう……まぁ、学園に入ってからの疲れが出たんだろう。この時

期になると体調崩す奴も増えるからな。お前らも気をつけるように」

そんな様子なかったと思うけど……ま、まさか、あの転校生に変なことされて泣き寝入りしてるとか！？

アリサ、小さくて可愛いし周りの生徒の話じゃあの転校生もフランス出身らしいから……ま、まさかね。

でも、今の会話からすれば最後まで一緒にいたのはあの転校生みたいだし、後で聞いてみようかしら。

「出席番号順に一人ずつ各グループに――」

はぁ、専用機持ちで分けられてるから一夏と同じ班にもならないし……アリサいいなぁ。

「お、鳳じゃん。って言っても分かんないか。私、三好。不破の……まぁ友達みたいな感じ？」

「アリサの？　なら私とも仲良くしましょ」

三好って名前は何度か寮の部屋での話に出てきた気がする。確か、すごく美人で化粧の上手な演劇部の子だっけ。

改めて見てみれば身長は高すぎず低すぎずで、顔立ちは綺麗系……というか女の子でもため息ついちゃいそう。胸は……まぁ、天敵ではないけど。

Cね。

「あ、みぃちゃんも一緒だ。鳳さん、よろしくね。不破さんからいろいろ聞いてますよ？　今度、中華料理教えてください」

もう一人、礼儀正しい子が。

三好さんと知り合いで礼儀正しいと言うことは……

「一松さん、かな？　私もアリサから聞いてるわ。あと、二木さんっていう子のことも」
「あー、ふたちゃんは別の班みたい。ちなみにデュノアさんの班で唯一悔しそうにしてるのがふたちゃんだよ」

転校生――デュノアの方を見てみれば確かに地団駄踏みながら一松さんを見ている子が一人いる。あれが、女の子大好きっていう……

「そういえば、デュノアさんと言えば朝の代表、なんか本気出してたよね」
「あぁ！　笑い顔すごく可愛かったよね。普段から笑ってればいいのに」

転校生の名前に触発されたのか、他の一組の子が少し盛り上がった。

あ、それ私も見たかったかも。アリサってあんまり笑わないのよね。美味しい料理を食べてるときと、いい夢見た後くらいよ。
まぁ、今日のは機嫌がよかったのね。
アリサはフランスにいる女の子に恋してるって言ってたし。
まぁ、あとで様子見に言ってあげた方が良いかな。

18. Le malentendu（後書き）

二巻分はオリ主視点が少なくなると思います。

19. Matière fondamentale. (前書き)

「全ての始まり」

意訳です。意訳は「根本的な問題」
オリ主迷走中

オリ主の見た目の簡単なラフ画のリンクを第5部の諸注意の項目に貼りました。
汚いですけどね。ラフですから（

19. Matiere fondamentale.

はぁ、まったく……私はＩＳの操縦をしたいんであって他のひよっこの面倒をみたいわけじゃないのに。ああいうもは教師がやれってての。

……なんて千冬さんに言ったら出世規模で叩かれるんだろうけど。

とりあえず、アリサのお見舞いに行ってあげないとね。

きっと、自分だけ実習に出れなくて拗ねてるわ。

コンコン

「……あれ、先生もいないの？」

アリサは具合悪いらしいから寝てるのかもしれないけど、病人残したまま保健室空けるってどういうことなのかしら。

……まぁ、寝てるのがアリサじゃなければ私も大して気にしなかったんだろうけど。

まだ一ヶ月と半分くらいの付き合いだってのに随分あの子の大切（ウェイト）さが重くなってるわ……どこの国でも手がかかる子の方が可愛いなんて言うみたいだけど、まさにそれね。

ちょっと目を離した隙に何か抱えてそうだからついつい構ってあげたくなるのよね。

セシリアもそんな感じなんだろうな。私とはちょっとスタンスが違うみたいだけど。

「このまま立っててても仕方ないし、アリサー？　入るわよ？」

アリサが寝ているのなら起こしてしまわないように、そっと音をたてないように扉を開けて中に入る。

保健室の中には案の定ベッドで眠るアリサ以外誰もいない。
……というか頭まですっぽりと布団の中に入れちゃって、子供かっての。まぁ、身長（大きさ）的にはそんな感じだけど。十二歳から全然身長伸びてないって言ってたっけ？　……それなのにBカップ目前とか私に喧嘩売ってるのかしら。

「まったく……それじゃ暑くて目が覚めちゃうでしょ」

なるべく寝てもらうために布団をめくろうとする。いや、別に寝顔を見てみたいとかじゃないわよ？　この子寝るの私より遅くて起きるのは私より早いから寝顔を見たこと無いのよね。
起きるの速いって言ってもギリギリまで布団の中でゴロゴロしてるような子だけど……低血圧なのかしら？

「って、あれ？　アリサ、起きてんの？」

布団をめくろうとすると弱くない抵抗がある。
ちょうど、内側から引き剥がされないように掴んでいるみたいな。
ちょ、ちょっと、私と話したくないってわけ!?　いいじゃない、あくまでも抵抗するって言うなら私も本気出すんだから。

「ん～～！　起きてるんなら顔見せなさいっての！　なんでこんな力強いのよ！　具合悪いんじゃなかったの？」
「だ、だめです……鈴ちゃん、お願い」

お、お願いされたって。
アリサの弱気な声につい力が緩む……泣きそうな声出すほど嫌なの？　ちょうど、傷痕のことを話していたアリサと同じような声で心配になる。

「分かったわよ。無理に引き剥がしたりしないからこのまま話そうか？」
「はい」

さて、カーテン開けて日を取り込んで……暖房も二十八度でいいわね。誰か入ってきたら困るから鍵も締めないと。
アリサ、あんたから出てこないと本当に病気になるわよ？　どうせ今は具合悪くないんでしょ？

「それで？　なにあったのよ？」
「それは……言えません」
「なっ……アンタねぇ！」

先週のこともあったのに、まだ私にはなにも教えてくれないっていうの！？
私のこと、まだ友達だと思ってくれてないの……？　頼りにならないかなぁ？

「友達だから……秘密なんです。話したら、きっと鈴ちゃんは助けてくれちゃうから」
「助けるわよ。当たり前でしょ？」

でも、助けられたくないってことよね？
私と喧嘩した時もアリサの友達に助けを求めてたんだし……多分、もっと重要なことなんだとは思うけど。
それでも……

「なにを悩んでるのかだけでも言えない？」
「い、言えません……ひっ」

え？

ちょっと、今の聞き間違いじゃないわよね？

聴覚に集中してみると、やっぱり布団の中から押し殺した泣き声が聞こえる。

アリサが泣いてる……？

「やっぱり、あのデュノアって男になんかされたのね！？」

言えないってのも、よほどのことされたんじゃ……たしかアリサはデュノア社に所属してるんだし、そこの御曹司であるあの転校生に脅されて何かされたっていうのもありえないことじゃないかも。

脅されて、無理矢理……襲われた？

もしそうなら……

「許さない……落とし前付けさせてあげる」

「鈴ちゃん！？　違います！　シャル……あの人は悪くないんです！」

「アリサ……？」

その瞬間、布団を払いのけてアリサが起き上がった。

……どういうこと？

今の態度じゃどう考えてもデュノアが関係して泣いてるってのに……

そんな、目も真っ赤にしちゃって……なんで泣き寝入りしてんのよ。

「なんで、かばうの？」

アリサは、誰かを庇うことはしない。だって、庇うような友達がいなかったから。

自惚れじゃなくて、アリサの友達っていえるのは私とセシリア、あと話を聞く限りではさっきの一松さん達三人……それだけだって言える。

だって、隠し事を一つもしない相手が友達だって先週までそう思ってたんだから。

そんな生活は誰にも出来ない。だからアリサに友達はいなかった。

私はフランスでのアリサを見たこと無いけどあんなんじゃ友達と思える人もいないはず。

じゃあ、あのデュノアってのはアリサにとっての何？

「やっぱり、脅されてるんじゃないの？　確か、アリサのお父さんもデュノアの所属研究員なのよね？　アイツにとって不利なこと言ったら辞めさせるとかそういうことを……」

「違います！　ほんとに、違うんです……私が馬鹿で臆病だっただけで。全部、私のせいなんです。だからこれ以上、デュノアさんのことを悪く言わないでください」

◇

「鈴ちゃん!?　違います！　シャル……あの人は悪くないんです！」

「アリサ……？　なんで、かばうの？」

放っておいたら手遅れになるんじゃないかって、そう思ってつい鈴ちゃんに顔を見せてしまいました。

涙が尽きるんじゃないかって思うほど泣きましたから、もう平気です。

ただ、こんな顔を鈴ちゃんが見たら勘違いしてしまうから隠そうと思っていたんです。

今考えるべきことは、どうやってシャルロットの誤解を解くかで

す……でも、誤解をといても私がシャルロットに男装をさせる結果を引き寄せたわけですから許してはくれないでしょうね。

私が、恨まれるのはもうどうしようもないです。

でも、やっぱりシャルロットは社長さんのことを疑っているから……あの本妻さんを含めて三人で仲良く暮らせるように、その結果を作りだすのが罪滅ぼしになるんじゃないかと思ったんです。

「やっぱり、脅されてるんじゃないの？　確か、アリサのお父さんもデュノアの所属研究員なのよね？　アイツにとって不利なこと言ったら辞めさせるとかそういうことを……」

「違います！　ほんとに、違うんです……私が馬鹿で臆病だっただけで。全部、私のせいなんです。だからこれ以上、デュノアさんのことを悪く言わないでください」

シャルロットはなにも悪くないんですから……私が自分のエゴで巻き込んだだけで。

私が中途半端な想いでシャルを守ろうとしたから。

だから余計に彼女に辛い思いをさせる結果になったんです。

多分、私が勇気を出して直接シャルロットに社長さんのことを言えば良かっただけなんです。

シャルロットに私の本当の姿を知られるのが怖くて気付かれないように間接的に関わって、だから保健と思ってシャルロットが男装することになった時に私に教えてもらえるように……わたしから提案したんです。

苦しめることだって、社長さんとシャルロットの間の溝を深めるだけだって分かってたのに……

もしかしたら仲違いさせてシャルロットを独占しようと思っていただけなのかもしれません。

「全部、私が悪いんです」

「アリサ……」
「鈴ちゃん。私、休学するかもしれません」

シャルロットはいずれ男装しなくてよくなる。そうなるとデュノア社が経営危機に陥るから……だからＩＳ学園を出て、研究所を手伝わないといけません。

デュノア社に所属している操縦者の中でＩＳ適性Ａが出ているのは私とシャルロットだけ。その二人ともがいないので第三世代型の開発はさらに遅れています。

ただでさえフランスは遅れてるから……精神が摩耗するのも覚悟して協力しないといけません……ううん、それもやっぱり私の罪滅ぼしなんです。

それでも時間が足りなければイグニッション・プランを崩すのも視野に入れます。

今、一番採用に近いのはセシィが乗っているのと同型のティアーズ型（タイプ）のはずです。もちろん負ける気はしません。今まで何十回も戦ってきた機体だから、乗っているのが私との戦闘を経験しているセシィじゃなければ確実に勝てます。

その次点のレーゲン型……これがボーデヴィッヒさんの機体ですね。予定されているはずのタッグマッチで弱点を見抜けばいいだけです。

テンペスタ？型はぶっつけ本番で勝つしかありませんけど、仮に負けたとしても突出している二機を破壊できれば……それこそ絶対防御も貫いて操縦者を昏睡状態にできるくらいまで徹底的に。

操縦者を■すくらいの覚悟で臨む必要もあるかもしれません。

私は刑に処されるでしょうが、第二世代型であるにも拘らず第三世代型ＩＳの操縦者を再起不能にするだけの力があれば……第二世代型でもイグニッション・プランに入れるかもしれません。

「アリサ！」

「ひゃい！？　って、鈴ちゃんですか」
「いきなり真剣な顔して……何考えてたの？」
「な、何でもないですよ！？」

危なかったです。鈴ちゃんの存在を忘れていました。

「それで、休学するってどういうこと？」
「その……デュノアさんが来たので代表候補生の資格を譲渡するんです。そうなると私がＩＳ学園にいる必要はなくなりますから。本国に戻って研究の手伝いをします」
「ちょ、ちょっと待って！？　代表候補生はあくまでも候補生なんだからアリサが辞める必要無いじゃない！」
「私とデュノアさんの成績は同じ位ですから……」

これは、事実です。
社長さんから送られてきたデータによればハイパーセンサーとのリンクは私の方が強いですがシャルロットの高速切替（ラピッド・スイッチ）がそれを補っています。私の並列処理（マルチ・サーキット）は最大でも二つまでしか使えませんから高速切替（ラピッド・スイッチ）のほうが汎用性の面で優れています。
……思考が三つに分割できるようになれば、その限りでもないんですけどね。

「同じだからって一緒にいちゃいけないってわけじゃ、」
「無いですけど、意味はないんですよ。デュノア社は操縦者の数も豊富とは言えないので……」
「……かもしれない、なのよね？」

私が、シャルロットを……シャルロットが被ることになる汚名を雪ぐにはそれしかありません。

「私がアリサと一緒に卒業したいって言っても……変わらない？」

私だって、まだセシぃや鈴ちゃん達と過ごしたいですけど……原作の通りになればあと一カ月もいられませんね。

それで、いつかシャルロットが私の行動の目的に気付いてくれれば……それだけでいいんです。

「私は、諦めないわよ……というか髪ボッサボサじゃない。結んであげるからこっち来て」

鈴ちゃんは手早く私の髪の毛を結んでツインテールにしちゃいました。

「アリサって毛の量多いのねー」

というか被ってますよ？

……お揃いってちょっと良いですね。

◇

アリサと話して、気付いたことがあった。

あの子はどういうわけか自分のことなんて二の次にしてる。

でも、それ以外のことは全くわからないから、私よりもあの子のことを知っている人物――セシリアに相談する。

「セシリア。アリサが泣いてたんだけどさ。何されたんだと思う？」

「……きっと、なにもされていませんわ」

「え？　でも、あのアリサが泣いてたのよ？　私、あの子が泣いたのってあの時以外記憶にないわよ？」

「私だって十回も見たことありませんわ」

それなら余計にすごくひどいことされたってことじゃないの？
……ダメね。私はまだ全然アリサのことを分かって無い。
もっとよく知るために、やっぱり休学なんてさせないわ。

「アリサさんは……言い方はアレですけど在り方が歪んでいます」
「それは、分からなくもない」

あの子は普通の高校生の思考が出来ていない。それこそ異常とも言えるほどに。だからどこに言っても浮いているような気がしている。

「私の勝手な想像ですが……アリサさんは例え犯されても泣きませんわ」
「おかさ……って、はぁ!?　さすがにそれは無いでしょ!?」
「いえ、あの子は自分が損なわれるだけのことは全て受け入れて……我慢してしまいます。だから、嬉しい時にこそ泣くのですわ。今回、それでも泣いたというのなら自分の行動に後悔して泣いたのだと思います。あの子が泣くのはその二通りしかあり得ませんから。悪い意味で感情の制御に長けているのですわ」

じゃあ……本当にデュノアは関係ない？

「いえ、デュノアさんは悪くない、そう言ったのでしょう？　でしたら関係はしているはずですわ。ですが、わたくしシャルル・デュノアなどという名前、アリサさんから聞いたことはありませんわ」
「デュノアに関係することでアリサが後悔して泣いたなら……何かしらの関係があるのよね？　それも、私達と同じ程度に深い関係が……」
「恋愛関係……はありませんわね。わたくしも聞きましたがアリサ

さんは女の子が好きなのでしょう？」

友達、恋人、家族……アリサのことだからそれ以外は全部、他人のはず。

ダメね……セシリアと話せば何か分かるかと思ったけどこれ以上は本人以外分かりそうにない。

「いいえ、あと一人。私でも知らないことを知っている可能性がある方がいらっしゃいますわ」

「へ？　どこに？」

私の徒池家にセシリアがついと視線を動かす。目の動きを追った先にあったのは……

――生徒会室――

19. Matière fondamentale.（後書き）

来週は楯無先輩も加わってバックアップ！かな？

活動報告にて作品の外伝話についてのアンケートを行っています。

ぜひ、意見をお願いします。

20. Ombre et Hyuga.（前書き）

「陰日向」

遅れましたが無事更新！

20. Ombre et Hyuga.

「ふーん？　それで私を頼りに来たんだ」
「えぇ、あなたはわたくし達とは異なるスタンスでアリサさんと関わっているようですから……ねぇ？　ロシア代表の更識楯無さん？」
「あ、知ってるんだ。それ一応機密だから言いふらさないでくれるとお姉さん嬉しいなぁ」

それにしてもアリサちゃんの異変ねぇ。二人はアリサちゃんと転校生の関係を調べてるみたいだけど、アリサちゃんがフランスにいる間、デュノア社の子供と付き合いなんて無かったはずなのよね。
不破家のことは注意させてたから断言できる。
そうなると転校生が実は男の子じゃないってことが関係してるのかしら。でも、それを教えるには私の国家代表っていう立場が邪魔なのよね。下手しなくても外交問題になっちゃうし。
ヒントだけなら、あげてもいいかな？

「とりあえず、一緒にお風呂入ってみればいいと思うなぁ」
「て、転校生とですか！？　男ですよ！？」
「裸になればきっと分かりあえるよ♪」

……これ以上は言えないかな。
私だってそのことがどう関係してるか分からないんだし。もし関係なかったときのことを考えると明言するわけにもいかないのよね。
アリサちゃんのことはもちろん心配だし助けてあげたいとは思うけど、本人が助けを求めてこないのに私から助けに行くのも違う気がする。
まぁ、初めてあったときは助けちゃったけど。

「まぁ、アリサちゃんのことよろしくね？　私はあんまり一生徒を贔屓するようなことできないからさ」
「生徒会長だから……ですわね」

私に贔屓されていると周囲からやっかみも受けるだろうし。
だから私は誰かれ構わず優しくしなきゃいけない。誰にも構わないのは退屈だしね。

「そろそろ行った方がいいわ」
「……失礼しました」

うーん、中国の……鈴音（リンイン）ちゃんだっけ？　怒ってるわねぇ。
セシリアちゃんの方は私のヒントに気付いてくれたみたいだけど……あの子も額面通りに受け取れない子だし、大丈夫かな？　なにかすごい勘違いしそうな気がするわ。
隠れてサポートできればいいんだけどね。

◇

更識先輩はいつものような微笑で真意は分かりませんでしたが……なんとなく、大事なことを仰られていたような気がいたします。
ですが、お風呂というのが何を暗示しているのか全くわかりませんわ。
図書室で調べてみれば、日本でのお風呂は禊（みそぎ）を目的としたものだということは分かりました。その禊は身削ぎを意味しているとか。

「問題は何を身として何を削ぐのかということですわ」

アリサさんにとって必要のないものを……違いますわね。先輩はわたくしと鈴さん、そしてデュノアさんでお風呂に入れと言ったの

ですわ。つまり不要なものがあるのはわたくしたち。
思い当たる節は……無いこともありませんわね。

「わたくしたちはアリサさんに近すぎる……」

更識先輩はアリサさんから離れろと……諦めろと言いたかったのでしょう。

専用機持ちが三人集まっているのは校内でのパワーバランスを崩す可能性があります。たかだか学園内のことで何をバカな、と思うのでしょうが残念ながらここはＩＳ学園。校内でのパワーバランスはそのまま国家間の関係にも関わってきます。

「セシぃ？　難しい顔してどうしたんですか？」

アリサさんはこうやって無邪気にわたくしを覗き込んでいるだけですが……その実、影響力は学年随一と言ってもいい子なのですわ。わたくしに鈴さんはもちろん日頃の行いで一夏さんにも信頼されていますし、その繋がりで篠ノ乃博士の妹である箒さんとも……まぁ馬は合わないようですが。

とにかくＩＳに乗れる男子の一人である一夏さんと繋がりがある以上、周りの女子に対しての影響力も強いのですわ。下手にもう一人の男子であるデュノアさんのと諍いを起こされると……そういう意味で先輩は離れろと言ったのでしょう。

アリサさんがデュノアさんに対して一歩引いた態度でいる以上は生徒が二分されることもないでしょうから。

「セシぃ……なんとなく、セシぃの考えていることは間違いだと分かります」

苦笑しているアリサさん。

……鈴さんの話では結構な大泣きをした後のように見えたそうですが、今笑えているのならそれでいいのかもしれませんわね。

鈴さんにも、わたくしはアリサさんに対して甘すぎだと言われたのですし、少しは自重することを意識してみてもいいのかもしれません。

「ふぅ……結局午前中は全部休んでしまいました。そろそろお腹が空いてきましたね。お昼にしましょう」

「あ、一夏さんから屋上で集まって食べないかと誘われたのですが……もちろん鈴さんも」

「そうなんですか？　織斑君から誘ってくるなんて珍しいですね」

確かに言われてみれば、普段は鈴さんが引き摺ってきますわね。アリサさんも一夏さんに対して悪感情は持っていないようですし、わたくしも彼には興味がありますので拒絶していませんし。

「ですけど……デュノアさんも来られるの思いますわ。平気ですの？」

「あぁ、そうですね……いえ、行きます。セシィは先に行っていて下さい」

「分かりましたわ」

一瞬、アリサさんの笑顔に影が落ちましたが気付かなかった振りをしました。

獅子は我が子を千尋の谷に落とす、と言うそうですが私の心境もそれに似たようなものですわね。アリサさんならきっと乗り越えられると信じておりますわ。

◇

シャルロットとお昼ごはん……ふふふ。
絶対に、自分が望むような展開にはならないと理解していてもわくわくしますね。
織斑君もいることですし、猫を……なんて言いたくないですけど、二人きりの時よりは態度は柔らかいものになるでしょうし。運が良ければ同じことに笑みをこぼしながらご飯を食べられるかもしれませんね。
楽しみですねー。
今日の卵焼きには結構自信があるんですよ。卵焼きは肉じゃがと並ぶおふくろの味だと思ってますから気合を入れて練習してきたんです。
あわよくば胃袋から掴むこともできるかもしれませんねー。私なしでは生きられないような胃袋にしてやんよ、なんて。

「あんまり待たせてもいけませんし、皆集まってからだと顔を出しにくいので急いじゃいましょう」

期待に胸も弾むというものです。
……少し揺れるくらいの胸はあるんですよ？

ガチャン

「ん？」

教室の中から硬質の物が落ちたような音
何の音でしょう？　黒板消しとかでしょうかね。
まぁ、床が粉まみれになっていようが私には関係ないことですし早いところお弁当だけ持っていっちゃいましょう。
そう思って扉をあける。

「……あ、れ？」

床は予想通り汚れていました。

ただし散乱しているのはチョークの粉などではなく、ぱっとみて分かるだけでもソーセージやブロッコリー、プチトマト。

そして、卵焼き。

「あ、不破さんごめんね。手が滑っちゃって」

嘘です。

私のお弁当はいつもカバンの底に入れてあるんですからどう手が滑ってもこんなことになるわけがありません。

周りを見る限りにおいても、お弁当が落ちてしまったなんて言う生易しい様子じゃなく、中身をわざとぶちまけでもしないかぎりこんな惨状にはならないでしょう。

でも、どうして？

犯人と思われる生徒は確か三組の女の子です。

私が顔を覚えていないので当然その程度の間柄なのでしょう。仲良くなるほど付き合いはないですし、当然恨まれる覚えもありません。

この一面だけを見れば確かに故意ではなく手が滑ったという事故の方が納得できそうですが……

「じゃあ私、先生に呼ばれてるから。本当にごめんね！」

「……ニヤニヤ笑いながら謝られても」

「え、なに？」

「……いえ。私が自分で片付けるので早く行った方がいいと思いますよ？」

わざわざ言ったところで意味はありません。

恨まれている理由は分かりませんが行動を起こしている以上、彼女にとって私はとても許しがたい存在なのでしょう。それだけの感情を抱いているのなら私が何を言ったところで改めてくれるとは思えません。

腹は立ちますが――今後、学校に来たくなくなるくらい、私の顔を見るだけで腰が抜けるくらいの目に遭わせたくなるくらいには――怒っても無駄でしょう。

それなら私が我慢して、お互いにこれ以上い嫌な思いをしないようにする方が賢明です。そうすれば彼女が私のことをもっと嫌いになるなんてことも無いでしょうし、私のエネルギーも無駄に消費しなくて済みますし。

「あぁ、そうだ」

おかずを拾い集めている私の背中に声がかけられます。

どうでもいいことですが、先生に呼ばれていたはずなのに急がなくていいのでしょうか？

それなら私を手伝って、とでも言えばいいんでしょうかね？

「織斑君とかデュノア君にあからさまな態度でアタックするのやめてくれないかな？　じゃ、ばいばい」

あぁ……そういうことですか。

私が彼女に対して何かをしたわけではないんですね。

多分、元から織斑君とそれなりに仲良くしている私に対して何かしらの悪感情を抱いていて、さらに朝に私がシャルロットの手を引いて歩いているのを見たんですかね。

所謂（いわゆる）、調子乗っている奴。そんな感じに見えたのでしょう。

それが気に入らなくて私に何かしてやろうと思い鞄を漁ったら私のお弁当を見つけた……典型的な女子の嫉妬心ですね。

普段ならそこまで気にすることでもないんですが……今日に限っていえば確かに私に有効なダメージを与えられる手段です。
集めたおかずの残骸をお弁当の中に詰めてしまおうと思い箱を持ち上げると、重心の位置にわずかな違和感。気になって手元のお弁当箱を覗けば、

「あ、卵焼き一個残ってますね……食べちゃお」

しょっぱい……塩、入れすぎていたかもしれません。

◇

「え？　あら、そうなのですか？　アリサさんにしては珍しいですわね。何でしたらわたくしも……あぁ一松さんたちと。分かりましたわ。伝えておきます」

セシリア……堂々と携帯電話使うのもどうかと思うわ。一応、禁止されてるんだし。
電話の相手はアリサね。
なに話してたのかしら。どうせ屋上に来ることになってたんだから電話なんて使わなくても。
というか、プライベートチャネル使うのと電話使うのだったらどっちが罰則きついんだろ。

「セシリア、今の不破さんか？」
「ええ、なんでもお弁当を作り忘れてしまったので食堂に行くとか」
「ふーん……なら俺達が食堂で食べてもいいな」
「わたくしもそう言いましたが、一松さん達と食べるそうなので気にしなくていいと言われましたわ」
「そうか。残念だな」

確かに残念だけど……一夏はなにを期待してたんだろ。
アリサとはそこまで仲がいいようにも見えないし……もしかして一夏の本命ってアリサなの!?　クラスでは席が隣同士だし、近接格闘の訓練とかＩＳの基礎知識とか、何かと面倒見てもらってるみたいだけど……

「不破さんの弁当うまいからなぁ」
「食いしん坊かっ」

ビシィッ

……つい、ツッコミいれちゃったじゃない。
いや、確かにアリサの料理は美味しいし人にも食べさせられるように多めに作ってるわよ？　それでも、それ目当てにするってのはどうなのかしら。
というか、今まで私が誘った時にホイホイついてきたのはアリサの弁当があったからなの!?
てっきり、この前のキ、キキ、キス……で私のこと意識してくれてるんだと思ってたのに。
仕方ないわね、こうなったら私のお弁当の美味しさを教えてあげようじゃない。中華ならアリサにだって負けないんだから。元中華飯店の娘、甘く見ないでちょうだい。

「一夏！」
「お？　鈴、よんだか？」
「あ、あーん」

うっわー……なにこれ超恥ずかしい。一夏の顔見れないし……あ、でも変な所に押し付けないようにしっかり見ておかないと。

そう思って一夏の顔を見ると……あれ、困り顔？

「鈴、俺達も子供じゃないんだしこういうのはそろそろだな……」

子供じゃないから恥ずかしがってるのが分かんないのこの大バカは！？

でも……朴念仁（ふだん）の一夏なら迷わず食べるところでこんな反応されると困るわ。今までこういうことで恥ずかしがったりしないのが一夏の良いところで悪いところでもあったのに……

あれ、一夏が恥ずかしがってる？

もしかして私の気持ちに気付いたとか？　まぁ、キスすれば誰だって分かると思うのが普通だけど相手が一夏なら常に最悪の状況を考えないといけないし。

「ま、とと、とりあえず食べてよ。これアンタ用の箸なんだから」

「俺用？　まぁ……食うぞ？」

早くしてってば！

パクッ

「ん、美味い」

「あ、当たり前でしょ。分かりきってること言わなくてもいいわよ」

「そ、そうか」

た、食べてくれた……！

あの流れじゃ無理かなーと思ってたけど……ふふふ。

篠ノ之さんが包みふたつ持ってるし、片方は一夏用なんだろうけど気にしないわ。

「じゃ、一夏、これアンタの分ね。ご飯も一緒に温めておいたから感謝してよね」

最初は一夏に分けてくれよって言わせるために酢豚を温めないで、ご飯もつけないことも考えたんだけど。

まぁ小細工ばっかり使っても仕方ないしね。なにより一夏にはあからさまな形で好意を示さないと何億年経っても伝わらないし。

「そういえばセシリアは自分で料理とかしないのか？」

私の酢豚と篠ノ之さんの和風弁当をつつきながら一夏がセシリアに水を向けたを。

セシリアのルームメイトがまとめてお弁当を用意してるのは有名な話だけど……

一夏はなんでわざわざ聞くのかしらね。料理は苦手なんですって女の子に言わせる気？

「わ、わたくしは料理が壊滅的ですから……実家でも一流シェフの方々が用意してくれておりましたし」

セシリア……今度、アリサに頼んで教えてもらおうね。あの子、人見知りのくせに意外と人に教えるのも上手だから。そうじゃないとセシリアが不憫すぎる。

一夏のあんまりな態度に篠ノ之さんどころかデュノアまで半目だし……

あれ、でも男子的にデュノアの反応ってすごくない？　流石はヨーロッパってことかしら。紳士侮るべからず、ね。

「ふーん、そうなのか。でもそういう料理も一度は食べてみたいよなぁ」

「そうでしょうか。わたくしはそういったものよりも気持ちが込められたお弁当の方が美味しいと思いますわ」

そこで私の方を見ないでよ！

まぁ、でも自分だけのために作られた料理ってのは美味しく感じるわよね。アリサのがまさにそれだし。料理を作るときはいっつも食べてくれる人のことを考えて作っているんですよっていつも言ってるけど……なかなか真似できることじゃないわ。私なんて途中で手を抜いちゃうから。

そんなんだからアリサが当番のときの夕飯はいつも食べ過ぎちゃうし……その影響で一時期体重が増えて焦ったこともあったわね。今は食べ過ぎることが分かってるから余分に運動してるわ。

でも食べるために運動するって……もしかして私餌付けされてる？

「おお、うまい！　これって結構仕込みに時間かかってないか？　ええと――」

ショウガと醤油とおろしニンニク、それにコショウと大根おろしを少し。昨日、私とアリサ、それと篠ノ之さんでお弁当の準備をしてるときにアリサが篠ノ乃さんに教えた唐揚げのレシピ。

篠ノ之さんの方に唐揚げがないってことは失敗も多かったってことなんだろうけど……本当に失敗だったかは分からないのよね。アリサのを先に食べるとなんでか自分のが美味しくないように思えるし。

それにしてもこの二人、気は合わないくせに結構関わりがあんのよね。

まぁ、篠ノ之さんも一夏がいないところでは引っ込み思案な所があるし、アリサだって遠慮がちだから、そんな関係に落ち着いたのかもね。

昨日、一緒にいた時はアリサも楽しそうに篠ノ之さんに料理を教

えてあげてたわけだし。
……あれ？

「セシリア、アリサはお弁当を作り忘れたって言ったのよね？」
「ええ、そうですわ」
「そう……」

……持ってき忘れた、ならまだ納得できる。あの子、割とそそっかしいし。
でも作り忘れたなんてことは有り得ない。だって私達と用意してたし、上手にできてた卵焼きを自慢げに私達に食べさせてきたし。
まぁ、美味しかったのは認めるけど。
篠ノ之さんも私の方を見てるってことは同じことに気付いたのね……心配。
アリサはあれでいて慎重だからバレる嘘なんてつかない。
今回のことは何かがあって余程心が乱れていたとしか思えない。
何か――時期的に考えるならデュノア繋がり……でも、今日はほとんど一夏と一緒にいたみたいだから関係ない可能性の方が高いわね。
……まぁ、いいわ。

「デュノア、ちょっと時間貸してくれない？」
「え？」
「すぐ済むから」
「それなら、はい、分かりました」

ちょっと、焦りが顔に出たかな……一夏が変な顔で私を見てる。
変なところで鋭いんだから。
大丈夫、今回はこの男が関わってるとまでは思ってないわよ、そんなことを思って一夏には笑いかけたら、顔を背けられた。

その反応は少しイラっときたわ。

「鳳（ファン）、私も行くぞ。一宿一飯の恩義があるからな」

「使い方は間違ってるけど分かったわ」

「細かいことは気にしない主義なんだ」

泊めてないしご馳走してないし。

いや、中国人の私が言えることでもないんだけどさぁ。一応アンタはれっきとした日本人でしょ？

20. Ombre et Hyuga. （後書き）

アリサの受難はまだまだ続く……かも？
お弁当事件の犯人もシャルロットにする予定だったのですが一般生徒に変更しました。
ほら、シャルってちょっとそういうことやりそうじゃないですか？（

アンケートまだ続いてます。
詳しくは活動報告にて……あんまりご期待に添えない可能性もありますが（

21. La malice invisible.（前書き）

「目に見えない悪意」

あと、いつの間にかお気に入り登録が３００を超していました。ありがとうございます。
最近伸び悩んでいたのでこういうのは嬉しいです。
でももっとギャグとか増やせば見てくれる人も増えるんでしょうか？

今回は珍しく箒のターン。

21. La malice invisible.

「それで、僕に何か聞きたいことがあるんだよね？　篠ノ之さんと、鳳（ファン）、さん？」

むぅ、不破の言うことと事実が矛盾しているからつい鳳に付いてきてしまったがなにをするのか全く分からない。というかデュノアはなぜ必要なのだ。

「一応聞くけどアリサのお弁当に何かしたなんてこと無いわよね？」

「なにもしてないよ。僕、今日は一夏といたから疑うなら、」

「信じるわよ。一応って言ったでしょ。どうせ、アリサをよく思ってないどっかの馬鹿が隠したとか捨てたとかそんなことだろうと思ってたし」

あの弁当を捨てたのか！

もったいない。私なら恨みがあったとしても捨てずに食べるな。

いや、決して私が食い意地はってるとか、そういうことではなくて……

あの弁当にはそれだけの価値がある、というだけの話だ。

でも、それをデュノアに聞くと言うことは……なんだ？　不破とデュノアは仲が悪いのか？

「それじゃあ、本当に聞きたいことが他にあるんだね？」

「ええ、アンタ、アリサのことどう思ってるの？　嫌い？」

「……好きとか嫌いとか、そういうのじゃないよ。ただ許せないだけ」

初対面なのだから好き嫌いなどあるわけもない。私の時は別とし

て、不破は話してみれば意外と良い奴だということも分かる。
最初、私に怒ったのも今考えてみれば理不尽なものではなかった。
だが、許せないとはどういうことだ？　というかなにも分からない私がここにいてもいいのだろうか。なんだか、すごく場違いな気がするぞ。

「許せない理由を聞くわけにはいかない？」
「別に僕は構わないけど……不破さんと仲がいいならやめた方がいいと思うよ？　関係が崩れるかもしれないし」
「……」

不破はデュノアになにをしたんだ。聞いただけで友人関係が拗れるほどのことをするような奴には見えないが……
デュノアが狭量なのかとも考えたが、午前中の態度を見るかぎりでは周囲に対して気を遣える、世間一般でいうところの紳士だった。
鳳は……やはり迷っているな。
そこまで仲がいいとは言えない私だって聞こうか悩んでいるんだ。親友と言ってもいいくらいの関係のコイツが悩まないわけがない。
ルームメイトなのだから友人関係ではなくなったとしても関係は残り続けるのだし。
それなら、この役目は私のものだろう。

「聞かせてくれ。鳳、お前は戻った方がいい」

聞いた後で、私が判断して伝えよう。

「……はぁ？　なんで篠ノ之さんが聞いて私が聞かないのよ。というか私以外に誰が聞くっていうわけ？」

む、そうくるか。

ただ、一時の感情だけで聞いては後悔するかもしれないんだぞ？
これからずっと不破に対して一物抱えることになる。鳳やオルコットには裏表なく近づいていく不破だからこそ、余計に辛く感じるだろう。

「甘く見ないで。私は自分で見たものしか信じないわ。この話も私が直接聞いて判断する」
「……二人とも聞くってことでいいんだね。それなら話すよ？

……ことの発端はデュノア社の経営が傾いていることから始まったんだと思う。

知ってるとは思うけどデュノア社はフランスでは一番大きいＩＳの開発会社だよ。第二世代型のシェアも第三位を誇ってる。
でも第三世代型はどうしても開発できないでいるんだ。
だから、次のチャンスをものにできなかったらＩＳの開発許可が剥奪されて、そうなると資金援助もなくなるから経営がたちゆかなくなる。つまり倒産か吸収合併だね。
その最後のチャンスももう目前なんだけど、第三世代型の開発の目処は未だに立っていない。

だから不破さんがそのチャンスまでの時間を引き伸ばす計画を考え出したの。
普通、中学生の言う計画なんてまともに扱われないんだろうけど、彼女の父はＩＳの開発責任者の一人で、彼女自身デュノアの社長―つまり僕の父親と親交があった。それがなくても彼女もＩＳ適性Ａっていう会社にとっての宝物だからね。
会社の人たちも立場上、尊重するしかない。それが無くても彼女は信用されていたみたいだけど。
なにより、その計画は確かによく考えられていたんだ。

皆がその計画に則って協力すれば数年の猶予が生まれるのは確実で、詳しくは言えないけど第三世代型の開発に必要な技術が手に入る可能性もあった」

「……前々から思ってたけど、あの子頭もいいのよね」

確かに、ＩＳ学園では重視されない数学やその他普通の高校で習うような教養課程を網羅していたりするしな。

なにより発想力がある。

頭の中に小人さんを大量に飼っているんじゃないかと思えるほど、不破の出す案はバラエティーに富んでいるのは確かだ。別に頭の中にいるのは小人さんじゃなくてもいい。私がメルヘンチックとかそういうことじゃないんだ。

「それで、その計画ってのは？」

「うん……不確定要素はゼロじゃないけど、期待値をみるとそういう賭けも悪くないと思えるようなプランだった。ありていに言えば、僕の人格とか自由とか、そういうのを纏めて無視して会社のための人形にすること」

「っ！？」

そんなことをあの不破が？

いや……というか、それはやっぱりおかしいだろう。

「その計画、不破自身が人形になることはできなかったのか？」

鳳やオルコットから不破の人格については少なからず聞いている。

曰く、自分の優先度は常に最低。

もちろん見ず知らずの相手にまでその考え方が適用されるわけではないだろうが、クラスメート程度の関係で、その範疇に入ってしまうとか。

自分だけが我慢すればいい選択肢があればそれを迷わず選ぶんだとか……そんな奴が、自分が安全地帯にいる計画を出すのか？

「できるかどうかと言えば、できるよ。というよりも、彼女がやる方が安全だった。僕は計画に納得してないからね。なんにしても、僕じゃないといけないなんてことはなかったと思うよ？」

「ふぅん……だからアンタはアリサが、」

カタン……

「誰っ！？」

かすかに扉が揺れた音がした。

その方向を見れば翻ったスカートと足が一瞬のぞき、すぐに消える。

一番扉に近かった私がすぐさま廊下まで出たがすでに影も形もなくなっていた。

……失敗したな。周りに注意していなかった私の責任だ。

「あちゃー……今の話、全部聞かれてたら不味いことになるわね。そうなったらどうやって解決しようかしら」

「……解決？」

鳳の言った言葉にデュノアが理解できないといった呟きを発した。

さてはこいつ……

「何で今の話を聞いたのにまだアリサのことを助けようと思ってるの？　そういう顔してるわね」

「えっ？　いや、でも」

「まぁ確かに、今の話のアリサは酷いわ。私でも友達やめそう。で

も、」
「まだ真実と決まったわけじゃない、だろう？」
「……私の言葉とらないでよ」

まだデュノアの言ったことが本当かは分からない。普段の不破を見ていれば余計に、だ。

「……なら」
「あぁ、アンタに嘘つきって言ってるわけじゃないの。ただ、アリサがなにを考えてそうしたのか、それはまだ想像でしかないでしょう？」
「でも、普通は自分が自由でいたいから、」
「普通、ねぇ……アリサにその言葉は合わないわよ。何から何まで歪みきってるもの」
「ぇ……？」

デュノアの声に鳳がしまったという顔をした。確かに鳳の言う通りなのだが、本人がいない場で言っていい言葉ではないだろう。
不破は……どこかおかしい。

「でも、これ以上は私が言うべきことでもないから。デュノア、お願いだから……アリサと直接話してあげてくれない？　きっと、あの子はあなたのためにその選択をした」
「……そんなに、不破さんは魅力的なひとなのかな」

鳳があまりにも真剣だからか、デュノアの声にも困惑が混ざってきた。
不破が魅力的かといえば……

「恋の相手がいない男の半分以上が惚れるだろうな。もっと普通の

人格なら九割も夢じゃない」

初日、デュノア相手に見せたあの笑顔。あれは不破自身、普段しかめっ面でいるからギャップ萌えとかいうのを通り過ぎて最終兵器（リーサル・ウエポン）だ。少なくない女子が見惚れていたしな。

一夏がボーデヴィッヒに殴られていてよかった。そうじゃなければ持って行かれていたかもしれん。

「デュノアが聞きたいのはそういう意味での魅力じゃないと思うけど……どこか構ってあげたくなるような子よ。でもあれでいて攻撃力は高いから注意が必要よ？」

何度か組手をしたことがあるが、あんな小柄な体格なのに私は勝てないしな……得物（しない）を持てば分からんが、痛みを恐れずに向かってくるから振り下ろすのが怖くなる。

それに不破は多分、武器を持った相手に容赦しない。

「あ、あの子と戦ってみようとか思わない方がいいわよ？　生身でジェットコースター気分を味わうことになるから」

鳳もあの雷（いかずち）とかいう投げを受けたことがあるのか。人にはいろいろ言うくせに自分は人を殺せる業を使うからたちが悪い。

まぁ、あの業は殺さないように、というか相手に痛い思いをさせないような構成になっているがな。

背負い投げの後、足で頭を引っ掛けて背中から着地するように回転させているが、本気で蹴れば頸骨が折れるだろうし、そもそも回転させずに頭から落とせば終わりだ。

「人間ジェットコースター……昔、僕が受けたのとどっちが怖いのかな」

デュノアの呟きは聞こえなかったことにした。
あんなことをできる人間が二人以上もいてほしくない。

◇

聞いちゃった、聞いちゃった！
前からあの不破アリサとかいう子は気に入らなかったのよね。
別にあのデュノアとか言う外人には興味ないけどあの女を陥れられるなら利用しない手はないわ。
昼も弁当のことなんて気にしてませんよなんていう涼しげな態度だったし。まるで私になんて興味がないような感じ。

「ほんと、むかつく」

専用機持ちがそんなに偉いっての？　適性が高い子の中からたまたま選ばれただけじゃない。
私は、実際そこまで適性高くはないけど適性Ａで専用機を持ってない人なんてたくさんいる。その中からたまたま選ばれただけで他人のことを見下して……イライラするわ。
それに、今の話を聞けば周りの連中からの目も変わるでしょ。
今まで怖いけど実はいい人みたいな扱いだったけど、このネタなら化けの皮はがしてやれるわ。
結局、自分がいい人ぶりたいだけで影では自分の保身しか考えていないような奴だってね！

「あ、エミリ？　ちょっと聞いてよ。さっきデュノア君と誰かが話してるの聞いちゃったんだけどさ――」

あーあ。

これであの子もきっとイジメられるんだろうね。
可哀想……なんて、笑いが止まらないわ。
いっそのこと学園に来なければ、というかフランスにでも帰ればいいのに。
専用機持ちと仲が良いらしいけど、どうせ学園の中でのＩＳ使用は禁止なんだし報復だって怖くない。あんなチビ女にできることなんて限られてるし、デュノアは確実にこちら側に立つだろうから。
ボーデヴィッヒとか言う転校生がどっちに転ぶかは分からないけど、一組の子から聞いた話じゃ他人に興味ないみたいだし大丈夫に違いない。

「あ、リカ？　さっきさぁ――」

さっきの話は私と同じで不破が気に入らないって子を中心に広めていってる。もちろん巧く聞き取れなかったところを大げさに脚色するのも忘れない。
話す相手の殆どが不破に対して学園にいる男子と仲良さそうで羨ましいとかそういうちっちゃい嫉妬を持っているだけだけど、人間羨ましがってる人間に欠点があればすぐにそれを叩くことが出来る。私はその大義名分を広めているだけ。
明日には学年全体に噂は広がっているだろうし、これ以上やることもないかな……
あの気取った女、何日で泣くか見物ね。それとも明後日には荷物をまとめるかな？

あーあ、明日から本当に楽しみだわ。

◇

「不破さんと話してあげて……か」

シャワーを浴びながら今日のことを思いだす。
男装することが本格に決まってから今までずっと彼女のことを恨んできたけど、あそこまで人に想われ、信用されるような子なら本当に理由があったのかもしれない。
確かに、変だなと思うことはあった。
僕のことを娘だとも思ってないと考えていた社長が私に命令を出す時に申し訳なさそうな顔をしていたし、あの人の本妻からの嫌がらせも減った。
男装のことを除けば、あの時から僕が嫌だと思うことは減っていったような気がする。
最後の方はあの人や本妻に会うのを僕から避けていたようなものだったし……いつの日からか母さんの墓前に供えられる花も増えたけどもしかしたら……
とは言ってもこれは彼女の行為を全部好意的に受け止めて、さらにあったかもわからないようなことを付け加えた場合だ。普通はそんなことはあり得ない。だって、不破さんは学園に来るまで僕のことを知らなかったのだから。

「でも、普通じゃないって……言ってたね」

歪んでいるって、友達にまで言わせてしまうほどの子なんだ。
その原因は……不破さんのことを調べたことがあるから何となくわかる。僕達が九歳に当たる時に起きた火事。死傷者数は学校全体の八割以上だったらしい。そこでたくさんの友達を亡くしたから歪んでしまったと考えることはできないかな？

「……あれ？　なんで彼女を弁護する立場に立って考えてるんだろう。変なの」

……そろそろシャワーから出た方がいいかな。
この時だけは女の子でいられるから好きなんだけど、いつまでもシャワールームにいるわけにはいかないし。
髪を拭いて、コルセットを付け、そうすればもう身体のシルエットは男の子のものだ。まぁ、やっぱり一夏みたいな感じにはならないけど……あそこまで筋肉質になりたくはないし、そう思われるのも嫌だからいいんだけど。
でもシルエットが変わってもやっぱり僕の顔は女の子の顔だと思うんだけどなぁ……受け入れられてるのは良いけど、少し傷つくよね。

「一夏、おまたせ」

シャワールームを出たらお互いに声をかけるようにしている。
理由は僕が上半身裸で出てくる一夏を見る覚悟をするため。服を着てっていっつも言ってるのに……そのたびに、えー暑いしいいじゃん、って笑いながら言うんだから僕も困っちゃうよね。
僕が出た時も見てるだけで暑いって脱げって言ってくるし……男の子同士ってこんな感じなのかな？　それとも一夏ってもしかして。

「まさかね」
「なにがだ？」
「な、なんでもないよ！」

いきなり一夏が声をかけてくるから驚いて声が裏返っちゃった。
でも、その一夏に少し違和感……顔が怖い、と言うより真剣。

「シャルル」
「うん？」
「不破さんが自分のためにシャルルを利用したってのは本当なのか

？　それでシャルルは今、なにかすごく大変なことになってるっていうのは……」

「え……？」

なんで……

なんで一夏がそのことを知ってるの……？

21. La malice invisible.（後書き）

次回からがこの作品の中で最もドロドロしたものになりそうな感じです。
と言うか今回とうとうオリ主の出番が無くなりました（

時間がある方は活動報告の方のアンケートに答えて頂けると幸いです。

それにしても、こう鬱屈とした感じが続くとどうしてもオリ主に暴れさせたくなります
……でも性格的にあんまり無双させられないんですよね（

アリサ「ストレス解消に無人機を大量にぶち壊すだけの簡単なお仕事とかないですかね？」

22. Elle l?ve les yeux du bottomm de

「どん底」
今回ちょっと長めだよ！

追記　ユニーク３００００超してました。ありがとうございます！

22. Elle l've les yeux du bottomm de

「あー……甘く見てたかぁ」
「昨日、デュノアさんと話したそうですけど……これはその影響ですか？」
「うん。まさかココまで速く広められるとは思わなかったから……今日どうにかすればいいかって思ってたのよ。正直この速さはあり得ないわ」

朝、鈴ちゃんと寮の部屋から出た途端に周囲の人からヒソヒソと噂話をされています。
……気持ちの良いものではありませんがこうなってしまっては私にもどうにもできませんね。直接言ってこないのがせめてもの救いでしょうか。
人の噂も七十五日。
それくらいなら耐えられますし……そもそもシャルロットの今後の行動によってはあと二週間程度で休学届を出してフランスに戻り、場合によってはイグニッション・プランに殴りこむことになるわけですから。
ただ、噂から逃げたと思われるのは癪ですね……いっそのこと一暴れして退学にでもされましょうか。

「アリサ、アンタが泣かなくて良かったと思うけど……少し、その、抑えられない？」
「何をですか？」
「理由さえあれば返り討ちにしてやるって顔」
「そんなこと考えてませんよ？」

別に私が我慢すれば平和なんですし。

でも、通り過ぎる人のほぼ全てが私とシャルロットに関する噂話を知っているようですね……聞かれたのが昨日のお昼だとしても鈴ちゃんの言うようにあり得ない速さで広まっていますね。

誰か、私を排除したいと考えている人が広められるだけ広めているのでしょう。一人が二十人程に広めればそのあとはすぐに広まってしまいます。

仮に裏掲示板などというところがあれば、そこに書き込まれるだけで夜の内に殆どの女子生徒が知ることになるでしょう。女性というのは良くも悪くも噂に耳ざといですからね。

彼女達の潜めた声での会話を聞けばどんな噂が流れているかもわかります。

「私は男を誑かして会社を乗っ取ろうとしている悪女だそうですよ？　しかもデュノアさんのお父様も寝取っただとか」

失礼しちゃいます。

社長さんは確かに渋くて素敵ではありますが、それだけですよ。私だってシャルロット一筋ですし。

というか、こんな噂が広がっても気にならないんですよね。私にとってシャルロットとセシィと鈴ちゃん、三人娘におまけで織斑君と篠ノ之さんあたりに嫌われていなければいいので。

あぁ、楯無先輩もですね。

「……まったく気にならないっていうのも問題ありよ」

「なんと言いますかね。はっきり言ってしまえば彼女たちの殆どは私の人生に関われない程度だと分かり切っていますし」

「はいはい、煽らないの」

そもそもＩＳコアは今のところ数が限られているんです。だから一国家に十数機、もしくは数機しか配備されていないのに生徒は各

国家から数十人単位でやってくるんです。仮に半分の生徒が整備課に進むとしてまだ多いですよね。

そして、そのどちらにもなれなかった人間は社会の底辺となるだけです。

だって、ＩＳ学園の生徒は一般教養の授業なんて受けてないんですから大学に進むことも難しいですし、ＩＳに関係する仕事に就けなければただの屑です。

実際にはＩＳに関われない卒業生はいくつかの企業に優先的に割り振られるのですが……正直使い物になりません。

デュノア社でも扱いに困っていましたからね。仕方ないので、たいていは私の模擬戦相手（サンドバッグ）になって頂いていました。

いえ、別に彼女たちが社会の害悪になるとか、そういうことを言っている訳じゃないんです。ただ単に、このまま進むだけでそれなりの立場を約束されている私から見て、たかがＩＳ学園程度の狭い世界で私の立場を貶めて優越感に浸ろうとしている誰かの将来の心配をしているだけなんです。

しかも、私に対して有効ではない手段なんですから……怒りとかそういうのを通り越して不憫です。

「アリサ、やっぱ苛々してるでしょ」

「そんなことは……あるかもしれませんね。慣れたからと言って視線自体が私にとって不快だというのは変わりありませんから」

「はぁ……ま、アリサの言うことも分かるけど。なにもかも嫌になって自分の破滅も厭（いと）わないんだったら、私達は今すぐ、この瞬間にも何百人と殺すことができるわけだしね」

おぉ、鈴ちゃんもＩＳの兵器としての側面を認めているのですね。そうですよね。特に専用機持ちはそうでなければいけませんよね。

でも、わざわざ周囲の人に聞こえるようにそれを言う必要はないと思います。皆さん怯えているじゃないですか。

「鈴ちゃんも、怒ってくれてるんですね？」
「なっ！　べ、別に私はアリサがどうとかじゃなくて……ただ、幼稚で馬鹿なことやってるのが気に入らないというか、ってなにニヤニヤしてるのよ！」
「鈴ちゃんかわいーですねぇ」
所謂（いわゆる）、ツンデレという奴ですかね。つい、口元が緩んじゃいます。
「……それで、アリサは今日の放課後どうすんの？」
「んー？　そうですねぇ。ストレス溜まるでしょうし……中央タワーでも行きますよ」
「ん？　避けるだけじゃストレス解消できないでしょ？」
「もちろん五十七機、全部破壊しますよ？」
「待って、あそこ、確か高速移動中での精密射撃を鍛える場所であって、アリサみたいな純接近戦闘型ＩＳが行くような場所じゃないわよ」
「えぇー？　叩いて潰さないとストレス解消になりませんよ？　連続瞬時加速（バー・イグニッション・ブースト）を使って次から次へと連（リボル）」
「それもアメリカの虎の子の技術じゃなかった！？」
あれとはまた違うんですけどねぇ。
アメリカのタイプはどうもイメージ・インターフェイスを使ってるみたいですけど、私の場合は分割思考をつかって左右のスラスターを個別で動かしているので。
私の方が少しアナログな手法です。
そういうわけでそれとＰＩＣとを活用すれば中央タワーも殴り攻略できるんですよ。
「そんなのアリサだけよ……というか、それなのになんで候補生辞

退しちゃったのよ」

ちなみに、自動射撃は可能な限り射線を避けて移動して、当たりそうなものは妖精の加護（フェアリーダンス）のレーザーで溶かしています。

まぁ、中央タワーの管理責任者の方の話では接近戦闘型で無傷攻略したのは私だけだそうです。

セシィとかシャルロットとかも無傷攻略できると思うので自慢にもなりませんけどね。無傷なら射撃でやっても結果は変わりません。むしろリスク管理という意味では私の結果が最悪ですよね。

皆さんあまり知りませんけど、ガーデン・カーテンや五十九口径重機関銃（デザートフォックス）はラファール・リヴァイヴ・カスタム？との共有装備なので、カゲロウでも使えるんですよね。

狙撃以外の実弾射撃はＩＳ同士での戦闘においてはあまり意味がないと思っているので使ってないだけです。

先程も言ったようにＩＳは数が限られているので、戦場でＩＳ同士が戦うことなんてありませんから基本的に現代兵器を一方的になぶるだけですし。

「前も言ったように、二人いても意味ないからですよ。私ができることはデュノアさんも違う方法で実現できますし、その逆も然りです」

本当はフランス唯一の代表候補生という、ある種のＶＩＰ待遇にして本妻さんが手を出せなくするためですけどね。

それだけじゃ弱いから男装までしてもらっているのですけど……本妻さんも少しはシャルロットのことを認めてほしいですね。

時間が経つごとに行動が派手になっているというかなんというか……社長さんが宥めたり、秘密裏にＳＰを付けたりしていなければ大怪我していたかもしれないときだってあったんですから。

一見、派手にしすぎと言える私達の行動も実は最低限なのです。

とはいえ、シャルロット一人のために社の運命をかけているのも否定できないのですが。

……まぁ、全部裏目に出てしまいましたがね。まさか、シャルロットが私のことを訝しんで調べていたとは思いませんでしたよ。

実際、シャルロットに接近せずに社長さんたちとこそこそ密談を重ねていた私はさぞかし怪しく見えたことでしょう。

「はぁ、噂はどうでもいいですが……教室入りづらいですね。入った瞬間注目されますよ」

「……まぁ頑張って？」

「投げやりですねー」

そのまま鈴ちゃんは二組の中へ……えー、本当にいっちゃうんですか？

まぁ、気にしていないと言った手前、付いてきてなんて言えないですし……気分はあれですね。一人だけ二時間目の途中で登校する感じです。

気が重いです……でもシャルロットを巻き込んだ以上、誰が噂を広めたのかは調べないといけませんね。

「おはようござ、」

「不破ちゃーん！！　デュノア君のパパ様寝取ったとか嘘だよね！？　不破ちゃんは好きな子一筋なんだよね！？」

おぉう……

「おはようございます二木さん。その話、誰に聞きましたか？」

「えーと、隣のクラスのチェルシーだよ？　チェルシーも人から聞いたらしいけど」

「又聞きですか……まったく、私はおじさん趣味ではないのですが」

社長さんは恰好好い人ですけどね？　趣味ではないってだけで他意はありません。

「不破ぁ、犯人探しすんのぉ？　それなら裏サイトにも書き込まれてたから管理者にきけば？」

「三好さんおはようございます。ここにも裏サイトなんてものがあったんですね……でも、匿名なんじゃないんですか？」

悪口とか書き込むためのところ、というのが私の裏サイトの捉え方なのですが、匿名じゃないなら陰口言えないですよね？

「ん？　あぁ、匿名だよ？　ただ、サイトが完全会員制になってるから管理者からはどのＩＤの持ち主がなにを言ったのか分かるってこと。一人一人違うからね」

「なるほど……でも管理者ってだれです？」

「それが分からないんだよねぇ」

って、ここまできてそれですか……

「え、えっと不破さん！」

次は一松さんですね……目が泳いでいるし、なにやらテンパっているご様子。

……なんて、理由は分かっているんですけどね。

先程から二人一組で私の前に立って、残る一人が背を向けて私の机に向かっています。それぞれの手からは化粧落としのにおい。

……油性ペンの落書きに効き目がある物って少ないですからね。

「いいですよ、隠さなくても。何が書かれているんです？」
「いやぁ、不破は見なくて良いと思うよ？　ねぇ？」
「と、というかなにも書かれてないよ！？　みぃちゃんなに言ってるの！」

一松さんの指摘に三好さんがはっと口を閉じる。私、かまをかけたことになるんでしょうか？

「……何も書かれていないなら机に行ってもいいですよね」
「あ、ちょ、不破ちゃん！？　見ちゃダメだよ！」

机の天板を擦っていた二木さんに退いてもらいました。
既に半分以上が三人によって消されていましたが――今度、化粧落としを買って返さないといけませんね――それでも結構な量の言葉が書かれています。

――淫売
――社会のクズ
――シネ
――消えろ

その他いろいろ。
というか矢印を書いてゴミ箱とか、いつの時代の人ですか。
……セシぃは私に関わると専用機持ち同士の繋がりが意識されてしまって武力による示威行為になってしまいますから我慢してくれていたみたいです……そういうことにも気を付けるよう専用機持ちに対しての校則もありますし。
確か、学内において生徒間に諍いの原因になるようなことがあった場合、専用ＩＳ保持者同士のあからさまな交友は自重すること……でしたっけ。

今までは学年一人いるかいないかという専用機持ちでしたが、今年は織斑君の影響で多いですからね。
私を含めて七人。篠ノ之さんが手に入れることになるので将来的には八人。
ここまで増えてしまうといらない諍いが起きる可能性も大きくなるので、私達の行動が限定されるのも当たり前ですね。

「お前ら朝から騒ぐな。それではＨＲを始める」

もう始業時間ですか。次は確かＩＳ用兵器の基礎理論でしたっけ。
とりあえず準備をしてしまいますか。私の机を見た織斑先生が顔をしかめましたがアイコンタクトで穏便に済ましてもらいました。
教師とクラス代表だけが使える特殊技能です。

「痛っ……！」
指先に鋭い痛み。
机から手を出してみれば人差し指から血が出ています。
……落書きの次はカッターと画鋲のトラップですか。中学生みたいなイジメですね。
まぁ、この程度なら一度経験しているので慣れて、

「って、これは中学生レベルではないですね……無駄に凝ってます」

トラップを取り除こうと机の中を覗いて絶句しました。
どうやら私はかなり運が良かったようで、本来なら手首から指先までが一気にズタズタになっても不思議ではないくらい、多量のカッターと画鋲が巧妙に配置されてました。
設置に何十分かけたのか知りませんが纏めて撤去させてもらいます。
頑張ってこれを作った人のことを考えると、ほんのちょっと気分

がいいですね。
って……あれ、ノートもありません。
寮には持って帰ってないですし、どこかに置き忘れましたんでしょうか？
でも、ノートを持ってどこかに行くことなんてまずないですし……まぁ、盗られたんでしょうけど、他のノートに書いておけばいいですね。

「えーと……ＩＳのコアは従来の材質、方式と比較して数倍から数十倍のエネルギー生成が可能であり、それと同時に理論上での構想しかなかった多数の兵器が――」

ＩＳの基本技術となるＰＩＣですらこれまでのエネルギーでの運用は不可能ですしね。
私の白狼（ウルフズロアー）の咆号もＩＳコアがあったからこそ、あそこまでの小型化ができたわけですし。いえ、未だに工場の煙突みたいな大きさではありますが。

「しかしながらエネルギー効率の問題から本格的な実現がなされていない技術が数多くあり、今後の技術の発展に期待が寄せられている……と」

いやいや、期待が寄せられているなんて、それだけのこと授業で言わないでいいじゃないですか。
えっと、長年研究が続けられているにも拘らず未だに実用化されていないのはプラズマ砲、反物質生成にステルス化ですか。あれ、ステルスって今でも……あぁ、ユーディの光とはまた異なるアプローチによるものですか。目標は一メートルという短い距離でも目視できないレベルって……いや、不可能じゃないですか？
でもこのジョルジュ博士という人、ソフトキルによるハイパーセ

ンサーによる探知も同時に逃れようとしているようですし、こちらはもう達成目前みたいですね……あ、しかもフランス人じゃないですか。社長さんに連絡して貰いましょう。

どの第三世代型ＩＳでも達成されていない完全ステルス。

目視もできずレーダーにも検出されない……実現できたとして、射撃では兵装と機体での温度の違いで熱源探知が効いてしまいますから実装機では装備を使わない近接格闘が基本になりそうですね。

「第三世代型ＩＳのイメージ・インターフェイスは操縦者の想像力を最大限に生かすことにより従来のアナログ方式による入力では操作の難しい兵器の運用が可能になった。このクラスでは……オルコット、ボーデッヴィッヒ、あとは織斑のＩＳがこれにあたる」

「せんせー。第三世代型と第二世代型、どっちが強いんですかぁー？」

「現状、アリーナなどの狭い範囲における一対一の戦闘においては第三世代型の方が有利だとは言われている。ただし戦争などの広範囲における長期戦では燃費の悪い第三世代型より後付装備（イコライザ）による多目的運用が可能な第二世代型の方が有用ではある……とはいえ結局は操縦者次第だな。そこの不破は第二世代ながらオルコットと織斑を下していることだしな」

ちっ、といくつかの舌打ちが聞こえました。

いえ、気にはしませんけどね……僻む前にもっとやるべきことがあるんじゃないですか？

別に私だって才能だけでここまで来たわけではないんですし、初期検査におけるＩＳ適性のＡ判定は数こそ少ないものの適性は上がるものなのでＣ判定以上があれば十分追いつけるんですよ？

それこそ私みたいに四桁時間くらいＩＳを起動していればＩＳだけじゃなくて人間自体もＩＳに適応されていくんですから。

私に僻むばかりで追い付こうと努力しない人には何においても負

ける気はありません。なのでこうした疎外感だってへっちゃらです。
へっちゃらなんですってば！　うぅ……

目聡くて厳しい織斑先生の授業なので舌打ち以上のことはありませんが他の授業だとどうでしょう。授業だけやってそれ以外のことには関心を向けない先生もいますからね……紙くずとか投げつけられちゃったりするかもです。

「これで今日のところはお終いだな……各自、復習をしておくように」

最近は座学のほうも内容が面白くなってきたのでいいですね。
次の授業は基礎整備学ですね。将来、操縦科と整備科に分かれるので一年生の間は両方やらないといけないんですよ。
ああ、そういえばノートを探さないと。

「シャルルくーん。私、今日の朝こんなノート拾ったんだけどさー」

突如聞こえた耳障りな声にボールペンのキャップをはめようとしていた手が止まります。
あれは……原田さん、でしたっけ。
声質や音量も普通なのに苛立ちを感じるのは声に混ざった悪意があるからでしょう。
まだ、私の名前は言われていないのに私に関係するということがすぐに分かります。

「これ、どうも不破さんのなんだけどさー。ちょっと中見てみたら、すっごくヤバいんだよ」

中身……？

あれは授業用なのでそんな大それたこと、

「なんかさー、不破さんの好きな人のことがちょこっと書かれてたんだけどね。その名前がどう考えても」

――女の子の名前なんだよね。

ああ……ダメです。

それは言ってはいけないんです。

ずっと、隠さないとシャルロットの負担になるから……今みたいな状況では受け入れてもらえるわけもありませんし……

だから、

「ほんと、同性愛とか怖いよね。ＩＳ学園に来たのも女の子がたくさんいるからだったりして」

だから、シャルロットもこれ以上聞かないでください。

聞かないで……

お願いですから会話をやめてください。

「あ、名前？　それはねー。えっと……あった！」

あなたもそれ以上口にしないで。

その名前を呼ばないで。

言わないで……

言わないで……

「シャル、」

「いうなぁぁ！」

ザクッ

「痛っ！？　なに……あ、あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

彼女が持っていた私のノートが床に落ちました。
なぜって、彼女の手に私の投げたボールペンが突き刺さって半ば貫通したからですよ。
いい気味……私にとって大切な名前を薄汚い口で言おうとするからそうなるんです。
でも、人のものを床に落としちゃダメですよ？
クスクス

「アリサさん！？　しっかりしてくださいませ！」
「セシぃ？　私はしっかりしてるよ？　だから、私に敵意を向けてくる人を黙らしただけです。ああ、今は売女（ばいた）みたいに卑猥で汚らわしい、聞くに耐えない鳴き声をあげていますけどね。耳障りなら……黙らせましょうか？」

未だに泣き叫ぶソレに歩み寄って首を掴む。
人体には明るくありませんが、首を折れば黙りますよね？

「アリサさんっ！」

パァン！

痛いですよ……なんで、叩くんですか。

「アリサさん！　あなたはまた昔に戻るんですの！？　見たくない物から目を背けて、自分の殻に引きこもるんですの！？」

五月蠅いですね……なんでしたら、またあの時みたいに昏睡らせて……

……あの時？　昏睡？

「ぁ……私、は？」

一体、何をしようと……？

あの女子だけでなくセシぃまで？

そんなことよりも、私はあの子を自分のために傷つけた……？

自分のためのわがままで、大きすぎる力を使って？

「ち、違うんです。私、私、そんなつもりじゃ……！」

「アリサさん、落ち着いてくださいませ！　今しなければならないのは後悔でも懺悔でもありません！　そこの方、原田さんを保健室へ！　それと織斑先生を呼んできてください！」

「あ、うん！」

違う。

だって、あの子が言っちゃいけないことを言おうとするから。

私を害そうとしたのは向こうが先です……でも、私はやりすぎましたね。

あの瞬間、世界がひっくり返ったような気がして……善悪とか自戒とか全部意味がなくなったような気分でした。

そして、ただ自分を守るために……人を傷つけてしまったんです。

どうして、いつものように我慢できなかったんでしょう。

どうして……？

「許さない……！」

去り際に女生徒が手を押さえながら私を睨む。

未だにボールペンは刺さったままでした。
私が使ったのは圓明流の裏の業、雹（ひょう）でしょう。石や鉛玉を高速で投げつける、銃に対抗するために編み出された業。
先が尖ったものならば確かに突き刺さるでしょう。
……私が狙ったのが手でよかったです。首や顔だったら手遅れでした。

「不破、なにが起きた？」
「織斑、先生」
「……原田の手の様子を見た後、職員室で話を聞く」
「はい……」

22. Elle l?ve les yeux du bottomm de

アリサ「作者は私をどうしたいのでしょうか・・・？」

アンケート、まだまだ求めてます。メッセージでもお気軽にどうぞ

23. La circonstance in?vitable（前書き）

「事情」

お待たせしましたっ。待たれていたかはわかりませんがっ（
痛み止めのすごさというものを知りました（
あとＰＶ３０００００超えてました。ありがとうございます！

23. La circonstance in?vitable

「なるほど、な。分かった。不破、もう授業に戻れ」
「え？　えっと……え？　それだけですか？」
私がやったことは殴ったとか引っかいたとか、そういう次元のことじゃないのに……女の子の手に風穴を開けたんですよ？
それなのに、話を聞いてお終いって変じゃないですか？
「詳しくはこれから会議で決める。だが最悪でも金曜日までの監察室行き程度だろう」
「ちょ、ちょっと待ってください！　さっきも言いましたけど、私、原田さんにボールペンを刺しただけじゃなくて……く、首を折ろうともしたんですよ？」
本当に、どうしてあんなことを考えたのか分からないんですけど、行動に移そうとしていたことは事実なんです。
セシィが止めてくれなければ今頃……
本当ならよくて停学、退学だって当然のはずです。
なのに、なんで……
「不破が根も葉もない噂が原因で虐められている、という報告があったことを主張すれば予想通りの結果になるだろう。本人に原因がないことで精神が不安定になっていたとな」
「私は……お咎め無しなんですか？」
「なし、ではないが一週間の謹慎だけだな」
「……分かりました」
学園は何の理由があってかは分かりませんが私の責任を最低限に

しようとしているようですね。
でも既に正式に代表候補生からも辞退したので、優遇される理由は皆無なはずです。
まぁ……考えても分からないことなのでしょう。

「では自主的に私を罰します。思いつく限り最も痛い方法で」
「なっ！？」

一息で討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）を展開、一瞬の躊躇を無視して左手にあてる。
原田さんと同じだけの痛みを自分に……穴の大きさは違いますがね。

「不破、それもお前には許されていない」
「……どうして、ですか？　先生、手を……手をどけてください！」

あろうことか織斑先生は杭の射出口を素手で押さえました。単純な腕力では私に分があると理解したからでしょう。まったく、この人は恐怖とか感じないんですかね。私でも射出口の感触に手が震えるのに。

……でも、
自分で責任をとることも許されないなら……私は、私の罪をどうやって償えばいいんですか？

「罪は罰せられないといけないんじゃないんですか……？」
「お前には一週間の謹慎という罰以上の罪はない」
「そんなわけ……！」

それじゃあ、いったい何をすればこの学園から退学になるんですか！
たとえ人を殺そうとも一年の停学程度で済んでしまいそうです……

「不破……お前だから、今回の措置だ。今、お前は織斑と篠ノ之、あいつらと同じぐらい学園にとって重要視されている。より正確に言うならば、危険視されている」
「……わけが、分かりません」
私が危険視？　いえ、確かに今回の件で危険人物だと見られるのは納得できます。
ですが、学園側からしてみれば厄介な筈で、私を学園内に留めておく理由になりません。
学園は何を考えているんですか？
「お前が罰を求める気持ちも分かる。だが、今回の結末は最初から決まっていた。これからの職員会議の内容も不破への罰ではなく原田の処理が主になるだろう」
「処理、ですか？」
「……いらないことを言ったな。忘れろ。これで話は終わりだ」
……これ以上は一言も話す気はないということを態度で示すように、織斑先生はデスクワークを始めてしまいました。
もっと知りたいことがあったんですけどね……
「失礼しました」
◇
「悪いな、不破」
今やお前は学園にとって簡単に手放してはいけない存在になっているんだ。
一夏を含める専用機持ちとの模擬戦の勝率は八割を下回らない。

素人の一夏を除外しても六割強をマークしている。

オルコットがほぼ互角の善戦をするがＩＳの扱い自体は不破の方が数段上を行っている。

試合が互角な理由はお互いのことをよく知っているからだな。勝負を決めるのはオルコットの作戦がうまく戦況にはまるかどうかだけ……そういう意味ではオルコットも類希（たぐいまれ）な優秀さだと言えるだろう。

鳳の甲龍（シェンロン）は燃費こそ優れているが、それは超短期決戦――十分未満という短い時間で決着を付けることを是としている不破相手には意味をなさない。なにより第三世代型ＩＳの中では燃費が良いというだけで、実際の戦場を想定した第二世代型と比べると見劣りする。

目視不可能な空間圧作用兵器を上手く利用することでいくつか勝ちを拾っているが、龍砲の運用目的はあくまで牽制。決定打を与えることは難しい。

しかも鳳の技術では不破との接近戦は試合にならない。

長時間のヒットアンドアウェイという戦法を可能とする甲龍の特徴が不破相手では全く生かせないのだ。

不破のオンブル・ループと同じ純近接型の白式に至っては未だに勝負にならない。

私と同じ唯一仕様（ワンオフ・アビリティ）を持っているのだからもう少し頑張れとも言いたいが……ＩＳを千二百時間以上――自己申告だが――操縦している不破を相手にしているのだから仕方ないとも言えるか。

不破自体が生身での格闘を得意としているから格闘でアイツに勝てる操縦者はあまりいないだろう。その代わり試合に華が無いことは確実だな。

「私なら……腕一本、脚一本とトレードで勝てるか？」

捨て身の覚悟で試合に臨めば負けることはないだろうが……それでは試合ではなく死合か。まぁ、不破が私を殺す気で挑んできた場合だからな。

普段の試合では万に一つも負けないさ。

「だが、不破の強みはそれだけではない」

不破の操縦精度もさることながら兵装自体も随分と変わっている。

……それもアイツは未だに試合中では撹乱(めかく)以上の目的で装備を用いていない。

あの無人機を問答無用で穿ち抜いた電磁投射砲(コイルガン)。

砲の大きさや算出した必要エネルギー量から乱射できるようなものではなさそうだと判断できるが……それでもあの威力は規格外だ。

火炎弾と榴弾を打ち出す二砲一対のアレは対群衆制圧用、格闘戦では打撃に先程の杭打ち機を織り交ぜるのだろう。

誘導式のミサイルを放っても第二世代型でも運用が出来るように設計された疑似ＢＴ兵器が撃墜する。不破とＩＳのハイパーセンサーのリンクが強固な為か実弾ならば例え音速で飛来するものであったとしても一定量なら捌けると本人が言っていた。

不破の戦い方こそ近接型だが、装備のことを考えればいかなる距離での戦闘も可能になっていると見ていい。第三世代型よりも遥かに燃費の良い機体だ。

どうやら、第三世代型の開発成功などと世界が一喜一憂している間にフランスは本当の意味での戦争の道具を作り上げていたらしい。

ＩＳは抑止力になるだけの、所謂(いわゆる)力の象徴であればいいという今の考え方とは真逆を行く、実際の戦場で最も有効な働きができる構成。

そして、それを乗りこなしてしまう不破。

それだけでも既に世界にとって十分な脅威であるのに不破の本当

の危険はそこではない。

「オルコット、鳳とは既に親友と言ってもいいほどの仲。今の段階で既に整備士としての才能を現し始めている一松、三好。そして電子系統に強い二木……」

仮にこれらの人員が纏めて亡国機業（ファントム・タスク）に寝返ってしまったら、世界は冗談ではなく破滅の危機に直面することになる。

身内にだけ甘い不破だ。亡国機業（ファントム・タスク）の出す条件によっては牙をむく可能性がある上、それらの重要な人物からの信用が厚い。

生徒会長である更識楯無でさえ、不破に対して他の生徒よりも深く関わろうとしている節があると見られている。

逆に言えば不破さえキープできれば危険なことはない。

……というのが学園内での考えだ。

「あいつの担任をやれば分かることだが……不破は自分の身内を第一に考えても、それを守るために他を傷つけるほど利己的じゃない」

むしろ、自分を身代わりに身内を救おうとする奴だ。亡国企業（ファントム・タスク）なんかに身を堕とすわけがない。

「だが、不破が学園に必要だという点で私も今回の決着には納得している」

五月のクラス対抗戦の際、乱入してきた無人機に対して見せたあの攻撃力。

一夏の入学の影響で亡国企業（ファントム・タスク）だけでなく、各国からのスパイの襲来も予想されている。

その時、あれだけの操縦者がいるかどうかで被害は随分変わる。

現状の学園で不破より上位の者はそれこそ更識くらいのものだろう。三年の中にも優秀なやつは多いが……操縦者を傷つけないように戦うという考え方が出来上がってしまっている。結果、実力を発揮することが出来ない。

その点、不破は暴走さえさせてしまえばそういったリミッターが無くなることは今回の件でも分かっている。無人機の件もあの時点ではまだ操縦者がいるという可能性も残っていたのに躊躇していなかった。

巧く御することが出来れば更識以上の戦力にもなり得る……学園側にとって気を付けなければいけないのは不破と交友関係にあるものの保護だけ。ローリスクハイリターンというボロい賭け。

なんにせよ、一般生徒一人を犠牲にするだけで不破を繋ぎ止められるなら安いものだ。

「なんてな……もしＩＳ学園が普通の教育機関であったら顰蹙（ひんしゅく）モノだ」

例えるなら……そうだな、問題の度合いからしてみれば教師の校内暴力を黙認するようなものか。

◇

「これで、今日の授業は終わりだ。遊び過ぎて勉学を怠らないように」

最後の授業の終わりを告げる教師の締めの言葉。

普段なら、今からＨＲが始まるまでの間生徒同士の雑談で騒がしくなるのですが今日は静かなまま。それどころか授業中よりも緊張感が増したようにも思えます。

教師という監督者がいなくなったことで私が暴れ出したらどうし

ようという不安が高まったのかもしれません。
私に暴れるつもりがあるかどうかは別として、そう思われてしまっては仕方がありません。私が弁明したところで意味はありませんしね。
でも皆さん安心していいんですよ？　少なくとも私は明日から金曜日までの間、学校にきませんから。

「……っ！？」

シャルロットがどういう反応をしているのかが気になって様子を窺ってみると偶然目と目が合ってしまい、慌てて私から目を逸らしました。
……冷静になってみれば逸らす必要性も無かったですね。
でもシャルロットが私を見ていた理由はなんでしょうか？
怖いから？　それだったらそもそも見ないでしょう。
やはりパッと思いつくのは昼間の事件とは全く関係ないことでの疑いの眼差しってやつですね。
最初に拒絶されてからは私から近付いていないので改めて見られるようなこともないと思うのですが……あぁ、でもまだシャルロットが来てから一日しか経っていないんですよね。色々なことが一気に起こってもう一週間くらい過ごしたような気分になっていました。
やっぱり、私は恨まれているんでしょうね……最初から素直にシャルロットと知り合っておけばよかったと、昨日からもう何十回と心の中で繰り返していますが、そんなんで時間が巻戻るほど世の中甘くないんですよね。転生なんてことはあるくせに。

「お前ら、ＨＲ始めるぞ。静かに……しているじゃないか」

声と共に教室に入ってきた織斑先生が拍子抜けといった表情をしました。

確認する前から静かにしろって言わなければいけない程このクラスは騒がしくなかったと思うんですけど。

「まぁ、昼間の事件だが原田の手に後遺症は残らないようだ。これから医者に行くから絶対とは言えないが腱は傷ついていなかったから、まぁ平気だろう」

良かった……

私の行動が原因で誰かの将来を左右するなんてことヤですからね。

それも、前後不覚になった上での行動なので、正直心の底から申し訳ないと思うよりも先にどうしてああなってしまったのかという疑問の方が先に来てしまって反省もできませんでしたし。

本当に一安心です。

「それで、残念ながら原田は自主退学の形で学園を去ることになった。親御さんがこんな危ないところに娘を預けてはおけないと言ってな」

「な……」

「どうした、不破？」

「……いえ」

これが、職員室で言っていた処理ですか。

生徒には今のような事情を説明して、他の場所――例えば定期的に開かれている各国との会合――では原田さんが今回の事件の原因なので責任をとらせた、とでも説明するのでしょう。

結果、私に社会的なペナルティは発生せず、私だけが学園に残ることが出来るようになるということですか。

もちろん、学園に残れるのは嬉しいのですが……やはり納得がいきません。

一応、量の一回にも設けられている監察室という名の独房で金曜

日まで謹慎ということになっていますが、部屋の造り自体は他の寮の部屋と同じなので一人で過ごす分スペース的には普段より快適ともいえますし、ベッドもシャワーも付いているのでなにも困りませんし。ただ部屋から一歩も出れないというだけなので連休に家から出ないでゴロゴロしているのと状況的には何ら変わりはありません。

あぁ、私が監察室の内部を知っているのは使用したことがあるからではなくクラス代表としての仕事の一つに監察室の掃除当番というのが各クラス代表と交代であるからです。

誰も使わないんだから意味ないじゃん、なんて鈴ちゃんと話していましたがまさか自分が使うことになるとは思いませんでしたね。

「これで、今日の学校は終わりだ。各自忘れものに気を付けて寮に戻るように」

忘れ物しても採りに来ればいいだけなんですけどね。

まぁ、学園自体が大きいので取りに戻ろうと思うと結局十分二十分とかかってしまうのですが。

とりあえずは……原田さんに謝りに行かないと。学園側が一連の出来事の責任は彼女にあると決定しても……仮にそれが事実だとしても怪我をさせたことは謝らなければなりませんし。

この状況で私に謝られても原田さんにとっては苛立つ原因の一つになるだけでしょうが。

コンコン

「失礼します」

保健室の扉をノックして中に入る。相変わらず保険医さんがいないんですけど……何してるんですかね。

窓から外を見ていた原田さんが私に気付き一瞥しましたが再び窓の外を眺め始めました。

既にこの学園から退学することになるのは知っているんでしょう。原田さんの行動は学園を去る前に景色を覚えておこうとしているようにも思えます。

「何しにきたの？　笑いにきた？」

「いえ、そういうわけでは……ただ、あなたに謝らないと、と」

「何について？　私に怪我させたこと？　あなたのために私が退学になること？　……謝られたって何も変わらないんだから、意味ないじゃない」

「……」

原田さんの言う通り、私が謝ったところで何かが変わるわけではありません。ただ私が謝りたいから謝るんです。ただの自己満足かもしれません。

できれば、私に対して怒りを向けてほしい……許された気がしますから。

私は自分勝手な人間です。人に嫌われたくないから我慢しようとして、いつもはそれで上手く回っているのですが、たまに今回のように失敗する。その失敗を引きずるのが嫌で望まれてもいないのに謝るんです。反省からくる謝罪ではない分たちが悪いですね。

そういう自分の汚さも人間なんてそんなものと誤魔化して言い訳を繰り返し続けているだけ……

「はぁ、私もバカしたわ。確かに今回は学園の言う通り私にも非があるわ。というか代表候補生に手を出せば私みたいな後ろ盾がない生徒がどうなるかなんて分かりきってたのに」

「そんな……私の行動はどう考えても過剰でした」

「それが許されるのが私と不破の立場の違いよ。大人の事情ってや

つ」
「……」
なんで、原田さんは笑っているんでしょうか。
私は彼女の将来すら奪ったのかもしれないのに。
「例えば、私があなたを許したとして……納得するの？」
どうでしょう……うまく想像できませんが、本当に許されたのかとか謝るだけでよかったのかとか考えていそうです。
私は結局なにかの代償を払わなければ気が済まないんですね。それを相手に強要したいほどに。
「不破、ちょっときて」
窓際に飾られている花瓶を持ち上げた原田さんがこちらを向きました。
……罰が欲しいのとは思っていましたが、これは少し勇気が必要ですね。
「ん？　コレで殴られるとか思ってる？　そんな度胸私にはないわよ」
「……ど、どうぞ、お好きに？」
原田さんの言葉に少し安心してベッドに座っている彼女の傍まで近付きました。
実際、私がしたことを考えれば花瓶で殴られても仕方なような気もしますけど……
「顔上げて」

「はい、んっ！？　……っぷはぁ！」
な
顔を上げた途端、花瓶の水がかけられました。飾られていた花が顔に当たって少し痛かったです。少し臭いますし。
……これで、手打ちということでしょうか？
「っぷ！　変な顔。髪の毛に花絡まってるし」
「え、えぇ？　どこですか？」
「そこ、あー違う！　逆だってば……てか座んなよ。髪も乱れてるし、整えてあげる」

……あれ？　なんですかこの流れ。
さっきまでは、確かに怒っていたと思うんですけど……
「私ね。怒るの苦手なのよ。少し時間が経ったら怒ってたことも忘れるっていうか……ま、そんな感じ」
「で、でも痛いですよね？　手に穴開いているわけですし……というか手は大丈夫でしたか！？」
「保険医の人が麻酔かけてぱぱっと縫っちゃったわ。後遺症もないみたい。痛かったから怒ってたけど痛くないとどうしても怒れない……っていっても麻酔が切れたらまた怒ると思うけど」

原田さんは話しながら私の髪の毛に付いた葉っぱを取って、乱れた髪を手櫛で整えていきます。
気持ちいいんですけど居心地は悪いです。
鼻歌交じりの原田さんは本当に機嫌がよさそうで。

「私、不破が嫌いだった。他人に興味ないって態度だし、自分が嫉妬されるような見た目してるのに、それを誇らないし」
「普通、誇るから嫌われるんじゃないですか？」

「誇りすぎるとね。不破の場合は謙虚すぎて逆にムカつくのよ。天才が自分バカですから、って言うような感じ？　あんたが可愛くなければ私達はどうなるんだって話よ」

そこまで可愛いとは思っていないんですけどね。

背が小さいからそう見えているだけで……まぁ、それを含めて上の下とかそれくらいだとは思っていますが。

「私より可愛い人いますよ？　三好さんとか」

「一人じゃん。っていうか誰が可愛いとかそんなのはどうでもよくて、とにかく不破は気に障るのよ」

いえ、シャルロットとかいますし。

「それは……ごめんなさい？」

なんで私は怪我させたこととは別のことで説教されているのでしょうか？

水をかけられたところまでは確かにお昼のことだったはずなのですが……

怒りが続かないとは言っていましたから別のことで怒っているのかもしれませんけど……あ。

「それに、協調性ないのにクラス代表なんてやってるし、織斑君と仲良いし！」

「原田さんは織斑君派ですか……というか、もしかして無理して怒ってくれてます？」

「……気付かなくていいことを気付く鋭さも嫌い」

「ありがとうございます」

つまり、私が怒ってほしいと思っているから怒っていたわけで…
…優しい人ですね。
さっきの水攻撃もその一環だったのかもしれません。

「不器用ですね」
「自分から怒られにくる物好きに言われたくない。というか偉そう！」
「あぅ」

調子に乗りすぎて脇腹を指で刺されました。

「嫌いだったって言ったけど、今はそれほどでもないわ。というか仲良くなってればよかったと思ってるわ」
「友達……ですか？」
「それ以外にどういう意味があったの？　というより、多分、私はずっと不破と話してみたかったんだよね。昼間のノートも不破が、言っちゃダメですよ～って言ってくるのを待ってたのかも」

……また、私の判断ミスですか。
あの時は原田さんがノートを私の机から取り出してシャルロットに暴露しようとしているんだとばかり……

「まぁ、ノートのこともあって不破に対してあんまり怒れないんだけどさ。傷を縫われて冷静になってみれば自業自得のような気もしたし」
「でも……私、原田さんのこと殺しかけましたよ？」

そう言うと原田さんの顔色が変わりました。まぁ、当然だとは思いますけど。

「いやー、私もあの時は殺されるかと思ったわ」
「軽いですね！？」
「だって死んでないし？」

原田さんって実は凄く肝が太いんじゃないでしょうか……？
しかも、私に気楽に接してくれるとか器も大きいです。怒るのが苦手と言っていましたが実は並大抵のことでは怒らないだけなんでは……
こんな考え方は都合が良すぎですかね？

「原田さんはこれからどうするんですか？」
「んー、せっかく不破と知り合えたのに退学ってのもね……ま、先生に交渉して、停学にしてもらいたいかな」
「えっと……私からも何か言いましょうか？」
「いらない。実は交渉材料もあるのよ。あ、そうだ」

退学を停学に変えさせる交渉材料ってなんでしょう……ＩＳ学園の弱みでも握っているんですかね？
でも、そんなこと言ったら逆に口封じされてしまいそうな気もします。
照れ隠しのように頭をかいている原田さんを見ながらそんなことを思います。

「うん、晴れて退学免除になったら、私のことリカって呼んでよ」
「わ、分かりました」

なんで原田さんはこんなにフレンドリーなんでしょう。人の心って分かりません。

◇

「今日から金曜日まで一人部屋暮らしですか……」

入学当時に戻っただけではありますが、鈴ちゃんとの生活に慣れてしまっているので寂しさを感じますね。

基本的に外出禁止で、食事も部屋に運ばれてくるようですから本当に独りきりになるみたいです。

「まぁ、携帯電話の使用が認められているので人恋しくなったら電話をすれば良いだけなんですけどね」

ピリリリリリ！　ピリリリリリ！

一息つく間もなく電話がかかってきました。

鈴ちゃんでしょうかね？　全く心配性なのですから。

あ、でももしかしたら原田さんかもしれませんね。交渉の結果を教えてくれるのかもしれません。学園に残れるといいんですけどね。

「はい、もしもし？」

「こんばんはー。神様命融のタサキでございますー！」

ピッ

ただの悪戯電話でした。

ピリリリリリ！

……とはいきませんよねぇ。

「はい。タサキさんお久しぶりです。なんのようですか？」
「ええ！　ご用があるんです。朝峰様……いえ、不破様の戦闘力が一定レベルを越したので出張戦闘が決まりました。今回は七十二日間分の出張となりますー」

ああ……そういえば、そんな契約内容でしたね。
たしか出張先での一日がこっちでの一時間らしいので、今回は七十二時間……ちょうど三日間ですか。金曜日の今頃には戻ってこれる計算ですね。
ただ、謹慎中なのでいきなり私が消えても不自然ですし……書き置きでもしておけばいいですかね？
どうやら、私は普通の校則違反では退学にはならないわけですし。

「えっと……織斑先生へ――」

こんな感じでいいですか。

23. La circonstance in?vitable（後書き）

ＩＳ学園はまともな教育機関ではないですよね
途中まで左手フリック入力なので誤字が多いと思います（
見つけたら連絡下さい（

出張先は「ＡＣＥ　ＣＯＭＢＡＴ　Ｘ」のオーレリア戦争へ
外伝でそのうち書くつもりですがＰＳＰが見つからないのでまた今度（
Ｘの無線機会話フラグを全部回収しているプレイ動画とかありませんかね？

24. Le jour sans h?ro?ne.（前書き）

「主人公のいない一日」

予約投稿ミスってました（汗
また、オリ主の出番がないですｗ

24. Le jour sans h?ro?ne.

ピリリリリリリ！　ピリリリリリリ！

「また出ない……監察室行きって言っても携帯は使えるって言ってたのに。アリサ、なにしてんのかしら」

授業の前に声だけでも聞いてこうと思ったのに……あ、まだ寝てるかもしれないわね。あの子、朝は起こされないとずっと寝続けるような子だし。寝てるなら起こしちゃうのも可哀想だし電話はやめとこうかな。

放課後にもう一回電話でもすればいいかしらね。

「まったく、アリサがいないせいで髪の毛纏めるのも時間かかるし、毎日ご飯作らないといけないし……化粧も自分でとか、というかあの子は私のなんなのよ！？」

最近あの子に甘えすぎかもね……というか頼んでもいないのにいつの間にかアリサに世話焼かれてるんだけど。

あれね。

朝、私が頑張ってアリサを起こして、あの子が起き上がるのを待ちつつ朝ご飯を用意するんだけど……ご飯食べて、さぁ着替えて出る準備をしようってところになるとアリサが私の下着と制服を用意してメイク道具を準備してるのよね。自分のメイクもしてないのに。

セシリアにはいつまでも一緒にいられないんだからアリサ離れしないと、なんて言ったけど……私とアリサ、お互いに離ればなれになったら苦労しそうね。

正直、寮から学園に移動しながらメイクをするのは女の子としてどうかと思うけど、そのことを注意しても男の人に見られるほど油

断していません、なんて言うし実際気付いている人自体が少ないみたいだから呆れるしかないというか。

「なんというか、あの子いろいろとすごいのよね」

来週までめんどくさいわね。

「おはよ」

「鳳（ファン）さんおはよー！　昨日の課題なんだけどーー」

あー。

そういえばあの子いないと課題を手伝ってくれることもできないのね。

ＩＳの基礎知識から公になっている各国の開発記録、主な兵装の特徴と弱点までありとあらゆる知識をアリサは網羅しているし、ハイパーセンサー関連の知識に至っては教師よりも詳しい内容話せるのよね……しかもＩＳ学園では殆ど触れない教養系の科目にも素養があるみたいだし。

でも、アリサっていつ勉強してるのかしら？　ルームメイトの私ですら勉強している姿を見たこと無いのに。瞬間記憶能力でも持ってるっていうの？

「課題」

「ん？」

「私もまだやってないかったわ」

「えー！？　二時間目に提出だよ！？　リンダ助けてー！」

いや、アンタも人に頼ろうとしないで自分でやりなさいよ。

◇

「はぁ……アリサさんがいないとゆっくりできますわね」

こう言ってしまってはなんですがアリサさんは目を離すと何をしでかすか分からないので……わたくしも可能な限り気を配ってはいますが完璧には程遠いですわ。

いえ……アリサさんからは距離を置くんでしたわね。

別に見捨てるわけでも私達の中が変化するわけでもなく、ただ距離を置くのです。

わたくしはアリサさんが犯す過ちを恐れていましたが……鈴さんの言葉で目が覚めたのですわ。距離を置くこともまたアリサさんへの信頼の証となるはずです。

「とは言いましても……昨日のあれは驚きでしたわ」

まさかＩＳを使うこともなくボールペンを凶器として投擲するだなんて。あの細腕にそんな力があるわけがないのですが……いったいどのような技術なのでしょうか。

あれだけのことをしておいてアリサさんへの処罰が僅か三日間の謹慎ということは学園にも事情があったのでしょうね。学園は国家・団体からの命令に振り回されることはありませんがお願いに応えることはありますわ。

きっとフランスにおいてのアリサさんはそれなりの立場にいたのでしょう。

ＩＳ最大手の一つである会社の御曹司であるデュノアさんもそうですが、今年のフランスは第三世代型が開発できていない技術後進国だとしても油断はできませんわね。

……アリサさんに気を配るあまり、わたくしの仕事を忘れていましたわ。

「わたくしの役目はブルー・ティアーズを用いてのＢＴ兵器の試験。そして他国のＩＳの情報の収集……そして、打倒アリサさんでしたわね！」

現在の戦績はわたくしの方が一敗多いのですが……というか勝率が五割を超すことも殆どないのですけれど。アリサさんの機体は若干の変形（シフト）を伴う自立進化以外はＩＳとして平凡なものなのですが……アリサさんと戦うと、勝負を決めるのは機体の差ではなく、むしろ乗り手の差だということを強く実感しますわ。

一年生の中ではアリサさんの戦績が突き抜けているのです。

わたくしはそのアリサさんと大体互角に戦えていますが他の生徒の方との模擬戦はそれなりの成績なので、未だに第三世代型以外には一敗もしていないアリサさんのオンブル・ループと比べるとどうしても見劣りしてしまいますわ。

結果だけを見ればわたくしと鈴さんが同じ位の実力ということになるようです。鈴さんを相手するのも骨は折れるのですが。

「まぁ、研究を繰り返せば学年最強となる日もそう遠くは、」

スパァンッ！

「痛いですわ！？　いったい……お、織斑先生？」

「学年最強となる前にＩＳの基礎理論をしっかりとな、オルコット」

「はい……」

いつのまに授業が始まったのでしょうか？

◇

あちゃー、不破ちゃん休みかぁ。　課題見せてもらおうと思って

たのに……これなら見栄張らないでイッチーに見せてもらえば良かったかなぁ？

最近イッチーが私の魅力を忘れてるみたいだから距離を置いて私の重要さに気付かせようと思ってるんだ。

「とりあえず……三好大先生様！　この卑しい二木めに、課題の問八AとGとQの答え教えて下さいませぇ！」

「卑しいというか、やらしいというか……昨日だって、」

イッチー、あれは純粋な愛情表現だよ！　純粋同性交友。どこにも非の打ちどころはないから口に出しちゃダメ！

というか一個の問の中になんで二十六題も小問があるのかな！？

この問題を作った人はセンスなさすぎ！

……織斑先生じゃぁ、ないよね？

「二木ぃ、この問題って電子戦系統だからあんたの独壇場じゃん。私に聞いててていいのぉ？」

「え！？　ちょまじ！？　……あ、ホントだ。自分でやろうかな」

「問題くらい見なよね。いつも不破に見せてもらってるからそうなんのよ」

いやー、だって不破ちゃんは聞けば何でも教えてくれるから……別に不破ちゃんを都合のいい友達だとか思ってるわけでもなくて、解説も丁寧だから聞くだけで勉強になるんだよね。

下手な先生より教え方が上手いと思う。

不破ちゃんとあんまり仲良くない子でも最近……といっても噂が流れる前の先週までだけど、質問する子もいたし。

それなのに――不破ちゃんもやっとクラスにとけ込んできたみたい、なんてイッチーとも話してたのに――昨日のアレだからなぁ。

ボールペンを投げたときの不破ちゃんは、なんというか怖かった。

不破ちゃんのすごいプレッシャーというか、雰囲気だけで私なんかは座り込んじゃったし。

でも、不破ちゃんは何であんなことができるんだろう。あれだけのことをしておいて三日間の謹慎だけっていうのも変だし……不破さんって何者？

今までちっちゃくて可愛い、頼りになる優しい女の子と思ってたんだけど……背中の傷の理由とか含めて、私達は不破ちゃんのことを全然知らないんだよね。

セシリアちゃんとか鳳ちゃんはいろいろ知ってるみたいだから聞いてもいいけど、やっぱりこういうのは本人から直接聞きたいよね。

でも……

「不謹慎だけど……強い女の子もステキ」

「ふたちゃん？」

「イ、イイ、イッチー！？　な、何も言ってないよ？」

「？」

浮気なんかしてないからね！？

スパァン！

「二木、私の授業中に大声で叫ぶとはよほど痛い目にあいたいと見える」

「……すみません」

ていうか痛くした後にそれ言うのはずるいと思う。

◇

「不破アリサ、と言ったか」

理由は判らないが昨日の投擲術には目を見張るモノがあった……本国にもあれだけの使い手がいるかどうか自信がない。

中国の第三世代を相手取っての模擬戦を見たが格闘を得意としているようだ。生身での格闘なら私でも厳しいかもしれない。

まぁ、格闘主体の戦い方では私のシュヴアルツィア・レーゲン相手には無力だがな。

それでもあれだけの実力。おそらく学園での教官のお気に入りはあいつだろう。

「ふん、平和ボケした温い国だと思っていたが……牙のある奴もいるじゃないか」

ドイツでは静かな水ほど深みにはまる、ということわざがあるが……事実、あの躊躇いのない殺気と攻撃に移るまでの速さは称賛に値する。

軍隊において、最も難しいのは兵士に殺人の覚悟を持たせること……いや、覚悟が無くても殺せればいいのだが、そんな奴はそうそういない。それなのに、ＩＳのパイロットである以外には極普通の――表向きには、だが――あの女は見る者に選択の暇（いとま）すら感じさせなかった。

あの女……私の隊に迎えるに値する貴重な人材だ。

「もはや、織斑一夏などことのついでだ。不破アリサ、お前は我々、シュヴアルツェ・ハーゼが手に入れる」

いずれ生産されるようになるレーゲン型にあの女が乗れば敵はいない……私と並んで戦うようになるのも時間の問題だろう。

ふむ……それにしても私はあまり人に興味を向ける性質（たち）ではなかったのだが……いや、考えても仕方ないことだな。

不破アリサを第一目標に、暇があれば織斑一夏に制裁を加えよう。

「ふん、目標を定めた私は速いぞ……？」

スパァンッ！

「うぐっ！？」

「ボーデヴィッヒ。それなら、この問題を解いてみろ。十秒でな」

「きょ、教官！？」

スパァンッ！

「先生、だ」

痛い、涙がでちゃう……だって女の子だもん。

……教師によるパワハラにはこう言えとクラリッサが言っていた。

な、涙目ではないんだぞ！　本当だぞ！

「ボーデヴィッヒ、何をしている？　早く解かんか」

「……分かりません」

「ふん。何がほしいのか知らんが授業には集中しろ。それがここでのルールだ」

「了解、きょう……し？」

「よし」

スパァンッ！

ふふん。この程度では諦めないぞ。

あ、やめて、出席簿で素振りしないで！

不破アリサを手に入れるために……まずは授業には集中しなけれ

ばな。

◇

不破さんは監察室か。

昨日あんなことがあったから当たり前なんだけど、また話す機会を失っちゃったな……

あの後、拾ったままにして持っていたノートはまだ私の手元にあるから、それを返すついでに話しかけようと思ってたんだけどな。

「……何が書いてあるのかな？」

内容は少しは知ってる。

一つは普通に授業の内容……聞いた話だと不破さんのノートは黒板に書かれた内容だけでなく先生の雑談の中に混ぜられた重要ポイントなどもメモしてあるとか。しかも試験に出そうな範囲も纏められて、それに対する不破さん自身の解釈まで書いてあるらしいけど……べ、別にこれで勉強したいなんて思ってないよ！

でも、不破さんのノートを使って一夜漬けをすると不思議な光を発するとか何とか……ちょっとくらいなら……やっぱり人のノートの中を見るのは良くないね、我慢しろ、シャルロット！

授業内容以外にも不破さんは思ったことをすぐ書いちゃう癖があるみたいで所々絵が書いてあったり、難解な図面が書いてあったり良く分からない数式が書いてあったりするらしい。それが僕の知る二つ目のノートの内容。

そして、どのノートにも書いてあるのが英語じゃない異国語で書かれた文章なんだって。

多分フランス語だと思うけど……それが不破さんの好きな人のことなのかな。なんでも恋の相手は女の子らしいけど。

まぁ、フランスではある程度認められているし変な目で見るつも

りはないけどね……男としての作法を叩きこまれたせいで僕自身そういう偏見が薄くなった気がする。なにより、男装を強制される前に一度だけそういう感情に近いものを感じたこともあるしね……相手の顔も覚えてないけど優しい人だったなぁ。

「不破さんってどんな人なんだろう……？」

周りから聞く話では僕との噂のことで酷い言われようだけど……逆に言えばそれ以外に悪いところがないってことなんだよね。

デュノア社でも……不破さんが手をまわして僕の味方をしてくれる人がいないんだと思ってたけど、本当にいい人だったからかもしれない。だから、僕の男装も何か理由があったのかもしれない。

……でも、昨日のあれは？

明らかに人を殺せる技術だったと思う。

ボールペンでも手の平に突き刺さるんだからナイフとか、尖った物だったら簡単に……

なんで、そんなことが出来るんだろう？　ＩＳを展開していたようには見えなかったから生身での業だったはずだけど。

「監察室にいるのは金曜日までのはずだから、土曜日の朝にでも会いに行こうかな」

それで、今までのことに決着を付けよう。

不破さんが、やっぱり保身のために僕を身代わりにしたのか、それとも何かの理由があったのか……

「って、織斑先生どうしました？」

「む」

見上げれば織斑先生が出世規模を振り上げた状態で固まってた。

三人も叩かれてるんだから気付いてもおかしくないと思うんだけどな。

「デュノア、授業に集中しろ……今回は叩かないでやる」
「えと、ありがとうございます？」
「……不破がいらんもん残して消えたからな」

先生の声は小さくて良く聞き取れなかった。
何を言ったんだろう。

◇

やっと、今日の授業も終わったか……教師にとって大変なのはむしろ放課後からだが、今日のように生徒の落ち着きがないと授業も大変になる。
不破がいなかったから生徒はそわそわしていたのだろうか？　うちのバカ弟に至っては堂々と不破の机を見ていたからな。まさか不破に惚れたのか？
まぁ、一夏が誰に惚れようと私は関係ないがな。だが今はまだ一夏は私のモノだから筋は通してもらわないと困るか。
まさか監察室から抜け出すとは……中からは出られない造りになっているはずなのにいったいどうやって……？
だいたい、罰としての謹慎を無視するのは大問題だ。学園が不破を繋ぎ止めようとしているのを知ったからこその今回の行動だろう。謹慎以上の罰がないと分かっているなら大胆な行動もとれる。

「しかし、不破がいないと大変だな」

普段から不破は自主的に黒板を消したり、配布物を持ってきたり、果てはネジの緩んだ椅子を修理したりと八面六臂の活躍だ。アイツ

がいないだけで作業能率が六割程度まで減る。
今日の様子を見る限りでは、普段クラスが静かなのも不破の存在があるからなのかもしれない。
少なくとも課題の出来が良いのは不破がいたからだ。今までと課題の難易度は変わっていないのに成績は落ちている。
今回成績が落ちた生徒はマークしておこう。
だが、判らないのは不破とデュノアの関係か。デュノアから不破に対しては憎しみが感じられたが、逆に不破はデュノアを護ろうとしている。
今朝、監察室で見つけた不破から私宛の手紙の内容からも、それは分かる。

――織斑先生へ。
どうやら私への罰則は厳しくないようなので出かけてきます。機密事項なので行き先は秘密ですが、学園に不利益なことではありません。
監察室から抜け出す方法も言いませんが、私以外に実行できる人はおそらくいないので部屋の構造問題などを探す必要はありませんよ。もちろん、ＩＳなんて使っていないです。
金曜日の夜に戻ってくる予定なので土曜日の朝まで監察室は閉め切っていて下さると助かります。
ちなみに今回の件は私も不本意なことですから、あんまり怒らないで下さいね？
不破アリサ

Ｐ．Ｓ　シャルル・デュノアに危害が及ばないよう見ていて下さい。もし私が帰った際になにかあれば誤魔化しようのない方法で退学させてもらいます。出席簿で叩いちゃだめですよ？
あと、最近ストーカーされてます――

何一つ詳細が書かれていないからこそ、逆に迂闊に動けない。
これが普通の生徒だったら破り捨てるところなのだが、不破の場合は本当に退学できる手段を思いついている可能性もある。
退学するぞ、などと脅される教育機関なんてここぐらいだろう。

「しかし、ストーカーとはなんのことだ？　……不破が何でこれを書いたのかが分からないな」

学園の監視だと勘違いして――私以外の誰かの独断による計画の可能性もあるが――止めさせようとしたのか、それとも本当に困っていたのか。
どちらにせよ私には関係ないことだが……

「不破にも担任としてなにかをしてやらないとな」

む、そろそろ原田が来る時間か。退学について交渉したい、と言っていたが……普段なら追い返すのだが、声が本気だったから一応聞くことにしていた。

◇

「失礼します」

職員室に入った私に何人かの先生が驚いたような顔をする。多分、ことの真相を知っている人達なんだろう。
そんな視線を無視して織斑先生の机までまっすぐ歩く。

「原田か。どうした？」
「親が勝手に出した退学届けを無効にしてほしいんです」

確か、表向きの理由はそれだったはず。先生にも私の言いたいことは伝わっているだろう。

「それはまたどうして？」

「私の両親は本当のことを知らないで騒いでいるだけだからです。私を退学させてもなにも解決しません」

ここで言う両親は学園のこと。学園が知りたがっていて知ることができていない情報を私は知っている。

あの事件の本当の根っこの部分。つまり噂の出所に関係すること。

「あまり、人に聞かれたくない話なので……」

「わかった。場所を変えよう。山田先生、この書類は任せた」

「えぇ！？」

「しっかりな」

大胆すぎる職務放棄だ。

山田先生もガツンと言わないからこういうことになるのに……言ったところで扱いは変わらないような気もするけど。

織斑先生に連れられてきたのは校舎の端にある空き教室。アクセスが悪いから使われていないんだとか。

不良がいれば確実にたまり場になりそう。

「それで、黒幕……いやこの場合は発端か。それは誰だ？」

「その前に、この話が役に立つなら私の退学を取り消すことを約束して下さい。あ、これ念書です」

「……用意が良いな」

私は基本的に立場のある大人の言うことを鵜呑みにするほど好い人じゃないし。

まぁ、自治区であるＩＳ学園じゃ念書も意味ないだろうけど。

「これでいいな？　それじゃ話してくれ」

「ええ、噂を流したのは三組のキャサリン・ジェファソンの筈です」

あの噂が広まる前から噂を知っていたし、彼女が私に話した噂の内容は今流れているものと違い不自然な点、つまり尾ひれが付いていなかった。

キャサリン自身、直接聞いたと言っていたし、その日の昼に彼女が不破の弁当箱をひっくり返したのも知っている。

キャサリン本人が自慢げに言ってたしね。

「キャサリン……あぁ、あのプライドの塊か」

「っぷ！」

確かに自尊心の塊だ。思わず笑っちゃった。

キャサリンの何がすごいって本当に自尊心だけの塊で、それ以外に優れたところがないのよね。私にも彼女が自分の何に自信を持って、あのプライドが育ったのか分からない。

「ふん、なるほどな……今、最も不破に害意を持つやつを売ると言うことか」

「はい。そういうことです。それに私、不破のこと嫌いじゃないですし」

「……分かった。他の教師と話し合って決めよう。今週末には結果が出るはずだ。とりあえず念書は預かろう」

「お断りです」

どう考えたって先生の手で処理する気じゃん。今シュレッダー見てたし！

「冗談だ」

ま、キャサリンには悪いけど……もともとあの子はあんまり好きじゃないしね。

正直に言えば、恨みはないけど私の代わりにあの子が学園からいなくなっても気にならない。

24. Le jour sans h?ro?ne.（後書き）

ラウラが既にキャラ崩壊の予兆を感じさえてますけど問題ないですよね！（

ドイツのことわざ「静かな水ほど深みにはまる」はこの場合では能ある鷹は爪を隠すと同義と思って下さい。

一応視点移行は

鈴→セシリア→二木→ラウラ→シャルロット→千冬→原田

という順番です。

14：17

最後の二行追加

25. Fille rencontre fille（前書き）

「Girl meets girl」

ところで、非公開のお気に入りユーザーは相手からも分からないんですね。

なんというか意味ないというかアホ仕様というか……

25. Fille rencontre fille

――予測死傷者数、約四十五万六千人。内、民間人約十万人。
実測死傷者数、十一万二千九百六十三人。内、民間人二万五千四百六十二人。
死傷者軽減率、七割五分五厘。
以上がオーレリア戦争におけるオーレリア、レサス両国を含め得た人的損害である――

「私が、四人の内、三人を救った……そう捉えてもいいんでしょうか？」

エースパイロットのいないオーレリア戦争への介入は既に終わり、監察室の中に戻ってきました。

「ですが……死なくていい敵兵（ひと）を殺したから、その人に殺されるはずだった人が助かっただけですよね」

四人を見殺しにするのも、一人を殺して三人を生かすのも罪です。おそらく、私が“いたはずだった”エースの代わりになったのでしょう。

あの戦争の中で私は超高速で飛び回る機械の鳥の群れの中をただ一人ＩＳという異形で飛び、数百の戦闘機を撃墜しました。

最初の内はできる限り死人を出さないために尾翼を叩き割って戦線から離脱させるという方法をとりましたが、パラシュートを使った空兵たちの何人が助かったかはわかりません。

それに、殺さないようにしながら戦い続けるなんて言うのはやはり不可能で……一カ月が経過したあたりからはまともに戦ったので私一人で少なくとも二百人は殺しています……タサキさんに一時的

に殺人を忌避する心を消してもらった上で。
だから、今でも人を殺した瞬間のことは思い出せますが実感が伴いません。例えるなら、自分のそっくりさんが参加している戦争を映画館で見ている感じでしょうか。現実感がないのです。
タサキさんには記憶を封印することもできると言われましたが……私が忘れてしまったら彼らがなぜ死ななければならなかったのかということを知る人がいなくなってしまいます。

（「私は、殺さなければいけない戦場に耐えかねて感情を封印してもらうのではなく、これ以上友軍を失わないために敵兵を殺すのです」）

私が、タサキさんに言った言葉。
私は諦めて殺し始めるのではない、そういう決意を以て……ある意味ではあの言葉を言った時点で人を殺してしまう覚悟はしたのです。戦場で躊躇しないためにあの場で数百人の命を奪うことを選択した……いえ数百人の命を奪ったと言えましょう。言ってしまえば後悔の先払いです。
だから、あの一連の戦争自体を忘れてしまうことは罪に対する罰を受けないようなものです。そんなことできるわけがないです。
一生、彼らの死を背負いましょう。

「ミハエルさん……私は、この選択に誇りを持っていいのですか？」

空に散った親と子ほども歳の離れた仲間を想う。
誰も来ないこの部屋は冷たく無機質ですが……今は私にとって一番優しい空間です。

ほとんど一睡もしないまま、涙を流さず泣き続けて一つの夜を越しました。私は一つの世界の英雄（ひとごろし）になりました。

◇

「頭、いたい……です」

寝不足……ですね。

寝た記憶はありませんがどうやら眠っていたようです。空が白むまでは起きていた記憶があるのですが。

……えっと、今は八時!?　いや、寝不足なんですから体の方ももっと休みましょうよ。なに体調に反して覚醒してるんですか。

ドンドンドンドン！

痛っ……誰ですか。

頭痛なんですからそんな激しくノックしないでくださいよ。朝から近所迷惑ですよ。

「不破ぁ！　アンタ、こんなところに隠れてるんじゃないわよ！　出てきなさいってば！　聞こえてるんでしょ！　無視してんじゃないわよ！」

だから……声大きいですって。イタタタ……

聞き覚えがあるようなないような、そんな声ですけど誰でしょう。とりあえず静かにしてもらわないと頭が割れちゃいます。

「どちらさまで、」

「アンタ、よくも私をっ！」

扉を開けた先にいたのは……誰？

どこかで見たような、見なかったような……見なかったことにし

た可能性もありますが。

「アンタなんて！」

右手を私に向けて振るう……刹那、目に映ったのは金属的な輝き。

……暗殺！

「ふっ！」

「なっ！　かはっ！？」

右手を掴み投げて床に叩きつけました。

一度、油断して死にかけたので今回は念入りに……関節でも抜いておきましょう。

グリュ……ゴキン！

「うぐぅ……！」

「まぁ、叫ばない程度には訓練されていたようですね……てあれ？ただの指輪じゃないですか」

というか、制服？　……あぁ、戻ってきたんでした。ここは戦場じゃないんです。

つい、またスパイが私を暗殺しに来たんだと思ったんですが……まぁ、寝ぼけていたので仕方ありませんよね？

……ダメです。まともに頭が回っていません。

とりあえず腕をはめてあげましょう。ほいっと。

「っ！」

「あれ？　痛かったですか？　なるべく痛くないようにしたはずなんですけどね」

「アンタ……先週はリカにボールペン突き刺して騒いでたくせに、私相手にはやけに冷静じゃない」
「色々ありましたから……それに、殺さない業なら使うことに躊躇はしません」

こちらの世界では三日間だったとしても向こうでは二カ月強だったわけですからね。それも生死をかけた戦場ともなれば人間だれでも変わりますよ。

あの戦争の前だったら、例え彼女が本当にナイフを持っていたとしても最低限の防御しかしなかったでしょうね……でも今はもう命を奪いに来る相手には容赦しません。勘違いでしたが。

「それであなた、私に……あ、お弁当の人ですか」
「気付いてなかったっていうの？　私はあんたのせいでここを退学にさせられたって言うのに！　だいたい事実を人に話してなにが悪いって言うのよ！　誰にでも事実を知る権利ってのはあるでしょ！？」

……あぁ、何となく事情は分かりました。
原田さんの言っていた交渉のためのネタってこの人だったんですね。

多分、あの迷惑な噂を流したのもこの人だったんでしょう。原田さんは多分、自分よりも私に対して害意を持っている人間がいることを教える代わりに退学を取り消してもらったのでしょう。

昨日の夜メールを確認したところ原田さんは無事お咎めなしになったようです。

「お門違いというかなんというか……それで私になにをしてほしいんですか？　えっと……キャサリンさん？」
「ひっ！？」

はぁ……戦場での習慣が抜けませんね。つい、凄みを利かせてしまいます。

えっと、戦争前の私だったらこういうときは……ズルして楽して頂き、でしたっけ？

「な、なんで、」

「あなたの名前を知っているかですか？　簡単です。だって、私、元は代表候補生だったんですよ？　有事の際のスペアとしては扱われているのでそれなりの発言力もありますし、重要な立場でもあります。そんな私が目障りな人の名前を探させるなんてことできないわけがないじゃないですか。他にもいろいろ調べさせましたけど……大人しく、この学園から出ていってくれませんか？　天涯孤独の人生なんて歩みたくないでしょう？　だいたいただの一般生徒が私に手を出しても大丈夫ってどうして思えたんでしょうね？」

「ＩＳ学園では国の干渉は、」

「国からの干渉は受けないってやつですか？　あんなの建前に決まってるじゃないですか。少し考えれば分かると思いますけど……知ってますか？　頭って使わないと腐っていくんですよ」

「そ、そんな……離しなさいよ！」

あ、暴れないでくださいよ。

というかもう離しますけど。

「ぜ、絶対に許さない……！」

「ごきげんよう」

セシリアの真似をして優雅に挨拶をしたら顔を真っ赤にして走り去りました。

まぁ、怯えていましたし成功ですかね……というか私、こんなキ

ャラではなかった気がします。
　当然、彼女のことなんて名前しか知りません。ファミリーネームだってあやふやです。最初に肩の関節を抜いたことで動揺しているだろうと思って煽ってみればやっぱり罠にかかりましたね。
　私としても噂でシャルロットを巻き込んだ以上、彼女のことは許せませんし。
　一つでもシャルの評価に瑕がつけばせっかく大人しくなっている本妻さんがまたちょっかいを出してきちゃいます……と言っても私がＩＳ学園に来た頃からは厳しい姑さんみたいな感じの怒り方をしているようですが。
　そろそろ仲直りもしてもらえそうですね。

「……あとは私がどうにかしてシャルロットとの仲を取り持つだけですか。どうしましょう……ふぁ～」

　ぁふぅ……とりあえず寝なおしましょうか。本当はもう監察室から出ないといけないんですけど……眠っちゃえー。

「すぅ……」

◇

「アリサ？　まだ戻ってきてないわよ。というかあの子電話にも出ないんだけど大丈夫なのかしら……というかデュノア、アリサに何の用なのよ？」
「月曜日に不破さんと話してみてって……まだ話せてなくて」
「あぁ！　……というかあれからまだ五日しか経ってないのねー。今週は結構長く感じたわ……課題とかもいつもより時間かかったし」
　課題と時間が長く感じるのに関係あるかな？

とりあえず不破さんはまだ監察室にいるのかな……行ってみようかな。

「監察室ってどこにあるの？」
「一〇〇号室、宿直室のとなりね」
「ありがとう。行ってみるよ」
「アリサを泣かしたら許さないわよ？」

なんだか、ホントに不破さんは大事にされてるんだね。鳳さんの雰囲気からもそれが分かる。彼女の何がそうさせるのか、今日、話すことが出来たら注意してみようかな。

宿直室の隣ってことはここからは結構近い……のかな？

うーん、まだ来てから一週間しか経ってないから普段自分が使うところしか分からないんだよね。いつもは一夏に案内してもらってるんだけど今回の件は触れないように頼んじゃったし。

一夏は噂を聞いてすぐに不破さんを問い詰めようとしてたみたいだけどやめてもらった。ちょうど鳳さん達と話した後で不破さんのことが分からなくなっていたから。

でもどうやって……

ドンッ

「おっと……大丈夫？」

ぼーっとして歩いてたから人とぶつかっちゃった。ぶつかった相手が持っていた荷物が辺りに散らばる。バッグにスーツケース……旅行にでも行くのかな。

僕のすぐ近くで座り込んでる子は……顔の造りからアメリカ系だと思う。

なんだか今にも泣き出しそうな顔をしていて心配になる。そんな

に痛かったのかな？
なんて考えている場合じゃないとはっとして彼女が起き上がりやすいように手を差し出すたけど、パシンと払われた。
なんて失礼な人なんだって思ったけど……そういえば僕も不破さんに同じことをしちゃったんだよね。あの時の不破さんの顔はまだ心から彼女を恨んでいた僕でも罪悪感を感じるほど悲しそうだったな。このことも謝らないと。

「アンタ達のせいで！」
「？」

良く分からないけど……見覚えないし人違いか、それか間接的に僕が関わって何かが起きたんじゃないかな。そんなんで僕に文句を言われても困るんだけど……
なんて言えばいいんだろうと考えている間に女の子は走り去っちゃった。うーん、まぁ今度会った時に話を聞けばいいよね？
とりあえず一〇〇号室に行くには……あ、部屋番号をさかのぼればいいんじゃん。なんで気付かなかったんだろう。
えっと、ここが一〇三号室だから……

「ここだよね？」

プレートには間違いなく一〇〇の文字。
ちょっと緊張しながらノックをしたけど反応がない。気付いてないのかもしれない。

「不破さん？　えっと、デュノアです。開けてくれませんか？」

……
あれ、もしかして無視されてるのかな？

僕が酷い態度で彼女に臨んでいたから当たり前ではあるけど……
でもノートだけでも返さないと。

「あれ……開いてる？」

無駄だと知りつつもドアノブを捻ったら当然のように扉が開いてしまった。
なんだか悪いことをしているような気分で……ううん、勝手になんだから実際に悪いことはしてるけど、とりあえず部屋に入ることはできた。
あとは不破さんと話すだけなんだけど……って、あぁ。
だから返事がなかったのか。

「すぅ……ん……すぅ……」
「寝ちゃってたんだ……ノート、置いておくね」

そっと、不破さんを起こさないように気を付けてノートを机の上に置いた。
それにしても眠っている不破さんは火曜日の様子を窺わせない程あどけなくて可愛らしいな。男の子として見られてる僕からしてみれば羨ましい。
前は不破さんが男装すればいいのに、なんて思ってたけどこんなに可愛いんじゃすぐに気付かれちゃうかも。

「んぅ……」
「あ、髪の気が邪魔なの？」

聞こえていないのは分かっているけどどうしても話しかけちゃう。
頬の上に乗っている髪の毛をそっと持ってシーツの上に散らす……
髪の気も綺麗でお人形みたい。

でも……

「寝相悪すぎないかな？」

大きめなパジャマの上着はお腹が丸見えになってしまうくらい肌蹴ていて、下は薄手のホットパンツだけ……なんでか分からないけど毛布も被ってない。

まだ涼しいのに風邪引いちゃうよ……やっぱり一夏を連れてこなくて良かったね。もし僕が寝てる間にこんな恰好を男の人に見られたら恥ずかしくて死んじゃうよ。

うーん、でも服を直したら流石に目を覚ましちゃうだろうし……毛布だけかけよう。

なんか、子供みたいな人だな。つい、世話したくなっちゃう。母性本能をくすぐられるって、こういうことを言うのかな？

「すぅ……シャルロット……」

「え？」

も、もしかして起きてたの？

僕、変なことしてないよね！？　あ、髪の気触って少しうっとりしてたかも……しかも寝顔見てちょっと笑っちゃったし……

「ごめん、なさい……んぅ……すぅ」

寝てる……？

でもごめんなさいって？

カサ

一歩、足を踏み出すと何かを踏んでしまった感触がした。プリン

ト？　何か書いてあるけど……
いけないと思いつつ、十ページくらいの紙の束を読んでいく。
「戦争の史料……？　戦闘機が主だから結構前のものかな」
地名は僕の知らないものだけどどこか小さな国の内戦なのかもしれない。
死傷者数や原因などが分かりやすくまとめられている。
「功労者……え？　不破、アリサ？　この者をオーレリア戦争に多大な貢献を果たしたものとして勲章を授ける……どういうこと？」
読み進めていけば不破さんのおかげで予測よりも数カ月早く、最低限の死傷者数で戦争が終結したみたい。不破さんが何をしたかは書かれてないけど……不破さんは、戦争にも協力してるってことなの？　まだ、僕達と同じ位の年なのに？
……って、印刷日が四月一日？　エイプリルフール？
「なんだぁ……ただの悪戯か」
戦争の顛末とかデータがすごく細かかったから実際の戦争のものかと思っちゃったよ。いくらＩＳの操縦者でもまだ戦争に関わるような年齢じゃないもんね。
多分、不破さんはこれを誰かから渡されたんだろうな。きっとその時がすごく楽しくて……だから一カ月たった今も大切にとっておいてる。
不破さんも思い出を大事にする普通の女の子ってことなのかも。
「ん……んぅ？　……すぅ」
「あ、起こしちゃうかもしれないから行こうかな」

結局また話せなかったけど少し不破さんのことが分かった気がする。

◇

「ん……ん～～～～～！」

あー……寝すぎましたね。窓の外から夕陽が見えます。

「って、私、寝すぎないように毛布を使わないで寝たはずなんですけど……？」

誰か来たんでしょうか？

でもセシぃでも鈴ちゃんでも寮の部屋で寝なさいって言いそうですし、織斑先生なら起きろチビっていうでしょうし……好きで小さく生まれたわけじゃないですよっ！

まぁ、とにかく監察室からもおさらばしましょう。私にとっては二カ月ぶりくらいに皆に会えるんですね……ちょっと緊張してきました。

とりあえず荷物をつめちゃって、と。

「……あれ？　このノート。無くなってたやつですね」

原田さんが拾ったノート。そういえばあの後ずっと存在を忘れてたけど……誰かが届けてくれたんでしょう？

あれ、紙が置いてありますね……？

――Ｊｅ　ｓｕｉｓ　ｄ？ｓｏｌ？　ｐｏｕｒ　ｎｅ　ｒｅｎｄｒｅ　ｐａｓ　ｌｅ　ｃａｈｉｅｒ　？　ｌａ　ｆｏｉｓ．　Ｃｈ

arlotte Dunois――

ノートをすぐに返さなくてごめんね……？
フランス語……ってシャルロット・デュノア！？
え、じゃあなんですか？　シャルロットがこの部屋に来ていたんですか！？　え、じゃあ毛布をかけてくれたのも彼女ですか？　なんで！？

「というか寝顔見られたんですかぁ！？」

うぅ……戦争の間も寝不足でお肌も荒れ気味だったんですよ？
ロマンスの神様きっと恨みます……

25．Ｆｉｌｌｅ ｒｅｎｃｏｎｔｒｅ ｆｉｌｌｅ（後書き）

息抜きに挿絵を描いてみました。
ということでシャル襲来時の寝オリ主をどーん（
＞ｉ２３０５１―３０２１＜
元画像は大きいけど拡大しちゃだめですよ！

ここで特別企画のお知らせです。

そろそろ個人トーナメントに入りますが……ここでも問題です。
アリサは一体誰とタッグを組むことになっているでしょうか？
それぞれ予想した人物とその理由、さらにオリ主絡みで読んでみたいシチュエーションを活動報告でも感想でもいいのでお書き下さい。
正解者の中から抽選で希望されたシチュエーションを形にします。
（ＩＦじゃないとできなさそうなモノは私の琴線に触れないとかけませんのであしからず。発想力はないのですよ（汗
妄想シチュを見られるが恥ずかしすぎて感想などに書きにくいということでしたらメッセージでも構いません（
希望されるなら名前も出しません。
ホントに
予想：〇〇
シチュ：――が～～で＝＝＝な感じ。
だけでもいいです

え？　そんなこと言っても大丈夫かって？
大丈夫ですよー？　こういう風に企画！　とか言うと誰も参加しないので（ぁ

26.　?gal　de　la　vengeance（前書き）

「再戦」

拳を交えた先にあるものは・・・・・・

総合評価がやっと１０００Ｐｔこしました！　ありがとうございます！

26. ?gal de la vengeance

シャルロットが転校してきてから五日が経ち、今日は土曜日です。
とは言っても、出張していた私にとっては二ヶ月ですし、お昼を通り越して夕方まで寝てしまいましたし……あ、午前の理論学習、まるまるサボっちゃいましたね。
明日、織斑先生の出席簿ですね。ところで先生はあれが普通に痛いのを知ってるんですかね？
きっと叩かれたことないから可愛い生徒のことも叩けるんですよ。まったく……

「それで？　昨日戻ってくるはずだったのに今日の、それも夕方になってから戻ってきたことについての言い訳は？」
「……ごめんなさい」

織斑先生より先に部屋で鈴ちゃんに怒られています。確かに連絡もしなかったので私が悪いです。
でも、監察室（おつとめ）帰りなんですからもう少し優しくしてくれても……

「まぁ、良いけどね。これから一夏のコーチしに行くけど、来る？」
「そうですね……少し鬱憤も晴らしたいので行きます」
「鬱憤って……あんまり一夏をいじめないでよ？　アイツ自信なくしそうだし」

鈴ちゃん、知ってますか？　日本の刀は熱した鉄の棒を何度も何度も叩いて鍛えられるんですよ？
織斑君も男の子なんですから、やっぱり叩いて鍛えないと。
……まぁ、刀の場合は途中で折れたり刃筋が歪んだりすることもあるそうですが。

「ま、平気でしょう」
「？」
なんたって男の子ですからね。
◇
ガキィン！　ガガガガガッ！　ドンッ！
「織斑君対デュノアさんですか……これは酷い」
「むしろ的対デュノアって感じね」
重機関銃（デザートフォックス）による面制圧射撃、アサルトライフル《ヴェント》による一点集中射撃。そして、意表を突いての高速接近からのブレッドスライサー……と見せかけて連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》の接射。
それで勝負は決まりました。
ショットガンって密接して撃つと身体に大穴が開くんですよね。そりゃ、シールドエネルギーを一気に持っていかれても不思議じゃないです。
「改めて、ＩＳの装甲って硬いんたなぁ……ってことを実感しますね」
「わたくしのビームライフルや鈴さんの龍砲と違って実弾による射撃ですから威力が想像しやすいですわね」
「あれ、装甲が無かったら一夏の死体も残ってないわ」
「まったくだらしない……と普段なら言うのだが、今回は仕方ないな」

見学していた私達は言葉こそ違うものの感想は皆一様でした。
つまり、

「「「「あそこまでコテンパンにしなくても……」」」」

ということです。
手加減しないシャルロット、素敵です。
でも、絶対防御を突き抜けそうな攻撃しないでください。さすがに学園内でそれは拙いです。
四人でシャルロットの攻略法を話し合っているところに二人が戻ってきました。
さて、

「セシぃ、やりましょうか？」
「……」
「セシぃ？」

私を見ているので話を聞いていないわけではないようですが……どうしたんでしょう？

「今度はアリサさんがデュノアさんから距離を置くんですのね……？」
「……なんのことですか？」
「その必要はないってことよ、アリサ」
「り、鈴ちゃん……その妖しい笑いはなんですか？」
「ま、とりあえず一夏たちのところへ行こうか。楽しいことになるぞ」

篠ノ之さんまで様子が変ですよ！？
シャルロットにはあまり近づきたくないのですが……仲が悪いと

かそういうことではなくて、いろいろありますし。
　というか……皆、私とシャルロットの間にあるものを断片的にでも知っているようですが、なぜでしょう？　周囲からですと、私とシャルロットは月曜の朝と噂以外に接点がないように思われているはずなのですが。
　あ、でも鈴ちゃんと篠ノ之さんは噂のオリジナルをシャルロット本人から聞いていたんでしたっけ。それでしたら……あれ、でもそれだけですとやっぱり私とシャルロットを近づけようとする理由が分かりませんよ？
　まぁ、心情的には嬉しいのでいいんですけど……シャルロットの迷惑になっちゃいませんかね？

「別に何か思惑があるわけでもないわよ。ただ、同じフランスの生徒なんだから話せばいいのにってね」
「鈴ちゃん……もしかして最初からそれが目的で？」
「何のことかしら？　あ、一夏が銃構えてる……っぷ！　何あのへっぴり腰！」
「そうやって話を逸らそうとしても……って銃に集中しすぎて人にあたりそうですよ！？」

　まったく、あの人は……本当に楽しそうにはしゃいじゃって。
　もう、子供じゃないんですからいちいちライフルくらいで喜ばないでくださいよ……

「あら、アリサさんがあれを見て笑うとは思いませんでしたわ」
「セシぃ？　あぁ、兵器だからですか？　確かに銃を楽しそうに撃つ、というのは字面的にどうかと思いますが……私たちにもそういう時期はありましたしね」

　あれは、経験による知的好奇心が満たされるから喜んでいるんで

しょうし。
私の視線の先では一足早く織斑君のところへ着いた鈴ちゃんと篠ノ之さんが織斑君に呆れています。
多分、銃を撃って初めて織斑君が自分の戦い方の無謀さに気付いたからでしょう。

「――でも、不破さんだって俺みたいな戦い方じゃないか？」
「はぁ……織斑君は何か勘違いをしていますね。私だって射撃戦はできるんですよ？」
「「「「え゛！？」」」」

なんですかその反応は。もしかして皆さん全員私が格闘以外できないと思っていたんですか？

「だって、クラス対抗戦の時のあの大砲以外見たことないし……」
「てっきり俺みたいに純接近戦用のＩＳなんだと」
「それじゃ第二世代型であるメリットがないじゃないですか……まぁ、アホみたいな容量の装備なので、結局第二世代型の長所を殺しているのはたしかですが」

二つの装備で十個分の場所をとっていますからね……でも装備を全部外せばシャルロットと同じような装備内容にできますし、シャルロットの装備の半分は私がテストしたものですからちゃんと使いこなせるんですよ？

「まぁ、私の戦い方が織斑君に似ているのは認めますけど、射撃が得意な相手だったら戦い方も変わりますよ」

ってことで、私とセシィの戦いを見てもらいましょうかね。射撃を得意とする相手への新しい対抗策も考えましたし。

「あ、そういえば僕、不破さんのＩＳだけ見たことないかも」
「か、監察室にいましたからね……」

ちょっと待ってください、シャルロット。
その目はなんですか？　何で戦ってみたいなぁ、な視線を向けてくるんですか！？

「僕も、格闘が得意な人の攻略法を探してたんだ」

そんな、ニコニコされても……っていうか、私のこと恨んでいたんじゃないですか。
あ、だからコテンパンにしてやろうということですか。
なら、仕方ないですね。
尋常に勝負です。

「手加減は……いえ、そうですね。織斑君に私の戦い方を見せると言いましたが中止です。私達を見ている観客さんたちにも悪いですが本気で勝ちに行きます」
「アリサ！？」

あの日から、シャルロットがどれだけ強くなったのか見せてもらいましょうか。
ふふ、愉しみですね。

「あら、アリサさんのスイッチが入ってしまいましたわね」
「スイッチ？」
「まぁ、簡単に言うのなら……最強モードとでも言いましょうか。あのアリサさんが負けたところを見たことがないです」
「でも、それなら普段からスイッチ入れていればいいじゃないか。

不破はセシリアには割と負けているぞ？」
「確かに箒さんの言う通りなのですが……いまいちきっかけがなんなのかは分からないんですわ」
それは簡単なことですよ。
シャルロットが関わっていなかったからです。
それに人目もありましたし……そのシャルロットと戦えるなら……体が熱くなりますね。
というか皆さん私が監察室に籠もっていた間に随分仲良くなったんですねー。具体的には篠ノ之さんと。
「デュノア、負けても気にしたらだめよ。不破っていわゆる初見殺しだから」
「えぇ！？　まあ、それなら、僕の特訓にもなるし……いいかな？」
「それ、一夏じゃ物足りないと言っているのと同じことだぞ。あと、多分訓練にもならない」
「そ、そう」
そこー、あんまりシャルロットを脅かさないでくださいよー。
私のイメージが強い人とかになったらヤなんですから！
「いくよ、カゲロウ」
「あら、また、少し変わったのですわね」
「ん、まぁ、そうですね」
二ヶ月間の空戦を経て、カゲロウはまた少し変形しました。とは言っても尻尾（スラスター）が大きくなったくらいですけど。
「……あれ、そのＩＳ……気のせいかな」
「？　……さぁ、始めましょうか」

二人してアリーナの中央まで歩いていくと、まばらに実習を行っていた生徒たちが散っていきます。
多分、さっきのシャルロットと織斑君の模擬戦を見て、巻き込まれると考えたのでしょう。シャルロットの乱射は派手でしたから……

「いくよ」
「先手は譲りましょう」

前回は不意打ち気味に先手を奪ってしまいましたからね。
なにより格闘戦ならまだしも銃器を使われては先攻後攻なんて有って無いようなものですし。
私とシャルロットの間にはだいたい二十メートル……瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使ってもシャルロットがなにかしらの銃を展開して撃ってくる方が速いでしょう。

「アサルトカノン……ガルムですか」

ガルムって北欧の方の古い言葉で狼という意味なんですよ？　私のカゲロウ（影狼）にそれを向けるなんてとんでもないですね。
……先手を譲ると言ったので避けるのは無しですか？　……ですよねー。
なら受け止めましょう。
私には地道に鍛えた超高感度ハイパーセンサーがありますからね。
連射されなければいけます。

ダァンッ！

「アリサっ！？」

避けようとせずに吹き飛んだ私に鈴ちゃんが叫んだ気がします。
狙いは……右肩でした。
甘いですよシャルロット。せっかく安全なＩＳに乗っているんですから頭を狙わないとダメですよ？

「いたた……流石に弾の勢いを殺すのは無理でしたか」
「え、嘘……」

装甲に傷一つ無い状態で立ち上がった私にシャルロットが信じられない、といった声を出しました。
まぁ、そうですよね。
私も母様（ママ）にこれを見せられたときは軽く引きましたし。

「これ、返しますっ！」

私の投げたものがシャルロットのガルムにあたりました。銃身は無事なようですが……少しでも歪ませてしまえば封じることができますから狙い通りということにしておきましょう。
シャルロットも展開を解きましたし。

「さっきのは……ガルムの、弾丸？」
「ええ。まぁ、見えていて丈夫な身体（ＩＳ）が有るなら不可能ではないみたいですね」

シャルロットの足下に落ちているのは小石大……六十一口径のはずなのでだいたい直径六センチの弾丸。
あの瞬間、右手で弾丸を包むように掴み、回転することで弾丸を受け止めました。予想以上に速度が速くて勢いを殺せず転んでしまいましたけどね。
投げ返したのは雹（ひょう）の応用です。

「では、始めましょう」

ここからが本番ですよ？

◇

「ねぇ、セシリア、さっきのできる？」

「不可能ですわ。そもそもブルー・ティアーズのセンサーでは弾を捉えきれません」

「篠ノ之は？　あんたも武術やってたんでしょ？」

「無理だな。刀があれば銃口の向きから射線を判断して斬ることもあるいは……とにかく、掴み取るなんてことは考えたこともない」

「そうよね。弾がほとんど見えなかった私は普通よね」

鈴さんがどこか安心したように溜め息をつきました。そもそも篠ノ之さんの言ったことでさえ達人の域ですわ。

そもそも銃弾が見えて、反応できるのなら誰も銃なんて使いませんわ。

「不破さんは、見えてたよな？」

「そうだな。視線が銃口ではなく射線上を向いていた。始めから掴むつもりだったんだろう」

こうして話してみると、それぞれが異なるところを見ていて面白いですわね。

わたくしは実弾装備の参考にしようとデュノアさんを見ていたのですが、鈴さんはアリサさんがどのように避けるのかを、一夏さんと篠ノ之さんはアリサさんが何を視ているかを見ていたようですわ。

日本の武芸においては何においてもまずは視ることが重要だと言

うそうですし、お二人ともそれなりに武術ついて学んでいるからでしょうね。

鈴さんはアリサさんの避けるときの癖を探し出して龍砲に生かそうと考えたのでしょうけれど……そのようなものがあればわたくしが既に見つけていますわ。

「鈴さん、あなたとアリサさんの相性は最悪なのですからアリサさんの弱点を探すよりもデュノアさんを研究した方がいいと思いますわ。きっと、鈴さんの参考になるでしょう」

「なに？　セシリアってデュノアの戦い方知ってんの？」

「既に一度戦いましたから。わたくし、こう見えて結構な人数と戦っていますのよ？」

一組ではあとボーデヴィッヒさんだけなのですけれど……あまり人と関わるのが好きではないのか機会が作れないのですわ。

とにかく、鈴さんの中距離と近距離を使いわける戦い方はデュノアさんの砂漠（ミラージュ・デ・デザート）の逃げ水に通じるとこがあるので、きっと役に立つことでしょう。

「まぁ、見ようとしても見れないけどな」

現在私達が捉えられているのは音だけ……アリサさんがいきなり塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）で煙幕を張ったのですわ。

大気中の金属塵（チャフ）と炎による熱でＩＳのハイパーセンサーをもってしても戦況がわかりません。

ですが、

「不破が押しているな。音が打撃音ばかりだ」

篠ノ之さんの言うとおりでしょう。あのセンサーもろくに使えな

い煙幕の中で射撃は無茶です。
所々、刃物の音もするのでデュノアさんさんも善戦しているのでしょうが……見えなくて退屈ですわ。

「鈴さん、あの煙、吹き飛ばしてしまいません？」
「……いいわね」

アリサさんには悪いですが、一応、一夏さんの特訓なのです。見せなければ意味がありませんわ。
決して、わたくし達が見たいからだけだというわけではないのです。
わたくしはブルー・ティアーズのミサイルを、鈴さんは龍砲の準備をそれぞれ整えます。

「あの、岩が転がってる場所わかる？　あそこ狙うわ」
「岩……あぁ、見つけましたわ。では……」
「「せーのっ」」

二つの衝撃によって生まれた強風が目論見通り煙を吹き飛ばす。

◇

煙幕の中、不破さんのＩＳを走査する。
オンブル・ループについてはフランスで調べたかとがある。操縦者の情報は全て隠蔽されていたけど、それ以外はあまり伏せられていなかった。分からなかったのは基本装備（プリセット）の二つの装備だけ。
だから不破さんのＩＳがオンブル・ループだって分かった瞬間、攻略法は頭の中にできあがっていたのに……どうして僕が圧倒されてるの？
塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）だって本来は対ＩＳ用の装備じゃないのにこんな間

接的な使い方で戦況を作り上げるなんて。
ハイパーセンサーを最大限に使っても砂塵とともに舞う微細な金属片が精度を格段に落とす……熱感知方式に索敵方法を切り替えても炎の熱でレーダーが真っ白にされるし。
空気の流動と超音波反射、それと地面の振動探知を併用してようやく精度が七割程度。
つまり十回に三回は的外れな場所に射撃を行っていることになるんだけど……条件自体は不破さんも同じ。
だから、普通はこんな戦い方をするＩＳが無いわけだし。
でも、あまり銃を使いすぎると不破さんから僕の行る場所が分かっちゃうし……実際、撃つと一瞬で距離を詰めてくる。
なんとかブレッドスライサーで対応してるけど……
――注意、第三者による攻撃です――
「なっ!?」
「何があっても意識を逸らしてはいけませんよ?」
僕の注意がほかに向いた瞬間、不破さんに腕を絡み取られた。

◇

――注意、第三者による攻撃です。戦闘記録に該当データあり。セシリア・オルコットによるミサイル攻撃と鳳鈴音（ファン・リンイン）による空感圧作用兵器に合致――
あの二人……試合が見れないからってヒドいです!
煙幕の中なら私の独壇場なのに。
基本は待ちの姿勢で臨み、相手が動いたら距離を詰めて一気に叩く……私のセンサー類もこの煙幕の中では精度が下がりますが、手間が増えるだけで金属塵によるレーダー攪乱も逆算してしまえば問

題有りません。なので相手が動けば空気の流れ、音、そしてレーダーでほぼ確実に捉えきれます。
まぁ、分割思考と発達したハイパーセンサーがあるからこそできることですがね。
一瞬の隙をついてシャルロットの腕をとります。
前回同様、雷(いかずち)で決めましょうか。

「それは、もう効かないよ？」
「え？　……っ！」

シャルロットの不敵な声に嫌な予感がしたので地面に叩きつけずに遠くへ投げ飛ばしました。
その瞬間に見えたものは、私に向けられていたサタディ・オブ・レイン。
危うくわき腹を打ち抜かれるところだったようです。
……まぁ、そんなことより、

「鈴ちゃん、セシぃ！　えこひいきですかー！？」
「見えないとつまらないでしょ！」
「鈴さんの言う通りですわ！　それにこの集まりは一応一夏さんのためなのですから」

つまり、織斑君のせいで私の完全勝利がなくなったわけですか……

「いやー、俺は別に見えなくても良かったんだけどな。二人くらいの模擬戦になると見ても分からないし」
「わ、バカ！」

結局、織斑君云々は建て前で退屈だったんですね。
もう……仕方のない人たちです。

「はぁ……気が抜けました。デュノアさん。終わらせましょう」
「うん、今度は勝たせてもらうよ？」

あれ……気付かれてたんですね。カラーリングも白から黒に変えましたし、カゲロウの造形も随分と変化しているはずなのですが。

「さっきの投げは僕にとってもトラウマだからね……まぁ、その後のあれの方が怖かったけど」

あれ……あぁ。

「これですか？」

討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）を展開してみせるとデュノアさんが少し動揺しました。まぁ、初めてと言ってもいい模擬戦で顔の真横を穿たれたら怯えますよね。

「でもね。もう負けないよ？」
「初めての時は気絶したのにですか？　あのあと運んだの私だったんですからね？」
「へぇ……えっと、ありがとう？」

……シャルロットにお礼言われちゃいました！　今日はいい日ですね。

「不破さん」
「はい？」
「あなたのことは苦手だけど、」

……ですよね。

こう、持ち上げてから落とすのはずるいと思います。流石、シャルロット。高度な心理戦を仕掛けてきました。私の勝率がガクッと落ちたのが分かります。

「でも、誤解をしてたのかもしれないと思ってる。あとで聞かせてくれないかな？」

どうしてシャルロットに男装をさせたか……ですか。

私のエゴなんですけどね……しかも裏目に出て失敗してますし。

私の予定ではそもそもシャルロットはシャルロットのままＩＳ学園に来れるはずだったのですし。

「分かりました……誰か、合図お願いします」

目があった生徒に合図をお願いしました。上級生に見えましたが気にしません。

お互いにシールドエネルギーはほとんど削られていないので討鬼（ドラク）の鋼杭（ル・ペイン）と灰色（グレースケール）の鱗殻での一騎打ち……ですかね。

出は灰色（グレースケール）の鱗殻の方が速いですが、初撃からフィニッシュまでの時間とダメージは討鬼（ドラクル・ペイン）の鋼杭の方が有利です。

合図の砲が上に向けられ……

ダァンッ！

銃声と同時に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で接近。シャルロットは動かずに腰を落としています……待ち伏せですか。

シャルロットの手にはデザートフォックス――灰色（グレースケール）の鱗殻ではダメージが足りないのを補う気ですね。

でも、

「遅いですよ！」

連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）で身体を横に弾く。角度はきっかり四十五度。

急な進行方向の変更で内臓系に負担がかかりましたが、それを代償にシャルロットを振り回すことに成功しました。

さらに方向転換し、シャルロットの右手側……つまり、灰色の鱗殻（グレースケール）とは逆の方向から突撃する。

シャルロットはここにきてようやく灰色の鱗殻（グレースケール）を展開し回転、無茶な動きでしたが私の動きに追いついてきました。

――それでも私の方が速いですっ！

討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）の起動時間を予測して動かし始めます。密着（ゼロイン）と同時に放ちます！

ズガンッ！

私の打ち出した杭がシャルロットの装甲を、

――砕きませんでした。

破砕音は私の右腕から聞こえました。

上からの叩きつけるような衝撃が討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）の杭先を動かし、シャルロットの装甲を穿たせない。

そして、腹部に六連続の衝撃。

灰色の鱗殻（グレースケール）での先制は考えられません。だとすると……

「はぁ……高速切替（ラピッド・スイッチ）ですか」

「えへへ、巧くいっちゃった」

か、可愛いですね。
シャルロットがやったことは単純でした。
灰色（グレースケール）の鱗殻で私を迎え撃つと見せかけて展開を解除。代わりに左腕に展開したサタディ・オブ・レインで私の討鬼鋼杭（ドラクル・ペイン）を破壊し、そこから灰色（グレースケール）の鱗殻を再展開してのフィニッシュです。
高速切替（ラピッド・スイッチ）を随分と使いこなしていますね……

「あぁ……完敗です」
「やた！　……ずっと、あの時の女の子が目標だったから」
「私に勝ったって自慢できますよ？　……戻りましょう」
「うん……あれ、あのＩＳって」

シャルロットの目線の先には黒いＩＳ……シュヴァルツェア・レーゲン。
ここで、織斑君を討つ気ですか！？
彼のシールドエネルギーはもうゼロなのに……！

「っ！　織斑君！」
「え……ぐっ！？」

銃を向けられ動けない織斑君を蹴り飛ばします……死んでないはずです。ＩＳの装甲の感触でしたし。

パァン！

私に気付かずにボーデヴィッヒさんが銃を放つ。弾は織斑君のいた場所に座る私に向かって飛んできます。
しまった……もうエネルギーが、

「避けられな……！」

キィンッ

「……今のは？」

目だけが捉えていた銃弾が何かに弾かれました。今の角度は……シャルロットですか？

「僕も目がいいんだよね。練習もしたし」

目を向ければアサルトライフル《ガルム》を構えたシャルロットが笑っていました。

ピンチを助けられた……のでしょうか？

どうしましょう……シャルロットが素敵過ぎて頭が真っ白です。

でもシャルロットはあとでお説教です。

最初の私の雹で銃身が曲がっていたかもしれないガルムを使うなんて……暴発したらシャルロットが怪我してたんですよ？

「ふ、不破さん。どうしたの？」

「いえ、なんでもないですよ？」

優しくするつもりなのでそんなに怯えた目で見ないでくださいよ。

傷つい(ゾクゾクし)ちゃいますから。

26. ?gal de la vengeance（後書き）

数分の戦闘は数日の付き合いにも匹敵すると思います！
少年誌的な意味で（

うちのベタ男（魚：ベタ♂）が可愛すぎてつらい

前回の企画、まだまだ続いています
また、それとは別でＩＳのための兵装案を募集します。
オリ主のためのもの、というわけではないので第二世代用でも第三世代用でも遠慮せずに！
メッセージからでも感想からでもお気軽にどうぞー

27. Accord du cessez-le-feu（前書き）

「停戦協定」

アリサ大暴走
そしてユニーク４００００達成。感謝です！

27. Accord du cessez-le-feu

ボーデヴィッヒさんとシャルロットが睨み合っています。
私のために争うのはやめてくださいっ！　……とか言っても良さそうな状況ですよね。一応事実ですし。
ただ、既にエネルギーが切れかけていたカゲロウをしまっちゃったので今は生身です。
この状態で二人――シュヴァルツェア・レーゲンとラファール・リヴァイヴ・カスタム？の間に入る勇気はありません。下手したら、ぷちっ♪　と逝けそうですし。

「いきなり発砲するなんて……僕達ついさっきまで戦ってたんだし、さっきのが不破さんに当たっていたら昏睡状態になってたかもしれないよ？」
「……」
絶対防御すら貫通するダメージを受けた場合に操縦者の生体エネルギーを強制的にシールドエネルギーに変換し命だけは守る……でしたっけ？
というか、そこまで私のシールドエネルギーを削り取ったのはシャルロットなのですが……セシぃでもあそこまでしませんよ？

「不破さん、どうしたの？」
「いえ、なんでもないですよ？」

今度は私が冷や汗をかく番でした。
……納得がいかないのでお説教は少し厳しくしましょうか。
というか、シャルロット油断しすぎです。
相手から視線外しちゃだめじゃないですか。昔も戦闘中に話すし、

シャルロットには危険に対する意識が不足していますよ！

「こらー！　おまえら何をしていた！！？」

ようやく監督係の教師が来ました。何をしていたはこっちのセリフですよ。今更来て何をする気ですか。もう全部終わってます。

とりあえず、面倒なことになる前に解決しちゃいましょう。

「大丈夫ですよ、先生。誰が一番格好良く実弾射撃に対抗できるかを競っていただけですから。それにグラウンドもあまり荒れていないじゃないですか。もし、このメンバーで喧嘩したら戦争と大差ないですよ？」

「……ふん。まぁいいだろう……不破！　あとで報告書を提出しろ！　他の奴は戻ってよし！」

……またですか？

この人、なんでか知らないですけど私のことを敵視するんですよね。何が気に入らないんでしょう。

「はぁ、かすとわぐろすう〝ぁしゅ！……です」

「不破、今なんと言った？」

「フランス語で、了解しましたー！　って意味ですよ？　ですよね？　デュノアさん」

「う、うん……っぷ」

あ！？　シャルロット、そこで吹き出しちゃだめですよ！

「……ふん、一時間以内にもってこい」

「うぃ、めるど」

シャルロット、我慢！　我慢です！　……と、ようやく行きましたか。

「デュノアさん。危うく怒られるところだったじゃないですかー！」

「ご、ごめ、だって、あははは！」

そんなに面白かったですかね？

私はただ笑顔で悪口を言っただけですよ。

「ねぇアリサ、あんたあのハゲになんて言ったの？」

「ん、最初は失せろデブ牛、と。もう一つは了解しましたクズ野郎ってところですかね？」

「あ、あんたねぇ……」

頭痛い、とこめかみを押さえる鈴ちゃん。

いやー、だってあの人いつも私に厳しいんですよ？　あれくらいなら言ったっていいと思います。

私、表面上は品行方正、文武両道の優等生なんですけど……すみません、結構言いすぎました。でも、いったい私の何が気に入らないんでしょうか。

「ま、それはともかくとして……ボーデヴィッヒさん？　何を考えていらっしゃいますの？　アリサさんに当たっていたらどうするつもりでしたの？」

私達が騒いでいる間にセシィがキレていました……？

珍しいですね。普段はむしろ私達のストッパーなんですけど。

「待て、誤解だ。私は別に不破を、」

「ええ、そうでしょうね。それは分かっていますわ。ですがアリサ

さんが昏睡する可能性はあったのも事実なのです。それに対してあなたに何の責任もないと言われるのですか？」

「セシぃ、私に怪我はなかったんですし、そもそも飛び込んだのも私ですから「不破、すまなかった」……ふぇ？」

まさかボーデヴィッヒさんに謝られるとは思いませんでした。私の予想では偉そうにするな！　みたいな感じで乱闘になると思ったのですが……

「……別に、許さなくても構わない。私の落ち度だからな」

え、えー！？

なんでしおらしいんですか？

私のイメージではもっと直情的な人のはずなのですが。

「えっと、気にしてません……よ？」

「そうかっ！　いや、この埋め合わせは必ずする！　本当にすまなかった！」

今、笑って走り去って行ってしまいました……私、フラグなんて立てていないですよね？　というか、さっき初めて話したんですけど。

まぁ、嫌われているわけではないのでいいとしますか。

「なんだったんでしょう？」

「なんだかんだで反省してたってことじゃないの？」

「無愛想なだけなのかもな」

おお。

自分も初対面で殴られているのに……織斑君もなかなか器が広い

のかもしれません。
もし私が初対面の人に殴られたら……殴られる前に反撃している気がします。
いえ、そんなことはどうでもよくてですね……なんだか波乱の予感がしますよ？
とりあえず、

「お腹空きましたし、シャワー浴びて戻りましょうか」
「そうだね。行こうか一夏」

そう言ってシャルロットが織斑君と……

「って、デュノアさん、ちょっと待ってください！」
「うん？　どうしたの？」

うん？　って小首をかしげる場面ではないでしょう！
何、ナチュラルに男の子の織斑君とシャワーを浴びに行こうとしてるんですか！
あなたは自分が女の子だってこと忘れたんですかっ！？　もっと身体は大事にして下さい！
……とは言えないので、

「えっとですね。えっと、あー……ほら！　少し話したいことがあるので付き合って下さい！　シャワーの前に！」
「え？　え？」
「ほらほら！　織斑君はお先にどうぞ！」
「いや俺も待つ、」
「大事な話なので結構です！　セシぃ達も待っていなくていいですからね！」
「は、はい……了解しましたわ」

◇

「ふぅ……」

ようやく二人きりになれましたか……二人っきり？

……二人っきりってなんですか！？

急なことだったので私まだ心の準備とかできてませんというかそもそも二人きりになるの事態月曜日ぶりですしあれも体感的には二カ月以上前のことであぁでも私が監察室でうたた寝してしまっているときにシャルロットがきていたようですしというか私はこれから何をシャルロットに話せばいいんですか！？

「えっと、不破さん？」

「ひゃいっ！？」

「いや、えっと……とりあえず座ろっか？」

はい、と差し出された椅子に座って深呼吸……すぅーーー、はぁーーー。

まずは現状認識からです。

私達がいるのはアリーナ脇に設けられた休憩室です。自動販売機や簡単な購買部があってカフェみたいな雰囲気なのですが、今は私たち以外に誰もいません。

そして次にシャルロット。ここまで私が手を掴んで走ってきたので体温が上がったのでしょう。ほっぺたが薄桃色に上気していてそこはかとないエロティシズムを……ではなくてですね。どうして私が連れてきたのかを理解できていない様子です。

もしかして実はこの子、男装にあまり抵抗なかったりするんじゃないでしょうか？　もしくは自分が男だと思いこむことで我慢しているとか……もしそうなら早急に手を撃たなきゃいけませんね。

幸いあと一年あれば第三世代型は作り出せそうですし、流石に第四世代型が国によって開発されるのはまだ当分先でしょうからデュノア社の倒産は何とか防げそうです。夏休みあたりに私がちょこっと頑張りましょう。

「それで、話ってのはなに？」

「え？　あぁ……いえ、実は特に話はないんですけど……」

「え？　じゃあなんで僕を連れてきたの？」

「……はぁ」

ダメですこの子。

個室だからって男の子と一緒にシャワーに入ることに抵抗を覚えないだなんて……

「デュノアさん」

「ん？」

「あなたの名前はなんですか？」

「えっと、シャルル・デュノア？」

「……シャルロット・デュノアですよね？　もう、あなたは女の子なんですから織斑君と一緒にシャワールームに行かないでください！」

まったく！　女の子の裸はそんなに安いものじゃないんですからね！

……ってあれ？　シャルロットが険しい顔をして……怒ってます？

「不破さんが、原因なのに……」

「あぅ……そうでした。ごめんなさい……」

……全く言う通りです。

私がそもそもの元凶じゃないですか……私はなにをやっているんですかね。

でも、だからと言って……というか、それとこれとは別じゃないですかっ！？　もともとのプランから言っても女の子だってバレるようなことするのもダメに決まってるじゃないですか！

……もちろん、口には出しませんよ？

なんだか最近自分が逞しくなってきている気がします。

「……なんてね、冗談だよ？　えへ」

「へ？」

「話すことがないならさ、さっきの約束の話をしてほしいな」

約束……？

あぁ、フランスで私が何をしていたかですね。

これを聞いてもらえたら……許してもらえるでしょうか？

「では……デュノアさんにとって社長さんはどんな人物ですか？」

「会社のために世間体とか外聞を気にする人、かな……」

「それは、デュノアさんを利用したからですよね？　それじゃあ、もし社長さんがデュノアさんのこともしっかり考えていたとしたら……どうですか？」

「え？」

社長さんは冗談めかしてはいたものの、悪くても吸収合併される程度だろうと言っていました。つまり会社が危うくなることも理解した上で今回のシャルロットの男装の計画を進めていたのです。

本来なら社長として社員が路頭に迷うリスクがあることなんてしてはいけないのですが、自分がなんと罵倒されることになろうともシャルロットを守りたかった……いえ守りたいと思っているからこその決断だったのでしょう。しかも、あろうことか会社が潰れる可

能性というのを全ての従業員に伝えて退職金も用意していると言ってしまいました。

社長さんの人徳のためかや移植する人はほとんどいなかったらしいですが、全てをかけてシャルロットの立場を守ろうとしていたことには変わりありません。

最初は本妻さんからシャルロットへの激しい嫌がらせから、その次は第二の男性操縦者として世界から注目されることから……そして、いずれは世界を束買った女性と蔑まれることからも。

シャルロットが女の子だということが世界に露見した瞬間にデュノア社が彼女に強要したという声明を出すことが出来るよう準備もされています。

だから、本当は私なんかがシャルロットを守ろうと努力しなくても平気なんです。

「でも、そんな結末ではダメなんです。シャルロットだけが助かってもあなたは気にしてしまいますよね？」

「……その話が本当なら」

「今は、それくらいでいいです」

もとからすぐに信じてもらえるとは思っていませんでしたから。

「とにかく、私もデュノア社の社員全員が路頭に迷うなんてことは望んでいないんですよ。父も雇われていますしね。それに、思いつきとはいえ計画したという責任は私にもありますし」

「えっと、不破さんはなにが言いたいの？」

「私がデュノア社もシャルロットも守ります」

そのためにこれまでも色々と仕掛けをしていたわけですし。

「……どうやって？」

「えっと、まだ公表されていないのでシャルロットも知らないでしょうが、既にフランスの第三世代型ＩＳの全体像は見えてきているのです。今週末には正式に研究チームも発足されるでしょうね。その中心になるのはジョルジュ・ベルレアン博士。その補佐にはかつてオンブル・ループとラファール・リヴァイヴ・カスタム?を組み上げた両研究チームの全員関わります。もちろん私の父もです。きっと一年あれば形にはなっていると思いますよ?」

「一年？　どこの国も第三世代型の開発には二年以上かけているんだよ?」

「そこはまぁ……神様に感謝しなければいけないような幸運があったんですよ」

……タサキさんもきっと神様ですよね？　神様命融なんて会社……かは知りませんけど、とにかく怪しい団体に所属しているんですし。

彼女のおかげで第三世代型に必要な研究データを他世界から持ち込めましたからね。ある意味ではＩＳコアと並ぶオーバーテクノロジーかもしれませんけど……まぁ、そこに数式と結果があって誰でも理解できる形になったならそれは普通の新技術になるんですし問題ないでしょう。

「だから、次のイグニッション・プランの選考で選抜されれば……いえ、脱落さえしなければデュノア社は安泰なんです」

「でも第三世代型がないフランスはそもそも選考対象外だと思うけど……今じゃ英独伊三国での競争だし」

「ふふ、そこは私の頑張りどころですよ」

第三世代型の方が第二世代型よりも有用だと誰が決めたんですか？

そんな幻想（セオリー）わたしがぶち壊します。

「まぁ、そういうわけで。デュノアさんは社長さんから愛されているんですよ」
「……でも、」
「信じられないというならそれでもいいと思います。社長さんも、私と同じでシャルロットが幸せならいいと思っているでしょうから」
……あれ？
ちょ、ちょっと待って私！
私と同じで、とかなに言っちゃってるんですか！　え、プロポーズ？　プロポーズなんですか！？　いえ、シャルロットのことは大好きですけどっていうか今私シャルロットって呼び捨てにしちゃいましたよねぇ！？
……変に思われましたよね？
「そっか……」
「いや、違いますよ！？　私が言いたかったのはデュノアさんに信じてもらえなくても頑張れるということで……！」
「不破さん……ありがとう。僕も自分なりに真相を探してみるね」
「……夏休み。デュノア社ではフランス国内のＩＳ関係者全てを集めてのパーティーがあります。そのとき、二人で行きませんか？」
そのとき、シャルロットのことを皆さんに紹介して……それで社長さんとシャルロットが話せるように私がセッティングをしましょう。
「うん、いいね」
楽しみになってきました。

27. Accord du cessez-le-feu（後書き）

仲直りというわけではなく、あくまでも停戦
マイナスから始まっていた関係がようやく始点（ゼロポイント）に到達しました
まだまだ兵装案とか募集してます。というか半永久的に（

28. Le pass? de la fille（前書き）

「女の子の過去」

まだまだアリサ大暴走中

ＰＶ４００００超えました！ありがたきしあわせにございまする

（

28. Le pass? de la fille

コンコンコン

「ん、誰でしょうね。こんな時間に」

「まったく……アリサ、追い払ってきてよ。冷めた中華なんて犯罪級に不味いんだから」

アリーナから戻ってきての夕食。今日の当番は鈴ちゃんです。

机の上には酸辣湯（サンラータン）に青椒絲肉（チンジャオロース）、それに炒飯にエビチリといった馴染み深いものが所狭しと並んでいます。

とは言っても、しっかり量を計算されているので残ったりはしません……互いにちょっとの無理をすれば。

「じゃあ、鈴ちゃん待っててくださいね……はーい、どちらさ、ま？」

「えへへ……きちゃった」

ズキューン……なんて擬音が聞こえた気がします。来ちゃったってなんですか!?

扉を開けると枕とバッグを持ったシャルロットが立っていました。

え、なんでですか!?

「と、とりあえず中へ……」

「お邪魔します」

混乱&興奮な本能を無理矢理に理性で抑えて迎え入れます。脳内プロレスではちょうど理性が本能にコブラツイストを……てどうでもいい話ですね。

きちんと挨拶をして靴をそろえるあたり性格のよさが現れていますね。

「ん。デュノア？　何しにきたのよ？」

鈴ちゃんもそんな棘のある言い方しなくても……まだ冷めてしまうほど時間も経ってませんよ。

「あ、ごめん……ご飯だったんだ。なら私、他のところで、」

くぅぅぅぅ……

「……鈴ちゃんですか？」

お腹空いていたから気が立っていたんですか？　そんな子供じゃないんですから……

「わ、私じゃないわよ！？　だいたいアリサじゃないの？　いつも私より先にお腹空かしてるんだから」

「そ、そんな人を食いしん坊みたいに言わないでくださいよ！」

「どうだか。ご飯時になるとニコニコするくせに」

「そ、それは鈴ちゃんの中華が美味しいから……」

「そ、そうなの？　あ、ありがと」

……というか、もちろん私達は気付いてますよ？

でも、指摘しにくいんですよ！　だって、シャルロットの顔が既に真っ赤なんですもん。追い打ちをかけたら泣き出しそうです……

それもいいかもとか思ってないですよ？

と、とにかく！

「えっと、人を待たせて食べるというのもなんなのでデュノアさんも一緒しますか？」
「あぅ……お邪魔します」

気付いてますって言ってしまうようなものでしたが……これ以上に遠回しな言い方は私にはできません。
もともと多めに作られていますからね。中華は量の調節が難しいそうです。

「じゃ、冷める前に食べちゃいましょう。いただきます」
「いただきます……作ったの私なのになんでアリサが仕切ってるの？」
「いただきます……あ、美味し」

こう見えて鈴ちゃんは中華食堂の娘だったそうですからね。織斑君に毎日酢豚を作ってあげるなんて言ってしまう程度には中華の申し子です。
自分でも意味分からないことを言っていると思いますが。

「そういえば、その後、織斑君とはどうですか？」
「ど、どうってなによ！？」
「え？　ですからキスしたんですよね？　その後、何か変わってもおかしくないじゃないですか」
「キス……」

視界の端でシャルロットが唇を触れながら顔を赤らめています……愛いやつです。でも男の子の仕草ではないです。

「……ない」
「へ？」

「一夏の奴、何も変わんない……幼馴染としか扱われてない気がする」

キスされても態度を変えないとか……不能かホモです。

え、じゃあ織斑君がやたらとシャルルとしてのシャルロットにベタベタしているのは薔薇の花を咲かせるためですか！？

そ、そんなわけ……ないと思いたいです。

そんなんじゃ織斑君か発情した時点でフランスの計画が！

「しかし、キスされても態度が変わらないとか……鈴ちゃん、そもそも女として見られてないんじゃないですか？」

「し、失礼な！　……でも幼馴染って見られすぎて意識されてないのかも」

「織斑君ならキスも夢オチだとか思いそうですからね。というか思ってると思います」

「そんなのどうすればいいのよ……」

キスも夢で片づけられてしまったら……もう手段は一つだけですよね。

「なにそれ？」

「告白して、そのままゴーです。問答無用で」

「んなっ！？」

「ゴーって？」

私の言った意味が判らなかったシャルロットがやっぱり小首を傾げて……やばい可愛いです。でも、男の子に見えないんですけど大丈夫ですかね？

「そりゃもちろん交合ですよ」

「皇后？」
「そりゃお妃さまです」
「咬合？」
「歯並びですね。シャルロットさんの歯は綺麗に並んでますね……ってだから交合ですよ！　いわゆる、えっちです。生々しい表現ではセック、」
「しつこいわよ！　アリサも女の子のくせにそういう言葉連呼しない！」

いえ、だって言うたびに鈴ちゃんとシャルロットが顔を赤らめて行くのが可愛くて可愛くて……ちょっと待て私、何か引っかかりますよ？
皇后……じゃなくて。
交合……もシャルロットの歯並びが綺麗だって言っただけで、シャルロットって名前で呼びましたか私!?
いえ、そんなはずは……

「それで、アリサ。シャルロットさんって誰よ？」

ありますよねぇ……

「……デュノアさんの双子の妹です」
「へー」
「……顔がそっくりなのでつい間違えちゃうんですよねー」
「ふーん」
「……えーと、えーと。あっ、私とシャルロットさんはフランスでは模擬戦もする仲で、」
「そうなの？　“シャルロットさん”？」

だからそれはシャルロットじゃないですって！

ね、そうですよね!?　シャルル・デュノアですよね!?

「えっ!?　う、うん。不破さんとは一回だけフランスで模擬戦したよ?」

「ふーん」

正直者すぎるのもどうかと思います!

「あちゃー……まぁ、鈴ちゃんだっただけマシですか。シャルロットさんもそれでいいですか?」

「私は……不破さんがいいって言うなら」

「あぅ……」

……計画を考えた私が言うならってことなんでしょうけれど……シャルロットの従順な態度にグッときました。

もう、シャルロットの可愛さは既に凶器の域に入っています!

私くらいなら簡単に殺せるんじゃないでしょうか……少なくとも顔を赤らめて恥じ入っているシャルロットに死んでくださいと言われたら何も考えずに飛びおりそうです。

「でもデュノアって女だったのね……まぁ言われてみれば綺麗な顔してるし不思議じゃないか」

「鈴ちゃん。ここで残酷なお知らせですが、シャルロットさんはコルセット的なもので無理矢理胸を締め付けています。つまり……」

「……そうじゃないかと思ってたわよ。アリサ、私達は一生、友達でいようね?」

鈴ちゃんが一回り縮んだように見えます。背中も煤けて……

「あ、鈴ちゃん。私もギリギリBカップになりました。バストが1.

5センチ増えていましたから」
「……胸なんて肩こりの原因、胸なんて肩こりの原因、胸なんて肩こりの原因、胸なんて……」

最近下着がちょっときつくなったように感じてたんですよね。
太ったのかも!?　と思って採寸してみたら胸だけ成長していました。嬉しい誤算です。

「あ、そうだ」
「ん？　どうしたんですか」
「鳳（ファン）さんに知られちゃったから思い出したんだけど……というか僕が不破さんに会いに着たそもそもの理由だったんだけど、一夏にバレちゃった」
「あーそうですか……ええぇ!?　なんでですか!?」

シャルの男装用のコルセットはオーダメイドのもので確実にばれないはずなんですよ!?　それこそ裸でも見られない限りシャルロットが女の子だって分かるわけが……

「いや、その、お風呂上がりに……見られちゃって」

顔を真っ赤にして呟くシャルロット。
何を見られたかって、裸以外にはありえませんよね？

「……鈴ちゃん」
「……ん？　なぁに？」
「……私、やっぱりシャルロットさんは可愛いと思うんですよ」
「……私もそれには異存ないわよ」

無表情に、平坦な声で互いに意思疎通を取る。

この場、この瞬間において私と鈴ちゃんの利害は一致したと、そう確信しました。

「……織斑君、可愛い女の子の裸を見たらしいですよ？」
「……ね。私には何の興味もないみたいな態度取ってたくせに」
「……お仕置きが、」
「……必要よね？」

「「ふふふふふふふふふ」」

織斑一夏。
くれぐれも無事に明日を日を見れるとは思わないことですね。
窃盗の罪には指の切断を、詐欺には舌を熱した石をのせるのはどこの法律でしたっけ？
シャルの裸をみたなら目蓋を縫い合わせるのが妥当でしょうか。

「あ、あの二人とも落ち着いて？　僕も悪かったんだし」
「いいえ。女の子の裸はみた方が悪いに決まっています」
「私もそう思うわ……というか今頃一夏がデュノアの裸を思い出してると思うと、」
「おかずになんてしていたらどうしてやりましょう……」
「おかず？」

シャルロットは純粋ですねー。それでこそ私色に染めやすいというものです。
とりあえず織斑君は今すぐ、[redacted]過激すぎるため自粛[redacted]てやりましょう。

「アリサ、あんたは本当に容赦しなさそうだからきちゃダメよ。デュノアと二人で待ってなさい」
「お断りします。鈴ちゃんこそ織斑君がブサメンの仲間入り……と

いうか人外の顔立ちになるのを見るのは避けた方がいいんじゃないですか？」

「ふ、二人とも何するつもりなの……？　というか特に不破さんは頭を冷やした方がいいと思うよ？」

なにを言うんですか。

私の頭はいまとてもクールですよ？

どうすれば織斑君が日の当たるところを歩きたくなくなるようになるかをシミュレーションしているところです。

「それは腸煮えくり返るっていう状態じゃないのかな？」

「だから頭“は”クールです」

「へ、屁理屈だよぉ……でも、二人が行かなくても一夏が来るかも」

「懺悔しにですか」

私は神様ではないので懺悔程度で赦そうなんて思いませんけどね。

罪には罰を。

そういうルールが人間社会には存在するんです。そして、人を裁くのは法でもって神でもない……

織斑君は私（ひと）が裁きましょう。

「彼のお腹に赫い花を咲かせましょうか……クス」

「ちょ、アリサ！？　お、落ち着いて！　殺しは流石に拙いわよ！」

「こ、殺しじゃなくても拙いと思うよ……やっぱり僕の不注意だから、」

「「当事者は黙ってて（ください）！」」

「えー！？　当事者の言論を封じての裁判は駄目なんじゃないかな！？」

良いです……認めましょう。

これはシャルロットの弔い合戦なんかじゃないです。

「僕、死んでないからそうだね」

「そこ、口閉じてください」

さもなきゃ実力行使で塞ぎますよ？　……わ、わわ、私の唇で！

……まぁ、とにかく！

「私が気に入らないから織斑君には反省してもらいます。さて……」

ガチャ

扉を開いた先にいたのは……

「ハレンチ行為に加えて覗きと盗み聞きも罪状に追加しましたよ？　織斑君」

ん？

全部ハレンチ行為でしたね。

◇

「にしても……アリサが怒ってるところは初めて見るわ。セシリア呼んだ方がいいのかしら」

私じゃどうやって宥めていいのかは分からないわ。

ここは保護者（セシリア）に任せた方がいいような気もするけど……ダメね。

ああ見えて過保護だから一夏が一方的に攻められておしまいになっちゃうわ。

私の目的はただ一つ。

アリサにギリギリまで貶められた一夏をさっち掬い上げる……そうすればきっと一夏も私のことを見直してくれる。
しかし、ギャアギャアギャアギャアとよく騒ぐわねぇ。

「女の子の裸見といて謝罪が一言だけですか！？　あり得ません。しかも口論してシャルロットを追い出すとか何様なんですかあなた！」
「何様は不破さんの方だろ！　無理矢理女の子に男装させてたんだろ！？　デュノア社のためとか言ってたみたいだけど自分が男装すればよかったじゃないか！」

うわぁ、シャルロットさんって言ってたのがシャルロットになってるわ。
というかアリサもなんでこんなに怒ってるんだろう？　フランスでは友達もいなかったみたいなこと言ってたのに……
というか二人とも相当頭に来てんのね。お互いに否定し合うだけで歩み寄る気配が全くないわ……ほっとこ。

「ねぇ、デュノア」
「二人とも落ち着いてよぉ……うん？　呼んだ？　というかシャルロットって呼んでくれないかな。あんまりこの苗字は好きじゃないから」
「じゃ、私も鈴でいいわよ。まぁ、それで……フランスではアリサとどんな関係だったの？」
「ん？　うーん……前も言ったけど不破さんのことは嫌いだったよ」

まぁ、そうよねぇ。
でも、今の様子を見た限りじゃ一方的に相手が悪いって決めつけるより、相手にも事情があるって考えそうな子だと思うんだけどなぁ。

しかも、皆のためなら仕方ないって我慢しそう……その辺りはアリサと似てるわね。

「んー。感情を抜きにしたら追っかける人と追いかけられる人って感じかな……私が追っかけてた方」

「どういうこと？」

「不破さんのことを知ったのは十三歳の時……僕の人生の中で一番辛かった時なんだ。その時に不破さんとＩＳの模擬戦をして……って言ってもお互いの素性は隠してたんだけどさ。それで私はコテンパンに負けて、」

うわー。

アリサってそんな時からもう強かったんだ……アリサがＩＳに乗り始めたのも十三歳って言ってたからそんなに稼働時間に差はないはずなんだけど。

あれ、アリサって十三歳からのたった二年間で千時間以上も稼働させてたの？　ＩＳ学園とは違って毎日乗れるわけでもないだろうから一日に何時間も乗ってたのね。

よくやるわ……

「ん、リン、聞いてる？」

「ん？　聞いてる聞いてる」

「負けちゃって、それでＩＳに乗るための覚悟を教えてもらった……トラウマとして刻みつけられたって言ってもいいかもしれないけど。でも、ただ言われるがままにＩＳに乗っていただけだった僕には強烈で……不破さんに憧れた」

「あれ？　でも素性は知らなかったんでしょ？」

さっき隠してたって言ってたし……

「うん。でもあんな綺麗な純白のＩＳ、専用機以外には有り得なかったからすぐに分かったよ」
「純白……？　あぁ、アリサってカラーリングも変えてたのね。ということは、憧れたから追っかけてた？」
「うん、でもそれからＩＳ学園に来るまでは一回も話せてなかったんだ……お茶とか模擬戦とかいろんなアプローチをしてたけど……ずっと避けられてた」
「アリサが？　んー、セシリアの話では十二歳以降は人を怖がるなんてことも無かったはずなんだけど……」
「そうじゃなくて、何か隠し事をしてるみたいに感じたかな」

アリサが隠し事ねぇ……あの子、そんなに器用な方でもないんだけど。

なにより最近気づいたけど、アリサは自分から人に関わっていくのが苦手なだけで、近付いてくる人には割とオープンなのよね。

だから話しかけられれば応えるし、勉強会なんかに誘われればそれなりに教えに行ってるし……教える側の立場として誘われてるのがなんともアリサらしいけどね。

「それで、調べてるうちにアリサとデュノアの社長……僕の父親が親密だって言うことを知って……その時、不破さんが憎くなった。すごく綺麗な人だと思ってたから……あんな人と関わってたって知ってショックだった」
「綺麗？　可愛いじゃなくて？」

うん。

他に突っ込むところはあると思うけど、私としてはこれが一番気になる。

あの私よりちっちゃいアリサが可愛いじゃなくて綺麗なんて言われるなんて。

「不破さん、十二歳の健康診断の時から身長は二センチしか伸びてないんだよ。だから昔は私よりも背が高くて、年上のお姉さんだと思ってたんだ」
「あーなるほど」

アリサが大きかったんじゃなくてシャルロットが小さかったってことね。納得。

父親どうこうは私が聞いていい話でもないし……まぁ大企業の社長ともなると家庭を顧みることが出来ないなんて言うし、アリサが仲良くしてるなら悪人でもないからシャルロットの誤解なんだろうけど。

「まぁ、そんな感じで不破さんと僕は一回しか会ったこと無くて、それなのに僕は不破さんを恨むようになっちゃったんだね」
「まぁ、しょうがないと思うけど……」

ん？

『フランスにいる』、『結構な立場』の『アリサが距離を置いていた』『美少女』……？

「まさかね」
「ん？　……どうしたの？」
「いや……あの二人いつまで喧嘩してるのかなぁって」

確かに火種自体が結構大きいものだったけど……いくらなんでも興奮しすぎよ。

28. Le pass? de la fille（後書き）

そして次回はアリサＶｓ一夏
果たして口げんかではどちらが強いのか!?

まだまだ兵装案は募集中です
メッセージ、感想、もしくは活動報告どこでもいいですよー

追記：兵装案オンリーの場合はなるべくメッセージでお願いします。
　相互にやり取りできる状況の方が疑問点が出てきた時に解決できるので……

※兵装案募集要項

兵装案と言われてもイメージしにくい、との声がありましたので纏めてみました。

まず、私が必要としている兵装の種類は下記の三つとなります。

・シュヴァルツェア・レーゲンのＡＩＣやブルー・ティアーズのＢＴ兵器のような第三世代兵器
・ラファール（ｒｙ？のパイルバンカーのようなロマン装備……もとい第二世代型ＩＳの代名詞となるような装備
・第二世代、第三世代どちらにも使えるちょっとした装備
・使い難い！　実用性薄い！　でも素敵！　な装備（
・その他、ＩＳに関係する小型機械、戦術ｅｔｃ

版権モノからの流用の場合、元ネタ名を明記して頂けるとありがたいです。
また、オリジナルのものの場合、設定などにこだわりがあればその旨も明記して下さい。
そうでない場合は私が使いやすいように特徴を変えてしまうので（

以下は私が兵装を考案する上でのＩＳ兵装に関する考察なので兵装を考えたい場合の一助にどうぞ

――第二世代型兵器と第三世代型兵器の違い――

これは分かりやすく言ってしまえば現代科学で達成可能かどうか、で考えています。
セシリアのブルー・ティアーズは実現されているようにも思えま

すが、ビーム射出後の偏向などはききませんので。
第参世代型のイメージ・インターフェイスってのもなんだよ！
って話なんですけど
私の解釈では操縦者の脳からの信号（イメージ）をそのまま兵器の動きと連動させるためのインターフェイスと考えています。
とは言えＩＳ自体が操縦者の脳からの信号で動いているんですから分かりにくいので、アリサのレーザー兵器妖精（フェアリー・ダンス）の加護とブルー・ティアーズのＢＴ兵器を例に出すと、

妖精（フェアリー・ダンス）の加護
アリサの意思によって砲門が移動→発射→レーザーはまっすぐ飛ぶ

ブルー・ティアーズ
セシリアの意思によってビットが移動→発射→ビーム自体もセシリアの意思を反映して曲がる

分かりにくいような気もしますがこんな感じでしょうかね。
セシリアのＢＴ兵器もセシリアの精神状態によって曲がるかどうかって感じみたいでしたし。

要約すると
第三世代兵器はサイコミュ兵器
第二世代兵器は一般火器という感じですね（

ところで山嵐はファンネルミサイルと同じものな気がするのは私だけですか？（

――ＩＳが出来ること――

ＰＩＣによる浮遊＝恐らく空間圧作用によるＩＳと地面の反発に

よるもの。ＡＩＣと龍砲はそれぞれ対象を別に設定できるようにしたものだと考えられる。

外部エネルギーの取り込み（＝瞬時加速）

ワンオフ・アビリティ＝いわずもがな

絶対防御＝シールドバリアーを貫く攻撃から操縦者の生身を守る手段。この状態で激しい攻撃を受けると昏睡状態に陥る。また手動によるオンオフ設定が可能な模様

拡張領域へのインストール後、装備の量子化＝ラファール（ｒｙ？が従来のものより拡張領域を追加しているため、メモリに該当する部分が不明。恐らくはＩＳコアがメインメモリで外付けＨＤのようなものも存在する

コア・ネットワーク＝ＩＳコアによるデータ通信ネットワーク。日本～ドイツ間での通信も可能。パッケージのインストールもこれによるものと思われる

ＩＳコア＝ドラえもん

――作者の採用基準――

・原作に登場している兵器とかぶらないこと

・被ったとして原作兵器よりもロマンがある事、もしくは下位互換性能であること

以上の二点くらいでしょうか（

あ、あと採用されなかったとしても、派生して生まれたアイディアを使った場合はご報告させて頂きます。

29. Si je peux ?tre permis, je veux

「許されるならば『クソ喰らえ！』と叫びたい」

そんなアリサの心境

え？　下品？

お気に入り４００件超えました。

最近は面白い、などという声も聞けるようになってきたので嬉しいです！

まだまだ更新しますのでなにとぞ末長くお付き合いをお願い申し上げます……え、堅いですか？

じゃあ……

これからもヨロシクッ（キャルン☆

反省はしている、でも後悔はｒｙ

29. Si je peux ?tre permis, je veux

「女の子の裸見といて謝罪が一言だけですか!?　あり得ません。しかも口論してシャルロットを追い出すとか何様なんですかあなた!」

この人、女の子の裸を汚いものだとか思ってるんじゃないでしょうか?

信じられません。女の子の裸は宝石よりも高いものなんですよ!

それをそんな簡単な謝罪で済ますなんて……最低でも土下座して靴舐めろくらいは要求されても仕方のないことだと思います。

「何様は不破さんの方だろ!　無理矢理女の子に男装させてたんだろ!?　デュノア社のためとか言ってたみたいだけど自分が男装すればよかったじゃないか!」

また、この男は何も知らない癖にしゃしゃり出てきて!

「私が男装しても良かったんでしたら頑張りましたよ!　それじゃ意味無かったから、シャルロット以外が男装するんじゃ意味無かったから彼女に男装してもらってたんじゃないですか!　大体なんなんですか!　じゃあ、何百人と働いている人たちの生活よりもシャルロット一人を尊重しろって言うんですか!?」

実際はシャルロット一人が尊重された形にはなりましたが社員全員が納得した上です。

それでも表向きには会社のためとシャルロットを切り捨てたような形にするしかなかったんです!

「そうじゃなくてシャルル一人が苦労するような計画を立てなくてもよかったじゃないか！　もっとほかの方法を考えなかったのか？　あいつ一人に苦労させればいいやって短絡的に決めたんじゃないのか？　自分には累が及ばないから！」

「ふざけないでください！　私はずっと！　シャルロットにあったあの日からこの学園に来るまでずーっと！　シャルロットが幸せを掴めるように思考錯誤を続けていたんです！　それでも……それでも何も変えられなかったから！　だから最終手段として、男装をしてもらったんです……」

シャルロットに恨まれても、他の誰かに責められても……それが罰なら全部を甘受しようって、いずれデュノア社に降りかかる火の粉も私が責任をもって振り払おうって決めたんです。

そうしないと、シャルロットとデュノア社の両方を守れなかったから。

「だから、どうしてシャルルじゃないといけなかった！　なんで他の奴を男装させて俺に近づけさせるんじゃダメだった！」

「なんでって……！」

あ……

なんだ、そういうことですか。

気付いた瞬間、沸騰していた血液が一転して凍りついてしまったかのように心の温度が下がってしまいました。

織斑君……私は、本当にあなたのことを見損ないましたよ。

こんな人に怒っていた私がバカみたいです。

「帰ってください。これ以上話すことはありません。あなたの顔も今は見たくないです。シャルロットは女の子なのでとりあえず今日のところは私達の部屋に泊まってもらいます。男装は続けてもらい

ますけどね」
「なっ、いきなりなんだよ！　まだ話は終わってないだろ！」
「終わりましたよ……少なくともあなたに責められる筋合いはなかったようです」
「なんだと……！」
「殴りたいならどうぞ。それ以上のことだっていいですよ？」

一歩、踏み込んできた織斑君に言葉を叩きつける。
……それこそ女にとって最大の屈辱なんてものを私に味あわせたって構いません。
でも、織斑君がこれ以上私の行為を弾劾することだけは絶対に認めませんよ。絶対にね。

「……だって、あなたにはそんな資格もない」

なんで他の奴が男装するんじゃダメだった？
別に私が男装すればよかったと言うなら構いません。
ですが、織斑君はシャルロット以外の誰かが男装すればよかったなんて言いました。
それでは偶然シャルロットが男装させられていたから、シャルロットに同情しているだけじゃないですか……シャルロット以外が身代わりになればいいと思っているなら、私のことをどうこう言えませんよね？

「結局、織斑君は誰かのために怒っている自分に酔いたいだけなんですよね？　だからシャルロット以外なら誰が男装してもいいなんてことが言えるんです」
「っなんだと！？」
「だってそうでしょう？　さっきから織斑君は私のことを責めるだけ……これから、どういう風にしてシャルロットの現状を改善して

いくかなんてことには興味もなさそうですし」
「そんなことはない！　俺だって何かできることがあるなら、」
できることがあるならしたい、と言いましたね？
「織斑君以外、誰にも出来ないことがあります。しかもそれをすることでシャルロットとデュノア社の両方が助けられる最高のハッピーエンドを迎えることもできます……聞きますか？」
「もち、」
「あぁ、あとで騒がれても嫌なので先に言っておきますが、これを聞いてできないといったなら、それ以降にシャルロットのことに対して口出しすることは許しません。場合によっては私の周囲からあなたを排除します」
排除なんてできないと……そんな甘いこと考えないでくださいね？
唯一の男性操縦者だからって安全が保障されているなんてことはないんです。それぞれが欲しがっているのは織斑君が乗ったＩＳのデータであって織斑君ではないんですから。
「それこそ薬漬けにして身柄を回していってもいいんです。表向きには公表できませんがね……あぁ、関係ない話ですけど技術の進歩のために使われた人命がどれくらいになるか、考えたことありますか？」
織斑千冬、篠ノ乃束、彼女達は黙っていないでしょうが知りません。彼女達にとっての織斑君が私にとってのシャルロットなんですから。鈴ちゃん達のことだってもちろん大事ですけど……やっぱりシャルロットが一番ですね。
恨むなら、男性なのにＩＳに乗れるようにした篠ノ乃束を恨むんですね。

本当に偶然だったのなら神様の暇つぶしに巻き込まれたと嘆いてもいいんじゃないですかね。

「それで、手段を聞きますか？　とは言ってももう聞くしかないですよねぇ？」

だって、聞かなかったとしてもシャルロットのために行動しようと思ってなんていなかったことになるんですから。

それなら私の話を聞いた方がいいですしね。

「……」

「居座り続けるということは聞くという意思表示でいいんですね？」

今更待ったはなしですからね？

そんな怖い顔しなくても、織斑君にならできることですから安心して下さい。

「織斑君がシャルロットを助けるためにできることはたった一つ、白式をデュノア社の手で調べさせることだけです」

「「「な」」」

織斑君だけじゃなくて鈴ちゃんとシャルロットまで驚いていますね。

第三世代型が作れないデュノア社が求めているのは男性用ＩＳを開発する技術です。白式なら第四世代型のデータも手に入りますし一石二鳥ですし。

「ほら、シャルロットが男装しているのは織斑君に近付いてデータを掠め取るためという名目だったんですから。どうします？　織斑君ならシャルロットを助けられますよ？」

情報をフランスにだけ与えた織斑君がその後どうなるかは知りませんけど、ね……私には関係ありませんし。

「すまん、シャルル……それはできない」

「それでいいと思いますよ？　別にシャルロットに関わるなと言っているわけじゃないんですし」

皆さん深く考え過ぎです。

私はただ織斑君のプライドと名誉を傷つけただけなんですから。

「じゃ、今後はシャルロットの男装に関して何も言わないでくださいね？　あと、他人のために怒っているなんて誤魔化しているナルシズムは早いところ捨てた方がいいですよ？　怒るなら本当に人のために怒って下さい」

「悪いようにはならないんだよな？」

「三歩も歩いてないのに忘れるなんて……鳥頭ですか？」

男装に関してはなにも言うなと言ったはずですよ。

今回は見逃しますけどね。

「心配しなくてもシャルロットの居場所は私が作っています。あとは状況が整えば……あぁ、最後に男装についていいこと教えてあげます」

「……？」

「もしシャルロットが男装していなかったら、シャルロットは大怪我をしていましたよ？　これも、シャルロットを守るための手段なんです」

本妻さんも今はもう口喧しい姑レベルの嫌がらせですが昔はシャ

ルロットが死んでもおかしくないようなこともしていたらしいですからね。
アリサ・フワとかいう殺し屋を雇おうとしたこともあるとか何とか……もちろん断りましたが。暗殺稼業の娘でも私は人を殺したくないですし。
……その私がシャルロットを守っているんですから皮肉なものですよね。

「まぁ、そういうわけで織斑君の怒りも見当違いだったんですよ。シャルロット以外から弾劾される謂れはありません」
「……悪かった」

一言つぶやいて織斑君は部屋から退きました。いつもと比べて背中が小さいです。
ここまで打ちのめす必要もなかったかもしれませんが……シャルロットを自分に浸るために利用してほしくなかったので。

◇

不破さんが、一夏にすごく怒ってた。
不破さんがしてきたことが否定されたから怒ったように感じたけど……アリーナで聞いた話から考えると僕のために怒ってくれてたのかな。
一夏も僕のことを想って怒ってくれてたけど根っこには不破さんが言ったみたいに違うものがあったのかも……別にそれが悪いことだとは思わないけどね。
むしろ、純粋に僕を守ってくれようとしてる不破さんの方が僕にはわからない。
自分に降りかかる弊害を全部我慢して、僕の傘になろうとしてくれてるみたい。

やっぱり、初めて見た時と同じで僕達より一回り大人な感じがする子だと思う。芯が通ってるっていうのかな。

アリーナで、僕を守るって言ってくれた時はドキッとしちゃった……不破さんも女の子なのに。んー、でもあの時のお姉さんにもドキドキさせられたから……僕ってそっちの気があるのかもしれない。

不破さんは、彼女が守ろうとしている僕に恨まれてもかまわないと言ってた。僕の幸せだけのためにずっと頑張ってたとも。

デュノア社を経営危機から救うのだって僕の憂いを断つため。

でも……

たった一人で、何をするつもりなの？

彼女の背中にどれだけのものが乗っているのか想像がつかない……僕自身彼女に背負われているうちの1人なんだから当たり前だけどね。

でも、少なくとも不破さん自身は自分がデュノア社の全員と僕の未来を背負っていると思ってることは判る。

そんなこと頼んでないのに、なんて言えない。

だって、あの人の奥さんからの嫌がらせが減ったのは不破さんのお陰だったってことがさっきの口論で分かっちゃったから……今はもう嫌がらせ自体がほとんど無い。

僕を守ることを伝えてくれなかったことはやっぱり許せないけど……でも、このちっちゃい身体を支えてあげられたらいいなぁって思うんだよね。

「うぅっ……鈴ちゃん」

「はぁ、薬はいつものとこ。ぬるま湯は私が用意しておくから布団にくるまってなさい」

「不破さん？　どうしたの？」

「あぁ、いえ、なんでもないです……」

顔真っ青なのに何でもないなんてことあるわけないよ！
どうしたんだろう？　薬って言ってたし、なにか重い病気でも患ってるのかな……？　それなら僕のことなんか考えないで静かに暮していればいいのに！

「大丈夫よ、いつものことだから」
「いつもこんなことになるならっ、」
「そうじゃなくて。その子、怒ったり人に意地悪したりするとお腹壊しちゃうのよ。なんだかんだ言ってお人好しだからすごいストレス感じちゃうんでしょ」
「鈴ちゃん、別に私はお人よしでは、」
「はいはい、布団に入る」

ぬるま湯を渡して不破さんが薬を飲んだのを確認したリンが不破さんの背中を押してベッドまで連れて行く。
なんだか、ルームメイトというより面倒見の良いお姉さん……いや、お母さんみたいかも。この二人の関係も友達とか親友とかそういう感じじゃない気がする。

「鈴ちゃん、ごめんなさい……織斑君にひどいことしちゃいました」
「あー別に構いやしないわよ。アイツだって反省するだろうし、だいたい女の子だって分かった途端にポイント稼ごうとするなんてせこすぎるのよ」
「いや、一夏はそんな、」

僕が女の子だったから怒ってくれたんじゃないと思う。
やっぱり一夏も根はやさしい人だと思うし。

「はぁ……あのねぇ。そんなこと幼馴染の私が一番知ってるわよ。

ま、今頃へコんでるだろうけど反省はちゃんとできるやつだからさ。アリサとギクシャクしたりはしないと思うから安心していいわよ」
「う、うん……でも落ち込んでるなら励ましてあげた方がいいんじゃないかな？」
「アイツはほっとけばいいから今はアリサよ。この子、体調悪い時はナイーブだから近くに人がいてあげないとね」

なんだか、鈴はいろんな人のこと理解してすごいなぁ。
元から面倒見がいい方なんだろうけど……僕もそういう風に他人に気を配れるようになりたいな。きっと、僕が周囲に目を向けなかったからあの人が僕をどう思ってるかなんてことも考えようともしないで今に繋がった。
僕がもう少し素直になっていればシャルロット・デュノアとしてＩＳ学園に転入できたのかもしれない。

……うん、今から少しずつ周りに気を配れるようになろう。
だからまずは、

「リン、僕が不破さんを見ておくからリンは一夏のところに行ってきなよ。本当は心配なんでしょ？」
「う……でも、アリサも心配だし」
「僕じゃ信用ないかな？　そうだよね……今まで僕は不破さんのこと誤解してたんだし、しょうがないよね……」

なんて言いながらわざとらしく傷ついたふり。

「あぁもう！　そういうのずるいわ！　でも、一夏のところに行ってくるから、アリサはよろしく。その子、甘えん坊になるからちゃんと話聞いてあげてね？　あとできれば手を握ってあげて、不安そうにしてたら添い寝してあげて。何なら抱きしめてもいいから。抱

き心地は保証するわ。じゃあ行ってくる！」
「え、えぇ！？」

早……そんなに心配だったんだ。
まぁ、好きな相手があんなふうに帰っちゃったら気になるよね。
不破さんの手前どうすることもできなかったんだろうし。

「そういうわけで不破さん、勝手に私がお世話することになっちゃったけど良いかな？」
「……アリサ」
「うん？」
「アリサって呼んでください」

顔が、紅い？　……照れてるのかな。
今まで怒った顔とか真剣な顔とかしか見たことが無かったからビックリしちゃった。
なんというか、すごく可愛い。

「うん、アリサ。これでいい？」
「は、はぃ……ぇ、えっと！　手を、握ってくれませんか？」

手！？
あ、さっきリンが言ってたっけ。
……でも、なんだかドキドキするなぁ。今まで格好良いと思ってた人が無防備な姿を見せてくるんだから仕方ないのかもしれないけど。

「じゃぁ、握るよ？」
「ひゃ、ひゃいっ」

ドキドキドキドキドキ
ゆっくり、不破さんの手に僕の手を近づけていって……

ガチャ、バタン！

「「ひゃぁっ」」
「……あぁ、えっとゴメン？」

いきなり開いた扉に驚いて、誰が入ってきたのかを見ると、僕達と同じくらい顔が紅いリン。
まだ戻ってくるほど時間は経ってないように思えるんだけど……

「どうしたの？」
「いやっ、えっと、その一応……一応ね、下着を変えておこうかなって思って……一応なんだからね！」

お、男の子の部屋に行くからってそんな気にしなくてもいいと思うんだけど……むしろしちゃう気なのかな？　今夜勝負を決めるわ！　みたいな感じで。

「鈴ちゃんの勝負下着は下から二段目です……紅いのはちょっと過激すぎる気がするので黒にしましょう」
「わ、わわ、分かったわ」

アリサって、意外と大人？

「じゃあ、行ってくる！」

この後、鈴ちゃんがどうったのかは知らないけど僕たちはとりあえず同衾したよ？

アリサが潤んだ目で手を離さなかったからしょうがなくって。も、もちろんそれ以上のことは……うん、ちょっと鈴ちゃんが言ってたｆ抱き心地が気になって、好奇心で寝てるアリサを抱きしめてみたりはしたけどそれだけ！

……僕達が起きた時も鈴ちゃんはまだ戻ってきてなかったんじゃないかなぁ。

29. Si je peux ?tre permis, je veux

アリサが一夏を嫌いになった、というわけではありません。
シャルロットに関連する全てのことに対して本気で対処するだけです。

ところで、視点変更の時「サイド誰々」と書いた方がわかりやすいんですかね？
それとなく誰からの視点か分かる情報を地の文に入れているのですが……
なんとなく、あれを使うと負けた気になりますし（
もちろん、使っている方がどうのこうのという話ではないです。使っていても素晴らしい作品は素晴らしい作品ですし。
ライトノベルなんかでも使われることもあるみたいですし。

兵装案オンリーの場合はメッセージにてお願いします

※投稿兵装案まとめ（前書き）

数が増えてきたので一旦締め切りとします、

多数の兵装案をいただいたのでパッと見て楽しそうだ、登場させられそうだと感じたものを纏めてみました。

まだ、確実に使えると決まったわけではないので悪しからず

※投稿兵装案まとめ

ＩＳ編

・鎖鉄球　フレイル　（めだか１９４様

第二世代用兵器

超重量による破砕兵器。

威力は申し分ないものの扱いにくさからマイナー兵器となる。

構造は丈夫な鎖と鉄球というシンプルなもの。

シンプルさ故に量子化時に必要な容量は小さく、また一撃の威力が伝わりやすい。

ただし使い勝手が悪いため使用者には訓練が求められる。

灰色の鱗殻（グレースケール）や討鬼（ドラクル）の鋼杭（ペイン）が楯を貫く兵器だとすれば

フレイルは楯ごと押し潰す兵器。

メモ　鎖

アリサ「な、なんというロマン溢れる装備なんですか……！　私に積むのは容量的に難しいのでシャルロットに装備してもらいましょう……そして、使用許可をもらって！　ふふふ」

・投擲用ナイフ　（めだか１９４様

アリサ用

刃先に重心を置き投げることを目的に鋳造されたために切れ味が悪く武器自体の威力はほぼ皆無。

しかし、数には優れる。

アリサによる雹ならば威力は期待できるが基本的に牽制や撹乱のための装備。

特殊な磁場などを発生させる機能を追加することでフレアなどのソフトキルにもいかせるか？

メモ　攪乱

アリサ「牽制・攪乱用には塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）がありますが……あれは連射が効かないので、ナイフもありですね」

・ソードビット　（竜華零様

劇場版ガンダムＯＯより（元ネタを知らないので改変があるかも？

第三世代型用、もしくはアリサ用

非固定浮遊部位の技術を流用したビットからプラズマ刃を出す第三世代兵器。

エネルギーをビームとして飛ばしてしまうブルー・ティアーズと異なり、刃を形成しているエネルギーの一部を循環させているため燃費がよく、小型化と多数装備を可能とした。

一つのＩＳへの搭載数は１０－２０機

視線と無意識下の思考による制御方式を採用しているため訓練することで同時稼働数を増やすことができる。

ＩＳには珍しい一対多戦闘を目的とする兵器。

分割思考が出来るアリサに使わせるとチート化確実

メモ　囮

アリサ「いったい、どこの国がこんな面白そうな装備を……でもやっぱりこれと同時に他の武器は使えないんでしょうね。私以外には」

・ヴァルキリースカート　（匿名希望様

第二世代用とのことでしたがここではアリサ用としています。

元ネタは武装錬金の妖怪ぶちまけ女（

三つの関節を持った金属製六肢（八肢？）の先に刃が付いたもの。

イメージはカマキリの鎌

装備箇所は太股。

刃渡りが短いため攻撃力は不十分だが、切れ味の良さと瞬間精密攻撃を可能とすることでアドバンテージを得る。
実装はヴェンギル（翼狼狩り）ガルムハントと同時になる予定。

アリサ「太股ですか……まぁ、スカートアーマーの前に冒険しすぎなスリットが入っていますし今更でしょうね……えっちぃけどまぁいいです」

・輻射波動機構　（ｋａｎａｔａ様
コードギアスより
蔑称、電子レンジ
掌部に搭載したマイクロ波誘導加熱ハイブリッドシステムにより触れたものを急速に加熱、膨張させることで装甲を破壊、もしくは歪ませる。
内部の水分子を強制的に動かして加熱しているので　人体に対して使うと体内水分が蒸発・膨張し破裂する。
とても描写できなさそうな武器になりました。
ミステリアス・レイディに対しては有効な兵器にはなりそう・・・？

アリサ「相手に触れなければいけないので操縦者の腕が試される兵器ですねぇ」

・ルース・テンペスタ　（煌　焔様のハイペリオン・ブレイカーを流用
イタリアの第二世代型ＩＳ
１Ｋｍ超の超長距離狙撃用から５０ｃｍという超近距離用まで対応できるようにレーザー兵器を大量に装備したＩＳ。
装備数を限界まで増やすために脚部、腕部パーツを削っている。
その代わり装甲の強度はＩＳ中でも随一。

機動は鈍重であり、移動は主に専用車両に乗せての移動ということになる。
ＰＩＣによる浮遊も可能だが照準を合わせるために回転する程度の使い道しかない。
外見はハリネズミのように砲身が飛び出した半球。

アリサ「イタリアご自慢の第二世代ＩＳですね。平面３６０度と上空への攻撃を可能とした固定型（砲台）ＩＳです。フランスではその丸い見た目からクロポート（ダンゴムシ）と呼んでいます」

・仮想電磁砲身によるビーム砲　（田中伸宙様提案のものを下位修正
電磁波により電離された空気を力場にした仮想砲身によるビーム
厳密にいえば作りだされるのは砲身ではなくビームの通り道。イメージとしてはホース（通り道）を敵機に押し当て水（レーザー）をぶつける感じ。
電磁波を利用しているため弾体さえあれば簡易的なレールガンとして使うこともできる。
上記の弾体を拳や脚に置き換えることで拳打、蹴りのインパクトを強めることもできるが、その場合生身への反動が強いため、使用時操縦者へのダメージが生まれる。
電磁波を利用した兵器のため、周囲に対して疑似的なジャミングも可能。
兵装の短所はエネルギー効率の悪さと必要計算量の多さ。
理論上では可能とされる使用法のいくつかは人間の限界以上の計算量を要求しているため実現されていない。

アリサ「龍砲と違い砲角度などの制約はあるものの威力は私の白狼（ウルフズロアー）の咆号と並びますね」

自動迎撃装備　（水上　流霞様
ハイパーリンクと同期させることにより、敵機を自動的に攻撃し続ける装備。
弾切れはあるものの絶え間ない攻撃を可能とするため、隙の多い兵器の使用時に時間を稼ぐことができる。

ラップトップガン　（うのん様
元ネタはパーフェクトダーク
上記の自動迎撃装備と同様にハイパーリンクと同期させることにより、敵機を自動的に攻撃し続ける兵器。
ＩＳに装備するのではなく、地面にランダムにばらまくため多方向からの撹乱射撃が可能。
トラップだがやはり弾切れがあるため使い捨て。

アリサ「二つともハイパーリンクをうまく活用したと言える兵器です。ビームを打ち出すことが出来れば威力も期待できるんですけどねぇ……」

ＩＳ補助機械編

・小型整備ロボ　（竜華零様
主に戦地で使われる世代を選ばない３０センチ大のドラム型外付装備
名前の通りエネルギー切れ、装甲の過剰破壊などの要因により行動不可に陥ったＩＳを整備する。
修理レベルは戦場から撤退できる程度。戦闘続行は難しい。
稼働エネルギーはシールドエネルギーと同様のもののため外付けエネルギーパックとして使うことも可能だが、その場合は整備能力がなくなる。
シールドエネルギーは現状ＩＳコア以外での生成方法が無いため

充電式。

アリサ「どこぞの妹メイドのように上にのって移動とかは……できなさそうですね」

中国製第二世代ＩＳ用汎用機材『軍用ショベルＷＪＱ－３０８（Ｉ）』（猫山きゅっぱち様

・折りたたみ式だからコンパクト！
・スコップとして地面を掘ったり突いたり出来るよ！
・クワのようにして地面を耕すことも出来るよ！
・ノコギリにもなるよ！
・鉈や金槌、釘抜きにもなるんだ！
・包丁の代わりにもなるよ！刀削麺だって作れるらしいぞ！
・ちょうつがいのところがワイヤーカッターになるよ！鉄条網だって一発さ！
・アンカーとして高所にロープを張ることもできる！
・さらにいざというときは、盾にもできる！
・柄のところに定規がついているから長さを測ることもできるのだ！
・缶切りや栓抜き機能まであるんだ！これはすごい！
・銃器と違って弾切れしない。いつの時代でもショベルは歩兵の友さ！
・もちろん伝統的格闘武器としても使えます！軍隊では常識だよね！
・色は全部で１２色！女の子向けの塗装も追加されたよ！
・ＩＳ用装備なのに一般販売されています！だってショベルだから！

と、感想一覧から完全にコピペ

アリサ「鈴ちゃん、持ってますか？」

鈴「持ってるも何も、毎日学校にまで持っていってるわよ？」

鈴「冗談よ？」

※投稿兵装案まとめ（後書き）

明日はお休み、かも？

30. ? propos, est-ce qu'il pourrait

「ところで彼はトイレに行けたのでしょうか?」

30. ? propos, est-ce qu'il pourrait

「ねえ、あの噂、マジなの？」
「マジマジ！　大マジだって！」

普段とは少し違う朝の教室は浮ついた空気が充満していました。
廊下まで聞こえてくるその話は桃色で甘ったるい匂いがしていて、まさしく色恋沙汰の話だとわかります。
まぁ、私にはそんなこと関係ないんですけどね。今はこの瞬間が長く続けばいいと、それだけを考えています。
だって、シャルと一緒に歩けるなんて想像してませんでしたから。
結局土曜日曜と連続でシャルは私たちの部屋に泊まり、鈴ちゃんは寝るとき以外は織斑君の部屋に通い妻状態です。今朝も起きてすぐに織斑君の部屋まで行きました。
ある種のトレードですね。

「なんか、噂が広まっているようですが……なんなんでしょうね？」
「さあ？」

二人して首を傾げます。
ちょっと聞いてみましょうか。

「おはようございます」
「きゃっ！　……てだいひょーか。びっくりしたぁ。あ、デュノア君もおはよー」
「おはよう。それで、なんの話をしてたの？」

昨日、わざわざシャルと歩き回ったおかげか私とシャルに関しての噂はほとんど話されなくなりました。

仲がいいと思わせたわけです……実際にシャルが私をどう思っているかは分かりませんけどね。
織斑君とは会えなかったのでちょっと気まずいです。
シャルも気にしているので早いところ仲直り……まぁ、私は別に織斑君に対して怒っていたりするわけでもないんですけどね。

「まぁ、話しちゃってもいいよね？」
「デュノア君は今回関係ないからね。月末の学年別トーナメントあるでしょ？　あれで優勝すると織斑君と付き合えるんだってさ」

「あー……」

そういえば先月、篠ノ之さんがそんなことを織斑君に言ってきたって言ってましたね……でもなんでそれが学校中に……
あ、この前、楯無先輩とお風呂に入ったとき、つい口を滑らせましたね。
ということは噂も先輩が流したんでしょうね。多分、私達の噂をかき消すために……そうじゃないと噂になるタイミングが遅すぎますし。
なんだかんだで皆さんに助けられているんですね……あとでお礼を言いに行かないと。

「まぁ、一つ言いたいことがあります」
「なに？　だいひょー」
「優勝したとしても織斑君のことですから買い物の荷物持ちだと勘違いされますよ？」
「あはは！　まっさかー！」

そのまさかなんですよ……
ちらりと噂の始まりである篠ノ之さんをみると焦っているのが見

て取れます。私と一夏だけの約束だろう！？　なんて考えているんでしょうね。

少し、罪悪感を感じますが……もともと篠ノ之さんが優勝することはできないので気にしないことにしましょう。

打鉄が弱いとは言いませんが……結局は量産機ですからね。

まぁ、そういうことで真面目に授業を受けましょうかね。

「シャル、あとでね」

「うん」

シャルルとシャルロットを使い分けるのは綿等、というより間違えたときのリスクが大きいので愛称で呼ぶことにしました。

もちろん、そんなことは建前ですけどね！

シャルはまた不破さんと呼び方が戻っちゃいましたけど、土曜の夜に名前を呼ばれた時は幸せすぎて怖くなったので……しばらくはこのままでいいですね。

いつか、シャルにも私と友達になって良かったと思ってほしいですね。えへへ

「さ、ホームルーム始めるぞ」

◇

「織斑君は……トイレですか」

男子用トイレは結構遠いのでちょうどいいですね。追いかけましょう。いい加減仲直りしなよ、という目でシャルが私を見てきますし。

男子用トイレの近くには女子は近付きませんし、二人でコソコソ話すにはピッタリです。

私自身、別にトイレの中で話してもいいと思ってますしね。女子校の男子用トイレ以上に周囲を気にせず話せる環境も少ないと思いますよ？

「えっと、右に向かったということは……」

ちょっと急いだ方がいいですね。結構遠いのでゆっくり話していると授業に間に合わなくなります。

まぁ、次は格闘技能ですし、教師は私に敵意を持っている口の悪いおデブさんなのでサボってもいいんですけどねぇ……まぁ、織斑君はそうもいかないでしょうし。

えーと、でも追いついたところで何を話しましょうかね……べ、別に昨日のことは何とも思ってないんだからね！　なんてどうでしょう。鈴の真似か？　なんて感じに盛り上がれるかもしれません。

……あ、追いつきましたね。

「織斑くむぅん！？

声をかけた瞬間、織斑君に口を抑えられ物陰に引きずり込まれました……ってえ！？　なんですか！？　女生徒ばかりの環境だったからたまってたんですか！？　それを私で発散しようみたいな鬼畜思考なんですね！？

……別に私以外に迷惑かからないなら我慢しますけど……その代わり間違ってもシャルには手を出さないでくださいね？　お願いです。

「あ、暴れんな！　しっ！　しー！」

「ふぇ？」

声を抑えながら曲がり角の向こうを指し示す織斑君。見てみろっ

てことでしょうか？

◇

なんで不破さんがこんなところに来たのか分からないけど、とりあえず静かにしてもらうことには成功した。

やけに顔が紅くなってたけど、口抑えたから苦しかったのか？

なんにしても、土曜日のことは気にしてないみたいで良かった。

そうじゃなかったら声なんかかけないだろうし。

よくよく考えてみれば、フランス内の事情に感情だけで口を挟むこと自体考え無しだったな。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

俺たちが見ているのはラウラ・ボーデヴィッヒと千冬姉の会話……というよりラウラが一方的に食いついているように見える。

「大体、この学園の生徒など……不破アリサを除いて、教官が教えるにたる人間ではありません」

なんで、ラウラが不破さんのことを認めてるんだ？　話しているところなんて見たことないけどな。

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている」

あ、不破さんが言ってたことと同じようなことだ。ＩＳは人を傷つける兵器だって前に言ってたな。

「そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれることなど、」
「――そこまでにしておけよ、小娘」
「っ……！」
凄味のある千冬姉の声。さすがのラウラも、その声に含まれる覇気に竦んでしまったらしい。言葉は途切れたまま、続きが出てこない。
直接対峙していない俺だって驚いたんだから仕方ない。
「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」
「わ、私は……」
「気取ってなんていないですよ？　私たちは選ばれたんです……あ、私はもう違いますね」
不破さん!?
いつの間に……っていうか千冬姉に逆らっちゃだめだって！　怪我するぞ！
……とか思いつつ隠れたままの俺だせぇな。
いやだって千冬姉怒ると怖いんだから仕方ないだろ！
「選ばれた、だと？　不破、お前も何か勘違いを、」
「していませんよ？　私はともかく、ボーデヴィッヒさんもセシィも鈴ちゃんも国の代表として選ばれ、技術の粋を集めた第三世代機（兵器）に乗っているんです。そんな彼女たちとＩＳでの戦闘をスポーツ程度にしか考えていない一般生徒。その間には大きな差があると思いませんか？」
「は、だから自分たちは他の生徒より高みにいると言いたいのか」

「少なくとも私達は一般生徒よりも深くＩＳの危険性を知っています。実際、意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションと勘違いしているんじゃないかというのは前々から思っていました。一度、学園で正しく教えるべきだとも」
「む……」
教育方法の問題点を指摘されたからか、もしくは同じことを感じているからか、千冬姉が口ごもる。
というか不破さんディベートとか強そうだな。一度でいいから俺も千冬姉を唸らせてみたい。
「まぁ、もちろん、彼女たちが織斑先生が教えるにたる人間かどうかは分かりませんが、ボーデヴィッヒさんの言い分にも理はあると思いますよ？」
「認めよう……ただ、不破、お前が選ばれた人間だというのは思い上がりだ。特別な人間など、」
「何言ってるんですか？　選ばれているのは事実ですよ？」
「は？」
何言ってんのこの人、みたいな顔を不破さんと千冬姉が互いにする。違いは不破さんはちょっと悪戯っぽく笑ってるところか。
「ほら、選ばれてますよ？　代表候補生に」
不破さんは黒十字があしらわれたアンクレットを脚を上げて千冬姉ち見せつけた。
桃と白の横縞……じゃなくて、選ばれたってそういうことかよ！
千冬姉どころかラウラまで狐につままれたような顔をしている。
そういえば、確かに不破さんは選ばれた人間が優れているとは言っていなかったな。そう思えるようなことは言っていたけど曖昧だ

ったし……

「さて、授業が始まってしまうので教室戻りますね」

不破さんはラウラの手を掴み、ふわりと桃色の髪を翻して戻ってくる……不破さんがふわりと。

「また下らないこと考えていますね？　早く教室行かないと間に合いませんよ？」

むぅ。

とうとう不破さんまで俺が考えてることが分かるようになってきたらしい。

そういえば昔、考えてることが周囲の人に伝わっちゃうっていう話があったよな……確かサトル？　……それじゃ読心術か。

◇

失敗しました。

関わるつもりは全く無かったんですけど、ボーデヴィッヒさんもＩＳの危険性をしっかり感じている人だと言うことが分かったので嬉しくなっちゃったんですよ。

だから、つい援護射撃を……そしたらボーデヴィッヒさんに紅い顔で感謝している、なんて言われてしまいました。

クール系だと思っていたのですが可愛いところもありますね。少し、ドキッとしました。

もちろん、私は身も心もシャルのものなので揺れたりしませんよ？　多分、シャルはそういうのが一番嫌いだと思うので。

ほら、社長さんと本妻さん、それと亡くなったシャルのお母さんのこともありますしね。

「不破！　なにをぼーっとしている！　少し格闘技能が優れているからと言って慢心してるんじゃないだろうな！？」
「すりゅいきでぃきえ……（それはあなたのことでしょう）」

あなた程度の人なんて掃いて捨てるほどいますよ……篠ノ之さんでも勝てるんじゃないでしょうか。

威厳を増そうと思って織斑先生の口調を真似ているつもりかもしれませんけど……やめましょう。言っても理解してもらえないでしょうし。

それにしても……この先生も飽きませんよねぇ。私のことなんて放っておけばいいのに。

最近、この人の授業というだけでやる気がガクッとなくなります。

「なんだその態度は……ようし、なら不破、この状況を解説し抜け出すための方法を言ってみろ」

示されたのは一枚の写真。

ＩＳを扱う前段階としての格闘方法の講義のため写真も生身です。詳しい描写は省きますが、基本的に外せないと言われている固め方の一つです。

「……甲が乙の肘を支点に右肩を完全に固めていますね。いわゆる極まっている状態でしょうか」

「ふむ、じゃあ不破が乙だとしてどう動く？」

ニヤニヤと笑いながら聞いてきます。腹立つ人ですね。

「どうした？　分からないか？」

当たり前じゃないですか。さっきも言った通り、基本的に抜け出せない固め方なんですから。

「……そうですね。先生、言葉では伝えにくいので実際にこの状況を再現してもらえませんか？」

「なに？　とりあえず言葉で説明しろ。それで不明な点があれば実演してもらう」

この女は……私の説明で実現可能かどうかを判断して、無理だと判断した場合だけ実演するつもりですね。

単に無抵抗の私を痛めつけたいだけでしょう。

仕方ないから説明しましょう。やる気ないですよーということを示すためにボールペンを片手で回しながら、です。

なんでか分かりませんけど、この人だけは無理なんですよね。篠ノ之さんとも相性が悪いと思っていましたけど、それ以上でした。

「では、お聞き苦しいかもしれませんが……この状況、相手の脇腹にならギリギリ手が届くので、」

「なんだ？　くすぐるとでも言うのか？」

まさか。

「親指で相手の脇腹を穿ちます」

「はっはっはっ！　なかなか面白い冗談じゃないか！　ただ分からないなら素直に分からないと言え」

「できないと思っていますか？」

指で回していたボールペンを開いた人差し指と中指に載せて、その真ん中に親指の先を当てて先生に見えるように動かします。

バキッ！

そして、目の前で折りました。

不破圓明流の一、指穿（しせん）という、鍛え抜いた親指の力で相手の体を穿ち、寝技などを決められた状態からも抜け出すための業です。

暗に、ボールペンじゃなくて人の腹だったらどうなると思いますか、ということを笑みで伝える。

……クラスの皆さんを驚かせてしまうかとも思いましたが、むしろ私なら納得、みたいな顔をされていました。慣れられてきているのでしょうか？

「ふん、どうせ最初からひびでも入っていたんだろう？」

「理解できませんでしたか？　なら、試しましょうか？」

他の先生方ならしませんが、この先生相手なら痛い目見せてもいいような気分になります。私の性格的にはあり得ないんですけどねぇ。

「……どちらにせよ、全員ができるというわけではないだろうが」

「そうですね。でもそれなら、この状態からは基本的に抜けられないと言われていますよ？　そんな問題を出されたので、私ならどうするか、ということを聞かれたんだと思ったんですけど……まさか、答えられない問題を出した訳ではないですよねー？」

にやにや。

……そんな表情をしているのは私だけではなくて、この人の人望のなさというものが分かりますね。

「……座っていい」

実はいつもこんな感じなんですよね。周りからの評価では挑戦者が先生らしいです。

まぁ、いつものことなので、世は事も無し、というところでしょうか。

……この時、あの視線に気付けていれば、と思ったのは後になってからでした。

まぁ、この時点で既に手遅れでしたけどね。

30．？ propos, est－ce qu'il pourrait

アリサを敵対視している教師はイザベラさん（ポルトガル人女性・38歳）
生徒からの信頼は薄く、威厳も無いために舐められている。
見た目はぽっちゃりというより中年太り、アブラギッシュ。
IS学園にだって残念な見た目の人はいるんですよ？　ということで

アリサを敵対視している理由は小さい、可愛い、スレンダーに加えて、
イザベラが得意とする格闘もアリサには敵わないため。
同じ理由で更織楯無も嫌われている。

威厳を持とうと思って千冬の話し方を真似したりと、性格的には可愛いと言ってもいいのかもしれません（

31. Tentation allemande（前書き）

「ドイツの誘惑」

――こちら黒兎。
これより狼への攻撃を開始する――

31. Tentation allemande

「「「あ」」」

三人分の間抜けな顔。

いえ、トーナメントも近いので第三アリーナで特訓でもしようかと思ったんですけど、セシィと鈴ちゃんも同じ事を考えたみたいです。

まぁ、鈴ちゃんはあの噂に踊らされているようで……私とセシィは苦笑いです。

「あんたたち、一夏に興味ないって言ってたじゃない！」

「いえ、買い物の荷物持ちを任せられるならそれでもいいかな、と」

「アリサさんには負けられません」

……私だけ理由が不純な気がします。

「二人とも纏めてかかってくるといいと思いますよ？」

少し、暴れたい気分なので。

「はぁ！？　あのねぇ、あんまりなめた態度とってると……あれ、そういえば、デュノアは？」

「……織斑君と一緒です」

「ふーん。まぁ、ずっとアリサと一緒にいるわけでもないか」

だから機嫌が悪いんですよ！　よりによって織斑君と一緒だなんて！

もしかしたら今頃またラッキースケベイベントが発生してるかも

しれないじゃないですか！

「なので、早く終わらせて……っ！？」

ガンッ！

ほとんど勘だけでいきなりの危険を察知、転がるようにしてなにかを避けました。

もう、ＩＳスーツが汚れちゃったじゃないですか。

飛んできたのは……え、砲弾？

あぁ、特訓してる人達からの流れ弾かー、と思って振り向いてみれば漆黒の機体（シュヴァルツェア・レーゲン）が堂々と立っていました。人のこと撃っておいて偉そうですね。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシィが苦虫を噛み潰したような顔で呟きました。イグニッション・プランのライバルだからでしょうか？

とは言ってもそのプランに参加する全員が私のライバルなのですがね。

やっぱり、シャルを助けるためにはイグニッション・プランに殴り込みをかけることが必要だと……いえ、殴り込みをかけてシャルを助けたいと感じました。

「いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴ちゃんは双天牙月を連結して手で軽く回して遊んでいます……やる気満々ですね。

地味に龍砲をいつでも撃てるように準備してますし。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか……データで見た時の方がまだ強そうではあったな。それで不破、お前は展開しないのか？　フランスの第二世代型を」
「……はい？」
かた、おくれ？　……ふふ、ふふふふ
「なに？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってるの？」
このカゲロウは私が外見をデザインして、親父を始めとするデュノアの研究者たちが魂を込めて組み上げたんですよ？
「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？　犬だってまだワンといいますのに」
それを……かたおくれ？
「はっ……ふたりがかりで量産型に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の口はな」
量産型……あぁ、二人が山田先生と戦ってコテンパンにされたやつのことですか。
まぁ、どうでもいいです。
鈴ちゃんとセシィが興奮してるのも無視です。
「二人とも、少し、黙ってください」

「「っ……！？」」
「ふん、ＩＳを展開することすらしない腰抜けがいまさら、」
「あなたも黙りなさい」

カゲロウをバカにしただけでは飽きたらず人の国のことまでバカにするなんて……

「確かに、中国には人が多すぎますし、イギリスも古いだけで中身がありません……」
「アリサ（さん）！？」
「それでも、人が積み重ねてきた歴史をたかが女子高生が否定するもんじゃないですよ。それに、ドイツなんて大戦期の枢軸国家じゃないですか。まともに扱われているだけ感謝した方がいいと思いますよ？」
「なっ」
「だいたいなんですか？　兎ごときが調子に乗って……かまってほしいからって五月蠅くすると、狼に気付かれますよ？」

カゲロウを完全展開。普段は展開しない脚まで、です。
どうやらシュヴァルツェア・レーゲンも接地状態で戦うようですし、それなら負けません。

「それがお前の、くっ！？」
「いつまで鳴いているんですか？　早く逃げないと食べられちゃいますよ？」

兎なんて狼の餌なんですから……あれ、兎って泣きますっけ？
拳打、掌打、蹴りに頭突き。連撃に連撃を重ねて一気に決めにかかります。
今日は最初から本気です。

「な、めるなぁ！」

ボーデヴィッヒさんの吠え声と同時に……ん、ＩＳが動かない？
これがＡＩＣですか……ここまで強力な固定力だとは思いませんでしたが……

「まさか、いきなり眼帯を外さざるを得なくなるとはな。第二世代がなかなかやるじゃないか」

越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）、ナノマシンによる疑似ハイパーセンサーですか……ま、ただの小細工ですね。使いこなせなければ持ち腐れです。

「第三世代は第二世代より強いなんて思い込み、捨てた方がいいですよ？」
「なんだと？」
「っぺ！」
「！？」

金色に輝く左目に向けて唾を吐く。
不破圓明流、訃霞（ふがすみ）――死を運ぶ霞。
打撃や銃弾は止められてもこの至近距離からの、それも予想外な唾液は止められませんよね？
一瞬でもその瞳を封じればあとは簡単です。

「見えないでしょう？」

濁りを増すために口腔内を噛んで血を混ぜましたから。ちょっと、深く咬みすぎましたけど。

「くっ！」

後方に跳ぼうとしたボーデヴィッヒさんの脚を踏み抜いて地面に縫いつけました。

同時にその顎に手を当て、空に向けて跳ね上げます。

「一気に決めますよ？」

つまらないのですぐに終わらないでくださいね？

上を向くボーデヴィッヒさん。その死角には入り込むように身体を地に沈める。

全身をバネのようにして戻ってくるボーデヴィッヒの顎を、打ち抜く……！

カァンッ！

「……あれ？」

軽い金属音がしました。

こんな音がする訳ないんですけど……？

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「織斑先生？　模擬戦の途中なのですけど」

「しれっと嘘をつくな馬鹿者。ブチギレていただろうが」

……セシぃと鈴ちゃんがすごい勢いで頷いています。裏切り者…

…二人だって怒ってたじゃないですか。

まぁ、そんなことより私の本気が生身の先生が使ったＩＳ用のブレードで逸らされたことの方がショックです。

あなた本当に人間ですか？

「まったく。ボーデヴィッヒ、お前もあまりこいつを刺激するな。危うく学年別トーナメントに出れなくなるところだったぞ」
「は、はい」

いえ、そこまで大破させる気はありませんでしたよ？
まぁ、あの程度なら……イグニッション・プランの三機の内の二機には勝てそうですね。それも致命的な欠陥をついての勝利を演出できます。
初見での判断なので間違っているかもしれませんが、ＡＩＣは操縦者が予想できない攻撃を止めることは出来ないようです。
恐らく越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）がその予想をさらに補助しているのでしょう。なので、先ほどのような高速戦闘では眼帯を外さないと間に合わないようです。
それと、あの感触は……ＰＩＣの発展技術のようなので逆算してＡＩＣの効果範囲を算出できれば私のＰＩＣを干渉させることで効果を弱められるでしょう。
あとはイタリアのテンペスタ？ですね……第二世代のテンペスタといい、戦線配備されている唯一の動けないＩＳ、ルース・テンペスタといい、あの国のＩＳは独創的なんで困るんですよね。
同じ世代のＩＳでさえあれだけの違いがあるんですから、世代が変わったイタリアの第三世代型どうなってしまったんでしょう……

「いいか、こいつの前でオルコットと鳳（ファン）を馬鹿にするなよ？　あと国のことで中傷するのも論外だ」

そうです。人間、親と国は選べないんですから、そういうものをバカにするのは卑怯です。
……私は選んだような気がしますけど。

「あ、あとシャルにも手を出さないでくださいね？」

もっと酷い事になりたくなければ、ですけど。

「不破、無駄に挑発するな……とにかく、学年別トーナメントも目前というときにアリーナが荒れ地にされるのはさすがに黙認しかねる。決着は学年別トーナメントでつければいいだろう」

「教官がそう言うなら……」

ボーデヴィッヒさんは素直にＩＳを解除しました。

私も彼女が戦いをやめるというなら駄々をこねる気はありません。

というかシャルがいないことへの八つ当たりみたいなものでしたし、ボーデヴィッヒさんが私のカゲロウが型遅れではないと認めてくれれば言うことはありませんよ。

むしろレーゲン型（タイプ）と戦わせてもらえたことを感謝したいです。

「物分かりがよくて助かる。ではこれより学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁ずる！」

織斑先生が周りの生徒にも聞こえるように大きな声でいいました。

近くにいた私は大ダメージです。

耳キーンてしましたよ！

「ところで特訓のための模擬戦は……」

「不破とボーデヴィッヒだけ禁止だ」

「えー……」

そのかわり、アリーナの破壊についてはお咎めなしということでしょうか。

見ればＰＩＣを使わずに暴れていた私の足跡がそこら中に残って

います。
やっぱり踏ん張りが効かないと格闘は威力が出ませんし、ＩＳ自体の重量もなかなかのものですから仕方ないんですけど……
ところどころひび割れてますし……整備する人ごめんなさい！

「じゃあ、おまえらも解散しろ」
「……了解しました」

はぁ、また私が危ない人扱いされるかもしれないですね。
黛先輩にまた取材されそうです。
はぁ……部屋に戻ってシャルに癒されましょう。今日はシャルが料理当番なので新婚気分を味わえますし……きゃー！

「不破アリサ。少し、話がある」
「……っは!?　あ、あぁ、ボーデヴィッヒさんですか。すいません考え事をしてました」
「さっきはすまなかった。それとこれから二人で話せないか？」

なんの話しでしょう……？
ボーデヴィッヒさんとはあまり関わりがないんですけどねぇ。

「では、そこの休憩室で。今なら人もいないでしょうから」
「助かる」

うーん。
原作の記憶はあまり残っていないんですけど……こんな人でしたっけ？
謝ったり、お礼を言ったりできる人だとは思いませんでした。
つい先週、シャルと二人で話した場所はやっぱり人がいませんでした。に

「それで、えっと、話というのは？」
「単刀直入に言う。シュヴァルツェ・ハーゼに来い。あぁ、いや来てくれ」
はい？
……いや、私フランス人ですよ？
それが何でドイツの軍に所属するんですか。
「分かってる。いきなり入隊なんて事は抵抗があるだろう。だから、とりあえずは……そうだな、夏期休暇あたりに招待しよう。そこで、我が軍の空気を知ってほしい」
「いえ、そういうことではなくてですね……」
「国籍の違いくらい何とかしよう。いや、なんだったら上に掛け合ってフランスとの共同防衛を提案してもいい。イグニッション・プランとはまた別の、ドイツとフランスだけの同盟関係だ」
あれー？
話が伝わらないどころか膨れ上がってますよ？　というか私にそこまでの価値はないと思うんですが。
というか、ボーデヴィッヒさんがとても先走ってますけど、ドイツ自体が私を欲しているということなのでしょうか？
「何で、私に？」
「生身による卓越した戦闘技術。相手の弱点を瞬時に見抜く慧眼。ボールペンをも凶器に変える柔軟さ。そしてヒトゴロシを選択肢の一つに含める思考。ここまで揃った人間を放っておくわけがない」
ヒトゴロシ……ですか。
原田さんを傷つけたときの話でしょう……あれは出張で戦争を経

験する前の話だったので言い訳もできませんね。
根本的な部分で私はヒトゴロシを許容しているようです。もちろんそれが人を殺すという選択肢を選ばせる分けてはありませんけどね。
でも、評価されたい個性ではないのは確実です。

「そして、軍属だと疑われない可憐な容姿。シュヴァルツェ・ハーゼは、」

可憐だなんて照れちゃいます。
ん？　足音……誰かが来てますね。

「あの、ボーデヴィッヒさん。誰かが、」
「……いや、私がお前を欲しいとおもっている」
「え……？」

驚きの声は私のものではなく……
なぜか、一人でやってきたシャルのものでした。

31．Ｔｅｎｔａｔｉｏｎ　ａｌｌｅｍａｎｄｅ（後書き）

アリサ「シャルに変なところだけ抜き出して目撃されました！　……どんな反応するんでしょう？」

オマケ

ルース・テンペスタ

煌　焔様発案のハイペリオン・ブレイカーを改変、

レーザー兵器の弱点である射程距離の変更が難しいという点を克服するために、

各射程に対応できるレーザー兵器を十数門積んだ動かない第二世代型ＩＳ

詳しくは投稿兵装案まとめ、にて

32．Ｒａｉｓｏｎ ｄ' ?ｔｒｅ（前書き）

「存在の理由／価値」

ラブコメに入れるぞ！

……なのにタイトルが重い！

５００００ユニーク、５０００００ＰＶ達成です

あじゅじゅしたー！（

32. Raison d'?tre

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」
「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」
「第三アリーナだ」
「「わぁ！？」」

廊下で一夏と歩いてたんだけど、いきなり篠ノ之さんの声がしたからびっくりしちゃった。
僕達が揃って驚いたからか篠ノ之さんもちょっと不機嫌そうに眉を顰めた。

「そんなに驚くほどのこと。失礼だぞ」
「ごめんなさい。いきなりだったから驚いちゃって」
「まぁ、いきなり声をかけた私も悪かったな。あぁ、私は用事があるから一緒には行けないが後で行くからな」

うん、篠ノ之さんもさっぱりしてる人でいい人だと思う。
男装がバレないように周囲と壁を作っていたけど学園の人は優しくしてくれる。
でも、皆を騙してることになるから……そのことを考えると胃のあたりが重く感じる。
だからといって男装すぐにやめることはできない。
不破さんはもう、いつ止めてもいいって謝るのと一緒に行ってくれたけど、その結果が誰にどんな影響を及ぼすかが僕には分からないから。
それにやっぱり本当は女でしたって暴露したときの反応が怖いから。
今まで数少ない男子だったからちやほやされていた面もあると思

う。それが実は女子で、しかも唯一の男子である一夏と同室だったなんて事になれば……それこそ先週の月曜日の不破さんみたいになるかもしれない。

「まだ一週間かぁ」
「ん？　どした？」
「僕が転校してきて、不破さんが謹慎処分になってからさ」
「先週はいろいろあったよなぁ」

僕が転校なんてしてこなければ不破さんもあんなことにならなかったんじゃないかと思う。
不破さんにそう言ったら僕は甘すぎで、もっと怒ってもいいなんて言われたけど……本当に不破さんが僕のためにいろいろしてくれていたなら怒られるのは僕の方だと思う。
それに、見た目が可愛い中学生だからどうしても怒れないし……
まぁ、やっぱり男装させられるのはもにょもにょするんだけどね。
男装がバレるまで一夏がセクハラしてきたし。
あれ、でも女だって分かってからはそういうことなくなったけど……もしかして、男だったからちょっかいを出してきてたのかな？

「シャルル、なんで一歩離れたんだ？」
「は、離れてないよ？」

一夏かけるシャルル、なんて紫（むらさき）さんが言ってたけど何のことだったんだろ？　というかなんであの子はモヤシなんてあだ名で呼ばれてるのかな？　スタイルいいのに。

「ところで、一夏は今日なにをしたい？」
「んー。この前射撃の感覚を掴んだから、それを忘れない間に格闘に活かせないか試したいな」

「格闘なら不破さんの方が……あ、そういえば仲直りできた？」

土曜日の喧嘩から一回も話してるところを見なかったかちょっと心配。

例え一夏がホモセクシャルの人でも友達は友達だし。

そういえば不破さんも女の子が好きなんだっけ？　あれ、好きな子が女の子なんだっけ？

「ん？　あーあれな。ラウラと千冬姉のおかげで水に流れたよ。ただ、不破さんの恐ろしさを知った」

「不破さん、怖いかな？」

私に対してはずっと気を遣ってて優しくしてくれるんだけどな。

もう少し力を抜いてほしいとも思うけど。

「いやー、よく分かんないんだけどラウラと千冬姉が口論してな。それを不破さんが止めたんだ。ちょっと、というかマジすげぇと思った」

「へー、ラウラさんちょっと怖そうだもんね」

でも女の子なのにそういうことして……心配だなぁ。

「いや、むしろ千冬姉をからかってたような……？」

「え……？」

織斑先生ってこの学校で一番厳しいんだよね？　なんていうかボス的な存在で……

それをからかうなんて……

「不破さんは正に心技体を極めてるよなぁ。武道家って感じだ」

「うーん、そうかな？」

私の印象では強がってるだけの、本当は弱い子だと思うんだけどな。心は特に……

「いや、シャルルが転校してくる前も生身での格闘戦をやってみたんだよ」

「一夏も確か武術をやってたんだよね？　不破さんは女の子なんだから、」

「惨敗した」

「え？」

「何をしても無効化されるし、自信のあった速さも不破さんの方が断然上で……あれ、生身なら千冬姉と同じくらい強いんじゃねぇかな」

えっと、不破さんって本当に何者？

「ＩＳでも結局、最初に戦ったとき以外は有効打が出ないしなぁ。むしろあれも何かの間違いだったとしか思えん」

「不破さんに一打当てただけでもすごいと思うよ？　私の時は一方的な流れで負けちゃったから」

「でも、この前の時は勝ってただろ。それもセシリアとか鈴と違って格闘戦で」

「あれも偶然作戦がはまっただけなんだけどね」

それも不破さんに負けたときからずっと、こうされたらああする、みたいな感じで対応策を考え続けてたから出来たことで次戦ったらまた負けると思うな。

「でも、第二世代型で不破さんに勝ったことあるのってシャルルだ

けだぞ？」
「へぇ、そ、そうなんだ」
ちょっとは不破さんに近づけたのかな。最初の頃は、あの模擬戦の時の不破さんみたいに惚れ惚れするような戦い方が目標だったから。
でも、昨日、不破さんの試合を記録したものを見せてもらったんだけど……戦い方がかっこいいというか、自信に溢れてるというか。
しかもそれが自然なんだよね。肉食獣が悠々と大地を歩く感じが近いかな。僕はそんな場面見たこと無いけど。
ガガガガガッ！　ガガン！　ガンッ！
「な、なに！？」
「あれは……不破さんとラウラ？」
前にも見たドイツの第三世代型ＩＳを不破さんのカゲロウが圧倒してる。
僕と戦ったときと違って小細工無しの直情的な攻撃。
まるで、颶風。
「いや、やっぱり速いなー。不破さんって瞬時加速（イグニッション・ブースト）をずっと維持してるんだよな。あれはずるい」
瞬時加速（イグニッション・ブースト）を持続？
有り得ないよ……あれは左右のスラスターを交互に稼働させてるだけ。
でも、あのＩＳどういう処理速度をしてるんだろう？　普通、あんなことイメージ・インターフェースでもないと実現できないのに……まさかアナログ入力でやってるわけないし。

「でも、あれじゃ、ダメだよ」
「え？」
「ドイツのレーゲン型（タイプ）の特徴は第三世代兵器ＡＩＣ。慣性をゼロにする空間圧兵器だよ。だからいつか止められると思う」

フランスが調べているのは何も一夏の白式だけじゃない。他国の第三世代型ＩＳだってその対象になる。

だから、第三世代兵器についての考察と対策もある程度は立てられる。

ドイツのＡＩＣには遠距離攻撃。レーザーみたいなエネルギー兵器なら余計に効果的。僕の場合は実弾の乱射かな。

ガガガガ……

「ほら、止められちゃった」
「あんな至近で止められたら一方的に殴られるだけじゃないか！？」
「そうだね。それがＡＩＣの強み」

不破さんはどうするんだろう？

ああなったら第三者からの介入がないと抜け出せないと思うんだけど……

「動いた！」
「え！？」

どうやって……？

「よく分からないけど……ラウラが急に目を押さえたから偶然、何かが起きたのか？」

そんなわけない。
ドイツの越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）に副作用は確認されていないし、あんなにタイミング良くほこりが目に入るとも思えない。
何かしたんだ……

「不破さんの勝ちだな」
「うん……」

不破さんがラウラさんの隙を逃さずに足を踏み抜いて動きを封じ、ラウラさんの頭を空に向けて弾く。

カァンッ！

連鎖的に生まれた大きな隙にいよいよ決着、というところで織斑先生が現れて、生身にＩＳ用ブレードという理解を超えた装備で二人を止めた。
……あのブレードも結構重いはずなんだけどな。

「織斑先生も大概だね」
「……だな」

戦っていた二人はそのまま織斑先生に叱られているみたいで……
リンとセシリアは我関せずを決め込んでる。
そのままなんとなく眺めていたら学年別トーナメントまでの私闘が禁止されるとか何とか。
でも私闘って具体的に何を指すんだろう？
そこらへんの判断が最近学園に来たばかりの僕には分からないんだけど……不破さんに聞いてみようかな？
あれ、不破さんいなくなっちゃってる。

「一夏、ちょっとごめんね」
「ん？　おう。なら、とりあえずは鈴達と一緒にいるな」
「分かった」

アリーナの出入口は利用者を管理するためにここしかないから…
…この前のあの部屋かな？　他の生徒はさっきの織斑先生の声で帰り支度を始めてるし、休憩しに行ったのかもしれない。
そういえばラウラさんもいないな。二人で一緒にいるのかな？
ラウラさんが誰かと話してるところは見たことないけど……さっき一夏が言ってたお昼の一件で仲良くなったのかもね。

「あ、やっぱり。二人とも見ーつけた」
「――私がお前を欲しいと思っている」
「……え？」

えーーーーー！？
いや、うん。不破さんがそういう趣味だってのは知ってたけどね？
でもそういう趣味は少数派だと思ってたから不破さんが告白されるような人だとは思わなかったっていうか……いや、不破さんが誰からも見向きされないっていうことじゃなくて、不破さんから誰かに告白するんじゃないかなって。
でもそっかー、ラウラさんかー……不破さんは見た目が可愛い系だし、基本的にはお淑やかだから凛々しいタイプのラウラさんとはお似合いかも？
……これは応援しなきゃ、ね。

◇

「えっと、シャル？　どうしたんですか？」

「え、えっと、ごめんなさい。聞いちゃうつもりは無かったんだけど……」

紅い顔して……ご、誤解されてます。

ボーデヴィッヒさんの最後の言葉だけ聞けば確かに情熱的な告白だったとは思いますが……私的にはずっと一緒にいて欲しいと伝えてもらう方がキュンときますね。

私と一緒にいたいと思ってくれるなんて素敵じゃないですか……って、違う！　違うのですよシャル！？

私が好きなのはあなたであって、可愛い女の子なら誰でもいいということじゃないんです。

というか、シャルと特別な関係にあるわけでもないので慌てる必要もないんですけどね。

ここはまぁ普通に事情を説明すればいいですよね？

とりあえずボーデヴィッヒさんにお返事を……

「えっと、ボーデヴィッヒさん。さっきの話ですがしばらく考えさせてください。夏休みまでには返事ができると思いますから」

「……今すぐ答えをくれと急かしたいが……ゆっくりでいい。でも真面目に考えて欲しい」

「はい」

もちろんです。

評価自体は微妙でした誰かに必要だと思われることは純粋に嬉しいですし……

こんな私が欲しいだなんて……つい、顔がほころんじゃいますね。

「ではまた、な？」

「はい。またです」

軍のことは置いといてもボーデヴィッヒさんとも仲良くできそうですね。

……嫌らしいことを言えば、戦場を知り、試験管ベビーでもある彼女は私の背中の傷を気にしないでくれるでしょうし。

「……シャルは受け入れてくれますか？」

「え？　呼んだ？」

「いいえ、独り言です。ところで、まだ私たちの部屋にいますか？」

学園に来てからは得難い友人を得ることができましたね。そうでない人たちも私を特別視しませんし……

入学前の私には想像もできないでしょうね。

「んー、そろそろ一夏の部屋に戻るよ」

「そうですか？　襲われないように気をつけてくださいね？」

「あはは、一夏なら大丈夫だよ。僕に興味なんて無いみたいだから」

うん？

まあ、シャルがそう思うならいいですかね？

シャルに興味がないということは……鈴ちゃんが上手くやったんでしょうか？　……やったって、性的な意味じゃないです。

「それで、ラウラさんとはどんな話をしてたの？」

「えっとですね……」

あ、ボーデヴィッヒさんの立場を考えると軍属だって言わない方がいいかもですね。織斑先生を教官だなんて言っているのでバレバレでしょうが本人が言い触らしているわけでもないですし。

「まあ、簡単に言えば彼女と一緒にドイツに来てくれと言われまし

た。彼女の仲間……いえ、家族ですかね？　その方たちと会って欲しいと」

「そっかー」

シュヴァルツェ・ハーゼは全員がナノマシンによる強化を受けていますし、一部はボーデヴィッヒさんと同様に試験管ベビーでしょうから家族という表現も間違ってはいないと思います。

……シャルがやけにニコニコしてますけど何かいいことでもあったんでしょうか？

「それで、不破さんはラウラさんについていくの？」

「一度くらいは行ってもいいかなと。でも私にはやることがありますから」

……シャルを守り続けたいんです。

なんて、プロポーズみたいです。

でも、いつか言ってみたいですね。ふふっ

「そっか……うーん、でも僕はそのままドイツに行っちゃってもいいと思うよ？　不破さんばかりが苦労することもないと思うから」

「……考えてみます」

シャルは私の“やること”を正しく理解してくれました。

「じゃあ、部屋に戻ろう！　当番は僕だから夕食は一緒に、ね？」

「はい」

でも、それを理解した上でそう言うのは――

「何か食べたいものある？」

「久しぶりにフランス料理を食べたいですね」

――それは、あなたにとって私は必要ない存在だということですか？

「うん、美味しく作るね」

シャル……

32. Raison d'?tre（後書き）

ラブコメに入るぞーって思ってたのに……

33. Consid?ration inutile（前書き）

「意味のない思いやり」

言うことは……なにもない

アリサ「作者えげつねぇです」

33. Consid?ration inutile

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うためふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』……ということだ。各自、相性を考えて相棒を探すように。くれぐれも男子の取り合いなんかはしないようにな？」

にやりと獰猛に笑う織斑先生。その笑みにクラスの皆さんも緊張しますが……この人たちは良くも悪くも喉元過ぎればなので結局すぐに男子争奪戦になるんでしょうね……嘆かわしい。

「では、休み時間だ」

ガラガラガラガラ……バタン

ダダダダダダッ！

「織斑君！」
「デュノア君！」

いくらなんでも早すぎですよ！？
というか織斑先生はまだ壁を挟んだ向こうにいますし！

「「私と組んで！」」

クラスの七割が二人の席へ殺到します。
織斑君の席は私の席の隣なので、巻き込まれないように早々と避難済み……私、ちっちゃいので気付かれないと怪我しちゃうんです

よね。
　この前も同じような事件で潰されましたし……あの時も席が近い一松さんたちが引っ張ってくれなければ死んでいたかもしれません。
　押されて、転んで、踏みつけられて、カエルみたいに平べったくなって……がくがくぶるぶる、というやつです。
「まったく……二人は本当に競争率高いですねぇ」
　なんて、私も他人事のように見ていたのですが……
「だいひょー！」
「ふーわさんっ♪」
「だ、代表」
　一部の生徒は私に向けて肉食獣のような目を向けて……
「は、はい。なんですか？」
「「私と組んで！」」
　なぜか教室の角に逃げ込んでいた私も大人気みたいです。
　うーん、わざわざあまり仲良くない私と組む理由なんて……
「あの子たちはバカよ！　男子、特に織斑君と組んだら優勝できない！」
「それはつまり自分から織斑君と付き合えるチャンスを捨ててるようなものだよね」
「このクラスで一番強いのはなんと言っても不破さんなんだから！」
　し、強（したた）かですね……冷や汗が止まりません。
　というか、そんな理由で組んで欲しいなんて言われても嬉しくな

いですし……わ、私だってシャルと組みたいんですよ？
でも、昨日のこともあって、顔をあわせにくくてですね……今日はつい避けちゃってます。
当たり前ですが、昨日のことは私だけ気にしているようなんですけどね。
私が普段通りを装いましたし、そもそもシャルには悪意がなかったみたいですから私が気にしていることになんて気が付けるわけがありません。
でも、私が、本当に必要とされていないとして……私はどうすればいいんでしょう。
なにをすればいいのか、見当もつきません。
シャルが性別を隠し続けるならイグニッション・プランの件も無理に進める必要が無くなりますし……シャルにしてあげられることがなくなっちゃいます。
本当に私はシャルの人生に必要ないのかもしれません……

「代表？」
「はい？」
「顔色悪いけど保健室行く？」
「辛いなら私たち付き添うよ？」

……あ。
はぁ、心配されてしまいました。
気を引き締めないとですね。
こめかみを強めに揉み解して……よし！　切り替えました！

「大丈夫ですよ。辛くなっても一人で行けますし」
「本当に？」
「ええ。それと、私は代表なのでまだ誰とも組みませんよ。最後に余った方と戦います」

一年生は偶数人ですから絶対に独りになってしまう人はいますからね。

今のところ出来上がっているのは……篠ノ之さんとセシリア、一松さんと二木さん、三好さんと原田さん……あ、織斑君とシャルが組みましたね。織斑君が気を利かせてくれたようです。

男子が選択肢から消えたことでまとまるのも早くなるでしょう。

というか、皆さんすごい勢いでパートナーを探していますけど締め切りはまだ先なので焦ることもないんですけどね……なにより他のクラスの人と組んでもいいんですし。

「んぅ？」

「代表？　やっぱり保健室？」

「いえ、ペアで戦闘ということは優勝者も二人になるわけで、そのペアのどちらが織斑君と付き合えるのかなーと思っただけです」

「えっと……じゃんけん？」

……平和的でいいと思います。

◇

「ペア、か」

教官も面倒なことをしてくれる……出席簿が怖いため口には出せないが。

いや、怖くはないぞ？

ただの……そう、軍人としてのリスク管理だ！

今、脳天を叩かれたことで将来の戦地で生死に拘わるような障害が生まれるかもしれないからな！

「まぁ、確かに連携などを訓練するのにはちょうどいいか」

二人、もしくはそれ以上での連携は失敗すれば自分達が痛い目を見る。

敵からの反撃はもちろん、味方からの攻撃に当たり疑心暗鬼に陥るということもあるからだ。

個人主義の側面が強いシュヴァルツェ・ハーゼでもそのために結成当初は穴だらけであった。

訓練を繰り返すことでそのわだかまりも消えていったが……やはり、教官はいろいろと頭を使われているな。

認識の甘い生徒たちを矯正するには確かに効果的だろう。ＩＳの攻撃力は意識を変えさせる程度には強力だ。

しかし、

「転入から一週間でパートナーを見つけろというのも酷な話だ」

ただでさえこの学園の生徒には反吐がでる。

組んでくれと言われても断りたくなるのに、こちらから頼むなどあり得ない。

いくらかマシなのもいるが……当然そのようなものはとっくに誰かとペアになっている。

不破も幾人かに囲まれているし、あの中の誰かと組むことになるのだろう……あの腕前ならば誰と組んだところで結果は同じだろうからな。

まぁ、幸いにして一年生のの人数は偶数。

私だけ余るということはないはずだから気にすることはない……いや、一人だけ余るとかわいそうな子見たいだからとかそういう話ではないぞ？

例え強制された相手からいやな顔をされたとしても、昔から奇異の目で見られることには慣れているから問題もない。

学年別トーナメントに対してもどうせなら戦い抜こうと、その程度の意識しか持っていない。

「六月が終わるまではこの空気か」

しばらくは居心地の悪い思いをしそうだ。

◇

「箒さん、わたくしのパートナーになってくださいな」

「ああ、喜んで。しかし不破じゃなくていいのか？」

「不破さんは誰とも組みませんわ」

なんだかんだ文句を言ってのクラス代表就任でしたが、ああ見えて責任感は……いえ、見たままに責任感が強い子なのですわ。

きっと最終的に余ってしまった生徒と組むのでしょう。

箒さんには内緒ですが、わたくしも篠ノ之さんが余りそうだったので声をかけたのですわ。

どうせ、というのも失礼ですが、自分から誰かに声をかけられるほど積極性のある方ではないと思ったので。

「当然、わたくしが後衛を受け持ちますので箒さんは切り込み役をお願いしますわ」

「任せてくれ。そうだな……早速、今日の放課後から連携の訓練を始めよう」

「よろしくお願いしますわ」

「こちらこそ、声をかけてくれて感謝する」

あら、自分のことは分かっておられるのですわね。

とりあえず、わたくし達の目標は打倒（ゆうしょう）アリサさんですわ！

◇

「一夏、さっきはありがとう。助かったよ」
「ん？　ああ、まあな。俺にはこれくらいしかできないしさ」

何が、と言わないのは不破さんに僕の男装のことについて関わらないと約束したからだろうね。
こういうところで律儀なんだから。
まぁ、だから不破さんも一夏に対して長く怒ったりしないんだろうけど。
……不破さんといえば、

「今日、調子悪いのかな？」

最近は必ず挨拶をしてくれていたのに今日は何もない。
……ううん、挨拶はしてくれたけど会釈だけで会話もなかった。
その後はずっと机に座って、休み時間になっても動かないし……
さっき、ちらりと見た時はクラスの生徒たちに心配されていたけど具合が悪いのかな？
それだったら今はそっとしておいた方がいいよね。
ラウラさんもたまにチラチラ不破さんを見て……心配なら席まで行けばいいのに、と思ったけどそれは僕もだね。

「シャルル、どうした？」
「え！？　あ、ううん、ただ不破さんが体調悪そうだから」
「ああ、なんか鈴の話では昨日の夜からあんな感じらしいぞ。考え事じゃないか？」

考え事……それで思い当たるのは昨日のラウラさんの告白。

もしかしたら、不破さんは板挟みになっているのかも。ラウラさんとドイツに行くことと、僕をフォローすることの間で。

……僕が不破さんを二年という長い時間拘束してしまったようなものだから、これからは不破さんがやりたいようにして欲しい。

その結果、僕の立場が少し悪くなっても我慢する気だし、デュノア社の方も僕が代わりに頑張ろうと思ってる。

だから、これ以上フランスのごたごたを不破さんが負担に思うことはないんだけど……それを僕が言ったら意固地になると思うから……どうすれば、不破さん自身の幸せを考えてもらえるんだろう。

やっぱり、不破さんの助けがなくても僕がしっかりと立っていられるということを示さないと駄目だよね。

そのうちの一つは……学年別トーナメントで見せることが出来ると思う。

「よし、善は急げだよね！」

休み時間が終わらない内に話さないと。

「不破さん、ちょっといい？」

「え？　あ、はい」

んー、皆盛り上がってるし廊下でもいいかな？

◇

「不破さん、ちょっといい？」

「え？　あ、はい」

そんな簡単なやりとりを交わした後、シャルについていった先は廊下を曲がったところにある隅っこの小さな空間でした。

あたりを気にしてますし、大事な話なのでしょう。
私にしてみれば周りに聞かれてもいいようなくだらない話だったら嬉しかったのに……
普段ならシャルに話しかけられただけで嬉しくなってしまいますけど……今は、そんな気分になれません。

「やですね……」

……シャルと話すのが怖いんです。
いつ、要らないって言われるのか分からなかったから……でも、その代わりに覚悟は……いえ、言われても泣かないでいられるだけの準備は出来ました。
私にはシャルに捨てられる覚悟なんて一生持てませんよ。
だって、諦めていたのに仲良くなれるかもって期待しちゃったんですから。
シャルを苦しめた私にはそんな資格ないって分かってたのに……
私だって、まだ子供ですから、遠くに綺麗なものを見つけてしまうと、そこに辿り着くまでの苦難なんて考えられなくなっちゃうんです。
頑張ろうなんて、自分を誤魔化しちゃうんです。

「それで、どうしたんですか？」

崖への第一歩を恐る恐る踏み出しました。
気分はゴムなしバンジーです。

「えっとね？　不破さんが元気無いように見えたから」

不破さん……名前で呼んでもらえない理由は、私が友達というより憧れの人という印象が強いから自然にそうなってしまうんだと昨

日言っていました。
……私は友達とも思われていなかったんです。
そんなことにも気付かないで、気付かないフリをして私は笑っていました。
私から友達になってくださいとも言わないまま……
だって、シャルがそう言わないのに、シャルに迷惑をかけ続けている私がどうしてそんなことを言えるんですか？
言えるわけ、ないじゃないですか……！

「考え事をしていたら寝不足になっちゃっただけですよ。心配いらないです」
「そっか。考え事っていうと……昨日のラウラさんのこと？」
「え？　いや、その、えと……」

確かにあれが発端ですが……でも本当のことを言ったら、またシャルに気を使わせてしまいますよね……
シャルが、私を要らないと言うなら、私がすべき事はシャルが私を切りやすいようにするだけです。
それが、シャルを助けるって事になるんですから。
だから、ここでは何も言わないのが正解のはずです。

「えっとね？　ドイツに行きたいならいけばいいと思うよ。他にやりたいことがあるなら自由にしていい」
「……っ」

始まりました。
脚が、震えます。
他人に要らないと言われるだけでも辛いのに、よりによってその相手がシャル。
心臓が冷たい手で直接握られているような、限界まで萎んでいる

のにさらに萎もうとしているような……そんな感覚がします。
心を蝕む幻痛には気付かないふりをして、笑顔を絶やさずに話の続きを促します。
ちょっとでも辛そうな顔を見せてしまえばシャルの気持ちに余計なしこりを残してしまいますから。

「だから、不破さんの助けはもう僕には必要ない。フランスのデュノア社も僕が不破さんの代わりに頑張る。だから、不破さんは僕達の枷なんかから自由になって、好きなことをして？」
「……」

一方的な断絶。
言葉は綺麗ですが結局は要らないから捨てるというものです。
フランスから出ていけと……言われてしまいました。

「不破さん？」

答えない私にシャルが不安そうな顔をしました。
そんな顔、しないでくださいよ。シャルは笑っておるのが一番可愛いんですから。
いま、シャルを安心させられるのは私の言葉だけ。
はい。
そう言って、私が彼らの前から消えると認めればいいんです。
だから、今にも潰れそうな肺から空気を絞り出して、

「はぃ……ありがとうございました……」

そう、応えました。

「そっか、よかった。僕達も会社の立て直しに頑張るから、不破さ

んも幸せにね。とは言っても卒業までは一緒だけどね」
「そ、そうですね……あはは」

いられませんよ……辛すぎるじゃないですか。
皆が頑張っているのに、もう、私は泣にも手出しできないなんて……
学年別トーナメントが終わったらシャルを女性として転入させて、私はどこかに転校しましょう。もう、ＩＳに関わらないようなところに。

「じゃ、授業始まるから急がないとね。次は実技だから第二アリーナかな」
「そうですね。先に行っててください」
「うん、わかった」

そうして、シャルが角を曲がった瞬間、限界でした。
抑えていた震えが止まらなくなって、なにも考えられなくなって……終わってしまったことを受け入れようという努力もできなくて。
……誰も、来ないでくださいね。

「うぅ……ふぐぅ、しゃる……やですよぉ。う……うぇ」

誰かに気付かれないように声を押し殺して、涙を止めようとするんですが、逆に量が増えるばかりで。
嗚咽と一緒に悲しみを無理矢理に吐き出そうとしても、出てくるのは吐き気だけで……それならいっそ内臓を全部吐き出して死んでしまいたいです。

「いっしょに、いたいんです……ふぇ……私は、あなたのみ、みかたで……！」

私を……捨てないでください……！

33．Consid?ration inutile（後書き）

BAD　END1

ヒント
シャルロットとのフラグは全部回収できたかな？
一周目はシャルロット√以外攻略できないから選択肢は自信を持って！

ロード
タイトルに戻る
↓コンティニュー

まだ挽回できるよ！

34. Veuillez appeler mon nom.（前書き）

「名前を呼んで」

ラウラさんのカリスマ発動!?
また、アリサが泣きます。
アリサがなかなか泣かないとか嘘をついたセシリア・オルコットは
企画部に出頭するように（ぉ

34. Veuillez appeler mon nom.

六月最終週、木曜日。
ＩＳ学園の雰囲気は既に学年別トーナメント一色です。
各国政府関係者や研究者に加えて企業のエージェントと、ＩＳ関係の重鎮もトーナメントを観戦しに来ています。
もちろん彼らの目的は娯楽なんかじゃなくて三年生のスカウトや自らの団体に所属している生徒の成長具合を確認するために来ているのです。
きっとデュノア社からも一人二人は来ているでしょう。
まぁ、私達一年生には関係のないことですね。
もちろん、これが終われば学園を去ることになる私には余計に。
一年生は月曜日から水曜日までの三日間で準決勝までを終え、今日の試合は決勝戦だけです。
二年生、三年生はまだ続くみたいですけどね。

「不破、準備はできているか？」
「ええ、まあ」

私とペアになったのはボーデヴィッヒさん。正直に言えば、私にやる気がない……というより身が入っていないことを差し引いても私達が負ける要素はありません。
事実、第一回戦は私だけが戦闘行為を行って、開戦から四十三秒で決着、第二回戦はボーデヴィッヒさんが一人で戦って六十一秒で決着でした。
第三回戦は相手が棄権をしたので不戦勝です。
今日の決勝で対するのは織斑君とシャル。
二人は不運にも鈴ちゃんペア、セシィ＆篠ノ之さんペアという候補生との二連戦でしたが、私達にはない連携という武器を使って勝

ち抜いてきました。
私達は周りとの差がありすぎて一人でも勝てちゃうんで連携とか練習する必要もないと言いますか……
良い意味でなにもしないことが最高の連携なんです。

「ボーデヴィッヒさん、今回は分業しましょうか」
「うむ。専用機持ちが相手だからな。私が織斑一夏、不破がデュノアでいいか？」
「ええ、私も同じ事を言おうと。ボーデヴィッヒさんが織斑君を負かしたいのと同様に、私もシャルの全てを受け止めたいんです」

とは言うものの私、勝てますかね……？
確かにボーデヴィッヒさんのＡＩＣはシャルに対しては効果が薄いでしょうし、普段の私の成績ならシャルにも勝てるでしょうけど……
でも、カゲロウが私の動きに着いてきていない気がするんですよね。
精神的なものでしょうが……この状態でシャルロットに勝つのは難しそうです。
でも袂を分かつなら、せめて最後はシャルが憧れた私でいたいので。

「そうか。お前にも信念があるんだな。だが、無理はするな」
「はい」
「では、行くとするか。お待ちかねだぞ」

皮肉っぽくボーデヴィッヒさんが笑います。
それはそうでしょう。
二年生、三年生ならいざ知らず、一年生に求められているのは私達（ショー）の足掻きです。

観客はひよっこ達がどれだけＩＳを操れるのかを見たいだけで、そのついでにめぼしい生徒をマークする程度……私達には初めておつかいをする子供を眺めるのに似た娯楽が求められているのです。
それにも拘わらず、一分以内に試合を終了させた私達はトーナメントの趣旨に反する存在です。
まぁ、有り体に言えば……私たちが入場したところで誰も拍手などしないのです。

「おまたせ。自己紹介は要りませんよね？」
「そうだね。よろしくお願いします」
「こちらこそ」

初めての模擬戦と同じようなやりとり……偶然でしょうか？
シャルも覚えていてくれたなら嬉しいです。

「織斑一夏。本当は殺してしまいたいくらいだが……不破を怒らせたくないからな。半死半生くらいで赦してやる」
「いや、そもそも許されるいわれがない」

まぁ、誘拐は織斑君の責任じゃないですし……
ともかくボーデヴィッヒさんはやる気十分のようです。
眼帯も最初から外していますし。
オッドアイって綺麗ですよねぇ、って言ったらやたらと眼帯を外すようになったのですが……今まで光に当たっていなかったのに、いきなり外しちゃって平気なんでしょうか？

『戦闘開始（オープンコンバット）！』

開始直後に私とボーデヴィッヒさんはそれぞれアリーナの逆端に移動……もちろん、私はシャルを、ボーデヴィッヒさんは織斑君を

追いつめるようにしてです。
シャルの放つヴェントの弾丸は防御せずに可能な限り回避。
単発なら視えます！　……視えても避けられないのは我慢です。
瞬時加速（イグニッション・ブースト）は直線の動きのためシャルの的になるので嵐才流の歩法を使います。
疾歩嵐打（しっぽらんだ）――初めて織斑君と戦ったときにも使った高速移動術。
速度自体はさすがに瞬時加速（イグニッション・ブースト）に劣りますが、その代わりに急制動が利き、機動性にも優れているのでシャルの銃弾を避けるにはちょうどいいんです。
五秒と経たずにシャルに肉薄、ここからは格闘戦（わたしのぶたい）です。

「ふっ！」
「遅いです」

繰り出されたブレッド・スライサーの一撃をいなしてシャルの腕を掴み、地面に叩きつけるように投げ、シャルが起き上がろうとする力を利用してまた投げます。
それを何度も繰り返し地道に、でも確実にシャルのエネルギーを削っていきます。
起き上がろうとしなければ投げられませんが、起き上がらないと私には勝てないのでシャルに選択の余地はありません。

「っく！」

私の投げにあわせてシャルも自ら跳びます。
……跳ばなかった場合、装甲の可動域を超えた動きにより腕が折れるため、やはり選びようはないんです。
山嵐、と言いましたっけ？
そもそもは圓明流に勝つために開発された業です。後にも先にも使い手は彼だけだったのですが……私なりに再現させてもらいまし

た。
　まぁ、生身での格闘戦ならばこれで決着なのですが……ＩＳなのでそうはいきませんね。
　シャルの右腕にレイン・オブ・サタディが展開された瞬間に投げ飛ばします。
　距離を保つために私もシャルを追いつつ、妖精の加護（フェアリーダンス）を展開、投げられながらもシャルが放った散弾の中で致命的なダメージを受けるものだけを溶かします。
　そして、シャルが着地するのと同時に再び突進（タックル）でゼロ距離戦闘を再開しようとしましたが、

　ガンッ！

　ガーデンカーテンの盾で防がれてしまいました。
　……ちょうど顔の高さに展開されたためシャルの姿が見えません。
　センサーも使いますが私の周囲を囲んだ楯も、ある意味ではシャルなので詳しい位置を割り出すのも難しそうです。
　それでも、かすかに捉えた微細音に反射的に身を捩りました。

　ガガガガガガッ！

　鋼鉄製の杭がガーデンカーテンを突き破って私に殺到します。
　楯は防御の為じゃなくて目隠しのためですか……巧いですね。
　当たればただでは済まないので、背後――アリーナの中央に向けて大きく後退、体勢を立て直します。
　一瞬、塩の都の大火（ウリエル・ジャッジメント）を使って私の独壇場を作り上げようかとも思いましたが……ボーデヴィッヒさんも戦えなくなってしまうので却下です。
　それに、今度はシャルから私に向かって飛び込んでくる気配がしたので迎え撃つ準備の方が先です。

牽制に投げられたブレッド・スライサーをよけて……そんな不用意に飛び込まれると、つい、抱きしめたいなんて思ってしまうじゃないですか。

「シャル、圓明流は迎撃も得意なんですよ？」

特に殴りなら獅子吼（ししこう）、朔光（さくこう）に蔓落（かずらお）としと対応できる業は多いんですから。

逃げられては叶わないので投げ技の蔓落としで寝技に持ち込みましょう。

くっつきたいとか、そんなこと考えてません！

◇

……つまらんな。

もとから期待はしていなかったが……この程度の男のために教官は名誉を捨てたというのか。

日頃からＩＳに乗ることに命がかかっていると思わないまま、特訓などと言ってじゃれあっているからこうまで弱い。

シュヴァルツェ・ハーゼならすぐさま除名しているところだ。

まったく嘆かわしい。

本当に教官はどうして、

「っらぁぁ！」

「おっと」

ふん、ＡＩＣを使うまでもないな。

……土壇場で使ってやって絶望させるのもいいかもしれない。

結局、私と並ぶのは不破だけか？

いや、デュノアやオルコットもあれでなかなかに強力か……

不破に関わる奴らは見所があるな。
不破をドイツに連れて行くことができれば全員ついてくるか……？

「だぁぁあ！」
「直線的すぎるな」

突っ込んでくる織斑一夏の脚を蹴って転ばせる。
追撃しようとは思わない。
教官にこの男の不甲斐ない失態をみてもらう。
それだけのために、ただ無様を晒させ続けてやろう。
なに、悔しいならそこから這い上がればいい。そうして教官に追いつけば認めてやらんこともないぞ？

「はぁっ！」
「だから甘いと、」

ヒュンッ！

なっ！？
……デュノアのブレードか。
不破相手に近接武器を投げるなんて不用意な。

「ナイスタイミング！　シャルル！」
「なっ……！？」

やられた……！　狙いはこっちか！
刀を振り抜いた織斑一夏は刀から手を離し、代わりに飛来したデュノアのブレードを空中で逆手にキャッチした。
さらに体を反転し……斬られる！？

「く、ら、えぇぇぇ！」
「っち、小賢しい！」

ＡＩＣを発動。
振り抜かれる前に織斑一夏は止める……！

「なんちゃって」
「は？」

織斑一夏は私に切りかかることをせず、脇を走り抜けていく。
……最初から不破を叩くのが目的か！

「行かせるものか！」
「君の相手は僕だよ」

なんで、お前がこちらに……！
不破はどうした！？

◇

せめて、格好いい私を見てください。
シャル、あなたはここで倒します。恐らく織斑君もそろそろ倒されているでしょう……ボーデヴィッヒさんが遊んでいなければ。

「本気で行くよ！」
「ええ、受け止めさせてもらいます」

シャルの右腕に意識を集中させます。
蔓落としは相手の拳打を受け流してつつ、その腕に自分の腕を絡めて投げる業です。受け身が取れず、やる気になれば関節破壊も可

能で、圓明流の中でも特に多くの状況に対応できるんです。
……シャルも全てを賭けてくれると嬉しいですね。
一瞬でもいいので、シャルの全てを背負いたいです。
そうなれば、私はもう、十分ですから。
衝突まで〇・四秒……拳の兆候は、まだありません。

「ゴメンね、不破さん」
「え？」

気を取られちゃだめです！
シャルの腕に集中しないと！
〇・三、〇・二、〇・一……
まだ？　まだなんですか？　お願いです！　早く拳を……出してください。
置いていかないで……

「勝たせてもらうよ」

そう言い残して、シャルは私の横を走り抜けました。
……勝ち負けなんて、どうでもよかったのに。

「不破さん、覚悟！」

せめて最後に、シャルと戦いたかったです。

ザンッ！

雪片弐型が振り抜かれる音。
耳に響くエネルギー残量低下の警告音。
悪役（ヒール）の無様に沸く観客。

……どうでも良いです。

でも、こんな終わり方って……

「無しですよ……」

つつ、と一条の涙が私の意志に反して流れます。

私が止まったのを確認した織斑君が急いでボーデヴィッヒさんの元へ戻ります。

彼女も私が斬られるのとほぼ同時にレイン・オブ・サタデイの接射を受けていて……

ボーデヴィッヒさんと目が合いました。

いいんです。

シャルと戦いたいというのは私のわがままなので、あなたが怒ることはないんです。

これも作戦、勝利のために相手を騙すのは有効な手段で……私が裏切られた気分でいる事なんて、我慢すればいいんです。

◇

「ふざけるな！」

私から織斑一夏に対する怨恨は確かに一方的で理由の無いものだ。

悪役として斬り伏せるのもかまわない！

しかし不破の信念は違っただろう！

何故、それに応えない！

私にだって、不破が何を望んでデュノアとの戦いに臨んだのかは分からない。

だが、あいつの真摯な目を見ればあいつにとって意味があることだということは分かるはずだ！

不破にとって大事なものを……たかがこんなお遊びでの勝利のために踏みにじるというのか！
良いだろう。
存分に斬るが良い。
外道に堕ちて、なお勝ちを掴むというのなら……
私は奈落の底まで堕ちて貴様等を叩き潰そう。

（力を、よこせ）

ドクン、と私の奥底でなにかがうごめく。

『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

不破の誇りを取り戻すために必要だというなら……私は何にでもなってやろう。
一瞬でも共に戦った仲間だ。

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ　……　Ｄ.
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　……　Ｕｐｌｉｆｔ.
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　……　Ｃｌｅａｒ.

我がシュヴァルツェ・ハーゼに仲間を捨てるものなど、いない！

≪Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ≫　……ｂｏｏｔ.

◇

「っぐ、あぁぁぁ！」

ボーデヴィッヒさんの絶叫。
シュヴァルツェア・レーゲンから放たれる激しい電撃が放たれ、シャルと織斑君が吹き飛ばされました。

「……なに、してるんですか。私が、一方的に裏切られたと思ってるだけなんですよ？　あなたが怒ることないじゃないですか……」

まだ、会ったばかりで、お互いのことはなにも知らないのに……
よくても織斑先生からの数時間に及ぶ教育的指導は免れませんよ……？
あれって、辛いんですからね？

「私の為に誰かが怒られるなんて事は許しません。だから、待っていてください。ボーデヴィッヒさん、あなたは私が止めます」

先程の織斑君の斬撃で私のシールドエネルギーはほぼゼロです。
ＩＳの特徴として、動くためのエネルギーがあってもシールドエネルギーがない場合、安全面を考慮して動きません。
でも、私、知っているんです。
その制限がただの安全装置だってこと。
そして、多分、絶対防御の機能を落とせばシールドエネルギーが無くても動けると言うことを。
織斑君ができて私にできないわけがありません。
二分割された思考を総動員して絶対防御の管理権限を掌握してみせましょう。

◇

「くそっ、なんなんだあれ！」

ラウラの絶叫と同時に、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲がグニャリと溶け出し、液体金属のようになってラウラを飲み込んだ。
そして、その操縦者を包み込むようにして新たな形状を構成していく。

「なんだよ、あれは……」

無意識にそう呟く。
この光景を見てある全ての人間が同じ事を思っているだろう。
ＩＳは原則として変形しない。
ＩＳがその形状を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』の二つだけ。
不破さんのＩＳは常に変形しているけど、あれはフィッティングが終わらないで持続しているだけらしい。だから、操縦者である不破さんの経験により形態を変えていくのだが、それでも装甲の一部が変わる程度で、言うなればマイナーチェンジだ。
そして、『形態移行（フォーム・シフト）』もあのような変形の仕方ではないと思う。
やがて変形が終わり、そこに立っていたのは全身装甲（フルスキン）の黒いＩＳ。
ボディラインは少女のそれであり、同じ全身装甲（フルスキン）と言っても先月の無骨な襲撃者とは似ても似つかない。
腕と脚に最小限のアーマーをつけ、頭部のフルフェイスアーマーがラインアイ・センサーの赤い燐光を漏らしている。
そして、その手が握るのは――

「雪片……！」

かつて、千冬姉が振るった刀の模造刀。
鏡に映したかのようなそれに、俺は知らず内に雪片弐型を握りしめていた。

「っ！」

中断に構えた瞬間、黒いＩＳが飛び込んできた。
居合いのような構えはまさしく千冬姉のそれだ。

「ぐうっ！」

雪片弐型が弾き飛ばされ、それと同時に俺自身も蹴り飛ばされた。
そのまま追撃とばかりに黒いＩＳは白式に追いすがり……

ガンッ！

頭部を狙った弾丸を腕で防いだ。
弾丸が飛来した方を見ればアリーナの壁に寄っかかり座り込んだシャルの姿。
……さっきの電撃でエネルギーが尽きたのか！？
黒いＩＳは雪片弐型を遠くに蹴り飛ばし、シャルへと標的を移した。

「させるかよ！」

俺が伸ばした手は

……届かなかった。

◇

――この行為は操縦者に許可されていません。

そんな、無情な一文が私の頭にたたき込まれます。

「シャルが、ピンチなんですから言うことを聞きなさい！」

織斑君を守るためにシャルが放った弾丸は、確かにボーデヴィッヒさんの気を引きました。

でも、今の彼女には理性がないので……私と同じで動けないシャルが斬られたら昏睡状態は免れ得ないでしょう。

だから、私が動けるようになるしかないのに！

――この行為は操縦者に許可されていません。

「いい加減言うことを聞きなさいこのポンコツが！」

――この行為は操縦者に許可されていません。

……あくまでも、私の命を守ると言いますか。

いいでしょう。

ならば私にも考えがあります。

「シミュレーター起動。対象、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？。同時に五感同期システムを有効化」

シミュレーターと五感同期システム、両方ともに高速機動などの感覚を他者の動きから掴むために開発されたものです。

それを有効にした私の状況は、簡単に言えばシャルが斬られれば同じだけのダメージを私が受けます。

しかし、こちらのシステム権限は私が完全に握っているのでＩＳ側からの強制終了も受け付けません。

つまり、ＩＳが私を守るためにできることは絶対防御を無効化し

て私が動ける状態を作り上げるだけです。
変に人間臭い判断基準を持っているため騙すこともできるでしょう。

――絶対防御の無効化が承認されました。これより全てのダメージが、

分かってますよ。
斬られれば怪我をするって事でしょう？
当たり前じゃないですか。そんなこと、私の歩を止める要因にはなりませんよ。
ふん、最初から乗り物は乗り物らしく操縦者に従っていればいいんです。

ガァン！

今までは無理に動いて避けていたシャルが、とうとう動けなくなりました。
今の中段の一撃は柄に銃弾を撃ち込むことで辛うじて避けたみたいですが……
って、シャル、それは……それだけはどうにかして避けて下さい！

◇

「っふ！」

今のは……危なかったね。
刀の持ち手を打ってはじくことで中段斬りをなんとか対処できた。
でも、次はこうも行かないと思う。
さっきの不破さんとのやりとりでエネルギーを相当削られたのが

痛かったかな。
これは昏睡も免れないかも。

ガツン！

上段からの振り下ろましをヴェントの銃身で防御、そしてすぐさまガルムを展開して発砲……突き！？
黒いＩＳの次の行動が分かった途端に世界が凍りついた。ううん、厳密に言えば動きがゆっくりになった。
繰り出される突き。
引き金を引く指。
その二つは同時に行われて……
その刹那の後、新手の黒い影が僕たちの間に飛び込んできた。

「あぐぅっ……！」

ぞぶり、という刃物が物を切り裂く音とパァンというガルムの乾いた音。
その両方が間に割って入ってきた新手――不破さんの体に吸い込まれて血液を撒き散らした。
あれ？　……血って、なんで……？

「こ、こうするしか、なかったんですよ。それ、に……かすり傷です」
「不破さっ……！」
「しっ、今は、ボーデヴィッヒさんを」

それだけ言って、僕の方を向いていた不破さんが黒いＩＳを振り返る。
不破さんの体には二つの傷。

脇腹の切り傷と、僕の放った銃弾が削り取った太股の傷。
その二カ所からだくだくと血を流していて……
そんなの、かすり傷なわけないよ……

「ふぅ……すぐ、終わらせます」

◇

右脇腹と左の太腿ですか……
どちらも内蔵や腱に傷を付けていないようなので失血以外は気をつけなくても平気そうです。
とはいえ、動けて一度だけ。
それ以上は無理です。
痛みとか、そういうことじゃなくて体に力が入らなくなるでしょう。

「ボーデヴィッヒさん。私のために怒ってくれたんですね？　ありがとうございました。でも……」

例え、そうであったとしても……

「シャルを傷つける人のことは赦せないんです」

シャルのためなら自分の事なんてどうだっていいんです。
歪んでる、なんて言われそうですけど、それが私の恋です。

「なので……」

反省してもらいます！

ダァン！

地響きがするほどの力でボーデヴィッヒさんの脚を踏み抜き、右手で顎を跳ね上げる。

ここまでは、前にも見せましたっけ？　でも、ここからですよ。

朝峰嵐才流――魂還天（みたまがえし）

体勢を可能な限り低くして、左足で踏み込み右の掌でボーデヴィッヒさんの顎を打ち抜きます。

「而（し）っ！」

顎を打ち抜いた右手で今度は顔を掴み、後頭部を地面に叩きつけます。さらに頭をサッカーのシュートのように蹴り飛ばしました。

こっちは朝峰嵐才流――魄還地（むくろがえし）という業です。二つ併せて人壊という奥義になりますけど……ＩＳでも纏っていなければ確実に死んでしまうので使ったのは初めてです。

……ＶＴシステムでは絶対防御が働かないとかないですよね？

「うぐぅ……」

踏み込みに力を込めすぎましたかね……血が足りません。

視界も歪み始めて……あ、ちょっと頭の中が涼しくなった気がします。これは本格的に危ないかもです。

でも、あとは、織斑君に任せて良いですよね？

もう、疲れました。

「不破さん、大丈夫!?」

「大丈夫、ですよ？」

「こんなに血が出て、大丈夫なわけないじゃん！」

えー……

聞いてきたのシャルなのに。

「シャルは、大丈夫、ですか？」

「うん、うん！　不破さんのおかげで……でも、なんで」

命を懸けたのか……ですかね？

確かに最悪でも昏睡止まりの方が、死ぬ可能性もあった私の選択より賢かったかもしれません。

でも……

「シャル……これでも、私は必要ないですか？」

「ぇ……？」

「私はシャルを守りたいんですけど、やっぱり、私は要らない子ですか？」

私はシャルから離れないとダメですか？

「そんなことない！　でも、僕は不破さんに好きなことして欲しいから……」

「私はシャルが守りたいって言ってるじゃないですか！　どうして、無視するんですか！　私は……迷惑ですか？」

「不破さん……」

「そうやって、他人行儀で見るのもヤです……シャルは私のことを見てくれてません！　昔の私に抱いた幻想を押し付けて……！」

私だって、ダメなところもあるんですから。期待ばっかされても疲れるんです。

それに、シャルに対等に見てもらえないと、一生、私達の間の溝が広がり続けるだけです。

そんなの……

「そんなの、ヤだよぉ……私は、シャルと友達に……名前を呼んでよぉ……！」

「……あ！　と、とりあえず早く救護室に！　えと、えと、あとは……そうだ、横になってて！」

ぐい、とシャルに膝枕をさせられて、そのまま、睡魔の虜になっていまいました。

……名前、呼んでくれないな。

34. Veuillez appeler mon nom.（後書き）

アリサ「さーて、次回のアリサさんはー？

アリサ、怒られる
アリサ、襲われる（R－15）
アリサ、襲う（R－15）

の三本をお送りいたしまーす

じゃん、けん、ぽんっ！
えへへへへへ」

アリサ「……ツマラナイことやらせないでください。あとR－15ってなんですか！？」

一アリ、とアリシャルが……

アリサ「……前者はともかく後者は楽しみにしておいてあげます」

なにこのつんでr（ティウンティウンティウン

35. Est-ce que cela devient l'objet

「これ、消されますかね？」

※Ｒ－１５を一足飛びしている可能性があります（

先に注意がくるよね！

アウトの声が多いと判断した場合、わっふる修正が入ります（

というかハッスルしすぎて一日で１４０００文字も書いちゃいました（

35. Est-ce que cela devient l' objet

「傷が開いちゃうので激しくしないでくださいね？」

私の顔の、すぐ前にいる織斑君に言います。

「あと、危ない日なので外に……」

「わ、わかった」

「ゃん……当たってますよぉ」

へ、変な声出ちゃいました……！

だって、織斑君が動いた拍子にもにょもにょが私に擦れて……その、えっと……変な感じがしたんですよ！

……でも、なんで私は大浴場で織斑君に押し倒されているのでしょう？

お互いに全裸で……どっからどう見ても行為の寸前で、ドキドキします。

まぁ、織斑君がしたいならいいですかね。

◇

「バカ！」

「馬鹿ですわね」

「馬鹿だな」

「うぅ……なにも言えません」

失血による気絶から回復を果たした私を出迎えたのは鈴ちゃん、セシぃ、篠ノ之さんからの酷い中傷でした。

私、一年生の中じゃ一番成績いいのに……

保健室にいる中だと……下から織斑君、篠ノ之さん、鈴ちゃんとセシィが同じくらいというところでしょうか。

隅っこに座って暗い雰囲気を醸し出しているボーデヴィッヒさんは多分篠ノ之さんと同程度ですかね？

私の寝ているベッドに頭を預けてうたた寝しているシャルは……私のちょっと下くらいだと思います。

二人とも転校してきたばかりなのでイマイチ判断が付きませんが……うん、学年トップである私の立場を揺らがすほどの脅威ではありませんね。

「ていっ」

「あぅっ……鈴ちゃーん……怪我人には優しくしてくださいよぉ」

「だ、だって今失礼なこと考えてたでしょ！」

鋭いですね。

鈴ちゃんは中の上くらいじゃないですか。気にするほどでもないと思いますよ？

「まぁ、私が一番成績が良いことには変わりないですけど……なんですか？　ダメだコイツ、みたいな目しないでくださいよ」

何を責められているのかは分かってますよ！

でも、私にとってはシャルの方が私の身体より大事なんですから仕方ないじゃないですか。

結局、脇腹の傷は割と深くて夏休み中に完治するかどうか……掠り傷だと思っていた太腿も夏休みに入るくらいまでかかるだろうと言われました。

ああ、足りなくなった血は輸血で補ったらしいです。

なんでもＡＢ型の血液が足りなかったらしく、シャルが不足分を緊急で献血したとか……つまり、私の体の中にはシャルの血が。えへ

「怒られてるのになんで笑ってるのよ！」

いえ、主な原因はシャルの寝顔ですが……膝枕してくれているセシぃの優しさとかもあります。

セシぃはどんな顔をしてるのでしょうかね……？

「……見えません」

というか、視界の半分がセシぃの胸に覆われています。無駄にでかいですね、

「鈴ちゃん！　私の精神的安息のためにセシぃと変わってください！」

「意味分からな……あぁ……意味は分かったわ。でも、私への挑発と受け止めていいのよね……？」

ち、違っ……！

「別に鈴ちゃんなら胸が小さいから顔がおくひえうはんへ！」

「小さくて悪かったわね……お、やらかい」

ほっぺたで遊ばないでくださいー！

「伸びちゃうじゃないですか！」

「伸びないわよ！　だから、もうちょっと、」

「あー、鈴？」

「なによ？」

「不破さん、怪我とか関係なしに暴れそうだから止めておけ」

「た、確かにそうね」

暴れませんよ！　でも織斑君ナイスです！
それにしても……

「ボーデヴィッヒさん？　こっち、来ませんか？」

声をかけるとびくりと肩を跳ねさせて私を見てきました。
その目はちょっと怯えていて……なるほど、確かにウサギですね。

「行っても、いいのか？」
「いえ、来たくないなら良いですけど……ボーデヴィッヒさんこそ大丈夫ですか？」

あの損傷レベルからＶＴシステムを使った上、私の一撃を食らったあとで織斑君の雪片弐型で斬られたなら全身が痛くなっていても不思議じゃないのですが……

「私は大丈夫だ。若干体が重く感じるだけで……」
「ボーデヴィッヒさん、アリサさんに謝罪はないのですか？」

セシぃがボーデヴィッヒさんに冷たく言い放ちます。

「あ、セシぃ、あれはひはふんへふ……って鈴ちゃん！」
「はーい、アリサは黙ってる」

なんでですか！
ボーデヴィッヒさんは全く……あんまり悪くないんですよ！？
そりゃ、方法は悪かったと思いますけど、私のために怒ってくれたんですし……

「……不破、悪かった。その気はなかったとは言えお前を殺しかけた」

そんなことで謝られても……

私的に殺されかけたなんて思ってないんですし、怒ってくれたことの方がうれしかったですし……

そんなことを考えていたら鈴ちゃんにほっぺたをつつかれました。

「ほら、答えなさいよ」

「え？　あ、えっと、気にしてませんよ？　飛び込んだの私ですし……」

だから謝る必要なんて……

「はい、これで一件落着ですわ。ボーデヴィッヒさんもこちらに来なさいな」

「……感謝する」

……あ。

セシィは私が気にしてないことは分かっていたんですね。むしろ今のはボーデヴィッヒさんの気分を晴らすための小芝居ですか……

セシィって、小学校の先生とか向いている気がします。

コソコソ

「？　ボーデヴィッヒさん、なんでわざわざそんな端っこに？」

「き、気にするな！　私は端っこが好きなんだ！」

「？」

しばらく意味が分かりませんでしたが……ボーデヴィッヒさんの

視線を追って意味が分かりました。
結局、織斑君に惚れたんですね。
だから織斑君の視線を避けるようにしてこちら側に座り込んでいる、と。

「でも、ボーデヴィッヒさんはなんで怒ってくれたんですか？」
「ん、む？　仲間のために怒るのは当たり前だろう。あぁ、別にシュヴァルツェ・ハーゼに入れと言っているのではなくてだな……一度、共に戦えばそれは仲間だろう？」

顔、真っ赤ですよ？
……恥ずかしいなら言わなければいいと思いますっ。私まで照れちゃうじゃないですか！
でも、私を仲間と言ってくれて、ありがとうございます。

「ボーデヴィッヒさん、私のことはアリサと呼んでください」
「……私のこともラウラと。アリサよろしく頼む」

お友達、ですね。

「んぅ？　……んー？」

……シャルがもぞもぞ動き出しました。
半分寝ているような顔がまた可愛らしくて困っちゃいます。
次第にシャルの焦点が私に合って……

「起きて大丈夫なの!?　アリサ！」
「……」

今、名前で……？

「アリサ？　やっぱり辛いの？」
「辛くないですっ！」
「きゃっ」

むしろ横棒足して幸せです！
嬉しすぎて、つい、シャルを抱き寄せちゃいました。

「あ、アリサ、苦しいって……ふふ」
「シャルー……えへへ」

もう、ぎゅーっと抱きしめて頬ずりしちゃいます！

「ねぇ、セシぃ」
「はい……？」
「アリサ、今デュノアのこと持ち上げてベッドに引きずり込んだように見えたんだけど……横になったまま」
「……それが、アリサさんの本気ですわ。それよりもアリサさんが殿方にああなるとは思いませんでしたわ」
「ああ……うん。まぁ、そうよね」
「なにか、隠していませんか？」
「アリサに聞いて……」

ぎゅー！
すりすり
シャルは柔らかいですねー。

「あ、ラウラ、そういえばさっきのシュヴァルツェ・ハーゼってなんのことだ？」
「む？　ああ、私が所属しているドイツ軍の特殊部隊だ。目下、ア

リサをスカウトしている」
「だめだよ」
「う？　しゃる？」

どうしたんですか？
シャルに夢中になりすぎて話を聞いていませんでした。
シャルが少し怖い顔でラウラさんを見つめています。
わ、私を見てください！　……恥ずかしくて言えませんっ！

「アリサはドイツには行かないよ。だって、僕のことを守ってくれるって言ってたから」
「ふん、軟弱ものが。普通は男が女を守るものだろうが……と言いたいところだが誰かに守られるアリサというのも想像できないな。それに、」
「それに？」
「アリサがお前を守ると言うならお前もくればいい。戦力としては十分だからな。それに一夏、お前も私を守ってくれるのだろう？　だったらお前もだ」
「ちょ、一夏どういう事！？」

ここぞとばかりニヤリと笑うラウラさん。さっきまで照れていたのに忙しい人ですねー。
まぁ、私は……デュノア社の問題を解決したあとならドイツに行っても良いかもですね。
もちろんシャルがいればですけど。

「あぁ、問題ない。どうせ、アリサと一夏が来るのなら鈴もセシリアも来るのだろう？　それなら夏の休暇に全員ドイツに招待しよう」
「ま、まぁ……」
「考えないこともないですわ」

当然、国が許さないでしょうが……世界のパワーバランス崩れまくりですね。
シュヴァルツェ・ハーゼには既にＩＳが三機配備されているので、それに加えて更に五機……五機？

「えっと、私、シャル、織斑君にセシィと鈴ちゃん……あ、ラウラさん！　篠ノ之さんも誘ってあげてください！」
「む？　あ、す、すまん篠ノ之、まったく話さないから興味がないのだと……篠ノ之？」
「なぜ、だ」
「「？」」

いきなりなぜと言われても……私とラウラさんには分かりませんよ？

「なぜ、私だけ篠ノ之なんだ!?　私は苗字で呼ばれるのは嫌いだというのに！」

あ、そういうことでしたか……
ですが、

「篠ノ之さん。苗字が嫌いな理由は篠ノ之博士がいるからですか？」
「……そうだ。苗字で呼ばれるたびに私を通してあの人を見られている気がする！　あの適当で、ちゃらんぽらんで、どこかズレたのが篠ノ之家の人格だと思われてしまう！　あの人以外まともなのに！」

好きな人にこそ怒りを覚えるとは言いますが……篠ノ之さんもシスコンだったんですね。

「ということは篠ノ之博士のような人だと思われたくないから苗字で呼ばないでってことですか？　でも、それだと篠ノ之博士が篠ノ之家の代表だと認めることになってしまいますよ？」
「う……」
「なので、あなたはその苗字を背負ったまま活躍する方がいいと思います。そうすれば篠ノ之博士が突然変異だと分かってもらえますよ」
「なるほど……」
「なので頑張ってください。篠ノ之さん」
「篠ノ之が家の代表になると言うことだな。苦労もあると思うが、」
「う、うわぁぁぁぁぁん！」

あれ、ちょっと虐めすぎましたかね？
冗談だったんですけど。
ラウラさんは天然で言ってましたね。

「怪我してても絶好調ね……」
「人を年がら年中いじめっ子しているように言わないでください」

ちょっと、面白そうだったので魔が差しただけですよ！
……実際、面白かったですし。

「まぁ、そろそろ……ふわぁ……眠いです」
「あら。アリサさんが寝るのでしたらわたくし達もお暇しましょう」
「そうね。アリサ、大人しくしてるのよ」
「あまり心配されるのも気になるだろうから私はなにも言わないぞ。ただ、」

セシィに鈴ちゃん、最後にラウラさんですが……ただ、なんでし

ょう？
　少し、顔が赤いような……？
「いや、お互いに合意の上ならいいのだが……眠る前に離してやらないと可哀想じゃないか？」
「え……あ」
　シャルのことですか。
　いつの間にかベッドに潜り込んで寝ていたようですね。
　仕方ない人です。
「んー。シャルも連れて行ってあげてくれますか？　流石に保健室で同衾はまずいので」
「任された」
　ふぁ……おやすみなさぃ。
◇
　んー。
　アリサのデュノアに対するあの態度……あれは、アレよね。
　デュノアは事情があって男装してるけど、本当は女の子。つまり、アリサの片想い相手は……あんなの見せられたら相思相愛にも思えるけど。
　でも、他から見た二人は男と女な訳だから健全と言えば健全なのよね。
　セシリアとかどう思ってるのかしら？
「セシリア、さっきのアリサとデュノア、どう思った？」
「え？　そうですわね……お友達になれて嬉しい、というところで

しょうか？」

鈍感！

というか、どうすればそんな解釈ができるのよ！？

……セシリアはダメね。

なまじお金持ちだからそこら変に疎い。恋でもすれば変わるんだろうけど。

よし、じゃあ一夏ね。

「一夏はどう思う？」

「うん、あぁ。そりゃあれだろ。不破さんの好きなのがシャルルってだけで。まぁ、不破さん、女の子も好きらしいしな」

「も？」

「だってほら、好きな子が女の子なんです！　ってたまに言うだろ？」

あーなるほど。

あれってそういう意味だったのね。なんか変な日本語だとは思ってたけど。

「ちょっといいか？」

「へ？　あぁ、ボーデヴィッヒ……あんたのファミリーネームって言いにくいわね。なに、ラウラ？」

「ちょっと、こいつとアリサのことを話しているみたいだからちょうど良いと思ってな」

「それで、なによ？」

「こいつ、女か？」

「「！？」」

え、ラウラって実は鋭い子なの！？

どっからどう見たって他人に興味はありません！　って感じなのに……

「その様子だと図星か。アリサは知っているのか？　もし知らないなら……」

……片想い相手の男が実は女でした、なんて事を心配してるのね。アリサが気を許すくらいだし、ラウラも良い奴ではあるのね。アリーナで私をバカにしたことを謝られてないからまだ許さないけど。

しつこい？　関係ないわ！

「でも、ラウラはどうして気付いたんだ？」

「うむ。こうして背負っていると男にしては重心が上にあり過ぎていることが分かるんだ。それに筋肉の質も男のものとは思えない」

「な、なるほどね……あぁ、アリサのはそれを踏まえての感情よ。安心して良いわ」

「そうか」

うーん。男らしいわね。

私達が家族だとすると……

ラウラが父親でセシリアが母親、私が姉……いや、妹かも。一夏は私の彼氏でシャルはアリサの彼氏……彼女ね。アリサ、あれで男らしいし。姉ポジションには……生徒会長？

なんか、年長者が頼りないから下がしっかりする家庭の典型ね。

「それにしても、デュノアさんのどこが良かったのでしょう？　もっと男らしい方のほうが将来楽だと思いますわ。アリサさんを引っ張っていけるくらい遠慮がない方でないと……」

ほら、娘の将来を心配する母親。

「アリサなりに惹かれるところがあったのだろう。私もアリサの苦労が絶えなさそうだとは思うがな」

娘のこと、分かってますよ？　みたいなちょっと情けない父親。

私も世話を焼かないとダメダメな姉を心配してる感じだし……これ、ちょっと面白いわね。

「あ、箒どうしよう」

「鈴？　独り言か？」

「あー、何でもないわよ」

そして私を気にしてくれる彼氏、なんてね。

「あ、ちょうど良いところに。アリちゃんまだ保健室？」

「楯無先輩、アリサなら保健室で寝てるはずですよ？」

「そ、ありがと」

うーん……あの人は実姉というより近所のお姉さんね。なんか、近所の妹分が倒れて心配みたいな感じ？

それにしてもあの瓶……いや、まさかね。校内だし。

◇

「んふふー」

可愛い寝顔。

こんな子が人を庇うために自分を切らせたなんて信じられないでしょうね。

悪戯するためのものも持ってきたけどしばらくは眺めてようかな。
調べてみたけどあのフランスの転校生、本当は女の子でアリちゃんの片想いの相手だとか。
好きな子のために頑張るなんて、青春小説の男の子みたい。
嫌いじゃないけど……危うい。

「目的のためとはいえ、命を懸けちゃダメよ」

こういう子は言っても聞かないんだろうけどね。
聞けば織斑君もそんな感じだとか。
二人の違いはそういう場面があったかなかったかの違いかな。

「命なんて懸けてませんよ……？」
「あれま、起こしちゃった？」
「いえ、喉が渇いて……あれ、その瓶、なんですか？」
「えっ？　あぁ、お見舞い品……みたいなもの？」

本当はおふざけで持ってきたワインだけど……

「ありがとうございます……ワインみたいな瓶ですね」
「み、見た目だけね……！　私のお気に入りのブドウジュースなの」

一杯注いでアリちゃんに渡すと、一口飲んで……

「これ、おいしーですね」
「え？」
「どうしました？」

いや、本物のワインじゃないですか！　ってツッコミを待ってたんだけど……気付いてない？

「私、ブドウジュース飲むの初めてです。ワイン、というかお酒も飲んだことないですけどね。ふふ」

あ、あー。

ブドウジュースで酔っ払う人もいるみたいだし……飲んだことなければ分からないかも。

これは、面白いことになるかも。

「社長！　もう一杯いっちゃいましょ♪」

「社長って……どんなシチュエーションですか？」

「うーん、美人秘書を侍らす敏腕若手社長とか☆」

「先輩そういうの好きなんですか？　パワハラによる性交渉とか」

「せいこっ！？」

あ、アリちゃんってこんな子だったっけ！？

いや、うん。

学年も違うから普段のアリちゃんは知らないけど……少なくとも私の前では性的な発言をするような子じゃなかったし。

ということは……二杯目で酔っちゃったのね！

「しゃちょー。おつぎします☆」

「すまんな、たてなしくん」

のってきた！

しかも呂律も怪しくなってきて……

てか、紙コップとはいえ一気飲みは危ないって！

……この子、将来悪い男に酔わされて騙されそう。今は私がその立場だけど。

「ぐいっと飲んじゃいましょー」
「えっと……パワハラなえっちぃ上司ですから……」
「なんか付け足されてひゃん!?」
「こほん……ぐへへへへ、ねーちゃんいいケツしとるのぉ。ほれ、もーちょい触らせんかぁー！　ってかんじです？」
「アリちゃんキャラが……ぁん」

ちょ、ちょっと!?
アリちゃんのキャラ崩壊とか、そういうことじゃなくて、手付きが妙に慣れてるっていうかツボを抑えているというか……！

「きもちーですかぁ？　それなら嬉しいです。えへへ……」

しかも、可愛いし！
笑い方は無邪気なのにテクニックは歴戦の……いや、まぁ、うん。
私も実はこういうことには詳しくないんだけど。
でも、うん。
今のアリちゃんはヤバいってことは分かるわ……

「アリちゃん、そろそろ……」
「ん？　うん、分かりました」
「ほっ」

正直、これ以上触られてたらお姉さん陥落していたわ。
おへそとか内腿とか……性感帯だったのね。
お姉さん、年下の女の子に開発されちゃった……なんて。
とりあえず着替えに行きたいかな。

「焦らしすぎましたねー。うん、ここからが本番だって二木さんもいってましたし！」

「ほ、本、番？」
「ええ、おへそとかで体をあったためたあとでもっと気持ちいいところをせめるとすごいよって教えてくれました」
「その、場所って？」
「いやー、それはその、ゴニョゴニョでゴニョゴニョ……ですよ」

二木さんって何者！？
なんで、そんなに詳細な攻め方をしってるの！？
お、お姉さんピンチかも……

「じゃ、しゃちょーさんの言うことには従いましょー！」
「いーーーやーーー！」

もう……お嫁にいけないっ！

◇

「ふーん、ふふーん、ふふふーん♪」
「アリちゃん、ご機嫌ね……」

こんばんは……汚されちゃった更識楯無です。
あれだけのことがあって、なお私の苦難は終わらないようで……
だって、アリちゃん酔わせたなんて虚ちゃんに知られたらなんて言われるか……
だからお風呂で汗をかかせて酔いを抜くことにしたんだけど、アリちゃん怪我してるのよねぇ。
だから今かいている汗を拭く程度にしてあげないと。
今日はボイラー点検の日だし、ついでに私は大浴場を使おうかな。
あ、サウナを使えば汗もかけるし傷が開くこともないかしら？

「せーんぱい♪」
「ん？」
「何でもないです！」

まぁ、さっきのエロモードは終わったみたいで今は上機嫌なだけで助かる……というより天真爛漫！　って感じで可愛い……お姉さんが美味しく頂いちゃおうかしら。
……なんて考えて美味しく頂かれたばかりだったわね。自重自重。
とりあえず、アリちゃんの周りの子達にお酒を絶対飲ませないように言わないと。なわか、大惨事が起きるような気がする。

「はい、じゃ、脱いでー」

見た目からは酔っているかは分からないのよね。
まぁ、そうじゃなきゃ大浴場まで連れてこれなかったけど。
服を脱ぐ動作も普通の女の子だし、よく言うことも聞いてくれるし……え、待って、まさか……

「アリちゃんアリちゃん、ちょっとお尻つけて座って足開いてみて★」
「？　分かりました」

……うん、予想通り。こんなに嬉しくない予想通りも珍しい。
地べたでいわゆるM字な状態のアリちゃん。普通なら絶対にできない恥ずかしいポーズも躊躇わずに……
この子、酔ってる状態で命令されるとなんでも素直に聞いちゃうんだ……

「危なすぎ……」

絶対に、絶対に飲ませないようにしないと。

「じゃあアリちゃん、体拭いてあげる☆」

「お願いしまーす」

さて、最初に包帯を解いてあげないとね……と思ったけど随分汗を吸っちゃってるわね。

これは先に換えの包帯持ってきてあげた方がよさそうかな？

「アリちゃん、包帯取ってくるから大人しくしててね」

「分かりました」

「それまでサウナに入っててね。ちゃんと水を飲むの忘れないでね？」

まぁ、今日は誰も来ないだろうし一人にして平気よね。

ちゃんと水を飲んでくれるか分からないけど……温度を低めにして急いで戻ってくれば平気よね。

◇

「織斑君、デュノアさん！　なんと今日から男子の大浴場使用が解禁です！　もともとボイラー点検で生徒が使えない日なので頑張っちゃいました！」

「おお！」

山田先生の言葉に、つい感動の声を漏らしてしまう。正直、そろそろ疲れを大きな風呂で落としたいと思っていたんだ。

やったね！

ああ風呂！　和の心！　文化にして伝統、いーやもはや魂だね！

風呂最高！

……なんて風呂賛歌を心の中で歌っている俺を一気に冷静にさせる爆弾が投下された。

「なので二人でお風呂にどうぞ！　ゆっくりしてくださいね！」

「……ふたり、で、入ってきます」

危ない。

危うく二人で入れるわけないでしょう！　と言うところだった。

ちらりとシャルルを見れば俺と同じことに思い至っているようで、若干顔が赤くなっている……

「では、はやく着替えを取りに行っちゃってください！　私は鍵をとってきますね！」

生徒のために働いているからか、山田先生は輝いていて……断ることもできないよな。

「……シャルル」

「困ったね……ま、まぁ、とりあえず、着替えを取りに部屋に戻ろうよ」

「大浴場に行くまでの間に名案が思いつけばいいんだが……」

二人で唸りながら着替えを取りに行ったけど……名案なんて思い付くわけがなかった。

だって、普通に考えて無理だろ？

◆

「うー……暑いです」

いつの間にか先輩もいなくなってますし……いったんサウナから出ましょうか。

◆

俺達が大浴場前に着いてからしばらくして山田先生もやってきた。

「あ、早いですねー。それじゃ、鍵を開けますよ？」

カタンという軽い音がして鍵が開いた。

そして、山田先生が扉を開け、

「あれ？　あれあれ？　今鍵開けましたよね？　……勘違い？」

なかった。

漫画みたいにずっこけそうになったぞ！

再度、鍵の開く音をさせて今度こそ扉は開いた。

開いちゃったよ……

「それでは、一番風呂をどうぞ！」

バタン

……シャルルと更衣室で二人きり。

これは、まずい。いかん。風呂には入りたいがシャルルと一緒にというのは論外だ。かといってシャルルを待たせるわけにも行かないし……

「あ、俺が入らなければいいのか！」

「だ、だめだよ！　一夏はお風呂好きなんでしょ？」

「愛してる！」

あれ、なんでシャルル引いたの？
お風呂は和の象徴だぞ？　愛さないわけがないだろ？

「……やっぱり男の人の裸が見れるから……」
「なんか言ったか？」
「ううん！？　なんも！　とりあえず、一夏入っちゃってよ！」
「ちょ、シャルル押すなって！　まだ服着てるから！　じゃ、脱ぐから……」

シャルルに更衣室の影に行ってもらって全裸になる。
手拭いを肩に掛けて……これぞ、日本男児の入浴スタイル！
さーて！　風呂風呂！

ガララッ

「んー、話に聞くところによれば桧風呂とかっ！？」
「わぷっ！？」

風呂場に足を踏み入れた途端なにかに……声がしたから誰かにぶつかって転んだ。
声も聞き覚えあるし……目を開いてみれば、

「んぅー？　……あ、織斑君もお風呂ですかぁ？」

四つん這い状態の俺の体の下に、すっぽりと不破さんが収まっていた……ってなんで！？

「一夏、すごい音したけど大丈夫？」

「あ、あぁ！　脚が滑っただけだ！　どこも打ったりしてないから心配しなくていい！」

危なかった。

うん、冷静になるために状況を確認しよう。

まず、全裸に包帯姿で、しかも体を隠そうともせずに仰向けになっている不破さん。

にこにこ

その不破さんの脚の間にひざを、頭の横に手を突いている俺。

いやな言い方をすれば、押し倒して正常位に持ち込もうとしているレイプ犯みたいだ。

うわ、本当に立ち直れなくなりそう。

「って落ち着けるかぁ！」

「一夏！？」

「いや、歌を熱唱していただけだ！　きーみーがーあーよーおーはー！」

「そ、そう」

ふぅ、国家のおかげで少し日本男児の心を取り戻したぞ。

「日本男児たるもの据え膳食わぬは恥！　なわけあるかぁ！」

「一夏、あんまり大きな声で歌わないようにね？」

「わ、わかった」

静かに、不破さんの対処に集中しよう。

桃色に光る長い髪。

慎ましやかな乳房。

男を受け入れるためのその場所はまだ幼く、毛も生えてな……
だから違うだろ俺！　流石に三回目はつまらないぞ！
気を取り直して……包帯が不破さんの白い肌を強調して……じゃない。
だいぶ濡れてるけど、これじゃ傷口が湿って開くんじゃないか？

「不破さん、その包帯かえたほうがいいんじゃないか？」
「そう言うなら……」

脇腹の包帯を解き始める不破さん……今じゃなくていいのに！
そう思って止めようと思ったけど、体が動かなくなった。
不破さんの傷を見たから……完治したとしても二十センチ以上の一生傷が残るだろう。女の子なのに……
でも、そんな傷があっても、

「綺麗だ……」
「よいしょっ」
「って、シリアスになってる間に肌の面積がっ！？　というか左足だけ持ち上げないで！　真ん中見えてる！　見えてるから！」

って、ああ！　しっかり見たから体が反応しやがった！　静まれぼか息子！

「おぉ……前の私の方が大きかったですね」

不破さんが俺のを見て……ってなに見てんの！？
てか前の不破さんのなにと比べたの！？

「織斑君、こーふんしてますね」
「しっ、ししししてな、」

「シたいんですか？」

だから女の子がそういうこと言っちゃダメだって！

くそ、落ち着け、落ち着け俺！

「……傷だらけの女の子とはシたくないですか？」

「そんなことない！　どちらかと言えばヤりたい！　……じゃねえって言ってんだろ俺ぇぇ！」

もう四回目だよ！　仏様も怒っちまうよ！　というかむしろ俺に天罰を！　この状況どうにかしてくれ！

「……いれても、いいですよ」

「はぁ！？」

「でも、私初めてですし……傷が開いちゃうので激しくしないでくださいね？」

ちょ、え？

待て、これは罠だ！

不破さんがクールじゃないし、そうに決まってる！

きっとドッキリ大性交……字が違うだろ！

ととりとりあとりあえとりあえず、おおれ俺くくーくーるくクールになれ。

というか、ドッキリなら不破さんの裸を見るなんて状況にならないよな。俺が得するだけだし。

え、なに、じゃあこれマジか？

いいの？

「あと、危ない日なので外に……」

「わ、わかった」

初めてとか、危ない日とか……最後まで言われたら抑えが効かなくなるから遮った。
俺よ……言葉のチョイス、もう少しどうにかならなかったか？
わかったはないだろう……
それと不破さん、挑発するためにわざと言ってるのか？　これで天然なら、破壊力やばいぞ。
というかもう理性が……

「ゃん……当たってますよぉ」

あ、切れたわ。感じちゃった、みたいな声出されたらもう無理だ。
さようなら理性。こんばんは性欲。
最近、誘惑してくる鈴とか、不破さんが好きなのはシャルルのはずとか、いろいろ考えたけどもう無理だ。
脇腹を刺激しないように不破さんの腰骨を掴んで固定する。

「不破さん、いれ、」
「一夏、入るよ？」
「る……シャルル？　ちょ待って！　不破さんとりあえず湯船の方に……！」
「はぁい。わかりましたー」

上機嫌に不破さんが離れていく……た、助かった。
……どっちから？

ガララッ

「一夏、なにしてんの？　ってそれ……！」
「っだぁぁあ！？」

隠させてぇ！

◇

一夏の……大きくなってる。何で？
も、もしかして、僕と入ろうと思ってとか……？

ちゃぷん……

「あれ、誰かいるの？」

湯船に浸かっている人がいた。
あのピンク色っぽいブロンドは……アリサ？　なんで？
山田先生が今日は使えない日だって言ってたのに……って湯船！？

「アリサなにしてんの！？　傷開いちゃうから湯船なんか入っちゃダメだよ！」
「ふぇ？　でも織斑君が……」

一夏が来たからびっくりして、ってことかな？
でも一夏がお風呂に入ってから結構経つし……というか、一夏はずっとアリサの裸を見てたってこと？
恥ずかしがってるアリサを見て興奮してた……とか。
あれ、ちょっと幻滅。

「って、そんな場合じゃなくて、一夏出てって！」
「お、おう！」
「それでアリサも湯船からでる！」
「わかりました」

うーん。
なんかおかしいなぁ、
アリサが素直すぎるし、なにより怪我してるときにお風呂に入るほど浅慮な人じゃないし……
ううん、考えるより先にやることやらなきゃ。

「アリサ、傷、見せて」
「傷……ですか？　しゃるが言うなら……」

アリサは言いながら髪を纏め始めて、その髪の束を体の前に持ってきた。
ん？　なにをする気なんだろう？
脇腹と太腿の傷だから髪の毛を纏めなくてもいいんだけど……

「その、見苦しいですけど、受け入れてくれると嬉しいです……」
「え……？」

アリサは脇腹の傷を見せるでもなく、もちろん太腿の傷を見せるでもなくて。
ただ、背中をこちらに向ける。

「うぁ」

つい、漏れてしまった僕の声に不破さんがびくりと肩を跳ねさせた。
不破さんの背中には火傷の痕。
……それも生半可なものじゃなくて、火事場から命からがら逃げ延びたことを示すような大きなもの。
背中の上半分が肌とは違う色をしていて……

昔、火事にあったって情報もあったけど……ここまで酷いなんて。
友達だけじゃなくて女の子としての自信まで奪われて……

「わっ！　……しゃる？」

そう思ったら、アリサを抱きしめずにはいられなかった。
……これまで、どれくらい苦しんだんだろう？
クラスから一歩引いているように……自分と人との間に線引きしているように見えるのもこの傷が原因なのかな。
もし、そうなら……

「その線、越えたいな……」
「しゃる？」
「あ、ううん、なんでもないよ」

なんとなく、アリサの態度を私の思い込みで勝手に決めつけちゃうのはダメな気がしてごまかしちゃった。

「……越えましょうか？　一線」
「へ？」

ちゅ……

……
えぇ！？　今、キスされた！？
どういう話の流れ！？
というか僕初めてなのに……ううん、女の子相手だったらノーカウントだよね！

「ファーストキスがしゃるにあげられました……幸せです。でも私

達はフランス人なのであんなのキスって認められないかもしれませんね……」

「あ、アリサ？　どうしたの？」

ぶつぶつ言ってると少し怖いよ……？

せめて、なにを言ってるかが聞き取れれば反応もできるんだけど……

「しゃる……失礼します」

「あ、ああ、アリサ！？　なにしてるの？」

なんで私の太腿をまたぐの！？

って、あれ、今なにか、ぬるって……？

「アリサ、もしかして興ふむぐぅ！？」

「ん……ちゅ、んぁ…レロ…くちゅ」

「ん～～～～～～！？」

いきなりなに！？

何でディープキス……あ、フランス人だからフレンチキス？

ってそうじゃなくて！　……あ、だめ、頭がぽーっとしちゃう。

「ちゅる……ぁふ、ん、んぅ…」

「ん、ぁ、ちゅ……あ、うぅ……」

こくん

……アリサの唾、飲んじゃった

……なんか、ブドウみたいな香りで甘くて美味しいかも。でもちょっとお酒みたいな……？

「しゃる、寝てください……」
「うん……うん？」
って、僕、状況に流されてる！？
そもそも、アリサの傷が……って！
「アリサ！　傷開いてひゃん！？」
優しいタッチでお腹を触られて力が抜けたところを押し倒された。
傷開きかけてるのにそんなことしちゃ、
「そんなことより、身体が熱くて仕方ないんです……しゃる……はい♪　えへへ」
アリサが脇腹から滲む血を人差し指で掬って僕の口の前に持ってくる。
……な、舐めろってこと？
うぅ、笑い方は可愛いのにエッチだよぉ……というか変態さんの域に入ってるよぉ。
◇
「わ、私が包帯を取りに行ってる間になにが……」
ＩＳ学園唯一の少年は更衣室の壁に頭を打ち付けて、
「俺は男のくずだ！　社会の害悪だぁぁぁ！」
って叫んでるし、大浴場の中では、

「あ、アリサっ、そこは！」

なぜか、またエロモードに入ってる酔っ払いのアリちゃん……

本当に、なにが起きたの……？

怒られるの覚悟で虚ちゃんに相談してよかった……

あとで怒られることは決まったけど手段を用意してくれた。

流石に、このままじゃアリちゃんが可哀想だし……正気に戻ったら不登校になりそうね。

よし、行くわよ……！

「失礼するわ！」

手順としては大浴場に突入、そしてアリちゃんの口にこのハンカチを押し当てるだけ！

絶対に会話はしない。

「アリちゃん、ごめん！」

アリちゃんの頭を掴んでハンカチを……

スカッ

「え……？」

「先輩？　邪魔するんだ……？」

避けられたっ！？

……しかも、すごい闘気！

「でも、ちょうどいい機会ですね。先輩とは手合わせしたいと思っ

ていたんです」
「ふ、ふーん。お姉さんはちょっぴり厳しいわよ？」
「それでこそ、血が騒ぐというものです」
「知ってる？　ＩＳ学園で生徒会長っていうのは最強の称号なんだよ」
「では、明日は最年少生徒会長の誕生式です！」

速っ！
これが圓明流の片割れの力……

「これで、なんで暗殺者なのよ！」
「……不破の始まりは織田信長の時代まで遡ります。信長の全国統一には私達がいたんですよ」
「暗部中の暗部ねっ！」

こんな力で暗殺とか完全にオーバーキルよ。

◇

「もうっ！　お風呂で暴れちゃだめじゃないですかっ！」
「ごめんなさい」
「不破さんも！」
「……ごめんなさい？」

なんで、私は山田先生に謝っているのでしょう。
しかも、保健室のベッドに縛り付けられて……脇腹の怪我もなんだか痛みが増している気がしますし。
んー、昨日の記憶があやふやです。
楯無先輩がお見舞いに来てくれたところまでは覚えているのですが……

そういえば今朝、織斑君には土下座で謝られてしまいましたし、シャルは顔は赤かったですし……

先輩も、偶然手が当たってしまっただけで飛び退くんですよね……

「不破さんは怪我人なんですから、次はあんなことしちゃダメですよ！　気絶している不破さんを見て、私泣きそうになったんですからね！」

「はぁ……」

先程から聞く限りでは大浴場で先輩と喧嘩したとか……手に細かい切り傷がついているのでタイルでも叩き割ったのかもしれませんね。

「反省してますか？」

「えっと、はい」

「そうですか！　ではお説教はここまでです！　絶対安静ですよ！　暴れたりしたら面会謝絶で閉じこめちゃいますからね！」

律儀にお大事に、と言い残して山田先生は退場しました。

保健室には私と先輩の二人きり。

「昨日、何があったんですか？」

「うーんと……危うく最年少生徒会長が誕生するところだった……かな？」

……よくわかりません。

35. Est-ce que cela devient l'objet

う、運営さん。
削除の前に一声かけてね！
修正するので（

と、書きながらビビりまくりでした
じゃあ、書くなよｗｗｗて話ですけどね！

具体的なエロワードも伏字もないから大丈夫なはず！

実は鈴音モノローグ、楯無登場前で終わりになるはずでした。
でも、兵装全くだしてないし……という感じで続行です、

36．Ｐｅｔｉｔｅ　ｍ?ｆｉａｎｃｅ（前書き）

「少しの不信」

ゴメン、なかなか気に入らなくて、ちょっと遅れました（

あと、前回の更新でＰＶ６０００００、ユニーク６００００、お気に入り５００超えました有難うございます！

ちなみに前回の更新のＰＶは約３５０００、それまでの最高記録の約１．５倍

……みんなえっちですね！

36. Petite m?fiance

「っは！　……夢ですか」

最近、というより全学年のトーナメントが終わった金曜日から夢見がいいんですよね。

なんでか、お風呂でのえっちなシチュエーションが多いのですが……朝から悶々とするのでやめてほしいです。

結局、学年別トーナメントは一年生は優勝者無し、二年生は楯無&黛先輩ペア、三年生はダリル先輩ペア、という結果になりました。

まぁ、全ペアが専用機持ちを擁しているので予想通りではありますね。

「えっと、試合の動画は……ここまで見ましたね」

もう日曜日なのですが寮での絶対安静を言い渡されています。

なので暇を見つけてはトーナメントの動画を見ているのですが……タッグだとやはり楯無先輩のペアが強そうでした。

でも防御という面なら三年生ペアもなかなかです。

「うーん、楯無先輩の方は回避が難しいのにあの威力なのが頂けないですね。ナノマシンを使った水の操作なので……強力な電磁波か電流を使えれば対処できますかね？」

また親父（パパ）に頼みましょう。

この前も対ラウラさん用の兵装を頼んだばかりなので心苦しいですが……可愛い娘のためなので頑張ってくれるはずです。

まぁ、それよりも拡張領域（バススロット）の増設をどうにかしないといけませんね……

一応、カゲロウの自己進化プログラムのお陰で増やそうと思えば増やせるのですが……一つの兵装分の領域を造るために数十時間、そのための動作をしないといけないんですよね。

具体的には新しい兵装の使用です。昔はシャルの兵装のテストをしていたので楽だったのですが今はそうもいきませんし……

篠ノ之博士に見せればどうにかしてくれそうですが……無理でしょうね。

偏屈で自己中という彼女のパーソナリティは有名すぎるほどに有名ですから。

「今ある装備で戦うとすると……勝つのは無理かなぁ」

カゲロウはそもそもＩＳで競うためにできていないんですよ。むしろ、ＩＳ以外と戦うことを目的に設計されてますからね。戦闘中、まともに使えるのは常時展開型兵装の狼鋲（ヴァンネイル）と討鬼（ドラクル）の鋼杭（ペイン）くらいですからね。ビバ格闘戦です。

三年生ペアの防御は確かに硬いですが……タイマンの場を作り上げることができれば勝てないこともないでしょう。

「あえてペアで戦うなら……やっぱりラウラさんかセシィと組むのが良いでしょうね」

シャルと組みたい、とは思いますが冷静に判断すると互いの戦い方を完全に知っている上、交戦距離が被っていないセシィや、格闘戦主体の私の行動をサポートできるラウラさんのＡＩＣは強力です。

ただ、対多戦では継戦力のあるシャルと組んでもよさそうです。

鈴ちゃんと組む場合は……鈴ちゃんを主として、隙を見て私が敵を落とす感じの作戦になりますかね？　暗殺っぽい仕事ぶりになりそうですが。

織斑君とは組んでもメリットがあまりないですね。交戦距離は被

っていますし、零落白夜は強力ですが時間をかければ同じだけのダメージは与えられますし。

コンコン……

「はい、どちら様ですか？」

「僕だよ、シャル」

「うぇ！？　えと、どうぞ！　散らかっていますが！」

ななな、なんでシャルが！？

いえ、昨日も来てくれたのですか、今は鈴ちゃんもいませんし…

…あれ、このパターンは一昨日の夢のパターンです！

確か、なんだかんだでベッドに抑えつけられて美味しく頂かれちゃうんです！

あぅ……ずっとベッドの中でしたから汗臭いかもしれません。下着も子供っぽいですし……

「どうしたの？」

「いえ、下着が……じゃなくて汗でもなくて……」

「ん？　あー、そっか、汗かいちゃってべたつくんでしょ？　着替える？」

「ふぇ！？　え、えっと、はい。じゃあ、少し外に……」

「ううん。汗も拭きたいだろうし手伝うよ。背中とか拭けないでしょ？　下着はどこ？」

「え、え、えっと、そこのクローゼットの……あぁ、そうです。そこです」

～～～～～～！

しゃ、シャルに私の下着見られてますっ。

どうしましょう……着替えるってことはやっぱりシャルの目の前

で裸にならないとダメですよね？
は、恥ずかしい……

「うわ、こんな大人っぽいのまで……え、えー、これとか透けてるよ？」
「み、みみ、見ないでください！　え、えっち……」
「ご、ごめん……でもアリサの方が……」
「？」

私の方がなんなんでしょう？
んー、でもシャルはどの下着を選んでくれるんでしょう？
ある意味、シャルが私に付けてほしい下着ってことですよね？

「あ、これ可愛い」
「それ、結構、気に入ってます」

シャルが選んだのは控えめに白いフリルがあしらわれた黒の下着でした。下はローレグなのでちょっぴり小悪魔仕様です。
制服が白なのであまり穿く機会がないんですけどね。あの制服、夏服になると色の濃い下着は透けちゃうんですよ。
透けてるのはやっぱりだらしないですからね。

「じゃあアリサ、脱がせるよ？」
「え、自分で着替えますよ！」
「だめだよ。自分でやろうと思うとどうしてもお腹の怪我に負担がかかるでしょ？　手間だとか思わないから気にしなくていいよ」

それじゃ、背中の傷が……！
傷が原因でシャルに嫌われるなんて思いませんけど、逆に同情されるのだって嫌なんです。

シャルには対等に扱ってほしいんです……だって、同情されてしまったらシャルはもう私じゃなくて、酷い怪我をしている可哀想な女の子しか見なくなっちゃいます。

私を、友達じゃなくて、慰める対象として見てしまいます……

シャルに隠し事はしたくないですけど、これは……見られたら、どんなに努力しても心の底からは愛してもらえなくなります。

そもそも、まだ愛されているわけでもないのに何を言っているんでしょう？

「あ、あの。自分で着替えますから……」

「背中のことなら知ってるよ」

「……え？」

「アリサ、金曜日のこと覚えてないんだよね？」

「はい……酔って先輩と一緒に大浴場を壊したことは聞きましたけど、それ以外は何も覚えてません」

「うん……その時、傷痕見ちゃったんだ」

ああ……じゃあ、ここに来てくれているのも、火傷のことがあったからなんですね。

私がシャルを守って怪我をしたので責任を感じて、とか理由はいろいろ考えていましたが……その理由だけは、嫌でした。

もう私はシャルにとっての普通の女の子ではいられないんですね。

これじゃ、シャルから向けられる笑顔が同情からくるものだと思えちゃうじゃないですか……シャルはそんな子じゃないとは思いますけど、でも、私はそう受け取っちゃうんです。

だって、私なら同情してしまうから……！

「アリサ……その、怒ってる？」

「怒ってはいます。でも、シャルに対してじゃなくて……自分勝手な私に対してです」

「……」
「お願いです。今は、ひとりに……」
「あの！　せめて、着替えだけでも手伝わせて？　そのままじゃ風邪ひいちゃうよ……」
「……っ！」
「アリサ！？」

苛立ち、悲しみ、喜び、その他様々な感情が混ざり合って、何がしたいのかが分からなくなった私は……
部屋から飛び出しました。

◇

「アリサ……」

やっちゃった……僕は傷痕のことなんて気にしないって伝えたかっただけなのに。
もっと、考えなきゃいけなかったかな……
酔っていたとはいえ、本当に見せたくなかったら見せないだろうって思い込んでたかも……
傷ついてるかな……とにかく追いかけなきゃ！

「どこ行ったんだろう……？」

アリサのことは全然知らないから見当がつかない……でも、誰かに聞くのは違う気がする。とにかく私が見つけなきゃ。

◆

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

どこに行ったらいいんでしょう。
なんで、私は走っているんでしょう。
分からない……分からないけど、とにかくシャルから離れたい。
どうして、火傷が……よりによってシャルに……！
酔っていた私は何を考えていたんですか。
傷を見せてシャルの同情心でも煽りたかったんですか？
それで、シャルが自分大切にしてくれるとでも？
バカですか……そんな風に大事にされたって……それなら、シャルに壊される方が何倍もましです！

「あぐっ……！」

バタンッ！

「痛……あれ？」

脚が……動かない……
なんでですか？
私は一刻でも早くシャルから離れたいのに……！
そういえば、追っかけてくれているんでしょうか……？

「不破ちゃん!?　どうしたの!?」

ん……二木さん、ですか？
ああ、ここ、一松さんと二木さんの部屋の前ですか……

「二木ぃ、さっきの音なんだった？　って、うわぁ……不破ぁ。あんたまた暴れて……絶対安静じゃなかったの？」
「みぃちゃん、なに落ち着いてるの!?　こんなに血が出て、不破

さん死んじゃう！」

三好さんも一松さんもいました。
三人で部屋にいたんでしょうか。

「大丈夫です……ちょっと疲れただけで」
「まぁ、死にはしないだろうけど……太腿の傷、開いてるよ？　一松、織斑先生呼んできて。二木は救急箱」
「わ、わかった！」

そんな、慌てることないですよ……転んじゃいますよ？
でも、体全体が重い……傷を確認するのも億劫です。

「不破、下脱がすよ？」
「こんな、人前で恥ずかしいですよぉ……」
「ふざけてる場合じゃないんだって！　不破だって痛いんでしょ！？」

痛くなんて……シャルを守った傷ですし……

「ただの、掠り傷ですよ……？」
「バカ！　六〇口径の弾丸が掠ったら立派な大怪我だよ！　だいたい脇腹も斬られてるのに、何で寝てないんだって！」
「……私が、辛そうにしてたら……」

シャルとラウラさんが気にしちゃうじゃないですか……二人とも、悪気はなかったのに。

「救急箱持ってきたよ！」
「サンキュ。じゃあ、消毒して包帯かえるから……二木ぃ、手伝っ

て」
「うん！」

◆

バタバタバタバタ

「まただって！」
「しかも今度は廊下で。大浴場も壊すし、いい加減にしてほしいよね」
「でも、トーナメントでのあれはかっこよかったと思うけどなぁ」

今のってアリサのことだよね……？
どうしたんだろう？

「ごめん、今の話、聞かせてくれない？」
「でゅ、デュノア君！？」
「あぁ、不破アリサがまた倒れたとか。今度は廊下で」
「場所は！？」
「あっち」
「ありがと！」

どうしよう。
また、僕のせいだ……！
大浴場のだって、止めようと思えば止められたし、そもそもトーナメントで僕を守ろうとしなければ、アリサは怪我しなかったのに……！

「ごめん、どいて！」

野次馬を掻き分けて騒ぎの中心地へ。
そこにいたのは一組で不破さんと仲良くしている三人と、太腿から血を流しているアリサ……

「あ……しゃる……」
「アリサ……？」

なんで、笑ってるの？
僕が余計なことしなければ、アリサはこんなことにならなかったのに……

「また、君なんだ……」
「え……？」

僕を睨むこの人は、二木さん、だっけ？

「また、君のせいで不破ちゃんはこんなことになってるの……？」
「ふ、ふたちゃん！　ダメだよ！　今は不破さんが、」
「イッチー何で止めるの!?　全部デュノア君のせいじゃん！　噂が原因でいじめられて、原田さんを殺そうとするくらい追い詰められて！　不破さん、ペンが手に刺さったのは運が良かっただけですって言ってたんだよ!?　デュノア君が不破ちゃんのなんなのか知らないけど、不破ちゃんが可哀想だよ！」
「二木ぃ、今ソイツを責めたって仕方ないでしょ。手伝ってよ」

興奮気味の二木さんを三好さんが止める。
彼女は自分の服に血が付くのも気にしないでアリサの止血を試みている。
氷嚢に縛った太腿、直接傷口を押さえての止血法……でも、どれも効果が出ていないようにみえる。

「でも、まだ、不破さんをいじめてる人はいるし、今だってデュノア君が撃った左脚が痛くて歩けないくらいになってるのに……！」
「いいから手伝ってって！　血が止まらないの！　私達が何もしなかったら手遅れになるかもしれない！　死ななくても歩けなくなるかもしれない！　二木はそれでいいの！？」
「それは……」

アリサ、まだいじめられてるなんて、一言も言わなかった……あの噂が消えたのと一緒に無くなったって……
それに、歩けなくなるって？　昨日まではふつうに……痛そうな素振りも見せないでにこにこしてたのに。
……ううん。考えてみれば分かることだね。脇腹を斬られて、足を撃たれて、痛くないわけがないよ。ずっと、我慢してたんだ……
それなのに、僕は気付かないどころか刺激して走らせて……

「アリサ……ごめん。僕、何も分かってなかった……」

アリサが笑ってくれるから、何かしてあげれば僕の代わりに怪我をさせた償いになるかと思って……逆に気を遣わせてたなんて。

「デュノアも謝る暇があったら、」
「しゃる……平気ですよ。三好さんも、私はこの程度でどうにかなるほど柔な鍛え方していません。二木さんも、怒ってくれてありがとうございます……」

アリサがまた、強がっちゃう……周りに心配をかけないようにって……
さっきまでどこを見てるのか分からなかった目も、今はしっかりと焦点があってる。

「不破、いいから静かに、」
「大丈夫ですって……ほら、立てますから……」
「不破ちゃん、無理に立っちゃ……！」
「無理なんか、してませんよ……？　ぅわ、結構血だらけで……皆さんごめんなさい。私が責任を持って綺麗に拭き取りますから……」

震えながら、力を込めて……アリサが立ち上がる。
立ったことで流れ出す血の量が増えて……
なんで？　なんで、ここまでするの？　僕のためにそこまでする理由は何？
そもそも、なんで、僕を守ろうとするの？

少しだけ、不破さんが怖い……

◇

「どけ、どかんか。関係ない生徒は部屋に戻れ！」
「織斑先生、不破さんが……！」
「分かってる。一松も部屋に戻れ」

やっと先生きた。おそいって。
不破も立ち上がるし、デュノアも立ち竦んでるし！
全然血は止まってないのに立ち上がったらダメじゃん！
本当に歩けなくなったりするかもしれない。
二木を落ち着かせるために冷静を装ってたけど、そんなことない。
本当は、内心慌ててた。
皆、不破に何かができるわけじゃないから、私が見様見真似で止血をしようとしたけど全然止まらないし、デュノアがきて、不破が立ってから今まで以上の血が流れてるし。

なんで、不破は気絶しないのよ！

「三好、ご苦労だった。休んでいいぞ」
「で、でも不破は……！」
「安心しろ、気絶させる」

言うやいなや、先生が不破の首筋に手刀を落として、気絶した不破を抱きかかえた。

「とりあえず、コイツは保健室に連れていく。悪いが、誰か廊下を掃除してくれ。それとデュノア」
「はい……？」
「お前は不破への影響が強すぎるようだ。しばらく不破と接触するな」
「でも……分かりました」

今は、それが一番いいんだろうね。
二木も言ってたけど不破とデュノアの間に何があるのかは知らない。
でも、今は悪影響にしかならないだろうし……

「じゃ、二木ぃ、掃除しちゃお」
「あの、ご、ごめん……今更気持ち悪くなってきた……」
「そっか、奇遇じゃん」

光景もだけど、凄い臭いしてるからね……

36. Petite m?fiance（後書き）

読み直したら前回で随分変な方向に突っ走っていたのでバランスとってみました（

ＤｍＣ４でボスラッシュをノーダメージ攻略してたら、アリサで誰かに超絶コンボ決めたくなった。ケルベラスとか装備させようかな（ダンテさんマジかっけぇ愛してる

37. Blanc espace（前書き）

「白色空間」

ゲリラ投稿でびっくりさせちゃる！
と言いつつスランプ入った気がします（

二巻分も終わり！
次は水着巻ですね！

37. Blanc espace

しばらくアリサと関わるな、か。
……仕方、ないよね。
だいたい、一瞬でもアリサのことを怖がった僕だから……アリサに会う資格もないよ。
でも、

「……謝りたいな」

そんなこと、できないのも分かってる。
また、同じようなことになるかもしれないし……二木さんの言ったとおりなら、謝るには遅すぎる。
まだ、生徒にいじめられていたなんて思わなかった……僕との確執が原因だと思ってたから。
でも、関係がなかった。
不破さんは一夏と仲がよかったからもとから少なくない人に疎まれていて、そこに僕との関係性までがあったから余計に嫉妬されてたんだね。
僕との噂はただの起爆剤。
状況は似ているのにリンたちが何にもされていないのは、多分アリサの雰囲気が小動物みたいだから。
この間の原田さんの件で多くの人が見方を改めざるを得なくなったみたいだけど、それでも納得できない人はいると思う。
悪い子じゃないのに……周りの環境がアリサを苦しめてるのかも。

「シャルル、大丈夫か？」
「ん……ありがとう、一夏」

一夏の優しさには下心がないから素直に受け入れられる。
多分、女の子に対する興味が薄いから何だろうけど……今は、その優しさが素直にありがたい。
でも、リンとラウラは大変だね。どうにかして一夏の中に女の子に対する興味を芽生えさせなきゃいけないんだし。

「シャルル。俺、一つ思いついたんだ。でも、これは結果的にいろんな人に迷惑をかけるだろうし現実的じゃないと思うから……」
「思いついたって？」
「あぁ、そっか、そこからか」

一夏は何を思いついたんだろう？
少しためてニヤリとした得意げな笑みと共に、

「不破さんをちょっとだけ助ける方法」

そう言った。

一夏の提案した方法はすごく単純だった。
前にアリサが一夏に対して提案した一夏が僕を助ける方法と同じくらい根本的なところを突いてるし、僕と一夏が協力しないと実行できない。
必要なのは、僕の勇気。
いろんな人を困らせてたとしてもアリサを助けたいっていう気持ち。
でも、僕はどう思ってるのかな。
確かにアリサのことは大切だと思ってるけど、アリサのためにもっと多くの人を不幸にする可能性に賭けられない。
自分でも、薄情だと思う。

アリサは身を挺して……精神的に辛いことも我慢して僕を助けてくれたのに、僕はアリサを助けるための覚悟ができない……

「アリサは、なんであんなことができるんだろう……？」

初めてあったときからアリサは僕の数歩先を行ってる。最初はＩＳに乗るための覚悟を教えてくれたし、今は彼女の全てを代償に僕を守ってくれてる。

育ちなら、僕の方が苦労しているのに……なにが違ったんだろう。

……ダメだ。考えが纏まらないし、一日寝て、また明日考えよう。

「一夏、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

いい夢見たいな……

◇

「あぁ～！　やっときた！」

「ま、早い方だったと思うけどな」

……あれ、誰？

白い、壁も床も天井もわかれていない空間で僕は誰かに会ってる。

誰だろう。

二人とも声はするのに姿が見えない。

「まぁ、待ってろ。すぐ見えるようになるから」

「私はこのままでもいいと思うんだけどねぇ……」

「そう言わずに、ここは協力してくれよ嬢ちゃん」

段々と二人の輪郭が浮かび上がってきて……
ひとりは僕たちと同年代の男の人。
もう一人は……アリサ？

「だいせいかーい、おめでと！……でもね、ちょっと違うよ。私は本来のアリサ。あんなにネガティブじゃない。あぁ、あと、本来の私はもっと可愛い服着てて髪の毛もこうじゃないんだけど本当の姿を見せたら私（あの子）が困るからね」

……アリサの姿を借りてるってこと？　確かにアリサと違ってクール？　な感じだし納得かも。
……うん、夢だね。
夢の中で夢って気付くのも珍しいなぁ。

「今、私達はＩＳのコアネットワークを介してあなたの無意識に干渉してる。あぁ、もちろん私達の発信元はあなたの知る不破アリサよ」

夢にしては現実的な言葉が出てきたけど夢だよね！

「嬢ちゃん、そんないっぺんに言っても混乱するだけだと思うぞ？」
「でも私（あの子）が起きる前に全部伝えないと！」
「ま、そうだけどさ」

えっと、今、私達って言ったよね？　じゃあ、男の人の方もアリサと何かしらの関係があるってことなの？
女の子の方は二重人格とかで納得できないこともないけど……

「二重人格じゃないよ。私はあの子に食べられちゃった不破アリサ。あぁ、もちろん比喩よ？」

どういうこと？

「私はね十歳の誕生日の後、しばらくして壊れちゃったの……その原因はこの男。なんでか知らないけどね、誕生日を迎えた瞬間にこの男の記憶とか人格とか……まぁ、いわゆる人間の中の魂全部（形の無いもの）がごそっと私の中に溢れかえったの」

「続けるよ？　それで私は苦しんだ。だって、いきなり知らない人の知らない記憶が自分のものになったって受け入れられる訳ないじゃん。楽だったのは最初の数日だけだったよ」

「ちなみに俺も同じだ。いきなりこの嬢ちゃんの記憶が溢れて、嬢ちゃんと同時に壊れた」

「今の不破アリサはそのときに生まれたの。壊れた二つの精神を無理矢理繋ぎ合わせて人の形に押し込めたの。まぁ、必要のない記憶は省いたけどね」

必要のない記憶って？

「背中の傷のこととその原因。とは言っても私（あの子）も最近気づき始めたけどね」

え？

「知ってるかもしれないけど九歳の時に学校で火事が起きたの。その時に、この火傷痕が出来た。そこまでは私（あの子）も知ってる。でもね、原因は知らない」

原因って……なに？

「もう気付いてるんじゃない？　まぁいっか。見ての通り、私は可愛いから同級生の男子にからかわれてたのよ。あの日は理科の実験でバーナーを使ってた。男の子は火なんて怖くないぞって強がって、あろう事か私にバーナーを向けてきた」

それで、服に火がついて……とか？

「それだったら傷痕はもっと酷いことになってたわ。私は、そのバーナーを叩き落としたの。私達の学校は木造でさ、先生も耄碌してたから火は止まらなかった。唯一、私だけがその落ちたバーナーを拾える場所にいたけど、一人で逃げ出した」

それで火が燃え広がったんだね？

「うん。詳細は省くけど、そのクラスで助かったのは私だけ。先生も生徒も皆逃げ遅れた。遺体はね……先生がね、皆を抱きしめて守るようにしてたんだって。感動的だね」

……それで？

「あとは分かるでしょ？　唯一の生き残りで火事の原因を知ってるのも私だけ。あんな怖いこと誰にも言えなくて、だから誰も私を責めない……だから、自分で自分をヒトゴロシ！　って責めて。すごく、苦しかった」

だから、そういう記憶はアリサに渡さなかったの？

「うん。でもね、やっぱり傷痕と一緒に引き継がれたみたい。自分を軽視して人を助けるのもトラウマみたいなもの何じゃないかなー？」

……自分だけ助かったから罪滅ぼしのつもり？

「かな。でもそれだけじゃないよ。一人になりたくないの。捨てられたくないの。自分はヒトゴロシだけど、それ以上に価値があるってことを示さないといけないの……まぁ、私（あの子）の罪はもっと増えたみたいだけどね」

「それは、俺のせいだな。俺は覚悟してたけど、あの子が代わりに行くことになるなんて契約したときは思ってなかったんだ。あの戦争のはるか前に俺が壊れて主人格があの子になったから……あの子が手を汚すしかなかった。なまじ俺の記憶を持っているから、自分が実行する必要性を疑うこともできなかった」

契約？　戦争？

「あぁ、いや、気にしないでくれ。とにかくあの子は普通の女の子よりはるかに重いものを背負ってる。それだけは知っておいてくれ」

「あぁ、そうそう……私（あの子）は、自分が生ゴミ以下の人間だと思ってる。私達のせいでね。だから、あまり、私（あの子）を必要としないで……できれば放っておいてあげて。必要とされると、求められたことに一生懸命になっちゃうのよ。自分の価値を認められたと思って嬉しくなっちゃってさ。でも、必要じゃなくなったとき、余計に傷つくの」

よく……わからないよ。

「簡単に言えばね。私（あの子）は都合のいい存在なの。助けが必要だって言えばほいほいついていくし、もういらないって言われれば涙をこらえて身を引くの。こればっかりは、直らないわ。まぁ、それを利用して私（あの子）を使い潰すかどうかはあなたの勝手だけどさ」

そんなことしたくない……でも、もうしちゃってる。
僕の知らないところで、アリサは頑張ってた。

「え？　そうなの？　……ふーん、じゃ、ちょっとずつ変わってきてるのかもね。自分から何かをやるように出来てないはずだし」
「ま、一安心だ」

よく分からないけど……ダメなことじゃないんだね？

「うん。というか相当いいことだよ。いいこと聞けたからいいこと教えたげる。あなたたちが考えてること、多分、いい結果につながるわ」

一夏が考えた奴？

「お、じゃあ俺も。シャルロット・デュノア。君の次のルームメイトはラウラ・ボーデヴィッヒだ」

そ、そうなんだ……？

「ま、てことでバイバイだよ。機会があればまたね。ほら、起きな」

ん……もう、朝なんだ……

「ああ、そうだ、その作戦実行したら、私（あの子）にフォローよろしくって言ってあげて。でも、その代わり、あの子が暴走しないように見張ってあげてね。やりすぎてたらやめろって言えばいいから」

◇

「ええと、今日は皆さんに転校生……？　を紹介……？　します。ええと、それではどうぞ」
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」
「ええと、デュノア君はデュノアさんでした……部屋割り……」
え……シャル、何でいきなり？
「女？」
「ああ、美男子じゃなくて美少女だったのね、残念」
「てか、織斑君と同室と言うことは……」
あぁ、クラスが騒がしく……織斑先生に自重できないならシャルに近づくなって言われましたけど、これはクラス代表の仕事ですよね。
「はい、皆さんシャルが可愛いのは私が知っていますからお静かにお願いします！　怪我してても私、仕事はします。ついでに私に負担をかけると織斑先生が怒ってくれるらしいです」
「あれ、だいひょー、接触禁止は……？」
「シャルル・デュノアとの接触禁止であってシャルロット・デュノアとはなにも言われてません。なので問題は、」
「無いわけないだろう、馬鹿者」
えー……織斑先生は頭が固いです！
って、シャル、どうしました？
ん？　耳を貸して？
「……フォローよろしくね？」
「……」

「ふぅ」
「ひゃん！？」

し、思考停止している耳に息ふぅしないでくださいよ！
び、びび、びっくりしたぁ！
……でも頼まれちゃったので頑張ります！
とりあえずはイグニッション・プランを停滞させて……親父（パパ）に発破かけて……シャルにいろいろしてあげられます！

「でも、アリサの傷がまた開くのはイヤだから当分は大人しくしてて？」
「わ、わかりました」

んー……？
傷痕のこととかなにも解決してませんけど……シャルが笑っているからいいかな。
どう思われてても必要としてくれてますし。

「不破、デュノア、もう一度言うが接触禁止だ」

ブゥブゥ
私の脳内会議はブーイングの嵐ですよ！

◇

「いいのか？　あんなこと言ったら、またあの子頑張りすぎちゃうんじゃないか？」
「そうね。でもきっと大丈夫よ。私（あの子）は捨てられないわ」
「でも、失敗したら、」
「しないわよ」

「……随分買ってるんだな？　恨んでるんだと思ってたぞ？」
「恨んでないわよ？　私（あの子）のおかげでこうしてメグルといられるんだから」
「ロリコンの気は無いんだけどなぁ」
「いいじゃない。背徳は蜜の味よ？」
「辛いものの方が好物だ」
「メグルってマゾだったのね」

37. Blanc espace（後書き）

超、急ぎ足。
接触禁止は解けてません（

男人格「メグル」と「10歳までのアリサ」はアリサの中でラブラブな設定（

38／SP1．　Rin's　diary　－temptation－（前書き）

インフィニット・ストラトスペシャル
ＥＸと違って本編でも外伝でもないです。

書く気が起きなかったのに加え、鈴から一夏への誘惑ってなに？
という質問がメッセージで送られてきたのでそれに答えます。
とかいいつつ、前にサイトに載せて削除したものにアリサの存在を突っ込んだだけです（
アリサじゃなくて、ラウラが登場してました（

ちなみに時系列はシャルがアリサの部屋に泊まっていた間の一日。
でもｉｆ話、演劇（ロールプレイ）として受け止めてください。
どうせなら楽しみたかったので（
ここで
ｃａｕｔｉｏｎ！　すごい勢いでキャラが壊れてます。苦手な方はブラウザの戻るを（ｒｙ
ｃａｕｔｉｏｎその２！　紳士仕様です「アーナル程」という言葉だけで妄想できる人以外は（ｒｙ
ｃａｕｔｉｏｎその３！　消すかもしれない！

出演
不破アリサ（紳士仕様）：不破アリサ（ＩＳ学園三年生、生徒会長
シャルロット（紳士仕様）：シャルロット・デュノア（ＩＳ学園三年生
鳳鈴音（乙女仕様）：鳳鈴音（ＩＳ学園三年生
織斑一夏（ムッツリ仕様）：織斑一夏（ＩＳ学園三年生

邦題「頑張る鈴ちゃん」

38／SP1．Rin's diary －temptation－

「アリサ！　起きた！？　起きたわね？　じゃあ私、一夏の部屋行ってくるから！」
「んみゅ～？」
「デュノア！　責任もって起こしなさい！」
「こんなに可愛いアリサを起こすなんてとんでもない！」

……うわぁ。
朝からきっついテンションね……
目、血走ってるわよ？

「あーたん、可愛いよぉ。お持ち帰りぃぃぃ！　……はぁはぁ」
「持ち帰られてるのはデュノアよね」
「……逆転の発想！？」

見たまんまよ！
調子よく部屋に住み着いてるのアンタでしょ！

「んぅ……五月蠅いですよぉ。おふぁやうございましゅ、鈴はん」
「欠伸しながら喋らないの。朝ご飯はデュノアが用意してくれるから。私、行くわよ？」

まだ、朝の五時……一夏まだ寝てる！　いける！
れっつ夜這い！

「あ、リン。僕とアリサで用意したテキストで予習した？　あとアリサは朝ご飯なにがいい？」
「バッチリよ！」

「私の朝ご飯は……ソーセージとミルク、じゃなくてヨーグルトがいいです。けふぃあでもいいですよ？　……ああ、鈴ちゃん、そのバッグ、対織斑君用誘惑七つ道具です」

やっぱりアリサは気遣いの人よねぇ……

それで、デュノアは何で顔を赤らめてるの？

「あ、シャル……さっきのに追加でバナナに練乳をかけたのをデザートに、あとお稲荷さんとミートボールをお願いします。ソーセージは太いの一本でホワイトソースがいいです」

「……よく分からない取り合わせね。というかいつもより量多いじゃない……デュノア、どうしたの？」

内股で立ってそわそわしてるけど……トイレなら我慢しない方がいいわよ？

「お、おしっこじゃないよ！　……でも下着が濡れちゃったから履き替えてくるね」

「はぁ？」

「あ、ナルほど……鈴ちゃん織斑クンに伝言お願いします」

「いいけど、なんて？」

「リカちゃんとヤりましたか？　と」

いいけど……高校には理科の科目無いわよ？

って、デュノアどうしたの！？

すごい鼻血じゃない！　どこかに打ったの！？

「だ、だいじょぶだから、リンは早く行ってぇ……もう我慢できないよぉ」

「シャル、鈴ちゃんが出て行ったらアワビを食べさせてください」

「うんっ……えへ」

だめよ！

冷蔵庫の中のアワビは中華に使うんだから！

－ｍｉｓｓｉｏｎ１　添い寝は紐パンとＴシャツだけで！－

「アリサ、裸ワイシャツじゃダメなの？」

「織斑君には実姉がいますから女性のワイシャツ姿は見慣れてるはずです。ですがダボＴならぐっとイケます！」

「なるほど！」

－ｍｉｓｓｉｏｎ１　ｓｔａｒｔ－

「は、入るわよ？　寝てる？」

「んー？」

「ひっ！」

……寝てる、わね。

それじゃあ指令通りに……スカートを脱いで、って紐パン穿いてなかった！

こ、ここで着替えないと……ダメよね。

一夏、絶対に起きないでね！？

……最初にＴシャツをきてかくしちゃお。

服を着替えてからパンツをスルリと脚から抜き取る。

「ん……」

……夜の冷たい空気がすぅっと露出した部分を撫でた。

うぅ、一夏のすぐ近くでこんな格好してるなんて。

というかこの紐パンってローレグだったの!?
お、お尻の割れ目はもちろん前もちょっとずれただけで……しかも、紐もあんまり丈夫じゃなさそうだし。
き、切れないよね?

「それじゃ、失礼します……」

ベッドの中に潜り込むところまではこれたわ……!
この次は確か一夏の膝を私の太腿で挟むようにして脚を絡める、だっけ……

「……起きないでね?」

そっと、一夏の片足を持ち上げて静かに、でも素早く脚を絡める。
よし……成功ね。

「んーー?」

ごろん

「ひゃん! ぁ……」

いきなり一夏が寝返りを打って私を抱きしめるみたいにのしかかってきた。
というか、一夏の膝が……当たっててやばいわよぉ。
ね、寝るわ! これ以上は私が変になっちゃう……一夏より先に起きないと、この年になってお漏らしとか言われちゃうかも……

◆

ど、どどど、どういうことだ！？
なんで！
なんで、鈴が俺のベッドに！？
しかもぶかぶかなTシャツ着てるから首もとからピンクのが見えてる！

「んぅ……ぁん」

それより深刻なのが鈴の、その、大事な？　あれが俺の膝に押し当てられててだな。
しかも、寝てるのに鈴は無意識で動いてて……鈴のパンツがすごいことになってる。
しかも、膝のあたりが冷たいし。
もうやめて！　俺のクララは直立不動よ！

－ｍｉｓｓｉｏｎ１　ｅｎｄ－

「ど、どきどきの展開でしたねぇ」
「ところでアリサ、なんで一夏の部屋の様子が見れるの？」
「もちろん事前に隠しカメラを二十台ほど仕込んだからですよ」
「そっか」

－ｍｉｓｓｉｏｎ２　お弁当で相手を操れ！－

「これはシャルの発案でしたね」
「日本には胃袋を掴むって表現があるみたいだから、今日のためにいろんな食材を用意したよ！」
「ちなみに調理は三人でやりました」

－ｍｉｓｓｉｏｎ２　ｓｔａｒｔ－

「い、一夏……えっと、今日は皆バラバラみたいだし、ふ、二人でお昼にしない？」

い、言えた、言っちゃった！

今日は皆協力してくれるみたい……というか篠ノ之を二人が食い止めてくれるらしいから頑張らないと……！

「そ、そうなのか！　ど、どこで食べる？」

え、えと、確か場所の指定もあったわね。

多目的準備室が使われてないから二人きりの密室になるって……理由は眺めがいいからで平気って言うけど……二人を信じよう！

「つ、ついてきて！」

そういえばお弁当用意したけど……アリサとシャルが担当した部分のおかずは知らないのよね。

……私の作ったものより美味しかったらどうしよう？

あの二人、変なところはあるけど……それを含めなければ完璧美少女なのよね。

アリサは気が利くし勉強もできる。

デュノアは今は男装してるから別だけど気が遣えるし胸も大きいし……

うぅ……一夏も二人のどっちかが好きだったりするんじゃないかしら。

自信無くなっちゃうわ。

「えと、あ、アンタの分も作ってきてあげたから！」

「おぉ！　そりゃ楽しみだ！」

三段になった重箱を机の上に置いて、二人で向き合うようにして座る。
一番上は私の作った中華弁当。冷めても美味しいように工夫したから食べれないことはないと思うけど……
あの二人、結構拘ってたからなぁ。

「他は何が入ってるんだ？」

……ええい、ままよ！
ぐっと目を瞑って重箱を開けていく。

「……鈴、色々作ったな」

イモリの黒焼き、鰻の蒲焼き、レバニラ炒め、ニンニクの唐揚げｅｔｃ……何か分からないものも入ってるけど同じタイプのものだと思う。

「ほ、ほら、やっぱり男だけで暮らすのも大変だと思って元気出るかなって」
「むしろ辛くなるわ！」

そうよね……精力剤みたいなものだし。

「そ、それっぽいのは残してもいいわよ……？」
「いや……残すわけにもいかないだろ」

ちょっとカッコいいとは思ったけど……こんなことで覚悟を決められても。
というか、私も食べないといけないのよね。これを食べて一夏に

アタックするのは……危険だと思うんだけど。
あの二人、絶対、そこまで考えてないわよね。

「ん、この丸いのとかうまいぞ？」
「そ、そう。よかった」
「でも、これ何肉だ？　なんか食べたことない食感だけど……」

し、知らないわよ……！
どうしよう。
あ、アリサに聞けばいいわよね！

『アリサ、二段目に入ってた丸い肉って何？』
『ああ、あれですか？　あれは――』

ええ！？
そ、そんなもの……というか言えないわよ！

「なぁ、鈴、この肉なんだって。隠すことでもないだろ？」
「お、オットセイのこ、こ……」
「子供か？」
「こ、こーがん……ぐすっ」

は、恥ずかしくて涙出てきた……！
もー！　アリサもなんてもの入れてるのよ！　というか、嬉しそうに伝えないでくれる！
アンタだって女の子なんでしょ！

「そ、それはまた良く効きそうな……こうなったら全部、食うか」
「む、無理しなくても……」
「俺のことを心配して作ってくれたんだろ？　残すわけにはいかね

ぇよ」

だから！

……私が作ったものじゃないけど、今のもときめいたわ。

やっぱり、状況はどんなにお馬鹿でも覚悟をした男ってドキドキさせられるわ。

「わ、私も頑張るわ……！」

◇

この弁当は……ヤバいぞ。

さっきのオットセイ食ってから特に効果が出てきた。

こんなんで教室に行ったら女の子の匂いだけで……今だって目の前に鈴がいるだけで危ない妄想が止まらない。

鈴の言うとおり元気にはなったが……逆効果だろ。

－ｍｉｓｓｉｏｎ２　ｅｎｄ－

「いや、全部食べちゃったけど……？」

「これは大変ですね。鈴ちゃん以外の女の子に累が及びます」

「ど、どうするの？」

「幸い、次は体育……私が織斑君に怪我をさせましょう」

－ｍｉｓｓｉｏｎ３　ドキドキ、保健室で誘惑せよ！－

「誘惑七つ道具の出番ですよ」

「おおー！　何があるの？」

「今回はこれです。股下五センチ丈の超ミニスカナース！」

「う、うわぁ……えげつないね」

－ｍｉｓｓｉｏｎ３　ｓｔａｒｔ－

「い、一夏……大丈夫？」

もう、こんな短くちゃ歩けないわよ！
しかも保健室のベッドは低いから、近づいたら必然的に下着が見えちゃう……下着も透ける奴が用意されてたし。
さっきのお弁当で私まで変な気分になってるのに、こんなことさせられたら……どうにかなっちゃう。

「り、鈴……？　その格好、どうしたんだ？」
「え、えっと……その、アリサが看護するならこの服じゃないとって……」
「なんで、そんな遠くいるんだよ？　もっと近くで話そうぜ」

近くに行ったら下着丸見えなのよ！　しかも、ただでさて透ける下着なのに、興奮しちゃって……
一夏に見られると思ったら……心臓が壊れちゃう……

「というかだな……鈴。あの弁当のあとでそんな際どい衣装を見せられると、」
「見せられると？」
「我慢の限界が、な」

そう言って、自らを覆っている布団を一夏がめくると……下半身すごいことになってるわ。
ズボンの下、もっとすごいのかしら……？

「その……大丈夫？」

「……相当、辛い」
「ははは発散すれば楽になるのよね？」
「な、何言ってるんだよ！」

わ、私にもわかんないわよ！
さ、さっきのお弁当食べてから、無償にむずむずして……そ、そういうことしか考えられないの！

「だ、だから私のを見て、とかなんなら口で……見せ合いっことかでも」

一夏の正面に座って、下着のクロッチの部分がよく見えるように足を開く。
もう自分でも何してるか分からないわ。

「じゃあ……一夏も……

――――――――――――――――――――――――――――――――

「はい、ここまでです！」
「お風呂場で流しっこ、猫耳＋リアル猫しっぽ、裸エプロン……いろいろやったけど、これ以上は……わかるよね？」
「合い言葉はわっふるわっふるですよ！」
「……本気なの？」
「さ、さぁ？」

38／SP1．Rin's diary －temptation－（後書

作者は出演女優三人に刺されました（

アリサ「まったく、いきなり演技をやろうとか言ったと思ったらこれですか！」

シャル「最初の方のアリサのセリフの意味、ほとんど分かんなかったんだけど……」

鈴「知らなくていいことよ……まぁ、初な頃の私を思い出せたわね」

というか、三巻分を書き始められない理由が分かりました。

最初から一夏とシャルがキャッキャウフフだからでした。

一夏モゲロ、鈴と付き合ってしまえ！

次回はＥＸ２未来編

舞台設定は大体アリサ達が二年生になり、

夏休みはじめの実力判定試験（筆記）的なもののために勉強会をひらかさせられる感じのもの

あまあまになればいいなぁ

39／EX2．　secr?tement　rendez－vous（前書き）

「逢瀬」

リクエストの勉強会のお話
一日お休みして元気いっぱい……とはいきませんでしたが甘いのを目指してみました。

ちなみに時間軸はアリサ達が二年生になった年の夏休み後半。
本編がどのように進むかが何となく示されてもいます。

いつの間にかお気に入り登録が５００も！
ありがとうございます！
少なくともそれだけの人数に呼んでいただいていると思うと感慨深いですね。

追記
５００のお礼、すでに言ってましたね（汗
こんかいは総合評価１５００でした！
ありがとうございます！

39／EX2．　secr?tement　rendez－vous

「どぁいひょーう！」
「ちょっと、微妙に猫型ロボットみたいな呼び方しないでください！」
「てれれてれれ、てれれてれれ、てれれてれれてれれ♪　あーんなこっと、」
「映画版！？」

……背後からかけられたら声についツッコミを入れてしまいました。
彼女は確か二組の……って、私あなたの組の代表じゃないですよ！？

「それは余所に置いといて……」

置いといて、をわざわざ身振りを付けて言う必要はないと思います。
というか置いとかないでください。私は去年もあなたの代表ではなかったんですから。

「勉強会を開こうじゃないかっ！」
「生憎、日々の勉強はしっかりしていますので……」
「代表が頭いいってのは知ってるよ！」
「……だから、あなたのクラスの代表は私じゃないと思います」

いつの間にか、二年生の多数から代表と呼ばれるようになっています……一年のときに同じクラスだった子たちが未だに私を代表と呼ぶせいですね。

これじゃ学年代表みたいじゃないですか！

「まぁ、要するに、私には教える側として出席してほしいと……」

「うん！　さすが話が早いね！」

「だが、ことわ、」

「時に不破女史、甘いものはお好きかな？」

甘いもの、に気を取られて最後まで言えませんでした……修行が足りていませんね。

そんなことを考えていると、視界に一枚の紙が飛び込んできました。

……？

……！

これは！

「ふっふっふ、これが何か気付いたようだね……そう、これは、」

「「万疋屋（まんびきや）の超豪華ふる～つぱふぇ（時価一万円相当）無料券！！」」

「……代表って意外とノリいいよね」

甘い物好きの間では伝説と名高いこれがなぜここに！？

１パーセント以上の株保有につき、四半期に一枚支給されるだけなんですよ！？

ＩＳ学園とはいえ、生徒が持っているようなものではありません！

「今ダイエット中なんだよねー」

……ゴクリ。

ですが、一枚しかないなら意味がありませんし……

「他にもそのパフェを食べたいと思っている方がいると思うので、その方に、」
「二枚あるんだけど、どうしようかな～？　あると我慢できなくなっちゃうし捨てようかな～？」
「それを捨てるなんてとんでもない！　……っは！？」
……つ、つい、体が反応してしまいました。
だ、だって、高いだけじゃなくて一日三名様限定なんですよ！？
無料券はその限りじゃないのでこれさえあれば……というよりこのチケットがなければ食べられないと言っても過言じゃないです！
それが二枚！
「誰か勉強教えてくれる人がいたら二枚ともあげてもいいかなぁ……？」
「さぁ、勉強会はどこでやりますか！？　学食ですか！？　学食ですね！　さぁ行きましょう！」
「代表ありがとう！　これ、先払いの一枚ね」
「はいっ♪」
ふふふ、まさか伝説が二枚も手に入るなんて！
シャルと一緒に行きましょう！
◇
「はいっ、ということで不破アリサ先生に来ていただきましたー！
分からないことがあったら何でも聞いてください！　だそうです！」
「「「「「「「「「おお～！」」」」」」」」」
……え、なんですか、この人数。

新興宗教並みの人数何ですけど。
軽く数えても六十人……？
これ、私一人じゃ面倒見れませんよ？
というかこれだけ集まればそれぞれが得意な部分を教え合えばいいと思うんですが……

「というわけで、十人くらいのグループに分かれて教え合いっこをしてください！　それでも分からないところがあれば呼んでください」

その間に私も勉強しますかね。
まずは古文でもやりましょう。
助動詞とかはどうでもいいんで……物語でも読みますかね。

「だいひょー、ＩＳコアの四つの特徴ってなにー？」
「コアネットワーク、操縦者へのフィッティング、大容量量子化領域に高エネルギー発生体、です」
「蓋（ふた）って漢文だとなんて読むの？」
「けだし、です」
「Ｔｈｅ　ｍｏｓｔ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｓｕｎｓｅｔ　Ｉ'ｖｅ　ｓｅｅｎ　ｉｎ　ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｗｈｉｃｈ　Ｉ　ｓｅｅ　ｗｉｔｈ　ｈｅｒ.　の間違いって、夕日よりも君の方が綺麗さってこと？」
「素敵ですけど違います！　ｓｅｅじゃなくてｓａｗです！」
「不破さんの好きな人は？」
「シャル！　ルマーニュです！」
「……ニヤニヤ」

危なかったです……まさか、この場でトラップを仕掛けてくるなんて。

第二グループは要注意ですね。
……何ニヤニヤしてるんですか！

「あれ、皆、なに集まってるんだ？」
「おりむー。不破さん主催のテスト勉強だよー」
「テスト直前の不破さんの頼もしさは随一ですわ」

私主催じゃないです！
あとセシぃ！　私はいつだって頼れる皆の代表ですよ！
じゃなくて一組の代表です！

「また、不破を便利品扱いして……奴は我がドイツ軍のものだぞ！」
「へー、それは初耳だなぁ……？」
「しゃ、シャルロット！？　いや、今のは、その……」
「アリサは私の恋人なんだから、とったらダメだよ！」

シャル、聞こえてますよ！
もぅ……恥ずかしいですよぉ……でも大好きです！
今日は一緒にお風呂で流しっこしましょうねー。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

うぅ～！
だからニヤニヤしないでくださいよ！
嘘教えますよ！？

「あと、そこの専用機持ち達＋本音さん一シャルも教える側に回ってください！　シャルは私の隣で……な、なでなでを希望します！　が、頑張ってるご褒美に……」
「うん、いいよ。でも、僕も分からないところあるから教えてね？」

「もちろんです！」

保健体育でもＩＳの基礎理論でも数学でも物理でも現代文、漢文、古文、世界史でも保健体育でも手取り足取り教えますよ！

ぱこん

「保健体育は手も足も取らないでいいわよ」

「鈴ちゃん、叩かないでくださいよ……背が縮んだら恨みますよ？」

「あはは、ちっちゃくなってもアリサは可愛いよ」

シャル……いちいちそういうこと言わないでくださいよ。顔が熱くなっちゃいます。

んー、シャルは相変わらずいい匂いがしますねぇ。

「ちょっと、アリサくっつかないでよ。くすぐったいってば」

「くっつかないでなんて……私のこと嫌いですか……？」

「いや、好きだけど……」

「っ！」

ぎゅー！

すりすり♪

私もシャルが大好きですよ！

「すまん、シャルロット、ちょっとここ教えてくれないか？」

空気呼んでください！

「あ、一夏。うん、どこ分からないの？」

あぁ、織斑君に呼ばれてシャルが行っちゃいました……って、行っちゃうんですか!?
もう……他の人に聞けばいいじゃないですか。
シャルもシャルです！　私をほおって織斑君の方に行っちゃうなんて。

「一夏。なんで私に聞かないのよ。一応、彼女なのに……」
「あの二人は恋人に対する気遣いだけはできませんよね！」
「本当よね。これじゃ付き合ってる意味が無いわ……ちょっと言ってくる！」

鈴ちゃんも織斑君の方に行ってしまいました。
勇気ありますねぇ……私は重たいとか思われるのが怖くてあまり強く言えないんですよね。もちろん、シャルのことを信じているから言わないという面もありますけどね？

「まったく、ところ構わずいちゃつくなんて淫らな……！」
「はーい、篠ノ乃さんは嫉妬しない嫉妬しない。お菓子ありますよー？」
「いらん！　というかお前はいつになったら私を名前で呼ぶんだ！」
「いえ、引っ込みつかなくなっちゃいまして……えへ」
「えへ、じゃなーい！」

篠ノ乃さんは結局勇気が出せずに告白しないまま鈴ちゃんに織斑君をとられちゃいました。
でも、本人もあまり気にしていないようでもありますね……？
あ、そういえばラウラさんはどう感じているんでしょうか？
彼女も確か織斑君に恋していた気がするのですが……

「……ッフ。私の学園生活ももう半分を過ぎたな」

「あれ、織斑君のことは気にならないんですか？」
「ん？　あぁ、惚れていたのは昔の話だ。別に一夏が嫁にならなくてもいいさ」

そういえば、いつの間にか織斑君に対して積極的じゃなくなってましたが……恥じらいを覚えたんだと思ってましたよ。
諦めがついたのでしょうか？

「そうじゃない。ただ、恋仲になどならなくとも一夏は……いや、皆、大切な私の仲間（かぞく）だからな」
「ラウラさん……」

試験管ベビーとして生まれたラウラさんには血の繋がりのある家族がいません。
私達との生活の中で、そう思うようになってくれたのだったら嬉しいですね。

「む、どうした不破？」

いつの間にか私がシャルと……その、親密になってからラウラさんは私のことを名前で呼ばなくなりました。
なんでも、私達に気を使っているつもりなんだとか。
でも、お友達なんですから名前で呼んでくれてもいいんですけどねぇ。
その辺りはシャルも気にしませんし。
ちょっと寂しいです。

「いえ、アリサお姉ちゃんって呼んでもいいですよ？」
「……私達を家族とした場合、私が父親でセシリアが母親なんだそうだ」

「え？」
「鈴が昔呟いていたんだ。私はそこまで男らしいか？」
あー、確かに分かるかもしれませんね。
「ラウラさんは不器用なところがありますからね」
「不破が鈴の姉らしいぞ」
「あー……下がしっかりする典型ってやつですかね？」
ラウラさんもセシぃもなんだかんだで抜けてますし、私も鈴ちゃんにフォローされてばっかですしねぇ。
「ラウラさーん。ドイツ語教えてー！」
「む？　ああ、構わない。アリサ、行ってくるぞ」
「いってらっしゃい」
ラウラさんも角が取れましたよね。
最初は織斑君をいきなり殴り倒して引かれていたのに……人間、一年あれば変わるんですね。
今の、友人と言えるほどの関わりもない生徒と話すラウラさんなんて昔からじゃ想像もつきませんよね。
……シャル、戻ってきませんねぇ。
多分、誰かの質問に答えてるんでしょうけど……寂しくなってきました。
いえ、最初はいなかったので元の状態に戻っただけですけどね。
「代表、春秋時代と戦国時代の違いって何？」
「……」
「代表？」
「はいっ！？　あ、あぁ。春秋時代は主な国が秦、楚、燕、晋、斉

の五覇だったんですが、戦国時代では晋がさらに三国に分裂しましてその国々を指して戦国の七雄と呼ぶようになったんです。つまり晋国があるかどうかで判断できますね」

「なるほどー」

はぁ……しばらくは皆さんに教えることに集中しましょうか。

忙しさに身を任せればシャルがいない寂しさも紛れるでしょう。

「あ、アリサさん……じゃなくて先輩。何してるんですか？」

「あ、蘭ちゃん。学園生活はどうですか？」

「えっと、せ、先輩のおかげで楽しいです！」

五反田蘭ちゃん……織斑君の幼馴染の妹さんです。

この子もいい子なんですよね。

やっぱり織斑君にホの字なんですけど、鈴ちゃんに苦手意識があるみたいで奪い取ろうって思えないらしいんですよね。

今も私の背中に隠れて織斑君と鈴ちゃんを見ています。

「う～……！」

「はーい、蘭ちゃんむくれちゃだめですよ。どうどう……」

「アリサさんが鈴さんを手伝ったりしなければ……」

「ぅ、す、すみません」

だ、だって、早いところ織斑君に彼女を作ってもらわないとシャルをとられる気がして……

「あ、いえ！　責めてるわけじゃないんです！　ただ、学園に来てから頑張ればいいなんて甘かったな、と」

「まだ遅くないですよ。欲しいなら奪えばいいんです。協力はできませんけど邪魔もしませんよ？」

「……っはい！　頑張ります！」

んー、やっぱり素直で可愛いですね。

私たちと違って一般的な家庭で不幸ではない生活を送ってきたからでしょうか？

蘭ちゃんの笑顔は曇りがありません。

元気づけたのは私ですが、なんだか元気をもらっている気がします。

「でもアリサ先輩はすごいですよね……こんなにたくさんの人と仲良くしていて」

「え？　この中の友人はセシィたちとかですから、そんなに多くないですよ？」

「……先輩って、自分の感情には鈍いですよね」

「？」

「それじゃ、私も勉強しなきゃいけないので行きますね！」

溌剌とした雰囲気をまとって蘭ちゃんは行ってしまいました。ここで一緒に勉強しようかとも思ったのですが……織斑君がいる場では集中できないでしょうね。

勉強と自分のことでメリハリを付ける子ですから、私が呼び止めても邪魔になるだけでしょうし。

「代表っていま古文やってる？　というか古文分かる？」

「ええ、それなりには……」

「じゃあ、この文章、どういう話なのかおしえて！」

「もちろんです。でも約束の無料券、忘れないでくださいね？」

「最後までいてくれたらちゃんと渡すよ」

えーっと、どれどれ……

あぁ、典型的な恋バナですね。

「えっとですね。あるところにお付き合いしている男女がいたんですよ。でも、読み解く前にまず古典常識として、この時代では男の人が一目を憚って深夜に女性の家に訪れ、早朝に帰るというお家デートが普通だったんです。逢瀬ってやつですね」

「へー」

「ですが、この女性の家は人の出入りが多い家だったので男の人はもっと早く、日が昇る前に帰らなければならないんです。でも帰りたくなかったので、家の門の前にある川の橋から女性の部屋に向かって和歌を詠うんですね」

――夜半にいでて渡りぞかぬる涙川
――――――淵となながれて深く見ゆれば

「どういう意味？」

「うーん、夜中にあなたの部屋から出て帰ろうとするが橋を足りかねているところだ。別れが辛くて泣いてしまう私の涙で、川の水かさが増して深い淵のように見えるから……というところです。それに返して女性はこう詠います」

――さ夜中におくれてわぶる涙こそ
――――――君がわたりの淵となるなめ

「これは、夜中にあなたを引き留めておくわけにもいかないので送り出した後、一人残されて別れの辛さのために流す私の涙が、その川をより深くしているのでしょう……ってあたりです」

「「「なるほどー」」」

「それで、男は女性がいじらしく思えて、もう一度何かを言いたい、

と思うのですが路に人がいたので帰らざるをえなかった、という話ですね」

「「「「「「おおー！」」」」」」

……増えてます。

いつのまにっ！？

でも、素敵な話ですよねぇ。お互いに別れが辛くて流す涙が川を深く見せて、無理だと分かっているのに、せめて二人で言葉を交わすことができる時間を増やすなんて……

「お、不破の乙女モードだ」

「千の顔を持つ魔性の女だもんね」

「なんですかそれ……」

皆さん、エロモードとか素直モード、クールモードと私のことを○○モードと言いますが、私はいつだって乙女です。

シャルのことを考えるだけで顔が赤くなっちゃうくらいピュアハートです。

「でも、この和歌すごいね。よくこんなこと即興で思いつくよ」

「そうですか？　私もシャルの部屋から帰るときはこんな感じですよ？」

「乙女だと思ったらアダルトだった！」

そ、そそそ、そんな理由で部屋に行ってるわけじゃないですよ！

ただのお泊まりです！

……建前は。

「でも、ラウラさんいるからそんなことにはならないか」

「いえ、その間ラウラさんは織斑君の部屋に行ってますよ？」

「えぇ！？　織斑君って鳳（ファン）さんと付き合ってるんじゃないの！？」
「あぁ、織斑君はその間私たちの部屋に来ています」
「……専用機持ちはやっぱりレベルが違うわね」

そ、そんなあからさまに顔を赤くしなくてもいいじゃないですか！
べ、別に同じ部屋にいるからって、いつもいつもそういうことしてるわけでは……！

「いつも……ねぇ？」
「こ、言葉の綾です！　私はまだ生娘です。鈴ちゃんは知りませんが……」
「いや、女同士じゃそうでしょ。というか鳳さん、したことあるんだ……織斑君って上手なのかな？」
「知りません。気になるなら耳でも澄ましてみたらどうですか？　どちらの喘ぎが大きいかで主導権を握ってる方が分かりますよ？」
「っ！　だ、代表はさらっとそういうこと言うのやめた方がいいと思う！」

あれ？
恥ずかしいんですか？
恥ずかしがってますよね？
なら、もっとイロイロ聞かせてあげますよ？

「あ、不破のいじめっ子モードだ」
「そんなこと言ってないで代表を止めてーーー！」
「この前、鈴ちゃんと織斑君がデートしたらしいんですけどね？　二人ともお互いにムラムラしちゃったらしくて外で、」
「わー！　わー！　わー！」
「むぐっ！？　ちょっと、危な……！」

いたたた……
私の口を塞ごうとしたのでしょうが、勢いが強すぎてそのまま倒れてしまいました。
なんだか、女の子にのしかかられている、というのも新鮮でドキドキしますね。
シャルもこれくらい積極的になってくれればいいのに……
うわ、シャルが攻めにまわったら私、死んでもいいかもしれません……！

「……こほん」
「あ、シャル！　やっと戻ってきたんですね。なにか分からないところあったんですか？」
「ううん、それは一夏とかに聞いたから大丈夫」
あ……そうですか。

「それにしても、戻ってきてみれば、随分と楽しそうだね？」
「え？」
「いつもいつも、いろんな子と話してるし……アリサ、酷いよ……」
シャルが震えて……泣きそう？
……でも、今のはズルいですよ。
先に私が悪いみたいに言われたら……！
だいたい、シャルが先に私を置いて織斑君の方に行っちゃうから、こうして寂しさを我慢してたんじゃないですか！
それなのに、なんで私が責められるんですか！
シャルの……シャルの……

「シャルロットのばかぁ！　もう知りません！」

もう、勉強もおしまいです！

◇

アリサ……行っちゃった。
でも、何でアリサが怒るの？
事故だろうけど……押し倒されて顔を赤くしてたのはアリサの方じゃん！

「あーあ、代表泣いちゃった。というかデュノアさんと付き合うようになってから泣き虫になったよね」
「あー、そうかも……それで、デュノアはどうするの？」

一年生の頃からアリサと仲がよかった三好さんが詰め寄ってきた。

「どうするのって……だって、今のはアリサが、」
「悪いって？　まぁ、どう思うかは人それぞれだと思うけど、今のはデュノアの方が酷かったと思うなぁ」

でも……
アリサはいつも、僕以外の子と話してばっかだし、今日だってわざわざ勉強会まで開いて。
しかも、僕には声もかけずに。

「アリサは、僕がいて当たり前だってたかをくくってるから……ううん、アリサは近くに誰かがいればいいんだよ。別に僕じゃなくたって、」
「デュノア、それ本気で言ってる？　不破がデュノアのことを何とも思ってないって？　それだったらサイテー。別れればいいじゃん」

「だって！　いつも止めてって言ってるのに無理矢理続けるし、なのに僕がどこかに行くときは放っておくし！　アリサは僕のことなんて考えてくれてないよ！」
「……あぁ、もういいや。というかさ、不破を置いて織斑についてったあんたが言えんの？」
それなら勝手にすれば？
それだけ言い残して三好さんは消えた。
残されたのは僕と、僕の知らないアリサの友達。
「ちょ、三好！　あぁ、もう、私がどうにかすんの……？　デュノアさん、代表の得意科目って何か知ってる？」
「え？　あ、えっと、古文……？」
いきなり話の方向が変えられたから混乱しちゃったけど何とか答えた。
古文の得点はいつも上位だとか行ってた気がする。
「うん。代表、今まで一度も古文の問題を間違えたことないくらいだよ」
「それが、なに？」
何を意図してるかが分からなくてイライラしてくる。
今、アリサの話なんて聞きたくないのに。
「まぁ待ってよ。それなのに代表は今日ずっと古文だけやってた。それも、誰にでも分かり易いノートを作って」
「一つに絞って勉強したんだと思うけど……ノートだって、普通じゃない？」

アリサはいろんな人にノートを貸しているから、分かりやすさを意識していても不思議じゃない。
……他の人のことじゃなくて僕のことを意識してくれればいいのに。

「まぁね……ところでデュノアさんって古文は苦手だよね？」
「え？　まぁ、うん」
「代表に分からないところは教えてねって言ってたよね？」
「……何が言いたいの？」
「代表、ずっとデュノアさんのこと気にしてたよ。まだ、聞きにこないのかなって」

……え？
そんなまさか……
だって、皆に教えてる声がしてたし……
だいたい、僕は古文を勉強しようなんて一言も……

「……じゃあ、だめ押し。代表、なんでこの勉強会に参加してくれたんだと思う？」
「アリサは……誰にでも優しいから……」
「ううん、最初は断られかけたよ？　だからね、これをあげるって言ったの」

そう言って取り出されたのは……万疋屋のパフェ無料券？
なんで、こんなもの……

「これ、すごいレアものなの。本来一日三食限定なのに、これがあれば好きなときに頼めるからね」
「あぁ、アリサ甘いもの好きだもんね」
「惜しいっ！　代表はね、この券が二枚あったから引き受けたんだ

と思うよ？　誰かと一緒に食べたかったんじゃないかな」
「……アリサ」
アリサは僕のことを考えてくれてた……
本当は、分かってた。
喧嘩なんて始めに感情的になった方が得てして間違えてるものだし……
「あ、でも、代表帰っちゃったからこの無料券はあげられないなぁ」
「可哀相だけどそういう契約だったし、仕方ないよね。前払いの一枚で我慢してもらおう」
「……」
しかも、僕はアリサの楽しみを奪っちゃったみたい。
きっと、アリサのことだから一人でなんか行かない。
アリサだって少なからずパフェを食べたかったはずなのに、僕がアリサを怒らせて、泣かせたからその機会が失われた。
僕のつまらない嫉妬のせいで……
「ところでデュノアさんに頼みたいことがあるんだけどさ」
「……なに？」
「代表と仲直りしてくれないかなー？　バイト代にはこの伝説のパフェ無料券を先払い！」
「……ありがとう！」
アリサの周りには良い人がいっぱいだね。
待っててね、アリサ。
すぐに行くから。
◇

「うぅ……ひっく、しゃるにぃ……しゃるに嫌われましたぁ……ぐすっ」

私が……シャルが私以外の人に分からなかったところを聞いたのがショックで、すぐに謝らなかったから。

別に口約束にもならない掛け合いだったのに本気にして、勝手にショックを受けた挙げ句に大嫌いなんて言ってしまいました。

シャルも怒ってましたし……大嫌いなんて言われたら、一生話しかけてくれないかもしれません。

一緒にパフェを食べに行こうなんて考えていて、周りに対してぞんざいだったから……自業、自得ですね。

そんなんで、一緒にパフェどころか出かけることもできなくなってしまうなんて……

「ふぇ、ヤですよぉ……ん、ぐすっ」

結局、自分のことしか考えていないからこうなるんです。

……これが怖かったから、今まで喧嘩にならないように気をつけていたのに……

付き合い始めてからは喧嘩したことがなかったのが、何よりも仲がいい証拠だったのに……

ばたんっ！

「アリサ！」

「しゃ、る……？」

「うん、えっと、さっきは……」

「ごめん、なさい」

「え？」

声が小さくて聞こえないってことですか？
いつものじゃれあいの時なら、そんな意地悪しないで許してくれるのに……そんなに怒ってるんですか？

「ごめんなさい！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいぃ！」
「あ、アリサ！？　と、とりあえず落ち着いて？」
「だ、大嫌いなんて、嘘ですぅ！　ほ、ほんとはしゃるのこと好き、ううん、大好きです！　だから、だからぁ……」

嫌わないでください！
まだ、私の近くにいてください。

「しゃる？　こ、答えて、むぅ！？」
「ん、ちゅ、んぅ……」
「んー！？　ん、ぅ、んぁ、んふぁ……ちゅ」
「ん、んー……アリサ、落ち着いた？」
「ふぇ…キ、ス……？」

それも、シャルから……？

「うん、キス。アリサのこと大好き。だから、ごめんね？　自分のことしか考えてなかった。アリサは僕のことを考えてくれてたのに」
「口で、言わなかった私が悪いんです」

相手に伝わらない想いなんて無いのと同然です。
シャルなら、シャルなら分かってくれるなんて勝手に考えていた私の責任です。

「しゃる」

「ん？」

私を後ろから抱きしめたシャルが耳元で返事をします。

「私は、重い女ですよ？」

「僕もだと思うよ」

「すぐに泣く、卑怯な女ですよ？」

「僕だから、泣いてくれてるって思ってもいいよね」

「本当に、私でいいんですか？」

「そんなに疑うなら……よいしょ、おっとっと」

「きゃっ！？」

シャルが急に私を抱き上げたので驚いてしまいました。

そのままシャルは部屋の外へ。

「あの、どこへ？」

「いいからいいから。ところで、明日パフェ食べにいこうよ」

「……デートですか？」

「うん」

「腕を、組んで歩いてもいいんですか？」

「うん♪」

「人前で、キスしても良いですか？」

「う、うん」

シャルに運ばれてたどり着いたのは、シャルとラウラさんの部屋。

シャルは中にはいると私は普段シャルが使っているベッドに横たえられました。

……これって？

「どれだけアリサのことが好きか……証明、したほうがいい？」

え、え？　えぇ！？
シャルからですか！？
いつもは私が襲……攻める方なのに。

「えと……電気、消しましょう……？」
「うん」

ぱちん

密かな逢瀬の始まりですね。

39／EX2．　secr?tement　rendez－vous（後書き）

次回はリクエストのサバゲー話です。
アリサとシャルの第三世代型ＩＳが登場する予定。
なんとなく匂わせるなら
アリサはステルス
シャルはジェノサイド

そのあとアリサ達のステータスを纏めて、三巻に入ります。

40／EX3．　Survivez！（前書き）

「生き残れ！」

お待たせしました。。。

でも１６０００文字もあるから許して下さい！

あと７００００ＰＶとユニーク７００００有難うございます！

40／EX3. Survivez!

『さぁ！　始まりました！　全学年対抗サバイバルゲーム！　皆さん気合いは十分ですかぁぁぁあ！？』

「「「「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉお！」」」」」」」」

なぜか司会をやっている蘭ちゃんに合わせて、生徒の皆さんが吠えます。

気合い、入れすぎです。

皆さん女の子なんですからもっと淑やかにですね……

……今年から始まった新イベント、もとい生徒の実技試験――サバイバルゲーム。もう師走だというのに外に出なきゃいけないなんて苦痛です。

ランダムに支給される武器を駆使して相手に一撃加えれば倒したことになり、そうして最後まで立っていた生徒の内、最も得点を稼いだ生徒が勝利という単純なルールです。

このイベントの目標は何らかの問題が発生してＩＳに乗れないまま戦場に出てしまったとき、生き残れるための勘を養うとかなんとか……十中八九、思いつきの企画でしょう。

一年生の一般生徒が１ポイント、二年生は２ポイント、三年生は３ポイントです。

専用機持ちはその十倍で、一般生徒と専用機持ちは別々の方式で採点されるとか。

あと、優勝者には何か特典があるそうです。

『えー、アリサさん……じゃなくて生徒会長の不破アリサ先輩は３０ポイントに生徒会長補正の５０倍をかけて１５００ポイントです』

なんですかそれ！？

だって、一般生徒相手にＩＳ展開しちゃダメって言ってたじゃないですか！
そうなれば私はただのか弱い女の子ですよ！？

『専用機持ちの方々はＩＳを利用しての専用機持ちへの攻撃は可能です。ただし、その場合は行動不能にしないと得点になりません！
また、攻撃用兵装でなければいつでも使用可能です！』

……ん？　本当ですか？
それならこの勝負、もらったも同然ですね！
ハイパーセンサーでも捉えるのが難しい私の第三世代型ＩＳ『幻狼（ミラージュ・ガルー）』なら見つかりっこないですし。

『では、大校庭の中央に設置されている支給武器を手に取った方から開始です！』

だだだだだだだっ

「……支給武器を取らなければ参加しなくてもいいんでしょうか？」

同じようなことを考えたのか、私の他にも武器を取りに行かない生徒が何人かいました。

『ちなみに、武器をとらなかった場合も十分後に強制開始でーす！』

それ、先に言ってください！
というか先生方も新しいこと始めるなら事前にルールブックを配布するとかしてくださいよ！
今回の件、生徒会に知らされてませんよ！？
……なんて言っていたら、最後の一箱になっていました。

まぁ、残り物には福があると言いますしね。

ぱかっ

「……そうですか。えぇ、分かってましたよ？　これがお約束だって……」

武器　：　こんにゃく詰め合わせ
使用方法　：　相手の地肌に滑らせる

「……そこはかとなく厭らしい武器ですね」

◇

さて、とりあえず人目に付かないところまでやってきました。
というか、こんにゃくを手に持った瞬間に攻撃されて散々でしたよ。
五枚あった板こんにゃくの内、二枚が撃ち抜かれてしまいました……もちろん、ちゃんと回収しましたけどね。
とにかく、身を隠さないと……

「……きて」

ゆっくりと黒い装甲が身体を包んでいきます。
その形状はカゲロウと同一。
コアを流用したからですかね？

――Ｃｏｄｅ　：　Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｉｃｋ？――
――Ｍｏｄｅ　：　Ｇｈｏｓｔ――
――Ｓｔｅａｌｔｈ　Ｃｌｏｔｈ　ｏｐｅｎ――

全天候対応ステルス十月最後（イタズラしちゃいます）の夜。
一昨年、出張で戦い抜いたオーレリア戦争から得たフェンリアシステムを改良した、５０センチメートル以遠からでは目視もできない第三世代兵器です。
チャフやフレアなどのソフトキル兵器との併用でハイパーセンサーにも捉えられなくなります。
……これが完成したから私が生徒会長になんかなってしまったわけですが。

「さて……お化け狼が皆さんを食べにいきますよ」

自分で言って気付きましたがカゲロウもミラージュ・ガルーも大神のくせに二足歩行ですし、狼人間ですね。
ハロウィン生まれの私にはちょうどいいかもしれません。
れっつ！　とりっく・あんど・とりっく！

「え？　……だ、誰かいるの？」

……おっと、声を聞かれてしまったようです。
音による探知からだけは逃れられないんですよねぇ……
私の声を聞いたと思われる一年生の女の子は青い顔をしながら周囲を伺っています。

「もぅ……やっぱりこっちに来るんじゃなかった……ここって、昔、お墓だったらしいし、やっぱり出るんだぁ！」

……え、そんな七不思議初めて知りましたよ？
というかＩＳ学園は新しいので七不思議なんかあると思いませんでした。

まぁ、私好みの状況になったので多くは言いませんけどね。

「う～ら～め～し～や～」

ぴとり

「～～～～～っ！　きゅう……」

「あらら、気絶ですか？」

背後から忍び寄りこんにゃくで首筋を撫でたら倒れちゃいました。

うーん、怖がりだったんですねぇ。

少し可哀想なことをしました。

『おーっと！？　またもや誰かが生徒会長の餌食になった模様！　場所は第四校舎の裏です！』

えー！？

私の居場所言わないでくださいよ！

『会長はこんにゃくというハズレ武器を巧みに利用して、次々と挑戦者を屠(ほふ)っていきます！　正直、未だに倒されていないことの方が驚きです！』

ハズレ武器入れないでくださいよ！

チュイン！

「ふぇ？」

パァン！

キィンっ！

……みゃぁぁぁぁぁ！？

狙撃されてるぅぅぅぅ！？

ガン！

ががががががっ！

パァン！

チュイン！

「ちょ、多いですってぇ！？　しかも狙われてます！？」

襲撃者の狙撃は正確に私の立っている場所を狙っています。

なんでか知りませんが居場所がバレているみたい……あぁ！　シャルですね！？

同じフランス製なので識別コードが発行されているはずですし！

……それなら。

――複合（ヨルノトバリ）ソフトキル兵器射出――

チャフ、フレア、電磁波に超音波。

ハイパーセンサーを含む、ありとあらゆる探知機類を狂わせる世界最高のソフトキル兵器群。

射出という行程がある以上、動きがあるのでどこらへんにいるかは知られてしまうのですが、すぐにどこにいるかは分からなくなります。

発射から弾着までのタイムラグがある狙撃に対しては大きなアドバンテージです。

「しかし、やってくれますね」

シャル……次は私の番ですよね？

◇

「残念、逃げられちゃった」

中央塔の頂上から第四校舎に向けていた二十の銃口を下ろす。

アリサのと同時期に作られた第三世代型ＩＳ『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』――通称暴虐の疾風（ラファール・タイラニー）。

イメージ・インターフェースを用いているけどアリサのと違って、それらしくない。

特徴は超大容量の量子化領域と、二十機の多目的ビット。

そこに百種類は下らない多種多様な装備を詰め込み、それを多目的ビットに装備するように展開して同時に複数の敵を討つことを目標にしている。

ただ、動作確認の結果、僕かアリサしか使いこなせないことが分かって、フランスの正式な第三世代型ＩＳはミラージュ型（タイプ）に決まった。

……正式採用された機体もアリサのオリジナルとは似ても似つかない形だけどね。

アリサは前の機体と同じコアを流用したからオンブル・ループと同じでミラージュ・ガルーも進化し続けてる。

ガサッ

「……ん、見つかっちゃった」

「シャルロットは高台からの狙撃を選ぶだろうと思ったからな」

なるほどね。

僕のＩＳの特徴から場所を予想したんだ……
一夏は雪羅の荷電粒子砲を僕に向けたまま動かない。
ん、ちょっと、怖い……かな？

「んー、一夏は結構鋭いなぁ……でも、やめた方がいいと思うよ？」
「別に負けるなら負けるで構わないけどな」

眼下に広がる中央塔の壁面。
そこに取り付けられたらガトリングやミサイルポッドが勝手に壊れていく。
下から、上に。

「ううん、そうじゃなくて」

その破壊音がだんだんと大きくなって耳に届く。
下から順に壊してくなんて……ううん、踏み場にしてるのかも。

「ん？　何この音？」
「……怖い騎士（ナイト）様の足音とか？」
「は？　……ってまさか！」

騎士（ナイト）様――ある生徒に付けられた称号とも言えるあだ名。
理由は、これまたある生徒のことを何度も体を張って守ったから。
その守られた生徒はお姫様、なんて言われてるけど……恥ずかしいから止めてほしいんだよね……

「あー、ひとまず逃げる！」
「もう遅いと思うけど……」

「ええ……逃がしませんよ？」

どこからともなく聞こえるアリサの声。
風だけが僕の横を吹き抜けた。
……ラファールの名前はアリサのＩＳにこそ合ってると思うんだけどなぁ。

「っ！　雪片！」

アリサが見えていない一夏。
それでもアリサがどこから攻撃してくるかを予想して雪片を横薙ぎにふるった。
でも、大外れ。
アリサはもう一夏の背後にいる。
一応、一夏にも攻撃の瞬間だけは見えるはずだけど、５０センチなんて距離で目視してからじゃ対応できるわけがないから……

「シャル！　トドメを！」

一夏が僕の方に蹴り飛ばされた。
うーん……協力して生き残るのもサバイバルゲームだよね？

「一夏、ごめんね？」

小型のガトリングを十機、ビットに装着して一夏に向ける。

「あー……お手柔らかに、とか言ってみたり……」
「うん、それ無理♪」

私は引き金を引くだけだからね。
秒間二百発という暴虐の疾風が一夏をくだした。

「……さて、と」

◇

んー……流石ですね。
ＩＳの性能とかじゃなくて、容赦のなさが怖いです。

「……さて、と」

む、シャル、私とやる気ですかね？

「流石にこの距離だと私が有利ですよ？」
「分かってるよ？　でもね、」

「「自分以外にあなたが倒されるのは気に食わない」」

うん、さすが自他共に認めるＩＳ学園随一のバカップルです。
以心伝心、一心同体、どちらでもいいですが、私たちの関係はそういう感じです。
私が織斑君に手を出したのも、そんな理由があったからです。

「というか、アリサを倒したい……かな？」
「そんな顔で言われると、むしろ押し倒したくなりますね」
「そ、そういうこと言うのよくないと思う」

顔真っ赤にしちゃって可愛いですね。
シャルはいつまで経っても初々しいままです。

最近、少しだけ積極的になりましたけど。
ん……？

「……シャル、狙われてますよ」
「そうだね。あと、アリサも見つけられてるよ」
「ですねぇ。彼女たちはなかなか強いですし……場所を変えて迎え撃ちましょうか？」
「そだね。第四アリーナとかどう？」
「了解です」

ヴェンギル（翼狼狩り）ガルムハント――展開

背中に半透明な菱形の破片が蝶の羽の羽にずらりと並びました。
その一枚一枚が非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）で、小型スラスターです。
そして上羽と下羽の間に大きな黒い八面体が二つ生えます。

「それじゃ、先に行ってますね」

八面体に内蔵された小型爆弾をいくつか落とし、その爆風を羽で受けることで機動を速めます。
速度なら白式の瞬時加速（イグニッション・ブースト）にも負けないんじゃないですかね？
こうやって小型スラスターを全て稼働させながら爆風を受けることで速度はどんどん上がります。
演算の結果では機体が壊れるまで加速できるとか。

「エネルギーの無駄ですし、ステルスは切りますか」

私のいる高さに攻撃できるのはＩＳだけですからあまり警戒する必要もないでしょう。

『おぉーっと！？　学園上空に突如としてＩＳが現れました！　あれは……生徒会長です！　どうやら目的地は第四アリーナ！　時を同じくしてシャルロット・デュノア先輩も第四アリーナに向かっている模様。二人を一度に倒せれば優勝は確実だー！』

だから場所を……

いえ、逆に纏めて皆倒しましょうか？

……あぁ、一般生徒に集まられると武器がこんにゃくな私には辛いですね。というか企画した人はなんでこんなものを入れたんでしょうか？

ヴェンギル（翼狼狩り）ガルムハントを展開したままアリーナの中央に……気配はしますが、今のところ攻撃してきそうな気配はないですね。

観客席に四人、ピットに二人ずつ、カフェテリアに三人……ですかね？

固まって行動しているので徒党を組んでいるのでしょう。おそらく、同じ部活とかそういう関係ですね。

特典が何かは分かりませんが、自分の部活のために確保しておこうということでしょう。

「まぁ、あなたたちに攻撃する意志が有っても無くても私には関係ありませんが、ね」

シャルがくる前にお掃除しましょうか。

「消えた！？」

「ちょ、どうすんの！？」

「声デカい！　ヤバいって、私たち気付かれたよ！」

まずはカフェテリアの三人ですね。

手に玉こんにゃくをもって……もう！　この武器、シリアスブレ

イカーすぎますよ！

……というか、この分だとバナナの皮とかも有りそうですね。

「バナナの皮があたった人はご愁傷様です」

こんにゃくはまだ使い道がありますからね。

接近戦には板こんにゃく、遠距離からは玉こんにゃく、そしてトラップとして糸こんにゃくが使えます。

……ば、バランスは、いいのかもしれません。量も結構ありますし。

……気を取り直して、玉こんにゃくを指弾の要領で打ち出します。

にゅるりとしているのでやりにくいですけど……まぁ、一般生徒に対しては十分ですね。

びたんっ
びたんっ
びたんっ

「きゃっ！？」
「ひゃぁっ！」
「うぐっ……く、口に……」

これで三人。

あ、生こんにゃくなので飲み込むとお腹壊しますよ？

「次は、観客席です」

びたんっ
びたんっ
びたんっ

びたんっ

「「「「やーらーれーたー」」」」

前々から思っていたのですが、ＩＳ学園の生徒って……ノリ、いいですよねぇ。

打ち合わせとかしてなかったのなら素晴らしい人材です。

そんなことを考えながら西側ピットの二人を板こんにゃくで倒しました。

残るは……

ばたっ

「っ！？」

東側ピットに足を踏み入れた瞬間、二人の一般生徒が倒れました。

これは……？

「アリサ、ネズミがいたよ？」

「シャル！」

再びステルスを解除してシャルに飛びつきま……せん。

危ないところでした。

飛び込んでいたら容赦なく倒されていたでしょう。

シャル、戦いになると容赦ないですから。

「二人は……追いかけてきてるけど手出ししなさそうだし……やろうか」

「ふふ、たっぷり壊愛してあげます」

「……素敵」

シャルと闘うのは久しぶりですね……
お互いに痛い目見るので自重していたんですけど……やっぱりイベントでは多少、タガが外れても仕方ないですよね？

「ステルスは、使いません」
「そう？　僕は気にしないけど……アリサがそう言うなら」
「だって、シャルに見てもらえなくなるでしょう？」

シャルが私に気付かないなんて、そんなのヤですからね。
本当はさっきの狙撃も飛び跳ねてしまうくらい嬉しかったんですよ？

「じゃあ、行きます」
「よろしくね」

全てのスラスターを同時に励起、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰めます。
離されたらシャルに狙い撃たれますからね。

「僕の方が、早いね」

シャルの周囲に二十のビット――トリガー・ハッピーが浮かび上がり、それに装填されているのは……散弾銃!?

「ファイア」

強烈な破裂音に聴覚が狂う……三半規管は無事のようです。
ですが、回り込んだお陰で被害は軽微です。飛び退けばダメージはゼロでしたが、そうしていたらこの状況はできません。
シャルは私に背を向けています。

後ろからシャルの首に腕を絡めて、そのまま背負い投げ、お腹から地面に叩きつける。

「シャル、遠慮しないでいいですよ？」

「……そっか」

シャルを組み伏せた私を取り囲むようにして、浮遊していたビットが火を噴きました。

今度はライフルですか。

「これではまだ、足りませんよ」

ヴェンギル翼狼狩りガルムハントの小型スラスターの一部を切り離し、ビットとして動かす。

それを銃口にぶつけることで狙いをそらします。

ビットを使えるのはシャルだけじゃなくて私も同じです。

「まだまだ、いくよ！」

シャルのビットがさらに換装され、今度は……ナイフ？

「こんなの、スラスターで押し退けられます！」

「ほんとに？」

スパンッ

「え？」

切断……？

ヴェンギル翼狼狩りガルムハントのスラスター群は小さくて薄いですがそ

れでも相当の硬度があるんですよ？
しかも、刃を立てさせないようにずらしていたのに……

「ただのナイフじゃないよ。超振動ナイフ。切れないものはほとんどないとか」
「っ！　爆！」

中部スラスターから小型爆弾を散布、同時に起爆してビットを破壊するとともに、その爆風を羽で受けて距離を取ります。

「アリサが飛ぶなんて珍しいね」
「飛ばさせたのはシャルじゃないですか」

飛ぶと格闘が出来なくなるので好きじゃないんですけどね……というか、離されちゃいました。
シャルのビットも十二機まで減らしましたし……昔のように、少しくらい無茶をしますかね。

「アリサ？　楽しい？」

……笑っているんでしょうね。

「えぇ、久しぶりの死合ですから……それはもう、愉しいですよ」
「む、無茶はだめだよ？」

無茶させてるのはいつもシャルです！
……と言いたくなりましたが、それを言うと日頃の仕返しだもんと言われるので止めておきます。
そんなに無理をさせている気はしないんですけどね……シャルも実際には悦んでくれますし。

「こほん、仕切り直そ？」
「ビット、これ以上壊れても知りませんよ？」

着地して有線式の迎撃用ビーム兵器、妖精（フェアリーダンス）の加護と三節六肢のカマキリの前足のようなナイフ、姫騎士（ヴァルキリースカート）の護剣を同時展開。
どちらも威力は低いものの精密性と速度に優れるのでシャルに突撃するときには重宝します。

キュィィィィン……

……シャルは多機能のガトリング砲。
普通の弾だけじゃなくてミサイルやらニードル弾やらを撃ち出すことができる物騒な兵器です……その代わり、連射性能は低いのがありがたいです。
それでも十二機合わせて秒間百発以上でしょうが。

「行きます……」

今度は疾歩（しっぽ）での接近。
それと同時に一斉射撃が開始されました。自分に向けられていなければ溜息を吐いてしまいそうになるくらい壮観です。

「くっ！」
「よっ、ほっ！　はっ！！」

動きの鈍い無誘導ミサイルは機動力だけでかわし、私を確実に捉えている弾を妖精（フェアリーダンス）の加護で撃ち落とし、姫騎士（ヴァルキリースカート）の護剣で切り裂きます。
比較的、ダメージの小さい弾丸は無視して我慢です。

きぃんっ！

近付いたところでミサイルを放っていたものが超振動ナイフに置き換わったので、姫騎士（ヴァルキリースカート）の護剣の刃で受け流しました。

振動していると分かれば対処の仕様はあります。

「まだ終わらないよ！」

四つのビットが突撃槍（ランス）に変わり、その槍先を飛ばしてくる。

遅いです。

二つを叩き落とし、二つは避けました。

これは、いくらなんでも悪足掻きが過ぎますよ？

「終わりです！」

シャルの頭部に拳を――

「アリサ、ごめんね？　……僕もまだ本気じゃなかったみたい」

ガンッ！

「！？」

腕が下からの衝撃に跳ね上がられ、空振ってしまいました。

しかも、腕の装甲が大破するというおまけ付きで……

「レイン・オブ・サタデイ……まだ使っていたんですね」

「やっぱりさ。ビットなんかに頼っちゃダメだよね」

「それを言ったらセシィが怒りますよ？」

「ふふ、そうかも」

セシィはビットが主兵装ですからね。

「ねぇ、ＩＳ学園で初めて戦ったときのこと、覚えてる？」

当たり前です。

だから、私はシャルの左手を掴んでいるんですから。

私に同じ作戦は利きませんよ？

「あのときと違うのは……ふふ、僕も悪い子になったかも」

「いいじゃないですか。良い子でも悪い子でもシャルは私の好きなシャルですよ」

「もうっ！　そういうことさらっと言わないでってば」

でも、なにかあるんですね。

「アリサ、僕を離さないでね？」

「っ！　……闘ってる最中に色仕掛けは利きませんよ？」

「ふふ、ちょっと時間を稼げれば良かったんだよ」

――注意、背後に高エネルギー反応あり――

「これは……」

「クラスターボムの構造を槍に搭載したんだ。結構痛いよ？」

痛いってそういう次元じゃ……！

というか、なんで私の腕を掴んだまま離さないんですか！？

シャルまで巻き込まれちゃいます！

「いやー……やっぱり、アリサを倒して自分だけってのも、ね？」

……死ぬなら一緒に？

「……私は、死んでもシャルを守るつもりですけど？」

「え……？」

……ぎゅうっ

――ヴェンギル（翼狼狩り）ガルムハント・スラスター群の分離――

――上下スラスター耐爆面を反転、対象を完封――

シャルを庇うように抱きしめます。

シャルの柔らかさを堪能するにはＩＳの硬い装甲が邪魔ですが今だけは我慢です。

「もとより、私が倒れるつもりもありません」

ドォン

槍先……いえクラスター弾頭が爆発しましたが、私とシャルは多少の高熱に炙られただけですみました。

まぁ、その代わりにヴェンギル（翼狼狩り）ガルムハントが使い物にならなくなってしまいましたけど……耐火性の高い、本来なら爆風を受けるための羽で弾頭を包み込むようにしたのですが、やはり耐えきれなかったらしく粉々になって空中に巻き上げられてます。

「うわぁ……キレイ」

「雪みたいですねぇ」

戦闘中であることも忘れて息をのむシャルの可愛いこと可愛いこと……実際、半透明の破片がひらひらと落ちてくる様子は綺麗ですけどね。

でも、修理のためにデュノア社の研究者さん達が泣くかと思うと素直に感動できません。

簡単な修理なら整備課の一松さんか三好さんにでも頼めばいいのでしょうが……跡形もない、といっても過言じゃないですからね。

「しばらく、こうしてようか？」

「今なら私を倒せますよ？」

「……ううん。二人で一緒に生き残る方が素敵だよ」

さっきまで無理心中しようとしてた人のセリフじゃないですね。

まぁ、私もシャルといられるだけでいいので、このままのんびりサバイバルゲームを傍観するというのもいいですね。

「終わるまで、こうしてていいですか？」

ＩＳを解除しても未だに私の腕の中にいるシャルに尋ねます。

「んー……だーめ」

「えー……？」

「今度は僕の膝枕で、ね？」

ポンポンと自分の膝を叩くシャル……のんびりするのもいいですね。

それでは、失礼しましょうか……

「そうはさせませんわ！」

「お前たちだけ楽をするなどということは断じて認めん！」

「あ、セシリアと箒も来たんだ」

太陽を背に、登場した二人ですが……やけにぼろぼろですね。

『おっとぉ！　デュノア先輩といちゃついていた不破生徒会長にオルコット先輩アンド篠ノ之先輩タッグが勝負を挑みました！　人の恋路を邪魔するなんて、馬に蹴られたいんでしょうか？』

……人の恋路を邪魔しているのは蘭ちゃんもですけどね。

鈴ちゃんが怒ってましたよ？

「ところでセシぃと箒さんは随分ぼろぼろですねぇ」

「……鈴さん、簪（かんざし）さんにラウラさんと連戦を強いられたのですわ」

「まぁ、良いけどさ。それより先に周りのギャラリーをやってもいいかな？」

……あれ？

シャルが、怖いですよ？

「正直に言うとね？　もう、うんざりなんだ♪」

シャルが笑いながら制服の上着を脱いで軽く振ると……

ガシャン

さらにスカートを軽く持ち上げて振っても……

ガシャーン

「あの、シャル？　その大量のエアガン、どこで手に入れたんです

か？」
「ん？　敗残兵から、ね」
シャルが落としたエアガンが軽く山になっています。
というか、どこに入れてあったんでしょうか？
「アリサはいいけど……セシリアと箒はぼぅっとしてると纏めて撃っちゃうから、気をつけてね？」
語尾にハートマークが付きそうなくらいご機嫌な口調ですけど……シャル、キレてます。それはもう、怒髪天ってレベルでキレてます。
……まぁ、かく言う私もシャルとの一時を邪魔されて頭に来てるのですが。
私も助勢しましょう。
「シャル、いくつか借りますよ？」
「んー、たまには僕の格好良いところ見せたいかも？」
「……なら、大人しくしてます♪」
シャルがなんだかやる気なので任せることにしました。
銃を手に取ったシャルはほんわかする微笑みから一転、無表情の中に少し楽しさを感じさせる凛々しい顔つきになりました。
うーん。
ラヴいです。
パンッ
「……うん、一番小さいのでも届くから十分」

銃の型自体には詳しくないのですが、シャルは拳銃の大きさのエアガンを握っています。
届くって言ってましたけど……あの小さなＢＢ弾が見えているのでしょうか？
私には遠くで誰かが痛がっているのしか見えませんよ？

パパパパパッ！
タタタンッ

『デュノア先輩かっこいい！　これはアリサさんが惚れるのも仕方ないですね！』

蘭ちゃん……？
私のシャルに手を出したら縊りますよ？
でも、今のシャルは確かにかっこいいので許してあげます。
手に持つ拳銃を撃ち切るとそれを投げ捨てて、足元の違うエアガンを蹴り上げてスイッチしています。

「ふふっ！」

シャルも楽しそうで何よりです。
今は両手で自動小銃のようなエアガンを持ってＢＢ弾をばらまいています。

『なんと言うことでしょう！　この数分間で第四アリーナに集まっていた半数以上が失格です！　うーん……来年からはまた専用機持ちと一般生徒が分けられそうですね。せっかく関係なしに楽しめると思ったのに』

あぁ、なるほど。

専用機持ちと一般生徒が差別化されているので、その垣根を低くしようというのがこのイベントだったんですね。

タタンッ
ぱんっ！
タタタタタタ！

「あらかた、片づいたかな……？」
「え、何それ怖いです」

一人で殲滅しちゃったんですか？

『えー……現在、第四アリーナにいる生徒は四人のみです。アリサさん、じゃないや。不破生徒会長、デュノア先輩、オルコット先輩、それと篠ノ乃先輩です！　不可視の生徒会長が有利にも思えますが……一体どうなるのでしょう！』

んー……
やっぱり一般生徒と専用機持ちは身体のスペック自体が違うんですねぇ。
まぁ、それぞれが訓練を受けているので当たり前といえば当たり前なのですが、専用機持ち以外には生身で戦いあっているのにこの結果ですからね。

『ちなみに現在残っている専用機持ちの方もアリーナにいる四人のみです！　一般生徒の方々は彼女達を狙うもよし、逆にひっそりと隠れるもよしです！　集まる一般生徒を隠れて倒す、というのもありですね』

蘭ちゃん、意外と頭使ってるんですねぇ。

というかラウラさんや簪さんも倒されちゃいましたか。あの二人のことだから一般生徒には正直に正面から挑んだんでしょうね。

とりあえず……

「箒さん……ラストダンスを踊りましょうか？」

「じゃあ僕はセシリアとだね」

……アリーナの中央でシャルと並んで二人に向き合います。

セシぃも箒さんも既にＩＳを展開しています。

紅椿……第四世代型ＩＳだなんて、フランスは一年前やっと第三世代型を完成させたっていうのに二年前の時点で第四世代型だなんてズルすぎです。

というか展開装甲、あれ、なんですか？

なんで装甲が武器に変形するんですか？

どう考えても物理法則とかいろいろ……あぁ形状記憶合金ですか。踏んでしまっても元通りになるメガネフレームと同じ構造なんですね。もう、それでいいですよ。

「行くぞ不破！」

「あ！　ちょっとその前にいいですか？」

「……なんだ？　出鼻をくじかないでくれ」

「大したことではないんですけど……私には苗字で呼ぶなって言ったのになんで私のことを名字で呼ぶんですか？」

私は自分の苗字が嫌いというわけではないですけど、これではまるで私が一方的に箒さんに対して友情を感じているような構図になっている気がします。

いえ、どうでもいいんですけどね？　本当ですよ？

「べ、別に今じゃなくてもいいだろう！」

「いいですけどねー？　いいんですけどねー？　ただ気になっただけですからー」
「う、うぅ……分かった。いくぞア、」
「篠ノ乃さん、行きますよ？」
「……穿千（うがち）！」

紅椿の両肩の展開装甲が変形、十字弓（クロスボウ）の形をしたレーザー兵器…性格にはブラスター・ライフルとなって私に光線を浴びせます。

「お、っと……」

まぁ、セシぃと散々戦っている私にとっては直線でしか飛んでこない光なんて怖くも無いんですけどね。
私が怖いと思うのはセシぃのブルー・ティアーズのように避けても後ろから襲ってくる意味不明なレーザーや、鈴ちゃんの龍砲のような眼に見えない攻撃。そして、なんといってもシャルの直線攻撃であっても、そして見えていても関係のない弾幕ですね。そもそも避けられないですから。

「もうっ、冗談の分からない人ですね篠ノ乃さんは！」
「雨月（あまづき）！　空裂（からわれ）！」

掛け声とともに現れた二本の刀を篠ノ乃さんが空に振るいます。
雨月の付きと同時に直線的なレーザーが、空裂の斬撃と共にエネルギー刃が飛んできました。
うーん……やっぱり、小手先ですねぇ。
二年生の頃までは機体が付いてこないで苦労しましたが……実際、第三世代兵器ともなると違いますね。自分が出すことが出来る速度の限界を軽々と超越します。
そういう意味で、私たち第三世代組と実力に大差ない織斑君も箒

さんも、まだＩＳをしっかりと乗りこなせていないんです。
……今の私なら昔の織斑先生には勝てるかもしれませんね。

「はぁ……篠ノ乃さんにはがっかりです」
「ま、また苗字で！」
「そんな興奮しては勝てる勝負も勝てませんよ？　ただでさえ、あなたの前に立っているのは学園最強の生徒会長（わたし）なんですから。あんまり酷いと十月最後の夜（イタズラしちゃいます）よ？」

会話の中にキーワードを含めることでステルスの展開を早めます。
兵装の名前を言って展開するのは未熟な証拠と言われていますが、こういう風に使えば予備動作を悟らせることなく瞬時に展開することが出来るんですよね。
そして、近距離では空気の対流などで居場所を悟られてしまうので複合ソフトキル兵器（ヨルノトバリ）を散布、ハイパーセンサーを狂わせます。
このソフトキル兵器の良いところは、無理矢理私の反応を消すのではなく、全く見当違いの方向にいくつも私のダミーを作り上げるというところです。
当然、私自身が攻撃されるリスクもあるにはありますが、それも爪の先ほど。

「隠れるとは卑怯な……ただ、そのステルスの弱点は知っているぞ？　空気の対流等の情報さえもこちらのＩＳコアをハッキングして感知されないようにしているが、機体から出る音だけはごまかせない。そうだろう？」

ええ、その通りです。
十月最後の夜（イタズラしちゃいます）を展開すると同時に半径十メートル以内のＩＳのコアにコアネットワークからそれなりのレベルのハッキングを仕掛けて私の場所をさらに分かりにくくします。

その影響を受けないのはシャルのように識別コードが発行されているＩＳだけです。

「つまり、音が一切出ていない現状、お前は一歩も動いていないということになる！」

空裂を横薙ぎ一閃、横に広がるエネルギー刃が私が“いた”位置に殺到します。

「……いないだとっ！？」

「後ろですよ」

朝峰嵐才流歩法――兎踏（とと）

本来は兎のように足音を消して逃げるための歩法ですが、今は音を消すための隠密歩法として利用しました。

もちろん、ＩＳに乗っていても音が出ないようにちょっとしたアレンジを加えましたがね。

「なっ」

右腕を紅椿の胴部に回して腹部を締め、左手をその背中――心臓の裏側に押し当てます。

私の左腕に展開しているのは討鬼（ドラクル）の鋼杭（ペイン）。どんなに堅牢な装甲でも厚さが五十センチより薄ければ穿つことのできる決戦兵器です。

もちろん、第四世代になったとはいえ絶対防御によってシールドエネルギーが減少するのは変わりません。

そして絶対防御は命に影響が起きやすい部位であればある程、シールドエネルギーをかき集め操縦者を守ろうとします。

心臓の裏側なら、私の杭の威力も鑑みると一発で落とせるでしょう。昏睡状態まではいかないでしょうけれど。

「篠ノ乃さん。なんで、中距離戦をしようとしたんですか？」

左腕を押し付けてプレッシャーを与えながら尋ねます。

「私は別に中距離戦など……」

「していましたよ？　だって、雨月も空裂も直接私にあてようとしなかったじゃないですか？　得意の剣術はどうしたんですか？」

「しかし、接近戦では、」

「じゃあ、篠ノ乃さんの流派が圓明流に負けているって認めるんですか！　そうなら明日にでも看板をいただきに行きますよ！？」

実際、圓明流に勝てる剣術はないと思いますが……それでも自分の流派には誇りを持たないといけません。

そうじゃないと、同じ流派を研鑽（けんさん）してきた先達者達に失礼じゃないですか……

「むぅ……そうだな。不破の言うとおりだ。では仕切り直しと、」

「いくわけないじゃないですか。これはサバイバルゲームですよ？　生き残り戦なんて言っていますが本質は殺し合いです。情けをかけたがために後悔する、なんてことは嫌なので……」

「おまえ、それでも武道家か！？」

家業は暗殺です……とは言いませんけど。

そもそも見逃す理由がありませんしねぇ……？

「まぁ、待て。落ち着いてくれ。そんな太いもので貫かれたら失神してしまう」

「そこはかとなくえっちな感じだったので却下です」

「どこがだ！？」

「……ところで箒さん。このゲーム、専用機持ちが専用機持ちを倒す方法はなんだと思いますか？」
「支給された武器で一撃を加えるか相手のＩＳを行動不能にするかだろう？　まぁ、ＩＳを展開している状態で武器での攻撃を通すのは不可能だからやはり相手を打ち倒すことになるだろう」
まぁ、間違ってはいませんね。
ＩＳのシールドエネルギーはダメージの代償に関わらず操縦者を危害から守るので、例えエアガンのようなおもちゃの攻撃でも肌にまで届きません。
「シールドエネルギーはダメージを可能なかぎりは事項とするんですよねぇ。では、どうして私達には泥が付着するのでしょう？」
「それは、ＩＳが危険のないものだと判断したからだろう？」
「そうです。ＩＳは土や砂のようなものが目や口以外に付着する分には無視しています。つまり害がなければ通るんですよ」
「ふむ……」
「たとえば、こんにゃくが武器の生徒がいたとして、ＩＳはそれを攻撃だと判断すると思いますか？」
「は？」
……答えは、否です。
にゅるん
「ひゃうんっ！？」
「失格（ゲームオーバー）ですよ。箒さん」
……こんにゃく、専用機持ちに対しては有効ですねぇ。

ビッ、ビッ、ビィィィィィィィィッ！

『ここで、終了のサイレンです！　これにて第一回サバイバルゲームは終了！　第一アリーナにて成績発表があるので興味がある方はお越しください！』

それにしても蘭ちゃんは最後まで司会に徹していましたねぇ。
そういえば中学生の時は生徒会長だったそうですし、仕事をするのが好きなのかもしれませんね。
もしそうなら生徒会に招き入れてもいいかもしれません。

「シャルー。行きます？」
「ん、そうだね……アリサに勝ててるのかどうかも気になるし」
「わたくしも行きますわ。これでも鈴さんとラウラさんを倒したので高得点は狙えるはずですわ」

ふぅん。
セシリアとシャルの方は決着が付かなかったんですね。
まぁ、お互いに短期決戦を主とする戦い方ではないので当たり前ではありますけど。
……でも、優勝者はシャルでしょうね。あれだけの数の一般生徒（ギャラリー）をひとりで殲滅しちゃいましたし、その前にも織斑君にとどめさしていますし。
二位は私でしょうか。
シャルと上下並べたらいいですね。
その下にセシィというところでしょうか？

◇

「いやー、驚きました」

「そうだねー」

優勝者がシャルだったのはいいとして、準優勝が蘭ちゃんだとは思いませんでした。

なんでも、あの放送は学園から頼まれた仕事でも何でもなくて情報を統制するためにやっていたのだとか。

人が少ないので放送室の機能のジャックは簡単だったと思いますが、それを思いつくのがすごいです。

情勢を操作できれば生き残ることのハードルはぐっと下がるでしょうし。

「蘭ちゃんのはなかなか私好みの作戦でした」

「はぅ……そんなことないです」

「むぅ」

なぜか、最近は私が話しかけると蘭ちゃんが赤面するんですよね。

ようやく、私がすごい人だと気付いたのでしょうか？

……シャル、睨まないでください。

「私のは、なんというか卑怯でしたから……」

「それで、順位的には私に勝っているんですから誇っていいと思いますよ？」

蘭ちゃんがすごかったのは放送能力を手にしてからでした。

ただ自分から危険を離すのではなく、何度も勢力を分断した上で、自ら狙撃をして点を稼いでいたそうです。

蘭ちゃんが参加者ではなく司会だと思っている人相手ですから不意をうつのも用意だったでしょうし。

聞けば簪さんも蘭ちゃんが倒したとか。

一般生徒の中ではずば抜けた戦績でしたね。

「うーん……蘭ちゃんにはなにかご褒美をあげないといけないですね」
「あ、アリサさんからのご褒美……」
「ら、蘭ちゃん？　お顔が真っ赤ですけど……体調優れないんですか？　保健室、連れて行きますけど……」
「え！？　えと、あの……お願いします、アリサさん……」

やっぱり十二月に外で何時間も緊張状態に置かれたら、精神的に参っちゃいますよね……
来年もやるようでしたら、私が卒業してしまう前に行事の日取りを改革しましょう。
先生方も何も考えていないわけでもないでしょうが、気付いた問題点は直ちに修正するべきです。

「じゃ、失礼します」
「え？　きゃぁっ！？」

あまり歩かせるのもどうかと思うので蘭ちゃんを抱き上げました。いわゆるお姫様だっこの形です。

「あ、アリサ。そ、それはランが恥ずかしいんじゃないかな？」
「でも、触ってみて分かりましたけど身体も熱を持っていますし、吐息も熱いです。なるべく蘭ちゃんに負担かけない方がいいと思うのですが……蘭ちゃん、恥ずかしいですか？」

蘭ちゃんが嫌がるなら無理矢理抱き上げて連れて行くわけにも行きませんからね。
でも、目もぼーっとしてるように見えますし、息もだんだん荒く……それに拍動も速くなっていってますから、急がないといけない

気がします。

「あ、アリサさん！」
「はい、聞こえていますよ」
「えっと……このまま、が、いいです」
「分かりました。シャルは先に戻っていてください。ぞろぞろと保健室に行くのは迷惑になりますから」

なにより、蘭ちゃんが病気だったとして、シャルに伝染るのは避けたいですから。

「で、でもさっ、やっぱり二人いた方がなにかと楽だと思うよ？」
「シャル、お願いです」

……私の負担を減らそうとしてくれるシャル。
それは嬉しいんですけど、やっぱり二人して病気になるリスクは避けたいです。
どちらか片方が病気になってしまえば逢えなくなっちゃうんですから。

「……アリサの、ばか。お願いなら聞きたくなっちゃうじゃん」
「ふふ、ごめんなさい。じゃあ行きますね？」
「うん。おいしい夕食作って待ってる！」

部屋に戻ればシャルと同室ですか……生徒会長権限を利用して寮の部屋割りに口を出して良かったです。
一日中シャルと一緒にいられて幸せです。

「アリサさん、相変わらずシャルロットさんと仲良いんですね……」
「ええ、だからとっても幸せです！」

「あぅ……」

あ、のろけてしまいました。

体調が悪いときにのろけられたら嫌な顔もしますよね。反省です。

「あの、アリサさん」

「はい？」

「その、幸せそうなカップルを引き裂いてまで略奪愛を狙うのは…

…間違ってますよね？」

……織斑君と鈴ちゃんのことですか。

確かに略奪愛は二人の関係を崩すでしょうが……

「自分の方が相手を幸せにできる、そういう自信をもって、一生恨まれることを覚悟してけじめを付ければ良いんじゃないでしょうか」

「ぇ……」

「その人以外、何もいらないと、そう思えるんでしたら間違ってませんよ。恋愛に順序は関係ありません」

鈴ちゃんも奪いたいならかかってこい、みたいなスタンスですしね。

奪われたら一カ月は泣き続けた上で、織斑君を一生恨んでやる、とも言っていましたけど。

「で、でもそれじゃ」

「ええ、奪われた方には誠意を見せないといけません。もちろん、それは幸せな姿です」

私の場合、シャルが幸せそうな顔をしていれば奪われてしまっても我慢できます。

多分、思い出しては泣くことになるのでしょうが、シャルが幸せならと思えるでしょう。

私達は女の子同士ですから大人になるにつれて苦労や負担も増えますしね……なにより、自分の子供を持てませんし。

だから、シャルが男性相手に恋をしたら……私は引き留めずに身を引いてしまうでしょう。

シャルのことを愛していますから。

「私は……幸せにできるかな……？」

「蘭ちゃんならきっと。私も蘭ちゃんの笑顔から幸せを貰っていますから」

「そ、そそそ、そうですか……」

それにしても、彼女を作っても女の子を誘惑し続けるなんて、織斑君も罪な男ですね。

鈴ちゃんも気苦労が耐えなさそうです。

40／EX3．　Ｓｕｒｖｉｖｅｚ！（後書き）

分かると思いますが、私は戦闘描写を出来れば書きたくないという人間です（
なので分かりにくいところは適当に想像して補完して下さい（

書き忘れていましたが、姫騎士（ヴァルキリースカート）の護剣の元ネタは武装錬金です。
運営さんに消されるところだったぜ（

※二巻終了時までのまとめ＋オマケ（前書き）

纏めって言っても回想ではないです

本編更新ではないお詫びに、活動報告のバトンにてヒロインたちをいちゃラヴさせてみました（

興味がある方はどうぞ。

※二巻終了時までのまとめ＋オマケ

ヒロインが出揃ったのでそれぞれ原作と異なるところなどをまとめてみます。
キャラは登場順です

不破アリサ
主人公
元フランス代表候補生
元々日本にいた暗殺を生業とする家系の末裔だとか（
ＩＳ学園編開始時からバストが１サイズアップ。
セシリア、鈴と親友関係であり、シャルロットにたいして片思い中。
また、ラウラからは熱心にシュヴァルツェ・ハーゼへの軍属を（
二巻終了時までの行いから問題児と見られているものの本人は気づいていません。
一夏から奪われたフラグメイク能力の一部を引き継いでいる模様です。

織斑　一夏
原作主人公。
変更点はフラグメイク能力と主人公補正の弱体化。
戦闘はアリサとの模擬戦で接近戦の要である先読みを特訓中。原作ほど猪突猛進ではないです。
また、クラス代表の座をアリサに奪われています（
一夏がフラグを立てているのは鈴、箒、ラウラ、蘭の四人。
さいきん、シャルロットにゲイ疑惑をかけられているものの本人は気付かない。

セシリア・オルコット
イギリス代表候補生
原作から大幅に変更されているひと。
アリサとしょっちゅう模擬戦をしているため原作よりも強さに上方修正。
特に近接戦闘への対応が迅速になりました。
しかし、ビームは原作通り曲げられません。
一夏への恋心はないものの、今までに見てきた男性とは違う姿に興味は持っています。
……なにかあれば恋に発展するかもしれない、そんな状況。
アリサにとっては母親のような、そして姉のような親友。

また、過去の出来事からアリサはセシリアに対して負い目を感じています。
原作と違い、一夏に恋していないため他のヒロインとも隔意無く付き合ってます。
転校生のラウラに対してはいろいろと世話を焼こうとしています。
ただし、アリサを不安定にさせたシャルロットに対しては思うところがある模様。
原作通り、料理は残念。

鳳（ファン）　鈴音（リンイン）
中国代表候補生
あまり大きな変化はありません……というか原作で出番が少ないのでキャラをつかみ損ねてます。
ルームメイトがアリサであること、積極的なこと、そして一夏にキスをしてしまっていること程度でしょうか。
でも、一夏がのらりくらりとしているので関係性に変化はなし。
アリサ、セシリアとは一歩踏み込んだ友人関係にあります。
戦闘力の変更はなし。

箒は恋敵ではあるものの、それを踏まえなければ嫌いではない
「べ、別に本編の私並に出番が少ないから親近感感じてるとか、そう言うんじゃないからっ！」
シャルロットが男装していたことを知っていた一人。

更識盾無
最強生徒会長
変更点はやはり少ないです。
暗部繋がりということでアリサに対してなにかと気をつけている（気をつかっている）とかなんとかなんだかんだで頼りになる人。

ラウラ・ボーデヴィッヒ
ドイツ代表候補生&ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』隊長
大幅に変更されている一人
そして、知る人ぞ知るセカンドヒロイン（？）
あれ、ガールズラブの相手役ってヒロインになるのでしょうか？
……アリサも主人公（ヒロイン）なのですが（
一夏に想いを寄せている点は変更無し。
ただし、それ以上にアリサを、というか専用機持ちをまとめてシュヴァルツェア・ハーゼに勧誘している……IS最強部隊を作るのも面白そうですね（笑）
IS操縦者としての身体性能（スペック）は随一。
ヒロイン陣に対する好き嫌いはない模様。
頭の中が割と平和。

シャルロット・デュノア
フランス代表候補生
本作正ヒロイン……の筈なのに（

原作通り、高速切替（ラピッド・スイッチ）による掴み所のない遠近自在の戦闘法砂漠の逃げ水（デ・デザート）は健在。
フランスでのアリサとの模擬戦の経験からＩＳの訓練を熱心に取り組むようになったため戦闘力は原作より上方修正。
一夏に対する好意はあるものの恋愛感情はない。というかゲイだと（ｒｙ
原作よりもアグレッシヴな正確。&ちょっと男らしかったり（

一組三人娘（一松、二木、三好）
三人のＩＳは合体して一二三（ひふみ）号に。。。もちろん嘘です。
全員が中学の時からの知り合い。また演劇部に所属しており特殊メイクを含む化粧の腕前が抜群。
一松さんがロリ巨乳
二木さんが普通体系
三好さんがスレンダー美人（一年女生徒番付高ランカー）
基本は一×二、たまにリバ。
三好さんはそういうのに興味無い。だってクールビューティだから！
三人とも友達想い。

原田さん
モブ友人
モブのくせに痛い目にあってたりして……
そして唯一、アリサが○○を○○なことを知っている人。
だから三巻では活躍があるかもしれない！
最近では「右手の傷が疼く……代表、逃げて！」なんて感じで傷痕をネタに邪気眼……腕？　ごっこでアリサを困らせていたりいなかったり。

オマケ

ＥＸで出てきた兵装とかＩＳとか

ミラージュ・ガルー

通称：幻狼

フランスで正式採用された第三世代型ＩＳ。

系列機はミラージュ型（タイプ）と呼ばれる。

搭載兵器は以下の通り。

十月最後の夜（イタズラしちゃいます）

ミラージュ・ガルーに搭載されている第三世代型兵器

アリサが『Ａｃｅ　Ｃｏｍｂａｔ　Ｘ』世界から持ち帰った空中要塞グレイプニル、特殊大型ＶＴＯＬ（＝垂直離着陸）攻撃機フェンリアに搭載されたステルスシステムを安定化＆小型化したもの。

映像表示素子とプリズム結晶化セラミック製偏向レンズで覆うことで高いカムフラージュ能力を実現した。

莫大なエネルギーを必要とするため最長連続稼働時間は四時間。

当然、何かしらの動作や周囲の風景の変化、兵装を展開した場合はエネルギーのロスが増えるため、ステルスを展開しながらの戦闘可能時間は最長でも三十分～一時間と考えられている。

電磁吸収コート、レーダー拡散コートなどの特徴も有しており、ハイパーセンサー以外の計器類での補足は可聴域の稼働音と空気の対流、地面の振動などからしか分からない。

またコアネットワークを経由してダミーデータ報を流すためハイパーセンサーであっても二十メートル以近からでは補足が難しく、逆に五十メートル以上離れても索敵に思考を割かなければ見つけられない。

名称は、会話中に予備動作なくステルス機能を発動するためのお遊び的な感覚から命名。

複合ソフトキル兵器（ヨルノトバリ）

電磁波、超音波、チャフ、フレアなどありとあらゆる方法を持ってハイパーセンサーを含む計器類を無効化するソフトキル兵器群。

ただし、射出というプロセスとさほど広くない効果範囲という制限が存在するため、その時点で大体の居場所が掴めてしまう欠点あり。

ただし、効果範囲内においては音以外での索敵は不可。

一応、対流からも算出することが出来るが、空気中に散布されたチャフが乱気流を生み出すため非常に手間がかかる。

ヴェンギルガルムハント（翼狼狩り）

カゲロウに装備されていたものをステルスに対応させたもの。

蝶の羽の形に広がる半透明の小型スラスター群とその間に二本突き刺さるように屹立する八面体の大型スラスターが二基展開される。

大型スラスター内部には数百の小型爆弾が内蔵されており、それを投下し爆破させる。

爆弾による攻撃も可能だが、本来の使い方は爆風による急加速と急制動を可能にするためのもの。計算上ではＩＳに乗っていたとしても人体が壊れる速度が出せる。

また、小型スラスター群は耐火性が高くなっているためそれぞれを自律操作することで楯のように扱うことも可能。

姫騎士の護剣（ヴァルキリースカート）

武装錬金のアレ（

白狼の咆号（ウルフズロアー）

カゲロウに搭載されていたものをステルスに対応に（ｒｙ

妖精の加護（フェアリーダンス）

カゲロウに搭載されて（ｒｙ

討鬼（ドラクル）の鋼杭（ペイン）
カゲロウに（ｒｙ

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？
通称暴虐の疾風（ラファール・タイラニー）
フランスの第三世代型ＩＳ。
正式採用はされなかったものの、その性能はミラージュ・ガルーに勝るとも劣らない。
基本設計思想はミラージュ・ガルーに勝ちうる機体であること。
そのため、見えないのなら周囲一帯を焦土に変えてしまえばいいという超攻撃的な機体になった

トリガー・ハッピー
ラファール・タイラニーの主兵装。
これ自体の攻撃力は皆無だが、クラスターランス、ガトリング砲、ライフル、超振動ナイフなど、様々な兵装を装着することで多様な状況にも対応できる多目的ビット。
分かりやすく言うのなら遠隔操作のできる二十の腕。
近接格闘や射撃のみならず、ナイフなどを遠隔操作することで遠隔格闘のような型外れな戦い方を可能としている。
そのため、シャルロットの砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）との相性は抜群。
ＲＲＣ２の兵装も搭載している。
ＩＳの限界まで拡張した量子化領域には百種二千個からなる兵装が収められている。

おまけのおまけ、という戯れ言

誰が一番強いのか、ということですが皆同じくらいです。
ただ、強いていうなら

シャルロット＝ラウラ＝アリサ≧セシリア≧鈴＞一夏＝箒となります。

でもラウラはセシリアが苦手ですし、そのセシリアは鈴が苦手。

鈴はアリサに勝てませんがアリサとセシリアと同じくらい……

と、じゃんけんのような感じになるので一概には言えませんね。

41．Larmes（前書き）

「なみだ」

そろそろタイトル考えるのが辛くなってきました（

お気に入り登録６００！

ありがとうございます！

41. Larmes

ちゅん、ちゅんちゅん

「……知らない天井です」

いえ、本当はもう四日目ですし、そもそも寮の部屋のほとんどは同じ造りなので天井自体は一緒なんですけどね。

こんな感じで今日の朝は寮の医務室でおはようございますな私です。

理由ですか？

いえ、先月のように性懲りもなく傷を開かせては倒れていたわけではなく手ですね……

その、シャルとの接触禁止が辛すぎて辛すぎて……軽度の拒食症のような症状がでちゃったんです。

それに気付かず、というより軽視して生活していたらとうとう倒れて今に至るというわけです。

……点滴には嫌な思い出しかないのですが仕方ありませんよね。

胃がものを受け付けない状態なんですし。

「でも、私がここまでシャルとの接触を必要としていると織斑先生も分かってくれるはずです！　きっと、そろそろ禁止も解けるはずですよね」

「……残念ながらそれはないな。むしろ今以上に徹底する必要があるかもしれん」

恐る恐る声の方向を伺うと……

「織斑先生!?　いつのまに……」

「今だ」

腕を組んで、全くこいつは、という顔をしている織斑先生が立っていました。

でも、今以上に厳しくするってどういうことですか！？

こんな、幼気な少女が好きな女の子を想って倒れてしまうほどなんですよ！？

「あー……一つ、確認だ」

「はい？」

「不破は本気でデュノアに恋をしているのか？」

探るような目つきで、でも恋という単語が恥ずかしかったのか若干紅い頬で織斑先生がそんなことを聞いてきました。

「いや、私はそういうことに偏見はないがな。周囲の目に悩んでいるのなら担任として相談にのらなければならないだろう？」

……織斑先生って、教師としての自覚はないんだと思ってました。

「ほ、本気なわけないじゃないですかー。女の子同士ですもん！」

「そうか、デュノアが男性だと思い込んで恋をして……ということだったら私にも責任があるかもしれないと考えてな」

「そ、それは、最初は格好いい男の子だと思いましたけどね！」

な、なんで担任に自分の恋愛について話さないといけないんですか！？

そ、それにシャルのことが本気で好きなのかは……まだ、私には分かりません。

必要とされない私が手助けできる子だったから……だから一目惚

れをしたのかもしれませんし。だって、私の心を締め付けるのはシャルの満面の笑顔でも泣き顔でもなくて、周囲に気を遣おうとする時の笑顔なんです。

初めて逢った、あの時の表情を思い出すだけで、胸がキュゥっと苦しくなって、自分を損なってでもシャルを助けたいと思っちゃうんです。

もしかしたら、一目惚れも勘違いで……シャルという、私にとって助けるための存在を維持したいと思ってるだけという可能性も……十分あります。私は弱くて歪んでますから……

「あの、用件はそれだけですか……？」

「ああ、それだけだった……が、用事が増えたな」

「え……？」

なんだか織斑先生が怖い目をしています。

一体、どんな用事が増えたんでしょう？

というか、そんな真剣な顔をするほど重大な用事なら私を見舞っていないで、早く現場に向かうべきなのではないでしょうか？

「第一アリーナに行くぞ。特訓をつけてやる」

「……いや、私、病人ですよ？　しかも傷もまだ完治してませんし……」

「知らん」

えー！？

誰ですか、こんな人に教師としての自覚があるとか思った人は！？　私です！

学校を休んで怪我の治療をしている生徒をアリーナでしごくだなんて鬼ですよ！？

というか、あなた授業どうしたんですか！？　今、織斑先生の授

業の時間ですよね！？

「ああ、独り言だが……デュノアが毎日ここらへんを彷徨いているらしいな。しかも、途中にある部屋に紙を投げ込む悪戯をしているそうだ。これは叱らないといけないな」

「うぅ～～！　分かりました！　行きます！　もう！　生徒を脅すなんて教師としての自覚ないんですか！？」

「あったら授業をしている」

むぅ！

織斑先生、シャルが私を気遣って毎日手紙を投げ込んでくれているのを知っていたんですね！

誰かには知られているとは思ってましたけど、まさか織斑先生が知っていたなんて。

「あ、そういえば……シャルは元気ですか？」

「本人に聞けばいいんじゃないか？」

あー、もう！

ニヤニヤ笑って嫌な人ですね！

……接触禁止にされてから、あまり登校もしていないんです。分かるわけないじゃないですか。

もしかしたら、男だって偽っていたから虐められたりしてるかもしれないじゃないですか。

手紙も……シャルが私を気遣って本当のことを書いていないだけかもしれないじゃないですか……！

「……やっぱり学校行きたいです！」

「あぁ、ちなみにデュノアは普通に受け入れられている。不自然なほどにな。まったく、おせっかいなやつらだ」

「……それを先に言ってください」

織斑先生、私の反応を見て遊んでいる気がします。

まったく……こう見えて私は心配性なんですからね？　自慢じゃないですけど、ネガティブなことを考えるのは得意な方だと思ってます。

「不破、まだか？」

「え？」

「だから、早くアリーナに行くぞ？」

「……はい」

◇

「……降参です」

「三十六分二十八秒……まぁ持った方だな。流石は主席入学者か」

「次席です。主席はセシィですよ」

「聞けばあの山田先生に随分手を抜いたそうじゃないか。武器を使わずに落としかけられたと言っていたぞ」

そこまでじゃないと思うんですけどね。

シールドエネルギーを一番削ったといっても精々三割強という程度ではないでしょうか。

でも、織斑先生は強いですねぇ。流石は第一回モンド・グロッソの優勝者ですか。

んー……目立つのは嫌いなのですが、先生くらいの強さの人たちが出場するなら私も参加してみたいですね。

「ああ、そういえば不破が休んでいる間に臨海学校の詳細が詰められたから後で職員室に来るように」

「行きません」
「……なに？」

に、睨んだってダメですよ！
わ、私泳げないんで臨海学校なんた楽しくもなんともないじゃないですか！

「なんで林間学校じゃないんですか！？」
「なんでと言われてもな……これまでずっと行き先は海だったのだから当然だろう」
「お、おぉ、泳げない子が可哀想じゃないですか」
「……ふむ。なら任せろ」

織斑先生！
私のために林間学校を提案してくれるんですね！
ああ、なんだかんだ言っても生徒のことを考えてくれるいい先生だったんですね！

「臨海学校について文句を言わなければデュノアとの接触禁止を解いてやろう」
「ホントですか！？　……っは！？」
「ふむ。満更でもなさそうだな。それに私との模擬戦でも傷は開かなかったんだ。もう塞がりかけているのだろう」

ニヤリと笑って織斑先生は去っていきました。
というか接触禁止は傷が開く原因ができるのをなくすためで、今回はどうも傷が開かないか確認するために模擬戦をして……
あれ、私、先生にハメられてます！？
ぅう……いいですけどね！
こうなったらスクール水着で出歩いて困らせてやります！

だ、伊達にロリ体型では……やめましょう。皆さんに冷やかされて私だけが凹む結果になるのが目に見えてます。

「でも……」

もう接触禁止も解けたんですし、学校をサボる理由もなくなりました。

いえ、実は体調が悪いとかではなく単純にシャルがいるのに接触禁止という状況が嫌だっただけなんですよ。

とりあえず後で学校に行ってみましょう。

途中から登校するのは恥ずかしいですし、放課後くらいに行けばいいですよね？

◇

「シャルロット、付き合わせてごめんな」

「あ、ううん。全然いいよ！　というか、ほら、遅刻したのは僕達にも原因があるし」

遅刻の罰として学校の居残り掃除を千冬姉に命じられて途方に暮れていたが、たまたま通りかかったシャルロットが手伝ってくれたおかげで予想より随分早く終わりそうだ。

それにしても、不破さんの机重いなぁ……教科書だけじゃなくて辞書やら小説、ファッション雑誌が詰まってるから当たり前だけどな。

こんなに綺麗に詰め込むなら持って帰ればいいのに……そういえば登校するときも手ぶらで来てたな。

まぁ、体小さいし重いもの運ぶのも大変なのかもしれん。

「ん、んん～！」

「って、シャルロット。机は俺が運ぶよ」

だいたいその机は岸里さんのだ。彼女も教科書だけ置きっぱなしだから、不破さんの机の次に重いのは分かりきっている。

「へ、平気だよ。専用機持ちだし、体力は人並みに――」

いや、専用機持ちと体力は関係ないだろ。

「うわっ！？」

「あぶねっ！　…言ってるそばから。怪我するから俺がやるよ」

「うん、ごめんね」

足を滑らせたシャルロットをとっさに抱きしめて支えたが……失敗したな。シャルロットも若干気まずそうにしてるし……

「って、すまん。離れる。一応、事故だ」

「一夏が女の子にそういうことしないって分かってるから大丈夫だよ……女の子には」

そうは言っても顔紅いぞ？

最後の方も声が小さくなってて聞き取れなかったし……恥ずかしいんだろうし茶々入れになるかもしれないからこれ以上は止めておこう。

◆

びっくりした……

まぁ、すぐに一夏は女の子に興味ないって分かったから安心したけど……でも、先月はお風呂場でアリサの裸を見て興奮してたみた

いだし、やっぱり安心できないかも。
……アリサ、どうしてるかな。
接触禁止なんて言われてるけど、こっそり手紙交換はしてる。
アリサが休んでいる間に学園でどんなことがあったかとか、逆に僕が転校してくる前にどんなことがあったのか、なんてことを報告し合って、順調に仲良くなれているとは思う。
でも、こうやって関わりを持ってみて、初めてアリサって子が分かってきた気がする。
少なくとも本気で僕のことを助けようとしてくれていたことは分かる。未だにその理由がよく分からないけど……この前の不思議な夢を信じるなら、過去への代償行為なのかな。自分を省みないで僕を助けることで嫌な記憶から逃げようとしてるとか……
……それは少し寂しいけど、それでアリサが楽になるなら協力してあげたい。とはいっても、助けられるだけになっちゃうのもダメだと思うから……僕からしてあげられることはないかな？
アリサには、もっと自分のことを考えられるようにしてほしい。
そうだ、今度は将来の夢とか聞いてみようかな。

「そういえば」
「うん？　どうしたの？」

最後の机を運びながら声をかけてきた一夏に返事したけど……僕も机運ぼうかな。早く戻ってアリサに手紙書きたいし。

「先月だけど、なんでいきなり女子に戻ったんだ？　俺が提案したときはあんまり乗り気じゃなかったように見えたから」
「あ、えっと、その、それは……」
「あ、いや、答えにくいならそれでいいんだ。ちょっとした好奇心だから」
「ごめんね？」

理由ならいろいろある。
やっぱり男装は大変ってのもあったし、一夏と同じ部屋ってのも気を遣わせてたからってのもある。
でも、一番の理由はあの夢のおかげでアリサの心の陰を知って、どうにかしなきゃって思ったから。
あんなに小さい体に、人の命まで背負わせたら潰れちゃいそうだから……火事のことは思い出させちゃいけない。
その間にアリサを知って、次は僕がアリサの手助けをできればいいな。

「あ、そうだ。シャルロット」
「うん？」

少し気まずくなった空気を変えるように一夏が話しかけてきた。
当然、僕も今までの空気を引きずりたくない。

「付き合ってくれ」
「いいよ？」

女の子の僕を誘うんだから買い物とかだろうね。この前、他の女の子にも同じようなこと言ってたし。

◆

あちゃー。
あの後、いろいろと暇をつぶして、少し疲れたので寝ていたら放課後になってました。もしかしたら、もうシャルも部屋かもしれませんね。
でも、好きな人の部屋を訪ねるなんて恥ずかしくてできませんし

……
なのでとりあえず学校に来てみました。

「あ、そうだ」

ん、織斑君の声ですね。
一緒にいるのは……シャルですね。二人が放課後の学校でなにしていたのか気になりますがちょうど良かったです。
少し、話しかけましょう。
でも、なんて話しかければ……

「シャルロット、付き合ってくれ」
「いいよ？」

ぇ……？
二人はそんなに仲良かったんですか？　……で、でも、ついこの間まで同じ部屋で生活していたわけですし……
えと、あれ？
話しかけようと思った内容が全部吹き飛んでしまいました。
そ、そうだ。こういう時はおめでとう、ですよね！

「そ、そうです。喜ばしいことじゃないですか。ふ、シャルの友人として。そう、ゆ、友人、として……」

あ、あれ？
なんで、私、二人から距離をとろうとしてるんですか？
それに、視界も滲んで……ひ、人の幸せに嬉し泣きなんて、私も良い人ですねっ……！

「そっか！　じゃあ日曜日、街で買い物しよう！」

「うん、わかった」

……日曜日、早速デートなんですね。

私も、シャルと一緒に買い物とかしてみたかったですね……それで、オススメのスイーツでも食べて、二人で笑いながら寮に戻るんです。

帰ってからは二人で買ったものを見せ合ったり、次の予定を話したり……

「じゃあ、帰るか」

「っ！」

ど、どうしましょう。

廊下で泣いているところなんて見られるわけにはいきません……！

せっかく二人で楽しく帰り道なのに邪魔になってしまいます！

と、とりあえず隣の教室に……

「でも、うん、ちょっと楽しみかも」

「よかった、付き合ってもらうのにシャルに退屈させたくないからな」

扉の隙間から盗み見ると、二人は並んで帰っていて……二人の間に開いた距離が、逆に初々しさを感じさせます。

笑っている二人は、なんだか幸せそうで暖かくて……なのに、なんで私は震えているんでしょうね……？

「分かっていた……ことじゃないですか」

織斑君は唯一の男子生徒でシャルは優しい女の子。しかも二人は少しの間同居してて……私が休んでいた間に何かがあって仲が進展

したのでしょう。
そして、私も女の子。
女の子が女の子に恋するなんて、やっぱり普通ではなくて……一緒になるのはすごい難しいって分かってました。
それでも、好きなのは止められなくて……私も大概ですね。
私ではシャルを幸せにできません。
私の想いが受け止めてもらえるものではないのを自覚した上で恋していたんですから……覚悟していないといけなかったんです。
なのに、夢見ることだけしかしようとしないで。

「でも、仲直りできて、接触禁止もとけて……これからやっとって、そう思ってたんですよ……？」

ちょっとずつでもいいから、シャルと仲良くなっていって……
もともと迷惑だと思ったので告白なんてするつもりはありませんでしたけど、それでも、シャルが私の気持ちに気付いてくれて。
そんな未来が欲しかったのに……

「こんなの……あんまりですよぉ」

シャル……ごめんなさい。
おめでとうは、私の涙が涸れてからでもいいですか……？

41. Larmes（後書き）

この誤解、解かずで置くべきか～！

読み返してみると、アリサ、不憫な子……

三巻終わったら救済するね（

アリサ「二巻に続き三巻まで私のネガティブ状態は続くんですね……」

だって、いちゃラブできたらこの作品終わりじゃん！

42. Une querelle entre mari et femme

「親同士の喧嘩」ぇ

久しぶりに複数視点？

次更新から１８：００更新に変更いたします

42. Une querelle entre mari et femme

織斑君の告白劇を目撃してしまってから数日。

……なにもやる気が起きません。

シャルのフォローは続けなければならないのですが……やっぱり、私に下心があったんでしょうね……シャルの隣にいるのが織斑君だということを想像するだけで辛いです。

……心の中もシャルに幸せになってほしいという想いと二人に別れてほしいという思いが募ります。

どちらか片方でも負担なのに……二つになってしまうと、もう潰されてしまいそうです……

鈴ちゃんやラウラさん、篠ノ之さんにはまだ言わない方がいいですよね。

きっと、シャルと織斑君も自分たちで報告したいでしょうし。

「明日、二人はデートですか……」

ずっと、そのことだけが頭を占めています。

このことも皆に話さないようにしないとですね。二人ともクラスメイトに騒がれたりしたくないでしょうし……

「はぁ、なんなんですか私は……結局、シャルと織斑君をどうしたいんですか？　どうなってほしいんですか？」

別れさせたい？

幸せになってほしい？

頭の中が、生ゴミみたいにぐちゃぐちゃで……わかんないですよ。

「んー……？　ありさぁ？」

「あ、鈴ちゃん、おはようございます」
「ん、おはよう……今日も早起きじゃない」

……寝てませんからね。
ここのところ、夜になると二人のことを考えてしまって……眠れないんです。
学園で寝るわけにもいきませんから……今日で七十二時間目でしょうか？　そろそろ、倒れるかもしれませんね。

「……はぁ、アリサ、寝てないでしょ？」
「寝てます。大丈夫です」
「はぁ。あのね、自分の顔色見た？　土気色がどんな色か分かるわよ？」
「寝てます」
「……いいけどね」

はぁ……鈴ちゃんにも呆れられてしまってます。
でも、鈴ちゃんに話せることでもないですし……もう少し、自分の中で考えたいですし。

「アリサ、朝ご飯行くわよ？」
「あ、はい」

……お腹も昨日から空かないです。
それでも、なんとか胃にものは入れていますけどね。
これでまた倒れてしまったら、またシャルと接触禁止なんて言われてしまいますし。
今は……私もシャルから距離を置きたいですけどね。
身嗜みは調えましたし、行きましょう。

「鈴ちゃん、行きましょう？　……あ」
「危ないっ……ほんとに大丈夫なの？　フラフラしてるわよ？」
「ええ、平気です。行きましょう」

立った途端、足から力が抜けて鈴ちゃんに倒れ込んでしまいました。

……失恋って、身体にも影響が出るんですね。鈴ちゃん達もこうなってしまうんでしょうか……？

やっぱり、隠すべきですね。

真摯ではないですけど、それでも皆と仲良くしていたいです。苦い思いをするのは私だけで十分……ただの問題の先送りですが、もう、どうすればいいのか分からないんです。

私はいつも通りにしていればいいんです。

「今日の朝ご飯はなんでしょうかねー？」
「アリサ……」
「なんですか？」
「ううん。日替わりじゃなくて選択するんだから、そのセリフはおかしいわよ？」
「そ、そうでした」

失敗しちゃいました。

確かにＩＳ学園は朝食から好きなものを頼めましたね。

うーん。

「今日はなにを食べましょう……？」

お味噌汁でお腹からほっこりしたい気分です。

それに固形物はちょっと遠慮したいですし……

豆腐のお味噌汁と梅粥なら食べられそうです。

……病人ではないのに、私も情けないですね。

「皆は……いたいた」

鈴ちゃんの視線を追うと確かに全員が揃っていました。

今日は私達が一番最後だったみたいですね。

「ん……行きますか？」

「ん？　当たり前じゃない」

なに言ってんのよ？　という顔で私を見る鈴ちゃん……いえ、変なことを言うべきではないですね。

いつも通り。

いつも通りの私でいないといけません……！

「お、おはようございます」

「不破さん、顔色悪いけど平気か？」

「は、はい」

当たり前のようにシャルのとなりに座っている織斑君が私の顔色を指摘しました……そんなに酷い顔なんでしょうか……？

織斑君の言葉を切欠に他の皆も私を見てきます。

……お願いですから、放っておいてください。あんまりつつかれると泣いてしまいそうです。

「アリサ、本当に辛くない？　やっぱり傷がまだ痛むの？」

「シャル……平気ですよ。ちょっと、その、月のもので……」

ちょっと恥ずかしいですけど、この理由ならこれ以上追求されないでしょう。

逆に私の周期を知っている鈴ちゃんには疑われるでしょうが……既に私が何かを隠していることに気付いているので今更です。

「い、い、一夏！　口を開けろ！」

「ふ、他人の持つ箸が口の中に入れられるなど怖くて仕方ないな……一夏、私なら口移しで食べさせてやるぞ？」

織斑君の正面に座った篠ノ之さんとシャルとは反対側の織斑君の隣に座ったラウラさんが張り合ってます。

楽しそうですね……

「お、お前ら朝からそういうことはだな……！」

「ふむ、ならば朝でなければ構わないと」

「そういう問題じゃねぇ！」

……シャルに告白しておきながらあの態度。

私の大事を奪ったくせに……どうして他の女の子といちゃつくんですか！

シャルも、もう少しアピールしないとダメですよ……それとも、平気でいられるくらい織斑君を信じているんですか？

「箒、一夏を抑えろ！　お前の時は私が協力してやる！」

「絶対だな？」

篠ノ之さんが素早く織斑君の後ろに回り頭を固定し、鼻を塞ぎます。

そんな、毒を無理矢理飲ませるみたいにしなくても……シャルは窓の外を見ています。見ないようにしてるんですか……？

織斑君から告白したのになんで……！

「一夏、行くぞ？　ん～」
「ちょ、ばか！　こんなところで、」

ダンッ！

「「「「「っ！？」」」」」
「……ふぅ」

イライラします。
なんで、こんなのを見せられないといけないんですか？
……全然、シャルが幸せそうに見えません！
これなら、まだ私の方が……
シャル、なんで私に気付いてくれなかったんですか……？

「アリサ……？」

隣に座っていた鈴ちゃんを皮切りに、全員が私に疑いの目を向けているのが分かります。
……それはそうでしょう。
いつも通りの光景なのに、私だけが普段と違う反応をしたんですから。

「はぁ……ごめんなさい。しばらくの間、私は他のところで食べますね」
「え、ちょ、ちょっとアリサ！？」

鈴ちゃんが呼び止めてくれましたが……もう、これ以上我慢できませんよ。
せめてシャルが笑っていれば私も祝福できたんですよ？
なのに、私にはそれさえも許されない。

私は、いつまでこの苦しみを感じていなければいけないんですか？
私の方が、シャルを想っているのに……

「私は、シャルのためなら人を……」

この手で引き金を引いて人を撃ち抜いたことだって……

「っ！？　違う！　あれは……あんなことは……」

私は……私は今、なにを考えましたか？
なんで、初めて私が自分の意志で殺した人の顔に織斑君のそれを置き換えたんですか！？
私に、そんなつもりは……

「本当に、ないと言えるんでしょうか……？」

もし、シャルが泣くような状況になったら私はこの手で……？

「しません！　……織斑君も、友人ではあるんです。いっそのこと殺してしまえばいいなんて、そんなわけ、ありません……」

……感情が不安定すぎます。
先月の二の舞にならないように、なにかしらの対策をとらないといけませんね。
とりあえず、しばらくは極力、皆さんに近付かないようにしましょう。

でも、

「シャル……あなたが笑ってくれれば、私は我慢しますよ？」

だから、早く幸せになっちゃってください……！

◇

「アリサ、どうしたんだろうね？」
「なんか苛立ってたよな」
「一夏さん、その、女性は月のモノの周期が来ると……精神的に不安定になるのですわ……なので一夏さんはあまり気になさらない方が……」
「な、なるほどな」

……セシぃが一夏に説明してるけど……あんまりソイツにそういう話はしないで欲しいわ。妙な知識が付いたらどうするのよ。
というか、そもそもアリサのアレの日は五日前に落ち着いたばっかりよ？
遅くなることはあっても早くなることはないんだし……だいたい、セシリアはそのことを知ってるはずなのに……
それに、あのアリサがこんなに分かりやすい嘘つくなんて……

「また、随分と大きい隠し事を背負ってるのね……」

あの子が体調を崩すほど精神的に重圧を感じているとしたら……十中八九シャルロットのことね。
でも、シャルロットとなにかがあったような印象も受けないし……だいたいアリサが立った時、一夏がいちゃついていたくらいでシャルロットは普通にご飯食べてたし……え？
……まさか、一夏も関係してる？

「一夏、ちょっといい？」

「ん？　ああ」

箒とラウラが一瞬だけ睨んできたけど……多分、今は私の方が鋭い目をしてる自信があるわ。

それこそ、せっかくの一夏との話し合いにロマンスを求めないくらい。

「鈴さん」

「ん、セシリア、あんたも来る？」

「遠慮しておきますわ。それより、こんなに早く動いてもよろしいのですか？　確か、“いつまでも一緒にいられるわけではない”のですわよね？」

今の……確か私が初めてアリサと喧嘩してたときに言った言葉だ。

最近、セシリアがアリサとの距離を離したように感じたけど、あのことで振る舞い方を変えたんだ……

ただ、急すぎないかしら。

アリサはシャルロットのことを気にしていて気づいていないみたいだけど……距離が開いてることに気付いたら、また焦ってなにか仕出かす。

「鈴さんも、少しアリサさんとの距離を考えた方がよろしいですわ」

「セシリア……あんたっ！　この前と今じゃ状況が違うでしょ！？　あの時は私が結果を操作できたから……！」

「ですから次はアリサさんだけの力で解決させるべきだと言っているのですわ！」

「まだ早いわよ！」

だいたい、原因だって分かってないのに……

アリサはせいぜい強がれるようになった程度で、まだまだ精神的

には弱いんだから……！

「早くなどありません！　三年前、わたくしは孤独になりましたわ。ですが自分の身を守るために様々なことを学びました！　アリサさんだったらそれが……！」

「不幸自慢なんか聞いてないわよ！　それに、たまたま自分にあった強さをアリサに期待しないでよ！　あの子がそんなに強くないって……あんたの方が知ってるはずじゃない……！」

……ルームメイトとは言ったって、まだ半年の付き合いもないんだから。

ここのところアリサは何かを不安に思って夜も寝ないし、ご飯だって美味しそうに食べてくれない。

今、私達が突き放したら、あの子、また傷ついちゃう……

「ふ、二人とも落ち着けよ。な？」

「一夏さんは口を挟まないでほしいですわ……鈴さん、私にはもうアリサさんが分かりませんわ」

……は？

セシリアがアリサを理解してあげなかったら、あの子はどうなるのよ？

あの子を支えてあげられる人がいないじゃない。

「アリサさんは、ここにきてから随分と表情豊かになりました。イギリスに来ていた頃は困ったように笑うか怯えるかだけで……」

「フランスでも、いつも何かに焦ってるような顔だったかな」

「学園にきた頃はずっとしかめっ面だったよな？」

……私の知らないアリサ像が皆の中にはある。

私が転校してきたときはアリサも笑ってる日が多かった。
もしかしたらルームメイトの私に気を遣ってたのかもしれないけど、それでも笑えてた。

「アリサは成長してるって言いたいの？　だから、もっとせっついても平気って？」
「いえ……確かにアリサさんは成長しているのですが…ここのところ、彼女が危うく感じられるのですわ。昔からそんな感じはありましたが……最近ますますアリサさん自身のことを嫌っているように思えます」

アリサが自分を？
背中の傷のことを気にしてたけど、それでこれまで以上に自分を嫌いになるなんてことはないと思う。
じゃあ、理由はなに？

「特に、アリサさんが原田さんと諍いを起こした後の謹慎期間の間に変わってしまっていましたわ」
「原田さん……だっけ？　その子に怪我させたことを気にしてとか？」
「分かりませんわ」

でも、分からないことだらけなのにセシリアは放っておいていいなんて言う。
前は、私とアリサの問題だったから酷いことになる前に私が幕を引けた。でも、今回は理由自体が分からないからそうもいかない……

「わたくしはアリサさんを見捨てようといっているわけではありませんわ。ただ、今回はアリサさんを信用してみようかと……」
「アリサが自分で乗り越えられるって？」

「ええ」

そういう考え方も……あるのかな。

◇

（おい、一夏！　二人の喧嘩を止めないか！）

（いやいやいやいや！　さっき黙ってろって言われただろ!?　俺じゃもう無理だって！）

（ええい！　それでも男か!?）

はぁ……アリサ、火種だけ残してどこか行っちゃうなんて……

でも、なにを怒ってたんだろう？

僕との接触禁止がとけて学校に来るようになってから、どこかおかしいと思ってた……最初は生理なんだって納得したけど、セシリアたちの様子を見る限り違うみたい。

というかこの二人、子供の教育方針で議論する親みたいだね……

まだ、アリサと僕は付き合いが短いからアリサが怒った原因は分からない……

でも、アリサが自分を嫌っている理由の方ならなんとなく分かるかも。

……あの夢で聞いた、火事の原因に気づき始めてるんじゃないかな。それで、自分はヒトゴロシだったんだって……

ヒトゴロシといえば……

「ねぇ、皆ちょっと聞いて」

……なんだかギロリなんて音付きで睨まれた気がする。

「誰か、エイプリルフールにアリサに嘘ついた人いる？　というか

考えられるのはセシリアくらいだけど」

なんとなく……アリサに友達がいなかったことは分かる。

だから今までアリサと付き合いがあったセシリアしかエイプリルフールに嘘をつける人はいない。

でも多分……

「何の話かは分かりませんが、わたくし、アリサさんを騙そうと思ったことなんて一度もありませんわ」

「そっか」

だよね。

だいたい、あの戦争の報告書みたいなもの、おかしかった。

だって、あれじゃアリサを騙すというよりアリサの周囲の人を騙そうとしてる感じだし、もしそうならアリサ以外にあの文書を作る人はいないし、アリサがとっておく理由もない。

そうなると実際の戦争ってことになるけど……あれだけの規模でISも動員されるほどの戦争、僕が知らないわけがない。

なによりオーレリアやレサスなんて地名は知らない……

でも、事実だとするなら……アリサは自分の手で人をコロしてるかもしれない。

原田さんに怪我させたとき、それを意識しちゃって……とか？

「……考えすぎだよね」

うん。

だって、学園にいる間は戦争になんて行かないでいいんだし、それ以前なら尚更連れて行かれるわけがないよね。

……こんなに否定材料があるんだから、安心していいよね？

43. Noir ou blanc ou gris（前書き）

「黒か白か灰色か」

ありのまま（ｒｙ

誤解してるままなのにいちゃついてました（

ユニーク８００００超しました！

どうもありがとうございます！

43. Noir ou blanc ou gris

「ん……んぅ……？　ん～…朝、ですか」

久しぶりにゆっくり眠りましたね。しばらくシャル達から距離を置くと決めたからでしょうか……？

もちろん、距離を置くと言っても話さないとか意図的に避けるということではなくて、私から近寄るのを止めるというだけですが。

でも、せっかくシャルと話せるようになったのに……ううん、これではまた繰り返しになってしまいますね。

気分転換が必要です！

……お買い物か、暴れるかですね。

来週の臨海学校の準備はほとんど整ったので……格闘訓練でもしましょう。やっぱり汗を流すのが一番です！

さて、そうと決まれば布団から出て鈴ちゃんの朝御飯を食べて訓練場に……あれ？

「そういえば、鈴ちゃんいませんね……？」

うーん……？

あ、昨日、寝る前に何か言ってましたね。確かセシぃと一緒に水着を買いに行くとか何とか……

あ、私も水着持ってませんね。

いえ、あることにはあるのですが……スクール水着ですし。でも、泳ぐ気はないのでそれでいいような気も……

……一応、着れるか試してみましょう。

織斑先生に無理矢理着させられる可能性もなくはありませんし。

うん、やっぱりスクール水着でも上下で別れてる奴の方がいいですね。一緒になってるのは着替えにくいです。

ですが……

「胸が、ちょっと苦しいかもしれません」

中学生の時から……と言っても一年生の途中からは通信で済ませたのでもう二年間以上着ていなかったのですが、着実に成長はしていますね。

胸が少し大きくなったことは嬉しいんですけど……これは買いに行かないとダメですねぇ。

スクール水着は背中と脇腹の傷が隠せてちょうど良かったのですが。太腿は出ちゃいますけど。

まぁ、脇腹と太腿の傷はシャルを守るためだったので背中ほどは気にしていません。

むしろ、シャルに付けられた傷という点で嬉しかったり……もちろん、シャルが気にするので見せないようにしてますけどね。

「やっぱり街に出ますか。お買い物と甘いもので元気だしましょう」

んー、どんな水着がいいですかね？

背中の傷は絶対に隠したいので……まず背中が見えるものは却下ですね。

そうなると……ワンピースかタンキニになりますが、ワンピースは着にくいですし……

売場を見に行って、デザインでどちらにするかは決めましょう。

買うのなら可愛いものがいいですし。

うん、ちょっと気分が上向きになってきました！

ぐぅ～

「はぅっ……鈴ちゃん、ご飯まだですか？　……あ、いないんでし

た」

おなか空いてるときに自分で作るのって結構大変なんですよね…
…フルーツとヨーグルトですましちゃいましょう。

◇

「ねー、君、ＩＳ学園の生徒だよね？」
「……」
「そんなつれない態度とらないでさぁ」

うわ、うわぁ……これがナンパというやつですか？
私、見た目からは中学生だとか言われるのに……ふふん、やっぱり分かる人には分かるんですね！
私の秘めたる大人っぽい魅力に！
でもちゃら男に興味はないんです。
傷心中なので、もう少し男らしい人に軟派されてたら危なかったかもしれませんね……

「ＩＳ学園にさ、シャルロット・デュノアって女の子いるでしょ？
俺、一目惚れしちゃってさ。紹介してくれないかな？」

……そんなことだろうと思いました。
シャルの可愛さを認めてくれるのは高評価ですけどシャルはあげません……まぁ、私のものでもないですけど。
でも、こういうのってどうすればいいんでしょう？
相手も無理矢理聞き出すみたいな雰囲気でもないですし……でも断ったら態度が変わってしまうかもしれませんね。
そうなると、私も実力行使という方法を採らなければいけませんし、彼もお巡りさんに連れて行かれるのでお互い不幸になります。

んー、あまりこういうやり方は好きではないんですけど……

「お兄さん。ちょっと、目を瞑ってください。電話で呼び出しますけど番号を見られたくないので」

「えーいいじゃーん……なんてしつこくしたら怒りそうだね。俺、向こう向いてるから電話終わったら肩叩いてね？」

「はい」

にこにこ笑いながら男の人が向こうを向くのを確認して……さて、そーっと逃げましょう。

朝峰嵐才流には兎踏（ととと）っていう逃げるための歩法もあるんですよ！

常々、それは武術としてどうなのかなんて思ってますけど……

お巡りさんを呼んでもいいのですが、何かされたというわけでもありませんし。ちゃらい見た目に反して雰囲気はいい人ですし。

早いところ水着売り場まで行ってしまいましょう。さすがに女性の水着売り場まで来るほどの勇者ではないと思います。

「というか、このショッピングモール、広すぎですよね」

ショッピングモール『レゾナンス』

ここになければどこにもない、というほどの規模を誇る、ここらへん一帯の中心地です。

駅舎にバスストップにタクシースタンドと揃っているためアクセスもよく、その集客力に注目した各ブランドが進出してきているからこその品揃えだとか。

私はあまり利用しないのですが、前に鈴ちゃんがここのことを話していたのを思い出したので少し遠出をしてみました。

おしゃれな人も結構歩いているので、やはり品揃えは信用できるんでしょう。

……あとで洋服とかもチェックしてみるといいかもしれませんね。

代表候補生ではなくなってしまったので、その分の支給は支払われなくなってしまったのですが、社長さんの好意でカゲロウをテスト機という扱いにして今までの半分ほどの額のお金を試験機に乗る報酬という名目で頂いています。
なので、軍資金は十分です。

「んー……でも、おしゃれな水着ってどんな水着なんでしょうか？」

水着は気にしたことがないのでよく分かりません。もし、自分が可愛いと思って買ったものが流行遅れだったりしたらヤですし……
誰かと一緒に来られれば良かったんですけど……鈴ちゃんとセシぃもきっとここに着ていると思うので会ったら聞いてみましょう。
それまでは……甘いものですね。

◇

ところでこれって周りからはデートに見られるのかな？
男の子と一緒に水着売り場にいるんだから見られるだろうけど……いや、まぁ、そう見えるからリン、セシリア、ラウラ、アリサの四人は僕を尾行してるんだろうけどさ。
コアネットワークを使って位置情報を確認しようと思ったけど、潜伏（ステルス）モードでどこにいるか分からない……でも、わざわざ潜伏（ステルス）モードにしてる時点でやましい事してるって言ってるようなもんだよ。
それになによりアリサだけ普通に位置情報の開示を自動許可してるし。
まぁ、アリサのことだから他の三人のことを溜息混じりで見ながら可愛い水着を探してるんじゃないかな？

……んー、アリサはどんな水着を選ぶのかな？
ちっちゃいし、肌も白くて髪も淡いピンク色だから白っぽいのと

かいいと思うんだけど……

あ、でも逆に黒みたいに暗くて濃い色でも映えるかも。

でも……僕が怪我させたから、傷を隠すために選択肢が減ってるんだろうな……

脇腹に傷があるからおへそがでるデザインのものも着れないだろうし、太腿の傷なんて隠せるような水着があるかも分からない。

あったとしてもダイビング用のスイムスーツくらいしか僕には思いつかない。

……おしゃれっていう、女の子にとっての楽しみの半分以上をアリサから奪っちゃって……僕はアリサに何をしてあげればいいんだろう。

今まで以上に謝ったってアリサの傷痕は消えないし、アリサにとってもウザいだけだと思う。

おしゃれだけじゃない。

アリサは好きな人の前で裸になることも人よりずっと勇気が必要になる。

普通なら恥ずかしさがほとんどだろうけど……アリサは傷痕だけが理由で捨てられるかもしれない。

あれは見る人にとっても不快に映るから……多分、アリサにとっては羞恥より恐怖の方が大きいと思う。

アリサ、幸せになれるのかな……？

笑ってて欲しいな……僕を見守ってきてくれた人だから。

だから、今度は僕がアリサを守ってあげられればって思う。

きっと、アリサの方が世間から厳しい目を向けられるから……

あんなに優しい子が苦労するなんて悲しいことだから、アリサが大変なときにはそばにいてあげたいな。

とくん

……あれ？

今、なんか変な感じしたかも……？

「んー……ちょっとアリサの様子を見に行こうかな」

一夏はまだ水着選んでるだろうし。

◇

むむむ、なんとか最終コンペまでたどり着きましたが……むしろここからが大変です。

片方は白地に控えめな花模様と飾りリボンやレースがバランスよくあしらわれているワンピース型の水着。花模様もリボンもピンク色なのでちょっと少女趣味っぽいですけど、小柄な私にはちょうどいい気がします。でも下手したら小学生くらいに見られるかもしれませんね。

もう片方は黒のタンキニ。タンキニといってもお腹が大胆に出るわけではなくて、上はキャミソールに近い感じでお腹の傷もギリギリ隠れそうです。下も付属品としてちょっと長めのパレオがあるので太腿も隠せますし……ただ、少し背中の火傷痕が出てしまうような気がします。

いつもなら迷わず背中が隠れるワンピース型を選ぶのですが、こっちは太腿の傷が出てしまうのでシャルが見たら気にしてしまいます。

タンキニでの火傷痕は背中の上からちょっと出てしまうくらいなので、髪の毛で隠せますし……だから隠せない白ワンピよりかは……

「んー、両方着てみれば？」

「ですが、見てくれる人もいませんし、なにより外で裸になるというのは……ん？」

「どうしたの？」

いえ、どうしたもこうしたも……なんでシャルがいるんですか！？
だって、織斑君とデートに行ってるはずで……あぁ！　二人で水着を選びに着たんですね。
も、もしかして更衣室であんなこととかこんなこととか……う、うわぁ

「あ、一夏？　多分、まだ男性用の水着売り場にいるんじゃない？」
「いえ、そうではなくて。一緒にいなくていいんですか？」
「僕も水着を買いにきたんだしね。そうだ、アリサ、僕の水着見立ててよ！」
「お、おーけーです？」

なんだか、シャルの勢いに押され気味です。
でも、この二人は結構淡白な付き合い方してるんですね。
水着選びなんてお互いにいちゃつけるチャンスだと思うのですけど……あれ？　私的に今チャンスですか？
……いえいえ、略奪愛なんてそんな。

「僕ね、今これとこれで悩んでるんだよね」
「それはまた……だ、大胆ですね」
「そうかな？」

一つは背中がほとんど完全に露出するオレンジの水着。お腹周りも出るのでセクシーです。
もう一つは短めなパレオが付いている真っ赤なビキニ。短いパレオって腰元を強調してて逆にえっちぃですよね。

「私としてはオレンジの方が……でも赤い方が安全ですかね……？」

男の人ってうなじから踵まで、どこにでも興奮できますし、どっちもどっちな気がしますけど……赤い方が脱がせやすそうなので、やっぱりオレンジの方ですね。

「うん、オレンジがいいと思います」

出来ればもっと露出の少ないワンピースとかにして欲しいんですけどね。

その、シャルが男の人にそういう目で見られるのはヤですし……織斑君にだって見せたくないんです！

……ちょっと開き直れてきたかもしれません。シャルを応援しつつ、織斑君の邪魔をしましょう。

織斑君、付き合ってすぐにシャルと身体の関係になれると思ったら大間違いですよ！

フランスにいる社長さんに変わって断固阻止します！

手を繋ぐまでは許しましょう。でも恋人繋ぎ以上はまだ不許可です！

「それで、アリサはその二つで悩んでるの？」

「ふぇ！？　や、えと、その私、泳げないのでせめて可愛いものをというか……～～～っ！　……はい」

シャルの顔が近いです！

ちょ、ちょっと横向いたらキスできちゃいそうなくらい……が、我慢です。我慢ですよ！

……少女漫画なら主人公とイケメンが同時に振り向いてマウストゥマウスになるんですけど……我慢です！

でもシャル、ほんとに、ち、近すぎですよー！？　ところどころ体が触れあっていて……

「わー！　やっぱり僕の思った通りだね！　アリサは白か黒が可愛いって思ってたんだ」
「あぅ……そんな……えへへ」
か、可愛いなんて……シャルの方が可愛いです！
……でも、シャルは私の水着を考えてくれてたんですね。どうしましょう。小さいことなのにすごい嬉しいです。顔が紅くなって、しかもにやけてる気がします！
い、いま、絶対に変な顔してるので見ないでくださいね！
「じゃ、試着してみようか！」
「はぃ……」
二つの水着を持ったままシャルに押されて更衣室に歩いていきます。
シャルと密室とか……あぅ
◇
あ、三人の潜伏（ステルス）モードが解除されたみたい。
僕が一夏から離れたからかな？
……うん、そうみたい。
でも、アリサどうしたのかな？
なんだか借りてきたネコ……というより衰弱したハムスターみたいに大人しいんだけど……いや、衰弱したハムスターなんて見たことと無いけどね。
なんだか顔も赤い気がするし……
カシャン

とりあえず二人で更衣室に入ったけど……

「あぅ～……え、えと、着替えますね……？」

アリサ、顔真っ赤……もしかして熱なのかな？
どうしよ、僕、体温低いから手で熱計ったりできないんだよね…
…ちょっと恥ずかしいけど、仕方ないよね。

「アリサ、ちょっとごめん！」
「ふぇ？　きゃっ！？」

こつん

ん、おでこ合わせてみたけど……ちょっと熱いかな？
これ以上正確に計るには……ね、粘膜接触ってフランスで訓練してたときの教本に書いてあったっけ……
粘膜接触てようするにキスだよね……しかも大人の……ムリムリムリムリ！
いやね、アリサにディープキスされてるけど、あれはアリサ酔ってたしノーカウントだから！
……でもアリサの上手だったけど誰かとしたことあったのかな？

「しゃ、シャル……？　あの、いつまで？」
「あ、ごめん！」

正気に戻ってみれば潤んだ目つきのまま、水着で裸の上半身を隠そうとしてるアリサが目の前にいた……えっと、ここまで恥ずかしがられると僕も妙な気分になるというか。
その、女の子同士なんだから恥ずかしがらなくても、ね？
……あれ。

そういえば、アリサって女の子が好きなんだっけ……？
じゃあ、僕は気にしてなくてもアリサにとってみれば、男の子に裸を見られてるようなもの……？
えっと、悪い事したかも。

「え、えと、僕、出てるね？」

このままだとアリサも恥ずかしいだろうし……

「ま、待って、くださぃ……」

ガシッと腕が捕まれた。
アリサの方を伺うとやっぱり潤んだ目と真っ赤な顔で僕を見てる。
ど、どうしろと？

「その、水着、着てるところを見てもらわないと分からないので……」
「そ、外に見せにきてくれればいいよ！」

どういうこと！？
というか、うん、アリサも暴走してるのかな。
多分、僕が原因なんだろうけど。

「で、でも……傷痕が……」

あ……
そっか……更衣室の外だと他のお客さんに傷痕が見られちゃうか
気になるから……もっと、気を利かせてあげないと。

「ごめんなさい。シャルだって見たくないですよね？　こんな傷、

見せていいようなものじゃないですし。ごめんなさい。自分で判断するのでシャルは外に出てても――きゃっ！」

ぎゅっ

◇

「アリサ、そんなこと言わないで……お腹と太腿の傷は僕を守ってくれたからでしょ？　僕を守ってくれた証なんだから、僕がその傷を悪く思うわけないよ」

シャルが私を抱きしめながら、そう言ってくれています。本心でしょうか？

こんな、誰が見たって息を飲むような傷があってもいいんでしょうか？

それでは、

「背中……は？」

人を守ったわけでもない背中の傷は……やっぱり気持ち悪いですよね。

しかも、私の推測が正しければこの傷は他の生徒を見捨てた結果……罪に対する罰の徴（しるし）です。嫌悪感を抱いても不思議では……

「あのね、うまくは言えないんだけど……僕はその傷が嫌いじゃないよ？　もちろん、その傷が好きって事でもないし、どうしてもアリサが可哀想って思っちゃう。でもね？　その傷があるからアリサはアリサなんじゃないかなって思うの。自分が辛い目に遭ったから、アリサは優しいんじゃないかなって……」

「私は……違います。ただ、この傷を見ても捨てられないように…

…私の価値を示しているだけなんです。だから、シャルも鈴ちゃんもセシィも側にいてくれてるじゃないですか」

多分、こんなことを言われたら皆怒ると思います。皆、私が便利だから仲良くしてるんじゃないって……

でもですよ？

仮に……仮に私が人に興味ないと周りを気にせずマイペースに生きていたら……皆は私のことを見てくれましたか？

どうしても、そう思えません……

「そうだね。皆、アリサが優しいから側にいる。僕もだよ？」

「ですよね……だから、」

「でもさ、その優しさが傷のせいでも、元からの性格でも何も変わらないよ？　アリサは、もし体の傷が全部消えたら優しくなくなっちゃう？」

「そんなことは！」

「でしょ？　アリサはきっと傷なんてなくても優しいよ。だから私たちも側にいるんだよ？」

……ほんと、ですか？

じゃあ、私と仲良くしてくれているクラスメイトの皆さんも、この傷を見ても仲良くしてくれますか？

誰も、この傷を馬鹿にしませんか？

「しないしない。最初は皆戸惑うかもしれないけど、アリサを嫌いになる人なんていないよ。それに、その傷のことを馬鹿にしたら専用機持ち達を敵にすることになるんだから」

それなら……

「それなら、この黒い水着にします。火傷痕が見えちゃうかもしれませんけど、勇気を出してみます」
「……うん。僕も最初からそっちの方が可愛いと思ってたよ」
「シャル……ありがとう」

例え、シャルの言葉が間違っていたとしても、私のことを優しいと言ってくれて嬉しいです。

「それで、シャル。織斑君を待たせてしまっていると思うのですが……？」
「あ！　えっと、水着見てあげられなくてごめん！　一夏のところ行ってくるね！」
「楽しみにしていてください」

いつまでも織斑君の彼女を借りているわけにもいきませんしね。名残惜しいですがそろそろ返してあげないと……

「やっぱり、私が優しいんじゃないです」

……きっと、私の周りの人たちがそれ以上に優しいんですよ。

43．Ｎｏｉｒ　ｏｕ　ｂｌａｎｃ　ｏｕ　ｇｒｉｓ（後書き）

一夏とシャルの一緒お着替えイベントはアリサが食いました。
というか原作で、なんで一夏はシャルを付き合わせたんでしょうね？
水着買う時も一緒に選ぶみたいな感じでも無かったですし・・・・・？
あのフラグ立ては未だに意味不明です
（追記　箒のプレゼント買うためでしたね）
次から臨海学校はいるかな・・・？

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１（前書き）

ＡＣＸ編の回想
暫く本編との同時更新になります。
でも５００－２０００程度のみじかめの文章になります。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１

「君があの新兵器のパイロット、アリサ・フワだな？」
「はい」
「俺はミハエル・エンハンス。一応、君が所属することになる隊のヘッドだ」

……四十代程度の浅黒い肌の男性。見た目は確かに歴戦の兵士という感じですね。
そのごつごつした手が私に向けられて……握手ですよね。右手を差し出すと壊れ物を扱うような力で手が握られました。
私との年の差は親子ほどありますね。

「全く……君みたいな女の子を前線に送り出すなんて上は何を考えてるんだか」
「仕方ないですよ。私しかＩＳには乗れないんですから」
「そうは言ってもなぁ」

この世界での私の立場は、私やミハエルさんの属するオーレリアが作り出した新兵器のパイロット。まぁ、新兵器と言っても私のカゲロウとあまり差はないのですが。
ただ、装備にミサイルが積まれていることと長距離飛行ができるようなスラスターが付いている程度ですね。
というか、私をこの世界に送ったタサキさんの話だと、こちらので私が乗るＩＳはカゲロウと同一のものでただ単に装備が少し帰られているだけだとか。
でも、いったい誰が……？

「それより、隊の皆さんを紹介してください」

「ん、そうだな。ハリス！　ミシェル！　自己紹介だ！」

ミハエルさんが手を叩いきながら隣の部屋に向けて叫ぶと、男性と女性が一人ずつ部屋から出てきました。

男性の方は若くてなかなかの二枚目、女性の方は落ち着きのあるブロンドの方でした。

「ん、俺？　俺はハリス。ウィスキーとエロ本を愛してやまないイケメンさ」

……しゃべると三枚目のようです。

「あれ、外したか。まぁいいや。それで俺のコールネームはオランジェだ。正式にはバッド・オレンジ（腐ったミカン）だけどな」

「それで私がミシェル。んー、特に紹介するようなこともないんだけど……あぁ、コールネームはビッチ（尻軽女）よ」

……何で二人ともそんな酷いコールネームがつけられているのでしょうか？

それとも軍隊にはそういう慣習でもあるんでしょうかね？

「それで、俺がロートル（老兵）だ。嬢ちゃん、聞きたいこととかあるなら今のうちだ。空じゃ悠長におしゃべりなんてできないからな」

「えと、それでは、皆さんのコールネームの由来なのですが……」

聞いてもいいことなのでしょうか？

「私は結構ベイルアウトして機体を壊してるからしょっちゅう違う機体に乗るのよ。だから尻軽。あ、もちろん本当は一途よ？　というか、器用に男を弄べるなら軍になんかいないし」

「俺はやっぺえ作戦から何度も生還してるからだな。普通の兵士より長生きしてるから腐ったミカンってことだよ。ミハエルの旦那も似たような感じだな」
「なるほど……ある意味、現担ぎみたいなものなんですね」

それだけを聞くと馬鹿にしたようなコールネームですけど、由来まで聞くとその真意が分かりますね。
なんというか、少し格好いいです。

「まぁ、私達の悪運もここまでみたいだけどね……」
「え？」
「ううん、なんでもない。それで、あなたは？」
「あ、私はアリサ・フワです。ご存知かもしれませんが新兵器、ＩＳのパイロットです。

でも、この世界では戦闘機が普通のはずですが、彼らにはＩＳはどのように映るんでしょう？
ただの新兵器ってことで納得するようになってるんですかね？

「そっか、それでコールネームはどうする？　ルーキーなんかじゃ嫌でしょ？」
「そうですね……」

やっぱり皆さんのように洒落たものがいいですよね。
でも、私にはまだ実績なんて無いわけですし……となると、現担ぎというよりも願掛けですね。
うーん……あ、閃きました！

女の子らしい会話
「ガーリートークなんてどうでしょう？」
「「「？？」」」

まぁ、やっぱり分からないでしょうね。多分に私の主観も含まれていますし。

「まぁ、こんな話です。最近、隣に住んでいる人が犬を飼い始めたんですよ」

「うんうん、それで？」

「その犬がすっごく可愛かったです」

「それだけ？　……あ、そういうこと？」

やっぱり同じ女性のミシェルさんは気付くのが早かったですね。

それに引き替え、男性陣はまだぴんとこない様子。

「女の子同士だと、こういうオチのない話ばっかなんですよ。ですから、」

「「あ！」」

「そうです。墜ちない、という願掛けでした。てへ」

ちょっと皮肉っぽいところもあって、皆さんのコールネームと比べても浮かないと思ったのですけど……自信満々に言いながら全然だったら恥ずかしいですね。

「あーなるほど！　いい感じじゃないか」

「いえ、皆さんのコールネームをお手本にしただけですから」

「ま、とにかくこれで新生ラスト（最後の希望）サン隊ってわけだ」

最後……ですか。

なかなかせっぱ詰まっている戦況なんですね。

……それもＩＳがあればひっくり返せてしまうのでしょうけど。

44. Le lune lapin（前書き）

「月兎」

束さん登場。
なんかいきなりぶっ飛んでました。

44. Le lune lapin

「海っ！　見えたぁっ！　代表、わくわくしない！？」

……しません。

海なんて干からびて塩の砂漠になってしまえばいいのです。

母なる海？　なに言ってるんですか。海水浴客が溺れて死ぬことだってあるんですよ？　そんな母親は児童虐待で家裁に連れて行かれるべきです。

はぁ……こんな時ばかりは快晴が恨めしいです。

あんなにいっぱい逆さ照る照る坊主を吊したのに……ティッシュケース三箱分ですよ？　もう少し効き目あってもいいと思います。

……まぁ、鈴ちゃんが変に気を利かせて普通の照る照る坊主に戻したことを考えれば効き目はあったのでしょうけど。

鈴ちゃんの、アリサったら詰めが甘いわよ楽しみにしすぎ、なんて言葉が頭の中で反響します。

確かに結果的にシャルと選ぶことになった水着を着れることは嬉しいですし、それをシャルに見せるのも楽しみですよ？

でも、こんなに晴れてたら水着を着て泳がないっていう選択肢が狭まるじゃないですか。

……やっぱり山にすべきだったんです。水着は露天風呂で着ればいいじゃないですか！

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなぁ」

「ん？　そうかもね」

しっかり隣同士に座ってるシャルと織斑君の存在がさらに私に追い打ちをかけてきます。

ええ、確かにテンションあがりますね！　主に悔しさとかで！

しかも織斑君、隣にシャルを座らせておきながらセシぃ、ラウラさん、篠ノ之さんと手当たり次第にアタックかけてますし……私も怒っちゃいますよ！

うぅ～、泳ぎたくないです……ん、今のはちょっと正確ではないですね。私泳げませんし。

だから……海に入りたくない！　というのが正解ですか。

分かってますよ？　自分が絶賛逃避中だって事くらい。

「さぁ着いたぞ。ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の方の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

……仮にも三日間、宿を借りるのにその間延びした挨拶はいかがなものでしょう。

おっとっと、私の呆れ顔が気になったのか女将さんに見られていました。皆さんのお手本として丁寧にお辞儀しました。

……なんだか驚かれています。

「まあ、外国の方なのに偉いわねぇ。こちらこそよろしくお願いします」

やっぱり、本職の方のお辞儀は違いますね。ぴんと棒が通っているかと思うくらいまっすぐな姿勢で腰を折ってお辞儀を返されました。

うーん、今後のために覚えておきましょう。

「あら、こちらが噂の……？」

どうやら織斑君のことも知っているようです。

まぁ、ニュースでもやってましたし花月荘は毎年利用しているら

しいですから記憶に残りやすかったんでしょうね。

「ええ、まぁ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」

おお、織斑先生が謝ってます。

「なんだ、不破？」

「いえ、浴場に関しては私は関係ありませんし」

背中の傷がある以上、皆さんと一緒に入るのには抵抗がありますからね。

シャルにはああ言いましたが見せないで済むならやっぱり見せなくないです。

「まったく、一人で大浴場を独占している生徒なんてお前で初めてだぞ」

「えへん」

「誉めてはいない。周りを巻き込む力は認めるがな」

「……その節はご迷惑をおかけしました」

織斑君の大浴場の利用日が決まった影響で、ボイラー点検の日限定とはいえ女子生徒がひとりで大浴場を使っていると利用状況が把握しにくくなって、織斑君と私が鉢合わせするかもしれない、なんて議論が巻き起こったらしいんですよね。

どうも、原因は私と楯無先輩が大浴場で暴れて一週間ほど使えなくしたからしいんですが……全然覚えてないんですよねぇ。

とにかく、そのとき織斑先生のおかげで今まで通り使えることになったらしいです。

「それではみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから――あらあら、元気があってよろしいですね」

女将さんの言うことを最後まで聞かないで部屋に向かってしまう生徒がちらほら……皆さん、織斑先生にマークされましたよ？

宿泊行事を楽しみたいなら先生の前では大人しくしているべきです。

見られてないときに騒ぐのは自由ですから。

「ね、ね、ねー。おりむ～。おりむーの部屋ってどこ～？」

……織斑君、次は本音（のほほん）さんですか？

まったく、この人のナンパぶりに磨きが掛かっている気がします。

「いや、俺も知らな、」

「織斑先生と同室のはずですよ？　個室だと女子が押し掛けるから、とかで」

そんなことを山田先生が呟いていました。

まぁ、織斑先生の部屋に押し掛けてまで織斑君と遊ぼうという気合いの入った人はあまりいませんよね。

虎穴に入らずんば虎児を得ず、ってことでしょうね。

織斑君はどう転んでも夜は楽しめない、ということです。

ざまぁ見ろ、です。

「あ、ふーちゃんだ～。海行こ～？」

「う、その……えと、はい……」

どう頑張っても、本音さんには逆らえません。押しが強いわけで

もないんですけど……

「でも、本音さん、私は背中の傷が……」
「大丈夫だよ～。皆で隠してあげるからー」
「……絶対、ですよ？」

本音さんは生徒会に所属しているので私の傷のことも知っています。というかもう十人も私の傷のこと知ってるんですね。
でも……こうもにこにこされては断れませんよ。もとから水着に着替えるつもりではあったわけですし、まぁ、いいでしょう。

「では、荷物だけ置いてきちゃうので、別館で会いましょう」
「あ～いあいさ～」
「私は女なのでサーじゃないです……」

正解はマム、と言うべきですね。
まぁ、ノリと流れで生きている本音さんに言っても意味はないでしょうけど。私にだって拘りがあるわけでもないですし。
……私の部屋はここですか。
んと、部屋のメンバーは……一松さんたち三人と原田さん、それに四人の共通の友達三人ですか。三人も知り合いがいるなんてラッキーですね。

「あ、代表」
「原田さんも海ですか？」
「ま、そんなところ。ところで夜の代返は任せてね？」
「え？」

代返って、見回りの先生にいない人の代わりに返事することですよね？

私、夜に抜け出す予定はないですよ？

「とぼけちゃってー……ちょっとこっち来て」

「えぇ……？」

他の方の視線から逃れるように二人して部屋の角へ行きます。

私と原田さんの間にこそこそ話さないといけない事なんてないと思うんですけど……

「……代表ってデュノアさんのことマジラブなんでしょ？　だったら夜這いするしかないじゃん！」

「な、ななな！？　なんで！？」

鈴ちゃんやセシぃとか、普段私と一緒に行動している人たちならまだしも、なんで原田さんが！？

「ほら、あのときのノート……えっと、シャルロットに逢いたいなぁとか、いろいろ……」

「あっ！」

そういえば、あの時の原因ってそもそも原田さんだったじゃないですか！

何で今まで気付かなかったんでしょう。私が逆上してしまったのだって原田さんがバラしかけたからですし。

「ま、そういうわけで頑張って！」

ぐっと拳を向けられても……

そもそもシャルはもう織斑君と……

「恋せよ乙女、命短し！」
「順番、逆じゃないですか？」
「細かいことはいいんだって。今日の夜は部屋に入れないからね！」

え、えー！？
それは困りますよ……シャルの部屋は廊下の向こうでしたっけ？
今のうちにお泊まりセットを作っておかないと本当に追い出されたとき困りますね。
べ、別にその気になってるわけじゃ……
い、いいじゃないですか！　ちょっとくらい気にしたって！

「それじゃ、海行ってきます！」

早いところ原田さんから距離をとらないと墓穴を掘る気がします！
部屋を出てダッシュ！　は他のお客さんに迷惑なので静かに早歩きです。
私の早歩き、競歩の大会にでても恥ずかしくないくらいのスピードがでますよ？

「っと、織斑君に篠ノ之さんじゃないですか。そんなところに立ち止まって、何してるんですか？」
「いや、地面を見てくれれば分かる」
「地面、ですか？」

辺りを見回してみてもウサミミが生えているくらいでどこもおかしく……ウサミミ？

「あの、あれは日本特有の植物ですか？」
「ああ、篠ノ之束という傍迷惑なものだ」

あー……これが。
いえ、植物ではないのは分かっていましたけどね。だって『引っ張ってください』なんてふざけた張り紙がしてありますし。
篠ノ之さんが嫌そうな顔をしているのも納得です。
でも、二人はこれをどうする気なんでしょう？

「私は行くぞ」
「お、おう」

あらら、篠ノ之さんは行ってしまいました。織斑君も仕方ないみたいな顔をしていますし、いつものことなんでしょうね。
まぁ今回ばかりは篠ノ之さんは関わりたくないからではなくて、たんに恥ずかしいからでしょうけど。

「織斑君も放置したらどうです？」
「いや、放置したら束さん拗ねるから……」
「じゃ、抜きますか」

軽く引くとすぽっと抜けました。
一瞬、篠ノ之博士が抜けるかとも期待したのですが……まぁ、あり得ないですよね。地面の中じゃ呼吸も大変ですし。

キィィィィン……

ん、なんか、飛んできてますね？
ハイパーセンサーによると……ブーストで飛来してくる……巨大にんじん？

「って、きゃっ！？」
「ぬお！？」

「い、一夏さん!?」

ドカ――――ン!

すごい衝撃とともにイラストチックなにんじんが地面に突き刺さりました。

私は踏ん張りましたが、織斑君は吹っ飛んで……たまたま後ろにいたセシぃのスカートの中にダイブ。

押し倒す形でセシぃの下半身に顔を押しつけています。

うわー。さすがですね。幼稚園生が見ても今の織斑君を正しく変態と呼ぶでしょう。

「あっはっはっ！　引っかかったね、いっくん！　……あれ？　君誰？」

「この間の不破アリサです。そこで変態行為をしているのが織斑君です」

「わわわわ!?　いっくんが獣さんに……うわー、すご」

篠ノ之博士……顔が真っ赤です。今現在顔を大事なところに押しつけられているセシぃより真っ赤です。

というかセシぃ、反射的な行動なのは分かりますけど、スカートと一緒に織斑君の頭を自分で押しつけてますよ?

「ね、ねえ、最近のいっくん、あんな感じなの?」

「いえ、あれは不幸な事故だと思います」

「でもでも、女の子の方の顔も嫌そうじゃないよ?　えっと、ああいうのを合意の上っていうのかな?」

「し、知りませんよ!」

でも、最近セシぃも怪しいと思ってたんですよ。

私がいなくても織斑君と一緒にいますし、この前の買い物の時も織斑君を皆で尾行してたみたいですし。

「そ、その、私、お邪魔かな？」

「見られた方が燃え上がる、というのを聞いたことがあります……」

「こ、こんな人目に付くところでやってるってことは……そういうことなのかな？」

「えと、篠ノ之さん……箒さんのところ行きましょうか？」

「そ、そだね」

篠ノ之博士……ややこしいですね。束さんはおもむろに私の持っていたウサミミを取ろうとして。

ひょい

「あっ！？」

ひょいひょい

「とうっ！」

ひょひょいのひょい

「たぁー！　って渡してよ！？」

「ごめんなさい。やけに可愛らしかったので……」

「まぁ、そういうことなら許すよ！　じゃあ箒ちゃん探知機スイッチオン！　むむむむむ……あっちだ！」

あ、ウサミミを付けたかっただけじゃなくて、ちゃんと意味はあったんですね。

でも、何でウサミミなんでしょう？

「って、置いてかないでください！」

会話をするのは二度目ですが分からない人です。

初めて話したのは……ちょうどシャルが男装をやめたときですね。

◆

「――。……姉さん」

ん？　篠ノ之さんが電話してますね。これはまた珍しい。彼女が電話してるところなんて初めて見ましたよ。

しかも、電話の相手は篠ノ之博士のようです。不仲だと思ってたんですけど……

私も篠ノ之博士と話したいことありますし、変わってもらえませんかね……？

確か、織斑君と織斑先生と篠ノ之さん以外に対しては興味がないなんて聞きましたけど……でも、どうしても話さないといけないんですよね。

「姉さん、感謝はしている――ん？　不破か？」

（ちょっと、かわってください！）

（いや、多分、相手にされないぞ？）

電話の邪魔をしてはいけないので口パクでなんとか意志疎通を図ります。でも感触は悪いですね。

「あ、いや、私の友人が姉さんと話したいとか……名前？　不破アリサだ。え？　いいのか？　いつもみたいに冷たくしないな？」

むむむ？

どうやら篠ノ之博士の方からコンタクトをとろうとしてきているみたいです。まぁ、思い浮かぶ理由としてはあの件でしょうね。

だから私も話したいわけですし。

それにしても、篠ノ之さん、篠ノ之博士の事嫌いなんじゃなくて心配だけどどう関わっていいのか分からないだけなんじゃないでしょうか？

今の篠ノ之さんの言葉を聞いていると、どうもそんな気がします。

「不破、姉さんが話したいそうだ。できればだが、怒らないでくれると嬉しい」

やっぱり問題のある姉を心配しているだけにしか思えません。

「……お電話代わりました、不破アリサです。いやぁ、愛されてますねぇ」

「そんなことはどうでもいいよ。君、アレどうしたの？」

「まま、そう言わずに。私は箒さんのお友達なんですから少しくらいは仲良くしましょうよ」

「やだよ。私には関係ないことだもん」

……まさに難攻不落ですね。

ですが！

私には引きこもり生活から脱却したというキャリアがあります。

その経験を生かして篠ノ之博士も真人間にしてみせましょう。

篠ノ之さんにも頼まれましたし！

「関係ないことないですよ？　だって私の友達である箒さんがあなたのこと心配してるんですから」

「だっ、誰がむぐぅ！？」

はーい、篠ノ之さんは静かにしててくださーい。

「箒ちゃんが……？」

「そです。ね、箒さん？」

「あ、ああ、うむ。一応、姉妹だからな」

携帯を篠ノ之さんに向けて話させます。

うん、篠ノ之さんが空気読める人で助かりました。

そんなわけがあるか！　とか言うかもと思ってたんですよ。

「嘘だよ。だって箒ちゃんは私のせいでいっくんと離れ離れになって、引っ越しも多かったから友達も作れなかったんだよ？　私を恨んでないわけないよ」

「そうですね……でも、結局ＩＳがあったおかげで同じ学校に入れたじゃないですか。それに、同じ組にして、最初の内だけとはいえ同じ寮の部屋で生活させたのも篠ノ之博士の思惑ですよね？」

「それは……箒ちゃんに謝りたかったから……」

……うん、普通に会話できてますね。

やっぱり、引きこもり相手と話すには相手の話を聞いてあげるのが大切みたいです。

いつかのセシぃもそんな感じでしたし。

「今の話を聞いて、箒さんもきっと許してくれますよ。それに家族じゃないですか。いつまでも嫌ってることなんてできませんよ」

「そう、かな？」

「そうですよ。ね、箒さん？」

「……姉さん。いろいろ、ありがとう……」

「私も、いっぱいごめんね、箒ちゃん」

一件落着。

これであとは本題に入るだけですね。

「それで、本題なんですけど……」

「あ、待って待って！　その前にありがとう！　お礼は思いつかないんだけど……そうだ、第四世代型ＩＳとか興味ある？」

「……いえ、お礼は気にしないでください。その、自分のＩＳに愛着もあるので」

「そっか、それだったら今度素敵改良してあげる！」

……なるほど。

篠ノ之博士って気難しいように見えてただのツンデレだったんですね。ツン９９９、デレ１くらいの……

「ありがとうございます。それで、本題なんですけど――」

◆

「ねぇ、あーちゃん」

「……わ、私のことですか？」

「もちろん。それで、何であのとき口だしてきたのかな？」

あの時……まぁ、この前の電話のことですよね。

あれの理由と言われましても……篠ノ之さんにいい顔したかったからですかね。

あとは……

「……理由もなく嫌そうな声されるのもイラッとするので」
「わ、自分勝手だ」
「束さんに言われたくないですね」

まったく、どうせ今までのことは全部自分と自分の周りの為の行動でしょう？
って、なんで鳩が豆鉄砲な顔してるんですか？
もしかして自分勝手だと思ってなかったとか……？

「ううん、そういえばいっくん以外に私を名前で呼んでくれる年下の子いないなぁって思って」
「そうですか」

目の付け所が子供みたいですね。
天才は得てして変人だって言いますけど、束さんも当てはまるんですね。
いえ、ウサミミの時点で気付いてましたけどね？

「あっ！　箒ちゃんいた！」
「それじゃあ私は着替えて来ちゃいます」
「ばいばーい」

束さんを篠ノ之さんに託して私は別館の中に入ります。
人は……いませんね。ラッキーです。
早いところ着替えちゃいましょう。
ふぅ……束さん、意外と元気な人でした。
私のイメージだとずっと椅子に座ってものを考えてるような虚弱体質の……あんなスタイルの良い人だとは思いませんでした。

「……私の胸、あれくらいまで大きくなりますか？」

私も牛乳飲むので頑張って下さいね？

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．２（前書き）

回想なので短め

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．２

「ラストサン隊、二時の方向に戦闘機が十五機！　至急撃墜してください！」
「……はい」

十五人が私達を殺しに来ている……そういうわけではないんでしょうけど、この空にいるほとんどが敵兵が死ぬこと、友軍が死ぬこと、そして自分が死ぬことを仕方ないと考えているのでしょう。
私は……そう思えません。
殺さなければ自分が殺される。そんなことは分かります。
でも、私は殺したくないです。
そんな理由で誰かの命を奪うなんて……怖くてできません。
私はＩＳを使わなくても人を殺せる圓明流という手段を持っているので……この戦場で誰かを殺したら、これからも同じことをしてしまうような気がして……

「ガーリートーク、ぼーっとするな。敵さんは待ってくれないぞ」
「ま、無理しないでこの前みたいにやればいいのよ」
「ベイルアウトしてもおっ死んなら運命って奴さ」
「オランジェ！」

私は、例え敵といえども殺したくないので羽だけを潰してベイルアウトさせていますが……完全なわけがありません。
私達がいるのは地上から遙か離れた上空五マイル。
例え低い高度からベイルアウトをかてパラシュートを開いたとしても十回中十回生き残るなんてことはありません……むしろ五回も生き残れるか……
私が撃墜した戦闘機はまだ十数機ですが、既に私のせいで亡くな

った人も何人かいるでしょう。
今更、ではありますね。

「ガーリートーク、行きます」
「墜ちんなよー？」

絶対に、墜ちません！

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．２（後書き）

＞ｉ２４６９２－３０２１＜

ＰＳＰェ……

ＰＳＰの液晶が割れてＡＣＸが出来なくなりました（

45.　Oc?ans　onze（前書き）

「オーシャンズ・イレブン」

原作と同じ題ですね。
どうでもいいですがこれを書いている時Ｂ'ｚのＯＣＥＡＮ聴いてましたｗ

45. Oc?ans onze

「さて……これで、完璧ですね」

キャミソール型の上と普通のショーツと同じ形の下を穿いて、パレオをしっかりと結びつけて、完成です。

でも、キャミの胸以外のひらひら部分とパレオが少し透けてるんですよね……よーくみると傷跡も見えちゃうかもしれません。

「あ、代表も着替えたんだ。ってかクオリティ高！」

「え、なになに、ワンピ？　スク水？　ロリっ娘のだいひょーは……ぶはっ！　なに、だいひょーに何が起きたの！？　スッゴい可愛い、というより美人なんだけど！？　てかセクシー！」

入ってきたのは原田さんと……カナダから来たエリザベスさんですね。

……というかエリザベス、スク水とかロリっ娘とか、そんな言葉どこで知ったんですか？

「そこはほら、サブカル通だもん！　というかそんなことよりだいひょーだよ！　その水着、露出は多くないのにビキニよりセクシーな気がする」

「それを見た目小中学生の代表が来てるから背徳感を感じるって？」

「そう、そうそう！　リカちゃん分かってるじゃーん！」

原田さんとエリザベスさんも結構仲いいんですねー……というか原田さんってどんな話でも合わせられるんですね。

この前は三好さんとメイク議論をしてましたし、来る途中のバスの中では織斑君と『ＩＳ／ＶＳ』――インフィニット・ストラトス

／ヴァースト・スカイという第二回ＩＳ世界大会『モンドグロッソ』のデータを使った格闘ゲーム――の超絶コンボを探しあってましたし……

でも、私、セクシーですか？

えへへ……

ですよね！　私、まだ幼児体型かもしれませんけど内側からは大人の魅力を放ってますよね！

「うーん……今のだいひょー見てるとふたっちゃんがイッチーとニャンニャンする趣味も受け入れられるなぁ」

「え、ちょ、あの！？」

「ベス、代表は好きな女の子いるからダメよ」

「え、リカちゃん！？　代表、こんなに可愛い上に百合っ娘なの！？　それなんて私得（おれとく）！？」

女の子が好きなんじゃなくて好きな子がたまたま女の子なんですってば！

似ているようで全然違うんですからね！？

「というか代表は一途だから少なくともベス得ではないね」

「ないかー。残念」

「しかも、代表の片思い相手、三好並に可愛い子だからね」

シャルと三好さんは方向性が違うので比較しにくいですけど、私（とうしゃ）比ではシャルに軍配が上がります。

「マジかー！　やっぱり美少女は美少女としか分かり合えないんだ！　今なら悟り開ける！」

「エリザベスさんが悟り開いても迷惑そうなのでやめてください。あと、エリザベスさんも可愛いと思いますよ？」

「うーあー！　リカちゃん！　私泣いていいかな!?　悪気がなさそうだから余計に傷ついた！」
「おーよしよし」

エリザベスさんが原田さんの胸に飛びついて嘘泣きをしていますが……原田さん、これ以上ないってくらいめんどくさそうな顔してます。

というかエリザベスさん、本当に日本語が達者ですね。昔から日本に住んでいたりしたのでしょうか？

でも、ロリっ娘ですか……んー、ちっちゃいのは可愛らしいとも言いますけど、私の場合はなんか違う気がするんですよね。

いえ、他からみたらやっぱりただのロリータなんでしょうけど、私的には大人な女性を目指しているわけで……

「てか、代表的にその水着どうなの？」
「ふぇ!?　え、と……これは気に入ってますよ」

シャルも可愛いと言ってくれましたし……私、未練がましいですかね？

自分でも重い性格しているとは思うのですが……

でも、二年越しの初恋だったんです。それこそ、織斑君がシャルと知り合うずっと前から好きだったのに……

「でも、ちょっとわき腹の傷見えてるよ？　太腿のも」
「ん……やっぱり分かります？　シャルとラウラさんが気にしますかね……」
「あー、代表、ほれ」

原田さんが私に右手の甲を見せてきます。そこにはあのペンの刺し傷の痕が残っています。

「……その、すみませんでした」
「いいっていいって。でもね、そういうことだよ。二人ともどうしても気にしちゃうと思うよ？」

そうですよね。

……私が勝手な行動をした結果がこの傷なのに、二人の心に影を落としていると考えると心苦しいですけど……だからといって私が何かをすれば二人とも気にしなくなるというものでもないんですね。

「でもさー、シャルロットもラウラも、よくだいひょーの近くにいられるよね。私だったら申し訳なくて近くにいられないよ」

エリザベスさんがぽつりと二人を非難するように呟きました。

でも、二人がダメなら私も……

「あ、ばか。というかそれって代表が私に近づくことも入るよ？」
「いやいや、リカちゃんのは完全に自業自得だったでしょ。だいひょーが意味もなくそんなことするわけないじゃん」
「ベスの代表贔屓も相当よね……」
「だってちっちゃくて可愛いもん」

原田さんに対しても毒舌な感じのエリザベスさんなんですけど、きっと二人は結構仲いいんでしょうね。

原田さんも諦めたように笑っていますし。

でも、私は、意味もなくそういうことをしない人では……ううん、しないと、決めたんでしたね。

「原田さんの時は私が過剰に反応してしまったからですよ」
「えー？　でもだいひょーは謹慎だけでリカちゃんは退学になりか

けたんでしょ？」

……あれも、私をＩＳ学園に留めるためにもう一人の当事者である原田さんを退学させて有耶無耶にしようってことたったんですけどね。

罰の大きさが罪と比例するとは限りません。

まぁ、原田さんは原田さんでキャサリン・ジェファソンさんに罰を肩代わりしてもらったみたいですけど。

「ま、この話はここまで！　ほら、私達は着替えるから。代表はもう海いきなよ」

「そですね」

別に泳ぎたいわけではないのですが、いつまでも更衣室にいるわけにもいきませんからね。

でも、傷痕はどうにかして……あ、そういえばいざという時のために包帯を持ってきましたからそれを巻いちゃいましょう。

余計に目立たせることにはなりますけど、どうせ気付かれるなら直接よりはまだ二人も気にしないんじゃないですかね？

きっと、私が笑顔で気にしてないよって言えば笑ってくれると思います。

「あ、アリサやっときたわね！」

「鈴ちゃん……待っててくれたんですか？」

「まぁね、あんただけいないで騒ぐのも寂しいし」

「ふふ、ありがとうございます。皆さん荷物はどこに？」

「こっちこっち」

鈴ちゃんに手を引かれて一つのパラソルの下に。鈴ちゃんたち以外の人の荷物もあるみたいですし専用機持ち組というわけではない

んですね。
まあ、とりあえず荷物を置いて……包帯を巻いちゃいましょう。

「それじゃ、私は一泳ぎしてくるわ」
「溺れちゃだめですよ？」
「私、前世は人魚なのよ」

ニヤリと笑いながら海の方に行ってしまいました。あぁ、せめて準備運動を……！
もう！　そうやって自信満々で海に飛び込む人ほど危険なんですからね！
足攣ったりしたら大変じゃないですか！

「もう、見えませんね」

……さて、包帯包帯。

「先に目立ちそうな脇腹から巻きましょう」

キャミの裾を胸の位置まで捲り上げて……固定できないので咥えちゃっていいですよね？
な、なんだか服を捲り上げて下着姿を見せようとしてるみたいで恥ずかしいです……
ぱぱっと！
ぱぱっとやっちゃいましょう！

「ぐーるぐーるぐ～るぐ～るぐるぐるぐるぐる！　……こ、こんな感じでいいですね！」

途中でやっぱり恥ずかしくなっちゃって雑になっちゃいました。

包帯を巻く位置がずれちゃっておへそが出ちゃってますけど……まぁ、セクシーってことで。

次は太腿ですか……やっぱり、パレオが邪魔なんですけど……こっちの方がもっと恥ずかしいですね。

スカートを捲り上げてショーツを見せつけてるような気分になります。しかも太腿に巻くので脚を開かないといけませんし……うぅ、見てくださいって言っているようなものじゃないですね。

「し、失敗して長引くのは耐えられそうにないのでゆっくりやりましょう……！」

巻く位置を決めて丁寧に巻いていきます。きつすぎると痛くなってしまいますし、緩いと外れてしまうので絶妙な力加減を意識して……

「あ、不破さん何してる、ん……だ？」

「お、織斑、君……？」

あ、あ、えっと……なんで今なんですか！？

ど、どうしよう。まさに織斑君に向けて足を開いているような状態ですし、み、見られちゃってますよぉ……

でも、足を閉じたら包帯が変になっちゃいそうですし……し、羞恥プレイすぎますってぇ……

「織斑くぅん……」

「な、なな、なんだ！？」

「見ないでぇ……！」

「ご、ごめん！　不破さんが色っぽくてつい目が離せなく……じゃなくて！　えっと、ごめんな！」

い、行ってくれましたか……は、恥ずかしかったです。
お、男の子に向けて脚を開くなんてはしたない……もうお嫁さんになれません……シャルをお嫁さんにもらいましょう。
残りの包帯も巻いちゃって……これでよし。

「こほん。シャルに水着見てもらいましょう」

せっかく選んでもらったんですし、早く見せたいんです！
……でも、鈴ちゃんが溺れないか心配ですし、海を眺めつつ保安員をやりましょう。

「あの桟橋が良さそうですね……」

普段はボートなどが繋いであるのでしょうが、人の多い海水浴シーズンだからでしょうか。危険を避ける為なのか分かりませんが陸地にあげてあります。
とにかく、結構海の先の方まで続いているので、あの桟橋の先で見回りしましょう。

「でも、波ありますね……やっぱり入れませんね。それに深さも割とあるみたいですし……」

あの、桟橋の先くらいで織斑君でもギリギリ口がでるくらいの深さみたいです。
こ、怖いですけど、私が怯えていたせいで溺れている人の発見が遅れるかもしれませんし……

ざざーん……ざざーん

波の音は嫌いではないんですよね。

生まれる前の胎児が聞いている音と似ているから、なんて言いますけど、海が嫌いな私でさえそうなんですから本当なのかもしれません。

それにしても、皆さん泳ぐのが上手ですねぇ……私はそもそもプールに入ったことも数えるほどしかないので羨ましいです。

練習してみたいとも思うのですが、既に波も腰以上の深さがある水も怖くなってしまったので……

「はぁ……」

自分のダメさ加減にため息がでます……

「さて、悪いが、恨むなよ？」

「ま、同情するが、俺らも金は欲しいからな」

「へ？　ちょ、きゃっ！？」

海を注視していたため、背後からの声に反応が遅れました。

後ろから四人くらいが私の身体を抱えて……ってまさか！？

「やめっ！　離してください！　離してぇ！　私、ネタじゃなくて泳げ、」

「「「「そらよ！」」」」

「あ……ひっ！」

バシャーン！

無慈悲にも投げられました。

って、やばいですって！　ほんとに！？

「さぁ、ずらかるぞ！」

「「「おおーー！」」」

待って……！

行かないで！

……せめて、水面で音を立てられれば誰かに気付いてもらえるのでしょうが、そもそも上に上がれません……

まぁ、まずは冷静になりましょう。

人間の血液と海水の比重はほぼ同じです。ですが骨も肉も内臓も海水には浮きませんから……理論上では肺の中の空気で浮かぶんでしょう。

で、現状浮かべない私には必要なだけの気体が体内にないということになって、沈んでいるのでこれ以上気体を取り込むこともできません。

つまり、浮かべないということです！

……誰か助けてください！　し、死んじゃう……！

ど、どうやって上に行けば……それより水面はどっちですか！？

え、えと……あ！　一度地面に脚をついてジャンプした勢いで水面から顔を出せれば！

えと、沈むには……沈めもしません！？　ど、どうしろって言うんですか！

ん、だめ……もう、息が……

45.　Oc?ans　onze（後書き）

主人公溺ｓ（

しませんけども。

相変わらず災難な子です。

そういえば二木＆一松さんが最近出番ないですね

お詫び

アリサの水着姿、描いてたけど間に合いませんでした（

次の更新の前書きで載せられるよう頑張ります！

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．３（前書き）

回想その三

「ラストサン隊、ただいま帰還した」

また、生き残れました。

何度かの空戦で分かったことがいくつか――一つはシールドエネルギーの減少が激しいこと、そしてもう一つはＩＳのハイパーセンサーはあまり意味がないということです。

ミサイルの威力が高いのかシールドエネルギーに問題があるのかは分かりませんが、数回の被弾で撃墜されるでしょう。

ＩＳの構造自体がミサイル程度で撃墜されることを考えていないため空中でシールドエネルギーが切れてしまうと揚力も得られなくなるので墜落。ミサイルの衝撃に絶対防御が発動したとしても超高度からの墜落をも耐えられるとは思えません。

それに、どの方向から戦闘機が何機くるかという情報も前もって伝えられるためハイパーセンサーを使って戦場を把握するという必要もあまりありません。

強いて言うなら全方位を見ることができるため、ドッグファイトが若干用意になる程度でしょうか。

つまり、この戦場においてのＩＳの強みは機動性と兵装の豊富さ。

必ず生還するには心許ないです。

「じゃあ俺はひとっ風呂行ってくるかな。嬢ちゃん一緒するかい？」

「……セクハラです。私は、もう疲れちゃいました。部屋に戻りますよ」

「おーう。飯だけはしっかりなー」

ハリスさんが行ってしまうと私は一人です。ミハエルさんとミシェルさんは作戦室に呼び出されましたから。

……いつまで、この戦争は続くのでしょうか。
早く、セシぃや鈴ちゃんに会いたいです。
まだ来てから二十五日。七十二日間と記憶しているのでまだ一カ月以上はここにいなければならないんですね。
兵舎の皆さんは優しくしてくれますが、空を飛ぶ度に知っている顔が減ります。明日は我が身……この言葉を意識していない人はきっといないでしょう。

ガチャン

慣れない長時間の飛行に生死をやりとりするという極度の緊張。戦場帰りはいつも疲労困憊で……体力を落とさないために食事はしっかりとれと言われますけど寝てしまいたいのが正直なところです。
今のところ、作戦は順調に進んでいます。
それでも劣勢ではあるので、食事の質が上がるわけでもなく……材料の問題ではなく手間の問題なので当たり前ですけどね。
今更ながらどれだけＩＳ学園の環境が恵まれていたのかが分かります。
柔らかいベッドに美味しい夕食、そしてお湯の出るシャワーに水洗トイレ。当たり前と思っていたことが身近にない生活は辛いです。
ニキビも肌荒れも、戦況を左右しないものは気にする気にもなりません。
肌の手入れをするくらいなら睡眠を。
軍属が長い女性兵の方たちの話では、こまめに汗を拭きさえすればニキビなんてそうそうできないらしいですし。薄化粧すらする余裕もないので当然かもしれませんね。

「レーションって美味しくないですよね……」

至急用の焼き菓子のようなそれはパサパサしていて味もないため、

初めの内は食べるのも辛かったです。今では食べるという娯楽ではなく、栄養補給というただの行為だと思ってます。一応、食堂のような場所もありますが戦場帰りの時ばかりは食欲も湧きません。
最低限の食事も済ませたので汗だけ拭いたら身体の疲れを落とすためにゆっくり寝ましょう。

コンコン……

誰でしょう……？
わざわざ兵舎にまで来るなんて……重要な任務か報告ができたのでしょうか？
正直、明日にして欲しいですが立場的にわがままが言えるわけでもありませんし……最終兵器のパイロットなんて言われてますけど、戦場ではただの兵士です。
まだ、歴戦のパイロットたちを尊敬し大きな戦力だと考える人たちの方が多いです。
……私が甘いから、というのもあるのでしょうけど。

「えと、お疲れさまです……？」

扉の向こうに立っていた人は見知らぬ人でした。
もちろん兵舎で生活する人のほとんどが見知らぬ人ですけどね。
皆さん、いつ会えなくなるか分からないのであまり仲良くしないらしいです。

「アリサ・フワだな？」
「ええ、そうですけど？」

どういうことでしょう？
私にとっては見知らぬ人だとしても、まだ子供の私自身は兵舎で

は目立つので私の顔を知らない人なんていないと思っていたんですけど……

「レサスの勝利のために死んでもらう……！」

どんっ！

「やはり間諜の方ですか……」

ナイフを突き出してきた腕を絡め取り、脚を刈って地面に転がしてそのまま腕を締め上げます。

銃ではなく刃物だったのは持ち運びの際の利便性と静かにことを済ませるためですか。

銃だったら危なかったかもしれませんね……

「離せ！」

「離しません。このまま捕らえます」

スパイなのだとしたら尚更逃がすわけにはいきません。大人しく捕虜になってもらうしか……

「ぐっ……！」

「え？」

急に、大人しく……？

逃げられないと悟って抵抗するのをやめたのかもしれませんね。

それでも誰かに来て頂かないとどうしようもないんですけど……

「アリサ！　無事か！？」

「あ、ハリスさん……襲われましたけどこの通りです。何か知って

いるかもしれないので捕虜に……」
「……その必要はないな」

物音を聞きつけたのか、それとも誰かが呼んだのか、髪も濡れたままのハリスさんが駆けつけてきたので現状を説明しようと思ったのですけど……
どういうことでしょう？

「舌を噛み切ってやがる」
「……えと、それって、あの……え？」
「もう、死んでる」

そんな……
そこまで命を懸けるべきことですか？
国の勝利は自分の命より大切なことですか？

「敵兵にも家族がいる。戦場に出てる奴らには戦う理由がある。それこそ人を殺してでも国に勝ってもらわないといけないくらいな」
「……」

……この人にも家族がいたのでしょうか。
今でもこの人の無事を願っている人がいるのでしょうか。
私が、捕まえなければこの人は還れましたよね？
なら、私が殺してしまったのと同じことですか……？

「俺だって生きて国に帰りたいから躊躇しないで敵を墜とす。なにより一人でも多く殺せば、自分の家族が殺される可能性は減る」

この世界に、私の守るべき人はいません……

「嬢ちゃんは、何のために戦ってるんだ？」

46. Elle le laisse temporairement（前書き）

「一時退場」

ちょっぴりいちゃつき回。

落とされといてあまり深刻にならないのは私の文章力の問題です（

あと、前回最後にいっていたアリサの水着はこんな感じになりました。

大体一夏が目撃したあたりのシーン

＞ｉ２４８４４―３０２１＜

46. Elle le laisse temporairement

ん、皆はもう海に行ったのかな……？
だいぶ準備に時間がかかっちゃったから最後の方になっちゃったかも。
でも、日本の人って海だと何して遊ぶんだろうなぁ……
やっぱり泳ぐだけなのかな？　あ、ビーチバレーとかすいか割りも定番なんだっけ？
フランスではあんまり海に行かなかったから実は結構楽しみにしてたんだよね……
花月荘がほぼ貸切状態だからかもしれないけど海水浴に来てる人もあんまりいないみたいだし、人目とか気にしないで遊べるね。

「やっぱり知らない人がいるとね……」

この水着、可愛いからって買ったけど背中が開いてるから、知らない人に見られるのは恥ずかしいし……アリサもセクシーって言ってたからなぁ。
水着単品ならアリサのも相当だと思うんだけど、アリサ自身は色っぽいというより可愛らしい感じだし。
ん……なんだか最近アリサのことばっかり考えてる気がする……水着を買ったときからは特に、かな。
どうしてだろう？
アリサが僕に対してよそよそしくなったからかな……？
アリサから話しかけてくることが減ったし、たまに僕のことを寂しそうに見てたりする。そういうときは決まって一夏と僕が一緒にいるときなんだけど……
特に一夏といるときは絶対に近付いてこないし……ほんと、どうしてなんだろ？

「最近あんまり話せてないから臨海学校の間に取り戻したいな」

まだまだアリサのことも知りたいしね。

何が好きとか何が嫌いとか、そんな小さなことでもいいから沢山話したい。

アリサはまだ僕に対して遠慮してる気がするから、そうやって少しずつ仲良くなれたら嬉しいな。

せっかく同じフランスから来てるんだし、将来的には他の国の代表候補生と違って一緒にいられる時間も多いんだから良い関係を築けたらなぁ、って思ってる。

誤解から始まっちゃったけどまだまだやり直せるって信じてる。

「うん、善は急げだよね！」

とりあえずどこにいるんだろう？

見当たらないし、誰かに聞いてみようかな……あ、箒見つけた。

「ねえ箒、アリサ見な、」

「箒ちゃーん！　ぎゅ～！」

「あ、姉上……目立っているので……」

……回れ右、だね。

誰かは分からないけど友達にウサミミさんの妹はいなかったはずだよね。

うん、いなかった。

でも、あれがＩＳを開発した篠ノ之束博士か……やっぱり研究者の人って変な人が多いのかな？

デュノア社でもやっぱりああいう人はいたし……

あれかなぁ、酒でもねぇとやってらんねぇ！　ってのと同じ感じだ

ったりして？

「リン……は一夏にアタックしてるし、セシリアはサンオイル塗ってもらってるし、ラウラは大胆な水着を着ながら恥ずかしがってるし……」

あれ？

他のアリサの友達のグループも見てみるけどどこにもいない。

さすがに小さいから見逃した、なんてことはないと思うし……アリサの髪の毛はラウラと同じくらい目立つからね。

となると、一人でいるんだ。

というかＩＳのコアネットワーク使って見つければいいんだね。なんだもっと早くに気付かなかったのかな。

「って……ん？　海の方？」

あれ、この前泳げないって言ってたような……？

座標の高さがマイナスってことは海の中……しかも沈んでる？

とにかく大丈夫なのか確認した方がいいよね。

普通に泳ぎの練習してるだけかもしれないけど万が一ってこともあるもんね？

練習してるならちょっと教えてあげよっと。アリサは運動神経いいからきっとすぐ泳げるようになると思うな。

「えっと、この桟橋の先の方か……痛！」

「っと嬢ちゃん悪いな！」

……もう、ちゃんと前向いて欲しいよね。

というか、桟橋から走ってきたけどよく転ばないなぁ。

でもアリサももっと浅瀬の方で練習すればいいのに……泳げないと

ころを人に見られるのが恥ずかしかったのかな？
泳げないのもそれはそれで可愛いと思うけど……

「アリサー？　……おかしいなぁ。この辺りにいるはずなんだけど」

コアネットワークでの位置確認もさっきからアリサ側からの許可がなくて正確な位置が分からないし。
海は普通に波が寄せては返して……あれ？　沖の方に何か……

「ピンク色……ってアリサ！」

流されてる……！？
身動きしてるようにも見えないし……まさか本当に溺れてる！？
ラファールを展開して海に飛び込む。
普通に泳ぐ分にはいいんだけど、溺れてるかもしれないアリサを助けるなら呼吸ができる状態で行った方がいい！
ＩＳはもともと宇宙で活動するために開発されたものだから呼吸の問題もとっくに解決してる。アリサもカゲロウを展開すれば溺れなかったのに！

「アリサ！？」

反応は……ない。
やっぱり溺れてる！
気絶してる分、重いアリサを引き上げる。えと、完全に意識が無さそうだし……とりあえず織斑先生に連絡をとらないと！
織斑先生のプライベート・チャネルには繋げられないから……えっと、暇そうだったラウラでいいや！

「ラウラ！　織斑先生にアリサが溺れて失神してるって伝えて！」

『シャルロット！？　アリサが溺れたとはどういうことだ？』
「そんなの後で！　とにかく早く！　場所は桟橋の先だから！」
『わ、分かった』

これでよし。
とにかく急いで引き上げてあげないと……！
波のせいでうまく進めないけどＩＳで加速したらアリサに負担がかかるし……ああもう！　宇宙活動のためのＩＳならこういう時のための機能も付いてるべきでしょ！

「アリサ、もうちょっとだからね」

◇

「教官！」
「ボーデヴィッヒ、ここでは教師だと、」
「シャルロットが溺れたアリサが助けてって教官を呼んでと！」

すぱぁん！

……ボーデヴィッヒが慌てるほどのことだというのは分かったが、いかんせん情報自体が纏まっていない。
落ち着かせるために軽く頭を叩いた。
いや、人間パニクっているときには何かしらの衝撃を加えると精神的にリセットされるのは経験的に知っている。

「あう……」
「誰かしら溺れたのは分かった。落ち着いて説明しろ」
「えっと、アリサが桟橋の方で溺れたらしく、シャルロットが連れてくるのでそれを教官……織斑先生に伝えてほしいと」

不破が溺れた……だが何故私が呼ばれる？
普通に溺れただけならデュノアが助けてお終いだろう。
だとすれば……

「不破は溺れて失神しているのか？」
「あ、はい！」
「まずいな……」

デュノアが見つけた時点で失神していたのなら下手したら数十分の間、不破は呼吸をしていない可能性がある。そうなると脳に障害が……いや下手をすると手遅れかもしれん。
こうなってくると私達が下手な知識で手を出すより専門家に任せた方がいいだろう。とにかく救急車の手配が先決か。

「ボーデヴィッヒ、デュノアを手伝いに行け。ＩＳの展開も許可する」
「っは！」

◇

「アリサ……？」

どうしよう……アリサが息してない。
心臓は止まってないけど弱々しいし……どうすればいいの！？
えっと、フランスで人命救助の訓練も受けた筈だけど……確か気道確保、人工呼吸、心停止状態なら心臓マッサージだったはず。
でも僕は素人だしこのまま連れていって繊斑先生に全部任せた方が……ダメだ、救急車をよぶにしても、桟橋から浜辺までアリサを運ぶのに時間がかかっちゃう。その数分でアリサに後遺症が残らない

とも限らない。
それにラウラがまだ織斑先生を見つけられていなかったら？
アリサの命がかかってるんだから楽観しちゃいけない……やっぱり、ここで人工呼吸だけでもしながら誰かが来てくれるのを待つしかない。
気道が開くように顎を持ち上げて、吹き込んだ呼気が逃げないように鼻を塞ぐ。そして息を長くゆっくり吹き込むだけ。何も難しいことはない。
……蝋燭みたいに白いアリサの顔を見て怖くなる。
アリサ、まだ死んじゃダメだよ？
最後にもう一度だけ手順を確認して深呼吸。
大丈夫。
できる。

「アリサ……」

◇

「げほっ！　ごほっ！　えほっ！」

口の中がしょっぱいです！？
それになんだかやけに息苦しくて……

「アリサっ！？　気が付いたの！？」
「シャル……？」

そんな心配そうな顔してどうしたんですか？
それに水着が少し乱れてますよ……？
ほとんど貸切状態とはいえ織斑もいるんですし気をつけてください。
いくら恋人同士でも慎みはもたないとダメです。

「アリサ、大丈夫？　変なことない？　体、ちゃんと動く？　えと、今日の日付は？　あと、えっと、今日私達が泊まるホテルの名前は？」

「そ、そんなにいきなり言われても困っちゃいますよ。落ち着いてください」

シャルが血相変えて矢継ぎ早にまくし立ててきましたけど……何かあったのでしょうか？

「とりあえず、身体に変なところはないですよ？　日付は覚えてませんけど七月の第二火曜日です。ホテルは花月荘ですよね？　それで、どうしたんですか？」

「どうしたって、アリサ溺れてたの覚えてないの!?　もう、僕が見つけたときは呼吸もしてなくて死んじゃうかと思ったんだから……」

「あぁ、だから口の中が塩辛いんですね……」

……言われてみればすごく怖い思いをした気がします。動けなくて、息もできなくて……シャルが見つけてくれなければそれこそ本当に……

あれ？

「私、呼吸が止まってたって言いました？」

「うん……昔の訓練を頼りに人工呼吸したんだけど、本当に、よかった……」

「あ、シャル、泣かないでくださいよ……それと、ありがとうございます」

「ううん。見つけるのが遅くて……僕が走ってればもっと早くに……」

本当に、シャルが気にすることじゃないですよ。私が海に落ちてからも冷静でいられればカゲロウを展開するだけでよかった話なんです。
気を失う寸前にシャルから位置の問い合わせが来なければ……
それに、人工呼吸までしてくれて……
その、つい、シャルの唇に目がいっちゃいます。ある意味、私のファーストキスはシャルにあげられたんですね。

「アリサ？」
「ひゃい！？」

しかもシャルの方からだなんて……私が失神なんていう格好悪い状態でなければ最高のシチュエーションでした。

「もしかして気分悪い？　少し待ってればラウラが担架を持ってくれるみたいだから我慢してね？」
「あ、いえ、その……そうですね。休みます」
「うん、じゃあ頭持ち上げるね？」
「へ？」

目を瞑ると急に頭が持ち上げられて……

ふに……

ん、柔らかい……枕でしょうか。
薄く目を開けてみれば真上にちょっと心配そうなシャルの顔が……
膝枕！？

「しゃ、シャル！？　あの、これは……」

「何って、膝枕だよ？　前にセシリアがやってたのがちょっと羨ましくて……あ、もしかして苦しい？　ごめんね、気が利かなくて！」
「あ、いえ！　このままで！　……このままでお願いします」
「……うん」

シャルの太腿、柔らかくて眠っちゃいそうです……それに、頭も撫でてもらえて……はぅ～

「アリサ、眠っちゃって良いからゆっくり休んでて……ね？」
「ふぁい……」

心配かけたのにこんなこと思って良いのか分かりませんけど……幸せです。

◇

「アリサ？　……もう寝ちゃった」

寝付きが良いとかそういうことじゃなくて、やっぱり起きていられなかったんだろうな。
今のも眠ったというより緊張の糸が切れて気絶したみたいな様子だったし。
……僕に心配かけないように無理していつも通りに振る舞ってたのかな。
一度は呼吸も止まってたんだから身体に負担がかかってたのは当たり前か。

「シャルロット！　担架を持ってきたぞ！　アリサの様子はどうだ！？」
「ラウラ、しぃっ！　……今、眠ったところだから」

「……眠ったということは気が付いたんだな？」
「うん、一応、体に異常はないみたい」
……アリサのことだから隠してるかもしれないけど。
ずっと横になったままだから体の一部が動かないとかだったら分からない……
「とにかく早いところ運んでやろう。教官が救急車を呼んでくれたはずだ」
「救急車……」
アリサの臨海学校はもう終わりなのかな……？
せっかく可愛い水着まで買ったのに。
臨海学校を切欠に一気に仲良くなろうと思ったんだけど……到着してすぐにこんなことになっちゃうなんて。
でも、今はアリサが元気になってくれれば……
「シャルロット？　早くいこう。気が付いたとはいえ万全かは分からない」
「ん、そだね……」
担架が揺れないように気をつけて、なおかつ可能な限り早く移動する。
少しでも早く、アリサに楽になって欲しい。
◇
「一度、気が付いたということですが何か異常はありましたか？」
「意識が朦朧としてましたけど、話しているうちにハッキリしました。身体にも異常は無かったように思います。でも、あったとして

も隠してしまう子なので……」
「……分かりました。そのことを念頭において精密検査をします。何も問題がないようでしたら今日の、そうですね……七時か八時には戻ってくることも可能かと思います」

ふむ……ならばデュノアの言葉を信じる限りでは不破も臨海学校に参加できるということか。
まぁ、まだ安心はできないが……脳に障害さえ残らなければ大丈夫だろう。肺や気管に異常がでる可能性もあるにはあるが……ＩＳの補助さえあれば生活に支障はないはずだ。

「それで、どなたかご同行されますか？」
「それなら僕が、」
「山田先生、頼めますか？」
「あ、はいっ！」

デュノアが残念そうな顔をしたが……万が一の可能性もある中で当事者を向かわせるのはよくないだろう。
こいつは自分を責めやすい傾向があるからな。
なにより山田先生ならいざという時の判断も信用できる。そしてなにより私達には子を預かる立場としての責任がある。デュノアには悪いがここは大人が行くべき場面だ。

「えと、デュノアさん、こまめに連絡をするのでそんな顔しないでください。不破さんも深刻になってほしくないと思いますよ？」
「そう、ですね……山田先生、よろしくお願いします」
「任せちゃってください」

……デュノアの方も一段落、か？
こういう点ではボーデヴィッヒの言うとおり私は教師には向いてい

ないかもしれないな。
ただ、今は生徒たちへの説明が先だ。
今も不破を心配してか、それともただの野次馬かは分からないが少なくない生徒が集まってきている。

「まぁ、普段は不破が緩く纏めているんだ。たまには私が厳しく纏めてもいいだろう」

だからせいぜいゆっくり休んでくることだな。

46. Elle le laisse temporairement（後書

退場しましたけど次の階では戻ってきているはずです（

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．４（前書き）

予約し忘れてました（

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．４

「ガーリートーク！　そっちに二機！」

尾翼を、もぐ！

さらにもいだ破片をもう一機に投げつけて、やはり尾翼を破壊します。

尾翼を破壊すればいきなり墜落することはなく、でもバランスは保てなくなるのでベイルアウトするほかありません。

エンジンが爆発したりはしないのでギリギリまで高度を低くしてからのベイルアウトになるので、生き残る可能性も最も高いです。

ハリスさんをはじめとする兵士の皆さんは私を否定しますけど……自分の命が懸かっていても……人を殺すなんて。

『ラストサン隊、南から戦闘機二十四機が接近している』

「了解。皆、行くぞ！」

ハリスさんの号令に応えてついていきます。

……私がこの世界にくる必要はあったのでしょうか？

誰よりも戦果を挙げるわけでもなく、かといって不殺を貫いているわけでもないのに……

「ガーリートーク。殺せないのはしょうがないと思うけど考え事はダメよ」

「ミシェルさん……その、分かりますか？」

「コールネームはビッチよ。あなたの機体はふらつきが分かりやすいわ。そろそろ敵さんとぶつかるわよー」

敵機までは残り二マイル。

数秒でまた交戦状態に入ります……いまさら嫌だ、なんて言い訳はできません。
皆さんのように守りたいものがあれば、私も人を殺す覚悟が出来るのでしょうか？

47. Tous amis ne peuvent pas conseiller

「他人だからこそ言えること」

47. Tous amis ne peuvent pas conseiller

「ん……ここは？」
「あぁ、不破さん気がつきましたか。お医者サマを呼んでくるから、そのまま待っててくださいね」
私が起きたことに気付いた女性の看護師さんが私の唇に人差し指をあてて悪戯っぽく笑った後出ていきました。
……キャバクラの方みたいな看護師さんでしたが……病院、ですよね？
あれ、ナース服なのでイメクラって方ですか……？
それはさておき、多分、私は身体に異常が無いか検査するために搬送されたのでしょう。
それにしても……
「今の看護師さん、随分スカート短かったですね」
あれでは寝ている患者さんからは見えてしまうと思います。
しかも黒かったのでピンクのナース服と対照的過ぎてよく目立ちますし……開き気味な襟元から覗いた胸元のほくろも相まってえっちぃというよりセクシーです。
やはり、いくら内なる大人の魅力を磨いたとしても本物にはかなわないのですね……やっぱり牛乳をたくさん飲むことにしましょう！
どこが、とは言いませんがとりあえずCを目標にしましょう！
「失礼します。不破さん、体調はどうですか？」
……ここにきて女医さんですか。
真っ赤なルージュがまた色っぽいです……何なんですかこの病院。

高血圧の男性患者とか絶対に来れませんよね!?
先ほどの看護師さんもついてきていて、目が合うと、はぁい♪
とてをひらひらと振ってくれました。
本当に、病院とかじゃなくてそういうお店なのではないでしょうか?
な、投げキッスとかされても困っちゃいますよ……

「顔が赤いわね。抵抗力が落ちているのかしら……?」
「あ、いえ! 体調が悪いというわけではなくて……というよりゆっくり眠れたようで身体の調子がいい気がします」
「そう? なら、ちょっと触診して問題なかったらこの子に旅館まで送らせるわ」

あの人運転までできるんですか。
見た目から考えて大学を卒業したくらいでしょうか……? 七年後、私はあれくらいセクシーになれますかね?
でもやっぱり運転できる女の人って格好良いですよね。
なんというか男の人に媚びない感じといいますか……看護師さんはむしろ媚び媚びな気もしますけど。
……というか触診って?

「溺れたことでの影響はないみたいだし、身体がマヒしてるとかも無いわね?」
「えぇ、ありません」
「そう。じゃあ触診するわよ」
「だから問題は、」
「どうせだから色々教えてあげるわ」

なんで手をワキワキさせてるんですか!?
触診ですよね!?

そんなエロティックな手つきで触る必要はないですよね!?
ちょ、待って、た、助けて!
だ、だれか～～～～!!

◇

「あー。本来なら不破が名ばかりの監督役をするはずだったが、あいつは病院で検査を受けているので私がしっかり監督する。各自、騒ぎすぎないように」
「「「「「「は、はぁ～い」」」」」」

うわ、マジかぁ。
イッチーと岩陰で楽しもうと思ってたのに織斑先生じゃヤバいなぁ。
流石に教師として不純同性行為は認めてくれないだろうし……夜も不破ちゃんと同じ部屋だから二人で抜け出せるかなーって思ってたけど無理そうだね。
はぁ……せっかく勝負下着たくさん持ってきたのにな。
……ところで、どこまでは許してくれるんだろう?
ふざけてる振りしてイッチーのおっぱいを揉むのはセーフかな?
下は……無理だよね。
キスも結構ギリギリ? でも、最近はアイドルグループも女の子同士でキスしたりしてるし、本気にならなければ大丈夫かも?
それに、イッチーは見られると興奮しやすいし……案外、織斑先生の目の前でじゃれつくだけでイケるかもしれない。
ふふふふ。いつもと違うイッチーが見れそうだねっ!

すぱぁん!

「痛っ!? せ、先生!? 私、何もしてない!」

というかどこから出席簿を取り出したの！？
……まさか、水着の中から？
四次元バストー！　みたいな感じなのかな？

「不穏な気配……もとい不純な臭いがした」
「え、冤罪だ！」

すぱぁん！

「というか二木、お前は教師に対しての態度がなってないな。教育的指導が必要だな」
「ちょ、まっ、待って先生！　大人しくする……しますから！」
「これは、いわゆる見せしめ的な部分が大きい。諦めるんだな」
「そんなぁ……」

どなどなどーなーどーなー
……不破ちゃん戻ってきてぇ！

◇

ゴォォォォォ、という音をさせながら走るバンに乗って花月荘に向かいます。
運転手はやはり先ほどの看護師さんです。

「……あの、病院から離れてもいいんですか？　一応私にも足はあったのですが……」
「ＩＳでしょ？　あんまり外で使っちゃだめじゃないの？」
「あれ……知っていたんですか？」
「ウチはＩＳ関係で怪我した人を受け入れるための病院でもあるの。

さっきのお医者サマの妹がＩＳ学園の卒業生だったとかで」

そうだったんですか。

もしかするとあの病院があるから臨海学校の行き先も花月荘だったのかもしれませんね。

あまり状況などをしつこく聞かれなかったのもＩＳ学園関係だったからですかね。

「でも、あの学園。私も入りたかったなぁ」

「目指していたんですか？」

「まぁね。ＩＳの技術を学べば医療にも転用できると思ってたから……残念ながらＩＳの適性が全くなくて受験資格も貰えなかったんだけど」

ＩＳ学園にいると忘れがちですが最低ランクの適性Ｃでも相当珍しいんですよね。この看護士のお姉さんのように適性が全くない人の方が普通なんです。

でも、適性があっても自慢できるようなことではありません。

むしろお姉さんのように人を助けるため、というような目的を持っていた人の方がよほど立派に思えます。

もちろん高校一年生で目的を持っている人の方が少ないのは分かっていますけどね。

大人っぽい雰囲気は見た目や所作ではなくて、考えて生きてきたという経験からなのかもしれませんね。私も頑張りましょう。

「なぁに？　何か気になるの？」

「あ、いえ！」

バックミラーごしに私がお姉さんのことを見ていたことに気付いたようです。

考えていたことが魅力なんていうしょうもないことだったので恥ずかしくなってしまい、つい視線をそらしてしまいました。
お姉さんのようになれれば、私も自分に自信を持てるでしょうか……？

「そういえば、体の傷はなんで？」
「っへ？」
「ＩＳってさ、そんなに危ない目に遇うようなものなの？」
「いえ、ＩＳは操縦者が命の危険に瀕していない限りはシールドエネルギーのおかげで肌に傷が付くことすらないです」
「じゃあ、不破さんは余程危険な目にあったことがあるんだ」
「そういうわけでもないのですが……まぁ、私がバカだっただけです」

あの時シャルを庇わなかったとしてシャルが死ぬことはおろか、怪我をすることすらなかったでしょう。
昏睡状態に陥りはしたでしょうが、それでも数時間で目を覚ます程度だったはずです。あの時シャルを守ったのは……感情に突き動かされた結果です。
シャルは感謝してくれていますが、私は必要のないことをしてシャルに、そしてラウラさんに一生消えない負い目を背負わせてしまいました。
あの出来事は……結局、誰も救ってはいません。

「いろいろあるのね……でも、その傷に負けちゃだめよ？」
「ですけど……やっぱりこんなの……特に背中のものは、」
「……運転席の後ろのポケットに白い封筒があって、それに一枚の写真が入ってるの。それ、見て」

えと……？

ポケットというとこれでしょうか？
封筒は小さくて、ちょうど写真が一枚入るかという程度の大きさでした。

「よし君、七歳……？」
「あ、それ裏面」

分かってますっ！
誰かの写真が移っているのだろうことは予想できたので特に身構えもせずひっくり返して――

「う……」

写真を取り落としかけました。
写真に写っていた男の子――この子がよし君なのでしょう――はにこにこと笑っているのですが、その身体は誰の目から見ても何かしらの、そして重大な病気を持っていることが明らかでした。
体中で菱形にひび割れた皮膚がめくれ上がり、身体の輪郭にも丸みを感じられません。皮膚の下は赤くなっていて、それこそ生の肉が露出しているように見えます。
余りにも私の常識を逸脱している惨い様相にかえって現実感を感じられず、そのめくれた皮膚がピエロのフリフリか魚の鱗のようだと思ってしまいました。

「私の弟。病名は言わないけど皮膚が硬くなっていく先天性の皮膚病に罹ってたの」
「……」
「その子と不破さんの傷痕は同じ？　……思った通りに言って」
「……いえ。私の方が何倍もマシです……ごめんなさい」

見下したり、醜いとか気持ち悪いとか、そんはことは思いたくないのですが……それでも、こんな風にならなくて良かったと考えてしまいました。

私の傷より、よっぽど酷いです……

「謝る必要はないの。それで、私の弟はどんな顔をしてる？」

「……笑っています」

よし君は本当に楽しそうに笑っています。

自分が背負っているものを気付いていない訳ではないはずです。それでも……それこそ彼よりかはよほど健常者に近い私よりも楽しそうに、純粋に笑っています。

「体温調節が難しくなる病気だから……去年、死んじゃった」

「ご冥福を……」

予想はしていました。

お姉さんが先程から過去形でしか話さなかったので……

「別にね、不破さんに火傷程度でなんなの？　なんて言いたいわけじゃないの。女の子にとって肌は大切だしね。でもね、できれば私の弟みたいに自分の背負ったハンデもものともしないくらい力強く生きてほしいの。それは、私が看護師やってる理由でもあるの」

「それでも、この傷が醜いのは見た目だけではないですから……」

人には見えないでしょうが、これは罪の証（あかし）で罰の徴（しるし）です。見た目の醜さ以上に私の心の醜さを象徴しているんです。

「あぁ、数年前のフランスで起きた小学校が全焼した事故ね……ごめんね。少し調べちゃったの」

「……火元の教室で唯一生き残ったのが私です」
「一人だけ生き残ったから申し訳ない？」
「いいえ、私も生き残るための努力をしましたから」

誰も、私も死ねばよかったとは思っていないでしょう。
亡くなった生徒の母親は私が生き残ったことを喜んでくれました。
私が代わりに、と言われたこともありましたがそのあとで謝ってもらえましたし……
ですが、

「ですが……私は誰かを助けられたのに、逃げ出した気がします。あの火事を調べていたら、そんな風に、」
「そんなに簡単に人は助けられない。状況的に助けようとすることはできたかもしれないけど、それで助かるかは別。医者と同じようなものよ」
「お姉さん、しっかりしてますね……」
「こんな格好してるからってバカ女だと思ったら大間違いよ？」

……人は簡単には助けられない、ですか。
私は思い上がっているのでしょうか？
私になら助けられたはず、という風に……あの火事の時はまだ九歳。自己弁護のようになってしまいますが、思っているほど出来たことは少なかったのかもしれません。
……それに、今更ですよね。
あの火事の責任を感じ始めたのは学年別トーナメントの時からです。
自己嫌悪のあまり、私は自分を悲劇のヒロインにしていなかったでしょうか？
どちらに転んでも、私は最低の女かもしれませんね。

「それに、あの火事はガス爆発でしょ？　多分、本当に助けられなかったわ。ガス爆発の現場なんてレスキュー隊員だって二の足踏むんだから」
「……受け入れられはしませんけど、その可能性もあることは覚えておきます」

もっと早く、誰かに聞いてもらえばよかったのでしょうか？
……いえ、きっと親しい相手には何を言われても私は聞かなかったでしょう。
私を気遣って出てきた言葉だと思いこんで、心の中で否定すると思います。

「ありがとうございます。少し、楽になりました」
「どういたしまして。これが看護師の仕事だからね……不破さんも看護師なってみない？　可愛いと思うわよ？」
「え、いえ……そんな大胆な格好は似合わないと思うので……」

あ、でもおじいちゃんおばあちゃんには好かれる自信があります！
このロリ体型を活かして孫のように可愛がってもらえると……涙がでそうです。

「そうやって外見から判断するのは間違いよ？」

……分かってますけど、お姉さんだと本当にイメクラの人にしか見えません。

「それに、私はケーキ屋さんになるんです」
「あら可愛い」
「む、バカにしてますね？　今度病院にホールで送りますからお皿とフォークとナイフを用意して待っていてください！」

「楽しみにしておく……ほら、もう着くわ」

薄暗くなった窓の外に海が見えてきました。

人がはしゃいでいる声も聞こえるので既に花月荘の近くまで来ているのでしょう。

……今回のこともありますし、本気で泳ぐ練習をしてみましょうか？

ただ、誰かに協力してもらわないと無理ですね。

「はい、到着。臨海学校楽しむのよ？」

「はい。いろいろありがとうございました」

「だから、これもシ・ゴ・ト」

「送迎は看護師さんの仕事ではないかと……縁があればまた、」

「看護師と医者とはさっさと縁切らないとダメよ？　私達も同じ患者さんの顔なんて見たくないわ」

……確かにその通りですね。

彼女たちに会うにはまた危険な目に遭わないと無理ですから。

「では、もう会わないことを願いましょう」

「そうね。さよなら。元気でね？」

最後にハグをして、お姉さんの胸のボリュームを測った後で花月荘に向かって歩き始めます。

……９５のＦですか。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．５（前書き）

待たせてしまったので１２時更新！
ここがアリサにとっての転機

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．５

ラストサン隊が動き出してからは段々と占領された都市や地域なども開放していって、三割程の国土を回復したと言えましょう。
今日の戦闘は、本来オーレリアのものであった海域を再び手中に収めるための空戦。
すれ違い様に敵機の尾翼に手刀を落とします。

「……一」

さらに一機目の後ろに隠れるように飛んでいた機体の尾翼をもぎ取り、遠くに飛んでいる機体の尾翼に向かって投げつけ……撃墜ました。

「これで三……」

破損させた機体が爆発したりしないかを心配しながら、私に向かって飛んでくるミサイルを妖精の加護（フェアリーダンス）で推進部と起爆装置を破壊、それを掴み取って、やはり尾翼に向けて投げます。

「四っ！」

最後の一機も上から飛び乗るようにして襲いかかり、尾翼だけを破壊して離脱しました。
……これで、敵部隊を全滅させたはずです。

「こちらガーリートーク。攻めてきた部隊を、」
「嬢ちゃん！　敵にケツ見せてるんじゃねぇ！　狙われてる！」

え……

ハリスさん――オランジェの声とほぼ同時にミサイル警告音（アラート）が鳴り響きました。

ロックオンからミサイル射出までのタイムラグは僅か。

完全に油断していた私は有効な回避行動をとることが出来ず、

「……もらってくぞ」

……私とミサイルの間にミハエルさんが割り込みました。

ミサイルは間に割り込んだミハエルさんの機体を追尾し始め……

命中しました。

「旦那ぁ！」

「……ふむ。ハッチがイカれたか。オランジェ！　俺達の任務を忘れるなよ」

「んなことよりどうにか出れねぇのかよ!?」

「無理だな。ビッチ！　次はお前が隊長だ」

「……了解」

……ハッチがイカれたということはベイルアウトもできず、戦闘機と共に墜落する以外に道はないということです。

下は海なので運が良ければ墜落しても水がクッションになって死なないかもしれませんが、死ななかったとしても冬の海です。数時間以内に救出できなければ低体温によってやはり……そしてオーレリアには長時間、行方不明になった兵士を捜索するほどの余裕はありません。

……余程運が良くなければミハエルさんは……

「ガーリートーク……」

「はい……」

「これは戦争だ。気にするなとは言わないが、まぁ次に活かせるようにしろ」
「……すぐに助けに、」
『……ラストサン隊。さらに敵の増援を確認した。迎え討ってくれ』
そんな……！
私なら、ミハエルさんを確実に助けられるのに！
「行け、ガーリートーク。この戦争はお前にしか終わらせられない」
「ですが……」
「お前がこれまでのように甘い戦い方をするなら、ラストサン隊はお前一人になるぞ？」
……私のために、他の二人も？
「選べ。その二人を殺して、いずれ敵兵も殺さなければならなくなる道か」
「……」
「敵兵を殺し、多くの仲間を生かす道か……タイムリミットだな」
「そんな、」
「老兵はただ去るのみ。ラストサン隊、健闘を祈る」
最後に無線から着水の音だけが聞こえて……やがて切れました。
「オランジェ、ガーリートーク……行くわよ」
「……了解」
「っ……了解しました」
私のせいで、ミハエルさんは……

48. Ils partent de parti.（前書き）

「宴から離れて二人」

お待たせしてしまったので１２時更新です！
一日の香辛料は変わらないので意味ないですけどね！（

あと遅くなりましたが９００００００ＰＶと９００００ユニークありがとうございました！

48. Ils partent de parti.

「七時四十分……えと、夕食の時間ですね」

いわゆる臨海学校の手引きを確認してみると七時半から夕食だそうですが……大広間三部屋をつなげたところってどこですか！？

えっと、ここが鶴の間の前で、行かなきゃいけないのは牡丹の間から始まる三部屋ですから……私、地図読めないんですよね。えっと、私が向いているのがこっち向きですから、鶴の間が左手にあって……こっち？

「右に三部屋、左に曲がって二部屋ですから……ここですね！」

がらっ

「うん？　あー！　あっちゃんだー！　同じ部屋に泊まるなんて奇遇だねー！」

「ここ一人部屋じゃないですか！　というか同じ旅館止まってたんですかっ！？　あと部屋間違えただけです！」

予想外の先客――束さんに驚く暇もなくボケられたのでツッコミを入れてしまいました。うん、私、反射神経が良いいのかもしれません。

部屋でくつろいでいた束さんは浴衣を着崩していて……でも頭のウサミミのせいでセクシーにも思えないような状態です。

「ごろーん！」

「……そんなゆるゆるの浴衣で動くと脱げますよ？」

「大丈夫だよー。あーちゃんしかいないしねー」

「そっちの意味の大丈夫ですか……でも丁度二人きりで話したいと思っていたのでちょうどいいです」
「ふふふー、あーちゃんがこの部屋に来たのは必然だったのだー」

……織斑君をＩＳ学園の試験会場に行かせたのも束さんだという話ですし、私がここに来てしまったのも私が地図を間違ってしまったからではないんですね。きっと束さんが私の分の旅館の案内図だけ書き換えていたに違いありません。
・……最初に奇遇だとか言っていたのは忘れましょう。
私は地図が読める子なんです！

「それで、用事って何のことかな？　ゴーレムのこと？」
「ゴーレムって言うんですか？　……やっぱりクラス対抗戦の黒い無人機は束さんの仕業だったんですね」

織斑先生にも他の先生にも言っていませんが、あの無人機にはＩＳコアが内蔵されていました。
織斑君がゴーレムに突っ込んで相討ちになりいざこざが起きている間に、織斑君に両断された無人機からコアを抜き取ったからです。
ゴーレムに内蔵されていたのは通常刻印されているはずの１～４７６のコアナンバーがない非正規ＩＳコアでした。そうなると束さんが関わっているのは間違いありません。

「私以外にＩＳコアは作れないからね」

……ということです。
恐らくあのゴーレムは独立稼働（スタンドアローン）ではなく束さんによる遠隔操作（リモートコントロール）だったのでしょう。
実際にゴーレムと戦った鈴ちゃんと織斑君の話ではゴーレムは二人が話している時には動かなかったそうです。束さんとしては二人

の関係が気になったか、作戦を立てるのを待っていたのでしょう。

「でも、なんでですか？」

「んーとね。いっくんのため」

「織斑君の？」

なら、なぜ織斑君を傷つけるようなことを……？

「第四世代型ＩＳの特徴は戦闘経験から独自に進化し続けていくことなんだよ。これはコア自体の設定じゃなくて、展開装甲の効果。最初はコアの設定を弄ってリアルタイムでの変形（シフト）を達成しようとしたんだけど、こればっかりは天才の私でも出来なくてね」

「……え？」

リアルタイムでの変形（シフト）ってもしかして……カゲロウの？

ですが成功しなかったって……？

「気付いた？　あーちゃんのＩＳのコアは部分的に私の改竄が施されてるの。私の時は成功しなかったんだけど……そのコア、純利用時間が一万時間を超えてるから、それが原因でコアによる変形（シフト）が有効になったのかもね」

「……」

「うん、どこで間違えたのかは分からないけど打ち込んだ式に間違いはなかったんだね。さすが私だよ。あぁ、あのドイツの候補生が乗ってた第三世代型に積まれてたＶＴシステムも第四世代の雛型になったんだよ」

「どういうことですか？」

「第四世代型は装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指したものってのは知ってるかな？　私は展開装甲を使ってそれを成立させたわけだけど……ＶＴシステムで何種類かのＩＳ

のデータを打ち込んでおいて、それを使い分けられるようにすれば第四世代と同じように全領域・全局面展開が出来ると思わない？」
「なるほど……」
「だから、あーちゃんのＩＳはＩＳ（ソフト面）コアでは第四世代型のプロトタイプともいえるね。機体（ハード）は第二世代型止まりだけど。まぁ二・九世代かな？」

なるほど……三世代ほどの出力はないものの二世代ともまた違うとかそういう感じですかね。
束さんの話を総合すると、どうもカゲロウに第二形態（セカンドシフト）はないような気もするのですが……それとも変形が止まった時点が第二形態（セカンドシフト）なのでしょうか。

「それで、学園を襲撃した理由を聞いていませんよ？」
「誤魔化せるかなーと思ったんだけどなぁ。さっきも言った通り第四世代の白式は、」
「白式が第四世代だったことが既に初耳ですけど」
「うん？　そっかそっか。まぁそれは置いといて、白式もあーちゃんのと同じで戦闘経験から進化するの」
「だから、不慮の戦闘をさせることでその経験を？」

でも、そこまでして織斑君を鍛える必要はあるのでしょうか？
どこの国の代表校お補正にもなっていない織斑君は戦争になんて行かないでしょうし、大人しくしていれば危険な目に遭う可能性なんて……あ

「唯一の男性パイロット……」
「そういうこと。いっくんが望むにせよ望まないにせよ、ＩＳを放棄するにせよしないにせよ、必ずいっくんを狙う奴らはいるから……だから、いっくんが火の粉を振り払えるようになるまで鍛えない

と」
「……なら、最初から織斑君を学園に入れなければよかったじゃないですか」
最初からＩＳが動かせることが世界に公表されなければ……それなら織斑君はそれまでどおり一般人として生活できたはずです。今、彼がいる場所が不幸だとは思いませんが、関わる必要が無い世界に踏み入れてしまったことは確かなのです。
「ううん。いっくんはＩＳに乗れなきゃいけなかった……ちーちゃんの弟だからね」
「織斑君を人質にするような団体がいるんですね？　……亡国機業（ファントム・タスク）ですか？」
織斑先生はＩＳ操縦者の中では最強の存在です。
亡国機業（ファントム・タスク）が彼女の力を手に入れるとしたら……織斑君を人質にとって脅迫するしかないでしょう。
それでも第二回モンド・グロッソの時は失敗していたようですが。
「……知ってるんだ。あーちゃんも粉かけられた事あるの？」
「いえ、フリーの技術屋だった父が彼らの存在に詳しかっただけですよ。何度かスカウトもされていたとか」
今なら分かりますが、パパが目立たないように自分が開発した技術を企業に売っていたのも亡国機業（ファントム・タスク）の目から逃れるためだったのでしょう。
デュノア社に入ることを決意したのは企業が守ってくれるからというのもあるでしょうが……私のわがままのせいでしょうね。
「まぁ、それも私がＩＳを公表しなければよかったんだけど……ど

うしても皆で宇宙に行きたかったんだよね」
「……わがままですね」
「そんなこと、世界中の人が知ってるよ？」

そうですね……
私だって会う前から自己中な人だって決めつけていて、実際その通りだったわけですし。
……想像よりも随分と子供らしい自己中（わがまま）でしたけどね。

ぐぅ～～～～

「と、とりあえず、このコアの処分は任せます。あんまり派手に作り過ぎると外野が騒ぎますよ？」

コアの数が増えても私は別に困りませんけど、国や企業はそのコアを手に入れようと躍起になるでしょうからね。
特に、先ほどの話に出ていた亡国機業（ファントム・タスク）なんて実力行使も辞さないでしょうし。

「ん、気を付けるよ……ご飯、ここで食べる？」
「えと……お邪魔します」

やっぱり聞かれてますよねー。
しょ、しょうがないじゃないですか！
お昼前に溺れちゃったので昼食も食べてないんですから！
……何も言わずに私を見ながら淡々と料理を注文する束さんの優しさが身にしみます。
きっと同じ大人の女性でも、織斑先生だったら人に心配かけた割にはお気楽な胃袋だな、とか言うにきまっています！　……そもそも心配してくれていますかね？　いますよね？

「でも、本当に宇宙に行くことが目的で開発したんですね。束さんの自由が保障されればどうでもいいんだと思っていました」
「私は自分の自由なんて求めてなかったんだけどな……本当に、ただ四人で宇宙に行きたかっただけ。ＳＦの世界の兵器なんかを使えるくらいのエネルギーも成層圏を突破するだけのものだったのに兵器転用されちゃって……」
「なんで放っておいたんですか？」
「皆、戦争よりも宇宙に興味があると思ったんだ。だから放っておいてもそのうち兵器じゃなくて宇宙開発のために使われると思ってたのに……」

……本当に子供みたいな人だったんですね。
自分がそうだから皆も宇宙に行きたいはずで、宇宙より戦争に興味があるはずがないと考えていたんですね。戦争で生まれる経済効果や利権などは考えていなかったのでしょう。
……真空、無重力、その他の衝撃から操縦者を守るのはエネルギーシールドで、膨大なエネルギーは長時間航行を可能にするためのもの。
そう考えてみると、確かに兵器を装備しなければ宇宙に行けてしまいそうです。

「一緒に宇宙に行きたい三人は織斑先生、織斑君と箒さんですか？」
「うん。あっ！　あーちゃんも一緒に行きたい！？」
「え、えぇ、まぁ機会があれば……」

宇宙と海ってどっちが怖いですかね？
……そんなことよりも気になることが一つあります。
織斑君には白式を作っておいてどうして篠ノ乃さんは量産型を使っているのでしょう。この間の電話は私の記憶が正しければ紅椿が

篠ノ乃さんに渡る契機だったです。
どうしていまさら……？

「その顔は、箒ちゃんが量産機を使ってる理由が知りたいって顔だね？」
「えっ！？　……天才は読心術までできるんですね」
「天才だなんて照れるなあ。本当のことだけどね！　……箒ちゃんは、危ういから」

危うい？
どういうことでしょう。
確かに立場としては織斑君と同じくらい束さんの妹である篠ノ乃さんも危ないとは思いますが……それなら余計にもっと早い段階で紅椿を与えているはずです。

「どうして今、紅椿を渡すんですか？」
「……」
「あれ、顔に何かついてます？」

紅椿の名前を出した途端、束さんが私をじっと見ました。
その瞳から感情は伺えません……どちらかというと理科の実験で解剖されている魚を見るような好奇心を含む無感動でしょうか。

「そろそろ使えるかなと思って。こう言っちゃなんだけど、箒ちゃんは昔から危ない子だったんだ。竹刀を貫えば人を叩きたくなる性分とでも言えばいいのかな。自分の力を不必要に誇示したくなる、そんな子なんだ。多分私のせいで箒ちゃんの存在価値が霞んでると思いこんで、それで自分を必死にアピールしようと思ったんだと思うけど……」
「なるほど……」

確かにしょっちゅう竹刀や木刀で織斑君をどついていますね。
私が篠ノ乃さんと話すきっかけになったのも彼女が織斑君をわざわざ危険な業で投げたからですし。

「その、平気だと思った根拠は？」
「箒ちゃんが自分から私に電話をかけてきたのって初めてでね。箒ちゃんは自分がいっくんの力になれなかったことを悔しがって、それで専用機を欲しがった。だから一番白式の力になれる紅椿を作ってあげたんだ」
「それだけですか？」
「あ、ううん。今のは無駄話。箒ちゃんもさっき私が言った自分の悪癖を自覚してね……だから自分から力を求めるな行為を避けてる。その箒ちゃんが自分から力を欲したってことは……ちょっとは期待してもいいよね？　お姉ちゃんだもんね？」

篠ノ乃さんの覚悟を信じたということですか……焦って力を求めた篠ノ乃さんが飲み込まれなければいいのですけど。
……ＩＳは好戦的な人物に乗せるのは危険です。私のように、というのも可笑しいですが、臆病な人間が乗るのが一番いいと思うんです。
そうじゃなければ、ＩＳは抑止力を超えて兵器になってしまいます。

トントン

「失礼します、お夕食でございます」
「はーい。入っていいよー」

ふすまが二度叩かれ、女将さんと女性二人が現れました。

その手には食事を載せた御膳と……国士無双？　あの、どう見ても一升瓶なのですが……清酒ですよね？

「お酒は頼んでないよー。というか私は飲めないし、あーちゃんも未成年だし」

おぉ……束さんが常識人です。

織斑先生だったら間違いなく飲んでます。しかも生徒に口止め料として一品追加した上で飲むに違いありません。

「ああ、サービスと思ったのですが申し訳ございません。おさげいたします」

「あー待って待って！　今日さ織斑千冬って子がきてるでしょ？その子の部屋に持っていってあげてよ」

「かしこまりました」

……んー織斑君と篠ノ乃さんも幼馴染なんですし、織斑先生と束さんもやっぱり仲がいいんでしょうか？

なんだか当たり前のように頼んでいたのですけど。

なにはともあれ飲酒させられなくて良かったです。楯無先輩やシャルの話では私は酔っぱらうと危険らしいので……

「わー、カワハギだよー。私これ好きなんだよねー。うまうま」

「ちょうど旬ですからねー。鮮度もよくて、美味です。キモの方も臭みや苦みも無いですし」

美味しいものを食べるとやっぱり幸せになりますよねー……どれどれ、次はこの山菜の和え物を。イノコズチとトラノオですね。夏の山菜と言えばアカザもありますが……海水浴客が多いので控えているのでしょう。紫外線に過剰に反応することがあるようですし。

このお鍋は……昆布のだし汁に生姜で軽く下味を付けて最後に山椒を加えたんでしょうね。ハモをお鍋にしてしまうのは珍しいような気もしますけど、これはこれでいけますね。

この小骨の食感を嫌う人もいますけど……人生の半分を損していると思います。そんなに食べる機会はないので言いすぎでしたね。

「あーちゃん、美味しそうに食べるねー」

「えっ!?　あ、いえ、別に食いしん坊とかそういうわけではないんですよ!?　ただ美味しいものは美味しい顔して食べろと育てられたので、」

「いーよいーよ。美味しそうに食べる人と一緒だと私も美味しく感じるからね」

それならその我慢しないでいいんだよ?　みたいな目を止めて下さい。

し、仕方ないじゃないですか!　美味しいんですから!

「んー、もうちょっと頼もうか?」

「えっ、じゃあ何にしましょうか!　……あ、いえ、その……」

ち、違うんですって!

どうせなら二人ともが好きなものを一緒に頼んだ方が無駄が無いと思っただけでその……

「ふふ、あーちゃん、一緒に選ぼっか?」

「……はい」

結論から言いますと……とても美味しかったです。

お昼からずっと続いていた空腹感がそっくりそのまま幸福感に変わってしまいました。

「さ、て……そろそろ織斑先生の部屋に行かないといけませんね」
「そっか、ちーちゃんによろしくねー」

戻った時の報告が遅い、なんて怒られてしまうかもしれませんね。
でも、さっきのお酒のおかげで気分良くなってるかもしれませんし、勇気を出していきましょう！

「あ、そうだ。あーちゃん耳貸して？」
「はい……え？」

さっきの話の続きなんでしょうけど……それは危険です。

48. Ils partent de parti.（後書き）

束さんのなつき度が尋常じゃねぇぞ！？
原作からの情報はもはや献立のみ（
たった四行から妄想を広げてみました。

ところで同時に二話纏めているのでフラッシュバックの方に気付いていない人いるんじゃないかと不安な最近です（

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．６（前書き）

こっちも段々クライマックス
始めるの速すぎてタイミングミスった気ががが（

「嬢ちゃん、話がある」

作戦終了後しばらくしてハリスさんが唐突に言いました。

いえ……内容の半分は想像できるので唐突とも言えないでしょう。

ミハエルさんの捜索は日暮れまで続けられ、その後の再捜索はないようです。ミハエルさんが墜ちてから既に二時間弱が経過しているので、見つかったとしても……

「なんで、やらなかった？」

「……」

ミハエルさんが墜ちてからも、なお敵機の尾翼だけを破壊していた私に文句があるのでしょう。

ミハエルさんの墜落で私が変わることを期待していたのかもしれません。

「おい、なんとか、」

「……私、まだ十五歳なんですよ……？　数ヶ月前までは普通に学校に通っていて、好きな子のことを考えて落ち込んだりしていたんですよ？　いきなり戦場に叩き出されて、殺せなんて……できるわけないじゃないですか！」

ＩＳに乗っていても、人を殺せる格闘術を使えても、それで人を殺す覚悟なんてありませんよ……！

ＩＳは兵器だから、乗るにはその覚悟が必要なことなんてずっと前から分かってます。

でも、理解したからといって覚悟ができるわけでもないでしょう

……

このまま、流されて人を殺してしまったら……殺人犯となにも変わりません。

……だって、私にはこの戦争で人を殺してまで勝ちたい理由がないんですから。

「おい、学校いって、好きな子もいたんなら守りたい奴の一人や二人いるだろ？　嬢ちゃんが甘いことやってるとそいつらまで死んじまうかもしれないんだぞ？　そうなったとき、自分を許せるか？」

「……この世界に、守りたい人はいません」

シャルもセシぃも鈴ちゃんも三人娘も先輩も、この世界には存在していないんですから……

ハリスさんは私の周りの人が死んだと思っているかもしれませんね。

「それでも何か、」

「私は！　……私は、知らない誰かのために人を殺せるほどの正義感を持っていません。死ぬなら勝手に死ねと、そう言えます」

それでも戦っているのは、そういう契約だからです。ここで逃げ出したら、向こうでの私の周囲に累が及ぶかもしれません。

タサキさんは優しそうな方ですが、他の神様が同じとは限らないんですから。

ある意味、人質を取られているようなものです。

「あー！　やってらんねぇ！　なんでこんなクソガキを命懸けて守らなきゃならねぇんだよ！」

「……は？」

「あんた以外の三人の任務はあんたの機体を撃墜させないことだけ

なんだよ！　それが勝利への一番の近道だからってな！」

……つまり、ミハエルさんもそのために？

「むしろ嬢ちゃんがいなければこの戦争には勝てない。それなのに敵兵も殺したくない？　仲間は死んでもいいのかよ！？」

「……私が殺さない分には誰が死んだって同じことです」

私が殺したくないだけなんです。

「確かに、私のＩＳは一機で戦況をひっくり返せるだけの力を持っています。私だけで、この戦争を終わらせることも不可能ではないでしょう」

「なら、」

「やれと言うんですか？　何百人もの人を殺せというんですか？　そんなに多くの人の命を背負って、どうして生きていけると思いますか！」

この前のスパイとミハエルさんだけでも重くて潰れてしまいそうなのに……

これ以上は無理ですよ。壊れちゃいます……

「俺だって何十人と殺してきた！　どの戦闘機乗りだってそうだ！　空に出た以上、殺したくないなんて甘えは通用しないんだよ！」

「でも私には殺さないで墜とす方法があります！」

「そうしたって、半分以上は死んじまってんだよ！　嬢ちゃんは既に何人も殺してる！」

「知ってます！　でも、それは私のせいじゃない！　直接の原因は私じゃないんですから……」

自業自得です……

気にしていないわけではありませんが、実際に死んでいるところを目撃したわけでもないんですから私が気にすることではないと……そう言い聞かせています。

「……嬢ちゃんが百人殺せば、千人以上が助かる。それでも殺せないか？」

「……戦争中はいいです。でも戦争がなくなってしまったら、私はただの大量殺人犯です。誰も心を開いてくれません」

「それは錯覚だ……人間はいちいちそんなことを気にしない。それに勝てば大量殺人犯じゃなくて英雄だ」

「そんな肩書きはいりませんっ！」

もう、話したくないっ！

ただでさえ、人に嫌われるような傷があるのに、その上、何百人と殺したなんて……誰が、対等に見てくれるんですか……？

怖がらない人なんて、いるわけがないです。

「私だって、助けられるなら助けたいですよ……！」

自分の部屋に飛び込んで、固いベッドに飛び込みます。

……私の行動で助けられる人がいるなら助けたいです。でも、私の未来と天秤に掛けると途端に選べなくなります。

自分の未来に影を落としてまで、この世界で戦う意味はありますか？

「……悩んでますね」

「えっ？」

私のものではない声が響きました。

49. Inconscient et conscience（前書き）

「無自覚と自覚」

最初と最後だけが描きたかった！

49．Inconscient et conscience

「アリサ、遅いなぁ……」

織斑先生が受けた連絡では七時半過ぎに到着するって話だったんだけど、時計の長針はもう五十分を回ってる。

やっぱり無理して診断を誤魔化して、それで戻ってくる途中で倒れちゃったとか？

それなら、のんきにご飯なんて食べてる場合じゃ……

「シャルロット？　大丈夫か？　……シャルロット？」

「え！？　あ、一夏、なに！？」

「いや、シャルが心ここにあらずだったからさ」

「あ、平気だよ。うん、ちょっと考え事」

……別に、僕だけがぼーっとしてるわけじゃない。一組の人は皆アリサのことを心配してるし、二組の人もそんな感じ。

リンに聞いた話だと二組の人とアリサは僕が転校してくる前にあったクラス対抗戦の時から仲良くなり始めたとか。

こんなお通夜みたいな雰囲気で食事をするのは旅館の人にも申し訳ないけど……無茶しやすいアリサだから顔を見るまで安心できない。

……アリサに無茶させてるのは主に僕みたいだけど。

理由はまだ分からないけど、無茶の原因が僕なら、無茶させないこともできるはずだって思ってたのに今回もまた……

「――でしょー！？」

騒いでる生徒ももちろんいる。アリサとはあんまり関わりがない

生徒なら仕方ないとも思うけど……なんでか、その子たちの会話だけは僕の耳に入ってきた。

「なんかさ、ひとりで泳ぎの練習して溺れたらしいよ？　もうね、私だったらそんなの皆に知られたら恥ずかしくて自殺ものだよね！」
「うっわー！　マリ不謹慎ー！　でもその不破って子、フランスの代表候補生だったらしいよ？　あと一組でボールペンを生徒に突き刺したのもあの子だとか。あーあと、この前、廊下を血塗れにしたのもそうなんだって」
「まじで？　どうしよー！　こんなこと話してるのバレたら殺されちゃーう！」

あ、ラウラが立ち上がった。

「お前ら、よくもアリサのことを馬鹿にしてくれたな」

分からないな……
なんであんな話で盛り上がれるかもそうだけど、なんでこんなに怒ってるんだろう――

「なんならアリサがお前らを殺す前に」
「僕が殺してあげようか？」

――僕は。

「デュノア！　ＩＳを解除しろ！」

この後、僕とラウラは織斑先生にすごく叱られて、アリサも結局現れなかった。
……アリサ、どうしたんだろう。

◇

「さて、束さんの部屋から出てきたもののここは結局どこなのでしょう？」

なんだか随分遅くなってしまいました。

織斑先生の部屋の場所は分かっているのですが現在位置が分からないことには始まりません。

たたたたたたっ

む、誰か走ってきますね。

これで織斑先生の部屋への行き方を聞けますね。べつにほっとしたりしてませんよ？　ただ、手間が一つ省けると思っただけです。

「あっ、アリサ！」

「あ、誰かと思ったら鈴ちゃんですか」

「鈴ちゃんですか、じゃないわよ！　無事だったとは聞いてたけど……それでも心配だったんだから早く顔見せなさいよ！」

「あぅ、ごめんなさい……」

「なんで照れてんのよ」

だって、面と向かって心配してたなんて言われると嬉しいじゃないですか。

いなくなって心配したってことは、鈴ちゃんにとって私は近くにいる人ってことですもんね？

普段の会話から分かることじゃないので……本当に嬉しいです。

「あ、鈴ちゃん、織斑先生の部屋に行きたいんですけど……」

「ん、今ちょうどシャルロットを呼んでから向かうから付いてきなさいよ。私達も部屋に呼ばれたから」
「分かりました」

私達って要するに専用機持ちってことですよね？
私がいない間に何かが起きたのでしょうか？　そういえば鈴ちゃんも焦ったような顔を……

「アリサはシャルロットのことがすきなのよね？」
「はい……えぇ！？　そ、そんなことないですよ！？」

鈴ちゃんが何気なく聞いてきたから、つい素で答えちゃったじゃないですか！
むむむ、鈴ちゃんも油断ならないですね。

「アリサが女の子も好きになれるってことを知ってる人はみんな気付いてるわよ？」
「なななな、なにをそんな……」

……自分でも目が泳いでいるのが分かります。カナヅチなのに目が泳ぐとはこれいかに……むぅ、こんなところに織斑君の影響が。
こんな寒いギャグを言うようなセンスではなかったのですが……

「……まぁいいけど。それで、そんなアブノーマルなアリサ的に近親相姦ってどうなの？」
「ん、んー……私も弟がいるので可愛らしいとは思いますが、でも確かに弟以上の男性以外と付き合う気にはなれませんし……ナシとも言い切れませんね」
「そ、そうなんだ……って弟！？」

鈴ちゃんは織斑先生と織斑君の関係を疑っているんですよね？
それなら私と弟がモデルケースになると思ったのですが……

「いや、そうじゃなくて、アリサって弟いるの！？」
「ええ、今は四歳の可愛い盛りですよ？」

……とはいっても武術の才があるようで、この間ママから電話で飛燕十字蔓（ひえんじゅうじかずら）が何となくできるようになったとか。
我が弟ながら末恐ろしいです。
ママも私の代で不破圓明流は途絶えると思っていたので嬉しかったでしょうね。

「名前は？」
「天羽（あもう）です。あげませんよ？」
「いらないわよ！」

弟は私のものなのでしばらくは私が可愛がります！
……ＩＳ学園は寮なのでもう全然会えていませんけどね。
あ、天羽、私のこと覚えてますよね？

「それで、何でいきなりそんなことを？」
「それがさぁ、さっき一夏と千冬さんの部屋の前に行ったんだけど、中から妖しい声が聞こえて……その、えっちしてるみたいな？　だから、もしかしたら一夏が振り向いてくれないのって千冬さんがいるからなのかなって……」
「あー、二人ともブラコンシスコンの素養はありますからね」

それにしても、ちょっぴり涙目の鈴ちゃんは可愛いです。
普段が勝ち気なため余計に美味しそうに……じゃなくてそそる……でもなくて、魅力的です。

「鈴ちゃん鈴ちゃん」
「ん？」
ちゅっ
「な、なななな!?　なんでキス!?　え!?　えー!?」
「デコチューくらいで動揺しすぎですよ。今の鈴ちゃんは私がキスしたくなるくらい可愛かったので平気ですよ。織斑君もきっと惚れちゃいます！」
「う……むー、アリサ！」
「はい？　ってわわ!?」
振り向いた瞬間、鈴ちゃんが飛びかかってきて押し倒されました。
そのまま鈴ちゃんは顔を近づけてきて……あ、やり返しですね！
ぺろ
「ひゃぁん!?」
「うわ、すごい声……」
な、ななな、なんで首筋をなめたんですか!?
というか、その玩具見つけたみたいな顔は……
「分かってるじゃない……いくわよ？」
目を輝かせないでください！
「ん、やぁ…ひゃん……す、吸ったらら め、らめですよぉ」
「かーわい♪　って、きゃっ!?」

「やり返しま、」
「すごい音したけどだいじょう、ぶ」

こ、ここでシャルですか！？
そういえば鈴ちゃんはそもそもシャルを呼びに来たとか何とか……
それよりも浴衣が乱れてる状態で絡み合ってる私と鈴ちゃんはシャルにはどう見えるのでしょう！？
少なくともシャルが思考停止しているように見えるのは私だけではないはずです！
……冷静になってみると浴衣もはだけて脱げてると行っても間違いではない状態になってますし……

「シャル、落ち着いてください。これは違うんですよ？　決して私達がニャンニャンしていたわけではなくて、」
「アリサ！」
「わぁ！？」

がしっどたん！

！？
なんで、シャルに押し倒されたんですか！？
というか、シャル、ブラしてないのに浴衣で四つん這いになると、その、胸が……

「痛っ！　……あの、シャル？」

指が、肩に食い込んでて痛いのですけど……？

「今まで、なにしてたの？」
「え！？　えと、遅れてしまったので皆さんとは別の部屋で夕食を」

「なんで到着してすぐに先生に連絡しなかったの？」
「その……織斑先生の部屋が分からなくて。あの、私、地図とか読めないんです。だから、その、えと……怒らないでください……」
シャルの顔が怖いです。
無表情なんですけど、その心の中で激しい感情が渦巻いているのが分かります。
シャルが怒っていると不安になって、きゅっと胸が締め付けられているみたいに痛くなります。
だから……怒らないでください……
「……いよ」
「ふぇ？」
「だから！　怒ってなんかない！　怒ってないの……ただアリサの顔を見たらすごく安心できて、でもやっぱり少し苛々しちゃって……」
ぽた
「冷たっ！？　……シャル？　泣いてるんですか？」
目の前にあるシャルの瞳が揺れています。
「どこか、痛いんですか……？」
ぎゅっ…
「きゃ！？」
「違うよぉ、アリサが無事で嬉しいのぉ……安心したら、勝手に涙が……」

いたた……
四つん這いの状態からシャルが無理矢理に抱き締めてきたので、シャルの肩が鼻に……鼻血、出てませんよね？
……私を抱き寄せて泣きじゃくるシャルは子供みたいで愛しいです。
背中に手を回して、なんとか宥めようとゆっくり撫でさすります。
私は、シャルの笑顔が一番好きです。
だから、早く笑ってくださいね？

「心配、してくれてたんですね？」
「うん……すっごく心配してた」

えへへ……やっぱり嬉しいです。

「シャルロットとラウラはすごかったわよー？　夕食中にアリサをネタにして騒いでた二人を殺しかけてたからね」
「リンっ！？　あ、アリサ！　そ、そんなことないからね？　確かにアリサのことは心配したし、あの二人のこともどうかと思ったけど、」

殺し……ってラウラさんはともかくシャルまでそんなことしちゃダメですよ！

「ま、二人がやってなくても私とセシリアが同じことを……ってそうだ！　二人とも早く一夏の部屋に！　千冬さんに呼ばれてたんだった」
「リン、それを早く言ってよ！　また怒られちゃうかも……アリサも早く行くよ！」

素早く立ち上がって、私に手を差し伸べるシャル。
その顔は泣き跡こそ残っているものの綺麗に微笑んでいて……やっぱり、シャルの笑顔が大好きです。
……ううん、少し嘘を付きました。
シャルのこと大好きじゃないです。
大好きじゃなくて、

「……愛しています」
「うん？」
「な、なんでもないです！」

……これが、愛なんですね。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．７

「タサキ……さん？」
「はーい。神様命融のタサキですよー！」

……どうしましょう。
テンションに付いていけません。
というか、付いていかなければならないのでしょうか？。
私としては是非お引き取りを願いたい気分なのですが……だって、いきなりラストサン隊が私を守るためだけの部隊だったなんて言われても……

「あのー、今回はですね。実は本当に申し訳ないと思ってまして。本来ならば初めての出張戦闘で殺人をさせることなんてないのですが、いかんせん人手が足りていなくて……」
「それで、何のようですか？」
「ドロップアウトも可能なことを伝えにきました。ペナルティーとしてこれまでの時間の半分しか返済時間としてカウントしませんけどね。どうします？」

……この世界から、逃げ出せると言うことですか？
ですが、そうしてもいずれ同じことをしなければならなくなるわけで……つまり、ただの問題の先送りですよね。
それでは、意味がないのではないでしょうか？
また、次も同じことに悩んで動けなくなるのなら、無理をしてでも時間を消費してしまった方が……

「今の不破さんは無理をしているように見えますよ？」
「……あの、私、逃げたくないです」

「ですが、このまま行っても殺せないままでは、」
「なので、人殺しへの忌避間を一時的に消せませんか？」
「……可能ですけど、同じことではないですか？」

確かに、殺したくないから逃げ出すというのも、殺すことになにも感じないようにすると言うのも逃避です。
逃避ですが、

「私は、殺さなければいけない戦場に耐えかねて感情を封印してもらうのではなく、これ以上友軍を失わないために敵兵を殺すのです」

ハリスさんたちの任務を聞いて、知りました。
もし、私が直接的に敵兵を殺さなくても、私を守るためにハリスさんとミシェルさんが死ぬのなら、それは私が殺したのと同じです。
あるいは、死ぬのが見知らぬ人なら大して気にもしないのでしょうが、ハリスさんとミシェルさんを知ってしまいました。
ミハエルさんが墜ちた時も辛くなりました。
未だに、英雄もただの大量殺人犯だとは思いますが……ミハエルさんの死を無駄にせず、ハリスさんとミシェルさんを助けられるとしたら……
きっと、この選択を後悔するでしょう。
人の命を背負って生きていくなんて、どうすればいいのか分かりません。
シャルの隣に立つことが出来なくなるでしょうし、泣いてしまうこともあるでしょう。

でも、仲間を犠牲にして、自分だけ綺麗なまま帰っても……その方が笑えなくなる気がします。

「タサキさん、お願いします。この決心が鈍らない内に」

この世界にやってきた瞬間から、何かを背負うことは決まっていたのです。

それが敵兵の命か、仲間の命か……敵であることを言い訳にしたいとは思いませんが、せめて誰かに感謝されていると錯覚できないとやってられません。

この選択をした時点で私は人殺しです。

ただの人殺しにならないためには……誰より多く戦果（命をうばっ）を挙げて、この戦争に勝利するしかありません。

「では、目を瞑ってください。すぐ終わります」

この世界のことを誰にも話さなければ……私は捨てられたりしないはずです。

「終わりましたよ？」

「……ありがとうございました」

私は今、何人の命を奪うことを決定されたんでしょうね。

願わくば、その数が少ないことを……

50. Marée et reflux du sensations. (潮の満ち引き)

「心の満ち引き」

私は甘くすると辛くもしたくなる病気らしいです
アリサ、正直すまんかった（
そんなことしてたら文章量がいつもの9割増しです

50. Mar?e et reflux du sensations.

「んっ、あぁん！　い、一夏さん、もっと優し、ひゃぁぁぁん！」

……

「だ、だめです、そこは、あぁん！　……い、いえ、き、気持ちいいですわ、あっ！」

セシぃ……中で何をしてるんですか！？

……というかナニをしてるんですか？

「あ、アリサ、か、確認してみてよ、お願いだから！」

「り、鈴ちゃんが気になってるんだから自分でっ！？」

「バカっ！　声大きいわよ！」

「むぐ、むーむー！」

鈴ちゃ、苦し……！

「鈴、不破の顔が青くなってるぞ？」

「ふん、イギリスのメスぶ……メス猫は喘ぎ声もはしたないな」

し、篠ノ之さん、助かりました……というか私が名前呼ばないからって苗字呼びに戻しましたね！？　いえ、構いませんけど。

というかラウラさんは今、セシぃのこと雌豚って言おうとしましたよね？

確かに、あの無駄に大きな胸部の脂肪塊は豚さんを想像させますけど！

……織斑先生と織斑君の部屋――通称、織斑部屋の前に集まって

ひそひそ話している赤面した五人……他の生徒からはどういう風に見えるんでしょうね？

「というか、時間を改めて来た方がいいんじゃないでしょうか」

私がそう提案した時、新たな声が部屋から聞こえてきました。

織斑君でもセシぃでもなく織斑先生の声です。

「ふん、歳不相応な下着だな。期待してたのか？」

さ、３Ｐ！？

やっぱり、一刻も早くここから離れるべきです！

シャルもそう思いますよね！？

「ん？」

「ですから、巻き込まれない内に……あれ？」

私、鈴ちゃん、ラウラさん、篠ノ之さんの四人全員真っ赤なのですが……シャルだけ動揺していませんね……？

あ、織斑君と普段からしているから慣れて……って織斑君、浮気じゃないですか！

殺します！

そして不能にします！

「いや、一夏って薔薇？　だからただのマッサージだと思うけど……」

「「「「……それだ！」」」」

さすがシャルですね。

私たちと違って冷静な判断です……あれ？

「薔薇ってどういうことですか？」
「男同士の人のこと言うんでしょ？　もやしさんが言ってたよ？　女の子同士は百合なんだってね」
もやしさん……あぁ、図書委員の紫（ゆかり）さんですね。
そっか、あの人、そういう人でしたね……
腐ってやがる、女子校生活が長すぎたんだ……とでも言えばいいのでしょうか？　いや、それだとむしろ仲間認定されて喜ばれそうですね。
仲間だと思われても困りますし遠くから眺めるにとどめましょう。
というか、私が聞きたかったのはそこではなくてですね。
「あの、彼氏が薔薇って困りませんか？」
「……彼氏って何の話？」
「いえ、ですから、織斑君とシャルは付き合ってるんですよね？」
つまり、織斑君はリバってやつなんですか？
なんというか、人生を楽しめるタイプですよね。
「ちょ、シャルロットと一夏が付き合ってるなんて聞いてないわよ!?　詳しく聞かせて！」
「あっ！」
そうでした……鈴ちゃんたちがいたから内緒にしてたのに！
私の馬鹿！
これではシャルが困っちゃうじゃないですか！
「いや、僕にも本当にどういうことか……アリサ、なんで一夏と僕が付き合ってるの？」

「え!?　えと、ですから、先週、水着を選んでもらった日の数日前に告白されていたじゃないですか！　付き合ってくれ！　って……」

「んー？　……あぁ！」

相当考え込んでからシャルが手を打ちました。

確かにシャルは織斑君の告白を受けた立場なので、もしかしたらあまり興味はなかったのかもしれませんけど、それでも覚えてすらいないのは織斑君があまりにも不憫だと……

「あれは違うよー。ただ、ほうっ!?」

バシッと音がする程の勢いでシャルが自分の口を抑えました……痛そうです。

シャルが見ているのは……篠ノ之さん？

なんでここで篠ノ之さんが出てくるんでしょう？

「ま、まぁ、あれは買い物に付き合ってくれって意味だったんだよ。確かに一夏は言葉足らずだけど少し考えれば分かるでしょ？」

「まぁ、確かに一夏の方から告白するなんて考えられないわね」

「だな。遠回しな告白にすら気付かない唐変木が告白だなんて……」

「しかもその相手が幼馴染の鈴や箒でも、裸で同衾した私でもなくシャルロットという辺りがな」

確かに少し考えが足りませんでしたね。

シャルが可愛すぎるので織斑君がシャルに惚れても仕方ないと思考停止していましたが、鈴ちゃん篠ノ之さんラウラさんと織斑君の周りには可愛らしい人が沢山いますしね。

……というか皆さん、ラウラさんが織斑君と裸で同衾したことにはつっこまないんですね。

「一夏が惚れるとしたらとセシリアとアリサもだよね」
「セシぃはともかく私ですかっ！？」

私なんて小さくて乱暴で貧乳で甘えたがりで重い女ですよ！？
しかも生身で織斑君より強いってのもマイナスですよね！？

「……乱暴っての以外結構プラスになる可能性があるわよね」
「ロリコン、という人種が日本には多くいるらしいしな」
「千冬さんが姉の一夏のことだ、自分より強い女に惚れるのも頷けるな」

いや、あの、私は織斑君にあまり興味がないので、私を褒めながら落ち込んでいかないでください。
小さくて乱暴で貧乳っていうのは鈴ちゃんもですし、ラウラさんも乱暴でどちらかといえば貧乳で強いですし、篠ノ之さんも乱暴で強くて重いですし！

「なんでかしら、褒められてる気がしないわ」
「というかアリサは私たちをバカにしているんだな？」
「……私だけプラスにすらならないものの集まりだった気がするんだが……誰が乱暴だ、誰が」
「皆ですってひゃぁ！？」

皆さん落ち着いて……ね？
そ、そんなに怖い顔されたら私、泣いちゃいますよ？
あと、プレッシャーでお腹も壊しちゃいそうです。
……森で熊に遭遇したときは気を逸らしつつ背中を見せずに後ろに逃げるんでしたっけ？
そーっと……

ぽふん

「あ、シャル……」

「まぁ、そもそもアリサも可愛いしね？」

ぎゅっ

「な、にゃぁ！？」

後ずさりしていたら背後に立っていたシャルにぶつかってしまったのですが、なぜかそこから抱きしめられます！

なんで！？

というか、かっ、かわ、可愛いだなんてそんな……私が可愛いんでしたらシャルはもう言葉で表せなくなっちゃいますよっ。

あ、あと、それと、ですね……

「あの、シャル、ちょっと苦しいので……腕を緩めてください」

……こう見えてシャルも力が強いんですよね。もちろん私やラウラさん、篠ノ之さん程ではないですが鈴ちゃんくらいはあります。

……そうですね。筋力の序列ですと、私≫篠ノ之さん≧ラウラさん＝織斑君＞鈴ちゃん＝シャルくらいでしょうか？

わ、私だって好きで力が強くなったわけじゃないんですよ？

ただ、ママが女の子でも鯖折りくらいは出来ないとって……

「あっ、ごめん！　これで平気……？」

「はいっ！　……えへへ」

本当は離れてくださいって言おうとしたんですけど、私が離れた

くなかったので甘えちゃいました。
あれ、でも織斑君とのことが誤解だったということは、シャルってフリーなんですよね？
……ということは、ですよ？
もしかしたらこれから先に私とシャルが、なんてことも……

ぼんっ！

「ってアリサ！？　顔真っ赤よ！？　やっぱり溺れたから……調子悪いなら早く言いなさいよ！」
「い、いえ、そうではなくてですね」
「あんたのそうじゃないは聞き飽きた！　一夏もマッサージなんでしょ？　織斑先生、失礼します！」

本当にそうではなくて、これから、もしかしたらシャルにいつでもこうしてもらえるような関係になれるかと想像してしまって……
うわ、うわぁ……

「アリサ、どんどん赤くなってるよ！？　本当に平気なの？」
「へ、平気です！　平気ですから、シャルもちょっと離れててください……」
「あ、うん……ごめん」

あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！
シャル違うんです！　違うんですよ！
どっか行けとかそういうことではなくてですね！
その、シャルに顔を覗き込まれると余計に赤面してしまうってことで！
えと、えとなんて言えば……そうだ！

「シャル、頭を撫でてください！」
「へ？」

って、違う！
これは私の願望じゃないですか！
ああ、もう！
しばらく大人しくしてましょう！
もう誤解は後で解きます……なんだかシャルがいきなり近く感じられるようになって調子が狂いますね。

ぽふ

「……ぅ？」
「えと、こうでいいのかな……？」
「あの……？」
「違う撫で方がいい？」

撫でられちゃいました！？
あぅ……子供みたいで、恥ずかしぃ……
で、でもですね！
せっかくなのでもう少し要求しちゃいましょう！
……自分でも調子に乗っているのが分かりますね。

「あの、できれば髪の毛を梳くように縦に……」
「ん……こうかな？」
「ばっちりです！」

たまにシャルの指先が軽く頭に引っかかって、余計に撫でられているという感覚がはっきりします。
はぅ、この感覚を忘れてしまわないようにしばらく頭を刺激しな

いようにしましょうっ！
具体的には頭を洗いません！　……ってのは冗談ですけど。

「……こほん」
「あっ！」

篠ノ之さんが軽く咳払いをするとシャルが慌てたように手を引っ込めました。
むぅ、残念です……篠ノ之さん、恨みますよ？

「その、鈴とラウラがもう入っていってしまったのだが……」
「あ、あああ！　ごめんね、すぐ行くから！　ほら、アリサも」
「わ、ちょ、っとと」

いきなりシャルが手を引いて駆けだしたので転びかけました。
強くは握られていないので私から離せばいいんですけど……えと、転ばないようにです。
転ばないように、シャルの手を握ったままなんですからね？
ほら、溺れたので三半規管とかおかしくなっているかもしれないですし！

「し、失礼します」

シャルに手を引かれて織斑部屋に入るとセシィが随分リラックスした様子で座っていました。
やっぱりマッサージだったんですね。

「アリサ、立ってないで座りなよ」
「え、あ、はい！」

先に座ったシャルの隣があいていたのでしっかり確保しました。
なんだか本当に今日はシャルと一緒にいられる時間が長いですね。
……嬉しいんですけど、私が溺れたことを気にしてなら安心させてあげたいです。
シャルは、自分がもう少し私を見つけるのが早ければと考えているようですが、そもそもシャルが見つけてくれたので私はこうして無事に生きているのです。シャルは、私を助けたことを誇りに思いこそすれ、責める必要は無いんですから。
でも、それを私が伝えても信じてもらえませんから……私は無理に無茶と無謀を足したような性格をしていると思われているようですからね。
無理も無茶も無謀なこともしない性格なんですけどね。

「一夏、もう一度風呂にでも行ってこい。汗臭い部屋で眠りたくはないからな」
「ん。そうする。皆はくつろいでってくれ。って難しいかもしれないけど」

……まぁ、織斑先生と一緒に部屋に取り残されるなんて経験は少ないですからね。
しかも授業がない分、教師と生徒という境界線があやふやな臨海学校という現状では特にどうしていいのかが……

「おいおい、夕飯の時と言い、通夜でもしたいのか？　お前ら得意のバカ騒ぎはどうした？」

「い、いえ、その」
「教官……ではなく先生とこうして話すのは……」
「あまりありませんし……」
「まぁ、私は割と織斑先生と話してますけどね。クラス代表ですし」

じろっ

あ、あれ？
なんでか分かりませんが裏切り者みたいな目で見られてますよ？
というか鈴ちゃんラウラさんセシィは織斑先生に対して猫を被るにしても今更ですよ？
というか、セシィは本当に陥落してしまったのでしょうか……？
初めて仲良くなる男の子にドキドキ、程度ならまだ引き戻せるのですが……ほら、私は鈴ちゃんを応援していますし。

「不破は代表だからと言うより問題児だからだがな」
「私のどこがっ！？」

いえ、自覚はしてますけどね？
ですが、これでも学年内での成績はトップだと思いますよ？
筆記と実技を合わせたら少なくとも十指には入ると思います。

「飲み物、何がいい？　奢ってやるぞ？　篠ノ之は何を飲む？」
「え、ええと私は何でも……」
「ふぅ……お前とは一番付き合いが長いんだから遠慮をするな。他の奴らも少しは不破を見習え。今もほら……」

私は……あ、フルーツオレ発見です♪　む、奥の方に何か……ケーキ！

「先生！　奥にケーキがちょうど人数分あります！　私、ショートケーキでいいですか！？」
「……見習うのは少しだけな？　不破、選ぶ前に全部冷蔵庫から出してしまえ」

「了解です！」

ショートケーキにモンブラン、ミルクレープ、フルーツタルトにガトーショコラ、そしてレアチーズとプリン・ア・ラ・モードですか。

うむむ、全部を見てしまうと迷いますね……特にショートケーキとミルクレープ！

ですが……

「わ、私はクラス代表なので皆さん先に……どうぞ！」

わ、私はどれでもいいです！

◇

アリサ、あの千冬さんにも物怖じしないとかすごいわね……しかも結局、飲み物どころかケーキまで奢らせたし。

んー……私は、

「烏龍茶とショートケーキ、」

「あぅ……」

「じゃなくてプリンにしよっと！」

……アリサ、こういうのって不自由な選択肢っていうのよ？

◇

私は、どうするかな。

やはりケーキと言えばショートケーキが王道だが……先程の鈴と不破のやりとりを見る限り不破はショートケーキ狙いだ。

となると、飲み物とケーキの組み合わせとして有りなのは……

「レアチーズとオレンジジュースをお願いします」

まぁ、選択肢が多い内に選べただけ僥倖だろう。

◇

「わたくしは紅茶とショートケーキをお願いしますわ」

「うぇ……」

「もう！　冗談ですわ！　わたくしはフルーツタルトを！」

遠慮する気はなかったのですけれど、潤んだ目で見つめられてしまうとわたくしも……まったく、アリサさんはいつまでたっても甘えん坊なのですから。

……わたくしたちが甘やかしすぎているだけなのでしょうけれど。

◇

残ったものは何だ？

ショートケーキにミルクレープ、ガトーショコラとモンブランか。

アリサがショートケーキ狙いなのは間違いないから残り三種。

教官は大人のメンツとして生徒の前で甘いものを食べると言うことにも抵抗があるだろう。恐らく少し渋みがあるモンブランが教官にはぴったりだ。

飲み物は……教官がコーヒー党だからな。私も飲むという名目で教官の分もすぐ準備できるようにするべきか。

「私はコーヒーとミル、」

じわ……

「クでガトーショコラを食べるとするかな！」

ミルクレープも食べたかったのか！？

◇

うーん、アリサはミルクレープとショートケーキ、どっちが食べたいんだろう？

モンブランを選べばいいんだろうけど、さっきラウラが先生にモンブランとか呟いてたし……なによりアリサと先生の争いは見たくないし……

あ、そっか。

どっち選んでもいいんだ。

「私はショートケーキと紅茶をお願い」

「しゃ、しゃるぅ……」

アリサが涙目だけど……これは確かに、悪いことしてないのに罪悪感があるね。

皆が選んだのを変えちゃった理由も分かる気がする。

「僕は変えないよ？」

「うぅ……」

おぉ、と他の皆が感心したように息を漏らすけど……まぁ、それでも僕も甘やかしたがりだから。

「でも、僕ミルクレープも食べてみたいから半分こしよう？」

「っ！　はいっ！」

……ケーキだけでこんなに喜んでくれるんだから甘やかしても仕方ないよね？

結局、アリサがミルクレープにフルーツオレ、織斑先生もモンブランとコーヒーで正解だったみたい。

「では、いただきます！　シャル、あーん」

アリサの号令で皆食べ始めるけど……アリサ、いきなりだね。

一口目は自分で食べればいいのに……ぱくっと。

「ん、美味しいよ。アリサも口開けて」

「ふぇ!?　いえ、私は自分で！　自分で食べます！」

「そう？　じゃあ食べたくなったら言ってね？」

「は、はい」

遠慮なんてしなくていいのに……

「食ったな？」

「え？」

「まぁ、食べましたけど……」

「な、何か入っていましたの!?」

「ふぅ、織斑先生が私達に飲み物だけでなくケーキまで奢ってくれるなんて裏があると思ってたんです」

「不破、お前がそれを言うか……だが、まぁその通りだ。口止め料だな」

……アリサのテンションがいつもより高いなぁ。

僕たちに心配かけまいとしてるなら、無理して欲しくないな……

織斑先生の言う口止め料っていうのはお酒のことみたい。

「これは百人殺しっていう銘酒でな！　これがなかなか美味いんだよ。名前の由来も一升で百人を酔わせたからだとか、」

「……吐き気のする名前ですね……」

「えっ？」

今の、アリサの声？

隣に座ってた僕以外には聞こえてなかったみたいだけど……なんで、そんな暗い声をだしたの……？

「シャル？　どうかしましたか？　……あ、そういうことですか！　はい、あーん」

やっぱり、あのお酒の瓶から目を逸らしてる。

名前がいやなのかな……？

確かに殺すなんて字は気持ちのいいものじゃないけど、日本酒の銘では珍しくもないって聞くのに。

「シャル？　食べないんですか？」

「あ、ごめん！」

少し慌てて首を伸ばしたけど……

ぽとっ

「ぁ……えと……」

少し、遅かった。

「な、何か拭くもの取ってきますね！」
「アリサ、ティッシュならここに、」
「皆は座っていてください！」
アリサ……？
◇
がんっ！
石造りの壁を感情にまかせて殴る……痛いです。当たり前ですけどね。
……私は、何をしているのでしょう。
シャルが、織斑君と付き合っているとかいないとか、そんなのは最初から関係なかったのに……
私は、あのお酒を見て、私自身の罪を思い出してしまいました。
あの火事のように、私を守るために作り上げた罪ではなくて、純然たる事実としての私の忘れることは許されない大罪。
百人殺し？
笑っちゃいますね。
私は……その数倍、殺してしまいましたよ？
そして、落としたケーキが墜ちたミハエルさんと重なって……
中途半端な覚悟だったために敵も仲間も殺してしまった私が、幸せになっていいわけがないのに……
血塗れの私がシャルの隣で笑っていていいわけがないのに……
でも、火事の時と同じで私を責める人が一人もいないから……つい、錯覚してしまいます。
……私の罪なんて本当は何も無いんじゃないかって。
誰も私の罪を知らないから、私が自分で自分を罰しないといけないと思うんです。例えば、可能な限り自分の幸福から距離を置くと

かですね。
本当なら一番愛しているシャルに嫌われて、そして大好きな料理が出来ないように味覚を殺す薬品を使うのが一番の罰になるのでしょうけど……想像するだけで涙がでるほど怖いです。

「どうして、私が……」

転生してしまったからですか？
もう、前世の記憶なんて塵芥のようにボロボロになってしまっているのに？
私が選んだ訳じゃないんですよ……？
でも、受けた恩は返さないといけませんから……いつか、私は解放されるのでしょうか？

「シャルと……いたいだけなのに……っ！」

……早く戻らないと心配されちゃいますね。

◇

「ごめんなさい！　わざわざ部屋まで行かなくてもティッシュくらいここにもありますよね。ボケてました」
「アリサ、おかえり。まだケーキ残ってるから隣に、」
「鈴ちゃーん！　寮に戻ったら中華料理パーティーしましょう！」

あれ？　……まぁ、アリサは猫みたいに気まぐれなところあるし変ではないかな。
リンの隣に座るみたいだしお皿は向こうに動かしておこうかな。

「なに？　もう旅館の食事は飽きちゃったの？」

「なんか、凄く鈴ちゃんの中華が食べたい気分なんです！　もう鈴ちゃんをお嫁さんにして一生一緒にいたいくらいです！」
「あ、あんたは何をっ！？」

おー、リンが照れてる。
あの二人はいっつも仲良しだから見てて微笑ましい気分になるよね。
ただ、アリサ、酔ってないよね？

「えー、私は鈴ちゃんのこと大好きですよ？　鈴ちゃんは私のこと嫌いですか？」
「わ、私だってアリサのことは好きだけど……」
「なら相思相愛ですね！　鈴ちゃん以外いりませんっ！」
「あら、アリサさん、それは聞き捨てなりませんわ。私のことも必要なのではなくて？」

セシリアがニヤニヤしながらアリサに詰め寄る。
一緒にいることが多い専用機持ちの中でもこの三人で一つのセットみたいな感じかな？

「んー、セシぃはお母さんですね。いて当たり前みたいな」
「ほう、では私は何だ？」
「ラウラさんですか？　前にも言ってましたがやっぱり不器用なお父さんとか？」
「……不破、私はどうだ？」
「篠ノ之さんはダメ姉ですかねー」

どこがダメなんだ！　なんてホウキが暴れる。先生が止めるかな、と思ったら余計に煽ったり。
……アリサって僕達の中では中心になることが多いよね。一夏も

そうだけど人柄なのかな。
ただ、アリサが中心になるといつもフリーダムというか……

「じゃあさ、アリサ。シャルロットはどうなのよ？」
「シャルですか？　シャルは、えっと……大事な、お友達です。とても、大事な」
「……ふーん」
「つ、つまんなかったですね！　反省します」

……鈴が結婚相手なんだとすると僕以外は皆、家族だったのに。
それに、アリサは家族はいて当たり前だって……友達の僕は、違うの？
ねぇ、アリサ。
何で僕の時だけ真面目に……泣きそうな顔で言ったの……？
何か、言えないことがあるの？

50．Mar?e et reflux du sensations.（後）

えっと、祝５０話と銘打ちまして特別編をまたかこうかと思います。
今回のテーマはもう決まっているので募集はしません。
６月なのでウェディング話です。ジューンブライダル！　マリッジブルー！（違
先に絵を思いつく限り描いちゃう気なので７－８月くらいまでかかるかもしれませんけど（

それにあたって、絵の書ける方がいましたらアリシャル、アリサのみ、シャルのみ、一鈴、鈴のみのドレス姿の写真（ｏｒ　プリクラ）っぽい絵を募集していますので
協力できるよ！って方はメッセージ下さい。
あ、全部まとめて特別編に掲載させて頂きます！
〆切は→のが投稿されるまでですので、改めて告知するかもです。

というか、なんだろ。
もう三巻分で１３話書いてるのに事件が始まる気配すらない・・・・・
というか、この作品、なかなかＩＳ登場しないね（´・ω・、）

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．８

「ガーリートーク、出ます」

……飛んでみて初めて分かるあるはずの感情の喪失。
何も怖くなくなってしまいました。
戦場においてはこれ以上ない好条件ですけど……

『ラストサン隊、レーダーに敵影あり。数二十五！　迎撃をお願いします』
「了解です」

隊の誰よりも速く先頭に飛び出しました。
両手には塩の都（ウリエル・ジャッジメント）の大火を装備し榴弾と火炎弾を打ち出す準備もできています。
さらにハイパーセンサーをフル稼働させて……

「……やっぱり、戦闘機とＩＳの差は歴然ですね」

白騎士事件の際の操縦者もきっと同じことを考えていたと思います。
ハイパーセンサーにより全方位の視界をカバーし、そしてそこに映る敵機の軌道予測まで全自動でやってくれます。
私がやらなければいけないことは、ただ、引き金を引くだけです。
それだけで、寸分の狂いもなくエンジンを撃ち抜けます。
私の射程距離に入るのと同時に爆散する機体も少なくありません。
……本当に、何も感じませんね。
人を殺しているということへの恐怖どころか、敵機を撃墜したことへの興奮すらありません。

ゲーム気分どころか、暇つぶしに一桁の足し算を延々と繰り返しているような、そんな空虚感だけが心にあります。

『全敵機の撃墜を確認。そのまま予定通り飛んでください』

「了解しました」

……このままレサス中枢を攻め落とすことも……単騎でしたら可能かもしれませんね。

「ガーリートーク……アリサちゃん、大丈夫？」

「何も問題はありません。ミシェル隊長」

私を心配してくれているのでしょうけれど、今は平気です。辛くなるとしたらこの戦争が終わって、タサキさんの暗示が解けた後か、ＩＳ学園に戻ったあとか……

今は、この戦争で勝つことだけを考えましょう。

51．　Ａｎｔｉｎｏｍｉｅ（前書き）

「反発しあう二つの気持ち」

うーん……書きなおすかもしれません。
書くスピードは落ちてないものの、またスランプに入ってしまったような（

１００万ＰＶありがとうございました！

51. Antinomie

千冬さんがグビグビと気持ち良く日本酒を飲む中、私達は全員…
…私の腕にしがみついてるアリサ以外ぽかんとしてるっていうか…
…千冬さんの豹変に付いていけなくてどうすればいいのかが分からない。

「ふむ、本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢……いや、不破、なにか肴を作ってこい。材料なら厨房に行けばもらえるはずだ。毎年のことだからな」
「了解です」

了解しちゃうの!?
というか、いつもはルールとかマナーとかに厳しい千冬さんに何が……？
千冬さんに特にドイツで厳しくされていただろうラウラなんて目を白黒させて……かわいそうに。

「ほ、箒、千冬さんってこんな人だったっけ……？」
「いや、私の記憶が正しければ、昔から厳しいながらも不条理なことは言わない常識人だった……はずだ」

……そうよね。
少なくともお世話になっている旅館の食材で生徒におつまみを作らせるような人じゃなかったはずよ。
というか千冬さんが学校行事の間に飲酒することがまず信じられない。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。そ

れとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

ニヤリと笑いながらそんなことを言う千冬さんに皆が否定の言葉を重ねるけど……

千冬さんがお酒を飲んでるところより、作業オイルを飲んでるところの方が想像しやすいような気がしないでもない。

「というか仕事中なんじゃ……？」

「鳳、堅いことを言うな。それに、口止め料は払ったぞ？」

「「「「「あっ！」」」」」

なるほど。

あの飲み物とケーキにはそんな意味があったのね。

「ま、前座はこの程度にしておいて、だ。そろそろ肝心の話をするか」

三杯目のお酒を空にして千冬さんが続ける。

見ているだけで酔っぱらいそうな飲みっぷりだけど……大丈夫なのかしら。私達が黙ってても急性アルコール中毒とかになったら意味ない気がするし……

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

えーっと、一夏のことよね？

つまり恋バナ？

もしかして、千冬さん、真面目な顔で聞きにくかったからお酒の力を借りたとか……？

いやいやいやいや……まさかね。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」

……これは言質にさせてもらってもいいのかしら？

少なくとも一夏に伝えれば今後、箒が気持ちを伝えない限りは剣の腕が落ちているから箒に絡まれると思ってくれるはずね。

……使えるものは使わなきゃね。

「わ、わたくしは専用機持ちとしての気概を持ってほしいだけですわ」

うーん……セシリアが最近分からないのよね。

一夏に好意を寄せているのは間違いないんだけど、小学生の恋愛みたいに子供らしいもののような気がしないでもないし。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「「言わなくていいです！」」

……私はどうしようかな。

これを一夏に言えば間違いなく有利にはなるけど。

そういうズルをしてでも一夏と付き合いたいし……でも皆には嫌われるわね。

特に箒は正々堂々とか言いそうだし。

「それで、デュノアはどうだ？」

「……」

あー、考えてみれば答えないって手もアリよね。

ただ、シャルロットはそういうことを考えてるわけじゃなくて、なにか別のことに気が向いてて気付いてないだけみたいだけど。

そもそもシャルロットは一夏の事を恋愛対象として見てないんだし。

「デュノア？」

「っえ！？　あ、僕は一夏を恋愛対象としてみてませんよ？　でも優しいところはいいなぁ、って思います」

「ほう、まぁ、誰にでも優しくするからなぁ」

「一夏を好きな女の子にとってみればやきもきするところかもしれませんね」

シャルロットはやっぱり一夏への興味はないのね。

普段もあんまり好意を示すような行動はしてないし。

シャルロットからすれば一夏は友達止まりってことなのかもね。

……ま、私のためにも、アリサのためにも一夏には惚れないで欲しいわね。

見てれば分かるけどアリサはシャルロットに対して相当、だし。

「鳳はどうなんだ？　お前も随分熱を上げているみたいだが……」

「私、ですか？」

うーん。

これは意外と難しいわね。

本当に、いつの間にか好きになっちゃってたから……どこに惚れた、みたいなのが無いのよね。

でも、あえて言うなら……

「一夏は、居て欲しいときに必ず側にいてくれるんです……まぁ、とは言っても一夏の全部が好きですけどね」

「ほう、つまりあいつを愛していると。なかなか大胆じゃないか」

～～～っ！
い、言われるとは思ってたけど相当恥ずかしいわね。
ええそうよ！　大好きよ！　愛してるわよ！
文句ありますか！？

「で、お前は？」

最後にラウラ。
あの子、さっきから全然喋らないけど千冬さんの変わりようがそんなにショックだったのね……
まぁ、千冬さんを偶像化して崇拝してたようなところあったし仕方ないかも。

「つ、強いところが、でしょうか……」
「いや弱いだろ」

……確かに弱いけど、ラウラの言いたいことも分からないでもない。一夏は人が躊躇しちゃうような行動を平気でとる。
保身とか不必要に怖がることとか、そういう弱さがないってことなんだろうけど……

「つ、強いです。少なくとも、安易な力を求めてしまう私よりは」
「そうかねぇ……」

珍しくラウラが食ってかかったけど、当の千冬さんは気にしてない。
のれんに腕押しみたいな感じね。

「まぁ、強いかどうかは別にしてだ。あいつは便利だぞ？　家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

マッサージ、の辺りでセシリアがうんうんと頷く。
……そんなに気持ちいいなら私も今度やってもらおうかな。普段からマッサージしてやろうか、なんて言われるけど触られるのが恥ずかしくて遠慮してたし……
なんて考えてたら、厨房に行っていたアリサが戻ってきた。
私達は座ってるからアリサが持ってるお皿の中は見えないけど香ばしい香りがする。

「織斑先生、便利さなら私だって負けてません！　ということで鯖の骨煎餅とカワハギのキモを混ぜたガーリックトーストです」
「おお、これはなかなか……」

便利さで張り合うのはどうかと思うけど……
アリサが作ってきたおつまみは確かに美味しそう。
お酒は飲まないけどおつまみは食べたいわ。

「ふむ。酒にも合うな……これは美味い」

おー、千冬さんが手放しで褒めてる。
……アリサも料理のレパートリー多いわよね。フランス料理を初めにする洋食はもちろん、和食も作れるし変わり種で東南アジアの料理なんかも作っちゃうし。
私がいるから作らないだけで、本当は中華も作れるんじゃないかしら。

「不破もいい嫁になるな」
「ヤですね、照れちゃいますよ！」

……バシバシと千冬さんの肩を叩くアリサ。

酔ってる訳ではないみたいだけど……テンション高すぎじゃない？
千冬さんも楽しそうだから止めはしないけど……やっぱり、臨海学校だからかしら。

「まぁ、不破があいつ並に便利だと言うことは置いといてだ。一夏と付き合える女は楽できるな。どうだ、欲しいか？」
「「「「「えっ！」」」」」

くれるの！？
……うわ、皆と同時に顔上げちゃった。これじゃがっついてるみたいじゃない。
というか、アリサまでどうして……？

「織斑先生、織斑先生」
「どうした、不破？」
「あんまり織斑君に対して恋愛感情はないですけど便利そうなのでもらってもいいですか？」
「やるかバカ」

ええ～……って皆思ったはずよ。アリサにも千冬さんにも。
くれないなら欲しいかどうか聞かないで欲しいわ。乙女心が無駄に期待しちゃったじゃない。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

千冬さんは楽しそうな顔でそんなこと言うけど、十分奪う気なのに効果がないんだから……

「鈴ちゃんは織斑君のファーストキスを奪いましたし、ラウラさん

も唇と、あと童貞を奪いかけましたよね」
「「あ、アリサ！？」」

な、なんてこというのよ！
というか、あれ、一夏のファーストキスだったんだ……
というかラウラが一夏のど、ど、どう……奪いかけたってどういうことよ！

「え？　織斑君のベッドに何度か全裸で潜り込んでますよね？」
「うむ」
「ですから、そのままえっちしちゃう気だったんじゃ、むぐっ！？」
「アリサ、女の子なんだからもう少し恥じらいを、というかそういう直接的な表現は……」

つ、ついアリサの口を塞いじゃったわ。
これ以上は私達の方が保たないわよ！

「そういえば、不破は恋しているのか？」
「ひゃい！？　ななな、何をいきなり……」
「お前とデュノアは一夏に惚れていないんだろう？　あれはジゴロだからな。恋していない女をどんどん引っかけていくから、そうじゃないお前等はどうなのかと思ってな」

千冬さんのナイスな判断でアリサの暴走も止まった。本当に、この子はたまに予測不可能な行動をするから大変よ。
……アリサはともかくシャルロットの方は気になるわね。

「それで、不破はどうだ？」
「……大好きな、というより愛している人がいます」
「ほう、不破にそうまで言わせる奴か。想像がつかないな」

まぁ、普段のアリサを見てたら本気で誰かに恋愛してるなんて思わないわよね。

……でも、シャルロットのことをそこまで好きだとは私も思わなかったわ。

好きっていうレベル止まりかと思ってたのに……

あぁ、でもアリサはそもそもシャルロットのためにＩＳ学園に来たわけだし、その前からずっとシャルロットを守ろうとしてたって言ってたわね。

「いたって普通の優しい人ですよ？　自分より他人を優先してしまう人です。だから、その人のことは私が守りたいなって……なんて、おこがましいですけどね」

「不破、お前はたまに男らしいな」

「これでも守ってほしい、大事にして欲しいという乙女心も持ってますよ？」

……それは、どうかしら。

ラウラが暴走した学年別トーナメントの時のことを思い出すと、そんなことを想ってるとは考えられないけど……

アリサは自分が死ぬかもしれなかったのに、昏睡状態になるだけのシャルロットを守った。シャルロットの昏睡は長くても数日間だったのに……

「あれ？　そういえばアリサ、なんで学年別トーナメントの時、怪我したの？」

エネルギーシールドがあればまず間違いなく怪我することはないのに……シールドエネルギーが切れていたなら動けなかったはずだし……

「え？　あ、えと……その、シールドエネルギーを無視して攻撃できる雪片が相手だったので手動で絶対防御とエネルギーシールドを遮断してたんですよ」
「「……」」
しまった。
シャルロットとラウラがいる場でこの話題はタブーなのに。
アリサはいつも気にしないで下さいなんて言ってるけど、そういうわけにもいかないのはアリサ自身分かってるはずよ。
……というか絶対防御を遮断ってどういうことよ。
「あの、なので、シャルもラウラさんも傷のことは気にしないでください……自業自得だったんですから」
「でも……」
「本当に、すまなかった」
また言ってる。
「で、ですから、シャルを庇ったのは私の勝手ですし、ラウラさんも私のために怒ってくれていたわけですし……それに、私が守らなくても……」
「まぁ、確かに不破はいらんことをしたとは思うが理屈で割り切れる話じゃないだろ。というか海にまでそんな話を持ち込むな」
「あぅ」
おー……千冬さんが一気に話を打ち切らせた。
こういうことが自然に出来るようになりたいわね。どうしても右往左往しちゃうから。

「それで、デュノアは恋してるのか？」
「え、と……恋なのかは分からないけど、逢いたい人なら、います」
……あれ、今アリサってフラれた？
だって逢いたいってことはこの場にはいないってことだもんね。
心配でアリサを見てみるけど……変な表情。悲しいんだけどほっとしてるみたいな……
「皆には言ったと思うけど、僕の家は結構複雑でね。家族揃って食事したことなんて一度もないんだ」
愛人の子で、疎まれているだっけ？
アリサ以外の五人は家庭環境が悪いから、そういう意味で通じるところがある。
私は親が離婚しているし、箒ノ之博士の関係で親とは離れて生活してた時期もあるとか。セシリアは両親を早くに亡くしているし、ラウラなんて試験管ベビーだから親すらいない。
悲惨さで言ったら、シャルロットは中間くらいね。計るものでもないけど。
「十三歳の時かな……初めて本邸に呼ばれたんだ。そしたら本邸に入るや否や本妻の人に泥棒猫の娘がって殴られて……」
「あの、シャル……それは今までの話と関係ありますか……？」
シャルロットの暗い過去話にアリサがツッコミをいれる。
もう、分かってないわね。ここからがいいところなんじゃない！
「ってことで、アリサは黙ってるー」
「むぐぅ」

アリサを後ろから抱きすくめて口を塞ぐ。
うーん、ちっちゃくて、相変わらずいい抱き心地ね。臨海学校が終わったら、久しぶりに一緒に寝ようかしら。

「シャルロット、続けていいわよ？」
「うん。それで、なんで僕がこんな目にって思って、本邸から飛び出して、でも帰る気にもなれなくて……それで門扉の前で座り込んでたんだ」

うわぁ……それは確かに嫌ね。産まれたのはシャルロットの責任じゃないのに。
ほんと、親って勝手よね。

「それで、そのまま数分した頃かな？　高そうな服を着た人が本邸に向かってきたの。本妻さんとの子供かなって思ったんだけど、その人は悪くないし……だから気にしないで下さいって言ったんだ」

私だったら、そいつに八つ当たりしてたわね。シャルロットも少しは自分勝手に生きればいいのに。

「そしたらさ、その人、なんで怒らない、どうして恨まないって言ったんだ。僕にはその権利があるって」
「良い洋服着て、髪の手入れまでしっかりしていた人が言っていいことじゃないですよね」

……相変わらずシャルのことになるとアリサも本気で毒吐くわね。
まぁ、それだけ好きってことなんだろうし、私もそう思うけどさ。

「うん。僕もそう思って、本気で怒鳴っちゃって……でもね、その人、本妻さんの子供でも何でもなかったの。なんでか私の事情は知

ってたみたいだけど……」
「えっと、つまり、その人はなにしたかったの？」
「僕にも分からないけど……僕の負担を軽くしてくれようとしたんだと思う。言いたいことは言えってね。実際、僕は救われた。あんまり我慢しないようになったし」
……私にはシャルロットが今でも人を優先するタイプにしか見えないけど。
まぁ、本人が納得してるならいいけどさ。

「そんなの、その人を好意的に解釈しただけじゃないですか。きっと、本当はシャルを憐れみながら見下していたんです」
「アリサ、言い過ぎよ。シャルロットの思い出なんだからいいじゃない。でも、なんで逢いたいの？」
「一つは沢山叩いちゃったから謝りたいのと、もう一つは恩返しをしたいなって……困ってたら助けてあげたいなって。それにキスもされたし……」

あら。
シャルロットが少し赤くなってるわ。

「ってキスぅ！？」
「あっ、いや！？　おでこだよ！　ファーストキスはまだだから！」

な、なによ。驚かせないでよね。
でも、いきなりキスしてきた人にまた逢いたいって……完全に恋よね。

「……その人のことは、忘れて下さい。シャルには、そんな自分勝手な人は釣り合いません」

「アリサ……？　なんでそんなこと言うの……？」
「だって！　その人は結局シャルを助けてくれましたか！？　その後だって、シャルは辛い目にあっていたじゃないですか！　その人はシャルに何もしてあげてないです……ただの自己満足でその女の人は……」
……ずっとシャルロットを守ってきたのは自分だから、ってことなのかしら。
自分が想われてないことにほっとしたと思えば、シャルロットの思い出の人に文句を言ったり、アリサも良く分からないわね……って、
「なに、その人、女の人なの？」
「え？」
「だって、今アリサが……」
最後、女の人って言ったわよね？
「アリサ！　……あの人のこと、知ってるの？　今、どこにいるの？　ねぇ、教えて……？」
「知りません。でも、知っていたとしても……部屋に、戻ります」
抱きついていた私を振り払って扉に向かったアリサ。
その手を今度はシャルロットが掴んだ。
まぁ、普通に考えてこのまま帰すわけにもいかないわよね。
というか他の皆、千冬さんも含めて動かないけど止めないの？
険悪な雰囲気になりそうよ？
「アリサ、お願い。何でもするから、教えて……？」
「シャルは……その人をどう思ってるんですか？」

「すごく……感謝してる」
「そうですか。ならその気持ちを忘れないでください……その人には、逢えませんから」
「えっ……」
「それでは失礼します」

アリサはそういって出ていったけど……もしかして、もう亡くなってるってことなのかしら？
だから、アリサは逢わせられないって言い続けてたの？　それなら最初からそういえば良かったじゃない。
でもアリサのことだから絶対に逢わせないってことを言ってるのかもしれないし……

◇

シャルが、あの時のことを覚えててくれました。
そのことだけでも嬉しいのに感謝しているとまで……嬉しさで、どうにかなってしまいそうです。
……でも、いまさらどんな顔をして、あれは私ですなんて言えばいいんでしょう。
今の私は、シャルの言うあの時の私とは全然違います。
もう、私はシャルに相応しくないんです。

「なんで、愛していることになんて気付いちゃったんでしょうね……」

51. Antinomie（後書き）

そろこの問題を解決したらクライマックスかなぁ、、と思ってます

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．９

「グレイプニル、ですか？」
「レサスの超大型戦略級飛行艇、空中要塞グレイプニル。これを落とさないことには我々の苦戦は免れない」

私は今、作戦本部に呼び出されています。
どうやらこのグレイプニルを落として欲しいというのが呼び出された理由のようですね。
グレイプニルの巨体は多数のエンジンと一体化した高翼配置の巨大な主翼と水平尾翼上に配置された四枚の垂直尾翼によって支えられています。
イメージ的には飛行船の気球部分に翼を縦に二枚重ねるように付けたもの、とでも言えばいいでしょうか。
寸胴な本体には遠距離空域制圧用衝撃波弾道弾や衝撃波砲を装備していますが、それよりも存在感があるのは光学迷彩などを駆使して作り上げられた高度なステルスシステムだとか。
それこそ弾道弾と衝撃波砲を使用する一分間以外は目視すら難しいようです。
少なくともビデオカメラなどの電子機器には全く写っていません。空に急に現れる、という表現がぴったりですね。そしてグレイプニルが飛行している高度の関係で影も出来にくいので位置の把握は難しいです。
……装備されている衝撃波砲も数マイル下の艦船団を一瞬で破壊したようですし、そうなると威力は私の白狼（ウルフズロアー）の咆号より低いようですが範囲はそれより上だと考えて良いでしょう。
ＩＳコアもないのにどうやってそこまでのエネルギーを供給しているんでしょうね……だからこそ光学迷彩が電力不足で解除されてしまうのでしょうが。

予想乗組員は千人強……重いですね。

「了解しました。装甲の堅さはそれほどでもないでしょうし、白狼（ウル）の咆号（フズロアー）一発で墜とせると思います」

「頼もしいことだ。グレイプニルは現在サンタエルバに向かっていると思われる」

サンタエルバ……割と大きめの街でしたよね。

百メートル級の大きさを誇るグレイプニルを落としたら、それこそ大惨事になるのではないでしょうか……

私が平気なのは敵兵の死だけです。

一般市民を殺すことは……出来そうにないです。想像しただけで震えちゃいますからね。

「市民の犠牲は最小限にしたい。可能ならばサンタエルバ中央に流れるレナル河に不時着させたい」

「……確かに、河幅は足りているようですが、あの巨体が不時着するとなると……」

振動は地震並でしょうし、河の水が津波のようにならないとも限りません。

水は心配する事はないかもしれませんが、サンタエルバは地震の無い地域らしいので市民がパニックを起こして……なんてことも。

なにより狙い通りに河に落とせるかもわかりませんし。

「心配するな。市民に犠牲を出したくないのは我々だけではなく彼らも同様だ。レナル河に墜ちることができるなら迷わないだろう」

「そうですか……」

52. La fuite inconscient（前書き）

「無意識下での逃避」

やっと三巻終盤！

ユニーク１００００００ありがとうございました！
あと、地味に４００００００文字達成です！

二時創作でもここまで書いたことありませんでした。

52. La fuite inconscient

「すいません！　遅れました！」
「不破……二十分の遅刻とは大した重役ぶりだな」
いやはや……申し訳ないです。
やっぱり、鈴ちゃんがいないと朝はダメですね。一松さんたちもギリギリまで頑張ってくれたらしいですが……私を起こすにはコツが必要なんですよ！
ご迷惑をおかけしました。

「まぁ、ちょうどいい。ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」
「えっと、相互情報交換のためのデータ通信ネットワークのことですよね。宇宙空間での位置情報確認のために開発されたとか」
「五十点。学年トップも寝起きはポンコツか？」

んむぅ……何か不足があったでしょうか……？
コア・ネットワークを介してのハッキング、クラッキングは現在フランスが研究しているところなので口外できませんし……
でも、半分しか答えられていないということは結構重要なことを忘れているってことですよね。
確かに何かがあったような気もするのですが……

「残りはラウラ、お前が答えてやれ」
「は、はいっ。『非限定情報共有（シェアリング）』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは制作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全

容は掴めていないとのことです」
「よし。不破、分かったか？」
「あ、はい……」
でも『非限定情報共有（シェアリング）』による進化の内容って未だに明らかになっていないわけですからコア・ネットワークの特徴というのも……まぁ、言い訳ですけどね！

「それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

今日はＩＳの各装備の試験運用で一日を使うんでしたっけ？
とはいっても試験するものがあまりないんですよね……新兵装なんてありませんし。
あ、でも、そろそろ重火器の点検をした方がいいですね。さすがに数ヶ月使っていないので……
まずは六十口径スナイパーライフル。
ラファール・リヴァイヴ・カスタム？にも組み込まれるはずだったのですが、二キロメートル先を狙撃できるものなんて必要ないだろうということで廃棄されたのを私用にチューニングしたものです。
ハイパーセンサーを補助するための追加センサーが装着されていたのですが、ハイパーセンサーとの感覚系リンクを重点的に進化させたカゲロウには必要ないので解除し、その分射程を三キロメートルにまで伸ばしました。

「ですが、困りましたね……」

ＩＳの装備試験ということは機密が多分にあります。
なのでＩＳ関係者以外には見られていけないという制限があり、そのため私達は四方を岩壁で囲まれている場所にいます。

進入ルートは一度海に潜ってくるか、もしくは空からくるかだけです。
つまり、問題はスナイパーライフルをテストするには狭すぎるということで……

ずずーん！

「わっ！？」

何の前触れもなく地鳴りがしました。気になって周囲を伺うと……

「金属製の箱……？」

それも巨大な、です。
数秒前にはなかったそれと、この場所の特徴、そして先ほどの音からして墜落してきたのでしょう……空から。
……誰も潰されてませんよね？
そして、その箱の一面がばたんと倒れて……あぁ！
あれが、そうなんですね。

「ということは……」
「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る……あ、ごめん、嘘ついた。ハイパーセンサーと燃費以外は上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

やはりいました。
束さんの紹介に合わせるように真紅の機体が動作アームによって外へ出てきました。
ハイパーセンサーと燃費以外というのが気になりますけど、それ以外が現行ＩＳを超えるって最高性能機ってことですよね？

まぁ、束さんお手製なので当たり前ですけどね。

「でも、どうしてハイパーセンサーと燃費以外なんですか？」

「ややっ！　あーちゃん奇遇だね！」

「奇遇とは言い難いですよね」

「それで紅椿だけど、もちろんカゲロウがアホみたいにハイパーセンサーと燃費だけを進化させてるからだよ？　どんな戦い方をしたらあんな風になるんだろうね？」

あぁ……連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）もどきでの常時高速戦闘しか心当たりがないです……

まさか、そんなことになっていたなんて知りませんでした。

いえ、おかしいと思ってはいたんですよ？

皆さん瞬時加速（イグニッション・ブースト）を乱用する私や織斑君に非効率的な戦い方とか言ってきますしね。

「……あ、つまり私のカゲロウのセンサーと燃費効率はＩＳの中でもってトップクラスってことですね」

「というかセンサーに関していえば最高性能だね。ほら、ハイパーセンサーはコア準拠だから世代差はないんだよね。だからカゲロウみたいな方法か、もしくは非限定情報共有（シェアリング）で進化させない限り、性能はフラットなんだよ」

なるほど……コアを直接いじらないといけないので束さん的にはしないということですか。

まぁ、コアより機体をいじる方が楽ですし、いじったところでハイパーセンサーにしか影響がないなら時間対効果があまりにも釣り合わないですしね。

ただ、便利なんですけどねぇ。

「じゃあ、箒ちゃん！　フィッティングとパーソナライズをはじめようか！　私が補佐するからすぐ終わるよん♪」
「それでは頼みます。姉さん」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こう、もっとキャッチーな呼び方でいいんだよー」
「でっ、では……お、お姉、ちゃん？　いや！　やっぱり今のはなしで！　やり直させてください！」

おお、さすが隠れお姉ちゃんっ子ですね。
弟の天羽を思い出します。とてとてとした歩みで私の後ろを付いてきては姉たまーと呼んでくれる私の天使です！
ああ……夏休み、会いに行きたいですねー。
束さんは意外な呼ばれ方にぽかんとした後、満面の笑みを作りました。

「……うんっ！　はじめようか！」

束さんも嬉しそうでなによりです。

「おい、不破」
「ん、どうかしましたか。織斑先生？」
「あの二人に何をしたんだ？」
「えと……なんで私に聞くんですか？」
「あいつが私達以外と親しそうに離すところなんて初めて見たからな。あーちゃん？」

あぁ、織斑先生も束さんとは仲良しなんですよね。
それなら気付いて当然ですか。

「まぁ、不器用な姉妹の間で絡まっていたものを解いただけですよ。

そしたら束さんに感謝されてしまって」
「なるほどな……あの二人に関して言えば私も一夏も気を揉んでいたからな。感謝する」
「いえいえ。情けは人の為ならず、ですよ。ちーちゃん？」
「……その名前で呼ぶな」
「いたた。痛い！　痛いですよ織斑先生！」

何の前触れもなくアイアンクローとか、頭が歪んだらどうするんですか！
いいじゃないですか、ちーちゃん。可愛らしくて……ってなんでもないので力を込めないで！

「ふん。最近お前は敬意が足りん。次、また同じことを言わせたら……わかっているな？　肝に銘じておけ」

はーい……
と、紅椿の調整も終わったようですね。
紅椿の装備で目に付くのは左右の腰に装備された日本刀型の装備。
それ以外は一見すると何も装備していないように見えますが、なにやら展開装甲という武器にもなる装甲をつかっているとか。
武器にもなる装甲ってなんでしょうか。ナックルダスターとかしか思い浮かびません。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」
「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

む、何か勘違いしている人が……不公平感を覚えるのは仕方ないとも思いますが、一組の人ですし、篠ノ之さんと仲違いされてクラスの空気が悪くなると代表の私が怒られるので、どうにかしましょう。

……と、思ったのですが束さんに先を越されてしまいました。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなんて一度もないよ」

「「……」」

「そうですね。太平天国も潰されましたし。あ、束さんは戻っていいですよ」

「じゃあ、あーちゃんにお任せっ！」

いきなりＩＳ界でのＶＩＰに話し掛けられて、二人は止まってしまいました。

束さんがいると話か進まなさそうなので帰ってもらいます。

言い逃げみたいな形になりましたが、このままいられると余計にこじれそうなので仕方ありません。

別に、代表の仕事を取られたくなかったとかは思ってません。

そもそも束さんは紅椿のパーソナライズが終わってないでしょう。

「だっ、代表!?」

「で、でも、私達だって頑張ってるのに。それに、篠ノ之さんは私達と同じであんまりＩＳの適性も……」

篠ノ之さんはＣ判定でしたっけ？　まぁ、確かに普通なら専用機は勿体ないですよね。

「でも、私もパパ……父がＩＳの研究を手伝う条件として専用機をもらいましたよ？」

「でも、代表は適性だって……」

「いえ、適性試験を受ける前に貰うことは約束していました。あんまり篠ノ之さんを悪く言われると、私の立つ瀬もなくなってしまうので……」

「あ、ごめん。別に篠ノ之さんが悪いとかじゃなくて……」
「それに、専用機持ちって面倒ですよ？　整備にもいちいち立ち会わないといけませんし、性能テストだって言われていきなり装備を大量に送られますし」

二週間ほど前、五十ほどの装備データがテロ気味に送られてきたときはげんなりしましたよ。
しかも、しっかりテストした結果、使い物になるのは一握り。ヤになっちゃいます。

「そ、そっか」
「お、お疲れ様……」
「ありがとうございます。それでは織斑先生に叱られる前に戻った方がいいですよ？」

……こんな感じですかね。
まぁ、その分専用機持ちにはお給金が出るのですが……そのへん、篠ノ之さんの場合はどうなんでしょうかね？
束さんが自発的に作ったものなので、企業どころか国にすら所属していないはずです。
きっとしばらくの間は様々な国・企業からちょっかいを出されるでしょうね。
やっとこさ第三世代型ＩＳが試験運用出来る程度の技術力なのに、その一世代先をいく第四世代型ですから。
もし紅椿を手中に収めれば各国への抑止力、そして発言力を増すだけでなく、解体（バラ）せば他国の追随を許さない束さんの技術をそのまま手に入れることも出来ます。
そしてパイロットとして篠ノ之さんを迎えることで束さんとの繋がりを得ることも出来るかもしれませんし。
一石二鳥どころか五羽も六羽も手に入れられそうです。

「いっくんいっくーん！　今度はいっくんの白式見せてー！」
「え、あ。はい」

白式も第四世代型ＩＳだったんですよね。
でもあれは万能であるがゆえの全局面で運用可能というよりは、刀一本という格闘一択だからこそな気もします。近距離で銃器を使うことは難しいですが、逆に刀なら距離を詰めるだけでいいとも言えますからね。距離を取るよりは距離を詰める方が楽なんですし。
あ、束さんが織斑先生に二回ほど叩かれました。またいらないことでも言ったのでしょうか？
それにしても織斑先生は怖いもの知らずですよね。
いくらモンド・グロッソ初代優勝者でＩＳパイロットの中でも特に優秀な部類に入る人だとはいえ、唯一ＩＳコアを作ることが出来る束さんの頭をポンポン叩けるなんて……束さんがパァになったら世界中から非難轟々ですよ。
って、セシィが照れ照れと二人の方に……嫌な予感がしますよ？

「あ、あのっ！　篠ノ乃博士の御高名はかねがね承っておりますっ！もしよろしければ私のむぐぅ！？」
「た、束さーん、何でもないですよー？　それではー」
「……い、いきなり何なさいますの！？」
「いやー！……」

……危なかったです！
全く、セシィは何を考えてるんですか！
束さんは驚く程、他人嫌いなんですから余り不用意に近付いちゃだめです。後悔するのはセシィなんですよ！
それでも近付きたいというなら私のように篠ノ乃さんをダシにしてですね……例えば、篠ノ乃さんに何かを指しれたり、そういうこ

とをして地道に好感度をですね……

「な、なるほど。そういうことでしたら、」

「あーちゃーん！」

「ふへ！？　ちょ、束さん、苦し……いきなりなんですか？」

「カゲロウ見せてよ！」

……この人は、もう少し空気を読むということをですね。

せっかく私がセシぃを止めたのに、その束さんが私に親しげな雰囲気で近付いてきちゃったら、私が束さんを自分以外が利用しないように人を近づけないようにしてるみたいに見えるじゃないですか。

現にセシぃがショックを受けたような顔を……

「そうですの……アリサさんはもうわたくしを友人ではなく競争関係にある国のパイロットという風にしか見てくれていなかったのですわね……それでしたら、自らの有利な点を失うわけにはいきませんものね……失礼しますわ……」

「ち一がーいーまーすー！　束さん！　後でこの子のも見てあげてくれませんかっ！？」

「えーその子？　金髪は見分けが付かないからなぁ」

……ああ、どこかで聞いた外人嫌いは本当のことだったんですね。

でも、私もどちらかといえば外人顔な気がするんですけど、金髪じゃなければいいんでしょうか……？

私もそこそこ日本人離れした顔をしてるとは思っているんですけどね。

「んー。あーちゃんはほら、髪の毛が特徴的だから！」

「じゃあ、私が尼さんになったら分からなくなっちゃいますね」

「なるの？」

「なりませんけど」

つまり、束さん的には見分けがつけばいいみたいな感じでしょうか？

それだったらセシィの髪型をビックリするくらい奇抜にしてみればいいのかもしれません。それこそ四十七つ結びとか八編みとか……ないですね。

「失礼いたしました、篠ノ乃博士。私の名前はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で箒さんとは友人関係を築かせていただいています」

「ねぇ、あーちゃん。この金髪、図々しい上にしつこいんだけど？これだから金髪は嫌だよ。適当だし、命令してくるし」

束さんが、雨降ってきたよ、これだから梅雨時は嫌だねぇ、と言うのと同じような軽さでセシィを拒絶しました。

いえ……ここで私に話を振られても困るんですけど……

「あ、あの……」

「なに、まだいたの？　早くどこかに行ってくれないかな。私はあーちゃんのカゲロウを早く見たいんだよ」

束さんって知らない人にはこんな感じなんですね。

初めて束さんと電話で話したときはあれでも機嫌がよかったのかもしれません。

うーん。

やっぱりセシィをしっかり止めておくべきでしたか……私の友達で篠ノ乃さんの友達でもあれば少しは気を許してくれるんじゃないかと思ったんですけど……

「……でも、あーちゃんが気まずそうだから少しだけ調節してあげないこともない」

拗ねたように口を尖らせてもごもご喋る束さん。

私は、ありがとうございます束さん！　と抱きつきたくなるのをグッと堪えなければいけませんでした。

なんだ、ちゃんと空気を読める人じゃないですか。

セシぃも感涙しそうな勢いです。

でも、手を握ったら怒られるかもしれないのでどうしましょう、とか思っている気がしますね。

「ぜ、是非お願いします！　……アリサさんにも感謝いたしますわ」

「いえ、私は特に何も……」

「アリサさんがいなければこの結果はありませんでしたわ」

まぁ……セシぃがそう思ってくれているなら私がわざわざ否定することもないですけど……

「でも先に、箒ちゃんのを最後まで終わらせて、あーちゃんのを軽くいじってからね」

「私のは別に……」

「私がいじりたいんだよ！　だって、ある意味では唯一の次世代コアなんだし！」

「次世代……ああ」

昨日の夕食の時に話していたアレですか。コアの自己進化を装甲にも影響が出るようにするとか何とかっていう……

私がカゲロウを展開すると、束さんはコンソールを開いて指を滑らせます。さらに数枚の空中投影式ディスプレイとキーボードを呼び出して、そちらもカタカタとキーを叩いていきます。もちろん空

中投影なのでカタカタという音はイメージです。

「お？」

十数秒、休むことなく打鍵を続けていた束さんの目がいきなり止まりました。

「あーちゃーん。装備をいじれば量子化領域を節約できるけどやっちゃっていーい？」

「え？　えぇ、できるならお願いします」

……おかしいですね。

装備の最適化は何度も確認していたはずですし、あれだけの大質量なので限界だと思っていたのですが……

「ん？　あぁ、五桁の二進法数列パターンをアルファベットと記号に置き換えるんだよ。読み取るためのプログラムも書き換えちゃうね。あと、新しい装備はじゃんじゃん入れちゃってもいいよー。勝手に暗号化するように設定しておくからさ！」

えーと、パソコンの用語で暗号化とか複合化とか聞いたことがありますけどそれと同じことでしょうか？

……それとも、量を減らしているわけですから圧縮ってやつですか？

パソコン関係は使い方は解るけど用語はよく解らないみたいな感じなので……

インターネットを使えればいいと思います。

でも数学的に考えるなら二進法で示される００００００から１１１１の三十二通りのパターンを違う一文字に置き換えてしまうということですかね？

そうなると、今まで使っていた容量の八割程度が空きになるということでしょうか？
まぁ、私は考える方は専門じゃないので放っておきましょう。

「よし、これで完了！　初めのうちは装備の呼び出しにラグが生まれるだろうけど、だんだんＩＳが慣れるから平気だよ！　そして同時に箒ちゃんの方も終わりっ！」

平行して作業していたのでしょうか……私のように分割思考があるわけでもないのに……天才ってやっぱり違うんですね。
まぁ、私も昨日から意識的に二つ目の思考を閉じてますけどね。
朝から調子が出ないのもそのせいかもしれません。

「んじゃ、試験運転も兼ねて飛んでみてよ。きっと箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」
「わかりましたっ！？」

一瞬にして紅椿が視界から消えました。カゲロウのハイパーセンサーで追いかけていなければ、それこそ先に光学迷彩を使われたかと思ってしまいましたよ。

「どうどう？　箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」
「ええ、まぁ……」

束さんと篠ノ之さんのオープン・チャネルごしの会話が私にも聞こえてきました。
……篠ノ之さんもＩＳを装備していたんですね。
でも、まさか待機モードがあのウサミミだったりはしませんよね……？

「じゃあ次は刀いってみようか！　右のが雨月（あまづき）で左が空裂（からわれ）ね。特性データも送るよん」

ぴ・ぽ・ぱ、なんて言いながら束さんが空中に指を走らせます。ところで口で言っている効果音が指に追いついてませんよ？

「よーし、じゃあ説明しちゃおうかな！　雨月は対単騎戦闘用で打突に合わせてエネルギー刃を放出、敵を蜂の巣にする兵気だよ！　射程は……だいたいアサルトライフルくらいかな。でも紅椿の機動力で間合いを詰めればいいから関係ないね」

エネルギー刃て……遠近自在の装備ですか。刀は苦手なのですが興味はありますね。

なにより剣って誰でも一度は憧れるものだと思いません？

束さんの説明に合わせて篠ノ之さんが突きを放つと、雨月の周りに赤い光の球体がいくつも浮かび上がり、それらが次々と弾丸のように飛んでいきました。

おぉ……遠くの雲が穴だらけに。ワッフルが食べたくなりました。

……恐らく偏向作用は無さそうですね。直線での攻撃なら対処のしようもあります。

突きというシンプルなアクションで発生するので出は速いですが直線上にいなければ問題なさそうですし。

ただ、至近距離で突きを貰ってしまうとその時点でアウトかもしれませんね。

「次は空裂ねー。こっちは対集団用だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ撃ち落としてみてね、ほーいっと」

言うや否や、束さんは十六連装ミサイルポッドを呼び出し、準備

が整った瞬間、篠ノ之さんの状態も確認しないで一斉に発射しました。

……あれくらいの数量なら心配ないですね。

「はっ！」

掛け声一閃。

空裂を一回転するように振るとその軌跡から再び赤い光が今度は帯状に広がり、全てのミサイルを飲み込み爆散させました。

うーん。

使いやすそうではありますが……こちらのとれる対抗策としては中距離戦闘に持ち込んで隙を見て背後をとる感じでしょうか？

どちらの剣戟も一発一発が重いダメージを伴っているので正直に近接格闘をするのは避けた方がよさそうです。

……ですが、

「危うい、ですね」

束さんが昨日言っていたように、力に振り回されてしまうような気がします。

その全ての原因が篠ノ之さんにあるわけではなくて、あそこまで過剰な戦闘力をいきなり手にしてしまうと万能感を錯覚してしまいますから……事実、篠ノ乃さんは薄笑いを浮かべていて、失礼ですがちょっと不気味です。

きっと険しい表情をしている織斑先生も同じことを考えているのでしょう。

そして、そんな織斑先生に山田先生があわてて駆け寄りました。

もとから落ち着きのない人ではありますが、今回のそれは尋常ではありません。

普段があわあわ、という感じでしたら今回はどっしぇー！　とい

う感じです。伝わらないですか？
小型端末を織斑先生に見せ、その顔を渋面にしました。

「……現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

……始まりましたね。
特殊任務行動、その言葉に女生徒たちがざわめきましたが、織斑先生が再び怒号を放っただけで皆さんはやるべきことを思い出したかのように動き始めました。
というか先生怖いです。

「専用機持ちは全員集合しろ！　不破、織斑、、ボーデヴィッヒ、オルコット、デュノア、鳳！　それと、篠ノ之もだ！」

篠ノ之さんも気負い過ぎですし、専用機持ちの皆さんも紅椿の性能に少なからず動揺しています。
本当に大丈夫だと思いますか……？
ちらりと束さんを見ると、私の心配を知ってか知らずか、にこりと笑顔を返されました。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１０

『空中要塞、墜ちる。サンタエルバ、奇跡的に死傷者少数』
『グレイプニル墜落。千人強の乗組員の多数が死亡』
『オーレリア兵、市民の救出に尽力』

「……はぁ」

いくつかの新聞が兵舎にも届きましたが、いずれも先日のグレイプニル墜落のことしか書いていません。
まああれだけの巨体がレナル河に堕ちたんですから当然なんでしょうけど……
それに伴うレサス兵千数名の死は置いておくにしても、市民の死傷者が約五十名。
学園のクラスを丸々一つと半分程度ということですね。
それでも私のせいだと思えないことから考えるに、私は命を奪うことに慣れてしまったのかもしれません。
敵兵殺しにだけ抵抗を感じないようにしてもらったはずとはいえ、あれだけの数を殺してしまえば慣れても不思議ではありません。
……慣れたくはなかったですけどね。
現在サンタエルバのうち、グレイプニルが墜落した河の周辺二キロメートルが立ち入り禁止になっています。
機関部を壊していないとはいえ、何がきっかけで爆発、大破するかも分からないということを考慮しての措置です。

「グレイプニルが無くなった今、レサスはオーレリアを進行するだけの余力は無いはずですね」

なら、可能な限り早くレサス中央を叩くべきです。占領されたオ

ーレリアの首都、グリスウォールにレサス軍の司令部が置かれているらしいので、そこまで攻め込むことができれば戦争も終わるでしょう。

オーレリアの目的はレサスの制圧ではなくて、占領された領土の回復なんですから。

それにしても、この戦争はなにかおかしいです。

いえ、何かなどという曖昧模糊としたものではなく、レサスの動き自体が不可解すぎます。

私が来たときには既に戦争に入っていたので調べる余裕がありませんでしたが、グレイプニルを落としたことで話を聞きにきた記者の方がいろいろと教えてくれました。

去年までレサスは内戦状態にあり、それが終わった今も国民の食料すら満足にないという現状。

そして、オーレリアはそんなレサスに対して莫大な食料購入資金を援助していること。

それにも拘わらず、未だに食料事情は解決される目処がたっていないこと。

……レサスの宣戦布告ではオーレリアからの不当な搾取から脱却するということを大義名分にしていたはずです。

レサス国民も戦争に対し肯定的とのことなので、私はその布告内容が真実だと思っていたのですが……

というかグレイプニルなんかを作るだけの資金があるんなら、それで国民に……あ、そっか……

「グレイプニル（あれ）、オーレリアのお金で作ったんですね。そして国民には援助のことを伏せる、と」

確かにこれならば低い国力に見合わない軍事力と、事実無根の布告がレサス国民に事実されている理由になります。

つまり、レサス軍はオーレリアから援助された食料購入資金の存

在を国民に伏せ、そのお金をそのまま軍事費に流用したということでしょう。

全く……不義理なのは許せませんね。

戦争を早く終わらせなければいけない理由が増えました。

この戦争、オーレリア国民だけでなくレサス国民も助けることができそうです。

……人助けのための人殺しは嫌ですけど、人殺しの結果助けられる人が多いなら、それに越したことはありません。

「そこのところ、勘違いしないようにしないといけませんね……」

53．Une r?union de la strat?gie（前書き）

「作戦会議」

４回ほど消しては書いての繰り返しでした（汗

これの投稿予約をした時点でお気に入りが６６６件・・・！

不吉！（

53. Une réunion de la stratégie

「集まってもらった理由のおおよそは想像ついているだろう」

教師陣と専用機持ちか宴会用の大座敷・風花の間に集まったことを確認した織斑先生が硬い表情で静かに話し始めました。

状況が掴めていない織斑君以外は皆さん同様に厳しい顔つきです。

不安そうに辺りを見回す織斑君がいなければ私もこの空気に当てられていたかもしれません。

「現状を説明する」

織斑先生の説明を軽く纏めると、ハワイ沖において試験稼働されていたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が暴走、追跡の結果、約五十分後にここから二キロ先の海上空域を通過するとのことです。

しかも、動けるのは私達ＩＳ学園の関係者のみとのことです。

「教員は学園訓練機を使用して空域、及び海域の封鎖を行う。よって福音の制止は専用機持ちに担当してもらう。いいな？」

なるほど……まぁ、妥当なところではありますか。

専用機を持っている教員もいますがごく一部、それにこう言っては角が立つので自重しますが、少なくとも私やラウラさんは教員の方々よりも高い位置にいます。

追いつけないのは山田先生や織斑先生くらいでしょうかね。

「それでは作戦会議をはじめる。意見があるものは挙手するように」

「はい」

セシリアが早速手を挙げました。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報の漏洩が発覚した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でもって二年の監視がつけられる」

……発覚した場合、ですか。

バレなきゃいいってことですよね。それに査問委員会に招集されたところで無視して逃げ出せばいいんですし。

スペックデータを流す相手なんてならず者か敵対国の軍部だけですからね。確実に逃げ道はあります。

……平和に生きるには耳を塞ぐのが一番早い、という言葉を聞いたことがありますがその通りですね。

「その前にしなければならない質問があります」

「不破、言ってみろ」

「この作戦会議、ＩＳ学園の専用機持ちと教師のみが参加するんですよね？」

「ああ。不満でもあるのか？」

まさか、不安なんてあるわけがありませんよ。

私達、専用機持ちと一般生徒の操縦時間には数百時間の違いがあるんですから妥当な判断です。

何が問題かというと……

「……だそうですよ？　束さん」

板張りの天井に向かって声をかけます。

「……にゃーお」
「織斑先生。ここは、なんだ猫か、と言ってあげるべきですか？」
「いや、何奴、と叫んでブレードを刺すべきだろう」
なるほど。
……というわけで、早く降りてこないと命をかける羽目になりますよ？
「もう。二人とも意地悪はしちゃだめだよ！　とうっ★」
くるんくるんくるんしゅたっ、と空中で回転してからの着地。ピエロか雑技団ですか貴女は。頭も体もデタラメですね。体はワガママボディですし。
束さんは何気に織斑先生の隣に座って……完全に諦められてますね。織斑先生はスルーする事にしたようです。
そんな寸劇をしている間に銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）のデータが開示されました。
それを元に皆さんが相談を始めます
……真面目なのは良いことですが、皆さんは全てを知ってもそのままでいられるのでしょうか？
◇
「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのブルー・ティアーズと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」
「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから向こうの方が有利……」
「この特殊装備が曲者って感じはするね」
僕の防御パッケージ『ガーデンカーテン』でも連続防御は難しそ

うだよね。
……アリサのＩＳにもガーデンカーテンは装備できるはずだし、アリサもデータは持ってるはず。二人いれば防御も楽になるだろうけど……

「シャル、なにか意見でもあるんですか？」

昨日から一言も話せてないんだよね。
どうしても、あの人のことを聞きたい。
死んでしまっているみたいなことを言ってたけど、それならそれでお墓参りくらいはしたい。
でも、アリサはあの人のことが嫌いみたいだからしつこく聞けないし……
でもあの後の夜のうちに悩んで、諦めようと決めた。それでアリサに謝ろうと思ったんだけど、今日になってみればアリサは何も気にしていないような顔をしてて……
それでも僕とアリサが話せないのは、僕が気にしているからじゃない。
アリサが僕のことを全く意識しなくなっちゃったから……視界に入っても僕に対するリアクションが全くない。
偶然、他人が前を通り過ぎたみたいな反応だけで終わる。
……嫌われちゃったのかな。
確かに昨日の僕はしつこすぎたかもしれないけど……でも、こんな仕返しをされるほどのこと？
もしアリサが本当に仕返しとして僕を無視していたなら……僕だって。
なんだろう。
そう思うと、心の熱が急に冷めていったような感じがする。
……他人同士として振る舞えばお互い傷つかないよね？

「このデータ、格闘性能が未知数で保持スキルも不明だな……偵察は行えないのですか？」

ラウラが織斑先生に提案をした声で現実に引き戻された。

って、アリサのことを考えてる余裕なんて無かったね。

ラウラの言うとおり格闘性能が未知数なのは困る。

射撃型だと踏んで格闘戦に持ち込んで反撃されたら目も当てられないよ。

偵察ができるならありがたいけど……

「無理だな。福音は現在も超音速飛行を続けている。最高速度はここにあるように時速二四五〇キロを超える。アプローチも一度が限度だろう」

思った以上に条件は厳しい。

勝負は一度きり、それなら高機動が可能でなおかつ雪片で大ダメージを与えられる一夏の白式が適任かな。

そんな話の流れに気付いた一夏が自分でいいのか、なんて慌ててるけど逆に一夏以外が同じことをするのは難しい。

白式レベルの機動を実現するなら高機動用の追加パッケージが必要だし……

「一夏が単体でつっこんでも返り討ちに逢うのが目に見えてるし……誰か援護できる人いないの？」

「それでしたらわたくしが。高機動パッケージもありますし、難しい任務ではありますが尽力いたしますわ」

福音と同系統のブルー・ティアーズなら射撃を相殺できるかもしれないし確かに適任かもしれないね。

なにより格闘戦しかできない白式と射撃戦しかできないブルー・

ティアーズはその分極端にその性能が特化されてるから二人一組（ニコイチ）なら相性はいいはず。

「オルコット、高機動戦闘の訓練時間は？」
「ちょっと待ってください……二十五時間と十八分ですわ」
「ふむ、なら問題はないな。まだ意見のあるものはいるか？」

二人が作戦の要だと決まれば僕達の役割も自然と決まる。
高速で接近する一夏たちを追いかけて、可能なら援護をする。
……まぁ作戦が上手くいけば僕達がやることは墜落した福音の回収と運搬なんだけど。

「はーい！　ちーちゃん、はーい！　……はーい！」
「……」

何か思いついたのかな？
篠ノ之博士が背筋をピンと伸ばして、腰まで少し浮かせて手を挙げている。ちょっと小学生くらいの子供みたい。

「ちーちゃん、名作戦を考えたよ？」
「……なんだ。言ってみろ」
「うん！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

……ここでどうして紅椿が？
現行ＩＳを上回る性能だとしても組み立てたばかりだったら高機動パッケージも入ってないだろうし、なにより箒はまだ紅椿にほとんど乗ってない。
それでも紅椿の方が作戦遂行に向いているって自信の理由はなんだろう。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ほら！　これでスピードバッチリ！」

展開、装甲？

初めて聞くけど調整するだけで高機動が可能になるってどういうこと？

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」

第……四！？

つまり、装備の換装をしないで全局面運用ができるってこと！？

……世界のどの国もまだ第三世代型が限界だっていうのに。

集まっている人達も唖然としている人がほとんど。動揺していないのは織斑先生と箒、それにアリサだけ。

……最初の二人はまだしも、どうしてアリサも？　知ってたの？

「あの、私、やりましょうか？」

◇

「で、その展開装甲だけど、具体的には白式の雪片弐型に使用されてまーす」

雪片弐型……つまり白式の唯一仕様（ワンオフ）・零落白夜が発動するときに開いてる機構のことですかね？

雪片と零落白夜は同じものだと思っていましたが……雪片は機構だけを指すんですね。

「それで、うまくいったので紅椿は全身のアーマーが展開装甲にし

てありまーす。しかも発展型だから攻撃・防御・移動と用途に応じて切り替えが可能。つまり、第四世代型の目標である即時万能対応機（リアルタイムマルチロールクラフト レス）ってことだね。」

……この人はこともなげにそういうことを言っちゃうんですから。

第三世代型を開発することすら出来ていないフランスからしてみれば、その巨額の投資が水の泡だと言われたも同然ですよ。

しかも、それでも第三世代型を開発できていないので……これはいよいよ、政府からデュノア社への資金援助が無くなる可能性が出てきました。

デュノア社は遅くとも八月中にプランだけでも出さないとヤバいですね。

「――束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

いやいや、どうしましょうかね。

昨日から立てていた予定が狂ってしまいそうです。

――あ、そうだ。あーちゃん耳貸して？――

束さんと共にした夕食の最後、私は今日のことについて話されました。

話された、とは言っても軍用ＩＳが暴走するなんてことは予想してなかったですが。

私が束さんから聞いたのは、今日、ちょっとした事件が起きて、それを篠ノ之さんの紅椿を手っ取り早く進化させるために利用したい、ということだけでした。

だから、私は素直にその事件に関わらないことを了承したのですが……こうなってしまえば別問題ですね。

私も、フランスの第二世代がアメリカ・イスラエルの第三世代を

墜としてしまったら、不必要な問題を抱えると思ったので皆さんに任せようと思ったのですが……

やっぱり、今すぐにでもデュノア社の功績をフランス政府に認めさせる必要があります。

「あの、私、やりましょうか？」

光速とほぼ同じ弾速を誇る白狼（ウルフズロアー）の咆号なら陸地からでも攻撃できますし、成形炸薬弾（とっておき）を使って、なおかつリミッターを超えての電力供給をすれば、まず間違いなく撃ち落とせます。

「不破、できるのか？」

「ええ、一発で撃ち落とすとなるとエネルギーの充填に二十分以上かかりますが、狙撃なので時間は気にしなくてもいいでしょう」

「しかし、お前の白狼（ウルフズロアー）の咆号は接地していないと使用できないはずだが……二キロ先を狙い撃てるか？」

ハイパーセンサーだけだと九割弱にとどまりますが……

「軍事衛星とリンクさせてもらえれば九割九分というところですね。四キロになると九割五分まで下がりますが、そこで保険として篠ノ之さんと織斑君に動いてもらえばいいのではないでしょうか？」

「なるほど……」

「問題は、ジャストミートさせると操縦者の方が五体満足でいられない可能性が大きいんですよね」

一撃で撃墜するということは、当然、絶対防御が発動したところで関係ないほどの威力が必要です。

ＩＳは命を最優先にするので、下手をすると達磨になる可能性もあります。

シールドエネルギーも切れるので、その後は海水にドボン。

「下手をすれば死にます」

「……不破は、その作戦を実行したいか？」

「……命令をされれ、」

「ちょーっと待った！　あーちゃん、向こうで少し話そうか！」

……よかった。

やっと束さんが動いてくれました。

最初から私は福音を墜とす気はありませんよ。

紅椿の稼働の邪魔をすれば束さんが反応すると思ったから言ってみたまでです。

そうまでして束さんを釣り上げた理由は……

「あーちゃん！　邪魔しないって約束したじゃん！」

襖を挟んだ廊下側に二人で出た瞬間、束さんがそんなことを言いました。

……盗聴対策とか、できてるんですよね？

「しましたけど……あのままだと私の父が働いている会社が潰れてしまうので……」

「んー？　……どういうこと？」

「フランスは知っての通りＩＳ技術が遅れています。それなのに第四世代型ＩＳなんてものに出てこられると困ってしまうことに気付いたんですよ」

「んと、あーちゃんが困るの？」

……私以外が困るなら気にしないと目が言っています。

もちろん困ります。

だって、デュノア社はシャルのために守らなければならないんですから……日本に来る前のように人知れず支えないといけないんです。

「そっか……でも、紅椿には戦わせないといけないんだよ？」

「わかってますよ。なので、少しだけフランスのＩＳ開発に協力してください」

「……意図は分かったけど、あーちゃん以外の外人はなぁ」

……交換条件に文句言うだなんてフリーダムすぎる人ですね！

でも、大丈夫です。

私はＩＳの中に保存されているあるデータを束さんに送りました。

「えっと、このプログラムをＩＳでも使えるように調整してほしいんです。終わったら、私に送ってくれればいいので」

複合ステルス兵器『フェンリアシステム』。私があの戦争から持ち帰った唯一の戦利品です。

手に入れてすぐにデータを本国へ送ったのですが、解析が難航しているようで一日に三歩進んで二歩下がればまだまし、というような状況だそうです。

もし、プログラムの調整を束さんにしてもらえれば、すぐにでも組み立て始められると思うのでフランスに第三世代型が現れるのは時間の問題です。

……もし、束さんが断ったら本当に福音を撃ち落とすだけです。

外交的に問題があるかもしれませんけど……軍用機として開発された第三世代型をヨーロッパ内でもっとも技術力が遅れているフランスの第二世代型が撃墜すれば……カゲロウが世界にとって無視できない存在になるはずです。

フランス政府もカゲロウを開発したデュノア社を解体することは

できなくなるでしょう。
……福音のパイロットが死ぬ可能性もあるので、束さんには頷いてほしいのですが。

「うーん……おお！　これは楽しそうなアイディアだね！　これは天才の束さんをして思いつかなかったよ！」
「えと……頼めますか？」
「まぁ、いっか。人に騙されたのは初めてだしねー。うむむ、天才の私を利用するなんて、あーちゃんももしかしたら天才かも？」

騙したつもりはないんですけどね……どう転んでもデュノア社が助かるようにしたかっただけです。
私が表舞台に立たなくてもいい方が都合がよかったので束さんが協力してくれるなら助かります。
きっと、フランスの研究者の皆さんは私が『フェンリアシステム』を送ったとき、随分驚いたでしょうね。しかも今度は調整済みのデータを送るわけですから……父の研究チームに秘密裏に送ったのですが、何かの拍子に公になれば壮大な誤解を招きそうな気がします。
私の発明とか思われたらどうしましょう。

「うん。基礎の部分がＩＳとは違うから大幅な改良が必要だけど、臨海学校が終わるころにはデータを渡せるんじゃないかな」
「……本当に、規格外の人ですね」
「なはは～」

フランスでは遅々としていて、一ヶ月たってようやく糸口を掴んだぐらいだったのに……まぁ、助かりました。

「そろそろ戻らないといけませんが、どうやって誤魔化しましょう？」

この密談の後に私がいきなりやっぱやめた、なんて言ったら怪しすぎますし……

「んー、あーちゃんが保険になることにすればいいよ。福音が逃げ出したら撃ち落とすってね……大丈夫、アレは逃げたりしないから」

「なんの根拠があって……いえ、束さんが言うならその通りなんだと思っておきます」

「じゃ、そういうことで相談おしまーい！　バターン！」

束さん、襖は静かに開けましょうよ……

かくして、織斑君と篠ノ之さんのタッグで銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）に挑むことになったのです。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１１（前書き）

っは！

ネベラジャマー書き忘れた！

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１１

オーレリア連邦共和国首都・グリスウォールの奪還が今回の作戦内容です。

その旧市街地区をぐるりと囲むシンクトロン施設――通称・アトモスリング。

これがなかなか手強い施設です。様々な要素が絡み合ってもっとも攻め込みにくい砦になっています。

市街戦というのも理由の一つですが、そもそもアトモスリング自体が守りのための施設なんですよね。

その円形粒子加速施設の中で加速させた陽子ビームを利用し、荷電中間子（メソン）を生成、さらにそのパイ中間子から崩壊ミューオンビームをアトモスリング上に備えられたら八基の砲塔型線形粒子加速施設により偏向、対象に照射するメソン・カノン。

そしてアトモスリング自体も市壁の役割を果たすため、現在レサスの司令部が置かれているガイアスタワーになかなか攻め込めません。

メソン・カノンの威力は十数秒間照射されればＩＳでも墜ちるほどです。

作戦としては私達が空からメソン・カノンを無力化、アトモスリングの内側に潜伏期間した仲間が封鎖されているゲートを開き、陸上部隊がそこから突入、ガイアスタワーを包囲するという分かりやすいものです。

なので私達が重要な役割を担っているのですが……これがなかなか大変なんです。

レサスが占領しているとはいえ、ここの施設は全てオーレリアのものなんです。壊してしまったときの経済的・時間的損失の大きさは測り知れません。

なので、私達はアトモスリングを破壊することなくメソン・カノ

ンだけを無力化しなければならないのです。
……しかも上からはできればメソン・カノンも壊してほしくないという声もありますし……
ある意味、私のＩＳは火力至上主義の元に作られているので……こういう作戦には不向きなんですよね。
ミサイルでも装備していればよかったのですが……流石に生身でつっこむのも勇気が必要すぎますし。
幸い、砲塔の頂点以下の高度で飛行をすれば狙われないのですが……これがまたビル程度の高さでしてね。私には苦でもないですが他の方は大変でしょう。

「ラストサン隊、出ます」

なんて言っても、退院は私だけですけどね。
隊を離れた二人はまた別の作戦に従事しています。
……目標は司令部の制圧です。
それさえ成し遂げれば十分です。
なぜならレサスは再びオーレリアに攻め込む余力がないことは分かってますからね。
あのような電撃侵攻でなければオーレリア内に入ることすらできなかったでしょう。

「メソン・カノンは稼働域こそ広いですが偏向に時間がかかるため砲塔に向かって飛びさえしなければ照射から逃れられるはずです！
私は地上の戦車やＳＡＭ（地対空ミサイル）、ＡＡｇｕｎ（対空機銃）を処理するので皆さんはメソン・カノンに集中してください！」
『了解（ラジャー）！』

グレイプニルを単身で撃墜してから戦闘機乗りの方たちから信頼されるようになりました。

親しくなればなるほど守らなければいけないものが増えます……
でも、そのお陰で私は今も飛べているのです。
守るものがなければ私もとっくに……

『お、おい！　オーレリアの人型だ！』
『グレイプニルを墜とした奴か！？　っくそ！　死神が……』

カゲロウが勝手にレサス兵の無線を傍受します。
止めることもできるのですが相手の行動とかが分かったりしますからね。

『死神か……なぁ、十年前のベルカ事変でのオーシア側のエース達を知ってるか？』
『は？』
『ラーズグリーズってな非公式の隊があったんだよ。そいつら超弩級の潜水艦を二隻沈めたり、機体のカラーリングも漆黒でな……まさに、じゃないか？』
『バカ言うな……ただ、パイロットが少女だってのは本当らしいぞ……？』

む、いつの間にか撮影されていましたか……それとも殺さなかった間の生存者の証言でしょうか？
まぁ、なんにしても、やることは変わりません。

『年端の行かない女の子がグレイプニルを？　……まぁ、分別のつかないような歳なら自分がしたことも分からないのかもな。可哀相に』
「……同情される謂われはありませんよ。理解しているつもりですから」
『誰だっ！？　うわっ！　……』

「人型でも死神でも……なんなら先程のラーズグリーズとやらでも構いませんよ？」

まぁ、もう聞こえていないでしょうし、呼ぶこともないでしょうけれど。

……さすがＩＳですね。

戦車程度ならＰＩＣを切った状態での重さだけで潰せます……一体どれだけの重量があるんでしょうね？

塩の都の大火と妖精の加護を使って、淡々と地上兵器を破壊していきます。

「南側はほとんどの対空兵器を破壊したはずです！」

『メソン・カノンも残り三基だ！　……どっちが早いか賭けるか？』

「こう見えてまだ十五歳なので……というかそちらの方が数が多いんですから私不利じゃないですか」

まったく。

十五歳相手に賭けをふっかけるなんて……まぁ、結果は分かりきってますけどね。

『バレたか……アトモスリングのゲートが開いた！　こっちはもういいから地上部隊を援護してやってくれ』

「お断りです」

『なに!?』

「両方、援護しますよ」

『ひゅー♪　かっこいいねぇ！』

「ありがとうございます」

語尾にハートマークがつきそうな調子で軽口の応酬をします。

今も人は死に続けているのに……ですが、それもこの戦いで最後

ですね。

「もう……私の仲間は誰一人やらせません」

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１１（後書き）

ラーズグリーズの名前は出したかっただけでｓ

54. Retrait（前書き）

「撤退」

正味四日かかってるくせに分量はいつもどおり・・・というかいつも以下（

今回もアリシャルはないです

54. Retrait

「では、私はここからいつでも撃てるようにしていますね。織斑先生、衛星とのリンクの許可はとっていただけましたか？」

「ああ、アメリカの軍事衛星がこの上空にあるらしい。暫くしたらコアネットワークを通じてリンクのための一時識別番号（インスタント・コード）が送られてくるはずだ」

……これ、ですね。せいぜい二十文字程度だと思っていましたが、さすがアメリカです。印刷したらＡ４用紙数枚分にもなりそうなデータが送られてきました。

それにしてもアメリカの軍事衛星ですか。よく借りれましたね……というかここの上空って……衛星の標的は日本ですか？

ＩＳの性能さえあれば地上から衛星落としを敢行することだってできるのに、衛星の場所が特定されるようなことをするとは……

……繋がりました。

ＩＳを通して軍事衛星から送られてくる座標情報を処理します。まったく、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の座標だけじゃなくて映像も提供してほしいですね……まぁ、確かに座標以外は必要ないんですけどね、

それにしても……一つの脳でできることって結構限られているんですね。座標を追っていると他のことに手が回りません。

制限している二つ目の思考を再び使い始めてもいいのですが……そもそも無意識にシャルのことを考えないようにするためですし……

「衛星の機能はだいたい分かりました。織斑君と篠ノ之さんはそろそろ準備をお願いします。えっと……あと五分で出発してください」

「「わかった！」」

ＩＳにかかるとどんな機械も丸裸ですね。

本来不要なところまで根を伸ばして貪欲に情報を確保していきます。アメリカが対ＩＳ用のファイアウォールを導入していなければ違った使い方もできそうです。

……ちょっと頑張れば衛星から対地レーザーも撃てそうです。

というかＩＳ全てに言えることですが、操縦者が意識する前に軍事機密を暴こうとするのはやめてほしいですね。

朝起きたらＣＩＡに囲まれているとかヤですもん。

時刻は十一時二十八分……後二分で作戦開始です。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

織斑君と篠ノ之さんの全身が光に包まれ、次の瞬間にはＩＳアーマーが構成されていました。

……織斑君は大分ＩＳに慣れましたね。

ＩＳを展開すると、その瞬間にＰＩＣの浮遊感とパワーアシストが働くので、慣れていないと機体がいきなり浮いたり転んだりしてしまうんですよね。

これは搭乗するのではなく自信を中心に展開する専用機持ちにしか分からない感覚ですけど。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

「そういえば騎乗位も男性が下でむぐぅ！？　鈴ちゃん、何するんですか！」

いきなり口押さえられて、つい軍事レーザーを放つところでしたよ！？

「アリサ、女の子がはしたないこと言わないの……というかあんた自身顔赤くなってるじゃない」
「それは、私にだって恥じらいはありますから……と、二人とも、時間です。鈴ちゃんたちはいつでも退却のフォローに入れるようにお願いします」
「ねぇ、やっぱり私たちも戦った方がいいんじゃないの？」
戦闘は織斑君と篠ノ之さんだけの担当なのですが鈴ちゃんはそれが心配なようですね。
シャルやセシィも同じような表情です。
……まあ、二人とも出発しているので今更ですけどね。
ラウラさんだけ何も言わないのは彼女が軍属だからでしょうか。
「いいえ。私たちは日頃連携の練習をしていないので数が増えるとかえって厄介です。それならば、数的アドバンテージは減りますが、いざという時に退却が速やかに行えることの方が重要です。退却の時は私が援護するので安心してください」
「援護って……白狼（それ）の咆号以外に遠距離攻撃できる装備あるの？」
ふふふ。
よくぞ聞いてくれました！
束さんが容量をギュッとしてくれたお陰で兵装を増やすことができるようになったんですよ。
とりあえずすぐに量子変換（インストール）できるものだけを積み込んでみました。
その中にはついさっきまで試験運用をしていたスナイパーライフルもあります。
銘は……二兆あるので《スコル》と《ハティ》にしましょう。
射程は様々な制限のため三キロが限界だったのですが、軍事衛星のサポートがあるなら五キロはいけそうですね。

「えっと、鈴ちゃんとラウラさんは織斑君達を追ってください。それで福音から三百メートル地点で待機を。シャルとセシィは五百メートル地点で待機をお願いします」

一番離れたところから状況を俯瞰できるのが私なので自然と指揮も私の役割になります。

「織斑君達が福音に接触。福音は逃げ出さないようです」

『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』は名前の通り銀色のアーマーが全身を覆っているＩＳでした。

ギンギラギンにさり気なくないです。

中でも特に目を引くのが頭部から生えた一対の巨大な翼です。

……某頭部用タケトンボ型揚力発生機ですら尋常でない首の筋力が必要だと証明されているのに、どうしてあんな不可解な場所に付けるんでしょうか？

本体と同様に銀色に輝くそれは大型スラスターと広域射撃兵器の新型複合システムだとか……移動と攻撃を一つの装備で、というのは本国でも開発が進められていましたね。第三世代型は開発できない割に装備の凶悪さと実用性は世界でもトップレベルなんですよね。

織斑君達と福音の距離は残り数百、衝突まで十数秒というところですね。

「織斑君が福音との戦闘を開始します！　各自、いつでも動けるように準備を。残り五、四、三、二……」

まだ、福音は動きません。これはもしかすると……

カウントの終わりと同時に織斑君が瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用。同時にシールドエネルギーを切り裂く唯一仕様（ワンオフ）・零落白夜を発動させて福音に肉薄します。

「……っあ！」

絶対に避けられない、そう思っていた私の予想は大きく裏切られました。

刃と装甲との間を数ミリだけあけるという精度をもって福音は難を逃れました

篠ノ之さんが援護をして、織斑君はその間に果敢に斬りかかります。

……ですが福音はひらりひらりと風に舞う花びらのように確実にかわしています。

いくら重要軍事機密だとしても異常すぎますよね。だとすると、考えられるのは……

「束さん、もしかして福音のサポートしてます？」

「あら、バレちゃった。やー、箒ちゃんにも戦ってもらわないと困るからさ」

束さんから返ってきたのは予想通りの答えでした。こうなると福音の暴走の原因も束さんですね。ＩＳを乗っ取るだなんてとても人間業とは思えませんが。

「って、織斑君！　がっつきすぎです！」

零落白夜の残り時間が少ないことに焦ってか、織斑君が強引に斬りかかりました。

福音は織斑君を嘲笑うかのように軽々と避け、銀色の翼を大きく広げました。

いえ、正確にはスラスターとして使われていない部分の装甲が翼のように開いただけです。

そして、その下にあるのは……多数の砲口。

「篠ノ之さん！　織斑君を守ってください！」

身代わりになれと、そういう意味ですけど福音を一刀の元に斬り伏せられるのは織斑君の零落白夜だけ。発動にもシールドエネルギーを使うので織斑君は被弾してはいけないんです。

しかし、指示より早く羽のような形をした高圧縮エネルギー弾が白式に突き刺さります。

そして次の瞬間には圧縮からエネルギーが解放され爆ぜました。

爆発するエネルギー弾が主装備ですね。被弾する前に何らかの衝撃を与えることができれば相殺可能でしょうか……

「シャル、セシぃ！　あのエネルギー弾が織斑君に当たる前に撃ち落としてください！」

シャルの実弾が効果あるか分かりませんが、同じエネルギー兵器であるしまセシぃのブルー・ティアーズなら確実に相殺できるはずです。

それにしても……

「対した連射速度ですね……」

『アリサ、実弾は効果無さそうだけど……』

「だったらシャルは下がってください。セシぃはどうですか？」

『ちょ、アリサ？　僕も他にできることを、』

『一応、相殺はできますが銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の方が連射性に優れていますわ』

「そうですか。では無理はしないようにお願いします。私はここを動けないのでエネルギーが切れた場合、回収できる人数にも限りがあるのですから」

『何もするなってこと？』

……シャルがプライベート・チャネルでコンタクトをとってきました。

私が最後にいった言葉がシャルに当てたものだとは分かってくれたみたいですね。

「はい。銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は三百メートル離れていて、なおかつ攻撃してこない相手を迎撃しようとはしないようなので」

『それは、僕が足手まといってこと……？』

「……連携は失敗すると互いに危険ですから」

正直に言えば……私はもう表立ってシャルを守れませんから。

誰かに制限されているとか、そういうことではなくて……私自身がシャルと一緒にいることを赦せないんですから、シャルに好意を持たれるようなことをして、感謝をされても辛いだけです。

今は、きっと叩かれて罵声を浴びせかけられる方が気楽でいいです。

『アリサのバカ！　リスクを負ってでもやらないといけないことだって……』

……嘘でした。

バカなんていうありきたりの言葉でも心が鷲掴みにされたように痛みます。

シャルが優しくしてくれないのも、辛いです……やっぱり私は、

「Ｌａ……♪」

何かを言おうとした私を遮るように硬質で甲高いマシンボイスが発されました。

瞬間的に福音を見れば翼の全砲門開いていました。その数三十六。全方位に向けての光弾群の悉く(ことごと)を紅椿が紙一重でかわし、迫撃します。

そうして生まれた福音の決定的な隙を織斑は――

「うおおおっ！！」

何故か、チャンスを不意にしてただ一発の光弾を零落白夜で斬り払いました。

「織斑君!?　なんで、」

『船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か！』

「っ！　織斑君は再び戦闘に！　ラウラさん！　戦闘海域に密漁船がいるので拿捕してください！　ここからでは詳しい場所が分からないのでお任せしますが無茶はしないで下さい！」

『任せろ！』

福音を落とせなかったのは辛いですが、誰かが人命を背負うこともなかったのでよしとしましょう。あんな重荷（思い）は私だけで……

◇

密漁船を守ったことで一夏の雪片弐型の展開装甲が閉じた。一夏との特訓の中で何度も見たことがある……エネルギー切れだ。それは作戦の要を無くしたことも意味する。

「この、馬鹿者！　犯罪者などをかばって……そんなやつらは――！」

「箒！！」
「――！？」

なんだ。どうしてそんな顔で、そんな声で私を責めるんだ？
この後福音が暴走を続けて人里を襲ったらどうする！？
犯罪者数人の命で大勢の命が救われるなら軽いものだろう？
私は間違ってないだろ……？

「箒、そんな――そんな悲しいこと言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

ち、違う。
違うんだ一夏。
今のは……

「わ、私、は……」

違う。違う違う！
私は、そんなっ

「っ！？」

紅椿の、エネルギーが切れた……？
まずい。
絶対防御があるとはいえ、そもそものエネルギーが無い以上、これでは紙の服を纏っているのと同じ程度の耐久力しか……

ガコン

福音の砲口が全て私に向けられる。
あの連射攻撃……実戦で、相手が理性のない暴走ＩＳなら容赦ないだろう。
はは、死体が残れば儲け物だろう。
力に引きずられた結果がこれだ……だから、今まで力を抑制しようと……そのための心の鍛錬として剣道を続けてきたのに、何も変わっていないではないか。

「箒ぃぃぃっ！！」

一夏が瞬時加速（イグニッション・ブースト）で私の下へと向かってくる。
私を、庇うのか……？
犯罪者など死んでも構わないと言ってしまった私を？
一瞬、視界の全てが一夏で覆われ……

「ぐあああああっ！」

抱きしめられた瞬間、一夏に光弾が突き刺さった。
白式のシールドエネルギーが削り取られ、装甲が破壊され、一夏の肌が焼かれる。
肉が焦げたような臭いが現実感を奪っていく。
そんな中、私を見た一夏の目がいつも通りで……
悪夢ではないと。
自分が招いた結果だと、認めさせられた。
不破の指示で私たちを回収しにきたセシリアと鈴。
私達が撤退していく中、福音からの追撃はいっさい無かった。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１２（前書き）

回想はこれで終わり。

ＡＣＸ／Ｆｌａｓｈ－ｂａｃｋ．１２

『くっ、どこにいやがる！？』
『ま、真後ろから敵機反応！？』
『み、ミサイル！？　ダメだ！　避けられない！　うわぁぁぁ！』
『たった五機だ！　死力を尽くせ！』

たった五機の戦闘機に私の率いる隊ここまで混乱させられるなんて……

これがレサスの……いえレサス軍総司令官であり兵器産業の重鎮、ディエゴ・ギャスパー・ナバロの虎の子ですか。

『あれ？　なんか避けれた……』
『あ、見えないなら適当に打ちまくるってどうだ？』
『お前ら緊張感ねぇな！』

……まぁ、死人は出てないのでいいでしょう。

戦争は終わったので今は戦後処理としてレサスの兵器を破壊しようとかそういう感じです。

ギリギリまで接近しなければ目視することも難しい光学迷彩はグレイプニルのものの発展型でしょうか。

大型垂直離着陸戦闘機フェンリア。

その名前の由来は北欧神話の巨狼からですね。

「私のカゲロウの前で狼を騙るとはいい度胸ですね……知ってますか？　狼って他のグループの狼には容赦しないんですよ？」

塩の都（ウリエル・ジャッジメント）の大火から榴弾砲を一発。数メートル先でなにかに当たり爆発しました。

『ガーリートークが一機撃墜したぞ！　俺達も嬢ちゃんに続け！』

私が一機墜としたことで戦意が復活したんですかね？

……もしかしたら、一機墜ちたことで相手の動きが鈍ったのかもしれません。

ビュンビュンとオーレリアの戦闘機が飛び回ります。

レサス最強のエースパイロット部隊とやらも大したことはないですねー。

まぁ、私達はオーレリア中のそういう人たち（エース）をかき集めてきた混成軍なので仕方ないかもしれませんが。

機体の性能が戦力の違いだと思わないで下さい。最後にものを言うのはパイロットの腕です。

……私は両方とも備えてますけどね。

これで最後となると気分も少しだけ楽しくなってきます。

まぁ、戦争が終わったらタサキさんの暗示が解けて鬱になるんでしょうけどね。

「ハウンド2、前方左に三十二度。そこから右四十度まで機銃掃射です」

『了解！』

「ターキー、気付いてないんでしょうが貞操の危機ですよ？　初めては後背位ですか？　ワイルドですね」

『普通にケツ付かれてるって言えねぇかなぁ！？』

「だから、突かれてるんですよね？」

『ちがぁう！』

うーん。

私、兵舎の皆さんと仲良くなってから下品になった気がします。

ついこの前までエッチなことも苦手だったのですが……まぁ、ピ

ュアなままじゃやってられませんからね。

「おっと、テリア1、二秒後にミサイル発射どうぞー」
『あいよ！　ってうぉ！？』

ハウンド2の機銃掃射から逃れて、ちょうどテリア1の目の前を通り過ぎようとしていたフェンリアが墜ちました。
……私の指揮能力って実は相当高いんじゃないですか？

「あ、ターキー、黒くて硬くて熱そうな棒状のものが後ろから……」
『ミサイルだろ！？』
「今度は白いのがぴゅっぴゅっと……」
『もう、表現と現実の差が激しすぎる！？』

おー。
軽口を言いながらもあの機動……素早い七面鳥ですね……きっと痩せてて美味しくないんでしょうけど。

「あぁターキー、これが終わったら七面鳥の丸焼き食べましょうよ」
『こっちの死亡フラグをお前が建てんな！？　本当に死んだらどうするんだよ！？』
「やー、死なないと思いますよ？」

私がいますから。

「あ、ターキー、そのまま急下降から右旋回。下降と同時にミサイル二発お願いします」
『んな、いっぺんに言われても分かるか！』
「とか言いながら、しっかりやってるじゃないですか」

ターキー……本名ルシアさんのミサイルはそのまま海面へ向かって飛んでいきます。
うーん、女性ながら見事な手捌きです。

「その腕前でいったい何人の男を堕としてきたのでしょうか……？」
『人聞きがわる……撃墜の方が悪いか？』
「多分……」
『で？　ミサイルは外れたけどどうするんだ？』
「いえ、ミサイルは囮で……そろそろ」

ぐしゃっ、という音がルシアさんの上方から響きます。
アリさんとアリさんがごっつんこ、というやつです。
何が起きたのかといえばルシアさんを追いかけていた機体とルシアさんのミサイルを避けようとした機体がぶつかったんです。
本来ならそんなことは起こりえないのですが……

「オウル隊の皆さん、もうジャミング切ってくださーい」
『あいあいさー！』

私達のミサイル誘導にまで影響を与えるほど強いジャミングを仕掛けていたからです。
もちろん、目視できる機体にぶつかることはありませんがフェンリアは見えませんからね。
そこを私がハイパーセンサーを使いながらフェンリアを誘導していたわけです。
で、ラスト一機は皆で狙い撃ちです。
今までと違って誘導弾になってますから避けるのはきっと辛いですよ？

「さて、では私はレサスの基地に潜入して兵器データを破壊してき

ます」
『了解！』
これで、本当に戦争は終わりですね。
……データは盗んでいきましょう。もったいないですし。

55. Quelle est la punition ? elle?（前）

「彼女への罰とは」

お待たせしました。５５話、です。

で、じ、時間はかかりましたけど、ネギまの方の文字数とかフラッシュバックの方とか考えると全部で二万二千文字くらいなんですよ！

ということで許して下さい（

あとユニーク１１０００ありがとうございます

55. Quelle est la punition ? elle?

織斑君が墜ちました。
あの様子から四肢を失ったりはしないでしょうが、背面に大きな火傷痕が残るでしょうね。
……世界で一番嬉しくないお揃いです。

「心配ですね……」

既に私が訪れた病院にも連絡が入れてあります。
動かしていい状況なのかも分からないため、彼女たちに来ていただくことになりました。
まったく、昨日の今日で医者と再会するなんて笑えませんね。
……そういえば、あのお姉さんからは幸せになれと、苦境に負けるなと言われていましたね。
自分の罪を突きつけられて、シャルから距離を置いて……その挙げ句、この結末です。
全然、実践出来てません。ダメダメです。
……ここだけの話、私も連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）を使えば篠ノ之さんくらいの機動力は出せたんです。多分、討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）なら福音のシールドエネルギーを大きく削り取ることもできたはずです。
それをしなかったのは束さんとの取引があったから。
……今思えば、私は友人たちが怪我をすることよりもフランスが第三世代型ＩＳを開発することをとったんですね。
さすがヒトゴロシです。最低すぎます。

「アリサ……一夏が昏睡状態に入ったよ」
「しってます……」

一番最初に海から戻ってきたのはシャルとセシィでした。セシィは精神力を使い果たしたのか部屋へと直行し、シャルは私を責めるような目で見ています。

「アリサ、どうして僕に戦わせなかったの？」

「それは……連携のとれない多人数作戦は危険ですから……」

「僕は誰にでも合わせられる……アリサもそのことは知ってるはずだよ？　あの時、僕が下がらなければ一夏は墜ちなかったかもしれないんだよ！？」

「それは……ごめん、なさい」

……本当は慣れない連携が危険だなんて思ってなかったんです。私がシャルを守れないからというのも……建前です。本当は……私以外の人にシャルが合わせて動くのが嫌で……ただの、嫉妬だったんです。

そんな、一時の感情で、私はなんてことを……

「そうだ……不破、お前のせいだ！　お前のせいで一夏は……」

「っ！　篠ノ之、さん……」

ラウラさんに肩を貸されて戻ってきた篠ノ之さん。織斑君を背負った鈴ちゃんは何も言わずに歩き去っていきました。

篠ノ之さんはラウラさんを振り払って私に詰め寄ってきます。きっと、一番近くだったから……怒りも一番激しいのでしょう。

「お前がもっとしっかりしていれば……ラウラやシャルロットたちも参加させていればこんなことにはならなかった！」

「それは……」

「それに！　なぜあの密漁船のことを前もって伝えなかった！？　衛星からの映像を見ていたのだろう！？　あの船さえなければ作戦

は成功に終わっていたのに！」

戦闘中に放心した人に言われたくは……！

……やめましょう。ここで言い争っていても不毛です。

「箒、落ち着け。不破を責めるよりも一夏の近くにいた方がいい」

「ラウラっ！　すまん……そうだな」

ラウラさんが篠ノ之さんを宥めて先に部屋に行かせてくれました。

私は……どこで間違えたのでしょうか……？

私が予想したとおりに進めば問題は何も無かったはずなのに……

「……アリサ、今回のことは誰のせいでもない。私達は今まで一度も多人数での作戦を経験していないんだ。お前の判断は正しかった」

「……ですが、密漁船は……」

「それこそアリサのせいではないんだろ？」

「そんなこと、」

「アメリカの軍事衛星からの情報には銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の座標情報しかなかった……違うか？」

……それは。

「それに、お前は密漁船の位置を知らないと言っていたからな。違うとは言えないだろう？」

「……」

「言い訳は無様だが弁解はすべきことだと思うんだがな」

「……同じことじゃないですか？」

「さぁな」

ラウラさんがアメリカのドラマのように肩をすくめました。

でも、私が責められることを我慢すれば皆楽ですよね……？

「あの……ラウラさんは軍人さんなんですよね？」

「ああ」

なら……

「人を殺したことは、ありますか？」

「無い……だが、いずれそういうこともあるだろう」

「そうですか……変なこと聞いちゃってごめんなさい」

「アリサ……お前、何を考えてる？」

ヤですね。

そんなに怖い顔しないでくださいよ。

「私の白狼（ウルフズロアー）の咆号は今でも銀（シルバリオ・）の福音（ゴスペル）に向けられています。仮に私が、最初から撃ち落としていれば、織斑君も……」

「だが、操縦者の命の保証はないんだろう？」

私が殺すことを許容すれば、束さんのお願いは聞けなくなっちゃいますけど誰も怪我しませんでした。

……銀（シルバリオ・）の福音（ゴスペル）の操縦者を覗いて、です。

あの場面で引き金を引くことが専用機持ちの義務だったのかもしれません。

そういう意味では、確かに篠ノ之さんの言った通り全て私のせいです。

「人を殺すには覚悟がいる。私も覚悟はできているつもりだが実際にはどうだかな」

「あんな覚悟、もてない方がよっぽどいいです」

「ふっ、まるで本当に人を殺してきたかのような物言いだな」
「……そうですね」

本当は……殺せと言われたら躊躇せずに実行できます。あの戦争で、私の感覚はとっくに麻痺しちゃってますから……
それでもそうしたくない理由は……また、シャルとの距離が開いちゃうから……

片や大企業の社長令嬢。
片や千人以上を一方的に殺害した英雄（ヒトゴロシ）。
真っ赤な道程（みち）を歩いてきた私が、キレイなままのシャルに近付いたら……シャルまで血（あか）く染まっちゃいます。
そうやって、自分がシャルと釣り合わなくなっていくのが怖いから……だから、誰も殺したくないだけなんです。
……完全に自分本位の生き方なのに、お姉さんが言っていたような笑える生き方はできそうにありません。
福音に意識を戻そうとした瞬間、ポツリポツリと雨粒が頬に落ちました。

「……降ってきたな」
「天気予報は晴れだったんですけどね」
「体が冷える前に戻ろう……アリサ？」
「いつ、福音が逃げ出すか分からないので、ここで警戒しています。白狼の咆号（ウルフズロアー）の射程外に逃がすわけにはいかないので」
「……すまん」
「私の役目です」

私の仕事は銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が逃げ出したら撃ち落とすこと。その際の生死は不問のようです。
そして、それは逆に言えばそれ以外では私が作戦に関わることは

できないということです。
……逃げ出してくれたら、言い訳ができるのに。
……逃げ出さないでくれれば殺さずにすむのに。
相反する二つの希望がごちゃ混ぜになってます。
降り出してすぐに激しさを増した雨に打たれながら、私はただただ白狼（ウルフズロアー）の咆号を福音に向けるだけです。
……このまま、逃がすことだけはしません。

◇

作戦失敗から三十分。一夏はまだ起きない。
アリサを除いた五人が一夏を見守ってる。

「……ラウラ。アリサはどうしてた？」
「まだ、白狼（ウルフズロアー）の咆号を福音に向けている。多分、ここに来る気はないだろう」

やっぱり。
あの子は自分の役目に忠実だから……普段は一夏とそれほど親しくしてないけど、アリサも心配してるはず。
戻ってきたときアリサに声をかけなかったのは失敗したわ。一夏のことで頭がいっぱいになっちゃって……
あの時、箒にアリサのせいだ、なんて言われてたけど……本当にそう思い込んだりしてないわよね？
箒はアリサを逃げ道にしてるみたいだし……どうしろって言うのよ。

「アリサ、風邪引かないといいけど……」

シャルロットだけは、窓辺からアリサの背中を見てる。普段のシ

ャルロットなら迷わず傘を差し出しに行ってるけど……この子もこの子で思うところがあるのかしら。

「不破が密漁船のことを前もって誰かに言っていれば……」

「あれは、アリサのせいではない……と思う」

「ラウラ……？　どこが……どこが不破のせいではないと言うんだ！　やつは密漁船の存在の報告を怠った！　そのことを誰かに言っていれば対処もされて、あの時、一夏も迷わず福音を攻撃できたはずだ！」

「違う。不破は密漁船、」

「はい、ストップ。怪我人の近くで騒がないてくれない？　やるなら外出て」

ここは病院じゃないけど怪我人はいるんだから。

……さっきからセシィが一言も喋らないけどどうしたのかしら？

「……誰のせいかと聞かれれば、わたくしにも責任はありますわ。福音のエネルギー弾はわたくしでも対処できたのですから」

「お前まで不破を庇うのか？」

さっき窘めたのが良かったのか、箒は激高しなかったけどその怒りは肌で感じられる。

でも、逆にどうして箒はアリサに責任を被せたがるの？

「あの密漁船は私たち全員が感知できる場所にいたわ。アリサが誰かに言っていればってことなら気付かなかった私たちにも責任あるわよ」

「しかし……そうだ。そもそも不破が福音を撃ち落としていれば……！」

この、バカ……

「あいつが福音を撃ち落としていればこんなことにはならなかった！　一夏は怪我もしなかったし、私達が危険をおかす必要も、」

ゴッ！

ラウラが箒を殴り飛ばした。

まぁ、ラウラがやってなかったら他の誰かがやってただろうけど……まぁ、その場合は拳じゃなくて平手打ちだっただろうから、ラウラのすぐそばに立っていたことに少し同情するわ。

急な展開に部屋の中の時間が止まったような気がした。その様子を見ていた私達だけじゃなくて殴ったラウラ自身も自分の行動に驚いて困惑している。

「つぅ……貴様」

部屋の中で動いているのはたった二人。

低い声でラウラを威嚇しながら殴りかかろうとしている箒と……その間に滑り込んだシャルロット。

「ちょ、危な……！」

既に殴りかかる段階に入っていた箒はシャルロットの乱入にも止まることができない……ううん、止まろうと考えてないかも。

そして、箒が投げ飛ばされた。

……あれ？

「アリサの真似は難しいね……」

シャルロットが、投げたの？
しかもアリサの真似ってことはぶっつけ本番？
相変わらず、凄まじい子ね。
……フランスはＩＳこそ第二世代だけど操縦者のレベルは他を凌ぐわね。

「箒、今言ったこと、一夏が起きてても言える？」

うつ伏せに倒れた箒の背中にシャルロットが座る。右肩を極めながらだから箒もまず起きあがれないけど……えげつないわね。

「……言えるに決まっているだろう。一夏だって同じことを考えているはずだ！」
「ふーん……ねぇ、箒は知ってるかな？　アリサの白狼（ウルフズロアー）の咆号の火力って競技規定違反どころか非人道的兵器に数えられる程なんだよ？　……あれの最高威力はＩＳの装甲ごと操縦者を消し飛ばすだけの威力があるし、撃ち出す物に制約がないからね」

やっぱり……アリサが使ったところは一度しか見たことなかったけど、あの時も無人機とはいえ下半身部分を消滅させるほどの威力だったし、そうじゃないかなとは思ってたのよ。
私が予感してたくらいだから千冬さんも気付いてたはず。
それでも言わないってことは黙認してるんだろうから私もあえて言ったりしなかったけど……

「それが、どうした？」
「わからない？　白狼（あれ）の咆号はね、威力が制限されてても弾着の衝撃、火薬の爆発、光速によって生まれる衝撃波、その全てが超高威力で……殆どのＩＳは一発でシールドエネルギーが大きく削られるんだよ」

「だから、それを撃っていれば！」

シャルロットが言いたいのは、そういうことじゃない……つまり、

「一応、威力制限もされてるから確かに操縦者は死なない。でも制限の中だと銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）を落とせるだけの威力は出ない。だからアリサは制限を無効化したわけだけど……これがまた威力の調整が難しくてね」

「はっきりと言え！」

「……白狼の咆号（ウルフズロアー）は本当の意味で必殺武器（リーサルウエポン）なんだよ。引き金を引いたらまず間違いなく福音の操縦者は死んじゃう。箒はアリサに人を殺せって言える？　一夏がそんなこと言うと思う？」

まず間違いなく言わないでしょうね。むしろ、俺が死ぬ気で頑張るから絶対に撃つな、って言うわね。

もちろん、私だって言えない。

「……それでも」

「ん？」

「アレを不破が撃ち落とせば、被害が広がることも抑えられるだろう……！」

一人の犠牲で多くを救う……まぁ、それも一理あるわね。

暴走したＩＳが市街地に向かったら何が起きるか分からない。そもそも超高速飛行をしているだけで人体に影響を生み出すんだし。

正論ではあるからシャルロットも何も言えなくなる。

「箒、あんたの言うことは確かに正しいわよ」

「鈴……」

「でも、アリサにヒトゴロシになんてなってほしくない。どんな事

情があっても、それはダメよ」

実行するのはアリサ一人だから、私達が一緒に背負うこともできない。

アリサは溜め込むタイプだから、余計に……

今度こそ部屋の中が静かになる。

ったくもう！　一夏、こういう時はあんたの出番でしょ。いつも、なんとかしちゃうのに、どうして寝てるのよ……！

「邪魔するよー……あらら。うーん……事情は分かってるけど、とりあえず箒ちゃんのこと離してあげてくれないかな？」

「あ、はい」

篠ノ之博士の登場で部屋の中が疑問符で埋め尽くされた。

いや、一夏の知り合いみたいだしおかしくないんだけど……

シャルロットも面食らって素直に離しちゃうし、当の箒は目を丸くしてる。

「んー説明がめんどくさいなぁ。とりあえず、あーちゃんが来る前にこれ見てよ」

そう言って取り出されたのは一枚のディスク……ブルーレイ？

映画なんて見る気分じゃないんだけど。

「それは、なんですの？」

代表して質問を投げかけたセシリアに篠ノ之博士は淡々と答えた。

「んー？　あーちゃんのＩＳに残されてた戦闘記録。迫力満点の……ドキュメンタリーだよ」

……どういうこと？

◇

寒いですね……夏とはいっても雨に濡れてしまえば暑さも関係ないですね。

それに、雨が降り始めてからもう二時間です。

寒いのは、なるべく長く白狼の咆号（ウルフズロアー）を構え続けるために、エネルギーシールドを始めとする耐寒機能などの機能を全て切っているからですね。

……織斑君は大丈夫でしょうか？

ラウラさんのお陰で私だけが責任を感じなくてもいいと言うことは理解しましたが、納得できたわけではありません。

私も、皆さんと同様に織斑君の様子を見るべきなのかもしれませんが、その間に福音が逃げ出したら目も当てられないですし……

今頃、私は薄情だと思われているでしょうね。

箒さんはもちろん、鈴ちゃんもシャルも怒ってましたし……私のせいだと思われているのでしょうか。

……心が痛いです。

死んじゃいたくなるくらい、内臓全てが縮んでしまったと思うくらい、痛い、です。

もう……泣いちゃいたいです。

でも、それは、

「不破ぁ！！」

赦されませんよね。

私がどう思ってるかは関係なくて、篠ノ之さんからすれば私のせいなんですから。

「……篠ノ之さん。まだ、言い足りませんか？」

そんなに責められても、私がしてあげられることはないのに……

どうして、私ばっかり。

織斑君に怪我をさせる気もありませんでした。

密漁船の存在を知っていたら、すぐに対応してました。

束さんとの約束がなければ一番前で戦いました。

私だって辛いのに……私は、自分の仕事をできる範囲でこなしていたのに……

「どうして、責められないといけないんですか……？」

「お前が……ヒトゴロシのくせに殺すことを拒否したから……」

「……え？」

ヒトゴロシ？

篠ノ之さんは何を……？

私が、ヒトゴロシだと言いましたか？

どうして……どうして、知ってるんですか？

「……否定しないということは、あの戦争の記録は真実なんだな？」

「きろ、く……？」

「姉さんが持ってきた。カゲロウに記録されていた映像を抽出したものをな」

束さんにカゲロウを見せた時に見つけられた……？

でも、なんで束さんはそれを見せちゃったんですか？……？

私は、束さんの言うとおりにしたのに……なんで、裏切られてるんでしょう？

私よりも親しい織斑君が大怪我をしたからですか？
束さんが宇宙開発のために造り上げたＩＳを戦争に使っていたからですか？
もう、私が……いらないから、ですか？

「私だけじゃない。一夏の様子を見ていた全員、そのことを知った」
「シャルも……？」
「あぁ」

……あぁ。
やっと、隠し事しないですむんですね……シャルにもセシィにも鈴ちゃんにも……嘘をつかなくていいんですね。
でも……もう、友達ではいられません。
私は千人以上を虐殺してて、皆はキレイですから。
皆にとって、私は恐怖される対象になってしまいました。
軍人のラウラさんは分かってくれますかね……分かってくれると、いいですね。

「あれは、真実です……私が生きるために必要でしたから……」
「……つまり、福音の操縦者を殺さないのは、危険な目に遭うのが不破ではなかったからということだな？」
「違っ……」

違う……？
本当に？
私が殺したくないのは、なんのためですか？
あの時はタサキさんに嫌悪感を消してもらっていましたが、それは兵士だけの話。それに、兵士以外の人も何人か殺して……その時も何も感じませんでした。
……もう、嫌悪感を感じないほど慣れてしまっているのですから

答えは決まっています。
自分の……ためです。
皆に嫌われたくなかったから……
私が損するから……

「……既に皆知っているんだ。もう気にする意味がないだろう？
なのに、どうして撃たない……？」
「それ、は……」

もう、嫌われちゃったから……何も変わらない？
むしろ、撃てば皆を助けたことになるんでしょうか？
そうすれば、人を殺せる存在としての価値を認めてもらえますか？
怖がられても、いざという時に必要としてもらえますか？
それ、なら……

「いえ……それでも、撃てません……」
「何？」
「篠ノ之さんを疑うわけではありません。でも……まだ、他の誰とも話していません。私は、少しでも可能性があるなら、皆を信じたいです……皆が、私をどう思っているのかを……聞きたいです」

セシィは、私を傷つけないと言ってくれました。
鈴ちゃんには人の感情を勝手に決めつけるな、と。
ラウラさんはこんな私のために本気で怒ってくれました。
そしてシャルは……私を嫌いになる人なんていないと。

「私は、今まで勝手な思い込みで空回りして、怒らせて、誤解させて、怖がらせて……ＩＳ学園で初めて、私のことを見てくれる友人ができたんです……」

入学した当初は諦めていました。
せめて、シャルをサポートできるくらいの立ち位置を保持していればそれでいいと。
でも、セシィがいて。
一松さんたちに話しかけられて。
鈴ちゃんがルームメイトになって。
ラウラさん、篠ノ之さん、楯無先輩、クラスの皆さん……いつの間にか仲良くしてくれる人が増えました。
そして、シャルとの誤解も解けました。

「ここで、福音の操縦者の命を奪ってしまったら、教室に戻れなくなりそうで……」

既に千人も殺しているのに、と言われてしまえばそれまでですが……日常にまで、命の奪い合いを持ち込みたくはないんです。
殺すのは……どうしようもなくなったときだけです。

「そうか……不破、すまなかった」
「……え？」

どうしてこの流れで謝られるのでしょう……？
勝手なことを言うなと、お前が殺せば全て解決するんだと、そう怒られるとばかり思っていたのですが……

「姉さんが私達に映像を見せたのは本当だ。だが、不破を貶めるためじゃない。お前が悩んでいたことも、ずっと自問自答していたことも、全て記録されていた……お前がやらなければ、誰かがやられていたんだろう？　あの方法しかなかったんだろう？」
「それは……」

殺さないように戦うのは時間がかかって、その間に味方が攻撃されてしまうから……

中途半端だと言われて、味方だけは絶対に死なせないと決めたから……

でも、私が殺した中には殺さなくてもよかった人もいたはずだということを考えてしまって……

「……私は卑怯者だな」

「篠ノ之、さん？」

「責任を、全て不破に被せようとしていた。私のせいで一夏がああなったなんて認められなかったから……」

篠ノ之さんが福音との戦闘があった場所を睨みます。

……きっと、あの時の自分を睨んでいるのでしょう。

握り締められた拳は鬱血して白くなって、震えています。

「私の、せいなんだ……競技ではなく実戦だというのに気を抜いてしまって。いや……そもそも力を得たことが嬉しくて浮き足立っていた。何でもできるように感じられて、勝ち以外の可能性を考えすらしなかった」

だから、撤退の可能性を視野にしていた不破を馬鹿にしてすらいた、と自嘲の表情で言いました。

どこか、すっきりしたような表情の篠ノ之さんに私は何も言えません。

私だって、私情を挟んでいたんですから何かを言えるわけがありません。

それでも、篠ノ之さんの次の一言だけは頭にきました。

「私は、もうＩＳには乗らない。また、誰かを傷つけてしまうかと

思うと怖くて乗れない。最初から、乗るべきではなかったんだ……」
「それは……いけません」
「不破……？」

それじゃ、駄目なんです。

「篠ノ之さんは束さんの妹ですから、誰かに利用されないとも限りません。ＩＳは自衛のために絶対必要なんです」
「でも！　また、一夏が今回のようなことになったら、私には耐えられない……」
「だからこそでしょう！　……篠ノ之さんが危険な立ち位置だと気がついたら織斑君はきっとあなたを守ります。その時、なにもない篠ノ之さんは足手まといです」

襲撃者が一人ならいいです。
でも二人なら？　もっと増えたら？

「篠ノ之さんが戦えなければ、織斑君は余計に危険な目に遭います……ただでさえ、織斑千冬の弟で唯一の男性操縦者という特殊な立場なのに……」
「不破は……視野が広いな」
「素がネガティブなので、最悪の事態を考えることは得意なんです。まぁ、それに……撃たなかった私が言えることではありませんが、専用機持ちはそういうワガママが許されるような立場でもないんですよ」

持てる者の義務（ノブレス・オブリージュ）とでも言いますか。あらゆる場面において特権を持つ反面、しなければいけないこと、してはいけないことというものも多いんです。
……下手をすると、学園を卒業したら皆さんと会えなくなるかも

しれないくらい、それは厳しいものです。

「明日のことは分かりません……ですが、今は戦う時です。それでも戦えないと言うなら――」

努めて、無感情に篠ノ之さんの瞳を見つめます。いかにも本気、そういう雰囲気を感じ取ってもらわないといけませんから。

「私が紅椿を破壊してあげます。きっと将来は織斑君が死ぬ気で守ってくれるでしょうね？」

「だが……どうしろと言うんだ！　戦う意志を持ったところで今更じゃないか！　たった一度のチャンスを逃した！　次は追いつく前に逃げられるかもしれない！」

「……逃げ出したときは、私の出番ですよ」

そうなったら、私の意志に関係なく撃ち落（ころ）とします。

そのために私はここに立っているんですから。

私の覚悟……というよりは諦観を感じ取った篠ノ之さんの瞳が揺れます。

気にしないで下さいと言いたいですが今の私では説得力がないでしょうね。

「なんだ、心配して来てみれば……アリサも平気そうね」

「鈴ちゃん……？」

「アリサ、風邪引くわよ。ほれ」

ぱさ、とバスタオルが頭にかけられました。

ありがたいのは確かですけど……鈴ちゃんは気にしていないのでしょうか？

人を殺すという禁忌（タブー）を選択肢に持っている私が……

「やー、驚いた。そりゃ、あんな地獄を体験してたなら勝てないはずだわー」
「……あの、鈴ちゃん？」
「はぁ……アリサ、正直ね、あのアリサは怖かった。戦闘機を爆発させても何も感じて無さそうだったから」
でもね、と鈴ちゃんは続けます。
「私のアリサは優しいの。あれもアリサの一面だけど、私にとってアリサは泣き虫で甘えん坊でおせっかいなルームメイトよ」
「そんな無茶な……」
「それに……私達だって、いつか人を殺す時が来るかもしれない。今は抑止力で止まってるけど、いつ兵器になるか分からないんだから」
アリサはその覚悟を持たせてくれた。
……鈴ちゃんはそう言いましたが、そんなの嘘です。
そんな簡単に割り切れるわけがありません……
「ったくもう！　アリサは頭で考えすぎよ！　そりゃ頭でアリサは人を殺したって考えたら怖いわよ！　でもアリサといる時にそんなこと考えてられないっての！」
「少し目を離せば怪我をしてそうで、いつもハラハラドキドキさせられていますもの」
「セシぃ……？」
わ、私そんなにやんちゃだとは思わないんですけど……
「アリサ、お前は人と話すときにいちいちコイツは息が臭い〇〇さ

んだ、なんて考えるのか？　それと同じことだ」
「ラウラさんまで……というか、そんな簡単な話じゃないと思います」
……臭い息が凶悪犯罪になりました。いや、息が臭いのとヒトゴロシを同列にするのはさすがに無理がありますよ。
というかですね……
「そんな、冗談を言われても……気を遣わないで下さい……」
本当は異端だと感じているはずです。
それを誤魔化されても傷つくだけです……
「はぁ……まぁ、アリサなら仕方ないわね。最終手段よ」
「さ、最終手段……？　そこはかとなく、」
ぎゅ……
「アリサ……ゴメンね。気付いてあげられなくて。本当は、僕達に知られるのがずっと怖かったんだよね？　嫌われるんじゃないか、捨てられるんじゃないか……必要とされなくなるんじゃないかって」
「シャル……？」
後ろから抱きしめられているので顔は見えません。
でも、回された手の位置や暖かさ、なにより優しい声がシャルだと告げています。
……鈴ちゃん、ズルいですよ。
ここで、シャルなんか連れてこられたら……
「アリサは嫌われるのが怖いんだよね？　だから、嫌われても言い

訳にできるように自分の汚点を人に受け入れさせないんだよね？
私なんて嫌われて当然……そう思えれば楽だから」
「そんな……ことは」
「あるよね？　まぁ、さすがにアリサが千人も殺したなんてことは驚いたし、それができることはやっぱり怖いよ」
「っ……」
「でもね？　僕達はそれでも……ううん、なにがあってもアリサを嫌わない。捨てない。たくさん頼る」

シャルの言葉はすっと心に入ってきます。
でも……
それでも……

「私は、ヒトゴロシですよ？　両手どころか体中が血に染まっています。もう、命令されれば躊躇なく人を殺せます。そんな人間を嫌わない人なんていませんよ……」

なにより……私が私を嫌っているんですから。
自分を好きになれない人は誰からも好かれないと、偉い人も言っています。

「アリサ……前にも言ったけどね？　僕達のこと心の底から信用してほしいな。僕達がアリサのことを大切に思う気持ち、信じられない？　アリサは僕達の気持ちを裏切るの？」

そんなことは……でも……怖い。
今は優しくしてもらえてても未来は分かりません。
いつ嫌われるか分からないなら……いっそ、このまま……

「アリサ、僕は嫌いな人を抱きしめたりしないよ？」

「……でも、」
「アリサが不安になったら、いつでもこうするから……それに、アリサのお陰で助かった人たちもいたでしょ？　自分を許してあげられないかな？」

……綺麗事ですよ。
誰がなんと言おうと私は人を殺したんです。その結果、人が助かっていようと……それは、変わりません。
なのに……どうして皆、私に優しくするんですか？
私がほしかったのは優しい言葉じゃなくて罰なのに……どうして、私も救われた気になんてなってるんですか……？

「……私を抱きしめたら、シャルまで汚れちゃいます」
「だったら、半分背負うよ。フランスのＩＳが戦線配備されたんだから、もしかしたらアリサじゃなくて僕が戦争に行ってたかもしれない」
「そんな、それは詭弁で、」
「本気だから」
「……私は、一緒にいても、いいんですか？」
「うん。いて……？」
「……はいっ！」

それだけ言ってもらえれば……もう十分ですよ。
すぐに、とはいきませんけど……少しずつ、私のことを考えていこうと思います。
……この未来に対する不安が、罰なんでしょうか？
もしそうなら、たくさんの人を殺したことを忘れないでいようと思います。償えるとは思っていません。でも、彼らを言い訳にしてしまっているなら……それは最悪なことですから。

「……だから、半分こはできません……これは私が背負うべきものです」
「何か言った？」
無責任に誰かに預けるなんてことはできません。
「いえ、なにも……」
「あら、アリサさん泣いていますの？」
「……あ、雨ですっ！」
「最近はアリサさんもよく泣きますわね」
だから泣いてませんってば！
うふふ分かってますわみたいな顔しないで下さい！
……ホントに皆、私を元気づけるのが上手で困ります。
「……では、織斑君の弔い合戦といきましょうか」
「や、一夏は生きてるから」
そうでした。
「ふぃ～～～……一件落着！　かな？」
「束さん……？」
場違いに明るい声に振り返ると、いやー働いた働いた、と言わんばかりに額を拭う束さんがいました。
いや、本当にツッコミ甲斐のある人ですね。
「っは！　あーちゃん！」
「……なんですか、その今気付いた！　みたいな白々しい態度は」
「……あーーちゃーーん！」

束さんは私の言葉にも反応しないで、腕を広げたまま駆け寄ってきました。
映画的に言うなら恋人との再会シーンでしょうか。
……まったく。
私の悩みを解決するためとは言え、戦争のことを皆さんに明かしたことには怒ってたんですからね？
それなのにそんな風に寄ってこられたら……

「怒りが蘇るじゃないですか……っふ！」
「あーちゃん！　って、わぁぁぁ！？　……ぐぇ！」

私からも抱きつく……と見せかけてのラリアットです。
助けてもらったのには感謝してますけど少しは申し訳なさそうにしてはくださいっ！

「えへへ～。すっかり元通りだねっ！」
「……ふう」

この人は、また満足そうに笑いますか。
まったくもう！

「皆さん風邪引くので花月荘に入りますよ！　ほら、早くして下さい！　臨海学校は今日で終わりではないんですから！」
「アリサ、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）はいいのか？」
「逃げませんよ。そうですよね、束さん？」
「そだねー。よーし！　じゃあ、いっくんの部屋でどんちゃん会議だぁっ！」
「不許可です」

一応、怪我人の部屋ですから……

55. Quelle est la punition ? elle?（終）

次の更新はいつになるのか……

56. Un chat sur le kotatsu.（前書き）

「炬燵の上の猫」

～メープルシロップパンケーキ、砂糖たっぷりの紅茶と召し上がれ～
なんて評価が付けられるような作品を書きたいですね。

というか連続更新の辛さを知りました。
書き始めの頃の私、頑張ってたなぁ・・・

56. Un chat sur le kotatsu.

「さて、福音にリベンジするとは言ったものの具体的にどうしましょうか？」

束さんが主張していた織斑君の部屋ではなく、その向かいの空き部屋を借りて作戦会議中です。

織斑君がダウンしている以上、一撃必殺は難しいですし……

ただ、アタッカーは篠ノ之さんで決定ですね。

「それなんだけど、箒は防御にもエネルギーを回してたからエネルギー切れが早まったんじゃないかな？」

「だとすると、防御役に徹する人と援護をする人、そして攻めるための人ってのがいいんじゃない？」

シャルの発言を踏まえての鈴ちゃんの提案。

うーん……つまり、アタッカーは防御役の人の陰に避難するということですね。

「とりあえず、わたくしは援護いたしますわ」

「そうだな。私も援護に回ろう。あの手の相手に有効な防御も攻撃もシュヴァルツェア・レーゲンにはないからな」

今度はセシィとラウラさん。

うーん。

この空気、久しぶりですね……

「そうですね……それなら私の役割は、」

「アリサは箒と一緒にアタッカーがいいと思うな」

「え……ですが……」

束さんとの約束があるので、私は直接関わっては……
やっぱり、ＩＳ用に調整したあのステルスシステムは捨てがたいですし……これ以降に束さんの助力を借りれるかも分かりませんし……

「あーちゃん、誕生日いつ？」
「へ？　あ、ハロウィンですけど……？」
「そっか、じゃあこれ誕生日プレゼント！」

いえ、ですから誕生日は三ヶ月後ですってば……
これは、ＤＶＤ－ＲＯＭ？
いったい何が……？

「……きっと、あーちゃんも、あーちゃんのパパさんも喜ぶよ？」
「っ！　じゃあ、これって！？」
「さっきは勝手なことしてゴメンね？」
「いえ、それは、その……」

ラリアットでチャラにしましたし……
これって、あのステルスシステムのデータですよね？
でも、今渡すということは……受け取ったんだから約束は守れ、ということなのか、もしくは気にしないで戦ってこいということなのか……

「好きにしていいよ。あーちゃん」
「……わかりました」

なら、私がやることは決まりですね。

「では、篠ノ之さんが攻撃、シャルが防御役で、鈴ちゃん、セシィとラウラさんが援護をお願いします」
「アリサ、あんたは何すんの？」
「私は遊撃です」

私は高エネルギー効率で防御も攻撃もできますからね。
シャルの防御が間に合わない時は私が篠ノ之さんを守りましょう。

「あれ？　カゲロウに防御用の装備なんてあったっけ？」
「……さっき、ガーデンカーテンの量子変換（インストール）を済ませました」
「そっか、カゲロウはラファールの装備のほとんどを使えるんだよね」
「……お、お揃い、ですね」
「まぁ、そうなるね」

う、うぅ……シャルの朴念仁！
もうちょっと、照れたり、意識してくれたっていいじゃないですか……
確かに、大したことのないお揃いですけど、勇気が必要だったんですからね！

「そ、それに、ラファールにもカゲロウの装備は積めますよ……？」
「そうだけど、あんなの積んだらパンクしちゃうよ」

う～！
シャルつれないです……ぐすん。
さっきは抱き締めてくれたのに。も、もちろん友人としてだったのは分かってますけどね？
……それでも、少しくらい期待に応えてくれたっていいじゃない

ですか。

「……むぅ。作戦会議はここまでですっ！　紅椿のエネルギーが回復する四時半まで休憩です！　あと、シャルは残って下さい！」

「シャルロットだけ？」

な、り、鈴ちゃん！　にやにやしないで下さい！

べ、別に二人っきりになりたいっていう理由だけではないんですからね！

……これくらいのワガママは、私にも許されますよね……？

「じゃ、私は一夏の看病をしてくるわ。アンタらも来るでしょ？　てか来なさい」

「と、当然だろう。私が原因なんだ！　わ、私が看病する」

「私は軍人だからな。こういう場合の看病の心得がないこともない」

「し、心配ですからわたくしも行きますわ……」

「束さんはー……あーちゃんと、」

あぁ、シャルと二人っきりになりたいなぁ！

……あれ？

束さん、震えてますけど寒いですか？　ウサミミもパタンと伏せちゃってますよ？

「ち、ちーちゃんのお部屋いくぅ！　バイバーイ！」

「あ、アリサ、程々にしなさいよ？」

「鈴ちゃん？　なんのことですか？」

「無意識だったのね……」

ええ、もちろん意識して邪魔だなこの人みたいな目を束さんに向けるわけないじゃないですか。

なんのことを言っているのか全く分かりませんね！

「ま、なら行くわね？　襲っちゃダメよ？」

「鈴ちゃん！」

最後の最後でいらないことを言うんですから……もう、シャルにバレたらどうするんですか！

「アリサ、襲っちゃダメよってどういうことだったんだろうね？」

「ひゃっ！？　いえ、それは、あのっ……」

「あっ、私がアリサをってことかな？　いくらアリサが可愛いからってそんなことしないよ。ねぇ？」

あう……やっぱりシャルは女の子同士に興味ないんですね……先手を打たれた気分です。

でも、可愛いだなんて……えへへ

「アリサ？」

「ひゃっ！？」

お、おおお、お顔が近くてよ！？

……落ち着きましょう。

すー

はー

……ああ、シャルの香りが肺いっぱいに、って私は変態ですかっ！

「シャル？　顔赤いよ？　……っあ！　そっか、あんな雨の中で立ってたんだもんね……昨日も溺れたばっかなのに……ゴメンね、気付かなくて……アリサにも気をつけてないといけなかったのに……」

「あ、そんなことじゃなくてっ！」

「なくて？」

シャルのくりっとした大きい目が私を捕らえます。
目を、離すことができません。

「その、襲うのは私の方じゃないかなって……」
「うん、だから僕がアリサをでしょ？　そんなわけないのにねー」
「そうじゃなくて！　私がシャルを襲っちゃうってことです！　……っあ！？　や、あの、今のは忘れて下さい！　へ、変なこと言っちゃいました」

や、ヤバいですよ！？
今のなんて殆ど告白じゃないですか！
う～、恥ずかしいやら緊張するやら怖いやらでシャルの顔が見れません……もったいないからやっぱりしっかり見ておきましょう。
シャル、どうして黙ってるんですか？
あ、いや、ドン引きしているんですよね。そりゃそうです。こんなシチュで、しかもあんなテンションで告白されたら私だって引きますもん。

「そっか。アリサは女の子も好きなんだもんね？」
「むぅ……」

気付かれなかったので安堵しましたが……微妙に寂しいような気もします。
改めて、私って全く意識されていませんね。泣いちゃいます。

「――綺麗だね」
「ひゃい！？　な、ななな、何がですかっ！？」

い、いきなり人の髪の毛を触りながら何を言うんですか！？

「何って、髪の毛だってば」

「あ、あぁ……でも、伸ばし放題で不気味じゃないですか？　自慢ではないですけど、昔は髪の毛お化けってからかわれましたよ？」

「あれ？　でも私と会った頃は肩くらいだったよね？」

「あぁ、あの時はちょっと……」

まぁ、原因はシャルですけど。

あんな長い髪の毛だと染めても気付かれますしね。逆に、だからこそ染めて切っただけで気付かれなかったというのもありますが。

「そういえば、あの人もアリサくらい長かったなぁ……」

「ぁ……そ、そうなんですか」

あの件については微妙なしこりが残っているんですよね……

でも、シャルは私と一緒にいてくれると言いましたし……私が女の子が好きだというのもバレてますし、感謝してると言ってましたし……

もう、正体を隠す必要もないんですよね。

「あの、昨日はすみませんでした」

「えっ！？」

「シャルの言っていた、ゼブラブロンドでフリフリの服を着た女の子を私は知っています。その子がつけていた髪留めの色まで答えられるくらいには……」

「お、教えて、くれるの……？」

……むぅ。

なんで、そんなに嬉しそうなのに、恐る恐る聞くんですか……私

が原因なのは分かってますけど！
それでも、そういうの、ヤです。

「夏休み、デュノア社主催のパーティーに行くって約束は覚えてますか？」
「もちろん」
「その時、会わせてあげます……」

言葉で言うより、実際に見てもらった方が早いでしょうしね。
……い、今から緊張してきました。
あの頃の私は女の子らしい格好をしていましたからね……今みたいに髪だけ異様に長いのにボーイッシュスタイルな服装だったりしませんからね……！
久しぶりにフリフリふわふわが着られると思うと楽しみになってきました。

「うん、ありがとう。それじゃ、僕もそろそろ……」
「……ぁ」

ぎゅ……

「ん、アリサ？」
「へ？　……ってわぁ！？　あ、いや、これは別にその、えっと」

な、ななな、なんで私はシャルの腕を掴んでいますか！？
無意識！？
なにそれこわいです！

「ご、ごめんなさい！　なんでもないです」
「んー……」

「お、おおお茶入れますね！」

とりあえず、手を離して座卓の方に、

「えいっ☆」
「きゃっ！？」

バタン！

痛たた……って、えーー！？

「えへ」

なんで、シャルに押し倒され、えー！？
な、なんなんですか、この状況は！？
も、もしかしてこのまま私いただかれちゃったり……？

「だ、ダメですよ！　私、今日は上下不揃いで、しかも可愛くないですし！」
「ダメなのは僕のセリフだよ！」

ふぇ？
シャルが意外と真面目な顔してます。
えっと……また、私なにかしちゃいましたか？

「もう！　こんなに体が冷えてるなら早くいってよ！　もう少し時間があればお風呂いけたのに」
「あ、えと、ごめんなさい……」

でも、そんなに怒ることないじゃないですか……

ずっと雨の中で立っていたのは皆さんのタメなんですよ……？

「あ……ゴメン。アリサに怒ってるんじゃないの……予想できたはずなのに、触られるまで気付かなかった自分がバカみたいで……」

「だ、大丈夫ですよー。これくらい、少し立てば温かくなりますって」

「もうアリサが中に入ってから一時間も経ってるんだよ？　それなのにまだ震えてるじゃん……無理、しないでよ」

「ごめん、なさい……」

シャルは、私のことを気遣って……あ、どうしましょう。なんだか、すごく嬉しいですよ？

そんな大したことじゃないのに……

って、

「それと押し倒すことに何の関係が？」

「ほら、こうすれば暖かいでしょ？　ぎゅーって。僕、結構体温高い方なんだよね」

「そ、そうですか……」

うわぁ、うわぁ……シャルの体温が、匂いが……あ、ダメです。もうダメ……

もう……

「死んじゃってもいいかもしれません……」

「ダメだよ！？」

こういうのは……とても、嬉しいです。

シャルに、私がドキドキしてるの気付かれませんように……

◇

思わずアリサを抱きしめちゃったけど……と、友達なら普通だよね？
リンもアリサの抱き心地は最高って前に言ってたし、きっと皆普通に抱きしめるんだよね！

「アリサ、ちっちゃいね」
「うぅ!?　シャルは、自分より大きい人の方が好きですか？」

ん？
……なんで急に好きな人の話になったんだろう？
うーん……分からないけど、そうだなぁ……

「やっぱり大きい方が頼りになりそうだよね」
「うぅ……私は頼りないですか？」

えぇ!?
今度は急にアリサの話に戻るの!?
というか、大きいと頼りになるのは男の子であって、アリサは女の子なんだし気にしなくていいと思うけど……
アリサが頼りになるかどうかだったら、やっぱり強いし一生懸命になってくれるから頼りになると思う。
二年間、僕を見守ってきてくれてたわけだしね……
でも、頼ったらアリサは無茶しちゃうから……

「頼りにくい、かな……」
「はぅっ……もっと、頑張りますね」
「いや、アリサは今のままでも、」
「今のままじゃ、シャルのことを守れないじゃないですか！　……

もっと、私が頼れる人だったら……シャルが言ってくれれば、なんでもできるのに……」

……もう！

別に僕はアリサに守られたいなんか思ってないのに……そんなことより僕はそのせいでアリサが怪我することの方がよっぽど心配だよ……

もちろん、アリサが色々やって僕のことを守ってくれたのは嬉しいけど……

「でも、僕は、こうやって抱き心地がいいアリサが好きだよ？　すぐに真っ赤になっちゃうところとかも……だから、怪我とかしてほしくないな……」

「そ、そですか……気をつけます」

うん、よろしい。

アリサの体温が急にあがった気がするけど……本当に照れ屋さんだなぁ。

やっぱりアリサは戦いなんかより、こうしてる方がずっといいよ。

57. Und?but de la vengeance.（前書き）

「仕返し開始」

私、やればできるじゃん（
お気に入り７００あざまーす！

57. Un d?but de la vengeance.

「では最終確認です。まず篠ノ之さんが主な攻撃役です」
「うむ」
「シャルは篠ノ之さんの近くでガーデンカーテンを展開しながら待機しててくださいね」
「うん」

……結局、さっきのハグはなんだったんでしょう。
普通、仲がよくても押し倒して抱きしめたりは……しないですよね？　あれ、でも鈴ちゃんにも抱きしめられたまま同じベッドで寝たりしてますね……
うーん、普通じゃないと思ってしまうのは私に友達がいなかったからかもですね。
そっか、女の子同士で抱きついたりするのは普通のことなんですね。
……ということは、私からぎゅってしても……私から？

ぼひゅっ

「あ、アリサ大丈夫か？　顔赤いぞ！？」
「うぇい！？　あ、ラウラさん……えと、ラウラさんはシャルが狙われたときにその……名前、なんでしたっけ？」

……わ、私からというのは想像することすら無理そうでしたことのことですよ……お、落ち着きましょう。
両肩にレールカノン、左右と正面に対砲撃用の物理シールドを展開するアレですよ。
えっと、パンツ……？

なんだかさっきから頭がぼーっとします。

「今朝、砲戦パッケージが届いたって言ってたじゃないですか」

「あぁ……パンツァーカノーニアか。それで福音の気を逸らしてシャルロットが狙われないようにすればいいんだな？」

「はい。その後は私が突っ込んで気を逸らすので」

楯であるシャルに集中攻撃をされると困っちゃいますからね。

……それに、ラウラさんには悪いですけどシャルに怪我してほしくないですし。

「鈴ちゃんは龍砲で断続的に攻撃をお願いします。それで福音の後ろをとったら双天牙月で攻撃してください」

「了解」

「わたくしはいかがいたしましょう？」

「セシィは福音の真下……いえ、真上で待機してください。真上と真下だけは福音の攻撃範囲ではないようなので」

「分かりましたわ。それでエネルギー弾を消していくだけでよろしいんですの？」

「はい」

ブルー・ティアーズのビームは付近のエネルギー弾を誘爆させることは確認しています。

おそらく電位差か温度差でエネルギー弾が誤作動を起こすのでしょう。

「私は篠ノ之さんに合わせて攻撃します。一応あの翼を壊すことを狙いますが……多分、高速戦闘になるので討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）はダメージソースとして期待できません」

高速戦でも私が接地状態にあればマシなんですけど……そもそも私は相手を自分の土俵に引きずり込まないと対ＩＳ戦は勝てないんですよね……

カゲロウは兵装的に競技用ＩＳとはいえませんから、ＩＳと戦うことは重要視されてないんですよ。

この前の学年別トーナメントで思い知りました。

あんな、少し考えれば気付くようなトリックに引っ掛けられてしまいましたしね。

あの時は不完全燃焼でしたから……いつか、またシャルと本気で戦いたいなぁ。えへ

「っ！？」

「シャルロット？　ずいぶん汗をかいているが暑いか？」

「いや……むしろ背筋が冷えたというか……なんかゾクッとしただけ」

「風邪ですか？」

「いやいや……」

変なシャル……本当に風邪引いてないといいですけど……

さっき、抱きしめられちゃいましたし……

「あれ……？」

ぺたん

「アリサ？　突然座ってどうしたのよ？」

「あ、いえ、えっと……そうです！　お腹空いちゃって……」

「あー。そうよねー、あんた今日朝御飯しか食べてないでしょ？普段あんなに食べるんだから力抜けても不思議じゃ、」

「わー！」

鈴ちゃん！　シャルもいるんですから、普段あんなに食べてるとか言わないですくださいよ！
しゃ、シャルに食いしん坊キャラみたいに思われたら責任とってくれるんですか！？　お嫁さんにしてくれるんですか！？
シャルも食べられそうなもの探し始めないでください！

「あ、アリサ、落ち着きなさいって……」
「とにかく！　私を食いしん坊みたいに、」
「アリサ、はい、あーん」

イチゴジャムパン！
大好物です！

「ぱくっ！　モグモグ……食いしん坊みたいに言わないでください！　違うんですから！」
「いや、菓子パン食べながら言われても説得力無いわよ……」

じょ、条件反射です。
お腹空いてるのも本当のことですし。

「アリサ、美味しい？　それ、最近の僕のお気に入りなんだよ」
「へー。要チェックですね！」

でもジャムパンよりシャルの笑顔でお腹いっぱいになりそうです。
もう、こんなに可愛い人が存在していいんでしょうか？
シャルを見て、世の残念な人を見て、もう一回シャルを見ると神様の残酷さに涙が止まらなくなります。

「シャルロットもアリサの扱いになれてきたわね」

「そうかな？」
「そうですわね。傍から見ていると姉妹のようですわ」
「犬と飼い主……いや、今のは失言だ」

犬……シャルのペット……！

「わんわん！」
「「「「……」」」」

……あれ？
ここは拾ってくれないと困るんですけど！？

「わんわん！　わんわん！」
「アリサ、可愛いー！」
「ちょ、鈴ちゃん！？」

抱きしめっ、苦しいですって！
ちょ、頬ずりとかダメですよ！

「……鈴ちゃんはどちらかというと猫ちゃんですよねー」
「……にゃーん？」
「ぐふっ……鈴ちゃん、可愛すぎます……わん！」
「にゃーっ！？」

可愛いので仕返しです！
すりすりぎゅー！　ついでにペロペロ！

「あっ！　ちょっとアリサ、舐めるのはさすがに、」
「はいはい、二人ともじゃれるのはそのくらいでね。早くしないと僕、先に行っちゃうよ？」

「あ、シャル……ごめんなさい。すぐ行きましょう！」

少し、ふざけすぎたんでしょうか。

シャルは笑ってますけど、ちょっぴり怒られちゃったような気がします……私がシャルのこと好きだから意識してしまっているだけかもしれませんね。

で、でもシャル相手に今と同じことはできませんし……って自分に言い訳しても仕方ないですけど……想像したらクラッときました。

とはいえ、戦争の時はこれくらい気楽になれた方がいいんですけどね……まぁ、戦争ではないですし、織斑君が大変な状況ですからね。

真面目にやりましょう。

「えっと、準備は整いましたか？」

「すまん、エネルギー回復にもう少し時間がかかりそうだ」

「紅椿が動かないことには始まりませんからね。福音が逃げる素振りを見せていない以上焦ることはありませんよ」

実際には逃げられない、が正しいはずですけど……きっと、福音は最初から束さんの掌の上ですから。

操縦者の方には同情しますが……束さんにとっての優先順位は篠ノ之さんが最上ですから運が悪かったと諦めるしかないでしょう。

まぁ、同情はしても助けられませんけどね。もう彼女の未来はある程度決まったも同然です。

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は私達に倒されアメリカ軍が回収。そのまま開発は凍結されて操縦者の彼女は新しい専用機が上がるまでは監視付きの長い休暇でしょうね。

ほんとにご愁傷様ですけど、さすがの私も無関係の人までは助けられませんよ。精々、束さんにフォローの必要性を仄めかす程度です。

「でも、どうしましょう。もう確認することもないですし……」
「そうですわね……あまり細部を詰めすぎても臨機応変な対応がとれなくなりますし……」
「一つ崩れただけで全部オシャカだしね」
「アリサの作戦くらい大雑把なのがちょうどいいだろう」

ラウラさん、それって誉めてます？
……まぁ、ポジティブに受け取っておきましょう。

「うーん……あ！　夏休みの予定とかどうです？」
「不破、いくら何でも気が早すぎだろう？　まだ期末も残ってるんだぞ？」
「やー、篠ノ之さん、私にとって期末とかあってないようなものですし」
「これだから学年主席入学は嫌よねー」
「主席入学はわたくしですわ！」

そうそう。私は次席ですよ。

「セシリア、今のアリサ見たら信じられないって……というかアリサは手を抜いてたって山田先生がこの前言ってたけど？　結構根に持ってるみたいよ？」
「アリサはなんで手を抜いたの？」
「あー……今だとバカみたいですがあの頃は目立つのが嫌で……本当は学年代表なんかもやるはずではなかったんですけどセシィが勝手に……」

いつの間にか目立つのにも慣れましたしね……まぁ、クラスの皆さんに慣れたというのもあるのでしょうけど。

やっぱり大人数の前で戦う時は朝峰巡の人格に出てきてもらわないと辛いですし。

彼、この前こっちの私は素直なのに……とか考えてましたけど、どういう意味なんでしょうね？

「へぇ、アリサが人見知り……少し意外かも」

う……シャルにがっかりされているかもしれません。シャルが来た頃には鈴ちゃんや一松さんたちのおかげでほとんど克服できてましたし……

なんでしょうね。

海から戻ってきてから、今まで以上にシャルのことが気になりますよ？

何を考えているのか。何が好きなのか。自分はどう思われているのか。その他諸々。

シャルをあ、ああい、愛していると……そう自覚したときも気にならなかったのに……私、なに恥ずかしいことを考えているんでしょう。

ただでさえ……なのに、これ以上、体温上げてしまったらヤバいです。

「ふむ。ちょうどいいな」

「なにがよ？」

「夏休み、予定が決まっているものは少ないようだからな。前に言っていたことを実行しよう」

前に言っていたこと？

なんかありましたっけ？

ラウラさんはずいぶん嬉しそうにしていますけど……覚えてないとか言ったら泣き出すんじゃないかと思うくらい輝いています。

「全員、ドイツの我が軍、シュヴァルツェ・ハーゼに招待するぞ！」
「……あぁ、言ってましたね、そんなこと」
「なっ、アリサ、忘れていたのか！？　私はいつ言い出そうかと悩んでいたというのに！」

……つい言っちゃう余計な一言ってありますよね？
まぁ、軍隊を目で見ておくのもいい経験になると思いますし、私個人としてもドイツと関係を持ちたいところですからね。
私には反対する理由はありません。

「ドイツ政府は許可してんの？　同級生とは言っても、代表候補生なんだし私達はある意味敵同士よ？」
「候補生から外れたアリサさんはまだしも、わたくし達はドイツ政府から正式に招待されないと行けませんわね」
「既に頼んであるぞ。喜色満面の二つ返事だったな」

……招待される側が喜ぶなら分かりますけど……わざわざ内情を公開するようなことをするなんて。
ドイツ政府、傾いたりしませんよね？

「なら、しっかりスパイをしないといけませんね。ドイツもイグニッション・プランのライバルですし」
「あれ？　フランスって第三世代型がないからイグニッション・プランは参加させてもらえないんじゃなかった？」
「鈴ちゃん、それは今までの話です。来年の今頃には第三世代型は完成していますよ。試験機ではないものが、です」

束さんのデータがありますからね……これで、シャルが男装していたことから世界の目を逸らせるでしょう。

私の役目も終わりか近いですね……本妻さんもこの前のトーナメントでなかなかやるじゃないの、とか言ってたみたいですし、シャルの可愛い表情を捉えた写真を送りまくってますし。
もちろん盗撮です。
じ、自分用なんてないですよ？
……役目が終わって卒業もしてしまったら、シャルとの繋がりは無くなりますね。
シャルはきっとフランスの国家代表になります。そうなれば私と会うことも難しくなるでしょうし……
大学を出たらＩＳも降りるつもりです……ケーキ屋さんになるには遅すぎますかね？

「アリサ？　アリサ～？」

目の前で手をパタパタふるシャル。
できる限りのものをこの人に残したいですね。

「シャル、私、頑張りますね」
「え？　うん。なにを……？」
「全部です！」
「そっか。頑張ってね。僕も応援するよ」

さて、と。

「篠ノ之さん、どうですか？」
「ああ、準備万端だ」
「では……」

行きましょう。
目にもの見せてくれます。

……暴走ＩＳ相手なので見せる相手が誰かは分かりませんけど。

57. Und?but de la vengeance.（後書き）

そういえばＩＳが夏休み編に入ってからのことでアンケート

その一、アリシャル書いてりゃいいんだよ
その二、他キャラにフラグ建てろよ
その三、～～～～なシチュエーション書けや（りくえすと）
その四、夏休みとかいらないです……

ライフカード！

58. Le pilier du coeur（前書き）

「心の柱」

やっぱりやればできるじゃん、私

まさかの初、一日二回投稿でした。

58. Le pilier du coeur

最初の戦闘地点からさらに数キロ離れた空域に銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は膝を抱えるようにして漂っていました。

そして私達が索敵範囲に入ると同時に、まるで待っていたと言わんばかりに、その四肢を、翼を広げます。

ゆっくり起き上がる様は自らの優位性を自覚しているかのようです。

人工知能のくせに生意気ですね。

……私、これでもイライラしてるんですからね？

「それで威嚇しているつもりですか？　……篠ノ之さん、Ｇｏ！」

「応っ！　……って不破も来ないか！」

「Ｇｏ（行け）と言ったじゃないですか……私は篠ノ之さんの影ですから」

最初から攻撃しては後で福音の裏をかくことができません。

……というのは建前で、やっぱり風邪引いてたみたいなんですよ。頭痛い……

セシィは超上空に待機、シャルは私達の後方に、鈴ちゃんとラウラさんはビュンビュン飛び回ります。

篠ノ之さんが福音を攻撃し、皆が紅椿が攻撃されないように援護をする役割です。

そして私はその皆さんが狙われないように行動する役割。私が狙われ始めたら今度は篠ノ之さんが攻撃して……という感じになるはずです。

単純ですが、初めての実戦で連携もしなければならないという極めて困難な現状ですからこれくらいの方がいいんです。

「篠ノ之さんが敵と認識されました。シャルはガーデンカーテンを。

鈴ちゃん、ラウラさん、援護射撃を始めて下さい！」
『了解！』
私はまずは遠くから射撃を。
今のところ確認されている福音の攻撃手段は翼型複合スラスターによるエネルギー弾のみ。なので双子のスナイパーライフル、スコルとハティを展開、その砲口を狙撃します。
唯一の攻撃手段ではなかったとしても最大の攻撃手段のはずですから、きっと破壊されることは避けようと動くはずです。
一発、二発、三発……流石にＩＳの装甲は硬いですね。全て弾かれてます。
これでも一応対戦車ライフルより威力があるのですが……至近で発射すれば貫通もするんですよ？
多様な角度からの攻撃に痺れを切らしたのか、とうとう福音の翼が開かれます。
……いきなり全砲門展開ですか。豪気ですねぇ。
「篠ノ之さん無理に避けようとしないでシャルの陰に！　セシぃはタイミングを合わせて福音左翼からの砲撃を潰して下さい！　鈴ちゃんは避けながら福音の背後に、双天牙月の準備を！　ラウラさんは砲撃を続けて下さい！」
左翼側にシャルとラウラさん。右翼側に私と鈴ちゃんです。
篠ノ之さんはすぐにシャルの陰にいけますし、私と鈴ちゃんは福音からある程度距離があるので避けるのに意識を集中すれば簡単でしょう。
ハイパーセンサーを使って砲門の向きから前もって射線上から離れるの平行して、エネルギーを溜めている砲門を狙撃します。
砲内部は意外とデリケートなんですよね。とはいえ重点時間は数秒間。破壊できる砲門は精々二門が限度です。

「っと……これは、完全に狙われましたね」

今まで多面的な攻撃に翻弄されて動けなかった福音が方向転換。超高速で私に向かってきます。

到達必要時間コンマ〇二、イグニッションブーストは間に合いません。接地していないので嵐才流の歩法も実践できません。

これは、避けれませんね。

「避けれないなら……受け止めます！」

不破圓明流、金剛。

筋肉を収縮させて体を堅くする防御のための業。使いこなせば胸板で拳銃の弾を受け止めることも可能です。ライフルは無理です。

……でもお腹を狙ってきていてよかったです。腹筋なら私も一応は金剛を使えますから……ただの体当たりなら衝撃で内臓が破裂したりもしないでしょう。

ズドォン！

「ぐぅっ……！」

やっぱり内蔵まで来てるかもしれません。

予想以上にお腹に響きました。破裂してなくても故障はしてそうです。

福音の突進（チャージ）を受け止めましたが、海面に向かって押され続けてます。

……さっきの衝撃に加えてこの勢いで海面に叩きつけられたら気絶するかもしれませんね。

まぁ、もちろん、

「ここで墜ちる私じゃないですけどねぇっ！」

目の前にある福音の翼を掴み、スラスターを吹かせ相撲で言うかわりを使います。もちろん片方の翼を引き千切るオマケ付きで。

私という抵抗力を失い、ついでとばかりに私が蹴飛ばしたため福音は海へ真っ逆様。スラスターの逆噴射も効かないのでそのままドボンです。

これで頭冷やして暴走も止まってほしいですね……

『不破、大丈夫か!?』

「もちです！　篠ノ之さんは早く追撃をっ、」

グラリ

ここで、風邪の影響が……さっきの衝撃が原因ですね。

こうなると急激な視界のブレなんかでブラックアウトするかもしれません。

……とはいえ、そんなことで止まったら私じゃないです。

『上がってこないぞ?』

「……操縦者の意識が断絶したんでしょうか？　でもＩＳ反応はありますし……」

少し離れた位置に浮いている篠ノ之さんから通信が入りました。

妙ですね。海中にいればいるほど、こちらの準備が整って福音にとって状況が危険になるのは分かり切っているはずなんですけどね。

海面から私達を狙っているなら、それこそ意味がないです。あのエネルギー弾といえども海中から撃つのでは威力の現象が激しいはずです。

『待て。不破、海面を見ろ』

海面……やけに泡立っていますがそれ以外におかしなことは……

『あれは泡といっても沸騰した海水だ！　見ろ、湯気まで！』

でも、どうして……？

「とりあえず離れておきましょう。相手は海中です。対処のしようはいくらでも、」

『Ｌａ……♪』

「っ！？　篠ノ之さん回避！」

突然の機械音声になぜか背筋が凍りました。

私もガーデンカーテンを展開、二枚の物理シールドと二枚のエネルギーシールドを前方に展開。やはり、なぜか全力で。

そして次の瞬間、

『キアアアアア……！！』

悲鳴のような、獣の咆哮のような、そんな声が耳に届き、

「なっ！？」

いつの間にか……私のハイパーセンサーをもってしても知覚できない速度で福音が接近、私の腕を掴んでいました。

急いで離脱を……！

ぐわんっ

「うっ……っぐ！」

動こうとした瞬間、今までで一番強い頭痛の波が来て……結果的に脱出の機を逃しました。

そして福音の片羽の頭部から欠損を補うようにゆっくりとエネルギーで編まれた翼が生え……

「マジ、ですか……？」

オープン・チャネルを使ってある一言を呟いたのと同時にその翼に抱かれました。

◇

「アリサぁっ！」

あのエネルギー翼は今までの弾と同じ性質のもの……それをアリサは至近距離で何発も受け止めて、海に墜ちた。

福音の残っていた翼もひび割れ、左右が同じものに変わる。

これは……第二形態移行（セカンド・シフト）……？

「……アリサ、あんたもなかなか気が回るわよね」

最後の最後で、

『冷静に戦闘を続行してください』

だなんて……

「そんなこと、できるわけがないでしょうがっ……バカ！」

アリサに対するバカバカしさとか、福音に対する怒りとか、全部を吐き出すように龍砲を発射。

そのまま双天牙月を片手に突っ込もうとして、

スコンっ

妙にコミカルな音を立てて甲龍の装甲ぶつかった何かが私の動きを止めさせた。

反射的に落ちていくその塊を取る。

「なに、これ？」

ただの金属片。

でもその黒は嫌というほど見覚えがある。

アリサのＩＳ――カゲロウに使われている特殊複合装甲の一枚。

「あの子……まったく、おせっかいすぎ」

タイミング的にアリサの装甲が破壊された余波で飛んだ来たわけではないはず。

……だとすると堕ちていく途中でこれを投げたわけね。

「皆！　アリサは生きてるわ！　てかあの子結構余裕あるじゃないの！　また同じ作戦で追い詰めるわよ！」

全員に指示をしながら背中を向けている福音に双天牙月の刃を向ける。

まだ気付かれてないっ！

ズゴンっ！

鈍い音をたてて福音の背中の装甲が割った。

……いや、正確に言うなら、

「やっちゃったかも……」

自発的に装甲が割れたって方がいいわね。

そのひび割れの下から、福音の頭のものより二回りほど小型のエネルギー翼が生えて私が吹き飛ばされる。

……なんとか耐えられたけど、間に挟んだ双天牙月（これ）はもう使い物にならないわね。

福音はそのまま上昇、あっという間にセシリアに接近して撃墜してみせた。

続いてラウラ。

……龍砲だけで、どうしろっていうのよ……！

◇

――エネルギー充填率八……十七……二十二……三十五――

◆

リンが装備を潰されて、セシリアとラウラは落とされた。

アリサの時のを見る限りガーデンカーテンは最早意味がない……

どうすればいい？

箒が残ってるのがせめてもの救いだけど、たった二人で相手取るには福音の性能は異常すぎる。

それでも、やれるだけやらなきゃ……！

ガルムとヴェントを展開、距離を開けながら箒が斬り付けた時にどうしても生まれてしまう微妙な隙を潰すように連射する。

もう福音はほぼ全身がエネルギー翼で覆われててダメージが通っているのかも分からない……一夏の零落白夜があれば、あんなの関係ないのに……箒が頑張って切り続けるけど、やっぱり明確な効果はでない。

そして、とうとう箒のエネルギーが切れた。

やっぱりあれだけの性能を持つ機体だから燃費は悪いみたいだね……まだ墜落するまではいかないけど急激に動きの鈍った箒を銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は蹴り飛ばした

一向に効果を示さない二つの装備を放棄して二丁の重機関銃、デザートフォックスで福音の全身を狙う。これでどこかダメージの通る場所が見つかれば……

「なんて……ダメだよね。こうなったら、」

掃射を止めて僕を標的に定めた福音を見据え返す。

右手にレイン・オブ・サタデイ、左手に灰色の鱗殻（グレースケール）。

ラファールに装備されている至近戦用の最高威力の装備を二つとも展開する。

一か八か、接近してきた福音を叩きつぶす……！

確実に捉えるために空中で停止、福音の動きを少しも見落とさないようにハイパーセンサーに動きの処理だけをさせる。

そして、

ぐぉん！

福音が消えた。

「っ、速っ！？　……くふっ」

二つの装備を構える暇もなく喉を締め上げられた。
それ、でも……今がチャンスだから……
両手を福音に突きつけて攻撃しようとする……だけど、酸素が足りなくなる方が先で……

『私のシャルに、なにをしてるんです……？』

気絶する寸前、そんなことを言っている知っている人の聞いたことのない声を聞いた気がした。

58. Le pilier du coeur（後書き）

アリサが怖いよママン

59．Ｂｌａｎｃ ｅｔ ｎｏｉｒ（前書き）

「雪羅（Ｄｒｅｓｓｙ Ｗｈｉｔｅ）／影狼（Ｍｏｕｒｎｉｎｇ Ｂｌａｃｋ）」

なんだか調子がいいですね。

三巻分もそろそろ終わり！

59．Ｂｌａｎｃ　ｅｔ　ｎｏｉｒ

一夏がいなくて、アリサも墜ちて、セシリアもラウラもダメになった。
私の甲龍に残ってるのは大した効果のない龍砲だけ……なのに箒は蹴り飛ばされて戦線離脱。シャルロットも捕まった……
シャルロットは首を絞められて……あのままじゃ死んじゃうかもしれない。
どうやって助ければ……気を引いて私に攻撃させる？
でも、気を引けなかったら？
それに、シャルロットを助けても今度は自分かもしれない。
シャルロットは解放されたとしても動けないと思う。
そんなときに私が狙われたら？
……誰か助けてくれるの？
……怖い。
動かなかったら仲間が死んで、動いたら自分が死ぬ。
意味、分かんないわよ！
ＩＳは操縦者の命を守るんじゃなかったの！？
どうして、私達が命懸けなきゃいけないのよ！
もう、わけわかんない！

「わけわかんないけど……アリサは、こんな思いをしてきたのね……それも三ヶ月間も」

あの戦争の記録の中でアリサはどうしてた？
……あの子のことだから、考えるまでもない。
自分が犠牲になるとも思わないでつっこんでいったに違いないわ。

「アリサ……あんた、どんだけ強いのよ……」

なんで、こんなことを経験してきて笑えるのよ……
本当は泣き虫のくせに……

「あの子にやったのに、私がやらない理由（わけ）ないわよね……！」

拳を、固く握りしめる。
私は専用機持ちの中で一番弱い。
甲龍は強さを第一に求めなかったＩＳだから当たり前。
でも、機体が弱くても、私が弱くていいなんてことはないのよ！
アリサは私に一番負担の少ない役回りをくれた。
遠くから撃って、後ろから攻撃して、戦略的には正しいけど情けない役割。
でも、私はそれを喜んだ。
自分が怪我しそうにないから。
至近距離で戦うことも、壁になって見方を守ることも、積極的に気を引くこともしなくていい安全な立場……
だから、私は専用機持ちの中で一番弱かった。
……さっきまで、ね。

「アリサ、私をこの役目にしてくれたこと、感謝するわ」

だって、最後の最後で大事な仲間を助けられるでしょ？

「いくわよ、羽頭（とりあたま）。不味くて食えない棒々鶏にしてあげるわ……」

頭から羽はやすなんて気持ち悪いのよ。
福音の真後ろから最大威力の龍砲を撃つ。
機能特化パッケージ――崩山。龍砲の利点である見えない弾丸であることを捨て、超高エネルギーによって生み出された炎を纏う拡

散衝撃砲を撃てるようにする装備。
狙い通り炎弾は銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の背中に吸い込まれ、エネルギーを撒き散らした。

『きいい……』

シャルロットを掴んだまま、福音がこっちをむく。

「ばーか。もう手遅れよ」

舌を出して挑発する。
べーっだ！　ふんっ！
そんなエネルギー翼、広げられたって怖かないわよ。
……だって、

『……私のシャルに、なにをしてるんです……？』

アリサが、あんたに狙いを定めてるから。

ズドンっ……

轟音と巨大な水柱。
福音はその水柱に突き飛ばされたように上へと吹き飛ぶ。

「鈴ちゃん！　ご苦労様！　シャルをお願いします！　篠ノ之さんもラウラさんもセシぃも！　いつまでサボってるんですか！」
『ああ……じゅうぶん、休んだな……！』

福音に負けず劣らずの速度で海中から空について躍り出たアリサのカゲロウは装甲もボロボロ。アリサ自身、所々血が出ていて、と

ても動けるようには見えない。
なのに、何よりも速く動く。
た体勢の整っていない福音を近くの小島に殴り飛ばし、追いすがり、また殴る。
のらりくらりと攻撃をかわす普段のアリサからは想像も付かないほどの直情的な戦い方。

「暴走してるとかっ！　敵同士とかっ！　そもそも原因は束さんとかっ！　そんなの置いといてっ！」

福音のエネルギー翼が光り始めても無視。アリサはひたすらに殴り続ける。その手にはいつの間にか討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）が展開されている……
えと、アリサ、冷静に戦闘続行って言ったのあんたよ？

「もう、情状酌量とか、いりませんね……貴女は、シャルを殺そうとした……そうですよね？」

多分、物理兵器の中では最も高い威力を誇るアリサの杭打ち機（パイルバンカー）が福音の胴部に押し当てられ、起動した。
でも、エネルギー翼が展開される方が速い……！
それでも、アリサは逃げない。

◇

「ふん、撃ちますか？　どうぞ？　でも、私が倒れる前に討鬼の鋼杭（ドラクル・ペイン）が貴女を穿ちますよ？」

……くそったれ、とでも言いたくなる気分です。
これはシャルを傷つけたのに……私にはこれを倒すだけのエネルギーが残ってません。

本当は、私の手で壊したいのに……！

『きあああ！』

「暴れないで下さいよっ……！　って、きゃっ！」

馬乗りになっていた状況にも拘わらず福音は無理矢理起きあがって飛び去りました。

ふん、今度こそ逃げようってことですか？

まぁ、私はこの様……風邪で頭も痛いですし、逃げられるんじゃないですか？

「……私からは、ね。後は頼みましたよ」

織斑君……

◇

くそっ、動け！

今、私が動かなくてどうするんだ！

紅椿、応えろ！

「……くそっ、指を咥えて見てるしかないというのか……！」

不破が無理を通してここまで追いつめたというのに……！

最後の最後で力が足りないなんてこと……

もっと速く、速く飛べ、紅椿！

ィィィィンッ……！！

「なんだ！？」

光の束が背後から福音を吹き飛ばした……？
あれは荷電粒子砲……いったい誰の装備だ……？

「待たせたな」

白いＩＳ……？
おい、なんでだ？
なんで……一夏がここにいる？

「おう。箒、泣いてんのか？」
「泣いてなどっ！　……でも、本当に……良かった！」

涙が、止まらない……ええい！　撫でるな！
そんなことされたら安心して、もっと、泣きたくなるではないか！

「ボロボロじゃねぇか。あーあ、髪紐も千切れちまって……ま、いいか。これ使えよ」
「これ、は……リボン？」

なんで……？

「ばか、今日はお前の誕生日だろうが」

あ……そうか。
今日は七夕……私の誕生日……

「じゃあ、行ってくる。終わらせてくるわ」

機動の安定していない福音に一夏はすぐに追いついた。

左手に新しい装備を携えて……そうか、あれが白式の第二形態……

◇

「さぁ、再戦と行くか！」

逃げるのをやめた福音が方向を変えて俺に向かってくる。
今まで両手で握っていた雪片弐型を右手だけで構えて斬りかかる。
それを福音はかわしたけど、予想済みだ。そもそも避けさせるための斬撃でしかなかったのだから。
俺の左手側に動いた福音を、第二形態移行（セカンド・シフト）と同時に現れた左手の装備、雪羅で追う。
この装備こそ束さんの言っていた展開装甲なんだろう。
俺のイメージに応えて様々な状況に対応できる。
今は指先からエネルギー刃を出しクローとして使う。
その爪の一撃はシールドエネルギーに阻まれたものの福音を捉えていた。

「いける……！」

第二形態になったことで生まれた勝てるという自信は、今をもって確信に変わった。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を広げ、胴体から生えた翼も伸ばす。そして次の瞬間、圧倒的な弾雨が降り注いだ。
……ていうか、コイツ、こんな光ってたか？

「ま、そんなもん今更食らうかよっ！」

雪羅をシールドモードに切り替える。半透明の光の膜はちょうど俺を隠すだけの広さまで広がり、その光に触れたエネルギー弾を音もなく消していく。

簡単に言ってしまえば零落白夜の性能を盾に転化したものだ。

エネルギー消耗は激しいものの、エネルギー系の攻撃に対して圧倒的な優位性を誇る。

福音に実弾兵装が無いこともスペックカタログで確認済みだ。

「うおおおっ！」

大型四基のウイングスラスターが備わった白式・雪羅は二段階瞬時加速（ダブル・イグニッション・ブースト）を可能としている。

ひらりひらりと動く福音も最高速機動なわけではないのだから十分追いつける。

……それにしても、不破さんは中型のスラスター二基で連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）ができてるんだよな。

どういうこと？

「状況変化。最大攻撃力を使用する」

って、不破さんなんかどうでもいいからまずはこっちだ！

これは、どうすれば……くそっみんなが巻き込まれ……！

「バカ一夏！　候補生なめてんじゃないわよ！　これくらい自分で何とかするわ！　あんたは！　さっさと！　そいつを片付ける！」

「鈴……わかった！」

◇

「……む、織斑君に喧嘩を売られた気がします」

瞑っていた目を開き空を見ればエネルギー翼で体を包み繭状になった福音と、零落白夜の光刃を両手に構えた織斑君が見えます。

ギリギリ、ですかね……砲身の冷却が終わってませんが白狼（ウルフズロ）の咆号（アー）を準備した方がいいかもしれません。

「っとと……」

「無理するな」

「あれ……ラウラ、さん？」

「アリサが何かしなくても、二人がしっかり終わらせてくれるさ。病人は寝ろ」

う……バレてます。

で、でも頑張りましたし怒られることはない……といいですね。

皆さんちょっと私に過保護ですよ？

……嬉しいですけど。

「ラウラさん、夏休み、楽しみですね」

「期末があるけどな」

「勉強、不安なところでもあるんですか？」

学力トップが教えますよ？

◇

（一夏が駆けつけてきてくれた……！）

無事だった。

戦ってくれている。
全てが私の心を揺さぶっているのが分かる。
嬉しい。
そして、それ以上に、

（ともに、戦いたい！）

――『絢爛舞踏』発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

「な……？　ワンオフ・アビリティ……？」

展開装甲の隙間から赤い光に混じって金色の粒子が溢れ出している。
そして、そんなことよりも重要なことが起きていた。
機体のエネルギーが、急速に回復している……？

「まだ、戦えるのだな？　ならば――」

一夏からもらったリボンで髪を縛り気合いを入れる。

「ならば、行くぞ！　紅椿！」

今までの機動を遙かに超える速度で紅椿は飛び出した。

◇

「だぁぁぁあ！　……くそっ！」

片方の翼を斬るももう片方が斬れない。

そうこうしている間にまた翼が生えて強力無比な連続射撃を行ってくる。
エネルギーはあと三分も持たない。
あと何度、翼を斬り裂けばいいのか……軍用機のエネルギー総量が分からない以上、ただひたすらに斬り続けるしかない。
でも、俺はそろそろエネルギー切れを起こす。焦りが思考を占めていく。

「一夏っ！」
「箒！？　お前、ダメージは、」
「問題ない！　とにかくこれを！」

紅椿が白式に触れる。
その瞬間、全身に電流と衝撃、熱が走り視界を大きく揺らした。
もし雷が自分に落ちたら、という想像ができるようになったかもしれない。

「真面目にやらんか！」
「お、おう！　ってエネルギーが回復してる……？」
「それは後回しだ！　さっさと倒すぞ！」
「おう！」

最大出力の零落白夜を振るう。
福音はそれを難なく回避するが――それこそが狙いだ。

「お前の相手は、俺だけじゃないだろ？」

紅椿が俺に向けられた翼を断ち切る。そしてさらに回転、急加速の勢いをつけた蹴りをお見舞いした。
姿勢を崩した福音を、俺の零落白夜で斬りつけ残る光翼をかき消

した。

「これで……」

最後の一突きを繰り出そうとする俺と、新たな翼を生み出し一斉射撃を行う福音。

ここまで来たら、引くわけがない！

「終わりだぁぁ！」

エネルギー刃特有の手応えを感じる。

これで終わった……

「一夏ぁっ！」

油断した俺の喉笛を突き破ろうと福音が指先を伸ばしてきた。

「しまっ……！」

シュィィン……

しかし、指先は俺の喉に届くことなく、一条の光によって弾かれた。

『詰めが、甘いですわよ？』

オープン・チャネルを通して聞こえてくるセシリアの声。

コアネットワークの情報を元に見回してみれば、背中を下にして海に浮かびながらレーザーライフルを構えたセシリアがいた。

「サンキュ」

『ま、詰めが甘いのはアンタもよ。まったく、この人、このまま落ちてたら死んでたわ』

今度は鈴の声。

なんのことかと思えば鈴は見知らぬ人、恐らくは福音の操縦者を右肩に抱えていた。

左腕にはシャルロットを掴んでいる。

鈴、逞しいな……

「鈴ちゃん、シャルは私が連れて行きますよ」

「アリサ、ラウラに担がれてるくせになに言ってるのよ」

「だからー、私がおんぶするんですよ。で、その私をラウラさんが」

「……アリサ。私の負担を大きくしないでくれ」

「はーい……ちぇー」

あそこらへんは仲いいよなぁ。

とりあえず、花月荘に戻るとするか。

「あ、そうそう。千冬姉が命令違反だって怒ってたぜ」

「「「「「げ……」」」」」

女の子が揃ってなんていう声を……

「まぁ、俺は命令されたようなものだけどな」

つまり俺は怒られない！

皆、すまん。

「一夏の裏切り者！」
「皆、一夏のために戦っていたのにな」
「恩を仇で返すか」
「まぁ、織斑君ですし」
「それに、命令違反も事実ですわ」

59. Blanc et noir（後書き）

いい感じのペースですねー

60. Un partie de la nuit de l'?t?.（前書き）

「夏の夜の宴」

予約投稿ミスってました。

１２０００００ＰＶありがとうございました

60. Un partie de la nuit de l'?t?.

「まったく、お前たちは。事前に一言残していくことも思いつかないのか」

おー……織斑先生がお怒りです。

「たまたま織斑が戦線復帰できていたからよかったものの、そうでなければ福音は逃げだしていたぞ！」

「ち、千冬姉、結局勝ったんだからいいじゃん。な？」

「先生だ……そういえば、織斑、お前も目が覚めてすぐに行かせろとか言っていたな？　しかも許可がもらえなくても勝手に行くとか……」

「げ……」

迂闊ですね織斑君。

こういう時は黙っているに限りますよ。

……というか、ですね。

どうして私だけなんでしょう？

織斑君は元気だからいいとして、ほかの皆は疲れているだろうからということで後日、臨海学校が終わってからお説教だと言ってませんでしたか？

私、一番ボロボロだったんですけど……風邪も引いてますし。

「どうした不破？　まさか不満でもあるのか？」

「いえ、冷静になってみればですね……あ、言ってもいいですか？」

「ああ、言ってみろ」

「あー……私、命令違反なんてしてないですよね？」

「なに？」

一度撤退している皆さんと違って、私はずっと継戦状態でしたから戦闘は禁止されてませんし。
だから、私が怒られる理由は無いんですけど……

「ん？　ああ、そうか。なるほど」

え、あの、織斑先生は何を納得してるんでしょう……？

「不破、そもそもお前を残したのは怒るためじゃない」
「……怒られてましたけど？」
「あれは愚痴だ」
「そですか……」

でも、ならどうして私は呼ばれたのでしょう？

「まぁ、簡単に言ってしまえば軍事衛星を借りた代わりにアメリカからお前の身柄を要求されている」
「……はい？」
「いや、実際にはアメリカ軍部へのオファーだが……私の予想では恐らく……と、織斑、出ていけ。それと今のことは他言無用だ。言ったら――分かってるな？」
「え？　あ、ああ。分かった。それじゃ、不破さん、またな」

……人に聞かせられない系の話ですか？
というかアメリカに目を付けられるって……私、何かしましたか？
うーん。覚えがないですねぇ。
もしかして知らない間に軍事衛星から重要な情報を盗み出してしまったのでしょうか？　ＩＳのことですから有り得ないとも……

「それで本題だが……アメリカがお前を身柄を確保したい理由は恐らくお前の戦い方が原因だ。アメリカの第三世代型、ファング・クエイクの特徴を知っているか？」
「ええ、公表されているだけは……」
たしか四基のスラスターによる個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）……私のようなアナログ入力ではない真正の……ってもしかして、
「気付いたか。アメリカがフランスに対して技術盗用の疑いをかけている。だがアメリカはセキュリティー大国だ。彼ら自身、盗まれるわけがないと考えているんだろう」
「なるほど……確かに私のはあれと同じですからね」
ＩＳは軍事機密として開発されているので異なる国で同じような装備が偶然できあがることもまぁあります。
アメリカもまさかフランスが本当に盗んだとは考えていないでしょう。
ただ問題は常に超高速戦闘が可能となる個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）はアメリカの虎の子であり、さらにそれがイメージ・インターフェースを用いた第三世代兵器であるにも拘わらず、フランスの第二世代型が同じことをアメリカより少ないスラスターで可能としているということです。
「私がアメリカに赴いた場合、どうなりますか？」
「そうだな……不破はＩＳごとアメリカ軍部に所属。フランスには代わりのコアと優秀な技術者が送られ、もしかすると共同防衛協定などもありうるな」
「随分といい条件ですね……」
私の連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）は私にしかできない固有技能だと知ったらどう

なりますかね。
　まぁ……逆にそれを証明すれば何事もなくこの事件も解決するのでしょうが……どうせなら何か手に入れたいところです。
　とはいえ私が切れるカードは多くないですから……さすがに私の並列処理調べるためにを解剖されたりはヤですしね。
　ちょこちょこっと関係だけでも欲しいのですが……今回は自重したほうがよさそうです。

「分かりました。夏休みに顔を出して正式にお断りしますよ。あれは私だけにできる固有技能だと言えば平気でしょう。食い下がるようなら実演しますし」
「そうか。あぁ、この件、学園は関与していないからな」

　という建前ですよね。
　とはいえアメリカ相手を相手取っても強攻策を採らせないんですからＩＳ学園もなかなか強い立場を持ってるんですねぇ。
　それにしても夏休みの予定がどんどん埋まります。
　ラウラさんとのドイツツアー。フランスに戻ってデュノア社主催のパーティー。そしてアメリカですか。しかもドイツとアメリカからはラブコールが届いてますし……まぁ、ドイツの方はラウラさんが言っているだけですけどね。
　私のどこにそんな価値があるんでしょうね……貧乳はステータスでも希少価値でもないですよ！
　まぁ、鈴ちゃんの方が私より小さいですが。最近、成長期です。いえ、正確には性徴期でしょうか？

「まぁ、もう部屋に戻っていいぞ」
「はーい」
「不破」
「はい？」

「うちのひよっこどもが世話になったな」
「ん？　それは、私は織斑先生の生徒じゃないと？」
「馬鹿者」

えー……まぁ、お礼と労いくらいは素直に言いましょうよ。そんなだから彼氏も、

「なにか？」
「いえ、なにも」

先生、怖いです……
えーと、今が午後五時二十分なので……夕食まで二時間休めますね。それで私達専用機持ちはその後で体の検査、場合によっては精密検査の後、入院なんてことも……入院するとしたら私ですよねぇ。

「痛たた……うー、お腹、痣になってますよ……」

福音のタックルを受け止めたときのものですね。
手も殴った反動で少し腫れて熱を持ってますし……ホント、ヤになっちゃいます。
はぁ……

「あ、不破ちゃんおかえりっ！」
「二木さん……何してるんですか？」

部屋には入ってみれば既にお布団が人数分……より一組少なく敷いてあって、そのうちのひとつに二木さんが潜り込んで亀のように頭を出しています。
……でも、膨らみすぎではないでしょうか？

「ふ、ふたちゃん、暑い！」

あ、一松さんもいたんです……ね？

「い、一松さん……その格好は？」

なんでショーツに浴衣だけなんですか！？　というかブラと帯はどうしたんですか！？

「何か変かな？　ふたちゃん、私何かおかしい？」

「うーん……？　イッチーは可愛いよ？」

「そっか」

……あ、あぁ。

なるほど。

深くは聞かないことにします。

他の人も部屋にいるのによくできますね……

というか昨日は病院から戻ってきて割と早くに寝てしまいましたから気付きませんでしたが、私の部屋、変な人ばっかです。

一松さんと二木さんは……まぁ、そういうことしてますし、三好さんと原田さんはその隣で普通に将棋してますし。

お互いによく気が散らないですね。

「じゃ、イッチー、続き続き！」

「う、うん……」

「ほ、ほどほどにお願いします……」

あ、三好さんが立ち上がって……ティッシュケース？

鼻でもかむのでしょうか……そのまま将棋台まで戻って……二木さんたちの布団の隣に置きました！？

いやに気が利いてますね！

「ん、不破ぁ。いつまでも立ってないでこっちきなよ？　……あぁ、こいつらは気にしなくていいから」
「気になりますよ！」
「……じゃあ、覗こっか？」
「そういう気になるじゃ……！　……ちょっとだけ」
「うわー、不破も女の子だねぇ。なに？　思春期？」
「もう！　三好さんオヤジっぽいですよ！　さて、失礼しまーす……」

どれどれ。

ん……うわ……お、おぉ……え、そんなことまで？　うわ、舌が…うわぁ……

「いつまで見てるの？」
「っぷはぁ！？」
「で、どうだった？」
「いや、あの、なんというか……鼻からきました」
「あー、こもってるし匂いもすごいだろうね」

夏ですから蒸れますしね……
あんなに強い匂いがするんですね……

「さーてっ、不破の具合はどうかなぁ……？」
「え？　具合って、」

ってなに触……っ！？　……！！！

「とっ、トイレっ！　トイレ行ってきます！」

「っぷ！　不破ぁ、乙女だねぇ」
「う、ううう、うるさいですよ！」

じゅ、純粋なんです！
それなのに、あんなの見ちゃったら仕方ないじゃないですか！
で、でも、二木さんが弱々しくて意外でしたね……あれが本当の昼夜逆転性活でしょうか？
……私、なに言ってるんでしょうね。
とりあえずトイレで身だしなみを整えましょう。

「おー……見事な内股。ぷるぷるしてる」
「っ！　……うるさいですって！」
「ごゆっくり～」

そ、そういうこと言われると気になるじゃないですか！
まったくもう。
三好さんは人のことをからかいすぎです！
……でも、ああいう人に限って好きな人の前では従順……じゃなくて素直になるんですよね。想像つかないですけど。

「さて、と……うわ、い、意外と凄いことになってますね」

……よし。
全部忘れちゃいましょう！
これから私は身だしなみを整えて仮眠をします。その前後において変わったことは何一つ起きませんでした！
そして起きたら織斑先生に怒られる！　それで今日の

◇

――私のシャルに、なにをしてるんですか……？――

「どういう意味だったんだろ？」

友達として……にしては大袈裟すぎるよね。

じゃあ、保護者的な感じ……？　いや、でも義母さんの嫌がらせから守ってくれてたとはいえ、そこまで飛躍するかなぁ？

というか、私の誰々って少し恋人みたいだよね。少女マンガみたいな……うん、僕も女の子だし少し憧れる、かな？

まぁ、アリサがそんなこと言うわけないけど。

「私の……あぁ！　私の友達って言おうとして途中で言い換えたんだ。うん。きっとそうだね」

……ちょっとだけ、からかってみようかな。

アリサ、慌てて弁解するんだろうなぁ。

「と……そろそろ織斑先生の部屋に行かないと……まぁ、怒られに自分から行くのも変な気分だけどね」

行かなくても怒られるんだし関係ないんだけど……首の痣だけ隠して行こっと。

痕は残らないらしいから暫くの間我慢するだけでいいね。

「シャルロット、準備はいいか？」

「あ、ラウラ……うん。もう行けるよ」

うーん。

先生にはお手柔らかに頼みたいなぁ。怒られて嬉しい訳なんてないからね。

私の考えてることが伝わったのか、ラウラがふっと笑う。
どうでもいいけど、ラウラって一夏が近くにいないとかっこいいよね。一夏の側だと話さなくなるけど。

「まぁ、あまり怒られることもないだろう」
「なんで？」
「簡単だ。教官が私達と同じ立場だったらやはり同じことをしたからだ」
「なるほどね」

まぁ、先生は一夏のお姉さんだからね。それだけで納得できるかも。

◇

ざあ……
ざぁん……

んー。
海ですねぇ。
この磯の香りが何とも……苦手なんですよね。

「って、あれ、織斑君……なにしてるんですか？」
「ああ、不破さんか」
「ええ、不破さんです」

……このやりとりも実はお約束なんですよね。

「で、何をしているのか答えてもらっていませんよ？」
「んー……まぁ、海を見てるだけなんだけどな。強いていうなら考

え事かな」
「ふむ。昨日いなかった篠ノ之さんの水着はセクシーな白ビキニですよ」

セシぃのもそうでしたが……海においてあよサイズは凶器ですよね。
シャルも可愛すぎて殺されかけましたし……
……私と鈴ちゃん、ラウラさんだけが安全な胸でした。ラウラさんの水着もビキニでしたけどね。

「そんなこと考えてないって！」
「想像したくせに……身体、全快してたんですってね」
「ん？　ああ。束さんも驚いてたよ」
「それはそうでしょう。生体再生が可能だったのはコアナンバー〇〇一の白騎士だけだったんですから」

白騎士――史上最初のＩＳは実はその時点で現行ＩＳの殆どを凌駕していた、という噂もあります。
まぁ、最初の一機ということは束さんが最も時間をかけた機体だとも言えるので不思議ではないですけどね。

「少し、残念です……織斑君と、やっとお揃いになれたと思ったのに……」
「お揃い……？」
「背中の火傷……です。お揃いになれれば私……織斑君の近くにいても見劣り、しませんから……」
「え……？」
「こんな怪我をしている私は、織斑君に釣り合いませんから……私、ずっと、織斑君のことが……」
「不破、さん？」

「苗字でなんて、呼ばないで下さい……」
「あ、アリサ……」
「織斑君。いえ、一夏君……私、」
「ちょっと待て！」

よし。
篠ノ之さん、我慢が足りないですよ？

「篠ノ之さん、私の勝ちですよね？」
「むぅ……不破め。それより一夏！　なにをデレデレしている！？」
「鼻の下伸びてますよ？　ヤーですねー」
「ほっ、箒！？　というかアリサ、これどういうことなんだ！？」
「馴れ馴れしく名前で呼ばないで下さい。それじゃ篠ノ之さん、皆呼んでいいですね？」
「ああ、仕方ないな！　くそっ！　一夏のせいなんだからな！」

さて、鈴ちゃんたちを呼んであげましょうかね。
ことの発端は簡単です。
ひとりで海にいる織斑君を見つけた篠ノ之さんが逢瀬をしようとしていたので妨害しただけです。
問答無用で邪魔するのは可哀想なので、私と織斑君の二人きりでの会話を邪魔しなかったら私も皆に内緒にする、ということで賭をしたんですけどね。
篠ノ之さんには申し訳ないですけど……私は鈴ちゃんを応援してますからね。私もできる限り織斑君の建てたフラグを壊さないと気が気じゃないです。

「篠ノ之さん。抜け駆けされる気持ち、分かってくれましたか？」
「……ああ。これはキツいな……」
「え、なに？　どういうこと？」

織斑君も存外に鈍いですね。

「んーと。織斑君は私にからかわれていたことだけを自覚すればいいんです」

「からかわ……え!?　じゃあ、えっと、不破さんか俺のこと好き、みたいなのは……？」

「そんなこと言ってませんよ？」

そう思えるようなことは言いましたが言葉にはしてません。

私の“好き”はたった一人のためだけの物ですからね。

冗談でも織斑君には言いませんよ。

「えー!?　じゃ、俺、ドキドキ損!?　うわー勘弁してくれよな」

「私、自分より弱い男の人には興味ないんで」

「ぐはっ！」

……まぁ、こんなもんですかね。

織斑君と篠ノ之さんに対して八つ当たりしちゃいましたけど……仕方ないんです。

だって、シャルの首に痣が残ってたんですよ!?

八つ当たりしていなければ福音の操縦者を襲いにいっていたところです！　暗殺的な意味で！

「まぁ、織斑君のお陰で一人救われたんですからいいじゃないですか」

「おれ、知らないところで誰を救ったの!?」

「五月蠅い人ですねぇ。そういう細かい人、嫌いです」

「……ああ、今のでさっきの不破さんが幻だったのが理解できた」

それは良かったです。

「アリサー、あんたの荷物から花火持ってきたわよ？」
「あ、リン、見せて！」
「ふむ、打ち上げ花火五個に五十連発花火が八本、ロケット花火百本入りが二袋に爆竹が二十束か……」
「線香花火とか女の子の定番物がないのが代表らしいよねぇ」
「不破ぁ、爆竹にロケット花火結びつけるよぉ？」
「恐怖！　夏の海岸に飛び交う爆竹！」
「それは流石に危険すぎますわ！」
「というかふたちゃん、そういうこと言ってると不破さんに怒られちゃうよ？」

……あれ、人多すぎじゃないですか？
ちなみに順番は鈴ちゃん、シャル、ラウラさん、原田さん、三好さんに二木さん、セシぃ、一松さん……私とそこで固まっている二人を入れて十一人ですか。
確実にバレますね……

「あ～！　私も花火やるー！」

……のほほんさんも追加です。
ま、皆で怒られるのもいいですかね。
赤信号、皆でわたれば怖くない！　です。あ、よい子は真似しちゃだめですからね？

60. Un partie de la nuit de l'?t?. (後書き)

一応、ここで三巻終わりです。

三巻までを振り返って&夏休み予告ｂｙアリサ（前書き）

お茶を濁してごめんなさい（

三巻までを振り返って&夏休み予告ｂｙアリサ

「あ、こんばんわー。作者に精神的虐待を受けている不破アリサです。二巻終了時から、ギヴミーモアラヴ！電波を作者に送りまくってます」

「でもシャルからのラヴ以外は受け取り保留ですのであしからず。私より身近にいる大切な人に愛を捧げてあげて下さいね？」

「それでは回顧録、とは名ばかりのお茶濁し(言い訳ｍａｙｂｅ)いってみましょう！やー、本当にヘタレな作者ですいません」

～原作開始以前～

「ここはあれですね、唯一、私のカリスマが、って、ちょ、誰ですか、離し、はーなーしーてえぇぇぇぇ！」（フェードアウト）

「こんばんわ。真・不破アリサよ。原作が始まる前はまだ巡と意識が混濁してる頃だから私がやった方が問題も少ないはず……ねー巡？」

「ん？　あぁ、そうだな」

「この頃の私は割とかっこよかったんじゃないかと思うのよ。一話では巡の記憶を頼りにパパの背中を押したしね。まぁ、私がＩＳに乗りたかったからなんだけど……」

「というか記憶と嗜好は俺のものに偏ってたな。主導権をアリサが握っているってだけで」

「十三歳の頃も、まだ半分くらい私よ。火傷のことで虐められたりして辛かったけどセシリアのお陰で何とか耐えてたわ」

「ま、結局、日に日に俺の人格が蘇ってきたからパンクしたけどな」

「これを言うかは迷ったんだけど……私と巡が壊れたのは今のアリサがシャルロットを抱きしめた時よ。恋ってすごいよねー巡」

「恋心が俺達の人格をすり潰した、ってところかね」

「つまりシャルロットに殺されたようなものよ。夢であの子に冷たく当たったのもそのせいね」
「若干逆恨み入ってるけどな」
「うるさい！　……巡、そろそろ行こ？」

～第一巻～

「痛たた……なんだったんでしょうか」
「あっ、第一巻ですか？　ここはあれですね。第一～三話から急に私が変わってて読者の方を驚かせた&置いてった巻です。最強系主人公モノになると思っていた人を脱落させまくってしまった巻ですね」
「前から言いたかったのですが、この巻を経て今も読んでくれている方には心からの感謝を、期待を裏切ってしまった方には心の底からごめんなさいを捧げます」
「この巻でのテーマは友情です。いやー、早速私に泣きキャラが追加された瞬間ですね。でもこの話の主題はアリシャルなので第一巻はまだ序の口です。シャルが来た時のために地雷を仕掛けまくったと言いましょうか……」
「この巻を通して私の視線への忌避とその解消。セシぃとの過去に鈴ちゃんとの出会い。そしてトラウマの火傷。私の持つ問題を明らかにしていった巻ですね」
「鈴ちゃんとの喧嘩も今ではいい思い出ですけど……ホントに不安でした」
「あとは私のカゲロウの性能が垣間見えましたよね」

～第二巻～

「この巻での見所は私とシャルの再会です」
「でも私が目指していたシャルが幸せに生きることはいきなり破綻

していて……男装状態で転入させてしまいました」
「そういえば、教室ではシャルが転入してきたときに初めて満面の笑みを披露したんでしたね」
「どうにかしてシャルに不自由のない性活を送ってもらおうと決意をするのですが、シャルと二人きりになった瞬間に絶縁状を叩きつけられてしまいました」
「苦しかったですが、それでもやることは変わらない……いえ、変えられないと思ったんでしたね」
「でも、やっぱり精神的に参っていて……原田さんには申し訳なさでいっぱいです。そして、その罰としての謹慎中に戦争に赴き千人以上を殺してしまったんです。こうやって抜粋だけして文章にしてみると私反省してないですね。というかむしろ悪化してるようにも」
「ところが戻ってきてびっくり。あれよあれよという間にシャルとの確執が解けていったんです。寝顔、見られちゃいましたけど。でも、そのあとにラウラさんからドイツ軍に誘われ、シャルは自分のことは自分で守るからアリサはいらない、と言われ……失意のまま学年別トーナメントに入ります」
「ああ、そういえば、えっと……キャサリン、さん？　でしたっけ。彼女が私のせいで退学にー、とか言ってましたね。すっかり忘れてました。彼女、アメリカ出身でしたっけ？」
「それで、学年別トーナメントですね。私はラウラさんのパートナーとして参加し決勝まで進みました。観客が楽しめるような試合内容じゃなかったので会場からは悪役扱い（ヒール）でしたけどね」
「そこで……ふふ。シャルのことを初めて護れたんです。代償にシャルが私に対して負い目を感じることになってしまったのは嫌でしたけど、これを機に私のことを名前で呼んでくれるようになったんです。えへへ……照れちゃいますね」
「この傷は、背中の物と違って私の宝物なんです。人から見たら醜いのは知っていますけどね……シャルやラウラさんが気にしてしまいますし、隠すにこしたことはないんですけど」

「あと、どうも酷く酔っ払ったらしく楯無先輩とお風呂を使用不可能にするぐらい破壊したり、シャルに火傷を見せてしまったらしいです。この時のことをシャルや楯無先輩に聞いても顔を赤らめるだけで……織斑君に至っては頭を壁に叩きつけ始めましたからね」

「どうやら織斑君は私に謝らなければいけないようなことをしたらしいですが……全く覚えてないんですよね。お酒は怖いですね」

「シャルに火傷のことを知ってるよ、と言われた時は衝撃でした。何も考えられなくなって逃げ出して……挙句、廊下を血まみれにして仕舞いましたね。寮生の皆さんには本当に気持ち悪い現場を見せてしまいました。あれが無ければもう少し多くの人が私と親しくしてくれていたかもしれませんね」

「ここまでまだ回収していない伏線は三つくらい……でしょうか？」

～第三巻～

「二巻と違ってシャルがメインになりそうな話ではなかったので書く気がなかなか起きずずるずるとして仕舞いました。それでも無理矢理シャルと絡められましたけど」

「開幕いきなりシャルと織斑君の関係を誤解します。それも臨海学校が始まるまでとずいぶん長いこと……」

「織斑君にイライラして八つ当たりしてしまったり、シャルから距離を置こうとしたり、精神的に辛い日々が続きましたが……途中から半分開き直った感じになってシャルは応援するけど織斑君の邪魔をしよう、なんてことを考えていました」

「ショッピングモールでシャルと水着を選んだんでしたね。黒いタンキニは水嫌いの私が初めて勝って嬉しかった水着です。シャルにも優しい言葉とともに抱きしまられてしまいましたし……私は半裸でした。まぁ、それで私の何かが変わったという程でもなかったんですけどね。私は、臆病でした」

「それで憂鬱な臨海学校。いや、だって泳げないのに何が楽しいというんですか。ここで初めて束さんと直接会うんですよね。電話で話したことはありましたが……想像と違ってスタイルの良い人でした。羨ましい」

「水着に着替えたら早速海へ……落とされます。見知らぬ誰かに……いえ、見知らぬ、は正確ではありませんね。顔を見る前に投げ落とされたので。あのとき初めて死ぬかも、と思いました。まぁ、シャルに人工呼吸（キス）してもらえたのでヤなことばかりではありませんでしたが」

「実はここで記憶喪失になるルートもあったのですが、余りに意味が無いのでポシャりました」

「病院から帰ってくる車の中でナースのお姉さんに諭されました。今まではどうせみんな優しいから、等と思っていましたが、この時は何故かすんなり……とは言えませんが受け入れられたんですよね。関係性の薄い他人からの言葉だったからでしょうか？」

「戻ってきたら束さんとお話しながら夕食です。ここでゴーレムで学園を襲った理由を聞き出しました。そして、これから起こることのための裏取引を……私、実は狡い女なんです。その後、織斑先生主催の宴で私は……自分の歩いてきた道が血塗れだということに気付いた……いえ、思い出したんです。それにシャルがまだ髪を染める前の、シャルに隠している私のことを探していたことをきっかけにシャルとちょっとした口論になっちゃいます」

「そして二日目。私は意図的にシャルを避けて、シャルを考えないようにして、そうやって生きて行こうと決意しました。今から振り返ってみれば私ってワンパターンですね。離れようとして離れられなくて……」

「そんな時にアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型ＩＳ銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が暴走し、その対処に私たち専用機持ちが当たることになりました。本当は私も前に出て戦おうと思ったんですが……束さんとの裏取引があったので私は案全な海岸に立って皆さんに指示するだけ

でした」

「シャルを危険な目に遇わせないように……それだけを考えていたらイレギュラーが次々と起こって、織斑君が撃墜されてしまいました。織斑君が昏睡状態に陥り部屋に運ばれた時、私も行きたかったのですが、役割が、それを許しませんでした」

「そうして、福音に白狼の咆号（ウルフズロアー）を構えている間に束さんが暗躍。私が出張戦闘で体験したオーレリア戦争の記録を皆さんに見せてしまっていました……そして、篠ノ乃さんが、あんなに殺したのにどうして今は殺さない、と……そう、私を責めました」

「いえ、実際には責められていなかったのですが、私が勝手にそう感じてしまって。殺すことで私の勝ちを認められるのならそれでもいいかな、と。この時の私は既にシャルに近付くことはできないと感じていましたから、他の人が出来ない禁忌を犯すことで自分に利用価値が生まれたなら必要とされるかもしれないなんて考えていました」

「でも、その後に駆けつけてくれた皆さんが私を励ましてくれて。私は変わらないと、言ってくれました。それでもその言葉を信じない私をシャルが抱きしめて……私が、火傷や殺人を“自分が嫌われてもいい理由にしている”と指摘しました。そんなつまりはありませんでしたが……そうなんですよね。私は臆病ですから、なにをするにも、されるにも理由が欲しかったんです」

「シャルが、私の背負っている死の半分を肩代わりしてくれるとまで言ってくれましたが……それだけは私の責任なので出来ません。あの感触は私だけのものです。もし、シャルに半分背負って貰う時が来るとしたら、その時は……皮算用はやめましょう」

「それで、福音に対する報復（リベンジ）をしようということになったのですが、私は束さんとの取引があるので……なんて考えていたら、束さんが報酬の前払いを、そして好きにしていいと言ってくれました」

「最初の内は福音を圧倒して、あっけなく倒しちゃったかなーなんて思ったのですが、なんと福音が」第二形態に移行してしまい形勢

は逆転。私は海に墜とされ皆さんも次々と……ですが、エネルギーは残っていたので海底から白狼の咆号（ウルフズロアー）の照準を福音に合わせていました。シャルがピンチだったのでエネルギーの重点が終わる前に急いで撃ってしまいましたが。そしてちょうどその時、白式が来ることを感じ取ったので私は特攻して時間稼ぎをしました」

「正直、織斑君がいなければどうにもなりませんでしたね」

「ラストは勇気を出そうとした篠ノ乃さんを邪魔する形で皆さんと花火を楽しみました、意外なことに怒られなかったんですよね。織斑先生の気配りだったんでしょうか？」

これからのこと

「まだすべて決まったという訳ではないのですがＩＳ学園が休みの間の更新予定です」

その一

『ＳＰ２．Ａｒｉｓａ ｄａｎｓ ｌｅ ｐａｙｓ ｄｅｓ ｍｅｒｖｅｉｌｌｅｓ．』

「邦題は『不思議の国のアリサ』です。夏休み編とは少し違いますが登場人物を使った一種の演劇（ロールプレイ）ですね。私の役目はまさかの……！」

その二

『Ａ ｈａｐｐｙ ｈａｐｐｙ ｗｅｄｄｉｎｇ．』

「邦題は『とっても幸せな結婚式』。いえ、私とシャルが結婚する、ってことではないです。鈴ちゃんと織斑君でもないです。まぁ、いろいろあって、私とシャルで……えへへ」

その三
『Ｊｅ　ｌｅ　ｖｉｓｉｔｅ　ｄａｎｓ　ｌｅ　ｐｙｊａｍａ．』

「邦題『パジャマでお邪魔』。パジャマパーティーです。黒兎の皆さんと一緒にです。つまりドイツ訪問の話でもあったり。パジャマじゃなくて他のことも絡めます」

その四
『Ｒｅｔｏｕｒ』

「『帰郷』が日本語訳になります。私とシャルの二人っきりでフランスに帰りました。最初は私の家に行って……私の弟、天羽君の初登場ですよ！」

その五
『Ｌａ　ｐｅｒｓｏｎｎｅ　ｅｓｔ　ｕｎｅ　ｐｅｒｓｏｎｎｅ　ｄａｎｇｅｒｅｕｓｅ．』

「『そのもの、危険人物につき』。私とシャル、ラウラさんでのバイト話ですよー。原作にもあったあの話です」

その六
『Ｔｉｍｉｄｉｔ？／Ｅｘｃｉｔａｔｉｏｎ／ｆｕｉｔｅ／ｒ？ａｌｉｓａｔｉｏｎ』

「邦題は『赤面どきどき。逃げて追われて』。なんとシャルと私で雑誌のモデル写真を取ることになりました……？　え、ちょっと。私そういうの苦手なんですけど！？　いえ、本当に！」

「今のところはこれくらいですねー。こんな話はどうですかー？
なんてのがあれば感想ついでに提案してくれてもかまいません……
ビビビ！　とくれば書くと思います！」
「あ、順番は上の通りにはならないと思うので！」

61／SP2．Arisa dans le pays des merveilles

「不思議な国のアリサ」

お待たせしました！　二万五千文字です

ジャンル分けの難しい話になりました（

61／SP2．Arisa dans le pays des merveilles

ようこそ、不思議の国へ。
この物語のストーリーテラーは私、五反田蘭にお任せください。
おっと、幕の向こうの準備も整ったようですね。
では始めましょう。
私の話を聞いてくださる皆々様方、改めまして不思議の国へようこそ。

◆

柔らかな光がやさしく大地を暖め、小鳥たちが春を詠う。そんな穏やかなある日の午前中。
アリサは弟と一緒に川の畔の大きな木の下に座っていました。
アリサはする事がなくて退屈……というわけでもなく、弟が絵の少ない絵本――つまりライトノベル『境界線上の、

「天羽はそんなもの読むような子じゃありません！」
（※作者注：ラノベに対しての偏見はないです）

アリサさん、こっちへのツッコミとかいりませんから。
まぁ、アリサさんが不満そうなので真面目路線として数年前のベストセラー『バカ○壁（上下巻セット）』を、

「ちょ、天羽はまだ小学生でもないんですけど!?　……というか上下巻って新書の方じゃないんですね」

じゃあ、どうしろって言うんですか！
ライトノベルも養老孟司もダメなら何も残って無いじゃないです

か！？

「なんでそう両極端なんですか！？　というか普通に絵本でいいじゃないですか！」

えー。

これだからアリサさんは……そんなだからそんななんですよ

「え、なに！？　私が悪いんですか！？　というか、この場面で弟が何を読んでるかって重要なんですか！？」

……まさか、ここで天羽君が分厚い本を読んでいたことが、不幸で陰惨な状況の中から唯一のハッピーエンドにつながるための伏線だったなんて、いったい何人の人が気付くのでしょうか。

なんていう可能性だってあるじゃないですか。

「皆無ですよ！　というか不思議の国のアリスですよね！？　不幸で陰惨とかかけ離れてますよね！？」

もー！

そんな細かいことといいじゃないですか。

開幕からここまでの内容、オリジナルだとたったの三行で終わる説明ですよ？

とにかく、天羽君は六法全書を読んでたんです！　夢は弁護士か検事さんなんです！　ほっといてください。

「本が変わってる上に私も知らない新事実ですよ！？　しかも天羽のことなのに姉である私にほっとけだなんて……まさか反抗期！？」

ふふふ、アリサさんの知らない間に天羽君も大人になっているん

ですよ。
それに比べて姉のアリサさんは……はぁ。

「え、喧嘩売ってます？　蘭ちゃんでも容赦しませんよ？」

挿絵のない本を読む弟を見飽きたアリサは、ああ、つまらない、なにかおもしろいことないかしら？　そう呟きました。

「呟いてないです。天羽なら何時間でも見ていられます」

では……呟いた“てい”で。
その時オッドアイで銀髪の黒ウサギがアリサのそばを走っていきました。

「まぁ、いいですけど……あ、ラウラさんじゃないですか」
「大変だ、遅れてしまう！」

黒ウサギ、もといラウラはバニーガールの衣装の胸元から懐中時計を出して時間を確認します。
黒いレザーのバニー服はラウラさんの変化に乏しい凹凸に張り付き、さらに幼いながらもすらっとした肢体をカフスや網タイツが強調し、背徳的な魅力を醸し出しています。
黒光りするウサミミとふわふわの黒いしっぽもつけてます。

「……ラウラさん。あんな格好をするなんて、ずいぶんと辛いことがあったんですね。放っておいてあげましょう」

いや、追いかけてあげてくださいよ。

「な、何で私がバニーガールの格好をしている友人を追いかけなき

ゃいけないんですか！？　世間体的にもヤですよ……それに、シャルに見られたら拗ねられちゃいます！」

……仕方ありませんね。

こうなったらアリサさんが動かなければならないようにしてあげましょう。

ラウラさん、やっちゃいなさい！

「蘭ちゃん、ノリノリですね……って、天羽！？」

あらあら、アリサさんが私に構っているから天羽君がラウラさんに人質にされてしまいましたよ？

とりあえずナイスですラウラさん！

そのまま天羽君を連れ去りましょう！

「す、すまんアリサ。どうしても来てもらわないと、その、いつまでもこの格好でいなければならないんだ……しかも、サイズが微妙に小さくて、動く度に擦れたり食い込んだりして……その、」

「分かりました。一応原典は児童図書なのであまり性的なのは控えてください」

おお、さすがアリサさん！

大人の気配りというやつですね。体はまだ中学生なみですけど。

「そ、そんなこと、んっ、言っても、だな。次から次へと刺激されて……はぁ、どうして、はぁんっ！？」

「あの、蘭ちゃん？　一応聞きますけど、中に何か仕込んだりしてませんよね？」

もちろんです。

ラウラさんは普段より過激な衣装のため体が敏感になっているだけですよ。
ええ、決してウサギしっぽが大人のおもちゃ仕様だったりしませんん。

「くっ、こんな、あっ、ところで……ふぅんっ！　はぁ、はぁ」
「……こんなところで、の後は言わなくていいんで自重してください」

えーと。
ラウラさんは嬌声をあげながらもずるずると何かから逃れるように地面を這い、苦労の末、垣根の下の大きなウサギ穴に転がり込みました。
もちろん、天羽君も一緒にです。

「私の弟に手を出すとは……」

天羽君が落とした六法全書を懐にしまいながらアリサはほん少しの殺気を醸し出しました。
……六法全書って懐に入る代物ではないと思いますけど。
殺気に当てられた木の上で歌っていた鳥たちが一斉に飛び立ちます。
淫靡とか嬌声とか殺気とか……いきなり童話の世界にはそぐわない単語ばかり並んでいますが、この作品はあくまでも『不思議の国のアリス』をもとに書かれています。

「というか、今のラウラさんは白兎というより発情（マーチヘア）した兎ですよね？」

いえ、盛（それ）りのついた雌兎はまた別のキャストなので心配いりませ

んよ。

「雌ってあたりが不安すぎます……まぁ、順当に行けば二木さんですよね。となるとヤマネが一松さん……？」

あぁ、あとこの作品は一人二役（マルチキャスト）もあります。

「え、それを今のタイミングで言う必要は、」

いいから早く穴に落ちてくださいよ！　話が進まないじゃないですか！

「って、ちょ、きゃっ！？」

あらあら、アリサは不幸にも足を滑らせウサギ穴に入ってしまいました。

ウサギ穴は最初はトンネルのように真っ直ぐです。

ウサギ穴に足を踏み入れたことで覚悟が決まったのか、アリサは奥へ奥へと走ります。

「蘭ちゃん、後でひどいですよって、きゃぁ！？」

ああ、ほら、余所見するから……

アリサは前を見ていなかったので地面がなくなり垂直に大穴が口を開いているのに気がつきませんでした。

その井戸のような空間を落ちていくアリサ。

ふと、アリサが周りを見てみると穴の壁面に当たる部分が棚になっていることに気がつきました。

試しに手近にあった本を手に取ってみます。

「こんなところにおいてある本なんて誰が読むんでしょうね……というかタイトルが今日のアリサってどういうことです？」

さぁ、そこにある本は適当に学園内から集めてきただけなので私にも……

「まぁ、どうせ私の黒歴史なんかが……」

アリサはゆっくりと、そして徐々にページをめくる頻度を早め、とうとう半ばで読むのをやめてしまいました。

アリサさん、涙目ですけど……やっぱり黒歴史でした？

「しゃ、しん……」

え？

「私の、プライベート写真集です……それも私的（プライベート）ではなく、私的生活（プライベート）……着替えからお風呂からトイレから、何から何まで……しかも、普通に発禁指定受けるようなアングルのものまで……どこの、ふぇ、誰が……うわぁぁん！」

……どうやら知らなくていいことを知ってしまったようです。

あの、アリサさん。

気を強くもってください……

ね？

「ら、蘭ちゃぁん……私、こんなに怖い思い、久しぶりですぅ……！」

な、泣かないでくださいよ！　一応主演女優なんですから！　化粧が落ちちゃいます！

ほ、ほら、なんか壁際になぜか都合よく暖炉までありますから火にくべちゃいましょう？

ポイしちゃうんです！

「うん。ありさ、ポイする……ボゥってする」

よ、幼児退行……？

いえ、可愛らしいとは思いますけど、しっかりしてください！

弟の天羽君が人質にされているんですよ！？

助けられなくていいんですか！？

というか六法全書を読んじゃう弟さんより幼くてもいいんですか！　姉としてのプライドを持ってください！

「……ありがとうございます、蘭ちゃん。空元気でました」

手首で目元をグイッと拭うアリサさん……やっぱり、格好良いなぁ。一夏さんよりも、もしかしたら……

そういえば現像してあるってことはネガがどこかに……

「っ！？　うぅ……そんな、」

まぁ、とにかく！

人間、一つを手にするには何かを犠牲にしなければならないんです！

「……蘭ちゃんがそもそもの元凶じゃなければもっと心に響いたんですけどね」

あ、あははー……

「えと、セリフ、なんでしたっけ？」

そうだ、こうやって落ちる練習をしておけば、屋根のてっぺんから落ちたってきっとへっちゃらよ！　です。

「実際、五階建ての建物くらいなら余裕で飛び降りれますけど……」

あの、アリサさんって人間ですか？

まぁアリサさんですし、気を取り直して。

このように、アリサがいもしない誰かに話しかけるなんていう痛い行動をとっている間にも、どんどんと落ちていきます。

……初めにも言いましたが私はストーリーテラーですからね。

「そういう扱いはさすがに予想してませんでした！」

アリサがやはりブツブツ呟いていると、いきなり、どーん。

枯れ葉の山に墜落しました。

「しかも無視……」

見上げると上は真っ暗です。

そして、目の前には道とそこを走る兎ラウラが居ました。

「っく……ダメだ、また、もう……キちゃう……！　こうなったら……！」

「だから自重してください！」

いい感じにラウラさんも壊れてきてますね。

不思議の国の住人はやっぱりこれくらいじゃないといけません。

「こんなはしたないこと……きょ、教官に、おしおき、されてしまう……おしおき……」

ラウラを追いかけながらアリサはそんな言葉を聞きました。

……ちょっと壊れ過ぎているかもしれません。というか不思議の国の住人は変人であって変態では……

ラウラが角を曲がり、数秒遅れてアリサも曲がります。

「あ、れ？」

しかし、ラウラと弟の姿はどこにも見えず……

「これって……」

少し、淫靡な匂いのするバニースーツが細長い広間に脱ぎ捨てられているだけでした。

「だから、原典が児童図書なのに淫靡とか……っていうかラウラさん！？　天羽の前で脱がないでくださいよ！　情操教育に気を遣ってください！」

いえ、喘ぎながら走ってた時点で成長に影響を及ぼすと思いますよ？

……あの、怖い顔をしないでください。

細長い広間はランプの明かりで仄かに照らされています。

アリサは先に進もうと思いましたが、四方に備え付けられている扉には全て鍵がかけられていました。

「……閉じ込められた？　引き返すにしても、あの穴を上らないといけませんし、なにより天羽を助けないと……」

アリサがどうにかできないか辺りを見回しましたが何も見つかりません。

って、あれ？

真ん中のテーブルに小さな金の鍵があるはずなんですけど……それでカーテンの裏の小さな扉を開け、薬を飲んで小さく……え、鍵を設置し忘れた！？　小道具さん、困りますよぉ……

ど、どうしましょう。

またストーリーテラーの力で書き足しましょうか……？

「なるほど、どうやら本当に先に進ませてくれないようです。それなら……」

コンコン、コンコン、とアリサが扉を一枚一枚ノックしています。

誰かの反応があれば開けてもらう気でしょうか？

もう少し、様子をみましょうか。

「ん、この扉だけ音の響きが……つまり、薄いということですね。可能性は五分五分というところですが……」

言うや否や、アリサは数歩下がって力を溜めます。

え、あの、大道具さんが頑張って作り上げたセットなので壊さないでくれるとうれしいかなぁ……なんて思うのですけど。

「すぅ、はぁ……せー、のっ！」

アリサが勢いをつけて扉を蹴りあます。

ごすっ、という鈍い音ともに木製の扉が軋みました。

……丈夫でよかったです。

「もう一発！」

アリサは一発目の勢いを殺さないように回転、最初とは逆の足で踵を叩きこみます。

ズゴン！

今度こそ、扉の中央に手が出せるくらいの穴が開きました。

「よし、これで……えーと、これ、ですかね？　あれ、違いますね。じゃあ、こっちですか」

アリサは穴に腕をつっこみ、扉の鍵を探り当て開錠しました。

……発想が泥棒みたいです。強引なのである意味で強盗……？

まぁ、開いた扉は結局同じところに続いているので問題はありませんね。

最後にアリサは部屋を見回し、丸テーブルの上に置いてあった白い粘性のある液体が入った瓶を見つけました。ラベルには『私をお飲み！』と書いてあります。

早速、ふたを開けます。

「……よかった。イカ臭かったりはしませんね。これまでの流れだと飲まされてもおかしくない気もしたんですが……」

あー……そういう手もありましたね。次に生かしましょう。

いえ冗談です。ゴックンとかそういうのはないですから。

「……信用できません。まぁ先に行きますか」

アリサは中身を飲まずにビンを机に戻しました……まぁ、怪しす

ぎますよね。
　壊した扉をアリサが開けようとすると、そこへひたひたという足音が聞こえてきました。
　ぱっと振り返ると律儀にもウサミミとしっぽだけはつけて天羽君を抱える全裸のラウラさんです。
　天羽君がもう少し年をとっていたら情操教育に多大な影響を与えてしまうところでした。

「ラウラさんストップ！　ストップです！」
「あ、アリサ！？　くそっ、教官、教官を待たせてしまったら、きっとかんかんに……お、おしおき、だな」

　自分で言ったおしおきという言葉にラウラさんがゴクリとつばを飲み込みます。
　改めて言いますが、ルイス・キャロルの不思議の国の住人は変人ではありますが変態ではありません。一応。

「あの、なんで赤面してるんですか……？」
「ううう、五月蠅いぞ！　とにかく私は急いでるんだ！」
「待ってください！」

　走り出そうとしたラウラさんを呼び止め、アリサさんは自分が着ていたエプロンドレスのエプロンをラウラさんに着せてあげました。
　……アリサさん。
　もう一度、冷静になってラウラさんを見てください。

「……裸エプロンにウサミミしっぽ……ごめんなさい。私にはこれ以上何もしてあげられません！」
「よく分からないが……アリサ、感謝している！　また会、ぐぅっ！？」

純粋な親切心からの行動でしたが、結果はラウラさんをより変態チックにしただけでした。
アリサさんが泣きたくなる気持ちも分かります。
そんなことよりもいきなり苦しみ出したラウラのほうがアリサには心配でした。

「ど、どうしたんですか！？」
「いや、なんでもない……少し、ルールを忘れていただけだ。ではな」

少し気まずそうに、ラウラは走り去りました。

「はぁ……とりあえず外に行きましょう」

……アリサさんが小さくならなかったことで原典のフラグの殆どを叩き折ったような気がしますがこのまま続けます。
ええ、なぞるよりアドリブ劇の方が面白そうですしね。
というか、天羽君返してもらわなくてよかったんですか？

「……っは！？」

◇

「なーに、しけた顔してるのよ？」
「自分の馬鹿さ加減に呆れているだけです……鈴ちゃん。何役ですか？」
「チェシャ猫。見れば分かるでしょ？」
「いえ……見たままに答えるなら変態さんです」

うーん。

アリサさんの言う通り、鈴さんはフサフサの猫耳としっぽ、手足も肉球付きですからね。

しかも、ほぼ下着同然の格好です。毛糸パンツ、ではなく毛皮パンツというところでしょうか。

というかアリサさん。何役？　とかメタっぽいこと禁止です。

「結構、今更ですね」

それにしても……

「鈴ちゃん、胸小さいですね……って、え!?　今の私の意志じゃないです！　蘭ちゃん!?」

ふふふ。

役者はみんなストーリーテラーのお人形ですよ。

「あ、アリサが言うんじゃないわよ！　私と大して変わらないくせに！　あと蘭？　……あとで酷いから」

ひゃっ！　ごめんなさい！

でも鈴さん……ストーリーテラーさんを甘くみない方がいいですよ？

この演劇の間限定ですが胸をさらに小さくすることだって……

「や、やれるもんならやってみなさいよ！」

強がっちゃって……ふふふ、では！

「（びくぅっ）……？」

……あ、あれ？
ご、ごめんなさい、で、できませんでした。
……なんででしょう？

「ふ、ふん！　そんなこと言っちゃって。どうせ怖じ気ついただけでしょ！」

そんな無い胸を張っても大きく見えな……
あ、鈴さんに減らせるだけの胸がなかったからですか。
納得です。

「げふっ！」
「……蘭ちゃん。その辺で……鋭い言葉が鈴ちゃんの心にグサ利と刺さりましたよ」
「ふん、アリサなんて中途半端な胸のくせに！」
「えぇ！？　とばっちりですか！？　……いいんです。きっとまだ育ちます！　未来は明るいんです！」

そう思ってないとやってられませんよね。
ほんとに……

「あ、あれ？　蘭ちゃんまでダークサイドに……」
「あの子も胸気にしてるのよ」
「なるほど……ところで、鈴ちゃん。私、どっちに行けばいいと思います？」

ああ、アリサさんが自発的に物語を進めようとしてくれてます。
感動です。
やっとやる気を出してくれたんですね！

「あっちに行くと三月兎（マーチヘア）。そっちに行くと帽子屋（マッドハッター）。まぁ、どっちも変人だから気をつけなさいよ？」
「ええ……なんとなく、予想してました」
「ま、今頃はあっちの反対側の道の先でお茶会やってるから行かない方がよくないわ」
「行かない方が……へ？」
「……まぁ、すこしはチェシャ猫らしくしないとね。じゃ、アリサ、気をつけるのよ」

おお、鈴さんは立派に女優さんですね！
慣れないことをして照れているのがまた可愛らしいです。
アリサは照れ隠しに髪の毛に指を絡ませているチェシャ鈴が指した方向と逆の方向へ歩いていきます。

「あ、そういえば鈴ちゃん」

振り返ったアリサですが、チェシャ猫はすでにいませんでした。
まるで最初からいなかったかのように音もなく消えてしまったようです。

「うーん……まぁ、チェシャ猫ですし仕方ないですね」

もしかしたら反応があるかもと思って呟きますが、アリサに返事をする声はありませんでした。
アリサは某名探偵のように顎に手を当てしばらく考えたあとニヤリとしました。

「あ、あー、あー。こほん……ワタシ、鳳鈴音（ファンリンイン）アル。コウミエテペちゃぱいアル」

「あーりーさー！」
「何でこういうときだけ出てくるんですか！　ってきゃー！　あふっ、ちょ、あはっ、あははははは！　くすぐりは、っは、反則、あははははっ……はぁ、はぁ、はぁ」
「反省したわね？」
「ええ、変な語尾とかぺちゃぱいとか本当にごめんなさい……」

アリサは謝りますが返事がありません。
本当に怒らせてしまったかと不安に思い目を開ければ、いつのまにか鈴の姿はまた掻き消えていました。

「鈴、ちゃん……？」

あ、そうだ。
アリサさんアリサさん！　途中の小屋に立ち寄ってください。

「これですか？」

イエス！
そこでお着替え（配役変更）です！

「……は？」

◆

「……あぁ……私だったんですね」
発情（マーチヘア）した兎の衣装は気に入りましたか？
バニースーツを兎の毛皮で作った特別製ですよ！

「バニースーツっていうより……これじゃ、殆ど裸じゃないですか！」

まぁ、ローライズいうかブーメランというか……それとチューブトップだけですからね。

仕方ないんです……毛皮が足りなかったんですから。

「というか、なぜ私が……」

え？

発情＝淫乱＝ピンク色＝アリサさんじゃないですか？

「あの、せめて発情＝淫乱＝ピンク。ピンク＝アリサ、にしくれませんか……？」

ほら、だからアリサさんの髪の毛に合わせてピンク色の兎の毛皮なんですよ。手に入れるの苦労したんですからね？

「ピンク色の兎……？」

……ここまでの提供はロビー君でお送りいたしました。

「静岡（サイレント・〇ル）！？」

さぁ、何のことでしょう。

……とにかく、その服はなんとか切り落とした右腕の毛皮からできてるんです！

もし、完璧なバニースーツを作ろうと思ったら……きっとあと百人ほどの命が……

「これで我慢しますよ！　無茶しないでください！　すーすーしますけど！　あぅ……」

お尻とかほとんど見えてますからね。

それじゃ、アリサさん。アリス役がくる前にお茶の席に！

「あら、マーチヘアはアリサさんでしたのね」

「マッドハッターがセシぃ……狂ってるのは味覚ですかね？」

「狂っているのは私の味覚ではなくて皆さんの味覚ですわ……強いて言うならアリサさんの格好も」

味覚音痴を認めないなんて……セシリアさんもなかなか役に徹してますね！　結構マッドです！

さてさて、二人がいるところはマーチヘアの家の庭。お客様はあと一人。寝坊助のヤマネが来るはずです。

ヤマネの正体やいかに。

「あら、ヤマネならそこにいますわ」

「へ？」

「ほら、アリサさんの太股の上に」

「あ、ヤマネは普通にヤマネなんですね。可愛い……」

マーチヘアのアリサがヤマネを撫でます。

背中の次はお腹を撫でてやろうとひっくり返して、

「きゃっ！？」

「おぉわぁぁ！？」

ヤマネを地面に落としてしまいました。山根の意外と低い声が響きます。

驚くのも仕方ありません。床に落ちたヤマネの寝ぼけ顔はなんと織斑一夏だったのですから！

「……変人たちのお茶会（マッド・ティーパーティー）の参加者というより、ただの変態ですね。織斑君？」

「や、まて、誤解だ」

「……私の……そ、そこの匂いはどうでした？」

「もちろんいい匂いで……あ」

三月アリサの機嫌を悪くしないようにと誉めるつもりだったのでしょうが逆効果でした。

残念すぎる人ですね。

でも、ヤマネの小ささだと死の危険性があるので……

でも怒りながら恥ずかしがっているアリサさんが可愛いので続けましょう。涙目ご馳走様です。

「セシぃ、ティーポットを」

「は、はい」

ティーポットをマッドセシぃから受け取った三月アリサが、その蓋をゆっくりと開き中身を確認します。

「空っぽですね……ちょうどいいです」

三月アリサはヤマネ一夏をつまみ上げティーポットに投げ込みました。そして蓋を閉め手で押さえます。

当然のごとくヤマネはティーポットの中で暴れます。

「セシぃ、セシぃの分の紅茶も下さい……まだ、熱いですよね？」

「へ？　あ、えぇ」

三月アリサはティーポットの蓋を押さえたまま……えーと、まさか？

「その、まさかです。変態さんなんて、嫌いです」

注ぎ口から紅茶がティーポットに戻されていきます。ティーポットの中でヤマネ一夏が激しく暴れますが三月アリサは気にしません。

三杯目をティーポットに戻す頃にはティーポットが暴れることもありませんでした。

中にはきっと紅茶のヤマネ煮が……

「中身、捨ててきますね」

「は、はい……」

……アリサさんってやっぱり怖い人です。

一夏さん。ご冥福をお祈りします。

「あ、アリサとセシリア」

「あら、シャルロットさんがアリス役でしたのね」

「シャル……あの、セシぃもですけどあまり見ないでください」

ヤマネの一件で忘れかけていましたが三月アリサの衣装は露出過剰です。何とか隠れている程度の状態です。

……いっそのこと、何も着ない方がまだましかもしれません。

とにかく、お茶会の始まりです。

「……アリサ、三月兎役なんだよね？」

「え、えぇ……ですから、あんまり、見ないでください」

「ウサミミは？」

……私としたことが！
アリサさんを辱めることに夢中でウサミミの準備を忘れていました。何たる失態。何たる無様！
ストーリーテラー失格ですね、私は。

「いっそそのまま出てこないでください……」
「ん？　……あ、そうだ。アリサ、ちょっとごめんね？」
「へ？」

シャルロットが三月アリサの後ろに回ります。
その手に持っているのは髪を整えるためのリボン……まさか！

「はい、完成！」
「……ツイン、テール……ですか？」
「うん。これで少し兎の耳に見えないかな？　髪の毛が長すぎるから一周させて輪にしたけど、垂れ耳みたい♪」

シャルロットさんナイスです！
うん、アリサさんも可愛い！
……じゃなくて。

「似合ってますか？」
「うん！　でもその格好はちょっと、刺激的すぎ、かな？」
「まぁ、同意します」

裸も見せ合っている仲のくせに……

「僕だけでいいの」

……あぁ。
なるほど、そういうことですか。
シャルロットさんも意外となかなか独占欲の強い方だったんですね。
恥じらうアリサさんにシャルロットさんのジャケットが被せられました。

「……不愉快だね」
「へ？」

はい？
というか、どこからジャケット出しました？
……あのー、聞いてます？　アリスコスのシャルロットさん？

「紳士の嗜みだよ」

ジャケット、着てませんでしたよね？
というか紳士じゃなくて淑女では……？

「そんなことより、アリサ！　そんな服着ちゃダメでしょ！」
「……ごめんなさい？」
「アリサは僕のものなんだから……必要以上に可愛い格好されると心配だよ。おへそだって見えちゃってるし……」
「ひゃん!?　い、いつになく強気で攻めてきますね？」
「アリサが可愛いからね♪　でも、こんな格好しちゃう悪い子にはお仕置きが必要だよねー？」
「えっ!?　あの、ちょっと、えぇ～～？」

あわわ……シャルロットさんがアリサさんをお姫様だっこで拉致っちゃいました。

主人公から目を離しちゃいけないんですが……アダルティな内容になってしまいそうですし……

「三十分は戻ってきませんわ」

……なら、少しの間、違う人を見に行きましょうか。

「ただ、私の時は女王に奪われたまま。いつまで経っても午後六時（ティータイム）ですが……あら、もう行ってしまったのですか」

◆

「きょ、教官！　遅れて申し訳ありません！」

やっぱり、女王って言ったら織斑先生ですよね。

目つきとか態度とか……そんな織斑先生も従えられる私って……

あぁ快、感♪

「教官ではなく女王だ。黒ウサギ……ボーデヴィッヒ、その子供はなんだ？」

「子供です」

「何の子供だ？」

「人間です」

「そうか、ならあとで裁判だな。では、その格好はなんだ」

っは！

織斑先生が普通に役になりきってます。となると首を切れ！　とも言うのでしょうか？

やっぱりこの人が女王でファイナルアンサーですね。

「支給されたバニースーツが食い込み、体に力が入らなくなったの

で脱ぎ捨てました！」
「着ているではないか」
「これは異邦人（アリス）からの貰い物です」
「なに……異邦人（アリス）だと？」
「はい、出勤中に尾行けられていたらしく……」
「ふむ……連れてこい」
「っは！」

あれー？
私の知らないところで何かが暗躍しているようですね。
このままでは物語がちゃんと終わりません。
……まぁ、面白ければいいとも思うんですが。

◇

「どうだった、アリサ？」
「え？　あぁ、気持ちよかったですよ？」
「……そ、そう。外でなんて初めてだったから緊張しちゃったよ」
「そうですか」

こ、こほん。
そこの二人。ピロートークはちょっと……いえ、野外だったのに枕（ピロー）というのもおかしな話ですけど。
というか、それどころじゃないんですよ！

「アリサ、ん～」
「え……あぁ。シャルも甘えん坊ですね……ちゅ」

だから、そこのバカップル！　甘い空気出してないで話を聞いてくださいってば！

なんかアリス役が危険そうなんですよ！
今のところシャルロットさんが！

「ん、僕？」
「へぇ、シャルが……詳しく聞かせてください」
「それはアリス……つまり異邦人が狙われているという話ですわね？　それならわたくしが。あの女王には借りがありますから」

あ、あれ……そういえば、なんだかシリアスですよ？
本来なら笑いあり、エロコメありのちょっとした小話になるはずだったのですが……

「……気になることが。セシぃ、シャルを狙ってるのは女王様なんですか？」
「ええ、マーチヘアであるアリサさんは識っているでしょうが先代であるブルーム女王がなくなって今の千冬様に……十中八九、彼女が深く関わっているでしょう」
「その人がどうして黒幕だと分かるんですか……？」
「二度目、だからですわ」

ど、どうしましょう。
ストーリーテラーである私でさえ知らない情報が出てきてますよ？
というか、スケール広げすぎじゃないですか？　風呂敷たためます？

「二度目……」
「女王は異邦人の持っている常識が不思議の国に持ち込まれるのを恐れているのです。現在の不思議の国では女王と王は最高権力者。彼らが望めば時間すらも思い通りですわ」
「まさか……」

「では、この時計をご覧になってくださる？」

セシリアのぷるんとした胸元から懐中時計が抜き出されました。

アリサは不機嫌そうにその胸を、シャルロットは興味深そうに時計の文字盤を覗き込みました。

「この時計、数字が一つしかない……」

セシリアの時計は十二個の数字の全てが六になっていました。

六時から一時間で六時、二時間でも三時間でも六時です。

「ええ、ですから私はいつまでも午後六時（ティータイム）でなければならないのですわ」

「ここは三月ウサギである私の家なんですけどね……」

「固いこと良いっこなしですわ。そのお陰でためになる話を聞けているのですから」

「でも、どうして僕を？」

シャルロットがわき道にそれた話を本筋に戻します。

「それは異邦人（アリス）だからですわ……不思議の国を治める王族。その僕として作り出された住人と違いかれらの命令を真っ向から跳ね除けることができる存在。それが異邦人（アリス）。つまりシャルロットさん、貴女です」

「あぁ、なるほど……配役変更から体が重くなったのは何かを制限されたからですか」

「そう考えるのが不思議ですわね。何が制限されているかはわかりますの？」

「いえ……」

「そうですか……全ての住人はなにかしらを制限されているはずで

すわ。例えば、私は時間。ヤマネは活動。チェシャ猫は存在。トランプの兵隊は思考ですわ」
「なるほど……だからセシィはお茶会を続け、鈴ちゃんはいきなり消えてしまったのですね」
「ヤマネが寝ぼすけなのも兵隊が女王の手足なのもそのためですわ」

……そんな理由があったんですね。
私はてっきり変人色を出すためなのだとばかり思ってましたよ。

「あら、貴女だって例外ではないはずですわ。蘭さん（ストーリーテラー）？」

へ？

「おそらく、前回と同じなら貴女が奪われたものは良心。主人公（メインキャスト）である異邦人（アリス）に感情移入しないためですわ」
「そういえば、優しい言葉の裏にも悪意がありましたよね……写真のネガ、どうしましょう……」

そ、そんなことはぁ……

「では蘭さん。これからシャルロットさんが複数の強姦魔に襲われたとします。助けますか？」

え？　えと……あれ？
助けます、と言うべきなのでしょうが興味がわかないです……なるほど、なんだかんだで私も女王の操り人形というわけですか。
皆さんのお手伝いをするということもできそうにないですね。
ということで頑張っちゃってください。私はおとなしく高みの見物をしてます。

「蘭ちゃん、悪びれもしないなんて……でも、どうしましょうか？　私たちは女王様の意志に従うお人形さんということですよね？」
「いえ、それは性格ではありませんわ。女王はわたくしたちからひとつしか奪えないんですの。ですからわたくしたちがこれ以上どうこうなる、ということはないですわね。ただ、女王がトランプの兵士を使って間接的に首を切ろうとしたときはまた別のことですが」
「なるほどね……でも、アリサは何を奪われたんだろう？　体とか大丈夫？」
「さぁ……？　体にも特に問題はありませんけど……ただ、なにか大事なものが欠けているような気がします」
「大事って……まさか！」
「シャ、シャル？　どうしました？」
「えと……アリサ、僕のこと……」

「好き？」

「え？　それは、もちろん……嘘です。そんなわけが、でも、さっきキス……義務……？　え、あれ？　嘘……そんな、」
「まさか……アリサさん、落ち着いてくださいませ」
「シャル、どうしましょう」
「……」
「私、シャルのこと……好きじゃ、なくなっちゃいました」

アリサさんが奪われたのは恋心ですか……女王様もなかなか酷い人ですね。
気付いてしまえば確かに納得です。
普段なら自然とシャルロットさんを見つめているアリサさんですが三月ウサギになってからはそんな様子がまったくありませんでし

た。
　いちゃついてましたが、その時も心ここにあらず、というような。
　あの時点でシャルロットさんを拒まなかったのは……発情期（マーチヘア）の兎だったからですね。

「ご、ごめんなさい！　シャル……ごめんなさい……私は、嫌われたくないとすら……思えません」
「アリサさん……」
「悲しいとも……思ってません。ごめんなさい」
「……そっか」
「あぁ！　納得ですわ。恋ができないから発散できずにずっと発情してるんですわね」

　……セシリアさん。少しは空気を読みましょう。
　いえ、実際私も今のので思わず手を打ってしまいましたけど！

「……許しません」
「アリサ？」
「奪われたのなら取り返す……消えてしまったわけではないのでしょう？　なら力尽くで奪い返します」
「アリサ……」

　恋心がなくてもアリサさんはアリサさんなんですね。

「セシぃ……女王の城はどこに？」
「この先に扉の木がありますわ。その扉をくぐると四方に扉がある部屋に出ます。そこの西のカーテンの陰に金の鍵で開く小さな隠し扉が。体が小さくなる魔法の薬を飲んでそこを通ったあとに体が大きくなるキノコを三口。大人の足で数分歩けば城が見えますわ」
「……では、行ってきます」

「何をおっしゃっているのやら……わたくしもついていきますわ。久しぶりに夕食が食べたいですわ」
「僕もいくよ。僕の、アリサの恋心が奪われたんだしね」

立ち上がるアリサに続いてセシリアとシャルロットも立ち上がりました。

二人を危険に巻き込むわけにはいかないとアリサは一人で行けると強がろうとしましたが、結局こまったように笑うだけで何も言いません。

たった四人による蜂起の始まりです。

これって王家に対する反乱……つまりクーデターということになるんでしょうか？

◆

「大きなクロッケーフィールドですねぇ」
「まったくですわ。まったくトランプの兵士を操ってこんなもので作らせているんですから……」
「とりあえず、この人たちどうしようか？」

彼女たちの足元にはトランプの兵隊――通称『ダイヤ隊』の十三名が横たわっています。

トランプの兵士と言ってもそれは隊の特徴からでしっかりとした人間です。Aを頂点とし、KとQを抜いた十一人による小隊が四つ。城を守る『ダイヤ隊』、秩序を守る『クラブ隊』、裏切り者を討つ『スペード隊』、そして王家を守る近衛隊である『ハート隊』です。

ダイヤ隊は防御力なら随一とも言われているんですけどねぇ……まぁ、アリサさんがいる以上、勝てないということもないと思っていましたけど。

「とりあえず武器になりそうなものを全部借りていきましょう。銃はセシィとシャルが、ナイフはシャルと私が使います」
「そうですわね。確かにそれが一番適当ですわ」
「とりあえず目立たないように隠していこうか」

それぞれが体に武器を隠し、余った武器は遠くに投げ捨てました。
そんな時、不意に足音が聞こえてきます。

「む、客人……いや、裁判の傍聴人だな？」
「ら、ラウラさん……天羽はどこですか？」
「女王とともにいる。女王は裁判の準備をしている。行きたければ行くといい……私にお前たちを止めることは許されていないからな……」

そのまま、ラウラは歩き去ります。
戦いになるのか、と警戒した三人は肩透かしを食らったような顔でお互いに見つめ合っています。

「……どういうことでしょう？」
「彼女もまた女王に奪われたものの一人と言うことですわ……彼女が奪われたのは自由。あらかじめ決められた時間割（タイムテーブル）に従うことしかできない哀れな歯車ですわ」
「……戦う理由が、増えたかな？」
「ですね……裁判が行われる法廷はどこでしょうね？」
「そうですわね……あら、ちょうど兵士さんが一人だけ気付きましたわ」
「なら、優しく尋ねようか？」

三人は、気絶から覚醒した兵士が泣いてしまうくらい優しく法廷

の場所を聞き出しました。

◆

「これより、裁判を始める」

黒兎――ラウラの厳格な声によって場内が静まりました。

傍聴席にはガチョウやアヒル、コウモリ、魚、ドードー鳥までいます。

アリサ、セシリア、シャルロットは傍聴席の一番前。ちょうど女王が座っている高そうな椅子の真正面です。

「異邦人（アリス）……」

女王・千冬の低い声にシャルロットがぶるりと震えました。

「裁判を始めよ！」

女王の声を合図に被告人であるハート隊の第二位（ジャック）が連れてこられました。

その顔は……ってお兄!?

え、なにやらかしたの!?　……まぁ、なにやらかしてても不思議じゃないか。

場内の環境が整ったことを確認したラウラは巻物を広げ、その内容を朗々と読み上げました。

「先日、女王様が蜂蜜酒を作った、とても暑い日に。先々日にハートのジャックが飲み干した、辛くて辛くて火を吹いた」

「有罪か無罪か、すぐ決めよ」

王が言いました。
王様いたんですね。

「バカもん、証人を呼んで調べるのが先だろう。ボーデヴィッヒ」
「っは……第一の証人、ここへ」

第一の証人は誰でしょう。
誰かが出てくる気配はありません。
それはそうでしょう。
第一の証人は先程三人が倒したダイヤ隊の面々なのですから。

「代わりの証人、ここへ」
「シャル……私がいきます」
「アリサ！？」

シャルロットが止める暇もなく、アリサがポーンと傍聴席の仕切りを軽く飛び越えました。

「お前は……？」
「アリサ。マーチヘアのアリサです」
「ふむ。では証言を」

うーん。
アリサさん、何を証言するんでしょうか……？　あんまり無茶なことはしないでほしいのですが……
まぁ、アリサさんに無茶をするななんて、生物に息をするなというようなものですから諦めていますけど。
でも本当にどうするんでしょうね。

「先日、女王様が蜂蜜酒を作った、とても暑い日に。先々日にハー

トのジャックが飲み干した、辛くて辛くて火を吹いた。と言いましたね？」
「ああ」
アリサの問いにラウラが答えました。
「ねえ、セシリア、時系列がおかしくない？　作る前に飲み干すなんてこと、誰にもできないよ」
「それはシャルロットが異邦人（アリス）で常識を知っているからですわ。この国では常識なんて重要視されません」
「じゃあ、ジャックは蜂蜜酒を飲み干したの？」
「さぁ……誰が飲み干したのかなんて重要ではないんですわ。重要なのは女王の蜂蜜酒が無くなったことですわ」
嘘でも本当でも罪を認めさせてしまえばいいと言うことでしょう。不思議の国では被告人は守られません。
「女王様は蜂蜜酒を作ったんですよね？」
「うむ」
「それはどんな味がします？」
「甘くて舌がとろける極上の味だ」
「ですよね。ですがジャックが飲み干したのは火を噴くほど辛いものですよ？」
「う、む……では飲み干したのは誰だ。今すぐ連れてこなければ首をちょんぎるぞ！」
織斑先生って、学校の外だとこんな感じなんですね。
ちょんぎる、ちょんぎらないは別として偉そうな態度は女王様にぴったりです。

「そんなの女王様に決まってるじゃないですか」
「なに？」
「そんなことより、茶番は終わりにしませんか……？　早いところ返すもの返した方が身のためですよ？」

あー！？
アリサさん、やっぱり証言する気なんて無かったんですね！
投げナイフを構えてニヒルに笑っている場合じゃないですって！
囲まれてますよ！？

「クロッケーよりも楽しい遊びをしませんか？」

アリサは女王を挑発するように手をくいくいっと動かしました。
争乱の予感を感じ取った動物たちが一目散に逃げ始めます。
残ったのはアリサたち三人と女王と兵士たち。
……あれ、王様とお兄も消えてますね。

「異邦人（アリス）側についたか……愚かだな。異邦人さえいれば不思議の国を悩ませている全ての問題が解決するというのに」
「え……？　国の、ため？」

女王の意外な言葉にアリサは一瞬思考が止まります。
彼女のイメージでは女王は暴政を働き、国家を私物化している悪人だったのですから仕方ありません。

「なんだ？　私が常識を恐れて異邦人（アリス）を亡き者にしていたとでも思っていたのか？」
「ですが、貴女は私たちから大事なものを奪いました……」
「異邦人（アリス）を呼び寄せるためだ……それの知識は不思議の国を発展させ、安定させる。国の頂点に立つものとしてそれを手にすることは

義務だ！」

女王が至極まじめな顔で言い放ちました。

確かに現在の不思議の国は揺れています。エネルギー不足に不十分な法律、さらに増えすぎた人口など。

「このままでは不思議の国が崩れてしまう！」

「それでも！　それでも……くそ喰らえ、です」

アリサが小さくつぶやきました。

「……なに？」

「私から恋心を奪って、シャルを道具のように使う……そんなことをしなければ崩れてしまう脆い国なんて滅べばいいって言ったんです！」

「ならば無辜の民が苦しんでもいいというのか！」

「国が無くても人は生きていけます！　国は人のためにあり、人は国のためにあらず……自分から幕を下ろせないのでしたら、私が……私達が終わらせてあげます」

「……ふん、マッドハッターと異邦人（アリス）の三人で何ができる。それに、お前の弟が人質になっているんだぞ？」

「……三人じゃ、ないですよ？」

「なに？」

そうですねぇ。三人じゃないです。

こんなのはどうでしょう。

こほん、えーと……

何の前触れもなく、衰弱したヤマネがアリサの目の前に落ちてきました。アリサがヤマネを拾い上げ、それを女王に突きつけます。

……というところでしょうか。

「これで、弟が人質になっているのは貴女もですよ？　人質交換します？」
「っく、ストーリーテラーか……！　しかし何故だ……良心のないあれが誰かに味方するわけが、」
いえ、アリサさんたちに味方しているわけではなくてですね……なんと言いますか、女王に敵対しているんですよね。
どちらかといえば悪意的な行動ですよ？
それに、女の子は優しくないとモテませんし。

「天羽は返してくれますよね？」
「ふん、勝手にしろ」
「では、織斑君も返しますよ……キャッチしてくださいね？」

アリサは、ひゅぅという風切り音が聞こえるほどの速度で腕を振り、ヤマネ一夏を投げました。
コースはど真ん中ストレート！
対する女王は手近に立っていた箒をとっさに掴みフルスイング。
打球は窓を突き破り場外へ！　……緑の平和とか海の猟犬とかから抗議はこないですよね？

「っは！？　しまった、一夏ぁぁぁああ！？」
「……蘭ちゃん、余計なことを」

自分で打ち返しておきながら女王はこの世の絶望の全てを知ったような顔をしています。
いや、面白そうだったんでつい……
ほら、今の私には良心とか無いですから。

「言い訳しないでください……まぁ、とにかくこれで条件は同じです。その程度の兵士たちが何人いても変わりませんしね……天羽、壁際で大人しくしていてください」
「分かりました！　お姉ちゃま！」
「っく」

既に大半はアリサの後ろにいたセシリアとシャルロットによって打ち倒されています。
あ、ちなみに今の「っく」は女王のものではなくて、素直な天羽君をつい抱き締めそうになり、それを我慢したアリサさんの声です。
一人、また一人と兵士たちは倒れていき、とうとう法廷にはアリサたち三人と、女王としてラウラだけになりました。

「さぁ、観念してください。さすがに二対三では辛いですよね？」
「っく……くっくっく……甘いな。お前等が倒したのはなんだ？」
「トランプの兵士たちですけど？」
「そうだな。ならば切り札（ジョーカー）もいるに決まっているだろう？」
「なっ……！？」

それは、上から落下し華麗に着地しました。

「ふふーん。ジョーカーその一、束さんの出番だね」
「えー、私はその二？　まぁいいや、アリちゃんよろしく★」

現れたのは篠ノ之束と更識楯無でした。
そこにラウラと女王が加わり、アリサたちの数的優勢はものの見事に崩されてしまいました。
ただし女王が再び椅子に座ったのでまだ劣性にはなっていません。

「私は楯無先輩を！　セシィは束さん、シャルはラウラさんをお願

いします！」

アリサは瞬時にそれぞれの相性を判断して他の二人に指示を出しました。

「……ボーデヴィッヒ。手は抜くなよ？」

「っ！　……はい」

女王がラウラに命令します。

ラウラは少しやりづらそうな顔をしましたが、自由を奪われているため命令されるとその通りにしか行動できません。

……ラウラさんはシャルロットさんと特に仲が良いですから、余計に戦いにくいでしょう。

「……これは、采配をミスったかもしれません。でも、私にも余裕ないのでシャルはシャルで頑張ってください！　先輩、いきますよ？」

「お風呂では決着つく前にアリちゃんが倒れちゃったからね……学園最強を見せてあげるよ」

たっちゃん先輩……メタすぎます。

「あはっ♪」

楯無がすごいスピードでアリサに接近、右の拳を側頭部に叩き込みます。

がんっ、という音はするもののアリサは微動だにしません。

「先輩、生徒会長代わってあげましょうか？」

アリサは殴られたように見えて、実は左手でしっかりと楯無の拳を受け止めていました。
そこから楯無の右腕を捻り、さらに跳躍。伸びきった肩を両足で挟み、空中で十字固めのような形に極めたあと、楯無をうつ伏せに床に叩きつけました。

「痛ぅ……油断しちゃった★」
「極ってますけど、どうします？」

◆

「ラウラ……」
「シャルロット。悪いが手は抜けない。行くぞ！」
「気にしなくて良いよ……」

ナイフを抜いて低い体勢でラウラがシャルロットに肉薄します。
しかし、ラウラの突進はあたることなくシャルロットにいなされ、さらに空中に放り投げられました。

「僕も虫の居所が悪くって……ちょっと手加減できそうにないかなぁ、なんてね」

そんなことを言いながら、受け身をとったばかりのラウラに向けて銃弾を放つシャルロット。
ゴロゴロと転がるようにしてなんとか立ち上がったラウラですが、すぐに弾雨が降り注ぎ一息もつけません。
……容赦のないシャルロットさんもですが、銃弾をナイフで斬り落とすラウラさんも大概ですよね。

「ふん、ならば気兼ねなく戦えるというだけのことだ」

「だねっ！」

シャルロットが投げたナイフをラウラが紙一重で避け、空中でキャッチ。ノンタイムで投げ返しました。

その刃をなんなくかわしたシャルロット……互いに一歩も譲りません。

◇

一方、束と対峙しているセシリアは睨み合うだけで動きがありません。

「取引をいたしませんこと？」

「……どんな？」

「わたくしは動きません。なので貴女も動かないでいただけませんか？」

「……お互いに相手の戦力を一人分ずつなくすってことだ？　うん、いいよ」

二人は平和的な話し合いで解決しました。

拳で語り合うことが全てではないのです……一応、もとは童話なので寓話的な要素も必要ですよね。世の中、武力が全てではないですよ！

「いやー、よかった。私、そこまで乱暴じゃないからさー」

「奇遇ですわね」

◆

「痛たたたたっ！　あ、アリちゃん……少しは油断しない？」

「先輩じゃなかったら油断するんですけどね」

最初の状態から動いていないアリサと楯無。今もアリサは腕を捻りあげています。

緊張のため、動いていないのに汗が垂れています。

「そういえば、アリちゃん」

「油断させようとしても、」

「その衣装、生地薄いね。形が分かっちゃうね★」

「な、なんのことやら……」

「えー？　分からないなら仕方ないね。お姉さんが教えてア・ゲ・ル♪　まぁ、△△△と□□□のことだけどね？」

かーっと顔が、そしてジャケットので隠せていない肌まで紅く染まっていきます。

アリサの目は羞恥心から涙目になりますが、それでも腕は極めたままです。

「うーん、手強い……まぁ、奥の手！」

こきん、という軽い音がした瞬間、楯無は拘束をといて立ち上がりました。

驚いて見上げたアリサが目にしたのは右腕がだらんと垂れている楯無の姿。

「自分で抜きましたか……」

「そういうこと……よっと。私にここまでさせる人なんて早々いないよ？」

ゴキリと自ら抜いた右肩の関節を再びはめ直した楯無の手には、いつの間にか広げられた『見事』と書いてある扇子があります。
その表情は楽しくて楽しくて仕方が無い、それだけを完璧に表現したらこうなるのではないかというように嗤っていました。

「ふふ……やっぱり、そうでなくては愉しくないですよね……？」
「あはっ。そうこなくっちゃ！」
「いきますっ！」
「かもーん♪」

今度はアリサが攻めます。
朝峰嵐才流という速度だけを特化させた古武術による高速移動によって楯無は刹那の間アリサを見失いました。
……多少のブレはあったものの序盤はちゃんと童話らしく始まっていたのになんで私は格闘描写をしているんでしょうね。

「わわっ……っほ、お、えいっ、とうっ、よっ、ふっ、おぉーっ……と」

気の抜けるような声を出しながら高速の拳打を次々と避ける楯無。
目で追い切れない程の速度で戦う二人は何者なのでしょうか……？　今なら改造人間と言われても信じられそうです。余りの速さにアリサさんの手が空気を裂く音まで聞こえます。あんなのクリーンヒットしたら画面に映せない顔になってしまうのではないでしょうか……？

「なかなかっ、やりっ、ますね！」
「いやー、アリちゃんもなかなかの鋭さだよね。でも、私の、おっと、知ってる圓明流とは、よっ、違うなっ」
「そりゃ、今のは、違いますからねっ！」

一瞬たりとも同じ場所に立ってはいけないと定められているかのように二人は縦横無尽に動き回ります。
アリサが拳打を放てば楯無が伏せ、楯無が跳ね罠のような蹴りを放てばアリサが後方に宙返りします。
アリサが跳躍のついでに投げたナイフが楯無の扇子にはたき落とされます。

「ってぇ、影苦無!?」

陰に隠れていた二本目は一本目に比べて速度が遅いため、楯無がとっさにつき出した扇子に挟まれて止まりました。

「それも、囮ですけど、ね！」
「っ！　アリちゃんもなかなか器用だねぇ」

一本目の数倍の速度で投げられたナイフは服だけを引き裂き大理石の壁に当たって砕けました。

「今のまで避けられるなんて……そうこなくては面白くないです」

さらにアリサの猛攻が続きます。
独楽のような左右二連続の回転蹴り、さらに二撃目を引き戻し逆回転の踵を叩きつけようとしますが、避けられ、いなされ、防がれます。

「うーん……テンポが掴めなくて反撃が……おっと」

下段蹴りと見せかけて蹴りの軌道を変化、頭を蹴り飛ばそうとするものの紙一重で楯無に避けられます。

鎚のような踵落としを跳び退きよけた楯無がアリサ程ではないものの鋭い速度で貫手を放ちました。
……速度ならアリサさん。技術なら楯無さんというところでしょうか？
一撃の重みは同じくらいでしょうか。
両者ともに暗器を使うことを躊躇わないので見ていてハラハラします。

「っ！　危なっ」

目を狙っての一撃を間一髪で避けたアリサ。
ここまで動き続けても未だに息は上がっていません。

「対暗部の頂点と言われているだけあってエグいことしますね」

髪の毛が何本か抜けちゃいましたよ、なんて言いながらもアリサに隙はありません。

「うーん……アリちゃんの攻撃の拍子が全然分からないな。無拍子とも違うし」

拍子というのは数多ある古武術の全てに共通するといってもいい考え方です。
相手の攻撃の拍子を読み取り、意図的に自分の拍子をずらして攻めにくくさせる『打ち拍子』、逆に拍子をあわせて相手の行動すら支配するのが『当て拍子』。
さらに、自分の拍子を相手に感じさせず、その上で相手の拍子の隙間を使う技術が無拍子です。

「……まぁ、拍動に呼吸、筋肉の収縮運動、全部のテンポをある程

度まで変えられますからね。相手の拍子とか気にしないで拍子を変え続けているだけですよ」

「どおりで体以上に思考が混乱するわけだ」

人間は色差や温度差などを勘違いしやすい動物です。真冬の凍えた手にはぬるま湯すら熱湯に感じられるのと一緒です。

アリサは攻撃の速度に緩急をつけることで予想以上に速い、もしくは遅い攻撃を繰り出し対応させていないのです。

「それに……」

「ん？」

「私は二つの古武術を使い分け……いえ、同時に使えますから特に戦いにくいはずです」

「ふーん。変幻自在の拍子に二つの古武術、か。愉しさなんて忘れて真面目にやらないとね」

ここにきてようやく構えた楯無から今までよりも鋭い、刃のような気配が放たれました。

「なら、私も不破圓明流の業を思う存分、」

二人の気がはりつめだした瞬間、全てを止める声が響きました。

「全員、止まりなさい！」

◇

時間は少し戻って再びシャルロットとラウラの戦いです。

ナイフとナイフがぶつかる澄んだ音が連続して響きます。

しかし特殊部隊用のラウラの肉厚なナイフに比べてシャルロット

が持っているナイフはトランプ兵が使っていたごく普通のものです。

「っふ！」
「遅い！」
「くぁっ……！」

シャルロットが両手に持っているナイフの片方がラウラによる重い一撃で砕けました。

（ラウラの得物の方が重量があるから打ち合いになったら不利だね……やっぱり手数で攻めるしかない、か）

ガガガガッガギンガギン、と火花が立つほどの剣戟が連続で交わされます。
打ち込むたびに刃が毀れるのがわかっているシャルロットはあまり強くナイフを振るえません。
しかしラウラは精確に、しかし力加減など一切しないで全ての斬撃を潰していきます。
それでも手数がシャルロットに比べて少ないため、形勢逆転とはいかないようです。

（でも、ラウラが先に僕の武器を壊そうと考えてるなら勝機はあるかも）

再び高速の剣戟が交わされますが、攻撃をしようというよりは互いに時間を稼ごうとしているようです。
数十回の打ち合いにシャルロットのナイフがまた一本折れました。
残る右手の一本を横薙ぎに振るいましたが、ラウラはナイフを交差するように当てて防ぎます。

（ここだ！）

刃がぶつかりあった瞬間にシャルロットはナイフを放し、身体にかかる慣性を殺さずにラウラを突き飛ばしました。

予想外の攻撃にラウラも驚きましたが、着地は安定しています。

「まだまだ！」

シャルロットは相手に休ませる暇も与えずに背中から取り出した二丁の拳銃を連続で撃ちます。

これぱかりは堪らないとラウラが回避に専念します。避けたと思った弾丸が大理石の壁に当たって跳ね返ってくるのですから避けるだけでも精一杯です。

跳弾を使うことでラウラの正面からだけでなく、三百六十度からの擬似的な包囲網を完成させたシャルロットの顔は、しかし険しいものでした。

弾丸も無限に用意されているわけではないからです。段々と弾幕の密度も薄くなっていっています。

そして、ラウラの越界（ヴォーダン・オージェ）の瞳もそのことを正しく捉えています。

（やっぱり、越界（ヴォーダン・オージェ）の瞳相手に生身での戦闘は苦しいね……アリサなら……ううん、頼りっきりじゃダメだから）

シャルロットは銃撃をやめ、新しく取り出した拳銃をラウラの頭に向けました。

「そろそろ、終わりにしようか？」

「望むところだ」

走り込んでくるラウラを迎え討つつもりなのでしょう。

低い態勢で疾駆するラウラとは反対にシャルロットは動かずに一瞬の隙を探しているようです。

「全員、止まりなさい！」

「えっ、」

気配すら感じさせなかった鈴の声に気をとられたシャルロット。

その脇腹にラウラのナイフが突き刺さりました。

◆

「シャル！」

「アリサ、まだ動かないで！　……やっときたチャンスだから」

「鈴、ちゃん……？　いつのまに？」

「っく……チェシャ猫め……！」

突如として現れた鈴が女王を締め上げました。

絵面的には織斑先生を締め上げる鈴さんなので、見てる方も怖くなります。

鈴さんも少し青い顔だったり。

「自分が奪ったものが仇になったみたいね？　存在が消えている間に忍び込ませてもらったわ」

「ふん……それで、何が、望みだ？」

ギリギリ落とさない程度に首を締められている女王が苦しそうにしながら鈴に尋ねます。

「私達から奪ったもの全てよ」

「……それらを奪ったことで生まれた空白が異邦人（アリス）を不思議の国に

縛っているんだ……そんな馬鹿げたことをするわけがないだろう？」
「なんですって！？」
「ボーデヴィッヒ、この場にいる私と異邦人、切り札以外の人間の首を落とせ」

女王は自分の首にまわされている腕を気にしないでラウラに命令します。
自由というものがないラウラは命令と同時に動き出しました。
まずは一番近いアリサへと。

「首、折るわよ！？　嫌なら今すぐ、」
「ふん、今人質になっているのはお前らだぞ？　マーチヘアも随分と手練のようだが更識とボーデヴィッヒ二人を相手に立ち回るのは至難の業だろう？　私を解放して、おとなしく家に帰ると言うなら止めてやろう」
「……クーデターに、犠牲は付き物よ」
「失敗するにせよ成功するにせよ、だな……既に異邦人（アリス）があの状態だ。生きていたとしてもここで時間をかければ死ぬだろう。あぁ、そうなったらマーチヘアには恋心を返そうか。そして牢屋の中で後悔させ続けるのも面白いだろう？」

ちらりと床に臥すシャルロットを見る二人。ピクリとも動かない身体は死んでいるのか生きているのかも定かではありません。

「最低……」
「為政者に人間性を期待するのは酷というものだぞ。今が選択の時だ。諦めて異邦人（アリス）を置いて帰れば今まで通りの日常が待っている。不変の世界は幸せだぞ？」
「……嫌よ。ここで諦めたらアリサは大事なものを亡くしたまま……可哀想じゃない。待ってなさい。私がラウラを止める。それであ

んたに全部を返させてシャルロットも助ける！」
「やってみろ。ボーデヴィッヒ！　先にこの女だ！」

アリサに向かって歩いていたラウラが方向を変え、鈴の方に向かいます。
決して格闘が得意と言うわけではない鈴ですが、決死の覚悟で拳を握り立ち向かいます。
そして、ラウラがナイフを振り上げた瞬間、

ズガンッ

ラウラがうつ伏せに倒れました。
その後ろには二本の足でしっかり立っているシャルロットがいます。

「シャル！？　っぐぅ！」
「あ、ちょっと、アリちゃん！？」

楯無と戦っていたアリサが立ち上がったシャルロットに気を取られ、その隙に楯無の拳がお腹に突き刺さり、吹き飛ばしました。
殴った当人でさえ驚いています。

「シャル……？　あの、怪我は？」
「アリサ……」
「……貴女のことを好きでもないのに心配されても悲しいだけかも知れないですけど……それでも私が貴女を好きだったのは知ってます」
「アリサ、大丈夫。これが守ってくれたんだ」

そう言ってシャルロットは懐から取り出したものを床に投げまし

た。

それはアリサがアリスの際に服の中にしまったもの。

……未だにどうやって入っていたのかは理解できませんけど。

「あっ、僕のろっぽーぜんしょ投げないで！」

「あらら、天羽君のだったんだ。ごめんね？」

「いいよ！」

「ふ、ふふ……なんなんですか、このおバカな展開は……もう、どう転んでも大好きなシャルと一緒にいることはできないと思っていたのに……おかしすぎて泣けちゃいそうです……」

だから言ったじゃないですか。

天羽君が分厚い本を読んでいたことが唯一のハッピーエンドに繋がる道だって。

……女王様、いえ、公爵夫人。こんな感じでいかがでしょう？

「え？」

「そうだな。もう十分だろう。異邦人（アリス）、この国の新たな女王になってくれないか？」

「え？　え。え？」

「この非常識な国（ワンダーランド）の慣習法では女王だけは常識人であることが決められているんだ。だが連れてきていきなり女王就任というわけにもいかないからな。これまでのは女王の資質を見極め、そして女王自身に不思議の国を好きになってもらうための期間だったんだ」

アリサさんが異邦人（アリス）から降ろされたのは、天羽君を助けたらさっさと帰りそうだったからです。

「蘭ちゃん……つまり貴女は最初から女王、いえ、この公爵夫人の味方だったということですか？　騙しましたね？」

いえ、クーデターを起こすのが四人とか言いましたけどそこに入ってるのは私じゃなくて鈴さんですし。

「実際、違和感あったんですよ。いくら女王に対する悪意だとしても結果的に私たちを助けるような行動をとるんですから。最初から騙されていたなら全部が良心からの行動ではなくなりますからね」

真相を知ったアリサは腰を抜かしてしまいました。

その顔は苦笑以外のなんでもありません。

「それで異邦人（アリス）、どうしたい？　女王にならなくても、こいつらから預かったものは返す。だから好きにしろ」

奪った、ではなく預かったと言った公爵夫人に奪われた皆がジト目を向けます。

これには公爵夫人も堪らず、目を逸らして小声ですまなかった、と謝りました。

「うーん、そうだなぁ――」

◇

ちゅん、ちゅんちゅん

「っん……あれ、僕、寝ちゃってたんだ」

小鳥の鳴き声で目を覚ましたシャルロットは、辺りを見回します。

柔らかな光がやさしく大地を暖め、小鳥たちが春を詠う。そんな穏やかな午前中。

なんだか不思議な夢を見た気がしましたが、結局いつもの川の畔のいつもの木の影でした。

「すぅ……すぅ」

そしてシャルロットの隣には当たり前のようにもう一人が眠っています。

「アリサ、起きて……そろそろ時間だよ？」

「ん……んぅ？　シャル……？　……って、今何時ですか！？」

シャルロットの声に目を覚ましたのは、桃色の髪の毛を輪っかにしてウサギの耳のように結わえた少女でした。

「そろそろ午前十四時。もう、しっかりしてよね、アリサは僕の白タイムキーパーウサギなんだから」

「あぁ、もう！　ごめんなさい！　でも遅れちゃうから急ぎましょう！　シャル」

「む、公私混同だよ？」

「あぁ！　じゃあ行きますよ女王様！」

「うんっ」

今日は大事な会議の日。

常識と非常識のバランスを決めるための法律を作るための議論が白熱しすぎてもう三ヶ月も同じ議題です。

唯一の常識人の女王様が遅れるわけにはいかないと、二人は早速走り出しました。

「大変、遅れちゃいます！」

ここは非常識な人がたくさん住んでいる不思議の国。
興味をもったらパスポートを片手にお近くのウサギ穴に飛び込んでください。

61／SP2．Arisa dans le pays des merveilles

かいててすごく楽しかったです。
今回はとにかく読者の方々を騙してみよう、というコンセプトでしたw

次はアリサ達がウェディングドレスをきる話。

62. Un mariage heureux heureux. (1)（前）

「とっても幸せな結婚式」

結婚はしません

62. Un mariage heureux heureux. (1)

「まったくもう！　一夏のやつ……」
「鈴ちゃん、まだ怒ってるんですか？　寝る前にストレス貯めるとニキビできますよ？」

ＩＳ学園では昨日からやっと夏休みが始まりました。既に宿題も半分以上終わらせましたし、あとは最終日にまとめてやれば問題ないですね。
宿題なんかよりぷりぷり怒っている鈴ちゃんの方が重要です。
理由は分かってるんですけどね。
多分、あれでしょう。
臨海学校の帰りのバスが発車する前に銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の操縦者であるナターシャ・ファイルスさんに、織斑君が福音の暴走を止めてくれたお礼としてキスをされたからでしょう。
それだけで怒りを引きずるほど鈴ちゃんもしつこくないんですけど……まぁ今回は仕方ないです。
織斑君がずっとデレデレニヤニヤしてますから。鈴ちゃんとのキスなんて思い出しもしないのに。

「べ、べべ、別に起こってなんてないわよ！　……一夏が歳上に弱いってことくらい知ってるし……」
「本音は？」
「殺してやりたいくらいよ。あの女……」
「織斑君じゃないんですね！？」

うーん……鈴ちゃんが病んでます。
このままだと誰にとっても嬉しくない事態になりそうですし……

「鈴ちゃん鈴ちゃん、お出掛けしましょうよ！」
「ん、そうね。休みの日くらい出歩かないとね。アリサ、髪やってあげる」
「じゃあ、そのあと鈴ちゃんのメイクアップします！」
「はいはい。三つ編みたくさん作ろうか？」

それだけで二十分かかると思いますよ……私、相当髪の毛長いですし。

なので実は髪の毛を編んだこともないんです。レゲエダンサーのような編み込みとか憧れますけどね。

「でもアリサって何でここまで伸ばしてるのよ？　邪魔じゃないの？」
「慣れればそれほどでもないですね……なんとなく切りたくないんです」

……シャルに私の正体がバレてしまうリスクを犯してまで伸ばすのは……多分、こころのどこかで、あの日の女性は私だと気づかれたかったのかもしれませんね。

私の中ではあの日、本邸の前でシャルに逢ったことは忘れられない嬉しい思い出ですから。

最初は恥ずかしいから隠していましたが、今もシャルに隠しているのは……怖いから、ですかね？

シャルに友人としてではなく恩人として接されるのが怖いです。私にとって尊重すべきはシャルですから。

シャルに気にしてもらえるのは嬉しくても、シャルに必要以上に感謝されるのは嫌です。

「よし、完成。どう？」
「おおー、可愛いです……あ、いえ、髪型が、です」

「アリサも可愛いわよ」

も、もうっ！　鈴ちゃん、あんまり人を口説かないで下さい！

後頭部に作ったお団子からのびる八本の三つ編み。なんだかお姫様みたいです。お団子を作ったので久しぶりに髪の毛の先が腰より上にありますよ。

えへへ……こうなったら鈴ちゃんのお化粧にも本気を出さないといけませんね！

◇

「あれ、二人とも気合い入ってるけど……おでかけ？」

朝食をとろうと食堂に鈴ちゃんときたらシャルがいました。

優しい笑顔もサラサラの髪もいつも通りですね。

「まぁ、ただ街を歩くだけだけどね。二人でどっちが相手を可愛くできるかなんてやってたら、ね。ご飯持ってくるわ、アリサもいつものでしょ？」

「ふーん。ならリンの勝ちだね」

「あ、鈴ちゃんありがとうございます。というか、あの、シャル……？　なんでいきなりハグですか？」

「え？　それは……なんでだろう？」

本気で分からないというような顔をするシャル。うーん……なんででしょうねぇ？

あ、もしかして！

「ホームシックですか？　人肌恋しい、みたいな」

「いや、別にフランスに会いたい人なんて……あの人くらいだしな

ぁ」
「そうですか……じゃあ、なんででしょう？」
「なんでだろうねー？」

うーん、と二人で首をかしげていたら鈴ちゃんが吹き出して、つられて私たちも笑ってしまいました。
まぁ、分からないことを考えても仕方ないですよね！

「シャルも一緒に出掛けますか？」
「ん？　んー、準備に時間かかっちゃうけど……？」
「それくらい待ちますよ」
「じゃあ、急いで着替えてくるね。先にいくときは携帯でね」

じゃ、と言ってシャルが早足で寮に戻っていきました。
先に行くならって言っても私たちはこれから遅めの朝食なんですけどね。
さーて、鈴ちゃんも戻ってきましたしご飯ご飯。

「寂しそうな顔」
「鈴ちゃん、ありがとうございました……って、私のことですか！？　べ、別にシャルがすぐに行っちゃったから、もう少しゆっくりしていってほしかったなんてことは思ってませんよ！？」
「語るに落ちるとはまさにこの事ね……というか、違うわよ。私が言いたかったのは……あー、まぁ、なんでもない」

……？
なにが言いたかったんでしょう。
鈴ちゃん、臨海学校から戻ってきてからずっとこんな感じなんですけど……言いたいことがあるなら言ってほしいです。
……もしかして、今日お誘いしたのも迷惑だったのでしょうか？

まぁ……私の秘密を知ってしまった皆さんとの関係性は大なり小なり変わってしまいましたが……

特にラウラさんは私を軍に誘わなくなりましたし……それでも皆でドイツには行きます。もちろんシュヴァルツェア・ハーゼにもお邪魔しますし。

「あの、鈴ちゃん、もしかして今日のお出掛けは乗り気じゃないんですか？」

「っえ？　あぁ、そうじゃないから心配しないで」

「ですが、やっぱり私が……？」

「あのねぇ……私がアリサのことをどうこう思うわけないじゃない。アリサがいてほしいって言うんならいつまでも一緒にいてやるわよ」

「は、はい」

な、なんだかドキドキしました。

だって、一緒にいてやるなんて……なんだかプロポーズみたいじゃないですか。鈴ちゃん、たまに私のことをドキッとさせるんですよね……なんというか、私のツボにはまるような言葉を言うんですよ。

ダメですねぇ……私、本当に“一緒に”という言葉に弱すぎです。言葉がなくても皆さんを信じられるようになりたいんですけどね……

「でもさ、何で連絡手段が携帯なのよ？　普通にプライベート・チャネル使えばいいじゃない」

「えっ、と……その、わ、私が、携帯の方が嬉しくて……」

「なんで？」

「それは、えっと……な、なんでもですっ！」

携帯電話の方が一手間あるだけ会話が大事に感じられるというか……うぅ～、いいじゃないですかっ！

そうですよ！

交換手紙とか電話の留守録とかわざわざ呼び出しておしゃべりしたりとか大好きですよ！

悪いですか！

……でも、シャルに迷惑かかってないですよね？

臨海学校からこっち、皆さんが私に対して気を遣いすぎなんです。

鈴ちゃんは織斑君に死ねと言わなくなりましたし、他の皆さんも織斑君にＩＳの装備を向けなくなりました……あれ、常識的になっただけかも知れないです。

……はぁ。

悩むのはやめです。

とにかく一日一日を皆で楽しく過ごせるように頑張りましょう。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまでした……シャル、意外とゆっくりですね」

「お洒落してるんでしょ。というかさっきも思ったけどあんた達、最近仲いいわね」

「……そうですか？」

そんなことないと思うんですけどね。

でも、そう見えることはシンプルに嬉しいです。

シャルと私は単純な友達になるのは難しいですから。

関係性がどんなに変わっても、私はシャルの恋人になりたいと思ってますし、守りたいと思います。

そういう感情は、やっぱりシャルが誰かに恋したときには邪魔になりますから……

せめて、今だけは……近くにいたいです。

多分、シャルに恋人ができたら私は近付けませんから。

「アーリサ、おまたせ！」
「待ってませんよ。シャル、髪の毛降ろしたんですねー」
「う、うん……どうかな？」
「可愛いですよ？」
「えへへ、ありがとう。アリサの三つ編みも可愛い。リンがやったんだよね？」
「ん、まぁね」

か、かわ、可愛いねってそんな……髪型のことだとしても勘違いしちゃうじゃないですか。
うー……私、紅くなっちゃダメですからね！

「ところで目的って決まってるの？」
「アリサ、行きたいところある？」
「あ、えと、とりあえず少し遠出して南武と北武にでも行ってみようかと思ってます」
「どこそれ？」
「僕も知らないなぁ」

あれ、鈴ちゃんなら知っているかもと思ったんですけどね。
まぁ、そういうことなら案内しながら楽しめるでしょう。

「電車で二十分ほどの繁華街のショッピングモールですよ。それで、南武と北武はそれぞれこういう字を書くのですが……」
「ふむふむ」

なんでか知らないんですけど北に南武、南に北武があるんでよね。
ある電気屋さんのご当地テーマソングでも突っ込まれてます。
あと見所は……サンライズ６０でしょうかね。水族館に展望台、

スイーツビュッフェなどいろいろ揃ってます。

「へー……そういえば昔、まだ中国に戻る前に一回だけ行ったことあるかも」

「僕は聞くのも初めてだから楽しみだよ。アリサ、案内よろしくね？」

「はい♪　……時に二人ともお化けとか平気ですか？」

「ん、あんまり好きじゃないわ」

「僕もちょっと苦手かな……」

ふっふっふ……それならちょうどいい逸話が……！

「さっき言ったサンライズ６０の前の広場、昔は絞首台があったんですよ。それで、」

「怨念が残ってて幽霊がたくさん出るって言うのね」

「……アリサ、ちょっとセンスないかも」

か、勝手に先を予想した挙句、センスないとか言わないでください！

というかそんなありきたりな話じゃないですし！

「いえ、幽霊が出るかは知りませんけど広場から三百メートルくらい離れた土地を少し掘り起こすと人骨が出てきます」

「……アリサ……そういうリアルな話は嫌ね」

「怖くないですか？」

「怖いというか、夢に出てきそうだよ……」

あれ？

まぁ、ただの作り話なんですけどね。

先月この話を知ってから掘り起こしに行きましたけど何もありま

せんでしたし、図書館で調べてみても広場の近くに埋葬所があったなんて記述はなかったですし。
　というか日本はそもそも火葬が基本ですからね。たとえ死刑囚でも、です。
　……でも今の話は怖くなかったですか？
「あ、これ有名な話なんだけどさ」
「おぉ、鈴ちゃんの怖い話ですか？」
「うん。中国では地溝油っていう油が露天の食品を作るのに使われてるんだけどね？」
　ふむ。これはさっきの仕返しをするいいチャンスです！
　油なんですから……
「死体からとった油なんですね！？」
「いや、下水を流れる工業廃油」
　……えっと。
「……それは、リアルな話ですか？」
「うん。だから中国では露天の揚げ物食べちゃダメよ？」
「怖い！　中国怖いですよ！？　国のことをとやかく言いたくないですけど狂ってます！」
「私も地溝油に関しては否定できないわ……」
　こ、こんな誰も得しないような怖い話聞きたくなかったです……
　いえ、役にはたつかもしれませんけど。
「あ、それなら僕もあるよ」

シャルまでですか！？
というか、あなた達怖い話苦手だったんじゃないんですか？
何でそんなに嬉しそうにしてるんですか？

「これはインターネットの掲示板で見たんだけど。スレッドを立てた人の家に変な手紙が届いたことが始まりだったんだ」
「あ、あれ……意外と本格的？」
「だから怖い話だって言ったじゃん。それで内容なんだけど、確かすごい汚い子供みたいなの字で『おはようございます。覚えてますか？　みーちゃんです。私は見ています。今日は何日目ですか？思い出せるといいです。あなたが消えてから半年、おにんぎょうさんはまだわらいません。楽しいです』とか、もっと長いんだけどそんな感じの文章が書いてあって……その手紙の裏にやっぱり下手くそな子供の絵で女の人が描いてあったの」
「お、女の人、ですか？」
「うん。赤黒い肌で、口を大きく開けてる髪がすごい長い、それこそアリサより長いくらいの女の人。しかも背中が逆向きに曲がってるし、足は一本しかなかった」

こ、ここで名前とか出さないでくださいよぉ……私が関係無くても怖くなってきます。

「そ、それで、どうなるんですか？」
「うん、それから毎日手紙と絵が届くんだ。内容は似た感じなんだけど絵の方はどんどん非現実的なものになっていくの」
「あー、セイシンビョウ、みたいな？」
「うん、その掲示板でもそう考えてる人が多かったみたい。手紙の方には必ずおにんぎょうさんが出てくるんだけど、七日目、ちょうど掲示板が二スレッド目に入って少しした頃に、とうとうおにんぎょうさんが笑うんだ。内容は『わらったよ。片目のみーちゃんのお

にんぎょうさんがわらったよ。でもお腹がすいちゃって血が止まらないの。痛い。痛い痛い。ごめんなさい。もうわらいません。ごめんなさい。お腹がすきました』……って」

「……そ、その後はどうなったんですか？」

「わからない」

「へ？」

「その手紙の写真がアップされて二時間くらいしてから……他の人のコメントにスレッドを立てた人が反応してる時にいきなり、その人が書き込まなくなっちゃったんだ」

「いきなり、ってどういうことですか？」

「その日は日曜日で人が多かったからコメントも多くてね……ちょうど半分くらいまでのコメントに反応が返されてからずっと音沙汰なくて……」

「あ、飽きちゃったんですね。釣りだったんですよ！」

思い付いたはいいものの途中でめんどくさくやっちゃったんですね！

「うん、最初はなんだ釣りだったのかっていう流れだった。でも……」

「でも、なによ？」

「そのスレッドが埋まる直前にごめんなさいって延々と書かれた血のシミがついた手紙と、片目と片足のない、口から血を垂らしてるフランス人形の写真がアップされたんだ。他になにも言わないで」

「だ、誰かの摸倣犯的な行動では……？」

「今までの手紙と筆跡がよく似てるって、図説つきだったから信用できるって……」

「「……」」

怖っ！？

え、スレ主さんどうしちゃったんですか！？
まさかおにんぎょうさんに食べられちゃったとかですか！？　だからごめんなさいごめんなさいって謝られてたとか……
う、うわぁ！
怖すぎです！
写真とか絵とかが実際にアップロードされてるのがまたなんとも……

「あ、あの、鈴ちゃん…」
「な、なによ？」
「今晩、一緒のベッドで寝てもらってもいいですか……？」
「し、仕方ないわねっ！　アリサってば怖がりなんだから！」

夢に出てきませんように……

「まぁ、目的地も決まってるみたいだし、そろそろ出発しないと門限に間に合わなくなっちゃうね……あれ、二人ともどうしたの？」
「そ、そうですね、早いところ出発しちゃいましょう……！」

楽しいことがあれば忘れられるはずです！
私、怖い話には耐性があると思っていたのですが……白雪姫の魔女のお婆さんより怖いものがあるなんて思いませんでした……うぅ

62. Un mariage heureux heureux.（1）（終）

シャルの話したのは一部では割と有名な『ポストに変な手紙が入ってた』をうろ覚えで書いたあげく改変したものです。
久し振りに見たら全然違ったから興味があれば調べてみるといいかも。
多分ハム速にログが残ってるはずです

63. Un mariage heureux heureux. (2) (前

え、七夕？
篝の誕生日？
それが何か？
これはアリシャル、たまに一二とか鈴一の物語です。まる

63. Un mariage heureux heureux. (2)

「いやー、でっかい街ねぇ。何でこんなにショッピングモール建ってんのよ。一つに纏めりゃいいじゃない」
「んー、それぞれの客層が違うので。例えばあそこはちょっとした小金持ちが行くようなお店が集まってますし、そっちは子供向けの玩具や生活用品を、つまり家族向けですね」
「へー、アリサはここらへん詳しいの？　ＩＳ学園に来るまではずっとフランスだったよね？」

あ、少し詳しすぎましたかね？　シャルが意外そうな顔で私を見てます。

……まぁ、ここらへんが実は朝峰巡の地元だっただけなんですけどね。日本のことについて多少の知識があるのもそのためです。

でも、やっぱり実際に見てみると記憶と違うところがいくつかありますね。

というか結構分からないものが多いです……

「アリサ、こんなのもらったわ！」
「……鈴ちゃん、それ、誰からですか？」
「ん、あそこの黒人だけど……それが？」
「捨ててきなさい」
「なんでよ？」

なんでも何も、そんな適当にパッキングされた白い粉。どう考えたってイケないおクスリじゃないですか！

「なに言ってんのよ？　こんな人の多いところで犯罪行為するわけないじゃない」

む……確かにすぐそこに交番ありますし。
でも、だとしたらその粉はいったい……？

「リン、お店の人はなんて言ってたの？」
「えっと……『ＨＥＹ！！　ｃｕｔｅ　ｇｉｒｌ！！　Ｐｌｅａｓｅ　ｈｏｌｄ　ｔｈｉｓ　ｈｍｍ……か、カタクゥリコ？　ｐｌｅａｓｅ！　Ｐｌｅａｓｅ　ｓｏ　ｍｕｃｈ！』とかなんとか……？」
「怪しすぎますよ！？」

なんで片栗粉だけ日本語で言ったんですか！？
というか相手も滅茶苦茶慌ててるじゃないですか！

「他にはなにも？」
「んー……警察のサイレンが聞こえた途端に走ってっちゃったし……あっ『Ｄｏｎ'ｔ　ｓｈｏｗ　ｉｔ　ａｎｙ　ｐｅｏｐｌｅ　ａｎｄ　ｄｏｎ'ｔ　ｌｏｓｅ　ｉｔ！！』って……なんて意味？」

聞き取れてるのに……鈴ちゃん、英会話ダメですもんね。
最初の方から日本語にしてみると……『嬢ちゃん！　ちょっとこの、えっと、片栗粉？　預かっててくれよ！　お願い！　マジお願い！』『誰にも見せるなよ！　あと失くすな！』ってところでしょうか？
……はぁ。鈴ちゃん、

「その人、完全にお巡りさんに追われてますよね！？　いいから早く捨ててください！」
「でも、その人たち、あとで取り返しに来る気じゃないかな？　そうなると捨てるとかえって僕たちが危険になるかも……？」
「……はぁ。なら私が持ってますよ。私なら隠し通す自信がありま

すし」
「まぁ、悪かったわよ。はい、片栗粉」
だから絶対片栗粉じゃないですって！
こうなったら二人の目を盗んで下水溝にでも捨てるしか……とりあえず交番から離れましょう。
内容は聞かれていないようですが騒ぎすぎているので目を付けられたら、
「近頃の若いもんはこれだから」
そうそう、こんな感じで面倒なことに……！？
「お、お兄さん。私に気取られずに背中をとるとは、なかなかの使い手ですね……！」
「や、そんな警戒心出されても困るんだが……」
「って、あれ？　……スーツ？　私服警官ですか？　というかお兄さんも最近の若いもんですよね！？」
「俺をあんな狗ころと一緒にするんじゃねぇ……あとこう見えてそろそろ三十路の独身だ！　うわ、自分で言ってて空しい」
お、お若いですね……
……でもいきなり大きな声出さないでください。ビックリしちゃうじゃないですか。
鈴ちゃんとシャルは完全についてこれてませんね……
「あぁ、そっちの嬢ちゃんたちもお仲間か？　なぁに、カタギに手は出さねぇからそうビクビクしないでいい」
「カタギて……あれ、もしかして、あの、そちらの……方でしょうか？」

「おう、泣く子も黙るひばりーひるずの鶴見組たぁ俺らのことよ。まぁ、下っ端だけどな！」
「はあ……」

どうましょう。
なんで、こんな人に目をつけられてしまったんです？
まさか、スカートの裏ポケットに隠している『ま』のつくおクスリが狙いですか！？
あれ！？　てことは私ここでスカート脱がされちゃうんですか！？
そ、それどころか「まだ、隠してるんじゃないのかぁ？　パンツの中も確認しちゃうよー？　げへへ」なんてことになったり……いえ、もしかしたらさらに「じゃあ、この中はどうかなぁ！？　うぇっへっへっへ」なんて言いながら私の女の子の部分にまで……あぅあぅ

「じょ、嬢ちゃん？　やけに顔が赤くねぇかい？　熱でもあるのか？」
「わ、ほんとだ！　アリサ、大丈夫！？」
「わ、私が身代わりになるのでシャルたちは逃げてください……！」

しゃ、シャルの貞操は私が守るんです！
……でも、万が一、シャルとそういうことができる関係になったとき、私が処女じゃなかったら軽蔑されるでしょうか……？
男の経験があるくせに女の子を抱くなんてサイテー！　とか不潔、触らないで！　とか言われちゃうんでしょうか……？
……いえ、考えてみればヤ○ザさんに連れられたら、そのまま売り飛ばされるんでしょうね。
そっか……シャルとはもう……会えなくなっちゃうんですね……
こんなことになるなら……せめて、好きって、伝えたかったです。
でも、もう遅いですよね？

こんなシチュエーションで告白したら、一生、シャルを縛ってしまうことになるかもしれませんし……

ああ、そういえばこの粉はもともと鈴ちゃんが持ってきたものでした……私がこの粉のために身売りされたら、鈴ちゃん、傷つくでしょうね……鈴ちゃんのせいなのは間違っていないんですけど。

でも、だからといって誰かを身代わりにするわけにもいきません。

二人を守れるなら、私、怖いのだって恥ずかしいのだって我慢できると思います……たぶん！　おそらく！　きっと！　……もしかしたら！

「……だから、二人とも、」

ふらっ

あれ……？

景色が、歪む……？

そんな、それじゃ、二人までヤられちゃいます……！

いえ、変な意味ではなくて……っあ

◇

「「アリサ！？」」

かくん、とアリサの膝から力が抜けた。

アリサ、本当に熱があったのかな？　もしかして熱中症とか……？

日本はフランスと比べて暑いし、水分補給とかしっかりしてなかったのかな……？

「こりゃあ、大変だ。嬢ちゃんたちも付いてきな」

気を失ったアリサをおじさんが近くに停まってた車の後部座席に乗せた。
真っ黒な車なんて珍しいね。向こうじゃマフィアの代名詞だけど日本でもやっぱりそうなのかな？
少し心配だけど……アリサがあんな状態なんだから着いていくしかないよね……

「シャルロット……大丈夫なの？」
「アリサをあのままにするのはちょっと……それに、さっきの粉のこともあるから。一応、専門家だし……」
「まぁ、いざとなったらＩＳもあるしね」
「そういうこと」

でも、ひばりーひるずの鶴見組って言ってたよね……ここからだと結構遠いはずなんだけど。
まぁ、どこか休める所まで連れてってくれるってことだよね？
車に乗り込んだら運転手の人が笑いかけてくれた。見た目は執事風なんだけど……あの手袋の中、小指ないよね？
日本のマフィアは責任とるときに小指を斬るんだっけ……？

「銀二兄、お嬢に説明しておかないとどやされますぜ？」
「あぁ……確かにな。お嬢のことだから人身売買と勘違いされそうだ。まぁ宗助が止めるだろうけどな」
「お嬢も宗助の言うことだけは大人しく聞きますからね」

二人でハハハハと笑いあったあと銀二さん、つまり僕達を車に乗せた人が車外で電話をかけ始めた。
お嬢って人のところかな？
へー。
この人たちの組では人身売買はしないんだ。

マフィアはなんでもするって思い込んでたけど……もしかしたら早とちりなのかも。
電話を終えた銀二さんが助手席に座って車は走り始めた。
「あー、嬢ちゃん方」
「なによ？」
少し困ったように笑って銀二さんが話しかけてきた。
というかリン、アリサが心配なのは分かるけど刺々しすぎるよ。
「三人とも外人さんだよな？」
「まぁそうね。私が中国、この二人がフランスよ」
「なるほどなぁ……あー……うちのお嬢のこと、大目に見てやってくれ」
「へ？　なに、会うの？」
「まぁ、興味持っちまったみたいでな……それに、嬢ちゃん方も困ってることがあるんだろ？」
来た……！
どうしよう。
こういうのはアリサが機転を利かせるのに……アリサがどうしようと思ってたか分からないし、とにかくアリサが起きるまで話さないでおこう。
アリサを挟んで向こう側に座っているリンと頷きあう。
やっぱりリンも同じ考えみたいだね。
「お嬢ってどんな人なの？」
「人ってぇより子だな。中学生だ。ただ裏表があるな」
「中学生……」
「あぁ、でも強いぞー。組内ランキングでは上位に食い込む程だ」

お、女の子なんだよね……？
大人の男の人ばっかりのはずのマフィアの中でも強い方って、彼女が強いのか大人たちが弱いのか……？
まぁ、アリサとかラウラほどってことはないだろうけど。
でも中学生でそうだとすると……末恐ろしいね。

「ただお嬢は見た目が少し変わっててな」
「……？」
「すごい、美人なんだ」
「あ、はぁ……」

真顔で言われるからもっと深刻なことだと思ったら……

「いやいや、そんじょそこらの美人さんと思っちゃいかん。そうだな……嬢ちゃん方よりも、美人だな」
「む……そこまで言うなら会ってやろうじゃないの」

リン、なんで中学生相手に対抗意識を燃やすかな……
でも、強くて可愛いってアリサみたいな感じかも。キャラが猛烈に被ってます！　とか言い出したりして。
あ、でも美人ってことはアリサとはちょっと違うか。美人系って言うと箒とか三好さんみたいなキリッとした大人っぽさなのかな？
まぁ、箒は見た目だけというか、中身は普通に年相応だけど。
アリサ、大丈夫かなぁ？
まったくもう！
大会で大ケガするし、海では溺れた挙げ句に風邪ひいちゃうし！
……もう少し自分を大事にしてほしいのに。
今回だって調子悪いなら素直に言ってくれれば出掛けるのも止めたんだし……

「ところで、どこ向かってるのよ？」
「あぁ、ブラ、ブラインドショップ……だったか？」
「ブライダルショップですよ」

銀二さんの間違いを運転手の人が訂正する。
ブライダルショップってウェディング関係だよね……？　中学生にはまだ用事はないと思うんだけど……ファミリーの誰かが結婚するのかな？

「いやぁ、お嬢の友人の店だな。まぁ、金持ちの道楽みたいなもんだろ」

副業みたいなものかな？
でも、なんでそんなところに……？

「いや、そこのピンクの嬢ちゃん休ませねぇと。俺たちもお嬢を迎えにいく途中だったわけだしな」
「はぁ……」

でもそんな勝手な用事でいいのかな？
相手はお仕事なわけだし、迷惑だと思うんだけど……

「まぁ、平気だろ」

◇

ん……頭がヒンヤリしてます。
私は何を……？
鈴ちゃんとシャルと私で遠出して、そこで鈴ちゃんが白い粉を…

…あっ！

「ふざけんな！　何で私がこんなことしなきゃいけないんだよ！」

……いえ、今のは私じゃないですよ？
たまたま部屋の外から聞こえてきた声です。
というか、ここどこでしょう？
パッと見では美容院に似てるんですけどカットと言うよりメイク専門のような部屋です。

「だーかーらー、絶対に着ないつってんだろ！　……いや、そりゃ、私だって女だから？　憧れみたいのは、うん、あるよ。でも、結婚するわけでもないのにウェディングドレスを着たら婚期が遅れるって……」

なんだかキャンキャンした感じの声が聞こえてきました……ヤクザに連れ去られたはずなんですけど、どうしてウェディングドレス？
何かの隠語なんでしょうか？
ウェディング……花嫁……ブーケ……わかりませんね。
とりあえずのどが渇きました……あら、ちょうどいいところに水が……あれ、これ匂い的にお酒、

「なんで、宗助の名前が出るんだよ！？　いい！　呼ばなくていいから！　やっ、ちょ、おーすーなー！　……きゃっ！？」
「っ！？　っけほ！」

バタン、という音と共に扉が開いて女の子が入ってきました。
というかそれに驚いて飲んじゃったじゃないですか！　禁止例だされてるのに！
入ってきたのは女の子でした……というより無理矢理押し込めら

れたような感じですけど……あ、わかりました。やっぱりここはヤクザの本拠地なんですね。あの子も私と同じで被害者なんでしょう……シャルと鈴ちゃんは別の部屋でしょうか？

「痛てて……っておい！　今鍵閉めただろ!?　絶対に着ないんだからな！　ったく……ご丁寧にドレスまで用意しやがって」

入ってきた女の子はよくよく見ると美少女です。

背中まである髪は銀灰色で一本一本が分かるくらいサラサラです。そして陶器のように白い肌。その二つだけだと虚弱そうに見えてしまうのでしょうが、長い睫毛に黒目がちで気の強そうなつり目と紅を引いたような唇、それに若干アレンジされた朱色の着物が見る人に活動的な印象を与えます。

うーん……これは、三好さんレベルの美少女ですね。

化粧の痕跡がなさそうなところを加味すると三好さんよりも上かもしれません。

「だぁ！　くそったれ！　やっぱり鍵閉まってやがる！　おい、こら、銀二ぃ！　覚えてろよ!?」

問題は口の悪さ、ですかね？

でも、これくらいの方がいいような気も……って、私は何を真面目に美少女考察をしているんでしょう……

「あの……」

「ああん？　……って、目ぇ覚めた……じゃなくて。あら、目を覚まされたのですね。お加減はいかが？」

「え？　えと、あの、元気、です？」

「そう、それはよかった。私は鶴見唯華（つるみゆいか）と申します」

あれ……日本人の名前ですね。髪の毛とか目鼻立ちとかすこしヨーロッパ系かと思ったのですけど。
ハーフ、でしょうか？

「あら、怪訝な顔。私は正真正銘、日本人の両親から生まれた日本人です。この髪の毛は……隔世遺伝、というものらしいです」
「なるほど……えと、鶴見というと……鶴見組の……？」

鶴見組という組には聞き覚えがあります。
と言っても気絶する前に話したヤクザのお兄さんが言っていたのを覚えていただけですけど。
私の勘違いじゃなければこの子はいわゆる“お嬢”ということになります。

「……あの、ここではその話しはしないでいただけます？　その、友人のお店なのですが秘密にしているので……」
「あっ……その、ごめんなさい」

眉毛をハの字にして困り顔をされてしまったので反射的に謝ってしまいました。
浅慮でした。
やっぱり直接ヤクザの娘ですよね、なんて聞かれて気分よくなる人なんていませんよね……
私だってフランスでは、あぁ奥さんが怖い不破さんのお家の子ね、なんて言われてましたし……
あぁ、本当に申し訳ないことをしました……

「いえ、お気になさらないでください」

ところで、ずっとスルーしてましたけど口調が豹変したことにツ

ツコミを入れた方がいいんでしょうか？
先ほどの乱暴な言葉遣いが幻だったかと思ってしまうくらい自然にお嬢様然としているのでスルーしたのですが……

「あの、ところで私はどうしてここにいるのでしょうか？」
「ええと、貴女が街の方で倒れられたとかで銀二が連れてきたと聞いておりますが……」
「銀二……？」

最後に話したあの人でしょうか？
迷惑かけてしまいましたね……

「それで、ここは？　見たところメイクサロンみたいですけど……」
「あぁ、ウェディングドレスを試着するためのメイクルームです……私は着る気なんてないのに……」
「えー、ウェディングドレス可愛いじゃないですか。それに先ほどのジンクスが、と言ってましたけど白のウェディングドレスじゃなければ平気なんですよ？」

ちなみにウェディングドレスって白以外の色でもいいんですよね。ピンクとか水色なんかのパステルは最近多いですし、それこそ黒でもいいんです。
まぁ、それでも私は純白に憧れますけどね。

「本当かっ！？」
「え、えーと……はい」
「そっか、そうなんだ……なら、少しくらい着てやっても……仕方なく、仕方なくな。別に宗助に見せてやりたいとかじゃねえよ……あ」

おお、ツンデレです。
というか呟きの最後の方で気付いたみたいですけど、口調が戻っちゃってます。
宗助さん……さっきも何か言ってましたね……ということは、

「宗助さんって唯華さんの恋人ですか？」
「ばっ！　おま、違……違います！」

カァっと瞬時に唯華さんの頬っぺたが赤くなりました。
これは……いじり甲斐がありそうです。

「いわゆる“まだ”というやつですか？」
「だからそういうんじゃね……そういうのでは、」
「素でいいですよ？」
「あっ、あぅ、うぅぅぅ～！　お前、性格悪いな！」
「あぁ、そんな仔犬みたいに唸られたら……」
「う、唸られたら……？」

少し怯えたように後退る唯華さん。
警戒心丸出しな様子が飼い始めの仔犬みたいで……あぁ、これが“萌え”という奴ですか！
なるほど……これは、世の男性が虜になってしまうのも理解できなくないです。

「お、おい……？　また、調子悪くなったのか？」

唯華さんが急に黙り込んだ私を心配そうに上目使いで見てきます。
あぁ、凄い綺麗なのに男言葉。美人だけど性格は可愛らしい。ぶっきらぼうだけど実は優しい。
これが……これがギャップ萌えなんですね！

これはもう……抱き締めて可愛がるしかないです！

「ぬぉ！？　なんだお前！？　百合か！？　百合なのか！？」

「好きな子がたまたま女の子なだけです！」

「それを百合って言うんだろぉ！」

きゃー可愛い！

こっちを気遣って無理に暴れないところとか、もうシャルがいなかったら恋してます！

……いいでしょう。

認めましょう。

「私は百合っ娘です！！」

「そんなこと、宣言するなぁ！」

あぅ！

うむむ、引き剥がされてしまいました。

でも諦めません！

可愛いものを愛でて何か問題ありますか！？　いいえ、ありません！

ということで、もっかい抱きっ！

「だぁぁぁあ！　暑いわ！」

おしあいへしあい、くんずほぐれつ、にゃんにゃん状態です。

なんかもう朝に鈴ちゃんがセットしてくれた髪型とかミニスカートとかいろいろ大変なことになってる気がしますが気にしません！

誰に見られたとしても今なら自信をもって可愛いは正義ですと言える気がします！

「へぇ……僕達は心配してたのに……？」
「だって唯華さんがこんなに可愛いん、で…す……よ？」

なんで、シャルが？
いえ、鈴ちゃんもいますけど、どうして？

「あーあ、私は関係無いからな」

え、ちょ、唯華さん？
何でそんな修羅場から逃げだすようなかんじで去っていくんですか？
しかも、私に背中を見せないようにして……しかもシャルの背中に隠れて怯えたような顔しないでください！
ショック受けちゃいます。

「ア、リ、サ？」
「うひゃぁ！　シャル、誤解しないでください！　私は可愛い女の子を愛でていただけでなにもやましいことはしていません！」
「ふーん……唯華さんはお嫁にいけない、ってポーズだけど？」
「私が責任をとって貰ってあげます！」
「へぇ……それならアリサの奥さんがいっぱいになっちゃうね」

……ん、それどういう意味です？
私、そんなたくさんの人に責任とらなきゃいけないようなことをした覚えは……やっぱり全くないです。

「私がなにかしたのって、誰です？」
「そ、そそそ、そんなことはどうでもいいの！　とにかく、謝ってあげて！」

……？

なんで真っ赤になったんですか？

「えっと、はい……唯華さん、ごめんなさい」

「……すっげぇ複雑だけどいいよ。というか、お前、酔ってるんだろ？　仕方ないって」

そうかもしれません。

さっき一口飲んじゃいましたし……

「「え゛」」

なんでシャルと鈴ちゃんはそんなに驚いてるんですか？

63. Un mariage heureux heureux.（2）（終）

鶴見唯華（つるみゆいか）

活動報告の方から友情出演

頭の中で構想しているラブコメのヒロイン

性格はまぁ、お嬢らしくアグレッシブ？　サバサバしてるいい女、

でも好きな人（宗助）には遠慮気味かつ独占欲強し

そして中学生です（ここ重要

七夕にちなんで７７７文字

64. Un mariage heureux heureux. (3) (前

そう言えば邦題は「とっても幸せな結婚式」ですが
今短編のラストはそこまでハッピーエンドじゃなかったりしますの
でご注意を（

64. Un mariage heureux heureux. (3)

「アリサ、本当に酔ってるの……？」
「そんなの、自分じゃわかりませーん」

ですが、ちょっぴり、ほーんのちょっぴり、いつもより世界が輝いてますー。
視界の中に可愛い子しかいないからですねぇ……にゅふふ。

「だめだこりゃ、こいつ完全に酔ってるよ。まぁ、量は飲んでないだろうし大人しくさせておけばいいだろ」
「……大人しく、ですかぁ？」

そうですか……私、大人しくしてなきゃいけないんですね……んぅ？　それとも私を大人しくさせたいんでしょうか？

「唯華、だっけ？　そうは言うけど酔ったアリサを大人しくさせるなんて骨折れるわよ？」
「ん、暴れだすのか？　それなら、」

大人しくさせる、と鈴ちゃんは言いましたよね？
ということは私に大人しくしてほしいのではなくて、私を大人しくさせたいということですよね。
だとしたら……

「いや、暴れだすというより……あーあ、遅かったわ。見て……今回は何が引き金だったのかしら」
「ん……あぁん!?　ちょ、おま、なにしてんだよ!?」
「ふぇ？」

なにって、服脱いでるだけですけど……？
そんな大きな声出されるようなことしてないですよね……？

「なんで！？」
「だって、暴れる人を大人しくさせるには縛るしかないじゃないですかぁ？」
「いや……そこはまぁ、置いておこう。なんで脱いだ？」
「ん？　……縛るなら脱ぐに決まってるじゃないですか」
「待て、少し考える時間をくれ」

あ、そっか、さっきちょろっと聞きましたけど、唯華さんはまだ中学生らしいですしね。
知らなくても仕方ないかもしれません。
それならお姉さんである私が二木さん直伝の技を伝えましょう。

「唯華さん、まずはこれを」
「……荒縄？」
「それで私が言った通りに私の体を縛ってください」

まずは脇の下を通すように……次は胸の下に……そこは首の後ろ側から前に通して……これで、

「亀甲縛りの完成です！　ん……あ、あとは手拭いを私の口に……あふぅ……擦れて、痛いんですけど、ん、これはなかなか……」
「……っは！？　私は何を！？」
「亀甲縛り？　……まぁ、アリサのタチの悪さは分かったと思うわ。なぜか、のせられちゃうのよ」

んぅ……動きすぎると少し痛いですね。でも、ぴりりとした感触

がアクセントに、ぁん……
あ、これくらい……これくらいならちょうど……はぅぅん

「ふぁ……」
「でもアリサをこのままにしておくわけにもいかないよね……」
「あぁん、しゃるぅ、そんなに見つめられたら……からだ、おかしくなっちゃいますよぉ……っ！」
「……とりあえず、アリサの酔いが覚めるまで放っておこうか」

あん、シャルのいけずぅ……
放置されたらされたでやっぱり私、ダメになっちゃいますよぅ……
って、えー、ほんとに行っちゃうんですかぁ……？

「しゃるぅ、私、さみしがり屋のうさぎちゃんなんですよ？　死んじゃいますよ？」
「ぅ……」
「ぴょんぴょん、ぴょこぴょこ……？」
「アリサ！　……やっぱり、置いてく！　ごめん！」

えー……一瞬、駆け寄りかけたじゃないですかぁ！
なんで、亀甲縛りを差別するんですかぁ……？
……ふわぁ……おねむです。

「おやすみなしゃぃ……」

◇

「良かったのか？」
「ん、何が？」

いや、何がって……
こいつら変わり者だな……普通、酔っぱらいを亀甲縛り……だっけ？　とにかくあんないやらしい縛り方のまま放置したりしないだろ。

「いや、今までは寝たらパジャマに着替えさせてベッドに突っ込んでたんだけど……そろそろあの子も酔ったときの自分を知るべきだと思ったのよ」
「ん？　じゃああいつ、酔ってる間のこと覚えてないのか？」
「そうね。そうなのよね、シャルロット？」
「なっ！？」

話を振られた金髪の方が一瞬で真っ赤になった。

「あんたも何かやられたのか？　抱き締められたり？」
「え？　いや、えっと……裸のまま抱き締められて、そのまま……」

あの女、抱き方が情熱的すぎるからな……腰と尻に手を回して体密着させてくるから……
あの時はいやらしさを感じなかったから嫌悪感なかったけど、今さっきの状態でこられたらさすがに……

「というか、よく友達やってられるよな。私だったらまず無理だ」
「あー、いつもは全然違うのよ。周りに機を遣って空回りする子なのよ。私たちが見てないところで無茶するしね」
「そうそう。アリサ、いっつも無茶して、しかも強がって逆に倒れちゃったりするんだから」

そういえば……背中と脇腹、それに太股に酷い傷跡があったな……あれも無茶の結果なのか？

……こいつら、軍の特殊部隊とかだったりしてな。

「でもよ、周りの奴に気を遣ってるって言うけど、それって他人のこと信用してねぇんじゃねぇの？　自分一人でなんでもできるって……私はそんな奴、無理だ」

「違うよっ！」

「は……？」

びっっっくりしたぁっ！

大人しそうだと思ってた金髪がいきなり怒鳴るんだもんなぁ……

でも、違わないだろ。

周りを信頼してるなら協力してもらう。

うちの組の奴らだってそうだ。

そんな初歩もできない奴、どうしようもねぇじゃねぇか。

「違うよ……確かにアリサは周りを心の底からは信用しないけど……それはどうしようもなく臆病だからなの。アリサ自身が嫌われて当然だと思ってるから、嫌われたときにショックを受けないように殻を纏ってるんだよ……」

……あいつ、過去に瑕でもあんのかよ。

確かにそういう奴らもうちの組にはいたな……宗助だって最初は自暴自棄になってたし……

「悪かったよ。さっきのは撤回させてもらう。私にだって、あんたにとってのあの女みたいな存在はいるしな」

「そっか……ありがと」

でもなぁ……ひっかかる。

普通、友情なんかであそこまで相手のことを思いやるか？　まし

てやキレるか？
私の場合は宗助が私の大事だから怒るけど……もしかして、

「シャルロット、だよな？　お前、あれの恋人？」
「は！？　え、なに、違うよ。違う違う！」
「あぁ！　“まだ”ってやつか」
「違うってばぁ！　アリサも僕も女なんだから！」
「またまたー」
「……そりゃ、今までずっと僕のこと守ってきてくれてたし、トーナメントの時とか、海でのあれとかかっこよかったけど…で、でも、違うからね！　……僕は、アリサが心配なだけだもん」

なるほどな……

「でも、向こうは完全に熱あげてるよなー。お預けしたままなのか？」
「え？」
「あっ、バカ……」

なに、言っちゃまずかった？
当然気付いててスルーしてるんだと思ってたんだけどな……
金髪が同姓から恋されることを嫌悪してなかったわけじゃなくて知らなかっただけなのか……
どうしよう。
これで金髪があの女の子と気持ち悪いとか言って拒絶したら私のせいだ……

「熱って……アリサが僕に？　……そ、そんなわけないじゃん……！　そんな、だって女の子同士だよ？　そんなの変だよ。うん変だよ……ありえない」

「っ、待てよ」

ありえない、って、なんだよ……
あの女にとっては大事な恋なんじゃないのかよ。
それくらい、見てれば分かるだろ？
酔っててもあんたの名前を呼ぶときだけは照れてただろ？
それをありえないなんて言ったら可哀想だろうが……

「まぁ、私の知ったこっちゃないけどな……」

空回りしてる恋なんて本人は辛いだけで、周りから見てても痛々しいだけなんだからな……

「リン……アリサは本当に、」
「あれ、唯華まだ着替えてないの？」

げ、堀之内……！

「早く着替えちゃってよ。写真とるんだし……って、そっちの二人は？」
「……成り行きで御一緒することになりましたの」

……急にお嬢様言葉で話し始めた私を外人組が奇妙なものを見る目をしている。この二人には最初から地の話し方を聞かれちゃってたしな。
私だって好きでやってるわけじゃねぇってのに。
まったく、親父が私のことをオジョウサマ学校なんかに入学させなければこんなことにはならなかったのに。
おかげで学校のやつにはこうして口調を変えなきゃいけない。
まぁ、堀之内は外部受験組なだけあって話しやすいまだマシだけ

どな。

「ふーん……唯華ったら、こんな可愛い子、知り合いにいたならちゃんと言ってよ。まぁ、連れてきてくれたからいいけど」
「は？」
「え？」
「……その、お二人は私たちより一つ年上なので」

でたよ……

こいつの悪い癖なんだよなぁ。全部自分に都合のいいように解釈するの。

そもそも、今回だってなぜか私がブライダルイベント用のイメージ写真のモデルになることになってたし。

大方、こっちの二人も巻き込もうって魂胆だろうな。

「あ、それじゃ先輩なんだ。えっと……二人はウェディングドレスとかに興味あります？」
「まぁ、女だしそれなりにはあるわね……シャルロット……？」
「……すっっっごい、好き！」

うわー、目が輝いてるよ……

「じゃあ、うちでやるイベントの写真モデルとか頼めます？　ドレス、着れますよ？」
「まぁ、私は構わないわ」
「僕も問題ないよっ！」

……まぁ、本人たちがいいならいいか。

「唯華もとーぜん着るわよね？」

「……白以外なら」
「もうっ、ジンクスなんて信じちゃって可愛いんだからっ！」

悪いかっ。
婚期が四年も遅くなったら嫌だろ……！

「ま、私が最高に似合うのを、」

「うみゃぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

「「！？」」
「あ、アリサだ」
「やっと起きたわね」

……いや、そこの二人、いくら友達だっていっても落ち着きすぎじゃないか？
まぁ、向こうも向こうで叫んだってことは自分の格好に驚いたってことだから酔いは抜けてるんだろうな。

「それじゃ、私が説明してくるから三人は先に言ってて」
「一人で平気？」
「人が多いとややこしくなるでしょ」

◇

痛っ！
なんなんですか！？
なんで私が亀甲縛りされてるんですか！？
う、うぅ…動くと擦れますよぉ。

「誰かぁ……あ、でも見られたくないです」

ど、どうにかして一人で抜け出さないと……

でもなんで亀甲縛り？

……もしかして身売りじゃなくてポルノ画像が目的なんでしょうか？

そうなると、私が目を覚ましたら男の人がたくさん出てきて……

り、リンカーン大統領なことに？

叫んだのは失敗でした……！

ガチャ

扉が、開きました。

……怖い。

今までは……シャルと仲良くなるまでは私自信の貞操なんてどうでもよかったのに。

わがままになってるのがわかります。

私はシャルが守れて、その上で他の人も満足できるなら私がどうなってもいいと……それこそ使い潰されてもいいと思っていたのですけど……

もう、そんなの嫌です……

私も、幸せがいいです……

シャルを守ることだけじゃ、もう我慢できないのにっ……！

開いた扉の陰からでてくる鈴ちゃん。

「え、鈴ちゃん……？」

「なに意外そうな顔してるのよ？」

……だって、ここは男の人たちが出てくる場面じゃないんですか？

それで、私はシャルを想いながら組み伏せられて……それで途中

からは精神的に壊れてシャルとしているという幻覚に現実をすり替えちゃうんです。

そうして悦んでいるところをシャルに見られ気持ちも知られてしまい、次の日から汚物を見るような目を向けられるんです。

そして卒業式の放課後に呼び出されるんです。

ドキドキしながら待っていた私にシャルが女の子なのに女が好きだなんて変だよ、間違ってるよ、って言うんです。

それでも弁明しようとしたら、男に抱かれて喘いでたくせに、と……悲惨な末路を迎えるのです。

……来たのが、鈴ちゃんでよかったです。

「あの……シャルは……？」

「私だけよ」

こんな姿、見られたくありませんし……いえ、本当は誰にも見られたくないんですけど！

「で、なんでそんなことになってるか覚えてる？」

「いえ、まったく」

「まぁ、簡単に言うと……酔った勢いってやつ？」

「……えー」

いや、まさかそんなわけが……

ですが酔った勢いで大浴場を破壊したこともありますし……あれ、なんだかうっすらと記憶が……

……

……

ぼひゅっ

「思い出した？　やっぱ量が少なかったからかしらね」
「ええ……そのー、唯華さんは？」

まさか亀甲縛りを強要していたなんて……！
というかシャルに見られてますし！
もう、お嫁にいけませんっ……！

「まぁ、変態扱いはされただろうけどそれだけね……ヤクザの娘って知ったときは驚いたけどいい子よ」
「そんなの最初から分かってましたよ。だって中身も可愛らしい子でしたから」
「……最近のアリサの判断基準がわからないわ」
「かわいいは正義です」

可愛い子には旅もさせない、むしろ離さないが最近のモットーです。
……でも、シャルに見られちゃったんですね……どうしよう……ドン引き確定です。

「あれ？」
「どうしたのよ？」
「なんで鈴ちゃんはドン引かないんですか？　正直、私、ヤバいと思いますよ？」
「あー、まぁ、慣れね……先輩、自分で酒飲ませるなとか言ってるくせに率先して飲ませるんだから……しかも真っ先に襲われて逃げ出すし……」
「はい？」

なんだかブツブツ呟く鈴ちゃんの周りにどんよりした空気が見えます。

「というか私だけじゃなくて、もう一夏以外の専用機持ちは大方慣れてるわ。まぁ、セシリアだけは受け入れたくないようだけど」

あぁ、いったいわたくしはどこで間違ってしまったのでしょうか……とか呟いてそうですね。

「でも、私は普段からそんなに迷惑かけていたんですね……」

「いや、迷惑って言うわけじゃ……まぁ、エロモードの時は二木と一松に丸投げしてるけど」

「エロモードて……」

「いや、ただの従順モードの時は可愛いのよ。でもちょっとしたきっかけで変態になるというか……」

「はぁ……」

なんでしょうね、そのギャグ人格。

でもそういうことならシャルもいつものことと思ってくれているわけですね？

それに、ある程度は仕方ないことだってことも理解してくれていると思っていいのでしょう。

まぁ……慣れられている時点で末期だとも思うんですけどね。

「ま、じゃあ行くわよ」

「へ？　どこにです？」

「んー、ドレス着に？」

……ドレス？？

64. Un mariage heureux heureux.（3）（終）

あついですねー
頭とろけますねー

夏になってからアリサの変態色が強くなったのは頭溶けてるからか。
。。

65. Un mariage heureux heureux.（4）（前

おし、終わり

ラストもだんだん見えてきました。

狐耳巫女ぺろぺろ（無関係

65. Un mariage heureux heureux. (4)

「ってことで、連れてきたわよ？」
「あ、リン！」

私と鈴ちゃんが部屋に入ったとたん、それに気付いたシャルが駆け寄ってきました。
シャルは鈴ちゃんを挟んで私の向こう側に並んで立ちます……むぅ。

でも、あんな格好を見られたあとで自分から近づくのも恥ずかしいですし……もしかしたら気を使われているのかもしれませんね。
シャルは気遣いさんですし。
……私としてもワンクッションあってよかったかもです。
でも……名前、呼んでくれませんでした……

「あ……えと……アリサも、もう調子いいの？」
「あ、はい！　バッチリです！」
「そ、そっか……えと、じゃ、またね！　リン、行こ！」
「え、あ、ちょ、シャルロット！？　あんた、あ、もう、引っ張らないでよ！」
「あ、あれ……？　シャル？　わ、私は連れてってくれないんですか……？」

やっぱり、避けられてます？
そう、です、よね……
あんな、変態さんみたいな……しかも被虐に傾いたところを見られたら、ああなりますよね。
話しかけてくれたのも、気にしてないよっていうポーズだったのかもしれません。

鈴ちゃんは慣れたって言ってくれましたけど、シャルがどうかはシャルにしか分かりません……

心が、きゅんと切なく痛みます。

シャルと仲良くなってからはいつもこの痛みが私を苛(さいな)むんです。

痛いけど、少し虚ろな……それでいて甘みもあるような、そんな痛みです。

もしかしたら、気付いているからなのかもしれません……私とシャルは交わらないということに。

……私の夢は存外に少ないんです。

まずはケーキ屋さんになって人々に笑顔を分けてあげることです。

やるならやっぱり日本がいいですね。たくさんの人に来てもらいたいですから。

失恋しちゃった子にただでサービスして笑顔にしてあげたりしたいです。

もうひとつは……シャルを守り、支え続けることです。

シャルは周りに気を遣って自分のことを後回しにしちゃうので、私はシャルだけを優先するんです。その結果、シャルが守れるなら私はどう評価されても我慢します……例え、シャル本人に酷評されたとしても。

そして、最後はシャルと共に在るということです。

……これが一番望ましいですけど一番障害も多いです。

性別の問題もありますし、なによりシャルが望んでくれなければ叶いません。

私だけが思っていても仕方ないんです。

……それに、シャルを選んだらいずれ国家代表になるシャルと一緒にフランスに戻るので、どちらにせよ日本でケーキ屋さんを開くことはできません。

ケーキ屋さんはどこの国でもできますが、ケーキで人を笑わせるには日本くらい甘味が人気なところでないと……

だから……シャルの気持ちもですが、私の気持ちも本当は定まっ

ていないんです。
シャルのために生きるなら、小さいころからの夢を諦めなければいけません。私にとってはどっちも一番なのに……

「はぁ……」

これはいい機会なのかもしれませんね。そろそろ脈がないことを認めろと神様が言っているのかもしれません。
それで、違う人に恋をして日本でケーキ屋さんを開くのもいいかもですね……
なんて……思いもしないこと考えてしまったりしますけど。
本当に、どうして私ってこうなんでしょう。
少し仲良くなれたと思ったら、また、失敗して離れちゃいます。
……って、そうだ！　唯華さんに謝らないといけません！
出来ることから少しずつ、です！

「ゆ、唯華さんいまひゅかっ？」

う、うぅ～～～っ！
舌、噛んじゃいました。
裸よりも恥ずかしい格好を見られたと思うとどうしても体が固まっちゃって、呂律も怪しくなっちゃいます……

「んぁ～？　って、おぉ、起きたか」
「はい！　あの、ごめんなさいでした！」
「え？」
「その、ですから……あんなことさせてしまって……」

その瞬間、ぼひゅっと唯華さんの顔が染まりました。

「いや、ぉ、お前、私も忘れるから、お前も気にするなよ。あれは不幸な事故だろ？　気にするな」
「え……気に、しないんですか？」
「いや、そりゃまぁ、少しは……な。でもあれだけであんたのことを評価する気もないよ……怒られちゃったしな」

そう言って唯華さんは視線を私からはなしました。
見ているのは……シャルと話している鈴ちゃんでしょうか？
私のために怒ってくれたなんて……

「それより、あんた、あの金髪のこと好きなんだろ？」
「ふぇっ！？」
「なんか、うまくは言えねぇけど……頑張れよ。他からどう見られるかなんて気にする必要ない……ヤクザの娘だってこと隠してる私じゃ説得力ねぇか」
「いえ！　あの、ありがとうございます……そう言ってもらえるだけで、私……」

……それにしても、初対面の人にまで気付かれてしまうなんて。
ですけど……うん！
私、頑張ってみます！
とにかく向こうでこそこそしている二人に突貫です！

「シャルー、鈴ちゃーん！　なに見てるんですかー？」
「あ、アリサ……えと、えと……」
「んー？　あぁ、ここのドレス借りて結婚式挙げた人たちの写真よ。どんなの着たいか聞かれても答えられなかったから」
「あー、見本ってことですか？」

なるほど、自分と体型（スタイル）が似ている人もいるでしょうし、自分が着

たらどうなるかってのが予想しやすいですしね。
気になったので私もひょっこり二人の間に頭を突っ込んでみました。

「おー……やっぱり白が大多数なんですねぇ」
「あ、アリサ……」
「そりゃ、結婚式といったら白でしょ？」

そうですかねぇ？
私は黒もいいかなぁと思ってるんですけど……三色くらい着たいのでお色直しを繰り返すのもいいかもです。
まぁ、それでも白は外せませんけどね！

「どんなのがいいかなぁ……？」
「えっと……シャルはこの薄いオレンジ色のクラシックタイプがいいと思います。それでコルセットとヘッドドレスの刺繍はこっちので……あ、裾にも入れるといいかもですね！」
「え？　え、あ……ほんとだ。可愛いかも……」

……！
シャルが、笑ってくれました。
さっきからずっと避けられているような気がしていたんですけど……よかったです。

「あ！　……えっと、アリサ、ありがとう」
「い、いえ……」

でも、どこかぎこちないですね……
どうも嫌われているわけではなくて、なんというか……距離感が掴めなくなっているような？

そんな印象を今のシャルからは受けます。
私が近くにいることに戸惑ってる、とかでしょうか？

「あ、私はこれにしようかしら。アリサ、どう思う？」
「おー、シンプルで……うん、似合うと思います」

鈴ちゃんが選んだのは少しチャイナドレスのようにも見える赤みがかった細身のドレスです。それでも足元が広がっているのでウェディングドレスらしさは失われていません。
身体のラインがきれいに出るので腰回りがきれいな鈴ちゃんにはちょうどいいかもですね。
この手のドレスは胸が小さい方が見栄えもいいですし。セシィのように胸が大きい人がこういうのを着たらだらしなく見えてしまうんです。
私はどうしましょうかね。

「あ、これスゴい……」

むむむ、シャル、なにか見つけましたか？
見せてください！

「あ、アリサ……近く、ない？」
「わぁ……全面レースですか……高そうですね」

シャルが目をつけたのは頭から爪先までをレースで覆った豪奢なドレスでした。
スカートは裾に向かうにつれて裏地の量を減らしているのかだんだんと透き通っています。
さらにふんわり感を出しているフリルや腰元の大きなリボンまで全てがレース編みで作られてます……

これ一着作るのに何年かかったんでしょうね？

「でも白いから着れないね」

「ま、アリサなら四年遅れても問題なさそうだけどね」

「むむ、それは私の見た目が幼いからってことですか！？」

「だいせいかーい」

むぅ！

婚期を逃すのが問題じゃなくて結婚が遅くなるのが問題なんじゃないですか！

好きな人と一緒にいられる時間が減っちゃうってことなんですからね！

◇

「どう？　どれ着たいか決まった？」

突然、僕たち三人に後ろから声がかけられた。えっと、堀之内さん……だっけ？

この人の両親がこのお店のオーナーらしい。それで僕達と唯華さんを宣伝のモデルにしたいとか。

僕としてはドレスが着られるなんてスゴい嬉しいけどね。

綺麗な洋服には昔から憧れてたけど、そういうものとは縁がないなんて思ってたから。

そういう意味では……うん、僕を候補生って言う立場にしてくれたあの人には感謝かな……？

「私はこれね。平気？」

「そのアルバムの中で着られてるやつならどれでも平気。じゃ、あっちの部屋にメイクさんとか待機してるからー」

「はいはい。んじゃ、行ってくるわ」

リンがさっさと着替えに行っちゃった。

どちらかといえば、とか中途半端な態度だったけど実際には楽しみだったんだね……照れ隠しかぁ。

……アリサと二人きりになっちゃった。ちょっと、気まずいかも。

僕は……アリサが進めてくれたやつにしようかな。自分で言うのも変だけど、確かに僕に合う気がするし……

でも……唯華が言ったこと、本当なのかな……？

アリサが、私のことを……好き？

アリサのことを抱き締めたこともあるし、慰めてあげたことも叱ったこともある。それに臨海学校では溺れていたアリサを助けたし……

そういうのが積み重なって、僕のことを？

でも、それでも、女の子同士だよ？

一松さんと二木さんみたいな例があることは知ってる……でも、自分があなれるかと言われたら僕は首を横に振ると思う。

実際、僕もたまにアリサのことを抱きしめたりするけど、あれもアリサに対して恋愛感情かあるってわけじゃないし……だから、別にアリサが嫌いって訳じゃない。

守ってくれてたってのもあるし、それを引いても優しくて、いつも笑顔を向けてくれるアリサは年齢より少し幼めだけど素直に可愛いと思う。

酔った時のアレはさすがに勘弁だけど……

でも、それだけなんだよね。

仲良くしたいとは思ってる……でも恋愛対象かってなると言葉が出てこない。

って、アリサがそうだって前提だけどまだわからないよね！

なにか遠回しに確認できそうなものは……あっ、これがいいな。

「アルバムに写ってる人、みんな笑顔だね」
「……？　相手が好きで好きで仕方がないから結婚するんですよ？　笑顔なのは当然じゃないですか」
「……そうだね。でもさぁ、」
こっからの、アリサの反応で分かるはず……
こうやって騙すみたいなことはしたくないけど……今の僕には重要だから。
アリサがどっちだとしても、判断つかないとちゃんと対応できないし……
「僕も大人になったら好きな“男の人”と結婚するのかって思うと楽しみだよ」
「そうですねー」
……なんだ、やっぱり唯華の勘違いだったよ。
男の人ってところ強調してもアリサはニコニコしたままだったし。分からないけど、僕が男の人と結婚する気だって言われても不自然な反応がなかったってことはそういうことだよね？
「じゃあ、僕も着替えてくるね！」
「はい。私は選んでますね」
よかった。
アリサとはまだ友達でいられる……
うん、気を取り直して着替えちゃおっと。気になってたこともなくなったし、せっかくのドレスなんだから楽しまないとね。
「……でも、最初の内はアリサのこと避けちゃったりしたし悪いことしたかな？」

アリサが僕のことをどう思ってるかが分からなくて、変なこと言っちゃいそうだったから距離を置いてたんだけど僕の勘違いだったんだから、当のアリサにとってはいきなり避けられたように感じてたかも。
着替えたらその分だけ構ってあげないとね。
アリサは同じフランス出身だし、卒業してからも友達でいたいから……

「あ、リン」
「ん？　あ、次はシャルロットなのね」

フィッティングルームの前で丁度リンと鉢合わせした。
リンが髪の毛おろしてたから一瞬誰だか分らなかったけど……

「なんて言うか鈴のお姉さんとかって言われたら普通に信じちゃいそう。似合ってるね」
「……ありがと」
「照れちゃって、可愛いなぁ」

大人っぽいなぁって思ったけど照れて唇を尖らせる仕草はやっぱりリンだった。
うーん、僕もこれくらい変身できるかなぁ？
いや、ウェディングドレスなんだし少しは印象も変わるよね。

「というかやけに嬉しそうじゃない」
「そりゃ、ドレスが着れるんだもん。仕方ないよ」
「男装してた割にシャルロットって可愛いもの好きよね」
「もう、あれは仕方なかったんだから……僕だって女の子なんだし可愛い服とか着たいよ」

まぁ、可愛らしすぎて着るのが恥ずかしくなるような服もあるけどね。
ああいうのはアリサが似合うんじゃないかなぁ……
「そういえば、アリサって全然女の子っぽい服着ないよね」
「ん？　あぁ、確かに。あの子、服にだけは無頓着っていうか……」
だよねぇ。
精々がワンピースみたいな質素なものだし、普段はティーシャツにショートパンツとかボーイッシュな服装だもんね。
「ん？　服だけは？」
「シャルロットもアリサの下着くらい見たことあるでしょ？　気合入ったのばっかよ？　それに二週間に一回は髪の毛染め直してるし」
「……えっ？　あれって地毛じゃないの？」
「地毛じゃないわよ？　私も地毛が何色なのかは知らないけどね」
十三歳の時、要するに初めて会った時からアリサはピンク色の髪の毛だったから生まれつきなんだと思ってた……
そう言えばアリサのお父さんのステファン博士は金髪だったし、アリサのお母さんも日本人だから黒髪なんだよね。
そっか。
考えてみればアリサってハーフだったんだ……すっかり忘れてたけど苗字も不破だもんね。
「入学してきた頃は女の子らしい服も着てたけど……シャルがきてからはスカートなんて数えるほどしか着たことないんじゃない？」
「ふーん……なんでだろうね？」
「あれじゃない？　アリサって子供っぽいし学園は逆に大人っぽい

のもいるっていうか……だから可愛い服着て可愛がられたりするのが恥ずかしいとか」

あ、確かにそれはありそうだね。

アリサって何かと背伸びしたがるし大人の女アピールしようとするし。

……そんなことしなくても、たまにスゴい大人っぽい表情の時あるけどね。

「それじゃ、私は一回アリサに会ってから写真撮ってもらってくるわ」

「うん、あとでね」

◇

「……痛い、ですね」

キュッと、思わず胸の部分の布を掴んでしまいます。

普段からあのようなことを言われる時もあるだろうって、そう意識していなければシャルに変な態度をとっちゃってたかもしれません。

でも、息すらのまなかったのは褒めてほしいですね！

……ほんと、自分でも驚いてしまうくらい心が痛くなったんですから。死んじゃうかもって思いました。

シャルったら罪な女ですねっ！

「……はぁ」

「えっと、不破さん、だっけ？」

「え？」

後ろからかけられた声に振り返ってみれば堀之内さんが困ったような顔をして立ってました。

「そろそろ決めてもらわないといけないんだけど……カメラマンさんの予定もあるし。でも、もしかして嫌だった？　それだったら、」

「あ、いえ！　嫌じゃないです！　嫌じゃないですけど……」

「けど？」

「いえ、何でもないです」

シャルが男の人と結婚するって聞いたら心が痛くなってしまったんです、なんて言っても困らせるだけですもんね。

……ですけど、シャルがそう望むなら私には邪魔できませんし、する気もありません。

私は確かにシャルと一緒に幸せになりたいと思っていますけど……一番大事なのはやっぱり私の幸せじゃ無くてシャルの幸せです。

シャルが男性と結婚するなら……私はケーキ屋さんにもなれるんですから、どっちにしたって……

そう、どちらにせよ私も幸せになれるはずです……

さっきまではどっちかしか選べないなんて思ってましたけど、どっちかは叶うって考えてみればこれほどいいこともありません。

……これでいいんですよね？

相と決まれば、私が着るドレスはこれ以外にはありえません。

「堀之内さん。私はこれが着たいです」

「……いいの？　だって、」

「いいんですよ」

決めてしまえば、楽なものです。

◇

「アリサ、遅いねぇ」
「着替えるのに時間かかったんでしょ。髪長いからヘアメイクも大変だろうし」
「堀之内……私はいつまでこれを着てなきゃいけないんだよ」
まったく、不破ってやつ時間かかり過ぎだろ！
私は写真も撮ったし一刻も早くこれを脱ぎたいんだよ！
こっちの高校生二人と並ぶと恥ずかしい……別に我ながら似合ってないとは思わないけど、なんか二人の方が大人っぽく感じられるというか……
「大丈夫、唯華も素敵よ。あともう少しで個人撮影も終わるはずだから」
「……十分で来なかったら脱いじゃうからな」
私が着てるのは黒のウェディングドレス。
真っ黒だってことを除けば金髪の方がきてるのと形は似てる。
私の髪の毛は銀色だから白っぽいドレスだと少しくすんだように見えるかも、なんていう堀之内の有り難くない助言に従って黒いドレスにした。
……ありがたくないってのは、だって、要するにあれだろ？　私には純白のウェディングドレスは似合わないって言われた訳だし……
「あ、来たわ」
裾を踏まないように恐る恐る歩いてくる不破を見ると、やっぱり純白のドレス着たいなぁ、なんてことを思っちまう。
フリルとレースがふんだんに使われたドレスは子供っぽい不破のために作られたようにすら見える。

「「「って白っ！？」」」
「ひゃっ！？　み、みなさん、どうしたんですか！？　事件ですか！？」

婚期がどーのこーの教えてくれたやつが白いウェディングドレス着てるっていう大事件が起きてるだろ！
しかも好きな人、いるんだろ？
訳がわからなくて不破を見ていたら目があった。

「お……？」

なんか、あの目は見たことがある。
……前に、私のために無茶をしてくれた宗助と同じ目。
あの時、アイツは確か……護るべきものが何かは分かっているからって……そう言ってくれた。
私は、無茶なんてしてほしくはなかったけどあんなこと言われたら止められねぇし……
いや、今はそんなこと関係無いな。
とにかく、不破の目は人のために自分を犠牲にすることを覚悟したような目……

「って、アホらし」

冷静になってみりゃ私関係ねぇな。
偶然、一緒になったやつのことまで気にしてられねぇよ。
当人同士の問題だしな……まあ、その片方はニコニコニコニコ、全く気づいてなさそうだけどさ。

「唯華さん。ありがとうございます」

「あ？」
「気にしてくれていたみたいなので……」
「……別に、私は」
勝手に親近感感じてただけだ。
そう言おうとしたけど不破はさっさと視線を逸らして二人の方に行っちまった。
「ねぇ、唯華。あの人、なんで白にしたんだと思う？」
「……さぁ」
……結婚する気がないんじゃねぇの？
「じゃ、四人で写真を撮るので並んでくださーい！」
◇
「結局、それなんだ」
「シャルが気に入ってたみたいなので」
「婚期、遅れちゃうかもしれないよ？」
「問題ありません」
……シャル以外と結婚する気はないですから。
だから、シャルが男の人と結婚すると考えているなら、私は結婚しません。
このドレスは、私の覚悟の証明で……
「このドレスを着ることで……」
「ん？」
「いえ……」

そして……私が一生シャル以外のものにはならないと……いえ、私がシャルのものだっていう誓いになるんです。

……そのことは神様に誓ってもいいです。

健やかなときも病めるときも、シャルと一緒にはいられないかもしれませんし、片方が一方的に想っていることを“共に”と表現していいのかも分かりませんけど……

私にとっては、今日、シャルのものになったんですから、今日が私の結婚式です。

我ながら、なかなか支離滅裂ですね……

でも、胸は痛いですけど……幸せなのも確かなんですよ？

例え、愛されなくても……私はシャルのものになれれば幸せなんです……

「本当は……」

「はーい、とりまーす！」

ぱしゃっ！

◆～～～～～～～～～～後日譚～～～～～～～～～～◆

「しっかし、お嬢。この前の三人娘はなにもんだったんでしょうね」

「さぁな……」

「まぁ、あの子たちに無理矢理手渡されたブツも良質だったもんでさっさと売り抜けましたが……総取りでいいんですかい？」

ほんと、わけわからない連中だったよな。

外人のくせに日本語うまいし、一人は酒乱な上、体にでかい傷が

あって、しかも同姓愛者だ。
おまけに顔もいいしな。
最初はどっかのモデルかとも思ったけど、そうかと思えば粉もんの処理頼まれるし。

「渡すにもどうやって会えばいいんだよ」
「おや、携帯の番号は交換してないんですか？」
「むやみやたらとカタギを身内にするわけにもいかねぇだろ……」

……今日は写真ができたから受け取りに来いって堀之内に呼びつけられた。
今は銀二の運転する車の中だ。
結局、連絡先もなんにも交換しなかったけど堀之内には私の友達ってことにしてたから私がまとめて渡す、みたいな感じ。
まあ、写真なんて何枚あってもいいもんだしな。
……不破は、どうしてんのかね。
良くも悪くも三人の中で一番印象に残ってる。

「お嬢、付きましたよ」
「おう」

店の中にいた堀之内に軽く手を降るとパタパタとかけよってきた。
手にはすでに写真が入ってそうな封筒を持っている。
ん、そういえばあいつらが個人個人でとった写真も渡されるのか？
普通にいらねぇけど受け取らないのも変だよな……雑誌に載せるらしいから売ることもできねぇな。
組内で売るか。
小遣いくらいにゃなるだろ。

「はい、これ」

「ありがとうございます」
「お茶でもしてく？」
「……それでは、お言葉に甘えさせてもらいますね」

……お嬢様学校だとこういうのが割りと頻繁にある。私としては受け取ったらさっさと帰りたかったんだけどな。
ただ、断っても後腐れがないってところはいいことだな。

「で、唯華。この前の三人、本当は友達じゃないでしょ？」
「え……その……」
「まぁ、助かったから別にいいんだけどさ」

なら気づいても言うなっての……！

「ねぇ、あの人が白着た理由、やっぱりわからない？」
「えぇ……」

本当は知ってる。
本人に聞いたからな。
……私は好きな人とは一生結婚できないみたいですから、そう言ってた。
それが女同士っていう法的な制限って意味なのか、それとも私が知らないところでなにか――失恋に似たような――があったのかは分からない。

「あの、どうしてそんなことを？」
「ん？　んー……この写真、見て」

堀之内が取り出したのは不破がピンで写ったもの。
純白のドレスには不釣り合いな無機質で無感動、そんな玲瓏な表

情が写っていた。

「……これは？」

「あの人のＮＧ写真。すぐこういう顔しちゃうの……ドレスを着たら照れたり嬉しかったり、お客さんはみんな必ず笑うのに」

自然には笑わなかったから気になってるってことか？

……まぁ、不破が言ったように好きな人との結婚ができないってことは、ウェディングドレスは自分の恋の限界を象徴するものかもしれないからな。

笑えないのも仕方ないかもしれない。

「ううん、私が気になってるのは一人ではこうだったのに、皆で撮ったときだけは本当に幸せそうに写ってるってこと」

もう一枚、写真がテーブルの上に置かれた。

そこに写っている不破は確かに満面の笑みではないものの満足しているように、薄く微笑んでいた。

でも……

「これ、幸せなのでしょうか？」

「え？」

「いえ、なんでも……」

これは、満足してるけど幸せじゃない。

いや、違うな。

自分が今以上に幸せになるのを諦めて、そこで満足しちまった顔だよ……

……バカだな。

手を伸ばせば、届くことだってあるのに……

65. Un mariage heureux heureux.（4）（後）

後日譚は蛇足だったような気もするのですが描くだけ書いときました。

頭溶けてる・・・

66. Vol ? Allemagne. (前書き)

予告した『Je le visite dans le pyjama.』の前部分です
予約忘れてた！

いつもどおりギクシャクする始まり方（

66. Vol ? Allemagne.

「よーし……全員揃ったな。それじゃ搭乗始まるまで待つぞ！」

うぅ～……眠いです。

ねむねむです……

今日は朝早くからの飛行機にのってドイツまで飛ぶということで……夏なのにまだ日も昇ってません。

いえ、搭乗時刻よ一時間くらい早くに空港についていないと余裕をもって行動できないのは分かってますけど……最低でも搭乗時刻の三十分前にはいないと迷惑かけちゃいますし。

あぁ、私たちはドイツからの招待ということでＶＩＰ待遇？　そんな感じみたいです。

もう公的な立場を持っていない私の分までお金を出して招待してくれるなんて太っ腹ですね。

「あ、搭乗始まりましたよ。行きましょうか？」

「……アリサさん、あちらの列はなんですの？」

セシィに言われて隣の搭乗口を見てみれば確かに長蛇の列がありました。

……なんなんでしょうね？

「んー……限定品でも売ってるんじゃないですか？」

「あぁ、なるほど！　確かにそう考えると納得ですわね」

「日本人はミーハーらしいですから限定品とかキャンペーン中という言葉に弱いんだとか」

でもこちらの方が空いてるんですし、ああまで極端に偏るもので

すかね？

「二人とも……恥ずかしいから静かにしてなさい」
「む、鈴ちゃん、いきなり何ですか？　失礼しちゃいます！」
「あのねぇ、私達は招待されてるんだから普通の人たちと同じゲートを使うわけないでしょ。ドイツの見栄よ」

なるほど……貴賓席、みたいなものでしょうか？
確かに招待客に普通の一般人と同じところを使わせるなんてことは貴族的な考え方がまだ多少残っているヨーロッパ

「リン、嘘教えちゃダメだよ」
「いやいや、いくらなんでも信じたりは……」
「してるよ？」

ん？
何で鈴ちゃんとシャルは私とセシィを残念そうに見るんですか？

「あのね……こっちがファーストクラス用で、向こうがビジネス・エコノミークラス用の搭乗口ってだけだよ」
「エコノミークラス用――」
「ほら、エコノミークラスはファーストクラスとかビジネスクラスと比べて人数が、」
「――ってなんですか？」

シャルが困ったような顔のまま、ピシリと固まってしまいました。
飛行機って仕事する人のためのビジネスクラスと、それ以外の人のためのファーストクラスしかないんじゃないんですか？
それにエコノミー（経済的）って言いますけど、そもそも飛行機ってそんなにお金がかかる乗り物でしたっけ？

「うわぁ……もともとは貧乏だった僕には一生言えない言葉だね……」
「まったくね……」

しゃ、シャルが怖いです……助けて鈴ちゃん！　まで怖い顔してます！？

……わ、私、なにか二人を怒らせるようなことを言ってしまったのでしょうか？

「わ、私が主催だというのにお前たちは……」

あれ、ラウラさん……ごめんなさい、忘れてました……
口に出していったらいじけそうなので言いません。

「まぁ、いい。それよりも向こうの二人をだな……」
「鈴ちゃんに任せます」
「私はセシリアに任せるわ」
「ならわたくしはシャルロットさんに」
「じゃあ僕はラウラに任せるよ」
「「「「「……じゃーんけーん、」」」」」

ぽんっ、と出された手は私を除いてみんなグーです……殴るために固く握りしめられた拳（グー）に指をたてて平和（チョキ）を説いても勝てるわけないですよね……

……私達がじゃんけんをしてまで人に丸投げしようとしていたものは、ここにいない人たちのことを思い出せば一瞬でわかります。

つまり、私たちの少し後方で、

「お、おお、俺、ファーストクラスなんて初めてだぞ！」

「い、一夏、大丈夫だ、私も処女(はじめて)だから一夏が童貞(はじめて)でも気にしないぞ！　って何を言わせる！？」
「え、なに！？　何で箒が怒ってるんだよ！？」

おのぼりさん状態と言いますか……できれば他人のフリをしたい織斑君と篠ノ之さんです。
だいたい二人とも飛行機は初めてじゃないでしょうに……
織斑君はヨーロッパで開催された第二回モンド・グロッソで一度誘拐されてるんですから少なくとも飛行機に乗っているはずですし、篠ノ之さんも束さんと行動を共にしていたときは国内便くらいなら乗っていたはずです。
というか初めてでも子供じゃないんですから分別をですね！

「……早く行きなさいよ」
「これなんて罰ゲームですか……？」

鈴ちゃんに背中を押されて（極めて物理的に）歩を進めます。
あと四歩、三歩、二歩……一歩……！

「あ、あのっ、ふたりともっ！」
「おお、不破さん！　不破さんはファーストクラスは初めてじゃないんだよな？」
「え、ええ……？」
「そいつはよかった……そういう人がリードしてくれると戸惑わなくてすむからな」

うん、実はさっきから気付いてたんですけど、織斑君は緊張はしていてもマトモなんですよね。
問題は……

「一夏ぁ!?　まさか、処女（はじめて）は面倒とか……そういうことを言うのか!?　私は、いつか一夏に捧げられたらと思って操をたてていたんだぞ!?」
「あの、篠ノ之さん……？」
篠ノ之さんが壊れすぎてます。
……どうしてこんなことに？

「落ち着いてください」
「落ち着けるか！　だいたい不破！　お前、処女じゃないのか!?　ヤリ●ンなのか!?　ビッチ!?　ががばなんだな!?」
「ふぇっ…」

お、おおお、大声でなに言ってるんですかぁ!?　しかもこんなに人の多いところで!?
ち、違いますからね！
私はビッチでもヤリ●ンでもがばがばでもないですからね！
あぁ、オバサン、あんなに若いのに、今の子ったらやぁねぇ、とか言わないでください！
そっちの男二人組もどっちが声かけるかでじゃんけんしないでください！　私は尻軽じゃないんですから！

「初体験はいつなんだ!?　相手は!?　や、やはり、痛いのか？　血とか沢山でたのか？」
「あぅ、あぁぅ～……」
「そ、その、初めてでも絶頂に達することができるというのは本当か……？」
「ふぇ……し、知りませんよぉ！」

もう、恥ずかしすぎて泣けてきちゃいます。

なんで私が周りのお客さんからビッチ扱いされるんですかぁ……
私は、まだ乙女です……失恋したばかりなのに、この仕打ちはあんまりです……

「お、思い出すだけで泣いてしまうほど痛かったのか!?　す、すまなかった……それほどだとは予想していなかった……」

そうじゃないって言ってるじゃないですか！
もう……誰か助けてくださいよぉ……

「とりあえず、箒は黙っておけ。いいな？」
「一夏？　これは大事な、」
「いや、ここでする話じゃないだろ……」

おぉ？
織斑君が惨状に気付いてくれたみたいです。
篠ノ之さんも訳のわからないくらいぶっ飛んでましたからね。よかったです。
……というか、見て見ぬフリなんてみんな酷いですよ？
だから、おかえしです……

「では、二人とも行きましょうか！」
「ふ、不破さん？　聞こえてるからそんなに大きな声で、」
「早く行かないと、ファーストクラスの搭乗口で待っているセシィとシャルと鈴ちゃんとラウラさんがくたびれちゃいますからね！」

びくっ、と四人が竦んだ気配がしました。
私を迷惑になるから、と注意しようとしていた織斑君も私の意図に気がついたようで、

「そうだなー！　皆はどこだ？　茶髪でツインテールの鈴はともかく、金髪のセシリアとシャルロット、銀髪のラウラは目立つからすぐ見つかるはずなんだけどなあ！」

びくびくっ、とさらに動揺した気配が伝わってくると同時に、周りの搭乗客の皆さんが四人を見つけ始めたのが分かります。

ふんっ、薄情な皆さんは私の恥ずかしさを思い知るといいんです！

ほんとに、ほんとーに！　恥ずかしかったんですからね！

でも、

「……満足しているはずなのに、どことなく虚ろな気分になるのはなぜでしょうね」

「……結局、俺達が同じ目で見られるのは変わってないからじゃないからかな？」

無駄に被害を広げただけですからね……

二人で溜め息をついていると篠ノ之さんが先頭にたって歩き始めました。

「おい、二人とも何をしているんだ？　早く他の四人に追い付くぞ……心配するな、二人とも見失っていたみたいだが私が四人の居場所を見つけておいた」

私には篠ノ之さんが何を言っているのかが一瞬理解できませんでした。

この人はさっきの私と織斑君が周りに聞こえるように話した内容を本当のことだと思っていたようです。

篠ノ之さん……残念すぎます。

「箒を置いていけばいいんじゃないか、と一瞬でも思った俺は怒ら

れるべきかな？」
「私も同じこと思ったので当然のことなのでしょう」
私と織斑君を憮然とした表情で待っている篠ノ之さんを見て溜め息を吐かずにはいられませんでした。
◇
「もう……アリサのいじわる。乗り込むまでずっと見られちゃったじゃん……」
「いじわるだったのは皆さんの方です……私、泣きそうになっちゃうくらい恥ずかしかったんですからね」
「う……それは、ごめんね？」
「……私も、ごめんなさいです」
飛行機での私の隣の席はシャルロットでした。
隣といっても間に何人か座れるだけのスペースが空いてますけどね。
ちなみに他はラウラさんと織斑君、鈴ちゃんとセシぃ、そして篠ノ之さんがぼっちです。
もともとはラウラさんがぼっちになると自分で言っていたのですが、強制的に篠ノ之さんを反省させるためにこうなりました。
私達が進行方向から見て右側の後ろから三列分、篠ノ之さんだけ左側の一番前なのできっと寂しいことでしょう。
親切なおじさんに頼んで席を交換してもらってまでして篠ノ之さんのぼっちを演出しました。
国際線が初めてな篠ノ之さんはキョロキョロと不安そうで、まさにざまぁみろ、というやつです。
「でもアリサも怒りすぎだよ？　さすがに席を一番遠くにすること

はなかったんじゃない？」
「う……それは……」
確かに、ほんのちょっぴり罪悪感を感じます。人前で辱しめられたので容赦はしませんけど。
「でも、人前で非処女だとかヤリ●ンだとか言われたんですよ……？」
「まぁ、そうだけど……少し意外かな」
「え？」
「アリサって他人からどう見られるかなんて気にしてないと思ってたから」
「ええ、気にしません……でも……」
シャルが聞いてたじゃないですか……私、そんなに淫らじゃないのにシャルにそう思われたらって思って……
失恋しても、シャルのことは好きなんですからね？
それなのに、あんなこと言われたら恥ずかしくて……
「……よく分からないけど、篝に謝らないとダメだからね？」
「篠ノ之さんが悪いんですよ……？　シャルだって、言われたら……」
「でも篝に悪気はなかったでしょ。でもアリサは悪気があったんじゃない？」
ありましたよ……あるに決まってるじゃないですか。
あんなことがあったら……あんなことがあっても、私は怒っちゃダメですか……？
「……傷ついてるのは、私もなんですよ？」

「それでも、だよ」
「……分かりました」

篠ノ之さんが謝ってこなくても謝りましょう。
私が泥を被って、篠ノ之さんをいじめた悪者になりますよ。
別に気にしたりなんかしません。私が悪いのも知ってますし……
それに、私が我慢すれば全て丸く収まるのもいつものことですし。

「アリサはいい子だねー。傷ついた分はあとで僕が慰めてあげるから！」
「……しゃるのバカ」
「ん？」
「なんでもないです」

好きと言うことも我慢しなければいけないのにシャルに慰められたって、辛くなるだけですよ。
それなら、いっそのこと突き放してくれればいいのに……同じ辛さならそっちの方が諦められるかもしれないだけ随分マシです。

ぽんっ

「あ、シートベルトのマーク消えましたね……」
「アリサ、トイレ？」
「いえ、篠ノ之さんと席を交代しようと思います」
「えっ……と、そこまでしなくてもいいと思うけど……」

それは、私に隣に座っていてほしいということでしょうか？
例え、さっきの篠ノ之さんと比べたら、という前提があったとしても嬉しい……
ですが、

「いじわるを謝れ、と言った割にいじわるをやめるのは止めるんですね」
「あ……あの、アリサ、違くって……その……」
しどろもどろになるシャルを見て、少しでも気分が良くなった自分に自己嫌悪します。
シャルは私と篠ノ之さんを選んだ訳じゃなくて、私が一人になってしまうことを気遣っただけなのに……
でも……いっそのこと、シャルが転校してきたときくらいまで関係を壊滅的にできれば、未練もなくなる気がします。
実は、もうシャルを守る必要すらありませんから。
束さんのお陰で光学迷彩の解析も進みましたし、あと数ヵ月もすれば正式にフランスの第三世代型のプロトタイプが組み上がるでしょう。
その時にフランス唯一の代表候補生であるシャルロットはＶＩＰになります。
もう誰も手が出せなくなるような立場になるので、私は晴れてお役御免となるわけです……いえ、違いますね。もとからそれが目的だったのですから任務完了というべきでしょう。
だから、私がシャルの近くにいる理由は友達だからというものだけです。
私は、シャルと友達でいるのは我慢できません。そんな中途半端な宙ぶらりんの状態では私が壊れてしまいそうです。
……シャルが友達より進んだ関係を望んでいなくて、私が友達であることを拒絶するなら、答えは一つだけです。
「篠ノ之さん、いじわるをしてごめんなさい。席を交換しましょうか」

私から、距離をおくだけ……

「あ……」

「む？　あ、そうか……ん、気にはしていないが、心細かったので代わってくれると助かる」

気にはしていない……ですか。

どうして、まるで私だけが悪いみたいに……いえ、やめましょう。

せっかくラウラさんが計画してくれたドイツ旅行なのに、私が不機嫌でいたらラウラさんも気にしてしまいますし、他の皆さんも楽しめません。篠ノ之さんだって悪気はなかったんですし……えぇ、あったらこの程度では……

「……はぁ」

移動中は寝ていましょう。

いい夢が見られれば優しくすることもできると思いますから……

◇

「ん、箒、席換えすんの？　ならシャルロット、セシリアと席交換してくれない？　ちょっと相談事があるから」

「え？　うん」

「って、わたくし聞いておりませんわよ！？」

いーから、いーから……

セシリア、あんたは箒に説教する係よ。

私はシャルロットを反省させるから。

全く、どいつもこいつも世話が焼けるんだから……別にドイツとどいつを掛けたりなんかしてないわよ！

……　はぁ、アリサもシャルロットも不器用なのよ。
アリサが失恋したーなんて顔してるのもシャルロットが余計なこと言ったからだってことも知ってるわよ。
シャルロットはあのヤクザっ娘の言ってたことを確かめるために何かしただけってのもね。
もう、落ち込んだアリサって何から何までしてあげないとダメなんだから自重してほしいわ。丸一週間、母親になったような気分にだったのよ？
あんたそんなんで一人暮らしできるの？　って何回言ったんだろうなんて真面目に考えたわ。

「それで、相談事ってなにかな？　僕じゃ役に立たないかもしれないけど……」
「相談事があるからってのは嘘。聞きたいことがあったの」
「……うん。それで？」

一瞬、シャルロットが私の顔をぽかんと見つめたけどすぐに私からシャルロットに話したいことがあったからこその嘘だったって気付いてくれたみたい。
こういうところは鋭いのに……

「アリサのこと、好き？」
「……友達としてって意味なら」
「私たち専用機持ちの中だと上から何番目？」
「いや、順番なんて……」
「何番目？」
「……多分、一番大切な友達。でも、それは国が同じだし」
「理由はいいのよ。別に順番をつけたことに言い訳なんかも要らない。私だって一夏を除けばアリサが一番よ……それでいいの」

一番大切だって思ってるなら……まぁ、まだいい方ね。
でも、それならどうしてアリサを優先してあげないのよ。別に贔屓しろってわけじゃないんだけど……うーん、

「そう、もう少し……アリサのことも考えてあげてよ」
「か、考えてるよ……！　だから、沈んでたアリサも最近ちょっとずつ笑うようになったし……」

考えられてないって……そう伝えられたらどんなに楽かしらね。
でも、そんなこと言えない。
そうすれば、またアリサがシャルロットに恋してるってことを理解させないといけないし、そうなったら二人の関係はさらにぎこちなくなるのは分かりきってるし。
アリサは、もうシャルロットに嫌われようとしてるみたいに見える。
だから、シャルロットを非難するようなことを言って席を動いた。

「シャルロット……あんた、初めてアリサにキツいこと言われて動揺してるでしょ？」
「……うん」

さっきのアリサはシャルロットの矛盾を捉えて責めていた……うーん、嘲笑（せせらわら）っていた。
行動事態はよくないことだけど……

「アリサも、やっと自分の思ったことを言えるようになったのよ」
「でも、酷いことを言うアリサなんて……」
「自分勝手」
「え？」

どうして、アリサに謝らせたのよ……なんで、我慢させるのよ。
また、自分だけが痛みを堪えれば全部がうまく回るなんて勘違いしちゃうじゃない。

「我慢させるつもりは、」
「させたじゃない」
「でも、なにも分かってない箒を謝らせるよりアリサに謝ってもらった方が……アリサだって旅行中の空気が悪いのは嫌だと思ったし……」

確かに、それが一番うまく回るわね。
でも、アリサは不必要に傷付いた……それも、あの子が大好きなシャルロットに心を抉られて……

「シャルロット、あんたがアリサに言った謝りなさいは誰のため？」
「それは、箒とアリサが早く仲直りできるように……」
「嘘ね。あんたは空気が悪いのを嫌って手っ取り早く払拭しようとしてただけよ」
「ちが……！」
「だって、それなら箒をどうにかしてからでもよかったでしょ？」

箒も謝る形にすれば時間はかかっただろうけど円満に終わったと思うんだけどね。
まぁ……誰が悪いとも言えないわね。
ラウラのためにもあんまりギクシャクしてほしくないけどさ。

67. Un foss? profond（前書き）

「深い溝」

すれ違ったら離れて行くだけですね。
たまには振り返ることも必要です。

67. Un foss? profond

「さて……えー、ここからはドイツ特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼのための設備が揃っている。宿舎も兼ねているが機密事項も多いため黙って探検とかはしないでくれ」
「いや、子供じゃないんだし誰も探検なんて、」
「私は入隊直後に探検して遭難したぞ？」
「それって、ただの迷子じゃない……」

ラウラさん、というよりドイツが用意した私達の宿泊場所はシュヴァルツェ・ハーゼのための訓練施設でした。
なんでも他の隊員もここで暮らしており、さらにはＩＳ用の新装備などの開発・実験もここで行われているとか。
その為に用意された敷地はＩＳ学園とほぼ同等です。
……歓迎されているようですけど、こうも堂々とスパイになりえるメンバーを招き入れてしまうなんてドイツ軍部は何を考えているのでしょう？

「あぁ、しかし見学は私かクラリッサ……おい、クラリッサ！」
「はっ！　シュヴァルツェ・ハーゼ副隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」
「うむ。私かクラリッサに言ってくれれば便宜を図ろう」

って、見せちゃうんですか！？
機密って言葉がドイツの辞書になかったりしますか！？

「隊長の御学友の皆様、私のことは気軽にクラリッサお姉様、もしくはただ単にお姉様とお呼びください」

……本当に、ドイツは大丈夫なんですか？
いくらライバル国だとはいえ友人の国ですから心配になります。

「あぁ織斑一夏、貴女は私ではなく必ず隊長に申し出てください。必ず、ですよ」
「あ、あぁ」

……なるほど、クラリッサさんはラウラさんの応援ですか。
せっかくのドイツなのでラウラさんのために鈴ちゃんを織斑君にぶつけるのは控えてましたけど……ふふふ

「鈴ちゃん、遠慮はいらないみたいですよ？」
「……なんのはなし？」
「いえ……クラリッサさん、それぞれ応援する相手は違うみたいですが仲良くしましょうね？」

鈴ちゃんとラウラさんをそれぞれ動かして、正々堂々と織斑君争奪戦をしようではありませんか……！
先手は譲りますよ。
学園では鈴ちゃんがリードしてましたからね……

「なるほど……貴女がアリサ・フワですか。生身での戦闘においてはあのタテナシにも負けないという……いいでしょう」
「しばらくはお好きにどうぞ。後からでもひっくり返せますから」
「……あとで泣いても知りませんよ？　これでも副隊長ですから味方だけでなく敵でさえも思惑通りに動かすだけの経験はありますからね」
「あまり織斑君の鈍さを見くびらない方がいいですよ、とだけ言っておきます」
「貴重な助言、感謝します」

「……私達の滞在期間は三泊四日。三日目に織斑君とデートを達成した方が勝者としましょうか」
「いいのですか？　それでしたらドイツに詳しい隊長の方が有利ですよ？」
「だからこそ、他の人も出掛けるときにラウラさんを誘うでしょうね？」
「ふふ、アリサ、貴女とは仲良くしたいですね」
「こちらこそ」

これは、楽しくなりそうです。
癖の強いことで有名なシュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちを纏めてきた手腕、見せていただきましょう。

「アリサ……って、なに笑ってるのよ？」
「いえ、鈴ちゃんは大船に乗ったつもりでいてくださいね？」
「や、意味わかんないし」

分からなくていいですよ。
自分の恋が勝負の対象になってると知ったら怒っちゃうでしょうからね。

「で、だ。みんなが泊まる部屋なんだがあいにくと十分な部屋数がなくてな。学園と同じように二人一組になってしまう。部屋の希望があればいってくれ」
「むむむ……」

好きな人と……ですか。
正直……困ります。
シャルと同じ部屋がいいといえばそうなのですが……酷いことを言ってシャルを傷つけない自信がありません。

自分でも分からないくらい、シャルに対して怒ってるんです。
……いえ、違いますね。
私だけがシャルに諭されて、裏切られた気になってるんです。
……不安になったら抱き締めてくれるって、言ったじゃないですか……

「アリサ、僕と、」
「ラウラさん！　同じ部屋にしませんか？　そうしましょう！」
「え？　あ、しかしシャルロットが……」
「いいですよね？　シャル？」
「う、うん……」

……ごめんなさい。
今は無理です。
きっと、同じ部屋にいる方がシャルを悲しませちゃいますから。
好きなのに……好きだから、私だけを優先してほしいなんてワガママですよね。
シャルと私は、ただの、友達ですから……

「シャルロット、同じ部屋でいい？」
「うん……」

今だって……シャルが悲しそうな顔じゃなくて戸惑ったような顔をしているのを不満に思ってるんですから。
なんで私だけが振り回されないといけないんですか……そう、思ってます。

「アリサ！」
「……シャル？」
「あ、あとで……よければだけど、二人で観光しない？」

おそるおそる……まるで毒蛇を捕まえようとしているかのような雰囲気でシャルが誘ってくれました。

……そうやって、私の気持ちを考えないままに機嫌を直させようとするから！

「私の気持ちを利用しないでくださいっ！」

自分でも驚いてしまうくらい、私の声には怒りが含まれていました。

身を竦めたのはシャルだけではありません。

……ちょっと優しくすれば仲直りできるなんて、思わないでください。

私は……シャルの言うことならなんでも聞くわけじゃないんですから……！

シャルも、もう私なんていらないでしょう？

もう誰も、シャルを損なうようなことはしないんですから……シャルを守る私は、もう、いらないじゃないですか……

友達なんていう中途半端な誤魔化しでは、もう我慢できないんです……

恋人か他人かしか（オール・オア・ナッシング）、私の心の平穏を保てないんです！

だから……シャルなんて……

「もうシャルロットなんて、いりません！」

「……そっか。アリサ……ごめんね？　あと、今まで、ありがとう……」

……なんで？

なんで、怒ってくれないんですか……？

どう考えても、私が怒りすぎているのに……！

そんな顔で、謝られてしまったら……
そんな声で、お礼を言われてしまったら……
もう後戻りできないじゃないですか……！

「……大嫌いです！」

走り出した私を追いかけてほしい、腕を掴んで引き留めてほしい。
そんな、調子のいい願いは――

「あ……」

――叶いませんでした。
……当たり前ですよね。

◇

「……どうして？」

どうして、こうなっちゃうんだろ？
僕はアリサと仲直りしたかったのに……アリサは優しいから、僕が仲直りしたいっていうのが分かってくれてると思ったのに……
もちろん、謝る気だった。
でも、皆がいる場で謝ったら、アリサはなにも言わずに許してくれちゃうと思ったから……だから、部屋でゆっくり話して、アリサが言いたいことを全部聞いて……僕とアリサが真正面からぶつかるチャンスだと思ったのに……
そうすれば、今まで以上に仲良くなれると思ったから……

「なんで、離れちゃうんだろう……」

僕が、アリサに甘えてたから……
アリサは我慢してくれるって、どこかでそんなズルいことを考えてたから……いらないって言われて当然だよね。
だって、友達だったら普通はそんなことしないもん。
今までもアリサに負担をかけてたのに、それを感謝するどころか当然だと勘違いして……自分からなにかをしてあげることはなかったのに、なにかをしてもらうことだけは笑顔で受け入れて……嫌われちゃうのも、当然。

「シャルロット、大丈夫？」
「リン……もう、アリサの笑顔を見れないかもしれない……」
「そんなこと……」
「いらないって言われて、最後だって、だからありがとうって……」

本当はあんな別れの言葉みたいなこと言いたくなかったのに……！
嫌だって言って抱きつきたかったのに……でも、アリサが本心から言ってるのが感じられたから……もう駄目だと思ったら……
沢山のことをしてもらって、返せたのが結局は感謝の一言だけなんて……僕って、本当に酷いね。
そもそも本当に感謝してたかだって怪しいよ……

「僕は、アリサの近くにいない方がいいのかな……？」
「シャルロット！　あ、アリサだって少し興奮しちゃってるだけだから……ね？」
「ううん……いらないって……言われちゃったもん……」
「はぁ……あれが本心なわけないでしょ　！　少し考えればわかるでしょ！」
「分からないよ！」

アリサが、僕みたいな人間を必要とする理由なんて……

「優しさだけを求める僕だよ？　アリサの負担にしかならない僕なんだよ？　いらないに、決まってるよ……」
「そんなわけっ、」
「なんで、言い切れるの！？」
「それは……だって、アリサはあんたのこと……その……」

ほらね、やっぱりアリサが優しいから友達でいれたんだよ。
そのアリサが僕を必要としないなら……僕ができるのは、アリサの視界に入らないようにするだけかな……
きっと、僕を見たらアリサの方が気にしちゃうからね……
アリサが許してくれるまで、いつまでも、そうしよう。
アリサが僕を嫌っても、僕にとってのアリサは大切な友達だから。
……アリサは初めて僕のことを本気で守ってくれた人だから……

「シャルロット」
「なに、ラウラ……？」
「アリサと話しにいかないのか？」
「行けるわけないよ……いまさらどんな顔していけっていうの……？」
「そうか……なら、アリサを正式にシュヴァルツェ・ハーゼにスカウトさせてもらう。確か、アリサがシャルロットを守らなければいけないからスカウトしてはいけないだけだったはずだな？」
「……僕には、関係ないよ。アリサが選ぶ問題だもん」

……僕の顔を見なくてすむなら、アリサにとってシュヴァルツェ・ハーゼに属するっていう選択もいいかもね……

◇

どうして、あんなことを……

シャルはなにも悪くないのに……きっと、嫌われちゃいました。

「当然の罰ですね」

あんな、別れの言葉を言われても仕方ありません。

シャルは私のことを受け入れてくれているのに、私だけを優先してほしいなんて思うから……

だいたい、シャルは男の人と結婚したいって言ったんです。

なのに、シャルのことを諦められずにズルズルといつまでも引き摺っていた私が悪いんです。

私の気持ちが知られないで、否定されないで、友達のまま失恋できただけでも運がいいと思わないといけなかったのに……

……そもそも私がワガママ言える人間ですか？

体には醜い傷痕があって、人も沢山殺していて、その上、嫌われたくないという不純な動機で周りを優先していた私がワガママを言うことなんて許されるわけないじゃないですか……

シャルに見てもらえる……触れてもらえる……それすら身にあまる幸せなのに欲張ってしまったから……

それなのにいらないとか大嫌いとか……本当に、一緒にいる価値がない私がなにを傲慢な……何様のつもりですか。

本当なら、私みたいな人間から好意を持たれることすら嫌なはずなのに……シャルは、私を受け入れてくれて……

「自分は悪くないなんてことに拘って……私が我慢するのは当然じゃないですか」

だって、それしかできないんですから。

シャルは優しいから気にしてくれているでしょうけど……こんな私が近くにいたら、これからもシャルに迷惑かけてしまいます。

だから、仲直りしたいという気持ちも、シャルの笑顔を見たいという気持ちも全部封じ込めて我慢しましょう。
シャルを煩わせないために、シャルに会わないようにしたほうがいいかもしれませんね……
それでも、もしシャルが許してくれるなら……

「アリサ、入るぞ？」
「はい」
「……」

部屋に入ってきたラウラさんが私の顔を心配そうに見つめてきます。

「なん、ですか……？」
「あ、ああ。アリサ、お前を正式にシュヴァルツェ・ハーゼにスカウトしたい。席もすぐに用意できる……どうだ？」

ドイツの軍部に……それなら、シャルから距離をおけますね。
シャルだって、私みたいな恩知らず、これ以上は顔も見たくないはずです。
それならいっそのこと……

「あの……シャルは、何か言ってましたか？」
「お前の問題だ、と」

……やっぱり、引き留めてはもらえませんか。
シャルにとって私は便利な道具にすらなれなかったんですね……
そう思うと心が痛みます。
私にはシャルが必要だったけど、シャルは私じゃなくてもよかったってことなのでしょうか。

……神様。

……罪深い私のお願いなんて聞いてはくれないでしょうけど……

どうか、これからシャルに幸せな人生を与えてください。

「それで、アリサ、どうする？」

「前向きに……検討します」

さようなら……ごめんなさい……

67. Un foss? profond（後書き）

思った以上にシリアスー

68. Annulation du stress（前書き）

「ストレス解消」

アリサがとにかく暴れるだけのお話。
アリサが過剰に強いです。

文字数がＩＳ二次創作の中で三番目に……評価はそこまででもないのに（

68. Annulation du stress

「アリサ・フワ……？」
「はい？」

テラスの手すりに腰かけて空を見ていたら不意に声がかけられました。
振り返ってみればクラリッサさんが立っていました。なにやら心配そうな顔をしていますけど……ラウラさんになにかあったのでしょうか？

「体調が優れないのでしょうか？　それでしたら……」
「あ、いえ、考え事をしていただけなので……クラリッサさんこそなにか心配事があるように見えますけど、大丈夫ですか？」
「え？」

逆に聞き返したらさらに逆に聞き返されてしまいました。
いわゆるカウンター返しです。
もしかしたら自分がどんな顔をしているかも分かってないのかもしれませんね。

「あの、クラリッサさんはシュヴァルツェ・ハーゼの中で最年長なんですよね？」
「ええ、それがなにか？」

眉がピクリと動きましたよ！？
別に私はオバさんとか言うつもりじゃなくてですね……！
その、最年長だからこそ我慢していることもあるのではないかと思いまして……

「私でよければ……その、隊員さんには相談できないようなことがあるなら、私が相談に乗りますよ？」
「はい？」
「あの、えと、いつも、皆から言われるんですけど、自分のことが一番分かりにくいんだよって……そういうときは、他の人がいないと自分では悩んでいるつもりがなくても、いつまでも暗いままになっちゃうんです」
「はぁ……」

やっぱり、よく分からないって顔です。
私も、初めのうちは自分のことが分からないなんてことがあるわけないと思っていましたから、今のクラリッサさんの戸惑いも分かります。

「私には、クラリッサさんが悩んでいるように見えます。でも、自分では何に悩んでいるのか分からないでしょうから……私でよければ、最近あったことを聞かせてください。意識していなくても、不満なことがあれば自然と口から出てきてしまうものですよ？」
「なるほど……貴女は気を配ることができる人なのですね。リーダー向きの人格です」
「はい？」

えーと……あれ？
なんで私の話になっちゃったんですか？
ここはクラリッサさんが普段から感じている不満をぶちまける場面なはずですが……

「ですが自分に起きている問題を自覚するのが苦手ではいけません。そんな状態ではたとえ戦地でなくても怪我をしますよ？」

「はぁ……え？」

えと、私、もしかして叱られてます？

「鏡を見ますか？」

「へ？」

「先程、貴女が言った言葉の全てを貴女に返します」

「いったい、なんの話を……？」

「はぁ……」

えぇ！？

どうしてダメだこの子みたいな表情で溜め息つくんですか！？

私、なにか変なことしたでしょうか……？

「私ではどうしていいのか分かりませんが……そうですね。若い子たちの訓練を見に来ませんか？　同じくらいの年の人と話せば少しは気も晴れるでしょう」

「……？　まぁ、分かりました」

なにがしたいんでしょうね？

ただ、最初のような顔はしていないのでいいとしましょうか。

「あぁ、そういえば、三日目のデートを勝ち取らせた方は負けた方のお願いをひとつだけ聞くことにしませんか？」

「ええ、私はそれでも問題ありませんが……貴女はそんなことをしていていいのですか？　デュノア・シャルロットとの関係を最優先にする方が、」

「いいんです。私からはなにもできませんから」

シャルが、望まない限りは私から近付くなんてこと、許されませ

んからね。
私に許されているのは、心の中で願うだけ……誰かに言ってしまうことも、シャルに伝わってしまうかもしれないので不可です。
「まぁ、いいですが……では組手の特訓模様を存分に見ていってください」
◇
アリサ・フワ……不器用な子ですね。
自分が今にも泣きそうな顔をしていることにも気付かないで人のことを気にしてしまうなんて。
いったい、どういう環境で育てばあそこまで悲痛に対して鈍感になれるのでしょうか。
「踏み込みがっ……甘いです！　そして隙は正確に突いてください！」
「きゃっ！」
「ちっ！」
彼女に突進した一人が三メートルほど放り投げられる。その隙を狙った攻撃にも彼女は慌てずに投げの動きと連動した蹴り足で潰す。
……シュヴァルツェ・ハーゼの隊員ともあろう者たちが完全に稽古につかれてますね。
一発もダメージを貰わないまま多対一の戦闘を可能にするなんて……それも私たちは皆、眼球に補佐用のナノマシンを仕込んでいるのです。
それを事も無げに……
アリサ・フワ……彼女は私たちですら見えないものを見ているのでしょうか……？

「まだ、終わりじゃないですよね？　怪我はしていないはずですし」

……あれだけ派手に吹き飛ばしておいて怪我がないのも彼女の技量のお陰ですか。

もし、稽古を続行するために怪我をさせていないなら……鬼ですね。

最初の位置からほとんど動いていない彼女以外は全員肩で息をしているのですから。

あと数分も続ければチアノーゼを起こすものも出てくるでしょう。

「あれ、まだ十分も経っていないのに随分とお疲れですね？　ラウラさんならあと三十分は立ってますよ？」

ここで隊長の名前を出しますか……それは暗に隊長ですら勝てないということを言っているのでしょうが……意思を挫くためなら逆効果ですよ？

「はぁぁっ！」

「わわっ、と……そうです。その調子ですよ。必死になってもらわないと私も愉しくないですから」

なんと……たちの悪い方ですね。

もしかして、あれがストレス解消法なのでしょうか？

彼女は客人なわけですし、部下たちの特訓にもなるので止める気はありませんが、

「まだです、もっと速く！　……そうですねー……五分後に誰も立っていなかったら、私は全力でラウラさんの恋路を邪魔します……おっと、当てる気あります？」

隊長の恋がかかっているとなると部下たちには意地でも立ってい
て貰わないと困りますね。
最後まで立っていたものには……そうですね、一週間分の夕飯を
花丸ハンバーグにしてあげましょう。

「わわっ……っと、今のはちょっぴり驚きました。よーし、それな
ら私も張り切っちゃいます！」

五人がかりでもまだ余裕の表情ですか。
しかもこれから張り切り始めるだなんて……冗談ですよね？

「えいっ」

ぶぉん！

……おかしいですね。
視覚補佐用のナノマシンが故障しているのでしょうか？
人間が、真横に吹き飛びましたよ……？
あれは流石にもう立てないでしょう……

「あれ、久しぶりだと力加減が難しいですね……強く押しすぎまし
たか」
「押しただけで人があんなに飛ぶわけないでしょう！」

もしそうなら、喧嘩で押し合いっこする幼稚園児が死んでしまい
ます！

「クラリッサさん……？　まぁ、あれは押しただけとも違うんです
けど……そうですねー。例えば体を急に引っ張られたら踏ん張りま

すよね？」
「まぁ、そうでしょう」
「そうやって相手が体を引こうとした瞬間に押すんです。ダメージを与えるというより敵を遠ざけるための技ですね」
なるほど……つまりある意味では押された方も自分から後方に跳んでいるようなものなのですね。
「ちなみにこの技術を極めると……」
「極めると……？」
「このように……踊らせることもできますし」
彼女に掴まれた部下の一人がなぜかフォークダンスのように動き始めました
本人も戸惑っているのが見てとれるので、おそらくは彼女が微妙な力加減で押し引きしながら操っているのでしょう。
「まぁ、こんなの隠し芸レベルですけどね。あとは、こんなことも」
今度は彼女が高速で部下の体を触りました。
右側頭部を押し、右肩を下に押し、右腕を引っ張り、最後に右足を撫でた瞬間、部下が空中で半回転して落ちました。
……今のは空気投げという奴でしょうか？
中国のアクション映画か日本の格闘漫画の中の創作だと思っていたのですが……実際に見てしまうとは。
「達人なら視線と腕の動きだけで相手を転ばせるそうですよ」
東洋の神秘、ですね。
いえ、彼女自身も既に達人の域にいるのではないでしょうか？

彼女の生身での格闘は初見ですが、その中にあらゆる国の格闘技が取り入れられているのが分かります。現在彼女が使っている精緻な防御の技術は詠春拳という中国拳法由来でしょう。

避けることはせず、ただ部下たちの攻撃をいなしてダメージだけをゼロにしています。そしてガラ空きとなった部下たちの腹や肩などに一撃、それだけで倒していきます。

拳打も特徴的で握りしめた拳ではなく、掌での衝打か折り曲げた第二関節による突打を主としているようです。

衝打で内臓に打ち込み動きを鈍くし、筋肉の隙間への突打で腱を麻痺させるのでしょう。

倒された部下たちは未だに闘志があるにもかかわらず立つことが出来ないようです。

「あぁ、クラリッサさん。部下さん達の心配はいりませんよ？　二時間もすれば痛みも引いているはずです……あぁ、お昼ご飯は食べない方がいいかもしれませんね」

「あまり苛めないでいただきたいのですが……」

「いえ、思ったより歯ごたえがあるのでついつい興が乗ってしまって」

照れたように笑いながらも彼女へと向かう隊員たちを次々と倒していきます。

「残り三人ですね……一人が十秒稼げば五分も達成ですね。十秒だけです」

……無理でしょうね。

逃げ回るのなら可能でしょうが、我がシュヴァルツェ・ハーゼには逃げ出すような腰抜けはいませんから。時間稼ぎをしようという意思もないでしょう。

「あぁ、ここまで残っている三人には敬意を持って戦わせて頂きましょうか」
「は……？」
「いえ、ですから、」
「なっ！？」
「私からも動きますよ、と」

間の抜けた声を出し、一瞬でも戦闘のことを忘れた一人が飛び込んできたアリサ・フワに掴まり、そのまま放り投げられました。
縮地法、でしょうか？
少なくとも私の目には一足飛びで七メートルほどの距離を消費したように見えます。
もはや人間であるかも怪しい……

「投げるだけで終わりじゃありませんよー？」
「ひぅっ」

ドスン

あろうことか彼女は自らが放り投げた部下に追い付き、その肩を掴んで背中から地面に叩きつけました。
いやいやいやいや……今のはきっと見間違いです。流石に。
彼女がしたことは言うなれば自分で投げたボールを自分で掴み取るようなものです。
筋力や体幹を鍛えてどうこうなるような話ではないはずですよ？
普段ならば訓練で怯えた声を出すなどシュヴァルツェ・ハーゼの一員としてあるまじきことなのですが……許しましょう。
残り二十三秒。

「うわぁぁぁっ！」
「この戦力差に竦まず向かってくる気概は称賛に値しますが……」
「はっ！　……？」

果敢にも彼女へと向かっていったのはシュヴァルツェ・ハーゼの中で最も体格的に恵まれているリーゼ。
体格で勝っているので捕まえてしまえば勝てると踏んだのでしょう。
しかしその両腕は空を切りました。
思わず辺りを見回すリーゼですが……自分より速く強い相手と相対した時は止まってはいけないといつも言っているでしょう……左右を確認するより前に飛び退くべきです。

「上ですよ」
「！　ぐっ……！」

リーゼと交錯する瞬間、リーゼの足を踏み台に、そして肩を押して飛び上がっていた彼女が落下と同時にリーゼの後頭部に左足の裏をあて、踏み潰すようにしてリーゼをうつ伏せに押し倒しました。
……ごりっという嫌な音がしましたけど、障害とか残りませんよね？　というか生きていないと困ります。

「気絶しているだけですよ。夕飯の時間には目を覚ますでしょう」
「そうですか……まるで悪魔のような人ですね」

ついつい安堵の息と共にそんなことを言ってしまいましたが、言われた本人は、

「いえ、修羅ですよ」

と冗談めかして笑っていました。
残り十五秒。
秒殺という言葉がありますが……まさにその通りでした。
確かにこの動きをＩＳに乗りながらもできるのであれば近接戦闘においては向かうところ敵なしでしょう。
隊長の話ではＡＩＣも破られたとのこと……なぜ、彼女ほどの人物がＩＳ学園などという場にいるのでしょうか？　代表候補生としての立場もないのですから実地で利用した方がよほど有効だと思うのですが。

「やぁっ！」
「おっとっと……お姉さん、なかなかい蹴りしますねぇ。ですが、」

私の方が上手です、と彼女の口が動きました。
彼女の鋭い右からの上段蹴りが、

「！？」

途中で軌道を中段蹴りのそれへと変え腹部に突き刺さります。
そしてさらに体を横に倒してからの後ろ回し蹴りが肩に打ちつけられました。頭に当てられなかったのではなく当てなかったのでしょう……つまりは当てていたら死んでいたかもしれないと私に思わせるほどの威力でした。
残り六秒。
最後の最後で甘さが命取りになりましたね。

「まぁ、皆さんも頑張った方だと思いますけど、ほんの少し、六秒ほど時間が足りなかっ、」
「失礼します」
「わっ！？」

ならば後の五秒は私が引き受けましょう。
ズルいと言われるかもしれませんが誰も私が参加しないとは言っていませんからね。
隙だらけの右腕を掴んでそのまま一本背負いに持っていきます。
彼女に勝つには完全に気を抜くこの瞬間出ないと、

ふっ

「は……？」

彼女が微笑んだ気配とともに背中にかかっていた重みが消えました。

いえ、私はまだ腕を掴んでいるのですが……！？

「逆関節を極めていない一本背負いは競技用です。逃げられちゃうので肩か肘くらいは折れるように固めて投げた方がいいですよ？」

「っ！」

言葉とともに彼女の身体が私の下へと滑りこみました。
もし、誰かが見ていても私が投げたように見えたでしょう。
それくらい自然に、当たり前のように私の下で背中を付いていました……それも私の腹部にその足を添えるというオマケも付けて。

「まぁ、巴投も余り実用的ではないですけどね」

一本背負いをかけようとした勢いで流れた私の肩と腕を掴み、そのまま放り投げるようにして私の腹部に当てられた足で蹴り飛ばされてしまいました。
地面に叩きつけられず、受け身もとりやすいように投げられたの

でダメージは無かったのですが……
どうしたものでしょうね。
掴んでも逃げられるなんて魚を相手にしているような気分になります。

「でも五分は堪えさせてもらいましたよ……？」
「え？　あぁ……ほんとですねぇ」

試合に負けたとしても勝負に勝てばいいのです。
目的は達成したと言っても、

「どちらにせよ鈴ちゃんを勝たせないといけないのでラウラさんの妨害はしますけどね」
「えっ？」
「だって、勝負じゃないですか」

……どうやら、完全に乗せられてしまったようです。
考えてみれば彼女が隊長のことを妨害するのは当然のことです。
もっと早くに気が付くべきでした。

「まぁ、少しは優しめにしますよ。それじゃ、シャワー借りますねー」

ニコっと笑いながら顔の汗を拭い、そんな一言を残して訓練場を後にしてしまいました。

「あー……こほん。ＩＳの操縦者であること以外は普通の少女と変わらない彼女に一撃も当て得ることが出来ないだなんて、誉れ高きシュヴァルツェア・ハーゼの一員ともあろうものが恥ずかしくないのですか！？」

びくぅっと私の一喝に気絶していなかった部下たちが身体を縮めました。

「……と言いたいところですが、今日のことは仕方ありません。各自、気絶しているものを救護室に運んだあとは自由にすること。まだお昼前ですが今日の訓練はここまでです」

……明日から、少し訓練内容を厳しくするかもしれませんけどね。

69．Ｂｏｎｎｅ　ｎａｔｕｒｅ　ｈｕｍａｉｎｅ（前書き）

「人の優しさ」

ゲームをしましょう。
あれ、あっけない・・・と思ったらあなたの負けです。

ちょっとかっこつけてみるテスト（

69. Bonne nature humaine

「シャルロットさん……？　なにをしていますの？」
「セシリア……うん、ちょっと、上手くできなかった自分にがっかりしてただけ」
「……アリサさんのことですの？」

さすがだね……最近はリンばかりがアリサをフォローしてたけど、セシリアもやっぱりアリサの親友だから……
二人は、今の僕とアリサみたいな状況になったこと、あるのかな？
ないだろうね……普段から仲良しだもん。
二人と僕と、何が違うんだろう……？
セシリアとアリサは入学前からの知己だったらしいけど、本格的に仲良くなったのは学園が始まってからだって聞いたし、リンも僕より少し早く転校してきただけだし……
でも、もし僕とアリサがフランスで仲良くても、もし僕がアリサのルームメイトでも……今回のことは起きてたと思う。
僕が来て、すぐに喧嘩しちゃったからかな……？
アリサはそんな過ぎたことは気にしないと思ってたけど……ううん、それこそ僕の思い違いだよ。
前に、僕とアリサの接触禁止例が出たとき……二木さんは、まだアリサに対するいじめが続いてるって、言ってた。
その話題はアリサが嫌うから――それに、僕もしたくなかったから――一度も触れなかったけど、まだいじめが続いてるのかもしれない。
もしそうなら、過ぎた話だと思ってるのは僕だけかもしれない。
アリサからしてみれば僕との喧嘩が引き金で始まったいじめだから、まだ続いてるなら、その元凶の僕とは怒りたいのを我慢して仲良くしてくれてたのかもしれない。

僕さえいなければ……アリサはもっと楽しく学園生活を送れたのかもしれない。

優しくて、可愛くて……それに強い人だから、本来ならもっと人気でも不思議じゃない。それを邪魔したのが……僕。

アリサは火事が原因で小学校の友達を亡くし、そのときにできた火傷がもとで中学校でいじめを受け、結局フランスでは友達がいなかった。

そして、今度は自分が所属する会社の社長令嬢をサポートするために日本に送られて……しかもその僕が原因で周りから誤解されている。

……アリサはケーキ屋さんになってお客さんを笑わせるのが将来の夢だって、言ってた。

なのに、僕のために日本でＩＳのパイロットなんてことをやらされて……それで、戦争に行った。

結局、どこの戦場だったのかは分からないけど、重要なのは、それすらも、もとはと言えば僕が元凶だってこと。

そして……アリサは隠してるけど、アリサはもう誰かを笑顔にするためのケーキを作れない。

リンが教えてくれた。

僕がシャルロット・デュノアとして再入学したとき、アリサはケーキを作ってくれようとしたらしい。

らしい、というのは結局ケーキなんてなかったから、

リンの話だと、アリサが生クリームをホイップしてるときに急に泣き出したんだって。

生クリームが血に見えた、なんてアリサが言ってたらしいけどリンもその時はまさかアリサが戦争を経験してるなんて知らなかったから怖がりな子なんだと思って慰めたって……

でも、今になってみれば戦争で殺した人のことを思い出しちゃうんだと思う。沢山人を殺したことがトラウマになってて、誰かを喜ばせようとしたときに思い出しちゃうんじゃないかな……？

だから、アリサは自分がしなければいけないとき以外、自分から誰かを喜ばせようとできないんじゃないかな……少なくとも、人のためにケーキを作ることはできないんだと思う。

「ねぇ、セシリア」

「はい？」

「例えばだけど……自分の人生をめちゃくちゃにした上、夢まで壊されたら、その原因の人のことを許すなんてこと、できないよね？」

「……そうでしょう。もちろん一般論でしたら、ですわ」

「え？」

「アリサさんとあなたのことなのかは分かりませんけれど、アリサさんでしたら、そんな当たり前の感情で人を嫌うなんてこと、ありえませんわ」

「そんな……」

「あの子は……いいえ、あの人は自分の感情と他人との関わり合いを切り離して考えていますわ。だからアリサさんは特定の人物を憎んだりなんてこと、できませんわ」

どういうこと？

むしろ、誰かを憎まないなんてことこそ出来るわけがないよ。嫌なことがあったときに、誰のせいにもできないんじゃ辛すぎるよ……

だって、それって全部自分のせいだって思うのと同じことでしょ？

アリサは今までずっと、そうやって生きてきたの？

自分が嫌われて当然だって、そう言ってたのは嫌われたときのための言い訳じゃなくて……本心？

「それに、シャルロットさんも見たでしょう？　臨海学校の帰りのバスでの一件は」

帰りのバス……そう言われて思い当たる出来事は一つしかない。

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の操縦者がバスにやって来たときのこと。
彼女と戦った専用機持ち全員が彼女の登場に戸惑い訝しんでいたとき、アリサは真っ先に動いた。
あの一夏でさえ彼女に対して隔意を感じてたのに……アリサはすぐに立ち上がって深く腰を曲げて謝った。
そのことになんの疑問も持っていないかのように自然に……
そして、壊してしまってすみませんでした、と言った。
むしろ、相手の女性の方が驚いていた節すらあった。
……あれも、本気？
なら……

「アリサは……」
「なにかおっしゃいました？」
「ううん、なんでもない」

僕は……何を期待してるんだろうね。
アリサは僕を許してくれるかもしれないなんて。

「……はぁ」

ここまできて、まだアリサの優しさに甘えようとしてる……ダメだなぁ。
僕から、動くべきなのに……

「シャルロットさん。あなた、アリサさんと一対一で話す覚悟はありますの？」
「え？　……どうかな。分からない」

うまく話せるか分からない。
なにを言っても、アリサを泣かせちゃう気がする。

それは、嫌だ……って、あれ？　セシリア、起こってる？

「そこは、頑張ってみるとか言うべきところですわ！」

「え？」

……そう言われてみればドラマとかだと、不安だけど頑張る、とか王道だけど……

セシリアもだけどアリサもそういう王道っぽいのが好きだよね。

ここは○○する場面じゃないんですか！？　みたいに。

「で、どうですの？」

「え、えと、不安だけど頑張る……？」

「では、わたくしがセッティングして差し上げますわ。ぴ・ぽ・ぱー……と」

……ぴ・ぽ・ぱーと言いながらセシリアはただ目を瞑る。

プライベート・チャネルで誰かに連絡するのかな？

「あ、アリサさん？　今すぐ来てください。え、シャワー？　そうですか、それならこちらから向かいますわ……シャルロットさんが」

えぇ！　と叫びそうになってとっさに口を手で塞いだ。

いや、プライベート・チャネルでの会話だから周りがうるさくても関係無いんだけどね。

それでも話してる間は携帯電話と同じように方耳を塞いでみたり、お店なら外に出たりしちゃうこともある。

本来なら声に出す必要もないんだけど

「いえ、アリサさんの事情とか関係ありませんわ。え？　酷い？　わたくしのことですの？　……困りましたわ。わたくし、どうして

もシャルロットさんをアリサさんに会わせたいので……」

難航してる……？

そうだよね。僕よりも、アリサの方が僕に会いたくないだろうし……

「けれどシャルロットさんと会わせるのは酷いことなのですわね？

……そうですの。ではアリサさん、」

このあとセシリアが楽しそうに言った一言は僕を大いに驚かせた。

「なら、友人関係を解消しましょう？　わたくし、他人に優しくする必要はないと思いますの。では五分後にシャルロットさんが向かいますので服でも着ていてください。仲直りできればわたくしも友人に戻りましょう」

◇

「……アリサとシャルロットが仲違い、か」

アリサをスカウトしようとしているシュヴァルツェ・ハーゼの隊長としてなら喜ばしいことなのだが……どうにも、もやもやする。

二人とも友人だからだろうか？

互いの誤解を利用するようで心苦しい……

「待て……誤解か？」

状況をまとめよう。

まず、箒がアリサのことをびっちな淫乱女子高生だと叫んだ。

それに怒ったアリサが箒一人を飛行機内で一番離れた席にした。

それをやりすぎだとシャルロットが諫めて、箒に謝るよう言った。
それでアリサは自分は悪くないのに、とショックを受けながらも渋々謝罪、さらに箒と席を交換した。

「これが、第一の事件だな。第二が……」

部屋を決める際に仲直りの提案ともとれるシャルロットの誘いをアリサが過剰な態度で振り払った。
あれは……どう受けとるべきだろう。
私の気持ち、とは恋心のことだろう。シャルロットが意識していなかったにせよ、都合のいい存在として扱われるのが嫌だった？
そのあと、シャルロットなんていらないと、アリサがシャルロットを愛称で呼ばなかったのは別離を意識してのことだろうか？
あの発言に一番驚いていたのはアリサ自身だろう。
アリサは、すぐに撤回しようと思ったに違いない。
でも、それをシャルロットが遮って……

「ままならないな……」
「隊長？」
「いや、なんでもない」

近くに座っていた仲間が気にかけてくるがあまり話しても仕方のないことだろう。
軍人としてなら所詮はフランス内部の問題だと片付けるものだしな。

「それより、このまま彼女を引き抜いていいんですかぁ？」
「まぁ、後味は悪いだろうが……」
「いえ、そうじゃなくてですねぇ……ここだけの話、訓練中だったん若い子たちが彼女相手に飛びかかったらしくぅ……」

「……なるほど。トラウマになったか」
「ザッツライッ！」

嬉しそうに肯定するな。

……まぁ、アリサのことだ。必要なだけの手加減はしているだろう。

「えとですねぇ、一人は背中から床に叩きつけられ、一人は後頭部を踏み抜かれ、一人は肩口に強烈な踵落としを貰ってます。他にも気絶したのが四人、腱が麻痺して腕や脚が動かせなくなっているのが八人だそうでぇす」
「そうか」
「そうかって、そんな危険人物、隊に入れない方がぁ……」

その程度なら十分手加減している。

「ちなみに私は掌底でアッパーを喰らった上、顔面を捕まれて後頭部から地面に叩きつけられ、さらに頭を蹴飛ばされたことがあるが生きている」
「うげぇ……よく生きてましたね」
「レーゲンがなければ死んでいたな」

あの後、個人的にアリサに謝られたのだが……私も瀕死だったとはいえ殺しかけるのはやりすぎでした、ごめんなさい……そう謝られたときは肝が冷えた。
不謹慎だが、あの時、アリサが怪我していてよかったと思ったものだ。

「まぁ、隊長が負けるほどなんですから逸材なんでしょうけどぉ……なーんか、気に入らないっていうかぁ」

「ん？　お前が人を嫌いになるなんて珍しいな」
「まぁ、そうですけどぉ……ああいう素直じゃないというか捻子曲がっているというか、そういうのはちょっと……」

そんなものか。
確かに、こいつみたいな正直者にはアリサは組しにくいだろうな。

「ふむ……アリサにやられた部下の様子でも、」
「隊長！　失礼します！」
「騒がしいな。どうした？」
「それが……です」

このタイミングで……か。
そろそろだとは思っていたが……面倒なことにならなければ良いが。

「いいだろう警報を鳴らして全員集めろ」

◇

「ちょ、セシぃ！？　……切られちゃった」

シャルが来るって、しかも一瞬友達やめるだなんてどういうつもりですか……
でも、感謝しないといけませんね。
セシぃはわざわざ私にシャルと会うための言い訳まで作ってくれましたし……セシぃと友達に戻るには、シャルと仲直りしないといけないみたいですからね……

「とりあえず、早くシャワーを浴び終えて服を着ないといけません

ね」

早くしないとシャルが着ちゃいます。
女の子同士でも……体の傷なんて関係なしに好きな人に裸を見られるのは恥ずかしいですから。
不安は残りますけれど……いえ、お膳立てをしてもらったのです。
ここでやらなきゃ一生公開するでしょうし。
ほほをバシバシ叩いてシャワーを止めます。

「よしっ！　では、そろそろ、」

ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！

「うひゃぁっ！？」

って、警報ですか……もう驚かせないでって警報ですか！？
いったい何が

『キンキュウジタイデス。ゼンイン、シキュウ、テロリズムタイサクシツニシュウゴウシテクダサイ』

……緊急事態です。全員、至急、テロリズム対策室に集合してください？
テロ！？

「……人がせっかく覚悟したときに」

そーですか。
誰だか知りませんけど覚悟してくださいね？

69. Bonne nature humaine（後書き）

アリサ怒髪天！

活動報告のほうでのアンケートに答えてくれた方、
ご協力ありがとうございました。

70. Un chevalier（前書き）

「守り手」

気付かれた方もいらっしゃるとおもいますが
残酷な～タグ付けました。
次回分からがどうしても……というやつです

今まで着いていなかったのが意外、とか言われそう（

70. Un chevalier

「なにごとですの！？」

いえ……こういうときは落ち着くことが大事ですわね。

シャルロットさんがアリサさんのもとへ向かった途端に鳴り響いた警報。

思わず慌ててしまいましたわ。

警報と共に流れたアナウンスによればテロリズム対策室に向かえとのことでしたわね。

「わざわざ逆らうこともありませんし大人しく……っ！　誰ですの！？」

……

後ろからの気配に振り返りましたが怪しい人物はいません……どうやら、わたくしの勘違いだったようですわね。

だいたい何が起きたかもまだ明らかになっていないのです。

他人様の庭だからと警戒しすぎているだけなのかもしれませんわ。

「では、対策室とやらに行きましょうか」

バチっ！

「っ！？」

今の音はまさか……スタンガン？

ですが、確かに怪しい人物は……

バチンッ！

「っく！　……油断、しましたわ。そういうことですのね」

外ばかりに目を向けていては……！

バチンッ！

「あぐぅっ……」

「……イギリスの代表候補生を確保しました」

◇

がしゃぁん！

「ここに一人いるはずだ！　探し出して捕まえぐぁっ！」

「なにがっ、ぐふっ……」

「ナット！　ネイル！　……全員、警戒しろ！」

警報とほぼ同時に飛び込んでくるなんて……中に入り込まれるまで誰も気付かなかったんですか！？

それに、全員が銃を構え始めましたね……大きさ、構造的に暴徒制圧用のゴム弾ライフル？

ちぇっ……全員、ここで引導を渡してやろうかと思ったんですけどねぇ……！

……少し、クールダウンの必要がありそうです。

とりあえず今の攻撃に乗じてカゲロウの本体（アンクレット）は回収しましたし、慌てることはありません。

まず、状況ですが、シャワールームには私一人。他の個室には誰もいないはずです。自分のことだけ考えればいいというのは楽です

ね。
それにしても……私の邪魔をするだけでなく、裸のレディがいるシャワールームに窓と扉からの二面攻撃をかけるなんて……極刑です。
しかも、先頭の二人を攻撃したことで警戒されてますし……ざっと見て十人ほどでしょうか？
声からすると……男性のようですが身体全体を隠しているのでイマイチ分かりませんね。
ただ、

「どうせ隠すなら、特殊装甲でも着てくるべきでした、よっ！」

カゲロウの簡易展開状態――黒の夜会用ドレスを身に纏いシャワールームの個室の扉を蹴破って飛び出します。

ああもう！
下半身が涼しいです！

「このっ！」
「あったりーませーん、っと！」

銃身を掴んで腕ごと捻りあげ、銃口を相手の腹部につきつけます。

「この至近距離ですと腎臓とかなら破裂するかもしれませんねぇ？」
「ひっ！」
「……容赦しません」

パァンっ

崩れ落ちかけた相手の腕に私の腕を絡みつけ肘を極めます。

そして襟首を掴み、肘を折りながら投げる……この感触は馴れませんね。

「はふぅ……」

どうしても、体の芯から熱くなっちゃいます。

受け身をとらせずに背中から地面に叩きつけたため呼吸困難に陥っている人がいますけど気にせず蹴り転がします。

たかだか十五歳の少女による暴力に動揺しているのでしょうか。

誰も手の中にある銃を放ったりしません。

……まぁ、簡易展開とはいえ既にカゲロウを身に纏ってますし、そんなおもちゃのゴム鉄砲なんて気にしませんけどね。

「私がここにいることを知っていることや、裸の時を狙ったにもかかわらずこの大人数ということは……貴方たち、私のこと調べてきました？」

生身での戦闘力は私が一番ですからね。

ハイパーセンサーも扱え、スラスターも普段の三割程度とはいえ使える現状なら誰にも負けませんよ。

「……あぁ、もしかして無闇に人を傷つけない、とか書いてありました？」

それなら訂正しないといけませんねぇ。

「無事に帰れたら書き直しておいてください。私は、シャルを守るためならなんだってします」

本当に必要なら、人だって殺めてみせますよ？

「シャルも今襲われてますよね？　なら、邪魔しないでくださいよ」

当然、動く気配はありません。

仲間の一人が一方的にやられても動揺しない……プロの軍人さんでしょうか？

もしそうなら……他国からの侵略、およびＩＳ技術の強奪？

そんなことをする理由がある国なんて……あります、ね。

唯一ではありませんが最も可能性が高い国は……フランス。

いえ、第三世代型の計画も本格的に始動しているので本当はそんなことはないのですが、肝心なのは他の国からどう見られるかということです。

第三世代型の開発ができないにもかかわらずイグニッション・プランに執着を見せるフランスは……動機十分と判断されるかもしれません。

フランスが疑われることを想定してのテロですか。真犯人はどこの国でしょうね。

「こうしてはいれませんね」

戦って、全員を戦闘不能にしてもいいのですが……シャルのこともありますし、時間をかけたはくありません。

……逃げましょう。

「退いてくださいね？　邪魔するなら……喉笛噛み千切りますよ？」

疾歩での縮地法を使って扉側を塞いでいる四人に肉薄しての一言。

ウサギっぽいとか言われてますが、自己診断では狼さん……群れに手を出すなら容赦しないような……

私が動き出した瞬間、各々がゴム弾を放とうとしますが……

「遅いですよ」

一瞬押して、思いきり引っ張る。

先程の組手の時と逆のことをして扉側の人たちを窓側に立っている人たちに向けて投げます。

どうせなので全員投げちゃいましょう。

「では、失礼します」

腰をきゅっと締めることでウエストを強調する大きなリボン……のように見えるスラスターを起動させて、さらに疾歩を併用。

対策室に急ぎましょう。

鈴ちゃんを効率よく織斑君に遭遇させるためにカゲロウに内部の開放区画の地図をインプットしていてよかったです。

「……シャル。無事でいてください」

襲撃を受けているためＩＳコアによる居場所の情報の共有は行われていません。

敵方にもＩＳがいる可能性を考えてです。

それなら、会うためには対策室に行くしかない……こんな状況で、まだ仲直りもできていないのに会わなきゃいけないのは不安ですけどね。

「ここを、右！」

多分ですけど！　なんで地図ってこんなに読みにくいんですか！

私いまだに学校でも迷うんですからね！

まぁ……幸い、対策室は遠くありません。今の私の足で一分もか

からないでしょう。
シャル以外にも誰かと合流できればラッキーです。

「っ！」

また、います……いったい、どれだけの人員がここに？
こうなると十人と相対する羽目になったのは私だけじゃないかもしれませんね……
とにかく、回り道はできません……昏倒させましょう。

◇

「ここ、ですね……」

妨害されるわ道に迷うわでずいぶん時間かかっちゃいました。
とにかく対策室の中に……ちょっと待ちましょう。
警報であれだけ派手に対策室に集まれー、なんて言ってたわけですから……普通に考えてテロリストたちも来ているのでは？
……とはいえ中を確認しないわけにもいきませんし……
よし、行きましょう！

「失礼しわわっ！？」

ドガッと黒い塊が飛んできました。
というか人です。
これは……テロリストの一人でしょうか？

「アリサ……？　早く入って！」

聞き覚えのある声に従って素早く部屋の中へ。そして静かに扉を

閉じます。
　中にいたのは鈴ちゃん、ラウラさん、それにシュヴァルツェ・ハーゼの面々です。クラリッサさんを始めとして見覚えのある顔もいくつかあります。

「鈴ちゃん……無事でしたか」
「ラウラもいるけど……他の四人は捕まったわ」

……シャルも、ですか。
　部屋にはシュヴァルツェ・ハーゼの人たちはいますが……私がシャルから離れなければ……
　いえ、ここで怒っても意味がありません。冷静さを失う必要はないでしょう。

「捕まっていると分かっているのはなんでですか？」

　それに直接見たにしてもこの二人が見捨てるとは思えません。
　となると相手側から連絡でもあったか、もしくは……

「四人がそれぞれ囚われている部屋にはカメラが仕掛けられている。当然、この部屋からも確認できる」

　ラウラさんが手近にあったキーボードを操作すると備え付けられていた液晶画面がそれぞれシャル、セシィ、織斑君、篠ノ之さんを映し出しました。
　四人とも目立った外傷がないのは不幸中の幸いですかね。

「なるほど……やはり別々の場所ですか。どうします？」
「……正直、こちらから出向くのは危険だ。助けにいくとしても複数人でないと……」

……敵の戦力は未知数。
ですがこちらは既に消耗している状態……

「せめて、もう少しいれば助かるんですけどね……」
「「「「……」」」」
「え？　なんで私を見るんですか？」
「アリサが若いのをいじめたりしなければ、あと十人はいたのだがな……」
「……あぅ」

だって、あのときはこんなことになるなんて予想できませんでしたし……

「ま、まったく。素人に負けるなんて歯応えのない人たちですねっ！」
「副隊長として隊の名誉のために言わせていただきますが、あのときの貴女に勝つにはシュヴァルツェ・ハーゼの上から十人ほどを集め、作戦を立ててやっとというところでしょう。もちろんＩＳ戦であればその限りではありませんが」
「うぅ……すみませんでした」

クラリッサさんにピシャリと言われてしまうと私も言い返せません……
ですが、本当にどうしましょう。
私としては一刻も早くシャルを助け出したいんですけど……

「今は、敵が誰かなのを明らかにした方がいいですね。ラウラさん、襲撃を受ける覚えはありますか？」
「……ＩＳ研究施設が襲われる覚えか？　あるにきまってるだろう」

……まぁ、十中八九『亡国機業（ファントムタスク）』でしょうねぇ。
数世紀前から死の商人的なことをしているらしいですが……最近はＩＳを戦争の道具にしようとしているようです。

「隊長！　無人戦闘機と戦車の大群が……！　規模はそれぞれ約五十！」
「……方向はどっちだ？」
「南西方向です！」
「アリサ……標的はドイツ（ここ）だけではないようだぞ？」
「そのようですね……」

なるほど……狙いはここに集まっている五体の第三世代型ＩＳ。
そして、仏独戦争の開戦ですか。
敵は確かに亡国機業のようですね。
ここぞとばかりに兵器を輸出しようというわけですね。

「ラウラさん。正直、ドイツはこれに乗じてフランスに攻め込むと思います？」

ＩＳの研究施設の襲撃となると、立派に戦争の大義名分となります。
しかもその大義名分を持っているのが戦力的に有利なドイツとなると……亡国機業の仕業だと分かっても攻めてこないとは限りません。
ラウラさんに限っては、そんなことを望まないでしょうが……その上層部は……

「ラウラさん。学年別トーナメントの時、私になんて言って勧誘したか覚えてます……？」

「は？　おい……アリサ、まさか……」

あの時、ラウラさんが見返りとして提案した、イグニッション・プランとはまた別のフランスとドイツの二国だけの共同防衛協定……実現させられれば戦争は確実に回避できます。

もし、ドイツが本当にＩＳ操縦者としての私に価値を感じているのならば、もしくはフランスと友好関係を築くことに意義を持っているなら……今回の友好的な招待もそのためだと考えたら、それもありえると望んでしまうのはバカでしょうか？

それでも、もしそうなら……ドイツも戦争は避けるかもしれません。

正直、今のフランスを攻め込む大義名分があったとしても、ＩＳの技術が遅れているわけですからそこまでの魅力はないはずです。

戦争特需による経済効果は生まれるかもしれませんが……ＥＵとしての全体的な旨味はないはずですし、戦争ではなく私を選んでくれる可能性もゼロでは、ないと思いたいです。

「アリサ、早まるな」

「ですけど……」

今、この瞬間にもフランスに攻め込むことを話し合っているかもしれません。

私とシャルという人質もいますし……

「だから……私はシュヴァルツェ・ハーゼの一員として……戦います」

優先すべきは私ではなくシャルの安全です。

シャルだけは……必ず無傷で助けます。

70. Un chevalier（後書き）

来週はちまみれー

71. Une contre－attaque（前書き）

「反撃」

お久しぶりです（
いろいろと不調気味なので変なところあるかも・・・
何か見つけたら教えてください。

71. Une contre-attaque

「アリサ、それは認めない」
「……え？」

そんな……ラウラさんたちは私が欲しかったんじゃないんですか？
それじゃ、困ります。
フランスを助けられないじゃないですか……

「でも、私が、」
「アリサ。一人で全部を背負う必要はない」
「ですが、できることがあるなら……それをやらないことは罪深いと思いませんか？」

少なくとも、できることをやらずに後悔するなんてこと、私は嫌です。

「もちろん、できることはすべきだ。だがアリサのそれはフランスを守ることじゃないだろう？」
「え……？」

私が……言い方は悪いですけど身代わりとしてシュヴァルツェ・ハーゼに入れば、少なくとも仏独戦争は回避できますよね？
それなら私がすべきことは、

「はぁ、ったく……世話が焼けるわね」
「鈴、ちゃん？」
「今は、シャルロットを助ける方が大事なんじゃない？」

もちろん他の三人もだけど。
鈴ちゃんがニヤリと笑いながら言いました。
「私とクラリッサ、そして鈴で外の無人機軍を潰滅させる。アリサは捕らえられたやつらを救い出してくれ」
潰滅って……激しいですね。
私がすべきはシュヴァルツェ・ハーゼと協力して、内部にいる歩兵たちを無力化しつつ皆を助け出すこと……ということですか？
途中で全員分のＩＳを奪還できればなお良しでしょうか。
「ですが、ドイツとフランスが、」
「ここが襲撃されていると言うことは未だに報告されていない。まぁ、報告できないと言った方が正確だがな」
「アリサはこの部屋に来たばっかだから心配するのも仕方ないけど、通信機類が全部ジャックされてるみたいなのよ」
「……つまり、私たちが自力で解決し亡国機業からの襲撃だったと言うことはまだ可能だ」
「ですが……」
どうして、そんなことを？
私自身にどれだけの価値があるかはおいておくにしても、私が必要なら私を引き入れてからでも……
「アリサが自分の意思で来ないなら意味がない」
「……」
「それこそフランスと戦争になったときに裏切られてはたまらないからな」
「……では、行ってきます。シュヴァルツェ・ハーゼの皆さん、私についてきてください」

……というか、誰か一人先導してください。シャルたちがそれぞれ囚われているところに着く前に迷いそうです。
ゲームではないので迷った末の行き止まりに宝箱なんてこともあり得ませんし、レベル上げも必要ないので最短ルートを行くべきですし。

「アリサさん。私が先導します」
「はい、お願いします」

今まで防犯カメラからの情報を画面に写し出す役目を任せられていた女の子が私の前に進み出てきました。
まだ幼く見えますけど……十二歳くらいでしょうか。名前は……エリーさんですか。
……大人数の敵と戦うことになったら全員を守れるか分からないですね。

「……怖くないですか？」

少しでも恐怖心があれば、それが足を竦ませてつまらない死に方をするかもしれません。
私は人が死ぬところを見て愉しむ趣味なんて持っていないので、そういう人をつれていく気はないんです。

「生まれたときから兵士ですから、覚悟はできています」
「あぁ、あなたも……では行きましょう。皆さん、ぼさっとしてると置いてっちゃいますよ」

ラウラさんと同じ試験管ベビーなんですね。
……正直、これだけはどうしてもすんなりと受け入れられません。

ラウラさんや目の前のこの子が、ということではなくて試験管ベビーというものを産み出したドイツ軍の所業が、ということです。
ある意味、材料は同じなんですから、産み出され方が違う程度のこと、気にする必要もないと思うのですが……それでも、人工的に子供を造り出すのは違うと思います。
キリスト的な神のみぞ許される行為だとか言うわけではないですけど、人が踏み込んでいい領域だとも思えません。

「誰から助けますか？」

敵が侵入してきた際にＩＳを展開させないよう狭く設計された廊下を走りながらエリーさんが聞いてきました。
だいたい人が三人横に並んだら道を塞いでしまうくらいの細さです。

「近い人からお願いします」
「でしたら、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、織斑一夏、そしてシャルロット・デュノアという順番になってしまいますが……？」
「それがどうかしましたか？」

最高効率で全員を救い出すんですから当然の順番です……助ける順番に優先順位なんてありません。
それは、私情を挟んだとしてもです。

「……次、右です」
「ありがとうございます」
「曲がって左手側の四番目の部屋に、」

篠ノ之さんがいるというわけですか。
彼女自身、ＩＳがなくても十分に戦える人なので一番最初に合流

できるのは嬉しいですね。篠ノ之さん次第では二手に分かれることも……

あれ、これは……？

「皆さん、止まってください」

「……敵ですね？」

エリーさんが私の隣まで戻ってきました。

私のちょっとした一言でここまで看破するなんて……もしかして彼女も気付いていたのでしょうか？

「右、後方、前方……三方向からの挟撃です。数もそれぞれ三十人ほどでしょうか」

まだ距離は離れていますが……ハイパーセンサーで複数の足音を捉えました。

ですが、三方向となると少し厳しいですね。相手のほうが数も多いわけですし……

「指揮官代理、反転して後方からの敵にぶつかってはいかがでしょう。この三叉路から離れれば少なくとも一方向からの打撃は防げます」

「し、指揮官代理？」

わ、私のことですか？

いえ、確かに私は彼らのことを率いていますけど指揮官だなんてそんな。

「あの、私、これでも戦いのことは門外漢なので、あの、指揮官代理なんて……」

そんな偉そうな肩書きつけられちゃうと実力が無いのも相まって恥ずかしいですよ……

「照れることはありません。率いることができる人が指揮官なのです。それに何のために私がいると思っているのですか」

「へ？」

「……これでもシュヴァルツェ・ハーゼのナンバースリー、参謀役なんです」

……なるほど。

通りでラウラさんが躊躇いもなく送り出すはずです。

いくら軍人だからといって、あのラウラさんがまだ十二歳程度の子供を戦わせるとは思えなかったんですよね。

ラウラさんがエリーさんを信頼しているのは彼女がクラリッサさんに次ぐ実力者であるということですね。つまり、シュヴァルツェ・ハーゼの所有する三台目のＩＳの操縦者ということなのでしょう。

「エリーさん、後方は任せます」

「え？」

「ですから、前方は私に任せてください」

カゲロウのように最初から狭い場所での対人戦を想定した簡易展開という機能が搭載されていない限り行動は大きく制限されるはずです。

それなら私が一番働くのが道理というものでしょう。

「いえ、いくらＩＳを纏っているとはいえ囲まれてしまったら……それに装備はどうするんですか？」

「問題ありませんよ。簡易展開というのも便宜的なもので、これも

一種の戦闘形態なんです。なので……」

細い鎖に吊るされたいくつものナイフがジャラリという音を立ててドレス状態のカゲロウにぶら下がるようにして現れます。

「当然、この状態で戦うための装備もあるということですよ」

踊り子（キリング・ダンス）のナイフという名称がつけられたこれは嵐才流による高速歩法・疾歩に殺傷性を持たせると同時に、一つ一つが刃先に重心を置かれているため投げナイフとしても機能します。

それぞれの刃の表面にはチタンコーティングが施されていて光を殆ど反射しないので暗殺にも便利だとか。

「敵は制圧用のゴム弾ライフルを装備しています。私にはなんともありませんがこの至近距離でもらえば頭蓋骨程度余裕で潰れますので気をつけてください！」

「こちらは本職の軍人ですからご心配なく……本当に任せていいんですね？」

「ええ、一人も殺さないで捕虜にする程度の余裕はありますよ」

聞きたいことはたくさんありますからね。

「手を上げろ！」

来ましたね……では、行きましょうか。

「お前たちは完全に挟まれている。おとなしくがぁっ！？」

戦闘で銃を構えていた男の人を接近してから腹部への打撃で前のめりにさせて、さらにその頭を蹴り飛ばします。

「き、貴様！」
「……なんてことを言ってる間に引き金を引けばいいと思います」
ナイフを一本、鎖から引き千切り慌てたように銃を構えた人の太ももに突き刺してひねります。
「ぐぁぁぁぁあああ！？」
「あ、動いちゃ駄目ですよ」
ゴキン、という音を立ててナイフの刃が太ももの内部で折れました。
あくまで投げナイフ用なので変に力がかかると簡単に折れちゃうんですよね。
「あらら、先っぽだけが折れちゃったみたいですね。これじゃ抜けないかも……ご愁傷様です」
痛みにしゃがみ込んだ相手の傷口を躊躇無く踏みつけます。
動脈が傷ついたのか傷口から断続的に血が噴出しましたが気になりません。
……敵ですから容赦しませんよ。殺しもしませんけどね。
「くす……痛いですよね？　砕けた刃に内側から切り刻まれるなんて経験、なかなか無いですよ？」
「あっ、あがっ……」
「……二人目、と」
この細い通路だと二、三人ずつしか相手にできなくてキリがないですね。

もちろん、囲まれて一方的に攻撃されないという利点もあるのですが、これだと私のほうが飽きちゃいますよ。
それに、ここで時間をとられるわけには……

「ぎゃぁ！？」

私に銃を向けた人の腕に――正確には前腕骨にある二本の骨の隙間にナイフを突き刺し、そのまま壁に縫い付けます。
……もう少し。
両手に三本ずつナイフを掴み不破の投擲術・雹の要領で投げます。
それぞれが肩や膝、手の甲を砕き相手を無力化していきます。

「……もう少し手荒にしてもいいですよね？」
「ひっ」

向かってくる相手の顔面をナイフの柄で叩き潰し、比較的、死につながりにくい部位にナイフを突き刺し、直に掴み掛かってくる腕を叩き折り、時には相手を後頭部から壁や床に叩きつけます。
大丈夫……まだ殺してしまうほどではありません。
腎臓なら片方が潰れても死にはしませんから……ね。

「……エリーさん達の方は大丈夫そうですね」

そう呟きながらナイフを投げつつ、また新しいものを量子化領域から喚び出して相手の後方に投げました。
そして数秒のうちキィーンという耳を劈く超高音が響き、それに遅れて私の目の前にひしめいていた人たちが次々と倒れていきます。

「いやー……さすが、使用禁止レベルすれすれのものは威力が段違

いですね」

高周波グレネード・乙女（バンシー）の慟哭。

その名の通り耳から直接人間の三半規管に作用して自律神経を麻痺させる代物です。

十メートルより近くで破裂した場合、立っていられなくなるどころか失神するレベルのはずですから多少は楽になりましょう。

何より音が反響しやすい造りの狭い廊下ですからね……効果は抜群のはずです。

「ぅ……おえぇぇ！」

「あれ、吐く程度にまで我慢できる人もいるんですねぇ。大した根性です」

まぁ、蹴飛ばしますけど。

……でも、何か引っかかるような？

とりあえずエリーさんたちのほうを援護しに、

「指揮官代理……？」

「……あ」

「あんなものを使うなら事前に言ってください！　たまたま私たちが対策として耳栓をしていなければ全滅していましたよ！」

「ご、ごめんなさい」

……チームワークって難しいです。

「とりあえず、篠ノ之さんを迎えに行きましょう」

71．Une contre－attaque（後書き）

次回もいつになることやら・・・

作中に登場した
投擲用ナイフ・踊り子（キリング・ダンス）のナイフはめだか１９４様の案に若干の変更を加えたものです。
ありがとうございました。

ようやく投稿していただいた兵装を登場させられそうです・・・

72. Schwarzer Faden（前書き）

「黒い繭糸」

ツヴァイクより先にこっちが登場する羽目になろうとは・・・

72. Schwarzer Faden

「篠ノ之さん、無事ですか？」
「……不破か。ああ、紅椿は奪われてしまったが私自身は平気だ」
「よかった……」

人質に乱暴しようとは考えていなかったようです。この分ならシャルも……いえ、その前に次に近いセシィですよね。
ですが第四世代型ＩＳである紅椿が奪われたのもどうにかしないといけませんね……

「エリーさん。奪われたＩＳがどこにあるか分かりますか？」
「確証はありませんが、おそらく彼らは第五ゲートか第三ゲートを使って屋外に逃げると思われます。なので先回りができれば……」

他の人を救出することも必要なので救出班と奪還班の二組に別れようかと思っていたのですが……
その奪還班をさらに分けることは人数的に厳しいです。

「……賭けですね」

極論をいってしまえばセシィやシャルのＩＳが盗まれたとしてもそこまで困らないんです。
いえ、困りますけど、それは国が勝手に困るというだけです。
でも……世に二つしかない第四世代型が亡国機業に、いえ、篠ノ之博士の手が届く範囲から離れてしまうのは問題です。
まだ第三世代型ですら確立されていないのに、どこか一つの団体が第四世代型を開発するためのノウハウを手にしてしまったら、世界のパワーバランスが崩れます……

なので……

「エリーさん……私達はＩＳの奪還に動くべきでしょうか」
「……そうでしょう。ですがこれは私達、シュヴァルツェ・ハーゼの落度。貴女は好きなように動いていいのですよ？」

そう言われて、はいそうですか……なんて言える性格だったらシャルと喧嘩してませんよ……

「それに、ＩＳの問題がなかったとしてもここで二手に別れるべきです」
「え？」
「先ほどの戦いぶりを見る限り、ここにある戦力は過剰だと判断しました」

まぁ、私一人でそれなりの人数なら制圧できますし、それはそうでしょう。
というか、そうできるために設計されたＩＳがカゲロウな訳ですし。

「幸い、どちらのゲートにも行く価値があります」
「……もしかして」
「ええ、シャルロット・デュノアは第五ゲート近くの部屋に、残りの二人は第三ゲートの近くに囚われています」

なるほど……先ほどまで私が考えていた救出班と奪還班、その役目を別れた二班の両方が果たすんですね。

「エリーさん、私はシャルの方へ行かせてもらいます」
「ええ、ナビ付きの基地内部の地図があ、」

「送ってください」

……っは！？

少し反応するのが早すぎたみたいです。

エリーさんが眼帯で隠されていない右目を細めて苦笑しています。

私、十二歳の女の子に苦笑されてます……！

恥ずかしいですね……

で、でも、迷う自信があるんだから仕方ないじゃないですか！

「不破、私も行った方がいいか？」

「いえ、篠ノ之さんは、」

「人としての速度しか出せない貴女では彼女の足手まといになると思いますので私達と共に来てください」

……エリーさん、言葉を選びましょうよ。

いえ、正しいといえば正しいんですけど……！

「しかし、確かについていくにしても武器が、な」

篠ノ之さんが心細げに右の手のひらを見つめながら呟きました。

そこにあるべきは木刀でしょうか？

「武器なら……刀よりもリーチは劣りますが、これをどうぞ」

「む、これは？」

「軍に配備されている特殊警棒です」

エリーさんが手品のように真っ黒な警棒をどこからともなく取りだし、篠ノ之さんに渡しました。

折り畳み式のそれを篠ノ之さんが一振りすればカシャンという音とともに五十センチほどまで伸びました。

強度を確かめるためか警棒で手のひらを叩きながら一言。

「感謝する」

「いえ、丸腰の一般人を連れて歩くのはさすがに問題があるので」

エリーさんって歳に似合わず言葉がきついですよねら。

ラウラさんも男みたいな口調ですし。

……っは！　もしかしてクラリッサさんが自らの趣味を？

彼女は最年長なわけですし、もしかしたら試験管ベビーであるお二人を自分好みに育て上げたとか……

ラウラさんを溺愛していますし……ありえます！

……ところで、

「エリーさん。今、どこから取りだしたんですか？」

「ここですよ？」

そう言って、エリーさんは無造作に胸元に手を突っ込みました……え！？

「こんな感じにです」

そして次から次に出てくる装備。

拳銃にナイフ、グレネードにガスマスク。

相手を拘束するための手錠や荒縄に加え、低温蝋燭やギャグボールなどです。

え、最後の二つはなんですか？

「……拷問用です」

「なら普通の蝋燭を、っていうかギャグボール嵌めたら何も喋れないじゃないですか」

「それは……盲点でした」
「……」
「……間違えて、取り出しました」
ですよね……え、待ちましょう。
「なんで、軍に必要のないものを胸元に隠してるんですか！」
「い、いえ、これは胸元から取り出しているように見えますがＩＳの量子化領域を、」
「わかってます！」
「あう……」
……あれ？
ちょっと問い詰めすぎたかもしれません。エリーさんがが顔を紅くして俯いてしまいました。
その姿は年相応で、先ほどまでの凛としたエリーさんからは想像もつきません。
つまり、超、ラヴいです。
……久しぶりにこの形容詞使いましたね。
「わ、私、こういうの、好きなんです」
「……は？」
あ、そっか。
そうですよね。
仕事のために持ち歩いているのでなければ、個人の趣味のためですよね。
つ、つまり、エリーさんは……
「この歳で嗜虐嗜好があるなんて……」

「ち、違います！」

そ、そうですか。それはひとあんし、

「私は、される方が……好きで……」

「ろりまぞ！？　い、いろいろと超越しすぎていて、私にはなんとも……」

というか、そもそも需要は！？

幼女は愛でるものって聞きましたよ！？

それをぶったりする人なんているんですか？

こんなに可愛いエリーさん……いえ、エリーちゃんを傷つけるなんて……

そんな人、不能にしてしまいましょう……

でも、エリーさんの嗜好を矯正しないことには、

「私のような試験管（ばけもの）ベビーは虐げられるのも、」

「伏せてください！」

「任せろ！」

私は、エリーさんの言っていることを理解する前にその小さい体を抱き締めて庇いました。

物陰に隠れていた三人ほどの敵が私たちの隙をうかがっていたようです。

放たれた三発の実弾のうち、二発を私のカゲロウで受け止め、一発を篠ノ之さんが警棒で叩き落としました。

……ＩＳの補助なしで銃弾を叩き落とすだなんて……篠ノ之さんも長物を持たせたら反則級ですね。

「エリーさん、大丈夫ですか！？」

「な、なんで……？」
「……？」
「なぜ、私を庇ったのですか？　狙われていたのは私で、もし私がここで倒れても損失は大したことなかったのに……」
「……はい？　篠ノ之さん、どういう意味だったか分かりました？」
損失が少ないとか、守ることでリスクが高まるとか……そんなのは割とどうでもいいと思うんですけど。
「それに、私はもともと捨てゴマとして造られた使い捨ての化物なんですよ？」
「何が言いたいのかよく分かりませんが……」
私が思ったことが間違っていないことを確認しようと、篠ノ之さんとアイコンタクトをはかります。
……うん、やっぱりそうですよね。
「まぁ、守れるのに守らないなんていう選択肢をとる意味はないな」
「まったく、その通りです」
「でも……」
デモもストもありません！
……そもそもエリーさんは自分が造られたからと悩んでいるみたいですが、私から言わせてみればミジンコサイズです。
「篠ノ之さん。人を襲わない人造人間（フランケンシュタイン）と、人を殺す一般人、どっちが怖いですか？」
「は？　……まぁ、私は殺されないから見た目がおぞましいフランケ、ぐふっ！」

アホがいます！
空前絶後で前人未到、そして前代未聞なアホの領域に篠ノ之さんがログインしました！
ここは殺人犯と答える場面ですよね！？
……まったく。
篠ノ之さんも肝心なところで空気が読めないんですから……だいたい、篠ノ之さんがしっかりしていれば私だってシャルと喧嘩せずにすんだんですよ？
……はぁ。
シャルを早く助けたいとは思いますが……会って、何を話せばいいんでしょう……

「あの……？」
「はぁ……不安です……じゃなくて」

今は私が抱き締めたままのこの勘違い娘を矯正するのが先決です。

「エリーさん。ちょっと有り得ない生まれ方をしたエリーさんより、普通に生まれて、普通に育ったのに千人以上もの人命を奪ってしまう人の方がよっぽど化物ですよ」
「不破……」
「ですからエリーさんは一人の可愛い女の子です。それ以上かもしれませんが……あなたの価値は絶対にそれ以下ではありません」

篠ノ之さんも今回は空気読めましたね。
私のことを話されていたら……私は困りはしませんけど、エリーさんはショックを受けていたかもしれません。

「あの、千人殺した人というのは……まさか、」
「……ただの、例え話ですよ？」

気付いてしまった……いえ、気付けるような言い方ではありましたけど、私を見る目に少し畏れの色を浮かばせたエリーさんにニコリとだけ笑いかけました。
言葉で説明するのは簡単ですけど、そこはさして重要じゃないですしね。

「あ、アリサ……さん」
「……なんですか？」

名前で呼ばれたことに少し動揺しましたが、なんとか間を開けずに優しい声を出せました。

ぎゅ……

お？
……なぜか、抱き締め返されてしまいました。
んと、慰められてます……？

「ありがとう……」
「こちらこそ、です」

最後に一度だけ力を込めて離れました。
……やっぱり、シャルってすごいです。私はシャルの真似をして抱き締めただけなのに、それでもこれだけの効果がありました。

「では、私はシャルを助けてきます。篠ノ之さん、無茶はしないでくださいね？」
「こっちの台詞だ」
「……いってらっしゃい。アリサお姉様」

二人の声に背中を押され、トップスピードで廊下を駆けます。
気分がいいので壁とか走っちゃいますよー。

「……あれ、お姉様？」

◇

「さっきのお姉様、というのは？」
「シュヴァルツェ・ハーゼの慣習です。自分が着いていくと決めた人をお姉様とお呼びするのです」
「……アリサは、ドイツには属していないぞ？」
「関係無いですね。いざとなったら私がドイツを出ます」

ドイツの上は造り出してしまったから、という負い目からかシュヴァルツェ・ハーゼの隊員に甘いです。
一人一人の誕生日にメッセージカード付きのプレゼントとバースデイケーキを上官自らが届けに来るくらいには甘いです。
……組織されてからいまだに訓練だけで実戦投入などはされていないので少し心苦しいですが。

「しかし、お前もＩＳのパイロットだろう？　認められるのか？」
「さぁ……？」

流石にそこまでは分かりませんけど……
そろそろ私達も行きましょうか。

「むぅ、不破は心配要らないだろうが……こっちは平気か？」

……確かにお姉様の高周波グレネードの影響を受けた隊員も多い

ですし、実質五人程度ですね。
ですが、問題ありません。
「励起……黒い繭糸（シュヴァルツェア・ファーデン）」
「ここで！？」

私がＩＳを展開しようとしていることに篠ノ之箒が驚いていますが問題ありません。
お姉様のＩＳがドレス状になることで狭い空間でも戦えるＩＳなら、私の黒い繭糸（シュヴァルツェア・ファーデン）はそのためだけに開発されたカクテルドレスです。
お姉様はＩＳの不足を地力で補っているようですが、こちらには不足さえありません。
それに……

「では、行きましょう」

眼帯を取りながら篠ノ之箒に声をかける。

「その目……」
「ええ、特別製です」

共に金色へと染まった私の双瞳。
……私はシュヴァルツェ・ハーゼの中で唯一、両目への戦闘補助ナノマシン注入ができた被検体です。
そして黒い繭糸（シュヴァルツェア・ファーデン）には隊長のレーゲンに搭載されているＡＩＣの廉価版もあります。
そもそもこの廊下が細く作られているのもこの基地を“私が”守れるようにです。
この場においては、私は最強を名乗らせてもらいます。

「鉄鎖斧（フレイル／アックス）……励起」

百キロ以上の重量がある鋼鉄球と私の背丈ほどもある戦斧を呼び出します。

二つはやはり私の腕ほどの太さもある鉄鎖で繋がっていて、フレイルとしても斧としても使うことができます。

「お、おい、それは凶器ではないか！」

「人聞き悪いですよ。これは武器です。彼らの命を奪おうなどと思ってはいませんのでご安心を」

お姉様の言葉はつまり、私が人を殺したときこそ、私は本当の化け物になってしまうわけですからね。

それにお姉様は膝や肘、内蔵は破壊しても殺しはしていませんでした。

ならば、私もお姉様の意向に従うまでです。

……そう、殺しはしません。

「行きますよ」

「ああ」

抱き締められて、優しくされたのは……初めてでした。

72．Ｓｃｈｗａｒｚｅｒ　Ｆａｄｅｎ（後書き）

エリー専用ＩＳ黒い繭糸主装備（シュヴァルツェア・ファーデン）・鉄鎖斧（フレイル／アックス）は
前回同様にめだか１９４様のフレイルを私が脚色した兵装となっております。
ありがとうございました。

次回は無人機を破壊しに行ったラウラチーム書くよ！

73. La chose qui est laiss?e finalement

「一番大切なもの」

お待たせしましたー

仲直りしまっす。

73. La chose qui est laiss?e finale

「鈴、クラリッサ……準備はいいか？」
「いつでも」
「準備万端です」

ＩＳを展開し、ラウラの確認に一声だけ返して前を見据える。
迫り来る戦車の群れ。
この基地はフランスまで数キロという場所に作られていて、そこまではひたすらに平野が続いている。
フランスからの攻撃ということにしたいみたいだけど実際には、ドイツ・フランスの地下に不法に作られた空間からの出撃と戦車自体の空輸によって無人機群が構成されていることも判明してる。
問題は、その量。
最初に確認した時点で戦車と戦闘機はそれぞれ五十程度だったのに、今じゃその三倍以上。しかもまだ数を増やし続けている。
この調子で増えられると……ちょっと危ないかもね。
私とラウラは襲撃前まで模擬戦してたからエネルギー足りないし、そもそも第三世代型の燃費じゃあ……

「アリサかシャルロットがいれば……」

あの二人のは第二世代型だから継戦能力は私達の数倍あるしね…
…特に二人のＩＳは実弾兵器が主体なのも大きいわ。
……双天牙月で近接なんてしても、逆にシールドエネルギー削られて早く落ちそうだし……

「って、ラウラ、あんたのＩＳ、腰についてるの何？」
「む？　ああ、これか？」

シュヴァルツェア・レーゲンの腰に小さいドラム缶とでも言えばいいのか、そんな形状のものが複数ぶら下がってる。
さっきまではあんなものついてなかったと思うんだけど……

「これは小型のＩＳ整備機だ。ちょっとした調整や、戦地で立ち往生してしまった際に、自陣に帰還できる程度まで簡易的な修理を自動で行うロボットだな」
「ふぅん」
「まぁ、今回は本来の用途としては使わないがな。鈴、ジャックを開け」
「え？　……はい、開けたわよ？」
「じゃあお前たち、頼んだ」
「「「はっ！」」」

ラウラの声に三人の隊員が応えて駆け足でラウラのと同じようなドラム缶を運んできた。
そして、それを私の甲龍に手早く着けていく。

「え、ちょ、なに？」
「鈴、ステータスデータを見ろ」
「うん……うん？　バッテリーパック？」
「この整備機はＩＳと同じエネルギーを利用しているからな。焼け石に水だが無いよりはましだろう」
「なるほどねぇ……」

三つで一時間か……戦闘だと五分程度で使いきっちゃう量だけど、確かに無いよりはマシね。

『敵、レールカノンと龍砲の射程範囲内に入りました！』

「わかった」
「了解！」

オペレーターの声に私とラウラか応える。
エネルギーが少ない私達の作戦は敵が遠くにいる内に私とラウラで数を減らし、それを潜り抜けてきたのをクラリッサさんが潰していくという作戦。
ＰＩＣを使わなくていい分、エネルギーを節約できるって訳。
それにクラリッサさんの黒い枝（シュヴァルツェア・ツヴァイク）は燃費がいい方らしいし……

「よーし、当たり」
「鈴、油断はするなよ？」
「分かってるって」

私が龍砲で地面ごと戦車を引っくり返し、ラウラは戦闘機を撃ち落としていくっていう寸法。
引っくり返した戦車はそのままバリケードになるし、障害物って感じに判断した無人機の人工知能が勝手に壊してくれる。
エネルギーが切れるまではこのまま単純作業ね。
問題はラウラの方。
戦闘機は戦車みたいにのろまじゃないし、足止めなんてこともできない。向こうは数十機単位なのに、ラウラはパンツァー・カノーニアに付いてる二門のレールカノンしかないから遅かれ早かれ戦闘機は基地上空に到達しちゃう。

「ふむ……やはり一人で抑えるのは至難だな……クラリッサ！」
「了解です」

……ちょっと予定より早いけど仕方ないわね。
それに私の方は予想より上手くできてるし。

「……スクワートゥ・スターム」

クラリッサさんの声と共にシュヴァルツェア・ツヴァイクの背中から漆黒の木の枝みたいなものが展開された。

見ようによっては翼の骨格にも見えるそれは分類上はセシリアのブルー・ティアーズと同じビット兵器。違いがあるとすればセシリアのは射撃だけど、こっちは斬撃。

エネルギーを放ってしまうセシリアのブルー・ティアーズと違って、エネルギーを留めていられるソードビットとでも言うべき兵器ね。

兵装の名前を言って展開するのは未熟な証なんて言われてるけど、実際の戦場では速さが全てだから、むしろ合理的だし……さすが本物の軍隊ね。

アリサもＩＳ乗りとしては高いレベルにいるけど本気の時は兵装の名前を叫ぶしね。

無言で展開する、なんていうのはスポーツとしての見映えを気にしただけのものなのかもね。

「では隊長、援護はお願いします」

「任せておけ」

それだけ言ってクラリッサさんは戦闘機の群れに向かって飛んでいく。

途中、ＩＳ本体から枝の根本の部分が切り離され、十数本のソードビットとしてクラリッサさんに付き従う様子は女王を守る騎士みたいでちょっと壮観ね。

そして、クラリッサさんが戦闘機の一群のど真ん中に達した瞬間、それぞれが周囲の戦闘機を切り落とした。

ものの数十秒で突出してきていた戦闘機の一団は壊滅、クラリッ

サさんは無傷だ。

「ラウラ、あの剣、全部操られてるの？」

「いや、実際にクラリッサが動かしているのは半分くらいだな。残りは視線による半自動制御で攻撃しているだけだ」

「なるほどねぇ……あんたのＡＩＣといいドイツの技術屋も相当よね」

さすがヨーロッパでもいち早く第三世代型のプロトタイプを作り上げただけはあるわ。

私の甲龍なんて燃費に拘った、なんて言ってるけど実際はこれ以外は作れなかっただけだしね……むしろ作れたことすら奇跡だったわ。

「さ、私達も働こう」

「そうね」

◇

『次の角を右、です』

エリーさんに頂いたナビにしたがって走ります。

……なぜか、ナビゲーターがエリーさんの声なのですが……まさかあの瞬間にこれのプログラムを組み立てたわけではないですよね？

行き先がシャルのいる部屋とその先のゲート以外に設定できなくなっているのも偶然ですよね。

……エリーさん、技術屋としてフランスに欲しいですね。

「それこそドイツとはお隣さんなんですし、軍部を連合的な扱いにしてＩＳも共同研究とかどうでしょう？」

もうフランスは第三世代型のプロトタイプを組み上げ始めてますし、技術力が認められるのもそう遠い日ではないかもしれません。
なにより、フランスには各国ＩＳの詳細なデータがありますからね。
グレーゾーンギリギリの方法すら使って機体情報を入手してます。
これは、どこの国にとっても魅力的な情報です。
それこそ、装備をある一つの機体の弱点を突けるものにすれば第二世代型で第三世代型に勝つことも可能ですからね。その代わり、それ以外では役立たずになりますけど。

「いたぞ！」
「止まれ！　撃つぞ！」

廊下を塞ぐように何人かが設置した銃を構えていました。って、あの銃……対物ライフルじゃないですか！？　あれはさすがに死ねます！　穴あいちゃいます！
というか、いつの間にか私達が動き出したことを知られていたようですね。
まぁ、篠ノ之さんを助けたときでしょう……なかなか迅速な対応ですね。ちょっと感心です。
まぁ、だからと言って止まってあげるわけでもないんですがね。

「く、来るな！」
「全員、撃てぇ！」

いや、全員て、あなた入れて四人しかいませんよ？
まぁ、対物ライフルの威力は怖いですが……

ダダダン！

私の顔、胸、下腹部を穿とうと殺到する三発の弾丸。
いい腕ですね。
ですが、避けます。
……足に力を込めて斜め上に跳躍。ＰＩＣを利用して重力を相殺すると共に、左手側の壁に向かって体を押し付けるような力を作り出し、壁を地面に見立てて走ります。
そしてさらに跳躍。
天井を走り、四人の頭上を走り抜けたところで彼らの背後に降ります。
そして、反応される前にそれぞれの首筋に手刀を落として昏倒させました。
うん、今の私、忍者みたいでかっこよかったはずです。
さっき思い付いた超三次元殺法です。

『残り三十メートル強』
「……おかしいですね。もう少し人がいてもいいと思ったのですが」

まぁ、楽なことには変わりませんし、気にすることでもないですね。早いとこシャルを助けましょう。
……シャルとうまく話せるかは分かりませんけど……それでも、仲直りできるかもしれませんし……

「私から……仲直りしたいって言えば……平気なのでしょうか？」

シャルがいるはずの、その扉の前で足が止まってしまいました。
自信が、ないです。
いえ、きっとシャルは許してくれますが……私が引きずりそうで……もしかしたら怒ってるけど仕方なく我慢して許してくれてるのかも、なんて。

もっと、いろいろ言ってほしいです。
……だから、ほんとはちょっと嬉しかったんです。
怒っちゃいましたけど。
友達じゃ嫌なんて、もう言いませんから……恋人か他人かなんて（オール・オア・ナッシング）
私には無理でした。
シャルが存在しない世界なんて……私に耐えられるはずが無かったんです。
だって、

「私の世界は……シャルと出会ったあの瞬間に始まったんですから」

ラウラさんから預かったマスターキーを使って扉の鍵を……開けました。
そして扉を……
なんて言いましょう。
助けに来ました？
守れなくてごめんなさい？
無事で良かった？
もう大丈夫です？
……どれも、しっくりきませんね。
それでも、扉を開けない訳にはいかないので……私の怯えを表わすかのように、ゆっくりと扉を開けました。

「シャ、ル……？」
「アリサ！？」
「あ、の……その、怪我は、」
「アリサッ！」
「きゃっ！？」

視界が回転して、身体にはちょっとした浮遊感。

そして、体には少しの重み……飛び付かれました……？

どさっ

あぅっ……受け身を取り損ねました。

「よかった……アリサが怪我してなくて……よかった……」

「あ、ぅ……」

抱きつかれた勢いで背中から床に落ちてしまったので息が……

シャルは、私のことを心配してくれていたんですか……？

自分は捕まってしまっていて、どんなふうに扱われるかも分からなかったのに？

私が最後にシャルに向かって言った言葉が、大嫌い……なのに……？

「よかったよぉ」

「けふっ……あの、立てないので……」

「あっ……ごめん……アリサの気持ちも考えないで……」

「え……？」

シャルがなにかよくないことに気付いたかのように、パッと離れてしまいました。

私の気持ち？

今の私の気持ちは……なんでしょう？

嬉しいし、恥ずかしいし、ちょっと怒ってますし、やっぱり少し哀しいですし……でも、悪い気分じゃないです。

「んと、アリサ……ゴメン、ね？」

「へ？」

「僕はね……多分、心のどこかでアリサなら笑って許してくれるって……ううん、我慢してくれるって、勝手にそう思ってた」

シャルが言っているのは……飛行機での、アレですか？

……あれが起きてからまだ一日と経っていないんですねぇ。

結局、シャルに対して怒るなんてこと、私にはできないんでしょうね。

「シャル、もういいんですよ。私はもう怒ってません」

「違うの……アリサが怒ってるから謝ってるんじゃないの。僕が……僕がアリサを傷つけたから……」

「いえ、ですから、」

「誤魔化さないでいいよ……？」

本当に誤魔化してなんて……

私は、本当に……今、シャルが私に触れて、見て、話しかけてくれるだけで……

「シャルが私のことを都合よく扱っても、他の人のために私に我慢させ、ても……シャルが、私のことを見捨てないでいてくれるなら……それだけで、」

泣いちゃダメです。

今泣いたら、本当にシャルが私を傷つけたってことに……涙なんて、見せられません……

「ごめん・・・！　アリサ、ごめんね！　僕、そんなつもりじゃなかったけど……それでも、アリサにたくさん我慢させてたんだね……？　嫌だったよね……？」

「違っ！　そんなこと……！」

そんなこと……そんなこと……
口に出して言ってしまったら、シャルに嫌われてしまいます……
だって、私は、本当は……

「そんなこと、ある、わけがぁ……ぐすっ」
「ごめんね……」
「だから、謝られることなんて……」

ぎゅっ……

「ふぇ……？」
「我慢、しないでいいよ？　全部、悪口でも何でも……吐き出して……？」
「あ……ぅ……」

シャルが、優しく抱きしめてくれました。

「今、全部言ってくれたら……多分、僕たちはもっと仲良くなれると思うの。ね？」

本当に……ですか？
私、すごく自分勝手なことを考えていますよ？
本当に、腐った生ゴミみたいに……最低と最悪の乗算の結果みたいに……マイナスの要素しかない、そんなドロドロなことしか、出てきませんよ？

「大丈夫……僕を信じて？」
「あぅ……」

こんな風に抱き締められて、そんな目で見つめられて、そんな声で信じてなんて言われたら……もう……

「私は、」

我慢、できません……！

「私は、クラスの誰よりも、自分よりもシャルを優先してきて……そもそもシャルをずっと護ってきたのは私で……それは誰かからの命令ではなくて私がしたいからそうしていたということで。私が、一番シャルの近い場所にいていいはずなのに……！」

一度、口を開いてしまったら、もう止まりません。

支離滅裂なのも分かってますけど……それでも、私は……

「私はシャルと仲良くしたくて……シャルの隣にいたくて……シャルに誉めてほしくて……だから頑張ってるのに！　誰も、誉めてくれなくて……私ならできて当然って……私にだって、できないことは沢山あるのに……！」

鈴ちゃんみたいに前向きでいられないし、セシぃみたいに全部を俯瞰できません。ラウラさんみたいに自分に自信はないし、織斑君や篠ノ之さんみたいに素直に回りの力を借りることも……出来ません。

シャルみたいに、周りに気を遣うことも……できません。

だから、私が唯一できる戦うことで、シャルの役に立ちたいのに……それでも、私は沢山いる専用機持ちの一人というだけで。

戦うことじゃ、シャルにとっての唯一になれないのに……それでも守り続けたくて……

「ずっと、シャルを守ってるのに……シャルは私よりも他の人のことばっかり気にして……私が喜ぶようなことをしたら、それきりで……シャルの方からは、全然、なにもしてくれなくて……シャルは、人のことばかりでら私のことなんてぜんぜん見てません。私くらい、シャルのために生きている人はいないのに、シャルは……気にしてくれてません……近くに、いさせてくれません」

本当に、こんな自分勝手なことをばかり……でも、私はシャルを独り占めしたいんです。

他の誰とも話してほしくないです。

私のことを離してほしくないです。

ずっと一緒に……いたいんです。

「アリサ、泣かないで？」

「……泣いて、ません」

「泣いてるよ。ほら……」

「ぅぐ……」

私の一撫でしたシャルの指は確かに濡れて、光を反射しています。

「これは……あ、汗ですっ！」

「ベタだね……」

「ぁ……ぅぅぅ！」

ぱくっ

「はぇ！？　あ、アリサ！？」

私の目の前に出されたシャルの指をくわえてやりました！

「ふふむ（ふふん）。ほうふへあ（こうすれば）、わらひはあいはひょうほはんへ（私が泣いた証拠なんて）……！」
「ちょ、アリサ、くすぐったいよぉ！」

ん……シャルの指、ちょっとしょっぱくて……

「おいひぃれふ（おいしいです）……」
「っ……！」
「ふふ、ひゃる（シャル）、はおおはあっはれふ（顔が真っ赤です）」
「あ、アリサ、ほんとにダメだって！」

なんでしょう。
最初はちょっとした出来心と好奇心だったのですが……顔を真っ赤にして、でも指を引っ込めないシャが……なんといえばいいのでしょう……なんというか、愛しいです。
指の腹を舐めると、シャルがピクリと反応してくれるのが楽しくて、嬉しくて……癖になっちゃいそうです……

「……こほん」

そこに響く第三者の咳払い。
……っは！？
そうでした、こんなことをしている場合じゃありませんでした！
早くシャルを連れて逃げないと……！
……でも、まだせっぱつまってないのでもう少しくらいなら……

「篠ノ乃箒、お姉さまはどうして私達に一度気付いて動きを止めたのに、また行為を再開したのでしょうか？」
「いや、変態（アリサ）の考えることは私にも正直あまり理解出来ない」
「それにしても仲直りの手段が押し倒して相手の指を優しく愛おしそうに舐めることだなんて……お姉さまもなかなか激しい方ですね。

きっと変態性癖の持ち主が多い私たちの隊に入ってもやっていけますね」

「あ、あああアリサっ！　箒と、えっと……」

「……シュヴァルツェ・ハーゼの参謀、エリーです」

「とにかく見られてるからっ」

……っは！？

そうでした、こんなことをしている場合じゃありませんでした！

早くシャルを連れて逃げないと……！

……でも、まだせっぱつまってないのでもう少しくらいなら……

「もうひょっと……」

「セシリア・オルコット、何となくですがお姉さまは思考をループさせている気がします」

「そうですわね。それは私にも何となくわかりますわ。というか、多分私達にみられたのが恥ずかしくて現実逃避をしているのでしょう」

「なるほど。さすがお姉さまの幼馴染です……それにしてもお姉さま、私に向けてお尻をふりふりするということは……誘われているのでしょうか」

「むぅっ！？」

背筋がぞわっとしました！

なんというかお尻の穴から氷を入れられたような、そんな嫌なひんやり感に襲われて……ついシャルを起こしてその背中に隠れてしまいましたよ。

……エリーさん……ですよね？

まったく、エリーさんに対して怯えるだなんて私もどうかしてます。

「では、お姉さまも正気に戻りましたし行きましょうか」
「そうだな。早くラウラたちを手助けしなければ」
「きっと、苦戦していますわ」

ん、セシぃも助かったんですね……
織斑君はなぜかエリーさんに後頭部を踏みつけられていますが…
…あぁ、なんで跳ね除けないのかと思ったら、エリーさんの服、ＩＳですね。
……エリーさんが背後に回した手からウィンウィン音がするのは気にしないでおきましょう。
一体どういう教育を受けたら十二歳であんなにアダルティになるというのでしょうか。

「アリサ、行こっ？」
「……また、シャルは他の人たちのことを気にして……私は、シャル以外のために戦いたくありません」
「アリサ……」

……なんて、冗談ですけどね。
ちょっとくらい困らせたっていいですよね？
私は、シャルがお願いしてくれればなんでもします。
だから、お願いしてくれるだけで……シャルのためになにかできると思わせてくれるだけで幸せです。

ぎゅぅ……！

しゃ、シャル！？

「じゃあ、僕がアリサの代わりに戦うよ。だから、後ろから応援してね？」

「あぅ……もう、冗談ですよっ！　戦うことしかできない私が戦わないわけないじゃなですか！」

まったくもう。

シャルのためなら戦うのだって幸せですって。

「……そんなことないよ？」

「へ？」

「戦わなくても、いてくれるでいいんだから」

73. La chose qui est laiss?e finale

エリーが……
おかしい、最初の頃はただアリサをお姉様と（百合的な意味ではなく）慕うだけの少女だったのに……
まぁ、これも黒兎隊の魔力ということで（

シャルロットが囚われている間の心境も書こうかと思いましたが、蛇足になりそうな気もしたので自重。
どういう心変りがあったかは隠していた方が後々楽しい気がしますしね。

追記！
作中で登場したスクワートゥ・スタームは竜華零様のソードビット（ガンダム００）
小型ＩＳ整備機も同じく竜華零様より寄せられた兵器案をもとにしました。
ありがとうございました！

74. C'est vite comme une chute d'eau

「それは滝に変わる川のように」

ここから加速です。

なんだか難しかったなぁ・・・

74. C'est vite comme une chute d'eau

「シャルロット・デュノア、貴女のＩＳです」
「あ……私の。取り返してくれたの？」
「えぇ」

……あれ？
でも、エリーさんはシャルだけ助ければよかった私と違って、セシぃと織斑君の二人を助けなきゃいけなかったんですよね？
その上、皆さんの分のＩＳも取り返すなんて……いくらなんでも早すぎじゃないですか？

「お姉様、急ぎましょう。そろそろ隊長たちも苦戦し始める頃です」
「へ？　でも相手は無人機ですよね？」
「鳳鈴音と隊長は模擬戦をしていたのでエネルギーは殆どないはずです。副隊長もいますが恐らく戦闘機を食い止めるだけで精一杯でしょう」

なるほど。
でも、ここから外に出るまでには結構な時間が……

「お姉様、私の指差す方向に向かってお姉様の超大型ガウスカノンを撃ってください」
「えと……白狼（ウルフズロアー）の咆号のことですか？　ちょっとこの狭さでは……」

砲身だけで数メートルありますし、そもそもカゲロウを完全展開するだけのスペースも……

「それならお任せください。私はこの基地と繋がっているので。こ

ほん……Ｃｏｄｅ：：Ｓｃｈｗａｒｚｅｒ　Ｆａｄｅｎ……区画権利の掌握……完了。警報機器類、停止。ブロックＦ４３区域の隔壁開放……」

エリーさんのＩＳが……基地自体と繋がっている……？

エリーさんの声に反応して廊下の壁が次々と開いていきます。

数秒のうちに私たちの周囲には十メートル四方の部屋が出来上がりました。

驚きはしましたが、ここは戦場なのでカゲロウを完全に展開、続いて白狼（ウルフズロアー）の咆号の展開とエネルギーチャージを開始します。

「エリーはこうやって俺たちを助けてくれたんだ」

「なるほど、確かに基地の構造自体をいじれるなら最短距離で進めるから私よりも早く……」

「今は内部にいるテロリストの殆どを閉じ込めています……思ったより簡単で拍子抜けでしたが……」

何かに集中しながらそう言うエリーさんの横顔には愉しくて仕方ないというような微笑。

もしかして、私も戦っているときはあんな顔なのでしょうか……？

「当該区域の生体反応ゼロ……お姉様、どうぞ」

「いきます……！」

白狼（ウルフズロアー）の咆号は右腕の装甲と同化してしまうので発射のための引き金はありません。

必要なのは、ただ撃つという意思だけ。

そして、覚悟がないと安全装置が発動して射てないのです。

「発射！」

光の速さにも届くかもしれない砲弾は壁に大穴をあけ、床と天井を削り取りました。
音速を超える破壊のため、破壊音の方が遅れて響きます。

「これが……第二世代型兵器の最終到達点ですか……」
「まだ五割ほどの充填率でしたけどね」
「つまり、威力はまだ上がると……？」
「そんなところです」

とはいっても、威力が高すぎて一定以上の充填率になると違いが分からないんですけどね。
まぁ、この穴の大きさならＩＳを展開しても十分通れますね……ですが、この基地の修理費とかどこからでるのでしょう……？
もし国税からなら……ドイツ国民の皆さん、ごめんなさい。

「今ので戦車も随分と壊せましたね」
「ん、見えるの？」
「ええ、私は今はこの基地と同一のものになっていて、この基地は衛星画像も見れますからね」
「へー……エリーちゃん、でいいかな？　すごいね！」
「それほどでも」

視界の向こうではシャルとエリーさんが話しています。
……エリーさん、ろりまぞのくせに、なんで撫でられて満更でもなさそうなんですか！いえ、本当は、エリーさんは優しくされるということを知らなかっただけなのは分かってますけど……
人工生命という特殊な生まれと軍隊という特殊な環境のせいでその考え方が歪んでしまっていたことも……
そのことは可哀想ですし、だから私も抱き締めましたが……

「また……誉めてくれないんですね……」

確かに、エリーさんが指示した方向に白狼（ウルフズロアー）の咆号を撃っただけですし、その白狼（ウルフズロアー）の咆号も開発したのは私ではないので……基地を操って、ちゃんと指示ができていたエリーさんの方がすごいのは、分かってます。

でも、少しくらい私を贔屓してくれたって……

「エリーちゃん、じゃあ、こういうのって……」

「……ええ、まぁ。ですが……」

「残りでも……」

「お姉様は……」

「でも、そもそも僕たちは……く」

「……分かりました」

あぅ……内緒話まで……

誉めてほしいって、近くにいたいって……拒絶されるかもしれない怖さを我慢して、頑張って、言ったのに……！

「では、行きましょう」

仕切るのはエリーさん。

いつもなら、それは私の役目なのに……エリーさんに、シャルも、リーダーの役目も取られちゃいました。

でも、私はシャルのために戦うって決めましたからね。

「じゃあ、私が先頭でっ！？」

がんっ！

横からの衝撃に対処できず、そのまま吹き飛ばされました。
一体、何が……？
なにかに、のしかかられているようですが……？

「エリーちゃん！」

シャル！？
……なんで？
どういうことですか？
私は、戦わないと……シャルが誉めてくれるくらい、活躍したいのに……
どうして、そのシャルが私の邪魔をするんですかぁ……

「……ブロックＦ４３区域の隔壁閉鎖。セシリア・オルコット、篠ノ之箒、織斑一夏、彼女たちは戦闘に参加しません。行きますよ」

ちょっと怒った表情のエリーさんと、困惑している三人。
やがて、その顔も隔壁によって隠されてしまいました。
あぁ……もう、戦えません。

「シャル……？　なんで、戦わせてくれないんですか？」

私の四肢を抑えているシャルに問いかけます。

「アリサは……戦いたいの？」
「質問に質問で、」
「答えて」

……なんでですか？

今は戦うべき時で、私は戦いに行こうとしているのに……どうしてそれを邪魔するシャルが真剣なんですか？

「あの、こんなこと、してる場合じゃ……」

「答えて。アリサは、戦いたいの？」

そんなの……だって、シャルに誉めてもらうには、見てもらうには私にしかできないことをしなきゃいけなくて……

それで、もう私には戦うことしか残ってなくて……それしかできないから。

だから、誉められるには戦うしかなくて。

誉められたいから、戦いたくて……

「戦い、たいです……」

「嘘つき」

「え？」

嘘つき……？

……そんなことはありえません。

だって、戦うことしかできない私ですから、戦うことこそが私のレゾンデートルで……だから戦うことを放棄したら、私にはなんの価値も残らないんですよ？

それなのに、戦いたくないなんて思うわけが。

「まぁ、アリサが本当に戦いたいんだとしても、僕は行かせないけどね」

「なん……で？」

「簡単だよ。僕がアリサに戦ってほしくない。特に、今回は絶対に……」

「どうして、ですか？」

「……アリサは、戦うこと以外にできることはあるでしょ？」

そんなこと……ないです。

勉強なんかは誰だってやればできることで、お化粧だって鈴ちゃんは誉めてくれますけど三好さんの真似っこです。

「戦うこと以外で唯一の特技だったケーキ作りも……もう作れません……」

「……人を殺した自分が、誰かを喜ばせていいのか分からないから？」

「っ！？」

……なんで、分かっちゃうんですか……？

誰にも話したことないのに……どうして？

「可哀想。気にしてないふりしてても、やっぱりトラウマにはなってたんだね……？」

「トラウマ……なのでしょうか？　ただ、人殺しの作ったケーキなんて血の臭いしかしないんじゃないかと思ったら……」

そしたら、考えてしまうんです。

ケーキを作っているこの手で、また誰かを殺してしまうのではないかと……

それが怖くて……手が止まってしまうんです。

「人を殺すことには、もう躊躇しません。でも……だから、ケーキも作れませんし、他の取り柄だって……」

「大丈夫、きっと作れるよ」

「っ……作れません！」

なんで、そういうことを言うんですか……！
もう、ケーキ屋さんになることは諦めているのに……一生、戦っていこうって思っているのに……いくらシャルでも、酷いです。

「作れるよ……今、作れなくても絶対にまた作れる。一人で作れないなら、アリサが一人で作れるようになるまで僕が手伝うから……アリサを戦わせてたのは、僕みたいだしね」
「違っ……！　私が勝手に！」

シャルは、一回も私に戦えなんて言ってません……だから、シャルが責任をとるみたいな言い方……
私が、勝手に戦ってただけなんですから。
半分以上は私の自己満足で……

「じゃあ、今度は僕が勝手にアリサを助ける。アリサが戦わなくていいように。ケーキを作れるようになるまで……ずっと、ね？」

あ……ぅ……
そんな……プロポーズみたいなこと言わないでくださいよ……勘違いしちゃうじゃないですか。
そんなこと言っても、結局、シャルは男の人と結婚してしまうんですから……！

「それに……アリサは、戦闘機とか戦車とかと戦ったんだよね？」
「はい……」

また、話が飛びましたね……？

「だから、余計に戦わせたくないの。今回は無人機だけど……思い出しちゃうかもしれないし。それで、またアリサがなにか嫌な思い

するのは……嫌だよ」
「シャル……でも、私は専用機持ちなんです。海で、私達は篠ノ之さんを戦わせました。彼女が専用機持ちだったからです。あの時、篠ノ之さんは戦ったのに、私が戦わないのは……筋が通りません」
「そうだね。アリサならそう言うと思ってた。だから……」

だから……？
シャルが私の上からどいて、正面に立ちました。戦場に背を向けるように……
そこまで分かっているなら、私が絶対に心変わりなんてしないことも分かっているはずです。
だって、戦わなくていい理由がありません……

「ここで、僕がアリサを倒す。気絶させてでも、ここは通さないよ？」
「そんな……」
「戦いたいなら、邪魔する僕を動けなくなるまで痛めつけるしかないよ？　アリサ、どうするの？」

……ズルいです。
私はシャルのために戦おうとしてるのに、そのシャルを倒さないといけないなんて。
勝っても負けても……私にメリットがないじゃないですか！

「シャルは……」
「うん？」
「シャルは、これから同じことがあるたびに私の前に立つつもりですか……？」
「ううん。今回止めて、それでおしまい」
「へ？」

馬鹿に……してるんですか？
私、物覚えはいい方ですけど、物分かりは悪いですよ？
それに、一度止められても、シャルのためなら何度だって、

「アリサは、戦えないよ」
「……っ！？」
「だって、今回戦わなかったら、戦場にアリサの居場所はなくなるから。一夏と箒がいればどんな戦争だって止められる。確かにアリサはＩＳ同士の戦いなら一番強いけど、ＩＳより脆い戦闘機とかが相手なら誰でもいい。アリサじゃないといけない理由なんて……どこにもないよ？」

それは……私がいらなくなるってことですか？
皆が、私のことを必要としないで……いてもいなくても同じと……そう捉えるようになるってことですか？
戦場に居場所がなかったら……

「私の居場所は、どこですか……？」
「どこでもいいんじゃないかな？」
「そんな無責任な！」
「そうかな？」
「そうです！　だって、居場所がなくなったら、私、どこにいけばいいんですか？　私は、どこで必要としてもらえるんですか？　私なんて……戦わせる以外の使い道ないのに……」

……ケーキも作れないですし。
ううん。
鈴ちゃんがいなければ、きっと料理も作れません。私が作らないと鈴ちゃんのお腹が減っちゃうから……そういう義務感で作ってる

だけで、誰かを喜ばせるためだと……作れません。
人殺しが誰かを喜ばせていいのかわかりません。
人を殺して喜ばれるのは、戦場でだけですから……

「なら、アリサの居場所は僕が作る……だから、もう戦わないで？」

その言葉と一緒に、シャルはラファールを引っ込めました。
まるで、もう私に戦意がないと思っているみたいに……
でも、シャルを怖がらせたくないので、私もカゲロウを簡易状態に戻します。
どうして……？
なんで、そんなことを言うんですか……！
シャルだって、いつまでも私といれるわけじゃないのに！
そうして、戦うことを忘れた頃に……シャルが男性とお付き合いしたら……私、捨てられちゃうんですよね？
そんなの……一番、辛いです。

「わかりました……なんて、言えるわけないじゃないですか！　今、確実にある居場所を放棄して、あるかも分からない新しい居場所を探すなんて！　それで、結局……そんなものがなかったら、私、死ぬしかないじゃないですか……」

誰にも必要とされないのは、本当に、辛いです。
そんな世界で生きられるほど、私は強くないんです……だから、必要とされるなら、そこが戦場だとしても私は行きます。
認めてもらえるのは嬉しいことですから……

「じゃあ、アリサは……世界平和を食い止めるためにアリサの力が必要だって言われたら力を貸すの？」
「それはっ、」

「世界が平和になったら戦場もなくなるよ？　やっぱりアリサは力を貸す方が正解なんじゃない？」
「そんなこと……」
私は……自分の居場所のために人を殺したりなんて……！
ですが、確かにそういうことになりますね。
シャルは、私をどうしたいんですか……？
こんな風に、私の矛盾を突きつけられても……
私、独りぼっちになっちゃうだけじゃないですか……
「……えと、まだ、戦いたい？」
「……はい。だって結局、私の居場所は戦場にしか……」
シャルの言うように、世界が平和になったら居場所もなくなりますが……そうなったら、諦めます。
少なくとも、平和になるまでは私を必要としてくれる人はいるでしょうから…
「じゃあ……居場所ができたら、戦わない？」
「それは……」
でも、戦うのをやめるのは……
他の人はみんな戦っているのに。
それに……シャルの言った通り、今回戦わなかったら、多分私は戦えなくなっちゃいます。
「迷うってことは……やっぱり戦いたくないんじゃない……？　さっきの、僕のため以外には戦いたくないって言ったのも、本当は……」
「……いえ、そんなことは、」

もう……やめてください。
お願いです。
これ以上、私を悩ませないでください……！
戦える人が戦う……それで、いいじゃないですか！
私は戦うって言ってるのに……どうして、止めようとしてくれるんですか……？
私のことなんて……気にしないでいいですよ……私が、勝手にシャルのために動きますから、シャルは、たまに私のことを誉めてくれれば……

「アリサの居場所は……すぐに作れるよ」
「ぇ……と。どういう……意味ですか？」
「こういう意味」

シャルが、一歩私に歩み寄って腕を取り……私を引っ張りました。
予想外だったので、転びかけてしまいましたがシャルが支えてくれたのもあって、なんとかこらえられました。
なんだか、抱きついているみたいな感じです……シャルも、抱き締めてくれればいいのに……

ぎゅぅ……

「ふぁ！？」

あ……れ？

「シャル……？」

なんだか、いつもと様子が違います……？

いつもは、包み込むように優しく抱き締めてくれるのですが……
今は子供みたいにがむしゃらな感じがします……

「あの……少し、苦しいです……よ？」

シャル……？
どうしちゃったんですか？
ど、どうしましょう……？
えと、とりあえず……抱き締めかえしてみようと思います。
……なにがしたいのかは分かりませんが、私はシャルを拒絶したりしませんよ。
だから……思うところがあるなら……話してほしいです。

「シャル……」
「ごめん……僕、またズルいね」
「……え？」
「アリサのことだけ追い詰めて……僕自信は安全を保ってて……でも、怖いから……」

あの、シャル？
さっきから全然、まったくこれっぽっちも意味が分かりませんよ？
どうして、シャルが辛そうな顔をしているんですか？
……シャルが辛そうにしているのをただ見ているのは辛いです。
私がどうにかできるなら……言ってくださいよ……

「アリサ……嫌だったら、跳ね除けてね？」
「え？　シャル？　それはどういむぐっ！？」
「ん……」

はぇ？

シャルの顔がアップです……
目も閉じているので、シャルの睫毛の長さどころか本数まで数えられそうで……
その整った顔立ちにため息をはいてしまいそうになりますが……
シャルがそれを許してくれません。

だって……シャルの唇が、私の口を塞いでますから。

シャルの唇……熱いですね。
もしかしたら、緊張しているのかもしれません。少し乾き気味です。
リップ塗ってなかったんですね……女の子の身嗜みだって、いつも言ってるじゃないですか……

ねぇ、シャル……どうして……キスなんて、するんですか……？

75. En premier pas（前書き）

「最初の一歩」

ニヤニヤ病の人はトイレで読んだ方がいいかもしれません（

75. En premier pas

さて……お姉様は置いてきてしまいましたが戦力は十分です。
彼女が何を思って私にあんなことを頼んだかは分かりませんが……

―アリサと僕を置いてって―
―は？―
―お願い！　……アリサのためだから。もう、アリサを戦わせたくないの―
―……お姉様が、そう頼まれたのですか？―
―ううん。僕の勝手―

どうして戦わないことがお姉様のためになるのかが分かりませんが……まぁ、私はお姉様と出会ってから数時間しか経っていません。
私よりも付き合いの長い方がお姉様のためと言うならそうなのでしょう。

「皆さん、準備はいいですか？」
「ああ、任せろ」
「無人機程度、わたくし一人でも十分ですわ」
「俺は……まぁ、エネルギーも満タンだしいけるだろ」

まぁ、先に出ていた隊長たち三人に含めここにいる三人ですから……五分とかからないでしょうね。
多目に見積もって戦闘時間は十数分。その後、警戒を続けて問題がないようなら破壊した無人機を回収。調査の後、再利用に回すことになるでしょう。

「さあ、行きましょう。篠ノ之箒、セシリア・オルコット。二人は

戦闘機を、私と織斑一夏で戦車を破壊します」
「分かりましたわ」

いい返事です。
隊長からのデータによれば彼女達は遠隔攻撃と空中制動力に主眼と置いた機体のようなので戦闘機を相手取ってもらうのが一番でしょう。
織斑一夏も一応、荷電粒子砲という遠隔攻撃手段を持ってはいますが……戦闘機を落とすには過剰な威力な上、エネルギーの無駄が多すぎます。なので彼は私と同様に物理的な攻撃力をもって、陸の戦車（のろま）を踏み潰しましょう

「なにかしら亡国機業の情報が分かる可能性もあるので、可能な限り破壊は最小限にお願いします」
「了解」

数十年間、存在は確認されていても規模や目的、本拠地など重要なことは何もは掴ませなかったあの組織のことです。きっと尻尾を掴めるとは思いませんが、一応ということもあります。
なにより相手は犯罪組織。
破壊した戦車や戦闘機に使われている金属や装備などはそのまま私たちが回収できます。
その中から再利用しても処理できない、もしくは資金を使って再利用するだけの価値が無いものだけをＥＵか国連に処理をお願いすればいいことです。
すこし小賢しいですが、亡国機業は世界の敵ですからね。
それくらいのお願いなら彼らも叶えてくれるでしょう。
戦闘において実弾をほとんど使わないＩＳはコストパフォーマンス的には最高です。今回の事件においてのドイツの損失はショートカットのためにお姉様に壊して頂いた基地の壁と、隊長がトリガー

ハッピーよろしく砲撃しているレールカノンの弾薬分だけです。
　そして、戦線に参加している他の国の協力者たちの装備もエネルギー兵器。ＩＳのエネルギーは勝手に回復するので、多少のお礼として資金を融通すれば事足りるでしょう。一番お金のかかるフランスが戦闘に参加していませんからね。

「お姉様もシャルロット・デュノアも、実弾主義のような傾向があるようですからね……」

　二人のデータを見る限りでは……ですが。
　お姉様はそもそもＩＳの装備の中で一番使っているのが、打撃の威力を少し上げる程度にとどまる疑似エネルギー刃発生装置の狼鋲（ヴリコネイル）です。お姉様の装備の中では一番ダメージを期待できず、かつ、リーチが短く有用性の低い装備です。
　その他の装備は、例えば相手の攻撃を撃ち落とすためであったり、もしくは土煙を立ててお姉様が有利になる戦場を作り上げるためだけの舞台装置……兵装で戦わないなど、お姉様の尋常ならざる体術があってこその戦闘方法でしょう。
　隊長からの報告には、お姉様の特徴はハイパーセンサーとの強いリンクとエネルギー効率の良さ、というようにありましたが……私からしてみれば、お姉様の強さの根元はあの変幻自在とも言える体術にあるように思えます。
　ＩＳも基本的には人体構造に則って造り上げられているわけですから、その弱点も自然と似通ってきます。もちろん、その弱点はエネルギーシールドでカバーされているのですが……機体自体に影響を与えず、内部の人体を破壊することも理論上は不可能ではありません。そして、機体に影響が無ければエネルギーシールドは全く反応せず、全てのダメージは操縦者に向かうことになります。
　それが出来るお姉様がいる限り、フランスはきっと第三世代型ＩＳを開発してもエネルギー兵器には力を入れないでしょう。開発コ

ストだけが無駄に掛かりますからね。

「では、散開しましょう」

せっかくですから、お姉様と並んで戦いたかったのですが……どうやら戦わない方がいい理由があるようですし、ね。

戦力も足りているのですから、お姉様の手を煩わせることもないでしょう。

万が一とはいえ、お姉様が怪我をする可能性もあるのですから。

「しかし……」

右腕に装備している巨戦斧（タイタン）を横薙ぎに振るって戦車を数台まとめて叩き潰しながら、ふと考えます。

……なぜ、私は会って数時間の女性をお姉様と呼ぶほどに敬愛しているのでしょうか？

いえ、きっかけは分かっています。

お姉様が私を抱き締めてくださったとき、私の中でなにかが変わり、それがお姉さまを求めているのだと思います。

そういえば、シャルロット・デュノア……彼女に撫でられたときも、少しだけ同じ感覚がしました。

体幹が疼くようなむず痒さとくすぐったい熱を感じます。

これの正体は分かりませんが……彼女が私のことを撫でたときの状況から、この戦いで役に立てばきっとお姉様も私のことを撫でて下さるに違いありません。

だから、私は……

「……？　ここら辺はもう終わりですか？」

屑鉄の山をひたすらに築くだけです。

さて……これくらいでは、まだ足りないかもしれませんね。

◇

「……っぷはぁ」

息苦しさを感じて、無意識に唇を離します。

……これで、何度目のキスなのでしょうか？

私は、最初の一回で判断能力を失って……ただ、シャルの動きに合わせて唇を当てているだけです。

本当は……私はシャルのことが大好きなので喜ぶべきなのでしょうが……唐突すぎて、何も分かりません。

シャルはどうして私にキスなんてするんでしょう……？

「抵抗……しないの？」

「シャル……ん……」

また……

啄むようにして、押し付けるようにして、そして唇を唇で挟みこむようにして……息継ぎも忘れて、ただお互いに口を塞ぎ合います。

……あぁ、そっか。

そのままの意味で、私の口を塞いでるんですね……？

私が、何て言うのかが怖いんですか？

変態！

とか

キモチワルイ！

とか……そんなこと、言わないから安心してください……

だから……少しだけ、離れてください。

そう思って、シャルの肩を少し押します。

好きです。

愛してます。
私から、そう言わせてください。
なのに、

「んぅ！？」

シャルは離れるどころか、私を押し倒して……

「んぁ……ぁ……ん、ちゅ、んぅ…はぁん……」

ぬるりと熱くて小さな舌を無理矢理とも思える強引さで私の口に突き入れてきます。
口腔を犯されているような恐怖（えつらく）と、背徳的にも感じられる羞恥（かいかん）に攻め立てられて意識が飛びかけました。
シャルの舌の動きは拙くて、ただ、口の中を舐めるようにするだけで、決して気持ちよくはないのですが……それでも私の中心を熱くさせます。
シャルの唾液の淫靡な甘みに溺れたくなりますが……こんなのは、私が望んでいたことじゃありません。
だから、

「はん……んぅ…ちゅる…ん、んっ！？」

がぶり

「ふぁっ！？　は、はいは（アリサ）……？」

割と思いきり、シャルの舌を噛みました。
シャルも跳ねるようにして退いてくれました。もう泣き出す寸前というくらいに目が潤んでいますが、それはこの際仕方ありません。

ですが……口の中に残ったシャルの血が私には花の蜜のように甘く感じられます。
おいし……
「じゃなくて！」
「ひゃい！？」
……思考が欲望に走りかけたためについ大声を出してしまいました。
びくぅっと跳ねるシャルは可愛いですねぇ。
もちろん、私にもそんなことを考える余裕はないのですが。
確かに頭だけは若干冷静になりましたが、心は未だにドキドキと音がしていますし、芯から発生している火照りに身体は翻弄されています。少し気を抜けば、多分シャルを襲ってしまうでしょう。
だって……ようやく恋が叶いそうなんですから……
さすがに……これで冗談というのは、なしですよ？
「シャル……」
「ふぇ！？　へと……その、あの……ごめん」
「どうして謝るんですか？」
私は怒ってませんし哀しくもありません。
理由を言ってくれないことには嬉しいかと聞かれても少し微妙なのですが……
「ごめん……僕、弱いんだ。だから、言葉で伝えられる気がしなくて」
「それは……今の、キスのことを、言っているのですか？」
少し、期待に声が震えてしまう私の問いかけにシャルがコクリと

頷きました。

「私のことが……好きなんです、か？」

また、こくり。

……ダメです。

また、何も考えられなくて……息が出来なくなるような錯覚に襲われます。

心臓が強く自己主張をして、頭は熱でやられてます。本能だけがシャルの体温を求めますが……

まだ、です。

だって、シャルが怯えてますから……

「何が……怖いんですか？　どうして言えないんですか？」

「拒絶されるのが……怖いから。それに……女の子が女の子のことを好きになるなんて、考えたこともなくて……」

「……キモチワルイ、ですか？」

ぶんぶんぶん。

今度は音がしそうな勢いで首を横に振ります。

シャル……そんなに頭を振ったらクラってしちゃいますよ……？

「ふぁ……」

言った傍から……

少し眉をしかめたシャルをそっと引き寄せます。

安心させたくて一瞬だけ抱きしめて……そして膝枕をして横にさせました。

シャルの綺麗な金髪を出来るだけ優しく好いてあげながら微笑みかけて……問いを続けます。

「女の子のこと……いえ、私のことを好きになってしまったこと、後悔してますか……？」

首を振ろうとしたシャルの頭をやんわりと、でも確実に押しとどめます。

少し驚いたような顔をするシャル。

ふふっ……かわいいですね……

「声に出して……言って下さい。私が言うのもアレなのですけど……声に出してくれないと、信じられませんよ……」

「……その……後悔なんて、しないよ……だ、だって、アリサは可愛くて、強くて、優しくて……好きになったことを後悔するわけないでしょ？」

く、ぅう……！

嬉しい。

嬉しい！

すごく……嬉しいですよ!?

どうしましょう……私の顔、多分シャルより赤いです。

仕方ないじゃないですか！　私、シャルが私のことを知るより前からシャルのことが好きなんですから！

私の気持ちは、シャルのものよりずっとずっと大きいんです。

シャルは否定するかもしれませんが、それは私がシャルを好きになったあの日から時間をかけてゆっくりと私の中に育っていったものですから……

「……その、あと一言……シャルの本心が、聞きたいです」

わがまま、ですかね？

不安だから聞きたいんじゃなくて……ただ、聞きたい。
たった、それだけのために怖がっているシャルを余計に不安にさせるなんてこと……
多分、シャルももう私の気持ちを分かってくれていますけど、それでも不安だと思います。
だって……ありがとうございます、でもごめんなさい……そんなふうに私が言う可能性もシャルにとってはゼロではないんですから。
でも、それでも……

「私は……」
「……」
「私は……アリサのことが、好き、だよ？」

僕、じゃなくて私。
それが、なんとなくシャルの奥底からこぼれ出た真実（本当）のような気がして……私の中で、色鮮やかななにかが弾けました。

「私も、私もシャルのこと、愛してますっ！」
「愛しっむぅっ！？」
「ん……」

私の膝を枕にしていたシャルの背中に手を回し、その赤い唇にキスを一つ。
五秒、十秒、十五秒。
鼻で息をすればいいのに、お互いそんなことも思い付かないで、ただ唇を合わせていました。

「っぷはぁ……シャル、何度でも言います。私はあなたのことを愛しています。一生、愛します」
「ぁ、う……うぅ……」

シャルの目から、涙が一条こぼれました。

「あれ？　シャル……？」

「ふぐぅ……ちがう……泣いてないよ？　ちがうの、嬉しくて、安心して……」

「もう……私の方が、シャルのこと好きなんですからね……？　もう、三年間もずっと、想ってきたんですから……ぐすっ」

もう、私まで、前が見えなくなっちゃったじゃないですかぁ……

せっかく、今までで一番、シャルが近くにいるのに……

「ふぐっ……なんで、嬉しいのに泣いてるんでしょうね……？」

「嬉しいから、だよぉ……！」

75. En premier pas（後書き）

キスシーンがエロくかけたと思います。

76. Un partie de vainqueur（前書き）

「祝勝会」

こう、じわじわくる甘さを（ｒｙ

76. Un partie de vainqueur

「皆様、お疲れ様でした」

エリーさんが宴の席で中央のテーブルに立って挨拶をしています。

宴、といのも、なんと言えばいいのか分かりませんが……祝勝会？

まぁ、おおむね、そんな感じです。

「はい、あーん」

「ぱく……ん、これは？」

「アイスバインっていう豚肉を煮込んだ料理だって」

「なかなか美味です」

外では未だにドイツ陸軍の方々が無人機の破片などを撤去していますが、活躍したシュヴァルツェ・ハーゼ、および客人である私たちにはこのような会が用意されました。

用意されたといっても急なことでしたから少し豪勢なホームパーティのような雰囲気ですけどね。

「この度は見学に来てくださった客人の面々に迷惑をかけてしまいましたが、かえって私たちシュヴァルツェ・ハーゼのことをよく理解していただけたのではないでしょうか、と参謀役である私は考えます」

確かにそうですね……

あの戦闘がなければ彼らの凶暴性も見ることはできなかったでしょうし。

……シュヴァルツェ・ハーゼの皆さんはあれでた。寂しくて死んでしまうウサギではなく、一撃で首を斬り落とす方のウサギ。

あまり一緒に戦わなかった私でさえ、彼らの捉え方をそこまで逆転させられてしまったのです。きっと同じ戦場で戦った皆さんは、

「あーん」

「ぱく」

彼女らのことを随分頼もしく感じたのではないでしょうか。

まぁ、それよりもっと驚いたこともあるんですけどね。

「アリサ、クランベリージュースだって！」

「……うっ！？　すっぱぁ……」

戦闘が終わって間もなく軍用ヘリがシュヴァルツェ・ハーゼの基地に着陸、中から壮年の男性が現れたのですが……なんと、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちが怪我をしていないかが気になって文字通り飛んできたお偉いさんでした。

どの程度お偉いさんかというと……

「ラウラ、あーん、だ」

「っ！！？　お、お断りします！」

「なんだと、儂の言うことが聞けないのか！？　お祖父ちゃんの頼みだぞ！」

「いえ、私は試験管ベビーなので血縁関係は、」

あのラウラさんにあーん、を強制することができる程度の、

「ええい、ならば国防大臣としての命令だ！　ラウラ、口をあけよ！」

「っく……こ、これは職権濫用もがぁ！？」

国防大臣（お爺ちゃん）でした。
つまり陸海空、それに加えて戦力基盤軍とＩＳ部隊の総てを統轄する軍部のトップです。
なので、やってることがどんなにウザくても何やってんだお前とツッコミをいれられる人なんていません。
というかあのラウラさん相手に隙をついて肉を口の中に放り込むことが出来る辺りたっつ陣に違いありません。何の達人かはわかりませんけど。

「アリサアリサ！　仔牛のカツレツだって！　はいっ！　あーんして！」
「あーん……それにそも、ラウラさん、愛されてますねぇ」
「「「「「お前が言うな！」」」」」
「ひゃっ！？」

え？　え？　えぇ！？
なんで皆さん私に怒鳴るんですか！？
え、私なにか失敗しました？
いえ、そもそも今はパーティーなので失敗するもなにもありませんし……
あっ！
シャル、イチゴがありました！
確か、好物でしたよね……

「シャル、んー……」
「え、えぇ！？」

は、早くしてくださいよ！
結構、唇でイチゴを挟み続けるのって疲れちゃうんですから！

「しょ、しょうがないな……ん」
「ん、んぅ！？」

シャルがイチゴの先端をかじり取って、残りは舌で私の口の中に押し込みました。
も、もう……大胆ですね……舌先がちょっと触れちゃいましたよ？

「あの、シャル……イチゴって先端の方が美味しくてですね……」
「あ、ごめん……えっと……」

あ、違うんです！
ズルいとか言う訳じゃなくて、その、えと、分からないならいいんです！

「アーリサ、はい、んー……」

今度はシャルがイチゴを咥えて、ウィンクをパチリとしてから私に突き出してきました。
はぅ……シャルは私のことなんでも分かっちゃうんですね……

「は、はぁふー（はやくー）……！」
「あぁ、ごめんなさい！　……ん」

今度は私が先端を食べて残りを舌でシャルの口に……

「ん、美味し」
「……シャル」

スパァン！　スパァンッ！

「ひゃん！？」
「うわっ！？」

シャルと見つめあっていたらハリセンで制裁されました。
後ろを振り返ってみると……

「あ、鈴ちゃんにセシぃ……」

楽しんでますか……？
お顔がなんだか笑っていませんけど、イライラしてるときは美味しいものを食べて機嫌直しましょうよ。
私のおすすめは向こうにおいてあった、

「はい、アリサさんはこちらに」
「はい？」
「で、シャルはこっちねー」
「え？　え？」

ちょ、ちょっとセシぃ？
押さないでくださいよ！
というかシャルと私を引き離すなんてどういうつもりですか！
さすがの私も怒っちゃいますよ！　ぷんぷん

「ちょ、鈴ちゃんもどういうつもりですか！」
「あのねぇ……舞い上がるのも仕方ないと思うけど、少しは人目も憚りなさい」
「なんの話ですか？」
「シャルロットさんと好き合うことができて嬉しいのは分かりますが、さすがにいちゃいちゃしすぎで腹立たしいですわ」
「「え！？」」

思わずシャルと顔を見合わせます。
ど、どうして気付かれてるんでしょう!?
は、恥ずかしいからしばらくは隠しておこうってシャルと相談して決めたんですけど!?
おかしいです。
私たちの偽装は完璧だったはず……！
だって、あれからまだシャルとは一度も話してませんし！
ちょ、ちょっと見つめ合っちゃったりなんてことはあったかもしれませんが……それでも気付かれるほど長い時間ということもありませんし……というわけで、

「「付き合ってませんよ（ないよ）！？」」
「いや、アンタ達キスしてたじゃない」
「「へ？」」
「してましたわね」

……して、ましたか？
え？
してました！？

「しゃ、シャル……してたんですか？」
「えっと……あれ、そう言われてみれば確かに……？」
「ちょ、ちょっと、二人とも無意識でしたの！？」
「キスだけじゃなくて、あーん、までしてたわよ。普通に」

あれ、言われてみれば確かにいつの間にかお腹いっぱいになっている気がしますよ？
どうやらシャルも同じことに思い当ったようで……
うわ、うわぁ……！

そんなの、そんなのまるで、凄い仲がいい恋人みたいじゃないですか！

バカップルですよ、バカップル！

……えへへ

「無意識でもいちゃいちゃするなんてよっぽどねー……ごちそうさま？」

「あぅ……シャルぅ……」

「な、なんか恥ずかしいね……」

鈴ちゃんがチェシャ猫のような笑みで私たちを見ています。

ど、どうしましょう！

すごく……すごく恥ずかしいのに、なんだか凄く嬉しくて……うわぁ！

「二人とも、顔赤いですわよ？」

「い、言われなくても分かってます！」

だって、頭の中キャー！　ってなっててわけ分かりませんもん！

「しゃ、シャル……どうしましょう？」

「えと、僕に聞いちゃう……？」

「だ、だって、私、人とお付き合いするの初めてで！」

「僕だって初めてだよ！」

「知ってます！」

だって、ずっと見てたんですから……

いえ、ストーカーとかそういう訳じゃなくてですね……！

近くにいられなかったので、でも凄く好きだったので遠くから見ちゃってましたけど、決していやらしい気持ちがあったわけではな

くてシャルの身に危険が迫った時にすぐに守れるようにというか！

「お姉様？　何の話をしているのですか？」

「エリーさん！？」

「なにやらお顔が赤いですけれど……体調がすぐれないのですか？」

「えっ！？　あ、いえ、そんなことはなくて、えと、その、えーっと」

え、エリーさんはまだ十二歳。

男女の仲どころか女女な仲の私とシャルの関係を教えるのはさすがにまだ早いです……！

というか子供は純真がために時として悪魔になるとも言いますし……

何が言いたいかというと本当のことを言ったらキモチワルいとか言われるかもとか……なんだか懐いてくれているエリーさんにそんなことを言われてしまったら立ち直れそうにないです。

「や、やっぱり体調がすぐれないのですね！　なるほど、だから彼女もお姉様を戦わせないようにと」

「へ？　あの、エリーさん？」

「こちらに休憩できる場所を作りますのでついてきて下さい！」

「え、あれ、ちょっと、」

グイグイとエリーさんに引っ張られてしまいます。

抵抗しようと思えばエリーさんくらい簡単にポイ出来ちゃうのですが……一応、私のためを思ってくれているわけですし……

「そこ空けてください！　隊長と大臣殿もいつまでやってるんですか！」

「あの、エリーさ、」

「お姉様、もう少しですからね？」
「あ、えと……はい」

まぁ、いいです。

◇

「どうすんの？　とられちゃったわよ？」
「べ、別にとられただなんてそんな……」

そんなこと言ってるけど……さっきからシャルが連れていかれた方気にしてるじゃない……

それにしても、まさか本当にくっつくとはねぇ。最終的にアリサが身を引くとばかり思ってたから少し意外だったわ。

もちろん、アリサが泣かなくて済むに越したことはないけどさ。

「それで、どちらがどのように想いを告げたんですの？」
「セシリア、そんなのアリサに決まってるじゃない。あの子、ずっと前からアリサのこと好きだったんだから」
「あら、鈴さんもまだまだですわね。アリサさんが相手を苦労させることになると分かっているのに自分が幸せになろうとするわけないでしょう？　ねぇ、シャルロットさん？」
「えと……うん……」

へぇ……まぁ、言われてみれば確かに……じゃあシャルロットから？

つまり、アリサはこの子を落としたってことなんだろうけど……ついこの前までシャルロットは女の子が女の子のこと好きになるなんて有り得ないよ、なんて言ってたんだけどな。

アリサもやるわね……私も、一夏のこと、惚れさせられるのかし

ら……？

「それで？」
「へ？」
「なんて言ったの？」
「いや、えと、その……ひ、秘密！」

残念。
ちょっと参考にしようと思ったのに……まぁ、シャルロットが恥ずかしがって教えてくれないのは予想できてたし、あとでアリサに聞こうかしらね。
あの子ならむしろ聞かなくてもウザったいってばかりに惚気てくるでしょ。

「だ、ダメだからね！」
「へ？」
「アリサにも、聞いちゃダメだよ！？　アリサは隠し事できないし……」
「……先程の様子を見ていますとお互い様としか言いようがないですわね」
「そ、そんなこと、」

あるわよ。
むしろアリサはただボーっとしてたのにシャルロットが甲斐甲斐しく美味しそうな料理見つけてきては食べさせてたじゃない。
多分、シャルロットがアリサに近付かなければ気付かれることもなかっただろうにね。
アリサの周りにいた人たちはきっと全員気付いちゃってるわ。というかキスしてたから気付かない方がおかしいわね。

「まぁ、付き合っているのが発覚したのはシャルロットさんが原因といえば原因ですわね」
「ぅ……」
「あんだけお世話してればねぇ……」
「だ、だって、美味しいもの見つけたからアリサにも食べてもらいたくて……」

あーはいはい、ごちそうさま。
まったく。この調子でのろけられたらデザート食べる前に胸やけ起こしちゃいそうね。
早いとここの話も終わらせて、

「ですが、どうしてシャルロットさんはアリサさんを……？　アリサさんが女性を好きというのはわたくしも存じておりましたが貴女までそうだとは知りませんでしたわ」
「やっ！　僕は別に女の子が隙ってわけじゃないんだけど！　……アリサが好きなだけで……」

セシリア、どうして話を長引かせちゃうのよ！
確かに、シャルロットがいつアリサを意識するようになったかは気になるけど……これを聞いたらもう離れられない気がするわ。
そりゃ、私だって女だし人のことだとしても恋愛話にはごにょごにょ……

「えとね……その、僕達監禁されたでしょ？」
「えぇ、そうですわね」

あ～！
悩んでる間に始まっちゃったし！
……こうなったら腹くくって大人しく聞くしかないわね。

シャルロットがアリサのこと好きって気付いた時の状況を再現すれば一夏ももしかしたら私のこと好きになってくれるかもしれないし……

「それで、監禁された時に？」

「えとね、ＩＳも奪われちゃって監禁されて真っ暗で……普通なら怖くて仕方ないと思うんだけど……」

「……まぁ、さすがのわたくしも肝が冷えましたわ。ＩＳが無ければわたくしなんてほんの少し普通より格闘術を嗜んでいる程度の婦女子ですから」

私は何とか逃げ切ったけど……ＩＳが無かったら確かにヤバいかもね。

アリサとかラウラほどじゃないにせよ私だって素手同士でならそこらへんの男には勝てる自身もある。でも相手が装備してたらそうもいかないし……女尊男卑みたいな世界になっちゃってるけど、生物としてはまだ男の方が強いから、数で囲まれたらアリサレベルの達人じゃない限り負けるにきまってるし。

男に囲まれた女がその後どうなっちゃうかなんて想像するのも無駄よ。

「でもね、全然怖くなかったの」

「え？」

「それどころかアリサの心配ばっかりしててね。アリサのことだから捕まることはないだろうって思ってたけど、逆に下手に抵抗しちゃって酷い目にあってないかとか……なんか、僕がどうこうされるって言うのよりも怖く感じちゃって」

自分でも変だなぁとは思ってたんだけどね、なんて舌を出しそうな気軽さでシャルロットが笑う。

なんだろう。
本来なら自分のことを心配すべき場面でアリサのことだけを心配してたって言うシャルロットはなんというか……

「出征した騎士（ナイト）の帰りを待つお姫様（プリンセス）って感じね」
「なるほど、それは確かに言い得て妙ですわ」
「えぇっ！？　……まぁいいけど」

お姫様って部分になのかしら？　なんだか満更でもないような顔を一瞬してシャルロットが俯いた。
まぁ、最初は男装してたわけだけど、本人はそれだけで男に見えちゃう自分のことを随分気にしてたみたいだし、女の子なら一度は夢見るお姫様なんて配役（キャスト）を与えられて照れてるのかもね。
それでも私は騎士（ナイト）の隣で戦う女戦士（ヴァルキリー）の方がいいけど。
相手の帰りを待つだけだなんて窮屈で仕方ないわ。

「それで、自分が心配してる恋心（りゆう）に気付いたってこと？」
「うーん……多分そうだったんだろうけど」
「はっきりしませんわね？」

照れかくしで言葉を濁してるのかと思いきやシャルロット自身もなんだかよく分からなかったみたい。
首をひねって考え込んでる。
何この子。自分がいつアリサのこと好きになったか分からないってこと？

「ううん、いつ好きになったかって言うと……多分、学年別トーナメントで庇ってくれた時だと思う」
「ってなにそれ、二カ月以上前じゃない！　……全然気付かなかったわ」

「そりゃそうだよ。僕だって気付いてなかったもん」

あはは、なんて笑いながら食堂のおばちゃんみたいに手を縦に振るシャルロット。

……？

好きになってたのに、その時は気付いてなかったっていうの？

「じゃあ気付いたのはいつですの？」

「ん、さっきだよ？　だから……その、好きって言ったんじゃん」

気付いたから告白した……？

なんてこと！

シャルロットって乙女心の欠片もないわね！

言いたい、でも否定されるのは怖い！　そんな恋する乙女の機微ってものがこの子にはないの！？

……羨ましいわね。

私だって、今すぐにでも一夏に告白したいけど……あいつったら、キスだって簡単に流しちゃうんだからどうしたって臆病になっちゃうわよ。

俺も幼馴染として好きだよ、なんて言われたら立ち直れない……

そこで、満足しちゃうから。

「アリサが僕のことを助け出してくれた瞬間……あぁ、無事で良かった、助けに来てくれた……って……そしたら嬉しさが爆発しちゃって抱きしめてて」

「あれ？　押し倒されてなかったっけ？」

私達が付いた時にはむしろアリサがシャルを押し倒して、その指を咥えてたわよね。

だから、てっきりいつも通りアリサが暴走してただけだと勘違い

したわけだけど。

「いや、まぁ、そうなんだけど……その後アリサが僕に思ってたことと全部言ってくれて……それで、かな？」

「ふぅん……？　じゃあ、もうラブラブなんだ？」

「ら、ラブラブってそんな……」

顔真っ赤じゃない。

思わずニヤニヤしちゃうわ。

「もう、笑わないでよ！　ぼ、僕、アリサのとこいってくる！」

76. Un partie de vainqueur（後書き）

三日目いくかもしれないので明日はお休みー
次は一鈴話になるのかな・・・？

77. Une fleur（前書き）

「一輪の花」

タイトルはダジャレです（
鈴音のターン！

77. Une fleur

さて、シャルロットも行っちゃったし、あたしは……し、仕方ないから暇そうな一夏の相手でもしてあげないとね。
まぁ、どうせ女の子に囲まれて鼻の下伸ばしてるんだろうけど……うわ、考えただけで腹が立つわ。
……別に、あたしは一夏の恋人じゃないけどさ。

「少しは私のことも気にしろっての……鈍感なんだから……」

唐変木の朴念仁！
そもそも一夏は本当に男なの？
どうしてハーレム状態の学校で何もしないのよ……わ、あたしなんて手近にいる幼馴染なんだから手軽でしょ……？
いやいや、襲って欲しいとかそういう意味じゃなくて！
……それとも何？
やっぱり、あたしには女としての魅力が足りないっての？
そりゃ、胸はないし……言葉遣いも一夏に対する行動も荒っぽいかもしれないけど……

「それでも、あたしほど一夏のこと好きな女の子なんていないのよ……？」

興味と恋心の間で揺れてるセシリアは置いといて、ラウラには当然負ける気はしないし……
あたしより早く一夏と知り合ってた箒は厄介だけど、それでも私の気持ちが負けてるとは思わない。
微妙に警戒してたアリサもあの調子だしね。
もう、一夏にはあたしの初めての内の一つをあげたんだから……

少しくらいは気にしてくれたっていいじゃない……

「初めてだったんだから……キスだって、勇気いるのよ……？」

それなのに、夢だなんていう風に流されたみたいだし……しかも、その後でもあたしのことを意識するような素振りもなかったし……やっぱり、脈なしなのかな……

薄々、勘付いてはいたけど……キツいわぁ。

もう、なにされたって許せちゃうくらい好きなのに……愛してるのに……形にすることも許されないなんて……

アリサもこんな気持ちだったの？

……それなら、成就したのも羨ましいというより、よかった……あの子、いろいろ大変なのに、その上こんな想いまでしてたらパンクしちゃいそうだし。

ほんと、よかったわ。

よし……

「……一夏、ちゃんと楽しんでんの？　こんなの盛り上がらなきゃ損よ？」

「鈴か。まぁ、ぼちぼちやってるよ」

「なによ、お皿空っぽじゃない。分けたげよっか？」

「ん？　あぁ、いや、自分でとってくるから構わないぞ？」

……なんか、変ね。

まぁ、もとから遠慮したりしなかったり行動が一貫しないところもあるけど……なんか、今日のは違う。

うーん？

心ここにあらずというか……なんだろ？

どことなく、ネガティブ入ってるアリサにも通じるというか……

ほんと、なんだろ？

「一夏……どうしたのよ？」
「えっ？　や、別に、」
「大したことない？」
「まぁ、そんな感じだな」

ふぅん……

「それなら言えるわよね？　大したことじゃないんでしょ？」
「あぁ！？　鈴、はめたな！？」
「なんのことかしら？　ま、一夏はとにかく悩みを打ち明ければいいのよ」
「いや、別に悩みなんて……」

はぁ……この男は往生際の悪い……

「一夏、これでも、あたし、あんたの幼馴染。ドゥユアンダスタン？」
「や、ヤー……？」
「だからあんたのことくらい顔見りゃ分かるって言ってんの！　ほら……話しなさいよ」

なにを、自分で幼馴染なんて言っちゃってるかなぁ……？
そんな意図は無かったけど、変に距離意識しちゃって……心、痛いなぁ。
でも。
それでも一夏のこと分かってあげられただけでも気分よくなっちゃうんだから、あたしも大概お子さまなのかもね。
あーあ……まぁ、今は一夏に元気出させないと。
あんたが沈んでちゃあたしまで気分悪くなるっての。

「なんて言うか……俺はダメだなぁって思ったんだよ」
「は？」
「鈴とか不破さんとかさ、しっかり自分の身の安全を確保して、しかも解決に協力してただろ？」
「そんなの、一夏だって戦車薙ぎ払ってたじゃない」
あたしなんて足止めで精一杯だったわ。
しかも一夏はああいう複数の敵を相手取る戦闘は初めてだし、あれだけ働けたなら十分だと思うけど……良くも悪くも初めてだから自分の力量を掴めてないのかもね。

「いや、そうじゃなくてさ」
「なによ？」
「自分のことも守れないくらい弱かったのかって思ったらな……俺には、周りを守るくらいの力はあると思ってたけど、隙を突かれて白式をとられたら無力だった」
「それは……」
しかたないわよ。
少しは箒のところで古武術をやってたみたいだけど、一夏はついこの前まで一般人だったんだから。
年単位でＩＳを効率よく動かせるよう体術を鍛えてたあたし達より弱いのは仕方ないわ。

「白式に乗っても、不破さんに触れないし……だから、楽観的だった自分が情けなくてな……」
「なに言ってんのよ。カウンター以外でアリサに触れる人の方が少ないわよ。そんなんで自信失ってちゃ後が大変よ？」
「不破さんが強いのは知ってる……でも、女の子を守るのは男の役

目だろ？　捕まった皆も、下手したら酷い目にあってたし……だから、俺にもっと力があれば……」

相手が目的を忘れて箒達で快楽を得ようとしていたら……多分、どうしようもなかった。

一夏はその可能性があるのになにもできなかった自分が嫌なのね……バカなんだから。

「一夏、聞いて」

「……」

「あたし達は……あぁ、アリサはまた別の意味でだけど、自分を女扱いして貰おうなんて思ってない。ＩＳに乗ることを決めた時点で女である前に軍人なの」

「それは、」

「もちろん、普段は甘いもの好きだし、可愛いものも好き。恋だってしてる普通の女の子よ？」

でも、戦いになれば別。

女だから捕まればどうなるかなんてこと理解してる。

それでも、あたし達には責任があるから……例え犯されても自分の悲運を呪ったりなんてしない。すごく、嫌だろうけど……心のどこかでは納得してると思う。

少なくともあたしはＩＳの操縦者に選ばれたとき、それを覚悟するように言われた。

「分かる？　戦場であたし達を女だからって理由で気にしなくていいの」

「でも……嫌なんだろ？　だったら俺は……」

「ありがと……でも、だからって一夏に限界以上のことなんてしてほしくないの」

あんたがどうにかなっちゃ、元も子もないんだから……

「あたし達が戦う理由、分かる？」
「は……？」
「好きな人達のためよ」
「……」

皆がそうかは分からないけど……アリサはシャルロットを守るためだし、箒は一夏についていくためだから、あながち外れてないんじゃないかしら？
あたしは一夏の横に並ぶため……かな。

「一夏の不足はあたしが埋めてあげる。だから、無理なんてしないでいいわよ」
「でも、他はどうするんだよ……俺と鈴が良くたって、」
「あたしは、それで構わないわよ？」
「は……？」

一夏さえ、側にいてくれるなら……結局、皆のことを見捨てると思う。
私は一番弱いから……皆を守るなんてことはできないのよ。
あたしってバカね。

「それに……アリサもラウラもシャルロットもいるわ」

現時点でのスリートップ。
セシリアと箒も同じくらいの実力があるし……あたしだけが落ちこぼれ……

「大抵の敵は五人がなんとかしてくれるから、あたし達が頑張る必要なんて……」

戦うのが怖いから、楽したいから……そういう利己的な打算からじゃなくて、それはれっきとした事実。

だから、あたしは皆を守れない。

一夏を助けてあげること以外に興味がない。

「鈴は……皆が強いから任せきりにするのか？」

想像以上に冷たい一夏の声。

そりゃそうよね。

きっと、あたしに失望したんだわ。

だって、学校では周りを引っ張って、なにかと姉貴分な風を吹かせてるのに、いざ戦闘になったら自分ことしか考えないんだか当たり前よ。

でも……

「違うわ。あたしは一夏のことは、もう、誰にも任せない」

「は？」

「一夏のことだけを守りたいから、他を守る余裕なんてないの」

「鈴！？　ちょ、ちょっと待て！」

待たない。

せっかく、ここまで状況を作り上げたのに待つわけないじゃない。

抜け駆けだろうがなんだろうが構わないわ。

「一夏のこと、好きよ？　ずっと前から……」

「それは……恋、か？」

「うん。男として一夏を愛してる」

こういうのは言い過ぎってくらい言った方がいい。
言い残しがあって振られたら悔やんでも悔やみきれないもん。

「鈴、俺はお前のことを女の子として意識したことはあんまりない。だから、鈴に恋愛感情も、」
「他に誰か好きな子いるの？」
「え？　……あ、いや、いないけど」
「そ、じゃあ付いてきて」

そう簡単に振らせないけどね。
……覚悟もできてる。

「私を女の子として意識させてあげるから……」
「ちょ、鈴！？」

あとは無言で一夏の手を掴んで引っ張っていく。
場所ももう確認してあるし……

「鈴？　どっかいくの？」
「シャルロット……」
「シャル、野暮ですよ？　……鈴ちゃんが通った後は誰も通さないので安心してくださいね？」
「アリサ……ありがと」

なによ。
この子、やっぱり今日だってこと勘づいてたの？
……本当に、親友がいがあるんだから。

「これは、結局お姉さまの一人勝ちなのでしょうか？」

「どうでしょうねー。じゃあ鈴ちゃん、思う存分やっちゃってきてください」

一人勝ち、の意味が分からなかったけど気にしない。
というか気にしてられない……あたし、これから一夏と……
拒絶、されないわよね？
今、手を振り払わないってことは……期待してもいいのよね？

「お、おい、鈴！？」
「うっさい！　黙ってついてこい、バカ！」

もう！
恥ずかしいんだからあんまり話しかけないでよ……！
今、あたしの顔見たら承知しないんだからね！
……でも、ラウラと箒に見られてなくてよかった。抜け駆けするのは躊躇わないけど、さすがにその場を本人に見られるのは決まりが悪いわ。
この扉を開けたら仮眠室。
後戻りは……できない。

バタンっ！

「ＵＮＯですわ！」

……は？

「ドロー２」
「ドロー２だよっ」
「ドロー２をぉ……なんと三枚♪」
「セシリア、すまん。ドロー４だ」

「に、し、ろ、や……じゅ、十四枚ですって!?　……あら鈴さんに一夏さん。混ざるのでしたらわたくしが四枚ほど恵んで差し上げますわよ?」

……そうきたかー。

仮眠室にはセシリアと箒を含む五人がカードゲームに興じていた。

いや、何となく邪魔が入らなさすぎだと思ったのよ。都合がよすぎるなーって。

アリサが扉の前にいたからてっきりサポートしてくれてるんだと思ってたけど……

――……鈴ちゃんが通った後は誰も通さないので安心してくださいね?――

“後は”……ねぇ。

最初から、こうなること分かってて通したのね……あの子、あとでお仕置き。

もう、せっかく勇気出したってのに……まぁ、これはこれで良かったのかもね。どうせなら、強引に好きにさせるんじゃなくて、自然に惚れてほしいしね。

「はぁ……セシリア、四枚ちょうだい」

「どうぞ」

「セシリアずるいぞ!」

いいわ。

一夏も勝ちも全部奪い取るわよ。

77. Une fleur（後書き）

攻撃表示の鈴音で一夏にアタック！
ターンエンド！（

78. Le pas pour le futur（前書き）

「未来に向けた一歩」

今回は真面目回ですしおすし。

78. Le pas pour le futur

さて……鈴ちゃん、セシぃ、箒さん、織斑君を外に出したので始めましょうか。
現在パーティー会場内にいるのは私とシャルを除いた全員がシュヴァルツェ・ハーゼの関係者……つまりドイツ側の人間です。
多勢に無勢ではありますけど……まぁ、国防大臣の人柄から察するに、そう困った事態にもならない気がします。
フランスからのバックアップもありますし。

「さて、いきますか」

気合いを入れるために下ろしていた髪の毛を一つに縛ります。
……ドレスも実は私のだけ持ち込みなので気合い入ってるんですよね。
もとからドイツのお偉いさんと対峙する気だったので正装も持ってきていましたから。

「エリーさんも、来てください」
「分かりました」

シュヴァルツェ・ハーゼの参謀なのですし、親私派と考えても良さそうなのでついてきてもらうに越したことはありません。

「もちろん、シャルも」
「ふぇっ？　って、どこか行くの？」
「話聞いてなかったんですか！？　……まぁ、シャルは私の近くにいてくれればいいです」

シャルの手をギュっと握りしめて歩き始めます。
向かう先は今だにラウラさんに絡んでいる国防大臣、エーデルトラウト・ボーデヴィッヒのところです。
……今日のことをどう捉えているのか、聞かなければなりません。

「ご歓談のところ失礼します。一時的にフランスを代表することになりましたアリサ・フワです。国防大臣のエーデルトラウト・ボーデヴィッヒに相違ありませんね？」
「……ふむ、君があの不破か……」

なるほど……不破圓明流についても知っているようですね。もし、ラウラさんのクラスメートとしての私のことを言っているのならフルネームかファーストネームで言うでしょうから。
……少なくてもミス・フワとなるでしょう。
まぁ、知られていてどうなるってことでもないのですけど……ただ、暗殺者として見られるのはヤですね……
ママもその仕事をやっていたみたいですし、間違ってはいないのですけど……

「それで、用件はなんだね？」
「……フランスの代表、と言ったはずですが……これはドイツにとってフランスとの話し合いなど場を改めるまでもなく、まるで世間話程度の重要度しかないということなのでしょうか？」
「む……」

……私が一時的にフランスの代表となっているの事実です。
本国の方でも今回の事件の対応に追われているみたいですからね。
まったく、軍隊を派遣していない証拠を出さないといけないなんて……
フランスの保持している軍事力を公開して、さらに訪仏でもさせ

ろという話ですか？
　まぁ、ドイツはまだ何も言っていないので、もちろんフランスの取り越し苦労の可能性もありますが。
　……今回の騒動に乗じて、本当に亡国機業の仕業なのか明らかにすると言う名目でフランスに入ってるかもしれませんし。

「……どうやら、可愛いお嬢さんという風に考えていては痛い目をみそうだ。部屋を用意させよう」
「可愛いお嬢さんと思っていてくれても構いませんけどね？」

　……試されていたみたいですね。
　正直、ある程度の会話のカンニングペーパーは送られているとはいえ、外交を任されるなんて初めてです。
　フランス政府の渉外を担っている人がリアルタイムで支援してくださってもいますが……彼も複数の仕事を並列してこなしているようですから、あまり負担はかけられません。
　秘書らしき人が大臣に近付き何かを囁きました。
　ＩＳで解析することも可能ですが……まぁ、部屋が用意できました、とかそういうことでしょう。

「場所を移そう」
「はい。シャルとエリーさんとラウラさんもいいですか？」
「ああ、構わない」

　さて、油断しないようにしないと行けませんね。おそらく、なにもないとは思いますが……フランスとしても話し合いの場ができた以上、メリットがほしいですから。
　秘書さんについていくと応接室のような場所に通されました。
　見た目は普通ですが……扉を閉じたときの音からして鉄板が仕込まれているようですね。要人警護のためでしょうか。

さて、全員ソファに座りましたし……では、始めましょう。

「まず第一に、ドイツは誰から侵攻された、と発表しますか？」

「無論、亡国機業だ。奴らがドイツフランス戦争を起こそうとしていたことなど明白だからな」

「それを聞いて安心しました」

まぁ、ここらへんは予想済み……というより当たり前なんですけどね。

それでも暗黙の了解なんてものを国家間に持ち込むわけにはいかないため言葉にしたままです。

次に確認しなければいけないことですが……

「では、訪独状態にあったフランスのＩＳ操縦者の一人が巻き込まれ、また一人が協力を要請されたことへのドイツの対応はいかがなさるおつもりでしょうか？」

「現在、他の国の操縦者たちのことも含めて検討中だ。ところで……シュヴァルツェ・ハーゼの基地の一部がレールカノンのようなもので強引に破壊された形跡があるのだが……君のＩＳには現行レールカノンでも最高の威力を誇るものが装備されていたな？」

「ええ、あれは私が破壊しました。エリーさんの指示のもと、戦闘が発生していた場所までのショートカットを作るため、ですけどね」

私の左隣に座っているエリーさんが頷きます。右隣はもちろんシャルです。お手て繋いでます！

……というかエリーさん、向こう側（ドイツ）に座らなくていいんですか？

「つまり事態の早期解決のためか……なるほど」

まるで打合せしていたかのようにトントン拍子で進みますが、こ

うなることを予想していたからこそ私を代表としたのでしょう。
そうでなければ無理をしてでも本国から人を寄越したはずですから。

「あとは……亡国機業から接収した無人機の残骸……どれほどの割合で分割することになるのでしょうか？」
「分割……？　あれは、我々の戦利品のはずだが……？」

なので、ここからは私が勝手にやることです。
ダメそうだったら素直に謝って芋引いちゃいましょう。

「ええ、ですが亡国機業はフランスの軍を装っていたわけですから無人機自体もフランスのものかもしれません。それが普通に海外向けに販売されているようなものならいいのですが……相手はあの亡国機業ですからね。もしかすると、私達がまだ公表していない技術のものをしようしているかもしれまん」
「それを調べるために一部を要求する、というとか？」

少し、楽しそうな目で私を見ていますね……どうやら、また試されているようです。
でも、まだ引き返すほどではないと思います。
もうちょっと、踏み込みましょう。

「もちろん、ドイツが信頼できる国であることを証明していただけるのでしたら私達も無理に回収などせず、解析を任せてしまいたいのですけどね……」

ここで、意味深な流し目でちらっ！
これで食いついてくれればきっと私のプランは成功です！

「ほぅ……それはどう証明すればいいのかな？」

本当に興味深そうに見てきますね……なんだか予想以上に楽しまれているのですが……もしかしたら、なんだつまらん、とか言われちゃうかもしれません。

それに、ドイツが損すると思われてもいけません……私が言おうと思ってることは、その点では問題ないはずですが……

「無理に何かをしてもらうこともないのですけど……たとえば、同盟国を疑うことはしませんねー」

「ほう、同盟」

「……三か月ほど前、シュヴァルツェ・ハーゼの隊長であるラウラ・ボーデヴィッヒからイグニッションプランとは異なる、フランス・ドイツ間の対等な共同防衛体制をという打診が私がシュヴァルツェ・ハーゼに入ると言う条件付きでありました。もちろん個人的なものですけどね？」

「ほぉ……？」

「う……アリサ、それは……」

……あちゃー。

予想はしてましたけど、やっぱり正式では、というか上層部に伝えたりはしていなかったんですね。

まぁ、普通に考えてあんな話を本気で話す人もいないでしょうし、話されて本気にする人もいないでしょうからね。

ですが……後でラウラさんが怒られる程度でフランスの立場が安定するなら躊躇する理由なんてありませんよ。フランスの立場が安定すれば将来のでゃるの立場も安定するということですからね。

それに、これは私が勝手にやっていることなので成功しても失敗しても、私もお偉いさんに怒られると思うのでラウラさんにも我慢してもらいたいです。

まぁ、ラウラさん的には完全に巻き込まれただけですけどね。

「それで、もし、その同盟が結べるのであれば後日、戦車などの型をご報告していただくことを条件に全てをお譲りします」

「ふむ……なるほど。これはやはり君の独断だね？」

「「「えっ！？」」」

その指摘に、私と大臣以外の三人が驚きの声をあげました。

やっぱり拙かったですか……分というものをわきまえなければいけませんね。もともと私の思い通りにするのが困難なのは分かってましたけどね。

これが、年齢の差というものですか。私もこう見えて色々と画策することは得意だと思っていたのですが……

「それで、続けるかい？」

「えっ？　……いいんですか？」

「もちろんだ。有用かも知れないプランの全貌を聞く前に席を立つなんてこと、政治家がするわけないだろう？」

今度は私が驚かされる番だったようです。

怒って出ていってしまうと思ったのですけど……これくらい器の大きな人じゃないと軍部の頂点には立てないのかもしれませんね。

それなら、ここからは駆け引きはいりませんね。私のプレゼンテーション能力が必要になってくるだけです。

「ええと……それでは、私の提案通りドイツとフランスが同盟を結んだ場合のメリットとデメリットを考えていきましょう。もちろん、損なんてさせませんけどね」

こう見えてプレゼンテーションは得意です！

一考の価値がある程度に考えてもらえるよう頑張りましょう。

「まず一つ目は先ほども言ったように誰からも文句を言われずに洗車などを接収できます」

「唯一、文句を言うかもしれないのがフランスだからか」

「ええ、今のフランスには金属はあればあるほどいいですから。そして二つ目ですが、今回の事件が亡国機業によるものだと周辺国に体してアピールできます」

「ふむ？」

「フランスが現在微妙な立場にいることはもちろんご存じだと思います」

最近、とうとうイグニッション・プランからも外されましたからね。ヨーロッパの中での発言力も随分低いです。

ギリギリで爪弾きにされていないのはラファール・リヴァイヴが安定的に生産でき、汎用性の高さから各国でも使われているためです。

「ここで、現在フランスを支援している、というより第三世代型保有国を目の敵にしているＩＳ後進国……つまり、第二世代型までしか開発できていない、もしくはそれすらできずラファール・リヴァイヴを使っている国々が今回の事件を大義名分にしようとするかもしれません」

もちろん、彼ら一国一国に勝ち目はないですが同盟などを組んでドイツに攻め込むのなら話しは別です。

それでもドイツが負けるとは思いませんが経済的にも大打撃を受けるでしょう。

「しかし、もし今回の事件がドイツとフランスの衝突だとしても攻

め込んだのはフランス。開戦の大義名分にはならないのではないか？」

「ええ、ですが自作自演だ！　というように騒ぎ始めたら仮に戦争などにならなかったとしてもお互いに面倒なことになると思います。条件さえ整えば戦争を起こそうと考えてる国もありますからね。第二世代型しかないのに第三世代型保有国にどうやって勝つつもりなのか分かりませんけどね」

第二世代で第三世代を相手にできる私やシャルは珍しい例です。燃費以外で第三世代に勝る部分がない量産機では、たとえ数が十数倍あったとしても第三世代型には勝てません。

まして、フランスのラファール・リヴァイヴを使っている国ならなおさらです。海外向けのあれは絶対に第三世代型に勝てないように作ってありますから。

「それで、三つ目ですが……フランスは既にイグニッション・プランに返り咲くことは不可能です。もともとあれはヨーロッパ代表ともいえる機体の選定作業ですからね」

ヨーロッパ全体の防備のため、とは言われていますが、さすがにヨーロッパを守りたいからなんていう騎士道精神のもと競っている国はありません。

あれによって生まれる利権目当てです。当たり前ですけどね。

なので、フランスが返り咲くことは参加国が認めないでしょう。

「それが、何かのメリットに？」

「ええ、イグニッション・プランでは度重なる試験動作によって、それぞれの機体のスペックデータを余さず抜き取られてしまいますよね？　そうなると本国の防御の穴がつかれやすくなってしまうのではないですか？」

「確かにその通りだが、今のフランスにその穴を埋められるとは、」
「あと十ヶ月です」
「む？」
「フランスの第三世代型ＩＳが完成するまでにかかる時間です。機密なので詳しいことは言えませんけど確実ですよ？」

私の真意を見抜こうと大臣さんが私の顔をじっと見ています。それに対する返答は……もちろん、自信満々にニヤリと笑うだけです。

「なので、ドイツはある意味では未知のＩＳによって守られることになります。攻める側からしても相手の情報が分からないというのは怖いことですからね……って、ラウラさんたちに先に出ていってもらうの忘れてました！？」

完成するまでの時間なら聞かれてもそこまで問題はありませんけど……やってしまいました。

「なるほど……ラウラ、上の許可を得ずに勝手なことを言ったことは責めない。確かに彼女にはそれだけの価値はありそうだ……まぁ、今後の成長を含めて、だがな」
「大臣殿は隊長を甘やかしすぎだと思いますが、私もお姉様の近くにいたいので何も言いません」
「なにを、エリーも儂の大切な孫だぞ」
「いえ、私も試験管ベビーなので地球上のどなたとも血縁関係はございません。そして書類上では私と隊長は大臣殿の娘のはずですが」

なんだか話が変な方向に……？
え、娘？
……ラウラ・ボーデヴィッヒ。
……エーデルトラウト・ボーデヴィッヒ。

……ファミリーネームが同じですよ！？

「あれ、じゃあエリーさんのファミリーネームって……」

「あ、正式には自己紹介していませんでしたか。お姉様、私はエリー・ボーデヴィッヒです。改めてよろしくお願い申し上げます」

「はぁ……」

真面目な話をしていたのに、なんだか急に気が抜けましたねぇ……大臣さんもラウラさんとエリーさんを愛で始めましたし……

「まぁ、ここで早速決定とはいかないが……フランス側にも準備があるだろうからな。ただ、なかなかいい案（プラン）ではある。こちらでも検討しよう」

「……ありがとうございます」

……これで、第三世代型ＩＳの開発が終わった後の友好国が一つ作れましたか。いきなり開発できました！　だと不信がられそうですしね。実際、篠ノ乃束という裏技を使っているのですから。

次はイギリス……ですかね？

ブルー・ティアーズを開発した研究所とはパパが懇意にさせてもらっているはずですし。

……あの人も立場を弁えないというかなんというか……下手したら国際的な問題にされるかもしれないのに。

夏休み最後に行くことになっているアメリカでもいいかもしれません。ただ、こちらから頼むと下に見られますからねぇ……向こうで実力を見せつけておけば第三世代が完成した時に声をかけてくるかもしれませんね。

でもまぁ、とりあえずは……

「アリサ……また勝手に全部決めちゃうんだから」

「あはは……」

拗ねてるシャルをどうにかしないといけませんね。

……私はまだ戦う気でいることも理解してくれていればいいのですが。

79. Deux personnes pleurent.（前書き）

「二人涙目」
どの二人のことなのかはご想像にお任せします……

十日ぶりでごめんなさい・・・
今回はシリアスに見せかけただの笑い話です（

79. Deux personnes pleurent.

「はぁ～……スッキリしました」
「したねぇ」

大臣さんとの会合のあと、軽くお湯をいただき、今はシャルと並んでマッサージチェアに座ってのんびりしています。
私たちの目の前では鈴ちゃんと篠ノ之さんが卓球をしています。その向こうで織斑君はお茶をすすり、セシィとラウラさんがビリヤードをしています。
いえ、温泉旅館じゃないです。シュヴァルツェ・ハーゼのためのプレイルームです。
なんでも大臣さんが日本の温泉旅館が大好きなのだとか……まぁ、どうでもいいことですけどね。

「というか、アリサ？」
「はい？　どうかしましたか？」
「いや、えっと……ね？　わざわざ同じお風呂に入ることはなかったと思うんだけど……」
「入れたじゃないですか」
「うん、入れたけど……うぅー」
「シャル？　のぼせちゃったんですか？　お顔が真っ赤ですよ？」

なんて。
部屋についていたバスタブは一人で入るには十分な広さがありましたが、二人で入るのはギリギリでした。
つまり、不可抗力的に……さらに言うならば合法的なシャルのスベスベな素肌の感触を楽しませてもらったのです。
シャルはすごく恥ずかしがっていましたが……だって、離れたく

ないんですもん。

「シャルは、私と一緒にいたくない時間はありますか……？」

我ながらズルい質問です。

私がシャルに同じことを聞かれたら答えはひとつでしょうし、シャルもきっと同じでしょう。

さぁ、シャル！

早く私にいつでも一緒にいたいと聞かせてください！

「うーん……トイレとお化粧中は嫌かも？」

「……確かにそうですね」

思わず納得しちゃいました。

って違います！

私、こんなのじゃなくてもっと……えっと、なんていうか……そう！　聞いてる人が恥ずかしくなるような会話をしたいです！

……よし！

「シャル」

「うん？」

「あいらぶゆーです！」

金糸のように煌めく髪の毛も、ちょっと垂れてる目も、紅い唇も、もちろんその綺麗な心も全部まとめて大好きです！

好きな人に好きって言えて、受け入れてもらえるのって、とても幸せなことですね……

「ふぁい！？　……あ、いや、うん。僕もアリサのこと、好きだよ？」

「相思相愛ですね！　……ちゅーしませんか？」
「っ～～！？　も、もう！　……目、瞑って？」

顔を真っ赤にして叫ぶシャルに私は素直な態度で目を閉じて顎を上げます。

ん～

ちゅっ

「えへへ……♪」
「もう……恥ずかしいなぁ」
「私も照れちゃいます」

よーし、今度は私から……

すこんっ……ばごんっ！

キスをしようとしたら私とシャルの間をなにかが通りすぎて壁を破壊しました。

「って、みゃぁあああ！？」

そのなにかが飛んできた方向を振り替えった私が見たものは赤や黄色、青に緑といったカラフルな球体。一色で塗りつぶされたものと白色のラインが描かれているそれは間違いなくビリヤードの球です。

叫びながらもなんとか全てを防ぎましたが……

「あ、危ないじゃないですか！？　ラウラさんですか！？　それともセシぃですか！？」

「わたくしですわ。強く打ちすぎたのかもしれませんわね」
「私は手が滑っただけだ」
「両方とも！？」

わ、私とシャルの愛の語らいを邪魔するなんていい度胸です……
ここは私自ら彼女たちを教育、

「あぁ、そうだ、私を騙したお仕置きしてなかったわね」
「鈴ちゃん！？」
「ほれほれ」
「あぅ！？」

マッサージチェアに座った状態で両足を持ち上げられてしまい身動きがとれなくなりました。
……って痛い痛いです！
そんなに人間の腱は伸びな……うみゃぁぁあ！

「痛いです！　鈴ちゃ、筋、切れちゃ、」
「お風呂上がりのストレッチよ？　さらに……」

ぽちっとな。
鈴ちゃんがマッサージチェアの設定を変更しました。
『背中・指圧・最強』
ちなみに私の足はいまだに鈴ちゃんに持ち上げられ、筋が痛いです。前屈を無理矢理させられているような状態とでも言えばいいのでしょうか？
そして、その痛みから逃れようと、私は背中をできる限り椅子に押し付けているわけで……

うぃんうぃんうぃん……ゴリゴリゴリゴリ

「みぎゃぁぁああ！　痛！　強すぎ……！　というかツボじゃなくて骨！　骨押されてます！」
「そー、ゆっくり骨休めするのよ？」
「これ、休まるどころか骨折れちゃぅ……」

機械のボコボコが容赦なく私の背中を押し、潰し、抉ります。
い、言いすぎだって、思うかもしれませんけど……わ、私だって痛いものは痛いんですからね！というか、ま、まだやめてくれないんですか……？　私、泣いちゃいますよ……？
……そうですか、やめてくれないんですか……もう、いいです！
こうなったら最終手段です！

「できればこれは使いたくありませんでした……！」
「アリサ、いったい何する気よ！？」
「……ふふ、鈴ちゃん知ってますか？　最近のマッサージチェアには、リクライニング機能がついているんですよ……！」

按摩椅子流秘技！　『倒す』ボタン！
……あれ？
『倒す』ボタン！
……え、なんで？
なんで反応してくれないんですかぁ……！？
もう、痛いんですから許してくださいよぉ。

「アリサ、ごめんね」

一心不乱に『倒す』ボタンを押していた私にかけられた甘い声に耳を疑います。
今の声は……

「シャル？　……もしかして、裏切ったんですか……？」
「今回だけね……」

シャルの右手にはマッサージチェアの操作パネルのコード。その先端部分が握られていました。
コードが本体に繋がっていないなら、リクライニング機能が反応しなかったのも不思議ではありません……でも、どうして……？
さっきだって、互いに想いを確かめあったばかりじゃないですか！

「なのに、どうして、」
「も、もう……照れちゃうからそういうこと言わないでよ！　……じゃなくて、僕だって、怒ってるんだからね！」
「……え？」

私がシャルを怒らせた……？
まったく思いあたる節がありませんよ？
……というか、シャルだって現状赤い顔をしているわけで怒っているようには見えないのですが。

「えっと……なんで怒ってるんですか……？」
「う、うぅー！　来て！　リンもいつまでアリサで遊んでるの！」
「わわ！」
「ちょっとシャルロット！？」

……あれ？
もしかして私だけじゃなくて、鈴ちゃんにも怒ってます？
んー……ますます分かりませんが聞いてみるしかなさそうですね。
このまま嫌われちゃうのは嫌ですから。

「シャル……？　あの、本当にどうして怒っているんですか？」
「いいから、来て」
「ぁ……」

シャルは振り返りもせずに私の腕をぐいぐいと引っ張っていきます。

……自分で考えろってことですか？
えっと、少なくとも今現在、私がシャルに嫌われているということはないはずです。
しかも鈴ちゃんに対しても怒ってるとなると……うーん、やっぱり全然分かりませんね。

「あ、もしかして私と鈴ちゃんがじゃれあっていたからですか？」

嫉妬だなんてそんな……えへへ。
もー、シャルってやっぱりすごく可愛い女の子です！
もう大好き！
一生離してあげません！

「違う」
「あれ？」

……嫉妬、してくれてないんですか？
それはそれで、すごく寂しいです……

「あ、でもでも、それだけ信頼されているって、」
「真面目にして！」

失敗です……怒鳴られちゃいました。
でも、本当にシャルが怒ってる理由が分からないんですもん。だ

から、せめてシャルに笑ってほしいなって……別に、誤魔化そうとかは思ってないんですよ？　本当ですよ？

だって、我慢させるより怒ってもらえる方が嬉しいですから。いえ、マゾとかじゃないです。どちらかといえば……とか、そんなのはどうでもよくてですね。

本当、どうして怒られているんでしょう？

「アリサ、入って」

「は、はい……」

鈴ちゃんとシャルの部屋に通されました。

こう、正式に恋人同士となると相手の部屋に入るのにもドキドキしちゃいます。

……違う部屋にしていてよかったと思いました。同じ部屋で寝るなんて、ドキドキしすぎてきっと心臓が疲れちゃいます。

「……いきなり怒鳴って、ごめんね？」

「へ？　あ、いえ……理由があるんですよね……？」

「うん」

部屋の中央に備え付けてある丸テーブルに紅茶が注がれたカップが二つ向かい合わせに置かれます。

……隣り合って楽しく話すような話じゃなくて、真正面を向いて話す真面目なことなんでしょうか……？

も、もしかして、将来のこととかでしょうか？

私たちは全うな方法では子供が産めませんし、養子のこととか……あとは結婚自体の娘ともそうですよね。

フランスでは残念ながら同性婚は認められていませんから……婚姻関係より権利が制限されるＰＡＣＳはありますけどね。

でも養子ももらえないんですよね……いっそのこと二人で孤児院

を始めるのも、

「なんで、ラウラの邪魔をするの？」

「へ？」

「へ、じゃないよ……アリサは、ラウラが一夏のこと好きなの知ってるよね？」

「もちろんです」

「じゃあ、どうしてラウラを応援してあげないの？　友達なのに……」

あぁ……こういう話だったんですね。

シャルは、ラウラさんと同じ部屋ですから相談を受けたりしているのかもしれません……ちょうど私と鈴ちゃんみたいに。

そして、シャルはラウラさんが織斑君と付き合えたらいいと思っているのでしょう……

「……じゃあ、逆に聞きますけど」

「なに？」

私から反論があるとは思っていなかったのかもしれません。シャルは少し面食らったあと、キッと顔をしかめました。そんな表情も素敵です。

……もしかしたら、シャルと喧嘩することになるかもしれませんけど、でも、シャルが気付いていないのなら言ってあげないといけません。

「どうして、シャルは友達である鈴ちゃんや篠ノ之さん、もしかしたらセシぃもですが、その三人のことは応援しないんですか？」

織斑君はなんと四人から好かれています。だらしのない人ですね。

……シャルの言い分では、その四人すべてを均等に応援しなければいけません。ですが、そんなの逆に不誠実です。

「そ、それは……ラウラは、自分がしたいことをしていいのかって悩んでるから……」

「と、いうと？」

「その、ラウラってなんていうか……その……生まれ方が……」

「はい」

生まれ方が特殊……つまり、ラウラさんが試験管ベビーであることをシャルは言いたいのでしょう。

シャルは優しすぎるので、そういうことを口に出して言うのを嫌がります。なので、シャルが言わなくていいように、理解したということだけを短く伝えました。

「それで、ラウラは真っ当な人間じゃない自分が一夏に恋をしてもいいのかって……一夏の迷惑になるんじゃないかって不安に思ってるの」

「まぁ、試験管ベビーとして非自然的（イレギュラー）に生まれたので思わぬ欠陥とかあるかもしれませんしね……」

「アリサ！　……そういうこと、言わないでよ……」

「……ごめんなさい」

……でも、事実です。

きっと、ラウラさんが言っているのもそういうことなのではないでしょうか？

仮にラウラさんが織斑君と生きることになって、自分が実は酷く短命であることが発覚したりしたならば……それは、好きな人の時間と気持ちを、無駄な浪費してしまったと考えるかもしれません。

……私以外を選んでいれば、もっと幸せな人生だったのかもしれ

ないのに……というように。

「ラウラがそんなこと気にしてるんだから……幸せになってもいいって教えてあげないと……」

「だから、鈴ちゃんじゃなくてラウラさんを応援して……ですか？」

「そ、そうじゃないけど……」

「……シャルの希望は、叶えたいです。でも、私は鈴ちゃんにも好きな人と一緒になる幸せを知ってほしいんです。最初から一人しか幸せになれないなら、私は鈴ちゃんに幸せになってほしいです」

「アリサ……」

私の決意も固いです。

これぱっかりはシャルにも譲れません。だから……

「シャル、クラリッサさんはラウラさんを応援しています……詳しくは、彼女に聞いてください」

「え？」

「ドイツにいる間は……私達、敵対関係かもですね」

少し、楽しくなってきました。

80. Sensations aller（前書き）

「散りゆく想い」

管理者権限でPCからアクセス不可になってました（
今度から更新どうしよう……？

80. Sensations aller

さて、長かったドイツの一日目が終わりに近づいてきました。
結局、ラウラさんとシャルが部屋割りを交換していたので私とシャルの相部屋です。
そこで私はシャルに抱きついてみたり、キスをねだったり、体を触ったり、撫でてもらったり……ってはずだったのに……
私の目の前には桃色の布。桃色はシャルが綺麗と言ってくれた私の髪の毛の色なので大好きなのですが……今は私とシャルを隔てるこのカーテンが憎くて憎くてたまりません。
まぁ、何が原因かと言うと……私とクラリッサさんが人の恋愛を使って勝負をしていることをシャルが知ってしまって……いや、本気で応援する以上は仕方のないことだと思うんですけどね？
ですが負けた方が勝った方の言うことを聞くなんて条件のせいで賭け事だとも思われてしまったようで、それからシャルは私に対して怒ってしまったのです。

「……こんなの、寂しすぎます……」
「……」

と、このようにわざとらしく呟いてみても無視されちゃいます。
悲しいですね。寂しいですね。
……あぅ、泣きそうです。
でも、鈴ちゃんのために我慢です！
嫌われているわけじゃないと思うので心情的にも初めの頃より全然ましですからね。
……とはいってもこの問題に決着がつくまでシャルと話せないというのは少し勿体無い気がしますね。せっかくの旅行なので一緒に楽しみたいんですけどね。

シャルはどうなんでしょう……？
私と仲良くするような気分じゃないのかもしれません。

コンコン

気分がズズーンと落ち込んでいるまま床にのの字を書いていたら扉がノックされました。
むむむ？
時間はすでに深夜十二時を回っているのですが誰ですかね？
まさか修学旅行のように寝ていない人を叱るわけでもないでしょうし……

「……どうぞー」
「失礼します……」

結局、疑問に思いながらも声をかけました。
ゆっくりと遠慮がちに開かれた扉の向こうには……エリーさん？
こんな時間まで起きてたら私のように大きくなれませんよ？
あ、違いますからね！
私くらい大きく、ではなくて私同様に大きくなれないって意味ですからね！
……自分でいってて悲しくなってきました。

「それで、どうしたんですか？」

パジャマ姿でくまの縫いぐるみを抱えているということはそろそろ寝るつもりなのでしょうが……
しかしエリーさんはなにも言いません。もしかしてエリーさんまで私を無視するんですか！？

「……エリーさん？」
「えっ！？　あ、いえ、その、ええと……こ、この宿舎ができる以前、この場所には共同墓地があったんです」
「はぁ……」
共同墓地？
それがどうかしたのでしょうか？
あまりに唐突なエリーさんの怪談に頭がついていきません。
「それで、ドイツ軍部が強引に土地を買い上げて今に至るのですが……今も、この土地に縛られて幽霊がいるんです……」
「えっと、つまり？」
……私が怖がらなかったからでしょうか。エリーさんはなにやら口をモゴモゴさせて俯いてしまいました。
なにやら少し顔が赤いような……？
「つ、つまり！　お、お姉様が取り憑かれて殺されたりしないように私が側で守ろうかと……」
「……んー、そもそも幽霊相手に何かできるのでしょうか？　人数が増えただけでは意味がないような気もします」
「あぅ……で、ですがお姉様が取り殺される可能性が半分から三分の一に、」
「ダメです」
そういうのはよくないと思います。
だって、仮に私が襲われなかったとしてもシャルかエリーさんが襲われることになります。
エリーさんの語り口がつたなかったので先程の幽霊は怖くないですが、また別の……例えば不審者が忍び込んでくる場合もあるんで

す。
　そのとき襲われるのは二人よりも私の方がいいです。暗殺とか強引な夜這いとかには慣れてますから……昔とった杵柄です。
「なのでエリーさんは部屋に、」
「嫌です！」
　む、私が優しくしてあげてるのに……
「どうしてですか？」
「えっと……その、ほ、本当は私が怖いので……一緒に寝てください」
　そう言うエリーさんは逆立ちしてみても怖がっているようには見えませんけど……まぁ、いいでしょう。
　エリーさんは立場が偉いので一人部屋なのでしょうし寂しくなっちゃったのかもしれませんしね。
「分かりました。今夜は一緒に寝ましょうか。私もちょっぴり寂しかったことですし」
「わ、私は別に寂しかったわけではありません！」
「シーッ！　夜中なのであんまり大きな声だしちゃダメです！　……とにかく、もうお布団入りましょうか」
「はい……お姉様はまだ起きているのですか？　……それなら私も、」
「いえ、すぐ寝ますよ」
　シャルにおやすみなさいと言いたいだけです。あわよくばおやすみのキスも……
　シャルのベッドの周りにかけられている桃色のカーテンを少し開

いて中の様子を伺います。
シャル、壁側向いてますね……

「シャル……」
「……」
「シャル？」

もしかして、話したくないくらいに怒っているんですか……？
私達、今日やっと付き合い始めたばかりなんですよ……？
それなのに、おやすみと言い合うこともできないなんて……
これなら、付き合わない方がよかったかもしれませんね。ちょっとした恋愛事での憧れが裏切られるだけでこんなに苦しくなるなら……夢だったんですけどね。恋人同士が寝る瞬間まで仲良くしているのって……

「くー……すー……」

いくら待っても、シャルの寝息以外は聞こえません。
まぁ、私の憧れをシャルに強制するわけにもいきませんしね。

「お姉様……？」
「あ、すぐ戻ります……シャル、おやすみなさい」

しっかりしているとはいえ、まだ子供なエリーさんをいつまでも待たせてもいけないので私は諦めてカーテンを閉じました。
そしてカーテン越しに一言。

「シャルも、早く寝てくださいね……？」

狸寝入りなのは分かってるんです。

……いらない一言だったかもしれません。シャルの慌てた気配がしました。

シャルだって、きっと悪意から寝たふりをしていたんじゃないと思います。気まずくて、その末に選んだ方法が寝たふりだというだけで。

「じゃ、エリーさん。寝ましょうか」

「は、はい……あの、お姉様、私は普段抱き枕を使っているのですが……」

「……おいで」

顔を真っ赤にして恥ずかしがっているエリーさんを抱き寄せました。

私も寂しさを紛らせたいと思っていたので都合のいいオファーです。

「おやすみなさい。エリーさん」

「はい……お姉様もおやすみください」

おずおずと私の腰に手を、右足に両足を絡めたエリーさんはものの数分で寝入ってしまいました。やっぱりエリーさんには十分遅い時間だったのかもしれません。

足まで絡めるとは……意外と遠慮のない子のようです。クールな普段とのギャップといい未来の彼氏さんは幸福者でしょうね。私がシャルに会っていなかったらドイツから奪っちゃうところでした。

「私も……すぐに寝ますよ」

それに、気も効く子みたいですしね……

私がシャルのことを気にしているのを察していたようです。

寝たふりをされて、おやすみを言ってもらえなかったことで……私の中の不安が大きくなりました。

本当は最初からずっと不安だったんです。シャルは最初の……つまり告白してくれたときのキス以外、私に何も求めてくれません。ずっと、私からアプローチをかけないと何もしてくれません。

まだ初日だからかもしれませんけど……私は一瞬たりともシャルから離れたくないのに……

だから、考えちゃいます。もしかしたらシャルの好きと私の愛してるには大きな違いがあるんじゃないかって。

私はシャルのことを一生護りたいと思っていますがシャルはそこまでではないのかもしれません。

嫉妬もしてくれませんし……好きとは言ってくれても愛してるとは言ってくれません。シャルにとっては表現の違いかもしれませんが……もしかしたら、シャルは私への気持ちを少し特殊な友情と思っているのかもしれません。

だから、私が求めない限りはキスもしてくれないし好きとも言ってくれないとか……

最悪なのは……私の気持ちが重すぎて嫌になってしまった場合です。だから私を遠ざけようとしているのかもしれません。

私が重いのは自覚しています。

常に私を見ていてほしいですし、一日に一番言葉を交わす相手も私であってほしいです。私といるときは笑っていてほしいですし、他のことも考えてほしくないです。

そしてなにより……私を嫌わないでほしい。

嫌われたくないから、なんでもしてしまいます。

「でも……シャルから、告白してくれたんですよね……？」

行動だけを示したシャルに対し、無理に言葉にさせたのは私でしたが、それでもあれはシャルから私への告白だったはずです。

……それなのに、私が想像していたのと違ったからっていきなり距離をとろうとするなんてあんまりですよ……？

しかも、シャルからじゃなくて私から別れ話をさせようとしてませんか？

だから、私がシャルを嫌うように無視をしたりしてるんですよね？

それなら……それは……

「ぐすっ……私は、シャルが望むならなんだってしますけど……それは、あんまりですよぉ……」

数年越しにやっと手に入れた幸せを自分で捨てろって言うんですか……？

そこまでさせる程に、私は期待外れでしたか……？

それとも、今さら私の身体の傷が醜く思えてきたんですか……そのうちの一つはシャルがつけてくれたものなのに……！

でも……そうですよね。

……私は人の感情が変わりやすいことを知っています。

親切にしてくれた人でも、私の傷跡のことを知ると手のひらを返すように私から離れていきましたし……それこそ、シャルが来た頃のように噂だけで判断して私を傷つけようとする人もいました。

私のなにかが……シャルの気持ちを決定的に変えてしまった可能性はないとは言い切れません。

それは鈴ちゃんとラウラさんのことでの意見の相違かもしれませんし、それこそ、私がシャルのものになった瞬間から、シャルにとって私の傷痕は私の価値を損なうものになったのかもしれません。

一緒に入ったお風呂で私の傷痕を間近で見て受け入れられなくなったのかもしれません。

だから……それなら……

「シャル……明日から友達に戻りましょう……？」

私、傷ついていないふりは得意なので気遣いは必要ないです。
でも……少しでも長くシャルと恋人でいたいから……今日は眠りたくないですね。
せめて、シャルと恋人でいられる最後の時間で……恋人と作り上げる未来の幸せを想像したいんです。

◇

「……眠れないな」

アリサはもう寝たのかな……？
どうして、こうなっちゃったんだろう。
アリサ、明日から友達に戻ろうって言ってた。小さな声だったから独り言だったのかもしれない……でも、やっと一緒になれたのに。勇気を出して告白したのに。
あの後、アリサは僕のことずっと好きだったって言ってくれた。
それがすごく嬉しくて……その事だけで幸せになっちゃって。手を繋いだりキスをしただけで気持ちが溢れて苦しくなっちゃうくらいだったのに……それで、恥ずかしくてキスとか全然しなかったからなのかな？
アリサはたくさん求めてくれたけど僕が応えきれなかったから……アリサは幻滅したのかもしれない。
アリサから求めてくれたことにはなんとか応えたけど、僕からはなにもしなかったから。
それどころか恥ずかしがって憎まれ口とか言っちゃったから、それがアリサを怒らせたのかも……
きっと、ずっと僕のことを思ってくれてたアリサはいろんなことを期待してたんだと思う。ずっと手を繋いで、キスをして、笑いあって……でも、そういう経験がない僕は全然だめで……だからアリ

サも期待と現実との差にがっかりしたのかも。

「でも、仕方ないじゃん……」

僕だって女の子なんだから……相手に嫌われるかもしれないって考えちゃって、思った通りにできなくなっちゃうんだよ……

本当はキスもたくさんしたかったし一緒に寝たかった。さっきだって、一緒に寝ようって言おうと思って緊張してる間にエリーちゃんがきてアリサと一緒に寝ることになって……だから、アリサがおやすみって言ったときも、つい寝たふりなんてしちゃって……

あれも、アリサに嫌われた原因かも……

ううん、原因なんてたくさん思い付く。鈴とラウラのことで頭ごなしにアリサに怒ったのもそう。偉そうに戦わないでなんて言ったことも。

アリサの行動はいつも周りのためなのにそれを否定するようなことを言っちゃったから……

でも、僕にだって譲れなかった。

アリサにはこれ以上傷ついてほしくなかったし、アリサに邪魔されたってラウラがアリサのことを嫌うのも避けたかったから……こんなこと言うべきじゃないんだろうけど、一夏がいなければ……！

……ううん、こんなのは責任をなすりつけただけだよね。

悪いのは僕。

大した事情も知らないでアリサを勝手に恨んで傷つけたから、きっとこれはその報いなのかも。あの時から既に僕のことを好きだったってアリサは言ってたけど……それならアリサはどれだけ傷ついてたんだろう……

好きな人に応えてもらえないどころか嫌われて恨まれて……僕だったら耐えられない。あの時のアリサは今の僕以上に心が痛かったはず……それに、僕のせいで今でも陰口を言われてる。

アリサはどれだけ苦しんできたんだろう。

謝りたいけど、たぶん謝ることでさえ僕には許されない。だって、僕がアリサの幸せを狂わせたんだから……

恥ずかしくて言えなかったけど……愛してるって、伝えたかったな……

初めて好きな人と幸せになれると思ったのに……いざとなったら全ての立場を捨ててアリサ過ごす覚悟も決めて……なのに、一日も続かないなんてね。悲しすぎてワラエテクルヨ。

やっぱり、女の子同士なんて無理だったのかなぁ……？

好きって気持ちだけじゃダメだったの……？

僕は、どうすればよかったの……？

「もう、遅いけどね……」

アリサは僕と別れることを決めちゃったみたい。

本当は泣いて抱きついて嫌だって言いたいけど……そんなことしたらアリサはもっと僕のことを嫌うだろうから。

こんなことなら……恥ずかしがらないでアリサの近くにいればよかった。

嫌われるかも、なんてアリサを疑うようなことを考えてたから本当に嫌われちゃったんだね。

アリサが望むなら……僕には止める権利がない。今まで僕のせいで散々嫌な目にあったアリサをこれ以上苦しめるわけにはいかないから。

アリサには幸せになってもらいたいから……

本当は僕の手でアリサを幸せにしたかったけど、アリサがそれを望んでいないんだからできるわけないよね……

最後は……せめてアリサが気まずい思いをしないように気丈に笑っていたいな。

辛いのは苦手だけど、アリサのためになら頑張れるから……泣くのも我慢するから……

「ふぐぅっ……ありさぁ……ぐすっ」

やだよぉ……！

なんでよぉ……僕は、アリサのこと好きなのに……やっぱり、今までアリサを辛い目にあわせてきたから？

アリサにばっかり、大変なことをさせてたから？

誰か……教えてよ……

僕は、どうすればよかったの……？

……今夜だけだから……朝には泣き止むから……せめて今だけは泣くことを許して。

これだけアリサのこと好きだったって示させて……？

◇

「シャル。やっぱりただのお友だちに戻りましょうか？」

「うん、そうだね。そうしようか」

……どういうことでしょう。

朝、二人に遅れて目を覚ました私が耳にした会話です。

昨日、想いを確認しあったばかりだったのでは……？

……二人とも、私が起きたのに気付くとそそくさと部屋を後にしてしまいましたが……

「枕が濡れています……それも、両方とも？」

事情は全く分かりませんが二人がこの結末に納得できずに泣いていたことは分かりました。お姉様もシャルロット・デュノアも悪い方向へ思考を進めることがあるというのは隊長の評ですが、そういうことなのでしょう。

昨日まであれだけ仲がよかったのに今朝になったらいきなり破局というのは不自然が過ぎます。きっと誤解かなにかがあったのですね。

……なら、解決するだけです。

「ドイツに来たからには最高の思い出を作っていただかないといけません」

まずは怪しい動きをしているクラリッサと隊員たちを巻き込みましょう。

81. Ensorceleur et une ruse（前書き）

「呪縛と悪巧み」

81. Ensorceleur et une ruse

――シャル、やっぱりただのお友達に戻りましょうか――

一縷の望みをかけて……どうしてと、せめて聞き返すくらいはしてほしくて、私はそう言いました。

本当は恋人でいたい。友達になんか戻りたくない。

そう、心の底から……いえ、もはやこれは魂に刻みつけられた感情なのかもしれません。

昨日、私は確かにシャルの心に触れられたのに……

――うん、そうだね。そうしようか――

シャルは、刹那の間も開けずに……悲しそうな顔さえ見せないまま、そう……私に応えました。

私に理由すら問い質さないシャルは……やっぱり、たったの一日で私に見切りをつけてしまったのでしょうか？

これっぽっちも悲しいと思わないくらい、私に幻滅し、辟易としてしまったのでしょうか？

恋人であり続けようという努力をしたくなくなってしまうくらいに？

あれだけ必死に私に思いを伝えてくれたシャルは夢だったのでしょうか……そんなに……そんなに早く、人のことを見限ることって出来るのでしょうか？

……やっぱり、こうなるなら何も言わなければよかったです……そうすれば、例えシャルが私を好きでなくなったとしても一日、二日と恋人でいられる時間は延びたはずなのに……

シャルが別れたがってるなら私からなんて……そんな風にかっこつけないで、泣いて、抱きついて、私のどこがダメだったのかを聞

いて直せば……あるいは……

でも、私は泣けないんですよ。

そうやって、人から同情を受けるような真似は出来ないんです。

だって……迷惑がかかるじゃないですか。

それに、シャルに泣きついたら余計にウザがられるかもしれません。昨日もしつこくキスをねだったり抱きついたりしたのに……恋人でなくなった今も図々しくなることなんてできません。

余計に嫌われるかもしれないじゃないですか。

「お姉様！」

「エリーさん……」

とにかくスッキリしようとシャワールームに歩いていたら、後ろからエリーさんが飛び付いてきました。

「お姉様、酷いです！　お二人とも部屋から出られるのであれば起こしてくださってもよろしいのではないですか？」

ああ……どうやら部屋に一人残してきたことがエリーさんは不満だったようです。顔は普段通り冷静そうなのですが、少しだけ眉が釣り上がり頬は膨らんでいます。

……私も、せめてこれくらいは感情を表にだしていたら……

「……エリーさん。あの、シャワールームに行きたいので離してください、」

「お断りさせていただきます」

「……え？　今、なんて？」

「お、お断りさせていただきます！」

……へぇ。そうですか。

なら、強引に引き剥がすだけです。
手の骨程度、握り潰すくらいわけないんですから……

「痛っ……」
「エリーさん、離してください……手遅れになりますよ？」

まだ、骨は砕いてはいませんがこのままでは粉砕骨折……それも砕けた骨が周囲の筋肉をズタズタにしてしまうほどの。
運がよくても手が使い物にならなくなりますよ？

「お姉様……落ち着いてください……」
「落ち着いていますよ？」
「お願いします。どうか、落ち着いてください……私の右手を砕いても構いませんから……私を抱き締めてくれたお姉様に戻ってください……」
「っ！？　……私は、なにを……？」

私を慕ってくれているエリーさんになにをしようとしましたか……？

エリーさんは、何も関係無いのに……そもそも悪いのは全て私で、誰かに八つ当たりすることさえ私には許されていないのに……！
なのに……エリーさんに取り返しのつかない大怪我をさせてしまうところでした。
私は……人を殺せるのも忘れて……

「ああ、そっか……そうだったんですね……」
「……お姉様？」

叫び声をあげてもおかしくないくらい痛かったはずなのにエリーさんはそんな様子をおくびにも出さずに私に心配そうな目を向けて

くれます。
痛がる素振りをしたら私が気にすると考えて……早くも痣ができているだろう右手は背中に隠されています。
私にはもったいないくらい優しい子です。
そう、私にはもったいない……

「お姉様？　あの、お姉様が思われているほど力はこもっていなかったので平気ですよ……？」
「なら、手を前に出してください」
「ほ、本当に何も問題ありません」
「右手を見せてください」
「それは……」

……数十秒見つめあって、結局エリーさんが折れてくれました。
差し出された右手は、本来ならば真っ白であったはずの肌に青々とした痣が浮き上がり始めていました。
この調子だと一時間もすれば右手全体が紫色に染まるでしょう……私が握り潰そうとしたんですから、当然と言えば当然ですね。

「……お姉様の精神状態は端から見ていても異常でした。この怪我のことは気にしないで下さい」
「……精神状態なんて言われている時点でダメなんです」
「え？」
「やっぱり、私の本性はこれなんですよ。根っからの暗殺者……殺しの道具。拳銃やナイフと同じ私がなにかを感じるなんておかしいじゃないですか」

口からは自然と乾いた笑い声が漏れます。
喜怒哀楽関係なしに相手を殺すのが暗殺者。それは道具と同じで……それなら感情なんてものを持つこと自体が不自然なんです。

誰かに恋をするなんて……その最たるものじゃないですか。

「人を殺していない暗殺者なんてナンセンスです。お姉様は誰も殺していないじゃないですか」

「いえ……殺しました。それも何人もの人を……」

「……では、やはり昨日話していた千人以上を殺してしまった人と言うのは……」

……覚えてましたか。

この世界ではない世界での出来事ですが、だからといって無かったことになるわけではありません。むしろ、だからこそ、私はそのことを忘れてはいけなかったのに……

シャルも、道具の私に恋するなんてことがおかしいと気付いたのかもしれません。道具を大切にするのと、人に恋をするのは違いますから……

「だから……シャルロット・デュノアに別れを告げたのですか？」

「へ？」

私、言ってないのに……

「ごめんなさい。私はあの時点で目を覚ましていました」

「そっか……でも、今までのは全部後付け……本当はシャルに嫌われたくなかったから……ううん、嫌われるのが怖くなったから嫌われても仕方ない理由を作っていただけなんです」

付き合い始めて、キスをして……気持ちが最高潮になったときに別れれば、私を知ってガッカリさせることもなく、私への気持ちがずっとシャルの中に残りますから……

ズルいなんていうのは知っています……でも、ズルいのは女の子

の特権ですから許してほしいですね……

「では、どうして今にも泣き出しそうな顔をしているのですか？」

「それは……」

シャルが、別れを告げても動揺してくれなかったから……そう、シャルにとって、私がどうでもいい存在になってしまっていたからです。

「どうして、何も聞いてくれなかったんですか？　どうして、悲しそうにしてくれなかったんですか？　……もしかしたら、シャルはやっぱり道具の私に見切りをつけていたのかも、」

「っ！」

ぱしんっ……

エリーさんに頬を叩かれました。

バカらしいなんてことは分かっています。

「そうです。シャルは、そんな酷いことを！」

「そうじゃありません！　……ご自分を道具だなんて言わないで下さい」

「でも……」

私は拳銃と同じ人を殺せるものなんですよ……？

「それでも……それでもご自分が“人間”に愛されるのが怖いと……そんな資格がないと思うなら……」

「思う、なら？」

私は、どうすればいいんですか？

「……私が……人間の形をして産まれてきた私がお姉様を愛します……その、女性同士の愛し合い方と言うのは分かりませんが、努力は惜しみません。お姉様も、私になら愛されても怖くありませんよね……？」

「ぁ……」

違う……違うんです！

私は、エリーさんにこんなことを言わせようなんて思っていなかったんです！

エリーさん……なんで、笑っていられるんですか……？

「私は優れた軍人となるべく作り出されたので……お姉様以上に人殺しの道具です。私も……人間でありたいと願っていましたが……」

お願い……それ以上、言わないで……！

違う、違う、違う！

私は仲間になってほしかったんじゃないんです！

エリーさんを傷つけようなんて……私にとって、エリーさんは間違いなく人間だったから……

「お姉様を支えられるなら、喜んで自分は道具だと認めましょう」

私は、なんて罪深いことをしてしまったのでしょうか……自分のことで頭が一杯になっていたからとはいえ……これは、エリーさんに対してあまりにも酷すぎます。

エリーさんを抱き締めて、貴女は人間だと言ったのは他ならない私なのに！

……どうして、私はこうなのでしょうか。自分のことも他人のこ

とも傷つけることしかできないなんて……

「お姉様……私の敬愛が恋愛感情に変わるのには時間がかかるかもしれませんが、私に女性の愛し方を教えてください」

そのうえ、私のためを思って……いつかの私以上に捨て身で私を助けてくれようとしてくれているエリーさんを、

「ごめんなさい……私のシャルへの気持ちは感情なんてものに収まらなくて……最早、呪縛なんです。だから、エリーさんを大事にすることはできないんです」

「お姉様……私は！」

平気で切り捨てるなんて……

「私は、本気でお姉様のために人生をかけてもいいとんっ！？」

「んっ……」

ぐいっとエリーさんを引き付け強引に唇を奪いました。

唇を触れさせるだけで私からは何もしません。

……それでも、エリーさんは私を突き飛ばし、腰を抜かしてしまいました。

「気持ち悪いですよね……？　私もエリーさんは好きですよ。それでも、これを……これ以上のことを無理矢理に押し付けたくはないです」

「ち、違っ……今のは驚いてっ！」

弁解しようとしてくれるエリーさんを手で遮ります。あんまり年下の子に甘えるというのも恥ずかしいですから。

「その反応は人間にとって普通のことですから我慢しなくていいです……普通の人には受け入れがたいものだということは知っていますから……」

「あの、でも……私はお姉様を……」

確かに私を気持ち悪いと思っているはずなのに、それでも私を悲しませまいとしてくれるエリーさんを見て少しだけ笑えました。

こんな自分にも味方になってくれようとしている人がいると……少しだけ元気が出たような気がします。

「エリーさん、もう十分です。これからのことは私が自分でどうにかしないといけないことですから」

「私はお姉様の力になりたいのです……」

「ありがとうございます……それなら、私とシャルがちゃんと友達に戻れるように祈ってください」

頑張るのは私だけであるべきだと思うんです。

あわよくば恋人に……とも期待していますがシャルがなんの未練も感じさせずに離れてしまったことを考えると……泣いちゃいそうです。

それに……元に戻るだけです。

幸せすぎる夢を見てしまったと考えて、昨日のことはなかったことにしてしまいましょう。

「友達に戻って……どうするんですか!?　そんなの、気持ちを燻らせているだけ辛いだけなのに……！」

「……私は、シャルに我慢させる方が辛いんですよ。エリーさんも恋をすれば分かるかもしれませんよ？」

「……私が恋をするとしたら……お姉様のような人がいいですね」

「私みたいな男の人なんて頼りなくてダメですよ」
「確かに奥手すぎてヤキモキしそうですね」

ここで大人っぽく流し目を寄越すエリーさんは将来、多くの男性を泣かせる気がします。
というか言われちゃいましたねぇ……

「お姉様はもっと前向きになるべきだと思います。心配してばかりだと何も達成できませんよ？」

前向きに……ですか。
うーん……昨日のことはなかったことにしたんですから、まだ私は諦めません……という感じでしょうか？
そうですね……今度は私から想いを伝えましょう。
夢で付き合って別れたくらいのことじゃ今さらですよ。だって最初はすごく嫌われてたんですから。
ねぇシャル……また、私のことを好きになってくれますか……？

◇

「というわけで皆さんの協力が必要です」

シャルロット・デュノアを除く面々を作戦会議室に集めての密談です。

「電撃破局とはこのことね……」
「外から見ればありえないのですが……勘違いに勘違いを重ねて更に思い遣りをプラスするアリサさんのことですから……」
「まぁ、あの子も無駄に考えすぎなのよ」

比較的、お姉様に対して気安いお二人は驚くというより呆れの感情が強いようです。
その表情にも焦りなどはなく、ただ苦笑があるだけです。
これだけのことがあっても、またかと言われてしまうなんて……普段のお姉様の暮らしが気になりますね。

「アリサは鈴とセシリアに任せるとして……私はシャルロットだな」
「隊長、お伴いたします」

隊長の言葉に間髪入れずに副隊長が言いました。

「……副隊長はあまり関係無いかと」
「エリー、アリサさんは隊長の学友です。ならば私にとっても身内のようなものではありませんか」
「と言いながら賭けが不成立になるのをむぐぅ!?」
「な、なな、なんのことでしょう？　エリーはたまにおかしなことを言いますね」

私の暴露を食い止めようと副隊長が飛びかかってきましたが……慌てすぎなのであまり意味がありませんよ？

（な、なんで賭けのことを知っているのですか!?）
（基地内部のことで私が知らないことなんてありませんよ）

基地内に私がいる限り黒い繭糸（シュヴァルツェア・ファーデン）を通して情報を受け取れますからね。
重要度が高いと判断された情報しかリアルタイムには受け取れませんが探せば全ての出来事は私の手の内です。
……だいたい、内緒話とか言い争いとかは裏切りの可能性に繋がるのですぐにわかりますよ。

「クラリッサ、賭けとはなんのことだ？　軍則で賭け事は禁止されているはずだぞ？」
「うっ……し、しかし軍とは無関係の民間人との賭け事は、」
「アリサと何を賭けたんだ……？」

怒られてやんの……なんてことは考えてませんよ？
そもそも副隊長に意地悪するためではなく必要なことだから暴露したわけですから。

「賭けの内容は三日目、つまり明日、凰鈴音と隊長のどちらが織斑一夏とデートできるか、という内容のものです」
「な、エリー！？」

ドイツの集音マイク（科学力）は世界一ィィィ……というわけではありませんがマイクはいたる所に設置されていますので。
それに口の動きから文脈を判断して内容を予測する疑似読唇システムもありますから基地内での隠し事はまず不可能ですよ。
……それを知っているから、私は基地の外に出られないのですけどね。

「へー……そんな賭けしてたんだ？　どうせ私が勝つにきまってるのに」
「クラリッサへの処罰は後で決めるとして……負けるわけにはいかないな」

ばちばちばちと視線で火花を飛ばす凰鈴音と隊長……あの、織斑一夏もこの場にいることを忘れてはいませんか？
……もちろん私が言えることではないのですが。

「箒！？　なんで耳を塞ぐんだよ！」

なるほど……篠ノ乃箒が織斑一夏の耳を塞いでいたのですね。

今はいわゆる空気が読める篠ノ乃箒ということでしょうか……まぁ、二人の気持ちが織斑一夏に知られたら自分が不利になるからかもしれませんが。

「それにしても……意外だな」

「隊長、なにか？」

「お前が軍外部のことに興味を持つのを見るのは初めてだからな」

そう、ですね……私は基地という繭に閉じ込められた幼虫。成長して繭を食い破る前に殺される運命だと思っていましたから。

だから今までは外の世界に興味など示さずに生きてきたのですが……お姉様に逢って、変わってしまったのかもしれません。許されるとは思えませんが、それでも基地の外に出た時のことを夢想してしまいます。

……自分が外に出たいと思っているかは、また別問題なのですけどね。

「エリー、どうした？」

「いえ、何でもありません。とにかくお姉様とシャルロット・デュノアのことをどうするか考えないといけません」

話が脱線してしまう前になんとか元に戻せたように思います。

「お互いに誤解をしてしまっているのでドイツ滞在中に、というのは難しいかもしれませんが……」

ドイツはおろか基地からもあまり出られない身としては歯がゆい

ですね……

　せっかくのドイツ旅行がお姉様にとって嫌な記憶になるのは辛いです。ですからこうして大勢を動員して無理矢理にでも解決させてもらいたいのです。

「なに、簡単よ。要するにアリサとシャルロットが素直になればいいんでしょ？」

「ええ、ですがお互いが誤解していることを伝えようにもさすがに誤解の内容はわからなかったので説得力があるかというと……」

　お二人が誤解しているのは明確なのですが根拠がなければお二人を納得させることも出来ないでしょうし……

「まぁ、アリサの方は特に準備はいらないからシャルロットの方考えましょ。アリサなんて二秒で攻略できるわ」

「鈴さん……もしかして、」

「多分それよ。効果的でしょ？」

　凰鈴音とセシリア・オルコットが無言で頷き合います……何をするつもりかは分かりませんが任せて良さそうです。

　さて、そうなるとシャルロット・デュノアの方が問題となるのですが……

「彼女と一番親しいのは誰ですか？」

「アリサさんを除けば……やっぱりラウラさんですわ」

「わ、私か！？」

「だって私とセシリアは最初はシャルロットが好きじゃなかったし、一夏は男だから仲がいいって言っても別でしょ？　それならラウラでしょ」

「ちょっと待て！　異論はないがどうして私の名前は出さないんだ

！？」
「え、論外でしょ？」
「論外ですわね」
「まぁ、そうだな」
「な、なんだと……私はそこまでシャルロットに嫌われていたのか……？」

……いくらなんでも篠ノ之箒が憐れだと思うのですが、これでいいのでしょうか？
その、私から見れば彼女が特別嫌われているようにも思えません。
と、そこで織斑一夏が動きました。

「箒、そうじゃない」
「一夏……そうだな。ただの冗談に反応してしまったか。これだから私は空気読めないと言われてしまうんだ」」
「そう、箒がＫＹだから論外なんだ。大人しくしててくれ」

……うわ、彼もなかなか容赦ない人だったんですね。
慰めてから突き落とすとか思い付いても実行する人は少ないでしょう……

「ということで、俺は箒が余計な手を出さないように監視するからシャルロットの方は任せた……ほら、箒行くぞ」
「ああ……」

織斑一夏が篠ノ之箒の手を引いて退場しました。
手を引かれて連れていかれるというのは少なくとも凰鈴音と隊長にとっては羨ましいはずですが……二人とも妙にほっとしていますね。
それほどまでに篠ノ之箒は要注意なのでしょうか？

「こほん……それで、隊長はシャルロット・デュノアについてのプランはありますか？」
「ん？　ああ、そうだな……シャルロットはああ見えて執着心は強い。だから上手く嫉妬させることができればいいんだが……」
「このメンツじゃアリサと仲良くしてもいつものことだし、そもそも女同士だしね。アリサに近い男ってのも少ないし……さすがに二人のためとはいえ一夏をぶつけるのも嫌だし……」
嫉妬させることは難しいと……
「あら？　わたくしには煽り役としての人材に心当たりがあるのですが……」
セシリア・オルコットが他の二人を意外そうな顔で見ています。彼女にとってはそれ以外は有り得ない、ということでしょうか？
しかし、まさかとは思いますがこの場にいない人間ではないですよね？
そうなると、さすがに呼び寄せるのは難しいので……
「いるじゃありませんか。このドイツでアリサさんとの距離が急速に縮まった人が……」
どこから取り出したのか真っ青な羽扇子を広げて口許を隠しながらニコリと一言。
「ねぇ、エリーさん？」

81. Ensorceleur et une ruse（後書き）

次で１００部ですね。。。

82．Ｂｅａｕｃｏｕｐ ｄｅ ｃａｍｏｕｆｌａｇｅ（前書き）

「多重カモフラージュ」

なんだか水樹奈々の歌にありそうなタイトルだ……

いつのまにか百部目でした。
これも忍耐強くよんでくださっている皆様のお陰です。

追記　そういえば一夏の誕生日だったらしいですね。登場しませんが（

82. Beaucoup de camouflage

「わ、私ですか？」
「ええ、ドイツに来てからアリサさんと仲良くなったのはエリーさん。貴女だけですわ」
「そ、そんな！　私は……一方的にお姉様をお慕いしているだけで……嫉妬というのは、自分の好きな方が他の方と仲良くしているから抱く感情ですから……」

お姉様がそこまで私に気持ちを向けてくれているなんて……信じられません。

「ですが、アリサさんは貴女の唇を奪ったのでしょう？　でしたら、やはりアリサさんにとっても近しい人間になったと見ても問題ありませんわ」
「ですが……まだ、お姉様に出逢ってから一日しか経っていないのですよ？　それがどうして、」
「じゃあさ、エリーのアリサに対する気持ちも嘘なんだ？」
「嘘じゃありません！」

お姉様にキスされてから、私からお姉様への愛情が敬愛なのか恋愛かも分からなくなってしまいましたが……

「それでも、お姉様を幸せにしたい気持ちに嘘はありません……」
「出逢ってからたった一日しか経ってないのに？」
「……あ」

そう、ですね……私が一日でここまで強く惹かれているのですから、もしかしたら……お姉様も私と同じような気持ちでいてくれるかも

しれません。

「ちなみに言うとね、アリサがキスをしたのって意外と少ないのよ？」

「意外と……？　お姉様は見るからに貞操観念は固そうですが……」

「え？　あ、そっかアリサの酔ったときを……まぁ、とにかくアリサが素面の状態でキスをしたのなんてシャルとあんたくらいなのよ。誰にでもするわけじゃないキスをされたんだから少しは認めてもいいんじゃない？」

「そう……ですね」

だいたい助けたいのは私なんですから、私が一番頑張らないといけませんよね。

「それにしてもアリサを幸せにしたい気持ち……ねぇ」

「なにか？」

「いーや？　ただ、普通はアリサに幸せになってもらいたい気持ちじゃないかなって。アリサも罪な女ね」

「……訳がわかりません」

それにしても私がシャルロット・デュノアの嫉妬心を煽ることになるなんて……私に、出来るでしょうか？

自慢ではありませんが私は人と話すのが苦手です。もちろん声を出して重要事項を伝え、声を聞いて重要事項を知るということはできます。

ですが……気持ちの通った人間らしい会話ができません。無感情か直情的か……そのどちらかでしか話すことができないのです。

試験管ベビーとして生まれてから数十人のシュヴァルツェ・ハーゼの隊員としか関わったことのない私には自然に自分の気持ちを表現する方法が分からないんです。

今まで、気持ちを表現する相手がいませんでしたから。
ですから、友情とか愛情とか……未だに理解できていると思えません。
そんな、つまらない人間である私がシャルロット・デュノアが嫉妬してしまうくらいお姉様を楽しませなければいけないなんて……出来るわけがありません。

「……やはり、自信がありませんか？　そうなのでしたらわたくしとしても無理強いはしませんわ。他にも方法はあるのですし……」
「他の方法があるんですか！？」
「ええ、簡単ですわ。二人を一つの部屋に閉じ込めてしまえばよいのです……」
「そんな……簡単に？」

確かに一つの部屋に閉じ込めてしまえば無理矢理話し合う時間を作れるでしょうし有効かもしれません。
でも、それならどうして……そうしないのですか？

「その代わりアリサさんが余計に傷付くことになるのですが……エリーさんは諦めますの？」
「……いえ、諦めません。私が、お姉様を幸せにします」
「ええ、今はそれでよろしいですわ」

少しひっかかりますが、とりあえずシャルロット・デュノアのことはこれで終わりです。
それで、お姉様のことなのですが……

「結局、どうするのですか？　何やら秘策があるようですが……？」
「まぁ、全うな方法かと言われるとそうでもないんだけど……」

それでも一番効果的なのよ、と前置きをしてから凰鈴音が話始めました。

「ようするにね、お酒を飲ますのよ」

「え？」

「アリサはお酒を飲めば自分の気持ちに素直になれる……いや、ダメ人間みたいだけど、それだけ普段から自制してるってことだから多目に見てあげて。それで素直になれているときにシャルロットが嫉妬してなにかアクションを起こしたらどうなる？」

「え？　……あ、お姉様は素直に気持ちを告げて、お互いに傷つくことなく元の鞘に……？」

「そういうこと。だからアリサを酔わせてシャルロットを嫉妬させれば解決するの……分かった？」

「はい……お姉様を、幸せにできるのですね」

心が満たされていくのが分かります。

私の頑張りが、お姉様が笑っている未来を作る……それは、なんて幸せなことなのでしょう。

今までいてもいなくても同じだった私が誰かの幸せの礎になれるのです。

今、この場において初めて私じゃないといけないことがあるという喜びを知りました。

「エリー、アリサのためにも頑張りなさいよ？　正直いって酔ってるアリサはかなり可愛いけど変な気を起こしちゃダメよ？」

「わかっています……お姉様の幸せを壊すような真似をどうしてできましょうか？」

「その調子よ」

お姉様、待っていてくださいね……私が、必ずお姉様を笑顔にして

見せます。

「では、私はいつから行動を始めればいいのでしょうか？」
「そうですわね。早ければ早いほどいいと思いますわ。ただ、肝心なのはシャルロットさんに見せつけることですからシャルロットさんがいないときは必要以上に近づく必要もありませんわ」
「分かりました」
「あ、そうだ……さっき基地内の会話なら全部聞けちゃうって言ってたわよね？　ちょっとアリサに相談事があるんだけど……その、誰にも聞かれたくないから……」

鳳鈴音が顔を赤くしてうつ向きます。この様子ですと……織斑一夏のことでしょうか？
恋愛事情を知られたくない、というのはよく分かりませんがどうしても聞きたいということもないので……

「そうですね。実は隊長が普段使っている部屋と大臣の仮眠部屋はマイクが設置されていません。なのでそのどちらかでどうぞ」
「そう？　ならその仮眠部屋っての借りるわね」
「了解しました。私はランチパーティを開くことができるよう厨房に交渉してきます。豪勢な方がいいですよね？」
「そうですわね。そちらの方がアリサさんに近付きやすいでしょうし……ランチパーティ中はアリサさんから離れないでください」

……今日の夜には、またお姉様とシャルロット・デュノアが笑いあっているのでしょう。
セシリア・オルコットと鳳鈴音……この二人のおかげでお姉様にとってドイツが悲しい思い出となることは避けられたようです。
私にとってはドイツもフランスも日本もまだ見ぬ土地なので違いがわからないのですが、それでもドイツを嫌いになられるのは悲しい

です。

「それではいってきます。存分に腕を振るうよう伝えましょう」

◇

「……エリーさんの方はこれでいいですわね。アリサさんは鈴さんに任せるのですし、シャルロットさんは最後ですから……わたくしの出番はひとまず終わりですわね」

……アリサさんは絶対に幸せになっていただかないといけません。わたくしとアリサさんが初めてあったとき、周囲の人間全てを疑い、そして同時に怯えていたアリサさんですから。

……幼かったあの頃のわたくしにはアリサさんがいじめに屈した情けない女の子と思えましたが、考え方もある程度大人に近付いてきたわたくしが再びあのときのアリサさんを思い返して気付くのはわたくしの罪深さだけですわ。

アリサさんがどのような、そしてどれほど苛烈ないじめにあっていたかを知りもしないで、ただアリサさんが強くなればいいという勘違いだけで無理矢理に引っ張って……結局、アリサさんは他人との距離感を掴めないままに成長してしまいました。

わたくしが無理矢理に立たせるのではなくてアリサさんの傷を癒してあげることの大事さに気付いていれば……幼かったわたくしにそんなことを理解しろというのも難しいでしょうが、それでも後悔せずにはいられません。

今までアリサさんが笑えていたのはわたくしのおかげなどではなく、アリサさんが要領よく自身が傷つかないための処世術を確立したからですわ。

結局、わたくしがしたことと言えばアリサさんの心の歪みを後戻りできない所まで持ってきてしまっただけです。わたくしか無用な手

出しをしなければ。時間はかかったかもしれませんがアリサさんも普通の心を持った女の子として、今よりもっとたくさんの人に囲まれていたでしょうに……

「本当に、類は友を呼ぶのかもしれませんわね……」

わたくしたちは皆、どこかに傷をもっています。

アリサさんは家族以外に親しい人がおらず、私や鈴さん、それに一夏さんには親が欠けていてラウラさんに至っては血の繋がりのある人間すらいません。シャルロットさんも今でこそ社長令嬢ですが不義の子であったという事実は一生ついて回ります。一見、家族が健在で普通の家庭に見える箒さんでさえ世界という途方もなく大きな相手から姉と比べられるという生活を送っていたようですし……

ですから、アリサさんが幸せになるということはわたくしたちを勇気づけることでもあるのです。

ことがうまく運ぶことを願っていますわ……未だに女性同士の恋というものは理解に苦しみますけれど。

「全てはエリーさんにかかっているのです。彼女が最後までやりきれれば……もちろん、やりきれなくてもアリサさんとシャルロットさんの間にある誤解は解けるでしょうが……」

……その場合は後味が悪くなることも覚悟しなければなりませんわね。

全員が納得できる終わりかたでないと結局アリサさんも納得いたしませんから……人のことばかり気にするというのも難儀なものですわね。もう少し自分勝手に生きられてもいいはずですわ。

「まぁ、いくら難儀な子でもアリサさんはわたくしにとっては妹みたいなものですから構いませんわ」

鈴さんなんかは失礼にもわたくしのことをアリサさんの母親のようと言いますが……わたくしだって皆さんと同じ女の子なのですわ……

◇

「すぅ……はぁ～～……」

よし……気持ちは整いました。

あとはシャルロット・デュノアに対し、私とお姉様と親密である風に見せかければよいのですよね……まともな友人関係を築いたことのない私にしてみればちょっとした冒険ですが、そもそも私が言い出したことなので怖いなんて弱音は吐けません。

そうしていくつかの深呼吸を繰り返したとき、お姉様がランチパーティーの場に現れました。

お姉様のお召し物はその艶やかな髪の毛と同じ桜色のドレスです。

お姉様は自前のドレスを持ってきていたようですが今回はこちらで用意させていただきました。もちろん子のままプレゼントしてしまう予定です。

他の方にも、例えばセシリア・オルコットには青硝子（ガラス）で装飾されたマリンブルーのドレスを、凰鈴音には金糸の刺繍を施した真紅のドレスをプレゼントしています。

こうして見てみるとお姉様のだけ少しおとなしめにも見えますが……まぁ、生地が違うのです。発注したのは私ですからね。

どの方にどのデザインを、というのはお姉様たちが来る前から隊員の皆さんで話し合っていました……なので、お姉様のドレスだけ生地が高級なのは偶然です。なんでも桜色に染めるための染料の値がはるのだとか。

なにはともあれ皆様に似合っていて喜ばしい限りです。

「あっ！　エリーちゃん！」

私に気付いたお姉様がニコニコと笑いながら……エリー、ちゃん……？

「あ、あの、お姉様、エリーちゃんというのは？」

「え？　エリーちゃんはエリーちゃんですよね？」

「ええ、しかしこれまではエリーさんと……」

「こまかいこたぁどうでもいいんですって♪」

……言動も先程より幾分か丸くなられています。まさか凰鈴音が言っていた“酔ったお姉様はとても可愛らしい”というのはこういうことなのでしょうか？

確かにお姉様の身長が低く童顔であることも相まって幼げな話し方になると可愛らしくはなっていますが……私は普段の凛々しいお姉様の方が……

「……ん？　エリーちゃん、私の顔になにかついてます？」

「い、いえ」

「ふふっ、おかしなエリーちゃん」

……これはこれでいいかもしれません。

素面では笑顔の裏にも陰があり言葉の端々から一種の冷淡さが覗けたのですが今はそれもありません。

底抜けに明るいということとも違いますが……もしかするとこれが本来のお姉様なのかもしれませんね。

「んぅ……お腹空いちゃいましたね……」

「あ、それでしたらサンドイッチでもいかがですか？　あちらに様々な種類があるので、」

「あーん……」
「ふぇ？」

お姉様が私に向けて口を……？
も、もしかして私のお皿に乗っているサンドイッチを、ということ
でしょうか？
つ、つまり恋人がやるような行いを私に求めて……？

「まぁーだでーすか？」
「は、はい！　えと、どうぞ」
「あーんって言ってください」

べ、別に私が言う必要ないじゃないですか！
……もう、仕方ありませんね！

「あ、あーん……」
「はむっ……ん……これ、美味しいですねー」
「そ、そうですか？　向こうの方に、」
「……もう一口ください！」

そ、そんな……一度でも恥ずかしかったのにもう一度だなんて……
これでは恋人みたいじゃないですか！
……いえ、嫌というわけではなくてむしろ……もちろん自分で取っ
てこいと言うわけでも……

「うぅ……あ、あーん」
「あむっ♪　んー、やっぱり美味しいです！」
「そうですか……ふふっ」

なんでしょう…恥ずかしいのですが嬉しさもありますね。

お姉様のお世話もなかなか楽しいです。
次は何をしてあげましょう……

「って、私はなにを普通に楽しんでいるのでしょう……！」

私の目的はシャルロット・デュノアを嫉妬させ、アリサは私のもの！　と言わせることなんですから楽しむだけではいけません！
とにかくシャルロット・デュノアの位置を確認して……どうやら幸先はいいようで彼女も私たちのことを見ていたようです。音がするほどの素早さで目を逸らされてしまいましたが。
えーと、セシリア・オルコットのプランでは会場内を動くときは手を繋ぐんでしたね。
……よし。いきます……！

「お、お姉様、あちらにお肉があるのですが食べたいですか？」
「うん！」

……っは！？
ま、まさか子供のように“うん”と答えられるとは思っていませんでした……不覚にもドキッとしてしまいましたよ。

「では、こちらに」
「……どうして手を繋ぐの？」
「そ、それは、えと……あ、案内するためです！」
「そっかー！　ありがと、エリーちゃん」

お姉様が繋がれている手を見つめてふわりと微笑みました。
なぜか顔が熱くなります……

「あら、アリサにエリー……あんたたち、そうしてると本当の姉妹

……というより同い年の友達ね」
「お、鳳鈴音……！」
「恥ずかしいからって睨まないでよ。というかいつまでフルネームで呼ぶつもり？」
「ぐ、軍則……ですので！」
「ラウラは普通に呼んでくれるわよ？」
「た、隊長は特別です！」
「じゃあ、アリサをお姉様って呼ぶのはいいの？」
「わ、我が隊の伝統ですので！　し、失礼します！」

む、無駄にお姉様を意識させるなんて嫌な人ですね！
……そうです。
私にとって彼女たちは他人……でも、お姉様は……

「ねぇ、エリーちゃん。どうして私はおねまなんです？」
「……シュヴァルツェ・ハーゼでは自らが尊敬し付いていこうと決めた人をお姉様と呼ぶ習慣があるのです」

習慣があるといっても元は副隊長が日本のゲームで知った知識というなんとも日の浅い習慣ですけれど。
……隊の人たちは揃って副隊長をお姉様と呼んでいますが、当時の私からしてみれば馬鹿馬鹿しいことで誰かを尊敬するなんて思いもよらなかったのですが……

「お姉様は私の目標なのかもしれません……」
「え？　わ、私なんかを目標にしちゃ駄目ですよ。鈴ちゃんとかセシぃとか……エリーさんのためになるような立派な人は他にいますよ……」

……お姉様が急に真面目な顔つきになってしまいました。どんなに酔っていても真面目になる一線というものがあるのでしょうか……？

「で、ですが……私を抱き締めてくれたのはお姉様だけです！」

「……エリーちゃんは可愛いですねー♪」

「そ、そんなことは……あぅ」

お姉様が私の頭をぐしぐしと少し乱暴に撫でてくれました。

……今まで、このように私に触れてくれたのは数えるほどしかいません。ほとんどの人は私がどんなに結果を出そうとも調整体だから、という言葉で当然の結果にしてしまいます。

そうした少ない人たちの中で私を抱き締めてくれたのはお姉様だけ……お姉様なら私を普通に扱ってくれそうだか、私はお姉様とお呼びするのです。

「……お姉様、肉料理まで案内します！」

「うん、お願いします」

82. Beaucoup de camouflage（後書き）

スマホからだと文頭にスペース入れるのができなくなってますね…

…

83. Ａｒｂｉｔｒａｇｅ（前書き）

「仲裁」

そ、そろそろドイツ終われる……

83．　Ａｒｂｉｔｒａｇｅ

「お、お姉様っ……あーん、してください……！」
「あ～ん♪　んー、美味しい！」
「そ、そうですか。これは私も好きな料理なんですよ」

イライライライライラ……
調子乗ってくれちゃって……どうしてくれようかな。
そうだな……彼女の料理にさりげなくタバスコでも振りかけてみようか……それともスープに死ぬほどはちみつを溶かし混もうかな……もちろん彼女――エリーちゃんもそれくらいの覚悟があってアリサに近付いてるんだよね？
……もう、別れちゃったけど……それでも別れたことは皆に言ってない。
だからエリーちゃんはアリサがフリーになったからモーションをかけてるんじゃない。僕から奪い取るつもりなんだよね……？
……泥棒猫は毛皮を剥いで三味線にしようかな……

「ふふふふふ……！」
「しゃ、シャルロットさん？　な、なにか面白いものでもあったんですの？」

声につられて振り返ってみればセシリアがいた。
ん？　セシリア、どうして僕の顔を見て怯えたような声を出すのかな？

「別に？　ただ、アリサが可愛いなぁってね……ふふっ」
「そ、そうですの……それなら直接言ってあげればよろしいのではなくて？」

「……うん」

僕も……言いたいよ。

でも、僕がアリサを好きだって気持ちは、僕のことを好きじゃなくなっちゃったアリサにとって重荷になるから……

アリサが嫌がることは……したくないんだよね。

どうして、別れちゃったのかな？

やっぱり、アリサの理想に僕が追い付けなかったから？

それとも、僕がアリサのことを怒っちゃったからかな……僕がアリサを恨んでた頃を思い出して、冷めちゃったのかもしれない。

どうしてアリサを恨んじゃったんだろう……転校してくる前にアリサがやったことを中途半端に調べたから……もっとよく調べてれば……父であるあの人に聞いてみていれば……

でも、そうしなかったから……見当違いな恨みをアリサに向けて、アリサが苛められても気にしないで……むしろ喜んで……あのときのことがなければ、今もアリサと付き合えてたかもしれないのに。

「因果、応報……かぁ」

人になにかをすれば、それが良いことでも悪いことでも自分に返ってくる。アリサを恨んだから……今度は僕が嫌われたんだね……

エリーちゃんと仲良くしているアリサを見ているだけで心がきゅうっと……痛いくらいに縮む。

僕に恨まれていたときのアリサは……もっと辛かったのかな……？

……好きな人に目の敵にされてたんだから当たり前だよね。

でも、僕なら……アリサに嫌われてもいいから、僕に対してだけの感情を向けてほしいかもね。

例え、大嫌いっていうものでも……

「今日は目も合わせてくれないからな……」

気まずいんだろうけど……友達としての付き合いもできなくなっちゃうのかも……

でも、アリサに無理をさせたくないし嫌がることをしたくないから……アリサから近付いてきてくれるまでは何もできないよ……

自分から友達みたいに話しかけるなんて……別れたことを認めちゃうみたいで怖い。

僕は別れたくなかったのに……どうして……

「僕たちは好き合えてなかったの？」

あの時、アリサが友達に戻りましょうって言ったときに理由を聞いてれば……こんなに引きずることもなったのかも。

それを教えてくれれば僕だって変われるように努力するのに……でも、アリサが理由を言わなかったってことは、きっと言いたくなかったことがあったからなんだと思う。

僕かアリサが傷つくことだから……

僕が傷つくことなら別に構わない。そんなことがどうでもよくなるくらいアリサが好きだから。でもアリサが傷つくのはいやだから……だから聞けなかった。

……僕が自分で理由を見つけないと。

「お姉様……」

「なんですか、エリーちゃん？」

アリサは……エリーちゃんを受け入れてるみたい。人見知りなところがあるのに初日から一緒に仲がよくなってた。

……エリーちゃんはアリサのことをどう思ってるんだろう。

普通に姉的な存在として見てるの？

それとも……好きなの？

僕の時はすごく時間かかったのに二人はすぐに距離が近付いてて…
…アリサ、ドイツに行っちゃったりしないよね？
デュノア社を守ってくれるって言ってたもんね……？

「嫌だな……」

アリサを引き留めるために、他のものを理由にするなんて……アリサには、僕がいるからフランスにいるって思っててほしい。

◇

……シャルロット・デュノアもこちらのことを少しは気にしてくれているようですね。
お姉様と話すのは楽しいので目的を忘れそうになりますが、これは作戦なんです。お姉様と仲良くしているところをシャルロット・デュノアに見せ付けて嫉妬心を煽り行動を起こさせる。
そうすればお姉様も誤解をしていたことに気がついてシャルロット・デュノアの手を握るでしょう。
いろいろありましたがドイツ旅行の終わりには皆に幸せを感じてほしいです。
シュヴァルツェ・ハーゼの隊員にも、ＩＳ学園からきた代表候補生にも……もちろんお姉様とシャルロット・デュノアにも。
そして、帰ってしまったあとにドイツが楽しかったと言ってもらえば、それが私の……

……私の、幸せ？

そんなのが、私の幸せ……？
い、いえ……なにを考えているんでしょう。どうせ私はこの基地から出られないのですから私の幸せなんてどうでもいいんです。

大事なのは私と関わった皆が幸せになること……そう、今はお姉様が再びシャルロット・デュノアの隣で笑えるようになればいいんです。

「それが、私の幸せのはずです……！」
「エリーちゃん？　どうかしましたか？」
「い、いえ……気になさらないでください」

私の役目はお姉様とシャルロット・デュノアの間にある誤解を解くことだけです。
余計なことは考えてはいけません。

「それを言うのは、気にしてることがあるって……いえ、気にしてほしいってことになりますよ？」
「そ、そんなことは……」

私の、ことなんて……どうでもいいんです。お姉様の幸せが、私の幸せです。
例え……お姉様から遠く離れていても……私の近くにお姉様がいなくても、シャルロット・デュノアと一緒にお姉様が幸せなら……

「そんなの……嫌、です……！」
「エリー、ちゃん……？」

嫌です……
私の近くにはお姉様がいてほしい……誰よりも近くで笑っていてほしいです。
基地から出られない私に外のことを教えて欲しい……
遠くで幸せになられても……私は幸せになれません。お姉様が近くにいないと寂しいままです。

お姉様の優しい声も、抱き締めてくれた体温も……失いたくないです！

もう、独りなのは嫌なんです。

私に優しくしてくれるのはお姉様だけだから……私が優しくできるのはお姉様だけだから……シャルロット・デュノアなんかに、お姉様を渡したくないです。

「お姉、様」

「はい？」

……酔っている時のお姉様はなんでも言うことを聞くそうです。今なら……お姉様を手に入れられます。

だから……だから……

「お姉様、座ってください」

「ん？　うん……」

少し、訝しげにされましたが……酔っているなら平気なはず。

……ごめんなさい、皆さん。

私のせいで作戦は失敗に終わります。

……ごめんなさい、シャルロット・デュノア。

あなたからお姉様を奪います。

ごめんなさい、お姉様。

……もう、シャルロット・デュノアと仲直りすることはさせません。

「お姉様、私のこと、好きですか？」

「はい、好きですよ？」

「妹のように……ですか？」

「はい。エリーちゃんも私のことわお姉様って呼んでくれますし」

「私も、本当のお姉様のようにお慕いしていると……思っていまし

た」
「え……？」

お姉様のキスが怖くて突き飛ばしてしまったから、私はお姉様に恋愛感情を覚えているわけではないのだと思いました。
私は純粋にお姉様のことが気に入っているのだと…

「お姉様、もう一度、言わせてください」
「え、エリーちゃん……」
「私はお姉様のことが好きです。お姉様が真っ当な人間として愛されるのが嫌なら造られた私があなたを愛します。全て、お姉様の望むようにしましょう。だから、シャルロット・デュノアのことを忘れて……私を愛してください……」

あとは、このままお姉様にキスを……

がしっ

◇

……はぁ、やっぱりこうなるのね。
このままエリーが自分の気持ちに気付かなければ、と思ってたけど無理があったか……
……どうして自分がアリサを助けたいか。それに気付いたのね。
普通の友情とか親愛とかだったら出逢って一日の相手にここまでしてあげようとは思わない。
一目惚れ……アリサも罪な子だわ。

「まぁ、こうなることを予想してた私も私だけどね」

アリサに告白してキスを迫ったエリー……酔ってるアリサ相手なら拒まないこらこれで決着ね。
……酔ってるアリサなら。

「お姉様……？」
「ごめんなさい。私は嘘をついていました」

キスをしようと顔を近づけたエリーをアリサが止めた。
……アリサは素面だから。
私がアリサに全部話して、それでもシャルロットとアリサの間に誤解があることを認めたがらなかったから……本当のことが知りたかったら酔ってるふりをしなさいって伝えたの。
こうならなければいいと思ってたけど……結果的にエリーは気付かない方がよかったことに気付いて、シャルロットはアリサに試されてたということを知った。
……アリサのせいで。
そして、一番傷付いたのはエリー。
アリサとシャルロットは喧嘩をしないはず。シャルロットは短絡的じゃないし……多分、試されたことを怒るよりも先に話し合うはずだから。
でも、エリーの方はどうかしら。

「嘘を……？」
「はい……私は、酔ってません

本当にアリサを酔わせてればエリーは傷付かなかった。
それ以前にアリサを殴ってでもシャルロットと仲直りさせてればこんなことにもならなかった。
エリーが自分の気持ちに気付いちゃうのは予測できたから……だからアリサを酔わせなかった。

でもエリーが自分の力でアリサを幸せにしたいって言ったから……
それを叶えてあげたかった。
もしかしたら、私はエリーに気付いてほしかったのかもしれない。
恋は素敵だから……ここに閉じ込められてるって言ってもいいエリーに、それだけは知ってほしかったのかも。
どっちにも優しくしようとして、結局皆を傷付けた。

「はぁ……分かってましたよ、お姉様。もうちょっとだったのに……」
「え？」
ん？

「もう……あと数秒、お姉様の反応が遅ければシャルロット・デュノアが動いたはずだったんですよ？　……まぁ、少し感情を込めすぎましたが」
「ほぇ？」
「ですよね？」

エリーがシャルロットに問いかけると……

「な……え、あれ？　……え？」
「お姉様はまだあなたのことを愛しています。今朝方のは別れの言葉にも聞こえますが……本当はあなたに嫌だって言ってほしかったのではないでしょうか？」
あれ？

「そ、そうなの？」
「いや、あの、私は……」

あー……　この子の方が一歩上手だったのかしら？
しっかし、よくアリサが酔ってないって分かったわね。私から見てもアリサの酔ったフリは見事だと思ったんだけど。

「そうですよね、お姉様？　それなのに身を引かれてしまったから……」

「ぼ、僕は、アリサが嫌がることはしたくなくて……」

「分かってますよ。ただお姉様が勘違いしてしまって……ね、お姉様？」

「えと、その……はい」

おぉー。見事に納めたわね。
これって結局作戦どおりってことになるのかしらね？
シャルロットは嫉妬したわけだし唯一の問題だったシャルロットがアリサのことを許せるかってのもエリーが上手くやってくれたし。

「これで、お二人とも仲直りですね？」

「う、うん……」

「はい……」

「ではキスでもしたらいかがでしょう？　皆、心配していたんですよ？　ですから仲直りしたってことを示すために口づけを」

「「……」」

う、うわー。もうここからはただの悪戯よね。
……まぁ、一件落着ってことでいいのかしらね？

「さーて、私はラウラとの勝負に勝たないとね」

一夏はどこ行ったのかしら。

84. Je le visite dans le pyjama.（前書き

「パジャマでおじゃま」

いやいや……ドイツ話はもともとパジャマパーティーが目的だったんですよね。

なかなか時間がかかりましたがドイツ編もそろそろ終わりです

84. Je le visite dans le pyjama.

「シャル、急がないとダメですよー」
「う、うん……で、でもこれでいくのは……」
「可愛いですよ？」
「そ、そりゃ……お気に入りだけど」
「早くしないとパーティ始まっちゃいますって！」
「う、うん……でも、これって少し過激じゃないかな……？」

少しどころじゃないです。すごく過激です。
でもパジャマの……ネグリジェの裾を恥ずかしそうに握るシャルは可愛すぎます！
その過激すぎるネグリジェというのも基本はオレンジ色なのですが……ほぼランジェリーなので大事なところ以外は透けてるんです。
イメージ的には下着の上に半透明の超ミニワンピを着ている感じでしょうか？　胸元がフリルになっていたりはしますがだいたいそんな感じで……うっすら見えるお臍がキュートです。

「でもアリサって普段からそれで寝てるの？」
「いえ、私も新しくおろしたんです。大人っぽいですか？」

シャルがうんうんと頷いてくれました……やたっ！
……私が着ているのもネグリジェなのですが私のはシャルのもののように透けているわけではなくシンプルな黒のネグリジェです。
裾が長いので少し引きずってしまうのですが、シルクなので肌触りが滑らかで気に入りました。
それで、どうして二日目の夕食前から寝巻きを見せあっているのかと言うと……まぁ、一つは昨日の夜があんなだったのでまともに見せあいっこができなかったということ。そしてもう一つはこれから

パジャマパーティがあるからです。

「うぅ……やっぱり、もう一つの方に……」

「もう時間がありませんって！」

「で、でも……アリサ以外にこんな格好見せたくないよぉ……」

……！

……も、もう。

織斑君はいないんですから大丈夫ですって。

あぁ、いえ、織斑君が一人寂しくしていると言うわけではなくてですね……あの野郎やりやがりましたよ。

今日はラウラさんとデート……明日は鈴ちゃんとデートだそうです。

優柔不断と言うかなんと言うか……しっかりしてくださいよ！

こんこん

……私が心のなかで織斑君を絞めていると控えめに扉が叩かれました。

「はい？」

「お姉様……あの、体調でも悪いのですか……？」

扉を開けないままエリーちゃんが気遣わし気に尋ねてきます。

……はて？

体調が悪いってどうしてそんなことを……って、パジャマパーティに十分以上遅刻してるじゃないですか！

「エリーちゃん、ごめん！　シャルがわがまま言うので手こずってるだけです！　すぐ行きます！」

「あっ、僕のせいにしてっ！　……あ、まぁ、僕のせいでもあるけ

ど……」

シャルが恥ずかしがるからじゃないですか！
本当に可愛いので大丈夫ですって！

「で、では先に行っていますので、お姉様たちも来てくださいね？」
「はーい、了解ですー」

エリーちゃんは優しいですね……私とシャルの仲直りまで手伝ってくれて、今も遅れているのを心配してわざわざ来てくれるなんて……天羽もエリーちゃんみたいな子をお嫁さんにしてほしいです。
……あ、それいいですね。そうすれば私とエリーちゃんも名実ともに義姉妹になれますし！
私はエリーちゃんも大好きですからね……

「む～っ！　またエリーちゃんのことばっかり！」
「あっ、いえっ……そんなことはないですよ？」
「……ほんと？」

ああ！
胸に手を当てて上目遣いで私を見てくるシャルのなんて可愛いことか……！
だ、ダメです！
我慢できません！

「シャル～！　……ちゅっ」
「ぅむっ！？　……も、もう！　お、遅れちゃうよ！」

っは！
そ、そうでした。

皆さんを待たせるのはよくありませんからね！
早く行きましょう！

「アリサ、手、繋ご？」
「ふぇっ！？　は、はい……」
「……アリサを放っとくと迷いそうだからね」
「えぇ！？　そういう理由ならお断りですっ！」
「もう離さないもーん。それに、今だって真逆に走り出そうとしてたし……」
「うぐぅ……」

い、急ごうとして道を確認し忘れることくらいよくあることじゃないですか！
え……ありますよね？

「だから迷子になりやすいんじゃない……？」
「つまり、確認し忘れることなんて早々ないということですか……！？」

私、日常的なことでこれほどのショックを受けたのは久しぶりかもしれません……
というか、私は迷子になってなんか……

「そう！　あえて未知の道を選ぶというチャレンジャー精神に満ち溢れているんですよ！」
「おー、未知と道と満ち溢れてるをかけたんだね」

か、かけてません！
今のは偶然で……ですが織斑君のあれに影響を受けているという可能性も……

「はいはい……じゃあ行こうか」
「そ、そんなおざなりな反応だけで、って、引っ張らないでくだ…
…あぁ、でも手を離しちゃヤです！」
「もー、ただでさえ遅れてるんだから！　あんまり抵抗するとお姫
様だっこしちゃうよ！」

え！？
お、お姫様だっこですか！？
い、いや、そんな恥ずかしい真似……も、もちろん私も女の子なの
で憧れとかはありますけども筋肉ばかりで重いですし……
えと、そのー、あのー……

「……お願いします」
「ふぇっ！？」

意を決して言ってみると……シャルが豆鉄砲を食らった鳩のような
顔をしていました。
……あ、あれ……もしかして冗談でした？

「……うん！　任せて♪」
「きゃっ！　……えへへ」

お姫様だっこはいいものですね。

◇

「おまたせー」
「お、お待たせしました……」

あ、あの、シャル？
その、お姫様だっこのままで部屋の中に入る必要はなかったと思うのですが……皆に注目されちゃってますってぇ……

「まったく……朝に別れて昼に仲直り、夜にはイチャつくって訳？」
「私たちが手を出さなくても平気だったかもしれませんね。お姉様？」
「あぅ……その節はご迷惑をおかけしました……」

でもでも、皆さんのおかげで私とシャルの間の絆はずいぶんと強固なものになったはずです！
これからは鉄鎖のごとく硬く、そして永い愛を誓います！
……なんだか結婚するみたいですね。顔があっつくなっちゃいます。

「しかしシャルのもですがセシぃのネグリジェもえっちぃですね」
「そうでしょうか……？」

セシぃのは青いすけすけなのですが……胸がシャルより大きいから余計に、というより無駄に扇情的です。
一方で鈴ちゃんはというと普段通りの見慣れたTシャツと短パンでした。お臍がちらりと見えたり太股がほとんど露出しているので健康的な魅力を感じます。

「……あいかわらずというかなんというかアリサってファッションの表現が親父っぽいわね」
「そ、そんなことないですよ！？　ええ、そんなことありえません」
「お、お姉様……私の夜着はどうでしょう……」
「エリーちゃんは……」

エリーちゃんのパジャマを見ようと振り返った瞬間……

世界が、止まりました。

「か、可愛すぎます……！」
「……アリサ、またエリーちゃんばっか……」
「はっ！？」

シャル、ごめんなさい！
……でもですよ？
今のエリーちゃんは十人中十人がかわいいって言うこと間違いなしです！
黒を貴重に白いレースやフリルをふんだんに使ったナイトドレス。
それに同様の意匠で飾られたナイトキャップがエリーちゃんの少女らしさを強調しています。
それにシュヴァルツェ・ハーゼの隊員の証である黒い眼帯も今は外していて……べりーべりーきゅーとです！
シャルが口を尖らせていなければ抱き締めていたところです！

「ところでパジャマパーティーってなにするものなんですか？」

企画したのは……鈴ちゃんでしたよね？
パジャマパーティーの内容というものはよくわからないのですが……楽しく騒げばいいのでしょうかね？

「その前に、どうして私の寝巻きには何も言わないんだ！」
「え？　いや、箒さんのはコメントしにくくて……」
「いや！　なにかあるだろう！　せめて一言くらい！」

まったく……自分だけはぶられてるとか被害妄想ですよ？
それに本当にコメントしづらいんですって……まぁ、一言でいいな

ら……

「白襦袢ですね」

「……もういい。それで、何をするんだ？」

皆さんの視線が鈴ちゃんに集まります。

鈴ちゃんは半分困ったような顔をして私たちを見回していますけど……

「いや、騒げばいいんじゃない？」

「何をするかもわからないのにどのようにして騒げばよろしいんですの？」

「は？　いや、だから適当に喋ったり……？」

それならわざわざ集まらなくてもいいような気がしますけど……

それとパジャマを来てきた意味もよく分かりません。暗くなったとはいえまだ寝るには早すぎますし……

「いや、だから特別なにかをするって訳じゃなくて……ほら、合宿とかで泊まると寝る前に意味もなく盛り上がったりするでしょ？」

「わたくしの中学校は私立でしたので宿泊行事の類いは全て個室をいただいていましたわ」

「それに早く寝ないと次の日に影響が出てしまうだろう」

「私は基地から外に出たことがありませんし」

私は……そもそも学校の宿泊行事なんて体験したことがないですね。

不登校でしたし……それに私、暗い部屋で横になるとすぐに眠っちゃうので。

「うわ、あんたたちマジ？　はぁ……シャルロットは分かるよね？」

「ん？　んー……まぁ、僕はあんまりお金に余裕もなかったから公立通ってたしね。なんとなく宿泊行事で寝るのがもったいなくなるってのは分かる気がするかな？」
「そう！　それよそれ！　だからせっかくの旅行なんだしパジャマで集まってそういう気分でって……思ったんだけど……」
私たちの反応があまりに悪すぎたからでしょうか……鈴ちゃんがへこんじゃいました。
でも、えと、私たちは嫌だというわけではないのですし、鈴ちゃんがせっかく考えてくれたことなので楽しみたいとは思ってるんです！
……ただ、どうすればいいのでしょう……？
「シャル……その宿泊行事の時はどんなことを話したんですか？」
「えっ！？　えっと、その……あの……」
シャルが話したことをお題みたいにして話してみれば雰囲気はつかめるかもしれません。
……とはいっても、私自身、あまり話すのは得意ではないのですけど。多人数相手に会話をすることはあまりないですから……
「えと……」
「シャル？　どんなことを話したんですか？」
「その……だから……好きな人とか」
なるほどなるほど。恋バナという奴ですね！　アリサ、覚えました！
……あれ？
でもシャルが通っていた学校の宿泊行事ということはシャルと私が知り合う前ということで……えと……
「あの、その時のシャルに好きな人はいたんですか……？」

「あぅ……だから言いたくなかったのに……」

言いたくなかったということは言えないようなことがあったってことですか!?

……いえ、私と出会う前のことなのでいいんですけどね。いいんですけどね!

私がシャルを想っていたときもシャルの気持ちは別の人にいっていたと思うと……

「でもほら、今はアリサが好きだよ?」

「私もです! ……で、誰なんです?」

その程度のことで誤魔化されませんよ!

……いえ、ここまでして聞き出したいことではないのですが引き際が……

「ど、どうしてこだわるの?」

「え? それは……シャルのことならなんでも知りたいですから……」

「そ、そっか……えと、幼馴染の男の子なんだけど……あ! 今はなんとも思ってないよ!?」

「だ、大丈夫です……よ、余裕です、よ?」

「アリサ泣かないでよ〜」

泣いてませんよ!

ちょ、ちょっと目にごみが入っただけで……私がシャルにとって最初だったらよかったのになんて……全然、考えてません……

「こほん……」

見かねたセシィが咳払いを一つ……あ。

「仲がいいのは分かりましたからあまり見せつけないで下さいな？」
「もう秋だってのに暑いわー。エリー、空調を、」
「既に下げました」

エリーちゃんまで……皆さん顔が赤いですし……
別に見せつけようとしていたわけではないんですけど……えと、その……

「ごめんなさい……」
「独り身には辛いものがありましたわ」
「うぐぅ……そ、そういうセシィはどうなんですか！？　今好きな人と昔好きな人を私のシャルが言ったので皆さんも答えるべきです！」
「わ、私のってそんな……アリサ、恥ずかしいよ……」

照れるシャルが可愛いのでいいんです！
とりあえず抱きつきます！
……うーん、お腹もふにふにとしていて暖かいですねぇ。太腿もきゅっと引き締まってますし……

「あの、アリサ……？」
「はっ！？」

……危ないところでした。
つい、皆さんの目の前でシャルを押し倒してしまうところでしたよ。

「……アリサ、手」
「へ？」

「その……さすらないで……？」

……ふぁ！？

き、気付かない内にシャルを内腿を撫でさすっていたみたいです…

…いえ、だって好きな人とのスキンシップは体が自然と求めちゃう

ものなんですよ！

これは人としての運命（さだめ）！　種として自身の子孫を残そうという生存

本能です！

「アリサ、とりあえずあんたはシャルロットの子供は産めないから」

「いえいえ……鈴ちゃん、私たち人間の頭脳とはものすごいもので

ですね……くすくす」

「ど、どうしたのよ……？」

いや、もう笑いが止まりませんね！

私も知ったのはつい最近のことなんですけど……

「ｉＰＳ細胞というものがあってですね……それを応用すれば私た

ちのような女の子の間にも子供が作れるのですよ！　……むだそこ

までの技術は確立されていません。ですがｉＰＳ細胞の第一人者で

ある山中博士は私たち百合っ娘の夢を叶えるために日々研究を続け

てくれています！」

「難病治療のための技術をそんなアレなとのにしないでよ……」

「アレってなんですかアレって！」

まったく……難病治療も大切ですけど私とシャルの子供だって大切

じゃないですか！

し、試験管ベビーだっているんですから倫理的には問題ないはずで

す！

エリーちゃんがいるので口にはしませんけどね！

「……で、皆さんの恋バナは？」
「わたくしは特定の男性に心を奪われたことはありませんわ」
「セシぃ……織斑君は？」
「なっ……！　わ、わたくし勝てない戦はしない主義ですの」
……まぁ、そういうことにしておきますか。鈴ちゃんたちに気を遣っているんでしょうし。
「私は今も昔も一夏が好きだし……箒もでしょ？」
「あ、あぁ、そうだな……」
……えと、文句を言うわけではないのですけど盛り上がりに欠けません？
もちろん私も昔からシャル一筋なのですけども……
「エリーちゃんはどうです？」
「私は……今一番好きなのはお姉様です」
「いえ、あの、」
「お姉様ですよ？　ふふっ」
……まぁ、嬉しいんですけどね？
エリーちゃんには本当の恋ってものを知ってほしいですよね。
私に向けられているのはやっぱり憧れだと思うんです。
鈴ちゃんたちは騙されたみたいですけど……
「恋するお姉さんにはお見通しですよ」
目を見たら……分かっちゃいます。

「私がしてあげられることは何もないんでしょうけど……」
「お姉様……？」
「なんでもないですよー？」

85. Une montagne et la vall?e de la

「人生楽ありゃ苦もあるさ」

後半エロいです。
削除されるかもしれない勢いでエロいです。
R－17．9はいっている気がしなくもない感じの（

ということで苦手な人は『◇◆◇』から読みとばしてください！

いや、書くなと言う話なんですけど、Sっぽいアリサを書くのが楽しくてですね（

アウトの声が多ければわっふる修正入れます（

85. Une montagne et la vall?e de la

どうして……この男を好きになってしまったのか。
デリカシーがなく情けない……世間一般の女の好みからはかけ離れているだろう男のことを……

「なぁ、一夏……」
「ん？　どうした、ラウラ」

私よりも強かったからか？
だが、私が一夏に敵わないと思ったのはあの大会のときだけだ。それもとどめが一夏だっただけで私が受けたダメージの大半はアリサによるものだ。
あの、夢のような現実感のない空間で私のことを守ってくれると言ったからか？
でも、私だけをではない。
アリサのようにシャルロットのためなら全てを敵に回す覚悟があるとも思えない
私が人工的に産み出されたと知っても態度を変えなかったから？
それだってアリサも同じだ。むしろ自分自身のことを真っ当ではないと悩んでいるアリサの方が共感できる。
……だから、私と同じ試験管から生まれたエリーはアリサを思慕しているのだろう。隠しているようだが私には分かる。
いや、シュヴァルツェ・ハーゼの仲間が見ていれば全員が確信しただろう。もっとも、その大半はあのランチパーティのお膳立てのために駆け回っていたのだが。

「いや、その……私を連れ出した理由はなんだ……？」

パーティーが終わりアリサとシャルロットの復縁を確認した直後、
一夏に誘われて外出している。
今は眼帯も外し、前にシャルロットが見立ててくれた黒を基調としたワンピースを着ている。
隣を歩く一夏に恥をかかせないためになるべく年相応の少女らしく見えるように意識した。
これで手を繋げば事実はともかく回りから見れば恋人同士に見えないこともないだろう。

「まぁ、話があってな……」

頭を掻くという少し困ったような仕草すら愛おしい。
本当に、どうしてここまで入れ込んでしまったのか分からない。
だが……

「分かっている……私じゃ、ないんだろ？」
「……すまん」

一夏は、私を選ばない。
私に魅力が足りなかったから。一夏がどこか遠慮してしまうから。
私自身、純粋な人ではないということで壁を作り出しているから。
理由は沢山ありそうで……でも、本当は一つだけなのだろう。
私よりも向こうのことが好きだったから……ただそれだけのことだ。
たかが数年の違い、しかも間の空白の時期を考えると実質的な遅れは一年分もないだろう。
私としても努力していたつもりだったが……敵わなかったな。

「謝るな……気持ちに応えてほしくて惚れたわけじゃないんだからな」
「……」

そういえばみんなに言わせれば私は“かっこいい”という形容が当てはまるのだとか。
そう考えてみるとこの結果も順当なのかもしれない。別に自分の淡白な性格を呪ったりはしないが……ただ、少しは女の子らしくしてもよかったのかもしれない。

「一夏」
「……？」
「私は……それでも一夏のことが好きだから、乗り換えたくなったらいつでもいいよ……？」
「ら、ラウラ……？」

……これはダメだ。
どれくらいダメかというと一夏の声が裏返るくらいダメだ。

「い、いつまでもアホみたいな顔をするな！　目的は達したんだからさっさと帰れ！」

は、恥ずかしかったな今のは……やはり私は普段通りの私でいよう。女の子らしく、というのは憧れるが今すぐそうなるには私の覚悟が足りないな。さっきみたいな甘い声を年柄年中出しているなんて……我ながら怖気が走るな。
ああいうのは……アリサとかがやるのが相応だろう。いや、もちろんバカにする気はないんだがな。

「……じゃあラウラ、帰ろう」
「先に帰っててくれ」
「でも暗くなるぞ？　やることがあるなら付き合うけど……」
「一夏……」

つい声がかすれる。
もちろん感動してるわけではない。普通フった女と一緒に帰るか？
そっとしておこうとかそういう気遣いはないのか？
……本当にどうしてこんなにデリカシーのない男に惚れてしまったのか。
惚れたことにもフられたことにも腹がたつ……！

「いいから先に帰ってろ！」
「お、おう……気を付けろよ？」
「余計なお世話だ！　全くお前というやつは……」

恐る恐ると離れていく一夏に向けて呟く。
フった相手に怯えるなんてどこまで無神経な男なんだ……少し前の私なら問答無用で殴り倒しているぞ。
それにフるならわざわざ外まで出掛けなくてもいいじゃないか……
途中までは、本当にデートだと思ったんだからな……
上の空の一夏を見て、ああこれは違うなと気付かされたが……

「まったく……もう少し上手くやってほしいものだな……」

泣いていいのか笑えばいいのか……分からなくなるじゃないか……

◇

「もう……皆、好き勝手に寝ちゃうんですから！」

エリーさんはいいとして……皆さんお酒なんか飲むからこうして倒れちゃうんです！
私は飲んでませんよ？

前にブライダルショップでやらかしてから生涯禁酒を誓いましたからね。
あ、あんなに乱れてしまうなんて知らなかったんですよ……思い出しただけで穴に埋まりたくなります。

「そう言いながら布団を敷いてあげる優しいアリサが好きだよ？」
「あの、シャル？　……あ、あんまりストレートに言わないでくださいよ……」

さらっと言われると恥ずかしいじゃないですか……それにお布団を敷いてあげようって言い出したのはシャルですよ？
私は上から毛布をかけてあげればいいと思ってたんですから。
私とシャル以外は全滅です。
途中でデートから戻ってきたラウラさんも怒濤の勢いでボトルを開けていった結果、既に夢の世界へと旅立っています。

「ラウラ、フられちゃったってね……」
「とりあえずクラリッサさんとの賭けは私の勝ちですね」
「こら」

ぽふっと頭に手を乗せられました。そのままシャルはグリグリと手を動かします。
……あの、叱られてるんじゃなくて撫でられてる気しかしないのですが。
でもクラリッサさんには何を頼みましょうかね……賭けは賭けですから多目に見たりはしません。

「アリサ、悪いこと考えてる」
「なんのことです？」
「……僕のために嫌なことはしないでね？」

「え？」
「アリサ、本当に僕とデュノアのためにいろいろやってるみたいだから……」
そんなに沢山のことはしてませんよ？
確かに行動原理はそれですけど……まだ、それほど多くのことをやれていません。
それに今回は……
「シャルのためじゃなくて……可愛い妹のためにですね……」
唯一、お酒を飲まずにぐっすりと眠っているエリーちゃんを優しく撫でます。
無意識なんでしょうがむずがる姿も可愛いですねー……本当の妹にしちゃいたいくらいです。
「むむむ……アリサ、私とエリーちゃん、どっちが大事……？」
「シャルですよ？　二人が溺れていてどちらかしか助けられないなら百回中百回シャルを助けます」
「……即答されてもなんだか嫌だね」
「ですが私の頑張りによって両方助けられるなら絶対に両方助けます」
「もう……本当に好き合ってるのか不安になるなぁ。そういうところがアリサらしいんだけどさ」
両方助けてしまうところがですか……？
確かに昼メロを見ていると誰にとってもいい人はかえって恋人を不安にさせて泥沼になったりしていますけど……
「シャルは私の愛情を感じてくれていると信じてますから！」

「あぅ……それはそれで重い信頼だね……」
「私は重い女だって言ったじゃないですか。それとも……シャルは私の愛情を疑いますか？」
じっとシャルの瞳を見つめていたら……シャルが目を逸らしました。
えへ、困らせちゃいましたね。わざとです。
好きな人のことはどうしても困らせたくなっちゃいます。特にシャルは犬っぽいというか……そのあたりの感情の動きが分かりやすいので。
「でもアリサが僕からの愛情を疑ったから今朝みたいなことになったんだよね？」
「女の子はいつだって恋に不安なんですよ～」
「ぼ、僕だって女なのに……」
「シャルは私の王子様ですから」
そう微笑み混じりシャルに言うと……あれ？　拗ねられちゃいました。
でも、やっぱりシャルは王子様ですよ。
内気で自信もなくて、そのうえ人が苦手だった私を変えたのは紛れもなくシャルですから。
あの晩にシャルと出会っていなければ……私は今もあの時のままです。私が人と積極的に話すようになったのはシャルを守るためでしたら。
「僕だってお姫様とかがいいのにな……」
「その場合は私が騎士ですね」
「え？」
「最近の私たちはそう言われてますよ？」
「な、なんで……？」

なんでと言われましても……私がシャルのことを守ろうとしているのは周知の事実だったらしく、何度か身を挺して守っていますしね。それに夏休みに入ってから私とシャルはほぼ毎日一緒にいましたから。

さすがに恋愛関係と思っていた人は少ないでしょうが、それでも仲のいい私とシャルのことをお姫様と騎士と呼んでいるそうです。

「……でも、アリサが怪我するのも嫌だな……」

「この太腿の傷は姫から賜った聖なる傷跡、この脇腹の傷は姫を守った誉れ……姫が気にすることはないのですよ……という感じでしょうか？」

「ど、ドキッとしたよ……うん、お姫様とナイトってのもいいかもね」

それはなによりです。

さて、早くお布団を敷いちゃいましょう。

「あ、シャル、私のお布団はいりませんよ？」

「え？　なんで？」

「シャルと同じお布団で寝たいからに決まってるじゃないですか」

「そっか……恋人だもんね」

「ふえっ！？」

い、いいんですか！？

その恋人が同衾するということはつまりえーとそのあの裸と裸のお付き合いと言いますか人の奥底に秘められた獣性を解き放つこととといいますか……

「アリサ？　もう、ぼーっとしてないで早く終わらせないと寝る時

間なくなっちゃうよ？」
「は、はぃ……」

え！？
まだ十二時も回ってないのに寝る時間がなくなるってそれはつまりそこまで長い時間頑張るってことですか！？
は、初めてでそこまで濃厚にしてしまうと後戻りできなくなる気がするのですが……

「よしっ、全部敷けたし、皆も布団の中に運んだから僕たちも寝よっか？」
「ふぁっ！　ちょ、ちょっと待ってください！」

え、えとこういうときに備えて身体はしっかり入念に洗っていますし髪の毛もふわふわでシャルの好きなシトラスの香りです！
下着も勝負下着ではありませんがなかなか可愛らしいお気に入り……生理中でもないですし危険日とかは女同士なので気にしなくてよくて、体調もばっちりなので途中でお腹を壊すこともないでしょう。
えと、あとは爪も切ってますし無駄毛も処理……というか生えてませんし、歯も磨きましたし口臭にも問題ないはずです。
えと、あと確認すべきことは……ご、ゴム持ってません！　って女同士ですってば！

「アリサ？」
「シャル……」
「うん、おいで」

シャルが掛け布団を、もちあげて私を招き入れます。
恐る恐る横にお尻をついて、ゆっくり横になります。

「じゃ、おやすみ」
「はい、おやすみなさい」

……あれ？
あの、シャル、本当に寝ちゃうんですか？

「わ、私の意識のしすぎですか……」
「ん？　眠くないの？」

も、もう！
胸がドキドキしすぎて眠気なんかありませんよ！

「あ、そっか……アリサ」
「はい？」

ちゅっ……

「っ！？」
「ふふっ、おやすみのチューだよ」

あ……シャルのばか……

◇◆◇

「せっかく、落ち着き始めてたのに……シャルのせいですよ？」
「へ？　ぅむぅ！？」
「ん、ちゅ……ぁむ、ん、ふぁ、んちゅ、ぁん、ん……」

無理矢理シャルの唇を奪ってさらに舌でシャルの前歯をノック……
少し緩んだ隙をついて舌を口腔内に挿し込みます。
そのまま舌を絡み合わせ、歯茎をなぞり、唾液を注ぎ込みました。
……大人のキスは一松さんが二木さんに勝てる唯一の得意技だそうです。
あの二木さんに耐えられないものが初めてのシャルに耐えられるわけもなく……

「あ、ありさ……？」
「ふふっ、シャル、目がトロンとしちゃってますよ？」
「う、うそぉ……そんなわけ…ないもん」

まぁ、それならそれでもいいんですけどね？
えと、口の次は確か……

「ひゃん！？」
「シャルって隠れ巨乳ですよねぇ。セシぃとかのせいでかすんでますけど十分妬ましいレベルです」

シャルのネグリジェをたくし上げシャルの胸をブラジャーの上から片手でやわやわと揉みほぐしながら逆の手でホックを外します。

「あ、アリサ！？」
「ふふーん、フロントホックだなんて……」

外しやすくていいですねぇ。もしかしてそのためにこれを選んだのでしょうか？
そしてブラジャーを剥ぎ取り肝心なところを責め立てます。

「ぁ、痛っ！　つ、摘まないで……」

「とか言いながら声が甘くなってますよ？」

シャルはちょっと痛いくらいがお好みですか？
確かにどちらかといえばそっちの方ですよね……私と相性がいいんじゃないでしょうか？

「あ、ありさぁ…皆が起きちゃうよぉ」
「シャルが感じて声を出さなければいいんですよ？」
「そ、そんなぁ……ふぁ！　もぅ……いぢわる……」
「そんな目しても……」

胸から手を離しお腹をさすり、おへそを経て太腿の内側の肉を押します。

「あっ……」
「分かりました？　今、開きましたよね？」
「そ、そんなこと、ない……」
「またまたぁ……ほら」
「や、だめぇ……」

そして手でショーツのクロッチ部分を擦ります。
汗か、はたまたそれ以外のなにかか……夜気に冷やされた水分を指先で感じます。

「やぁ……ふぁ、ぁん……だ、め……」
「ね？　湿ってるじゅないですか。さっきので溢れちゃったんですよね？」
「……うん」

やっと素直になりましたね……真っ赤になっちゃって可愛いですね。

準備もできましたし……メイク・ラブといきましょうか。

「しゃる……皆さんを起こさないように、声を抑えるの手伝ってあげます」

「え？」

ちゅ……

「こうやって……」

「……ばか」

85. Une montagne et la vallée de la

隠語、伏せ字などは使ってないからいけるか……？
駄目だったら例によって自然通告くだされればわっふる修正を（

あとおまけで『神様バイトｉｎ緋弾のアリア、もといアリサ』なんてものを思い付きました（
蛇足になるのを恐れなければ出張戦闘は完結しても書けますね！（

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9899r/

Plongez dans le "IS" monde.

2011年10月11日12時37分発行